

2021 年度

東京藝術大学大学院音楽研究科音楽専攻音楽文化学領域音楽学分野
博士学位論文

日本のカトリック教会におけるドイツ語会衆歌の受容
——テキストにみる聖歌の意義——

2019 年度入学 学籍番号 2319904

松橋輝子

[凡例]

- ・引用文の出典が日本語以外の言語である場合、執筆者が翻訳したものを使用した。
 - ・引用文は、注意書きがない場合、原文通り、旧字体を用いて引用している。
 - ・引用文内における[]は引用者による補足部分である。
 - ・テキストの表記（ドイツ語、日本語）は各聖歌集に従っている。
 - ・人名表記は、『新カトリック大事典』の表記に倣っている
- ・以下、本文内で使用する略号を記す。

B I, B II, B III, B IV

Bäumker, Wilhelm. *Das katholische deutsche Kirchenlied in seinen Singweisen*, Freiburg, 1883-1911, reprint. Hildesheim, 1962

LThK

Buchberger, Michael ed. *Lexikon für Theologie und Kirche*. Freiburg: Herder-Verlag, 1st ed. 1930-1938, 2nd ed. 1957-1968, 3rd ed. 1993-2001.

『シオンの娘 1741』

Lindenborn, Heinrich. *Neues Gott und dem Lamm geheiligtes Kirchen- und Hauß-Gesang der auf dem dreyfachen Wege der Vollkommenheit nach dem himmlischen Jerusalem wandernden Tochter Sion*. Köln: Gereon Arnold Schauberg. 1741.

『ランツフート 1777』

Kohlbrenner, Johann Franz Seraph. *Der heilige Gesang zum Gottesdienste in der römisch-katholischen Kirche*. Erster Theil: Landshut: Maximilian Hagen, und München: Johann Georg Rueprecht, 1777.

『フルダ 1778』

Erthel, August. *Der nach dem Sinne der katholischen Kirche singende Christ*. Stahel: Fulda, Johann Jakob Stahel, 1778.

『カンターテ 1847』

Bone, Heinrich: *Cantate! Katholisches Gesangbuch nebst Gebeten und Andachten für alle Zeiten und Feste des Kirchenjahres*. Mainz: Kirchheim, Schott und Thielmann, 1847.

『フルダ 1891』

Katholisches Gesang- und Gebetbuch für die Diözese Fulda. Herausgegeben im Auftrag des hochwürdigsten Herrn Joseph, Bischof von Fulda, Fulda:Fuldaer Actiendruckerei, 1890. 2nd ed. 1891.

『ケルン 1908』

Gesang- und Gebetbuch für die Erzdiözese Cöln. Cöln am Rhein: Bachem, 1908.

『公教會聖歌集』

天主教教會『公教會聖歌集』 札幌教區長認可、札幌：光明社、1918年（初版）、1920年（第2版）、1926年（第3版）、1930年（第5版）。

『公教聖歌集』

光明社編『公教聖歌集』 札幌：光明社、1933年（初版）、1934年（第2版）、1936年（第3版）、1938年（第4版）、1940年（第5版）、1948年（増補改訂版）。

『カトリック聖歌集』

聖歌集改訂委員会『カトリック聖歌集』札幌：光明社、1966年。

目次

序章.....	1
0.1 はじめに	1
0.2 「会衆歌」の定義と研究意義	2
0.2.1 「会衆歌」とは.....	2
0.2.2 教会音楽に関する教皇令	4
0.2.3 「会衆歌」を研究対象とする意義.....	7
0.3 カトリック教会における宣教とインカルチュレーション	7
0.3.1 カトリック教会における 20 世紀の宣教意識.....	7
0.3.2 アジア宣教の中での聖歌の意義	8
0.3.3 聖歌に見られる日本における洋楽受容の一側面.....	9
0.4 これまでの日本のカトリック聖歌集に関する研究.....	11
0.5 資料調査報告	12
0.6 本論文の構成	13
第 1 章 明治以降の日本におけるカトリック教会.....	15
1.1 日本における再宣教の歴史	15
1.2 各地での聖歌集の編纂	16
1.2.1 『きりしたんのうたひ』、および関連する聖歌集	17
1.2.2 『聖詠』、『日本聖詠』、および、関連する聖歌集	18
1.2.3 『公教會聖歌集』および関連する聖歌集.....	20
1.2.4 ラテン語聖歌集.....	20
1.3 北海道におけるカトリックの布教	21
1.3.1 函館司教区の成立とフランシスコ会宣教師の来札	22
1.3.2 カトリック出版物の中心地としての札幌.....	24
1.3.2.1 『光明』誌の発行	24
1.3.2.2 光明社の設立.....	26
1.3.2.3 光明社に関する資料.....	27
第 2 章 日本における会衆用聖歌集の成立.....	29
2.1 会衆用聖歌集の成立	29
2.1.1 先行研究.....	29
2.1.2 ドイツ語圏のカトリック教会における会衆用聖歌集	30
2.1.2.1 啓蒙思想の影響を受けた聖歌集の編纂の歴史.....	31
2.1.2.2 フルダ教区の聖歌集の歴史.....	33
2.1.3 『公教會聖歌集』の編纂の際に模範となったドイツ聖歌集	35
2.2 『公教會聖歌集』に収録される聖歌.....	38

2.2.1 構成聖歌とその原曲	38
2.2.2 ドイツ語聖歌集からの影響と選曲基準	39
2.3 各版について	40
2.3.1 改訂版とその違い	40
2.3.2 『公教会聖歌集オルガン及びハルモニスタ用』	41
2.3.3 新潟教区の『公教会聖歌集』	42
2.4 『公教会聖歌集』のテキストにみられる特徴	42
2.4.1 天皇制用語	42
2.4.2 典礼に関する用語	44
2.5 会衆用聖歌集としての特異性	48
2.5.1 全国的な受容	48
2.5.2 日本のカトリック聖歌集の歴史における『公教会聖歌集』の位置づけ	50
第3章 日本における最初の統一聖歌集『公教聖歌集』の成立	52
3.1 統一聖歌集への機運	52
3.2 『公教聖歌集』の編纂	53
3.2.1 編纂過程	54
3.2.2 編纂に関わった人物	56
3.3 『公教聖歌集』に収録される聖歌	58
3.3.1 『公教会聖歌集』と『日本聖詠』からの影響	59
3.3.2 新たに含まれた聖歌	59
3.3.3 伴奏譜の出版	60
3.4 統一聖歌集としての日本全体における初期受容	61
3.4.1 1930年代の日本のカトリック教会における会衆歌	61
3.4.2 『公教聖歌集』の広告に関する調査	62
3.5 増補改訂版の出版と現行『カトリック聖歌集』の出版	66
3.6 日本のカトリック聖歌集の歴史における『公教聖歌集』の位置づけ	67
第4章 『公教聖歌集』におけるドイツ系聖歌	71
4.1 『公教聖歌集』に含まれるドイツ系聖歌と日本語「訳詩」の変遷の比較	71
4.1.1 ミサ聖歌（付録4：1～12頁）	72
4.1.1.1 第1ミサ・チクルス	72
4.1.1.2 第2ミサ・チクルス	80
4.1.1.3 そのほかのミサ聖歌	84
4.1.2 典礼暦上の聖歌（付録4：13～78頁）	85
4.1.2.1 待降節の聖歌	85
4.1.2.2 キリスト降誕に関する聖歌	92
4.1.2.3 準備の聖節	107

4.1.2.4 復活祭から聖霊降臨まで	115
4.1.2.5 聖霊降臨際の聖節	127
4.1.2.6 三位一体の大祝日	131
4.1.2.7 キリストの聖体の大祝日	132
4.1.2.8 イエスの聖心の大祝日	146
4.1.3 聖人、天使、マリア賛美の聖歌（付録4：79～107頁）	151
4.1.3.1 主・キリストに対する賛美の聖歌	151
4.1.3.2 聖母に対する賛美の聖歌	158
4.1.3.2 天使に対する賛美の聖歌	165
4.1.3.3 聖人に対する賛美の聖歌	167
4.1.4 葬礼の聖歌（付録4：108～114頁）	171
4.1.5 そのほか（付録4：115～116頁）	176
4.2 個別のテキスト研究を通じた考察	178
4.2.1 啓蒙期に成立した聖歌に関して	178
4.2.2 ドイツ語の詩との内容の比較	179
4.2.3 『公教会聖歌集』と『公教聖歌集』のテキストの違い	182
4.2.4 聖歌におけるテキストの重要性	182
4.3 『公教聖歌集』のドイツ系聖歌の音楽的な特徴	183
4.3.1 『公教聖歌集』全体の音楽的特徴	183
4.3.2 ドイツ系聖歌とフランス系聖歌の違い	184
結論	188
参考文献表	190
謝辞	197

序章

0.1 はじめに

100年以上にわたって日本のカトリック教会を支え、カトリックの布教に大きく貢献し、さらには日本の西洋音楽受容の一つの窓口ともなった聖歌集の研究意義は極めて高い。現在、日本のカトリック教会において一般に広く用いられている聖歌集は、『典礼聖歌』と『カトリック聖歌集』である。『典礼聖歌』は、第2ヴァチカン公会議（1962～1965）以降の日本のカトリック教会の諸典礼のための聖歌集である。1971年7月に第1集として『典礼聖歌』が発行されて以来、毎年1巻ずつ出版され、第9集まで分冊形式で出版された。1980年2月24日、それらの分冊が合本となり、さらに新たに必要な答唱詩編が加えられ、日本カトリック司教協議会の認可のもと『典礼聖歌』の初版が発行された。これは第2ヴァチカン公会議を頂点とするヨーロッパにおける典礼改革運動後の波が、日本にも波及した結果といえるだろう¹。『典礼聖歌』は典礼用詩編にメロディーを付けた答唱詩編が収録され、その大部分は高田三郎（1913～2000）によって作曲された。

本論の研究対象は、1966年1月5日に光明社から発行された『カトリック聖歌集』の前身となった明治期以降のカトリック再宣教期において編纂された聖歌集である。『カトリック聖歌集』は、日本のカトリック教会の中で長年歌われ続け、もっとも親しみをもって歌われている聖歌集といっても過言ではない。しかし、1965年に閉会した第2ヴァチカン公会議後、古いカトリックの体質への拒絶感が教会の中で強く打ち出されたこともあり、これらの聖歌もかつてほどはその存在感を表さなくなった。聖歌の刷新を訴えた『典礼聖歌』の序文の中で、当時の典礼委員長長江恵師（1913～1998）は、「後者（民衆の歌う一般聖歌）は日本に輸入されて聖歌の主流をなしてきましたが、歌詞も旋律も概して感傷的なものが多く、典礼の副物的な要素が強いようです」²と記している。こうした背景もあり、『カトリック聖歌集』は研究対象としての注目を浴びることも、改訂の試みがみられることもなかった。

それでも1980年代には日本のキリスト教典礼音楽の歴史に関する資料収集やその後の研究の必要性が認識されるようになり、1987年2月9日には第1回典礼音楽専門委員会が開催された。しかし『カトリック聖歌集』にまで行きついた数々の大正期以来の聖歌について具体的な研究が行われることはなかった³。近年、カトリック教会の聖歌に関する重要な先行研究としてエヴァルト・ヘンゼラー氏によるもの（代表的著作は、安足磨由美氏と共著した『明治期カトリック聖歌集』（教文館、2008年））がある。ヘンゼラー氏

¹ 新垣壬敏『賛美、それは沈黙のあふれ』東京：教文館出版部、2001年、182頁。

² 日本カトリック典礼委員会『典礼聖歌』東京：カトリック中央協議会、1980年、序文（ページの割り当てなし）。

³ 第1回典礼音楽専門委員会は、1987年2月9日に行われた。参加者は、橋本周子、金子圭子、柳沼千賀子、小沼和夫。

の研究は、日本のカトリック聖歌集に関する初めての体系的な研究として極めて重要である。そして現在、再びカトリック教会において聖歌に関する研究意識は、芽生えつつある。2021年6月6日の『カトリック新聞』の川村信三（イエズス会）による記事には、本研究の研究意識と合致する聖歌研究に関する指摘がある。

『カトリック聖歌集』（1965年改訂）には、後世に残したい名曲が数多くあります。一時の「古い体質」への拒絶という「嵐」が過ぎ去り、落ち着きを取り戻した今、あらためて、私たちの心に残るメロディーを見直し、歌い継ぐという作業を始めることは極めて大切なことのように思います。⁴

0.2 「会衆歌」の定義と研究意義

0.2.1 「会衆歌」とは

本研究は日本のカトリック教会における「会衆歌」の伝統を明らかにするものである。なお「会衆歌」は今日の日本のカトリック教会において一般によく用いられる言葉ではない。そこで、*LThK (Lexikon für Theologie und Kirche)* の *Volksgesang* の項目で定義され、英語圏では *Congregational music* にあたる、「教会共同体で会衆によって歌われる詩節的な宗教歌」として「会衆歌」を定義する。以下に著者による翻訳を引用する。

教会共同体全体で歌われる典礼聖歌、宗教的聖歌。

中世の始めまで、会衆歌は全キリスト教典礼の中で、自明かつ不可欠な構成要素であった。会衆歌は中世の経過において、広範に聖職者の歌へと縮減されていった。宗教改革者の典礼において母語での会衆歌 *der muttersprachliche Volksgesang* は、典礼の中で発展し、宗教改革諸教派のアイデンティティとなった。一方で、カトリック教会では、元来の会衆歌は、聖職者ならびに専門聖歌隊が行う事柄であり続け、母語の会衆歌は、典礼行為に対して付随的なもの、あるいは平行的なものとして付け加わるのみで、厳密な意味での典礼行為そのものとはみなされなかった。典礼運動（会衆参加の促進）を通して会衆歌が促進され、第2ヴァチカン公会議の典礼改革によって、会衆歌は、共同体全体の典礼的行為として、独自、そして不可欠の要素として復興された。⁵

このように、カトリック教会における会衆歌の歴史は古代教会にさかのぼり、典礼内における役割は時代を追うにしたがって変化した。*LThK* 第2版の同項目 *Volksgesang* で

⁴ 川村信三「祈りの記憶は調べと共に」、『カトリック新聞』4578号、2021年6月6日、4頁。

⁵ Peter Ebenbauer, "Volksgesang" in *LThK*, 3rd ed., vol. 10, p. 862.

はより詳述されているので、以下にその内容を要約する⁶。

15世紀には公的な礼拝における現地語会衆歌 *der landessprachliche Volksgesang* が拒絶されていたが、16世紀にはいと、宗教改革を通してドイツ語の会衆歌は活気づけられ、プロテスタント教会では公的な礼拝における位置づけも与えられた。もちろんこの影響はカトリック教会の会衆歌にも及んだ。カトリック教会でも、特にドイツ語圏においては、聖歌が増補され、最初の聖歌集が出版され、公的な礼拝の中で母語聖歌 *das muttersprachliche Lied* が導入された。このことは、1605年のマインツ教区聖歌集などが示している。パーダーボルンやケルン、トリーアのように、教区会議の中で伝統的なラテン語聖歌を固守した地域もあったが、17世紀にはドイツ語聖歌はラテン語聖歌と併せて礼拝の中で用いられるようになった。ドイツ以外の国でも、礼拝の中でラテン語教会歌に加えて、各国語の教会歌は取り入れられるようになったが、母語の会衆歌はとりわけドイツにおいて発展した。同時に、17世紀、18世紀にはバロック的な豪華絢爛な礼拝音楽が発展し、典礼における会衆歌の実践の後退もみることになった。啓蒙期に再び会衆歌は新たな局面を迎え、器楽伴奏を伴う形で作曲されるようになった。とりわけ、カテキスムス聖歌（教理教育的な歌）、すなわち建徳的で教育的な歌は、会衆歌として広く普及し、多くの教区の「新しい」聖歌集（教区聖歌集）の誕生を導いた。こうして、ドイツ語の会衆歌は典礼の中で不可欠のものとなった。19世紀の教会音楽改革では、グレゴリオ聖歌とパレストリーナの音楽を模範として、中世の聖歌やポリフォニー・アカペラ音楽を取り戻すような動きもあったが、セシリア運動と関連して促進された会衆歌としてのドイツ語教会歌は、典礼[公的な礼拝]以外の礼拝にとって、有効な教会の規程にふさわしい形で復興された。

教皇ピウス10世（Pius X, 1835～1914、在位1903～1914）の自発教令『牧者の役割を果たすにあたって *Tra le sollecitudini*』は教会音楽の法典として、教会音楽にふさわしい典礼によって規定される典礼音楽の全般的な問題を規制しただけではなく、礼拝における会衆の行動的な参加の精神において会衆歌をとりわけ強調し、会衆歌としてのラテン語典礼聖歌の導入を求めた。教皇ピウス11世（Pius XI, 1857～1939、在位1922～1939）は、使徒憲章『ディヴィニ・クルトゥス・サンクティターテム *Divini cultus sanctitatem*』の中で、この考えをさらに深め、教皇ピウス12世は、回勅『典礼について *メディアートル・デイ Mediator Dei*』（1947年11月20日）と回勅『教会音楽について *ムジカエ・サクラエ・ディスクリナ Musicae sacrae disciplina*』（1955年12月25日）の中で、ラテン語並びに母語における会衆歌をとおして、信者の典礼における行動的参加を要求した。このような教会音楽の位置づけ及び典礼における信者の位置づけは、典礼に関する民衆歌、宗教的な民衆歌と違うものとしての、会衆歌の強調を決定づけた。

上述のとおり、会衆歌は、古代キリスト教から現在に至るまで、礼拝における位置づけ

⁶ Karl Gustav Fellerer, “Volksgesang” in *LThK*, 2nd ed., vol.10, pp. 851-854.

が様々与えられてきたが、ドイツ語圏における 18 世紀末から 19 世紀初頭の間「啓蒙思想的カトリシズム」あるいは「カトリック啓蒙思想」による改革意識がもたらした会衆歌のレパートリーと聖歌集の編纂形態は、その中でも極めて重要である。この時代の詩と旋律の双方が、20 世紀の典礼改革に至るまでのミサに影響を及ぼし、今日なお、聖歌集に重要な位置を占める⁷。

また「会衆歌」は、より広範な意味をもつ「教会歌 Kirchenlied」にも含まれる概念である。*LThK* 第 3 版の中で、「教会歌 Kirchenlied」は、礼拝の中で「会衆が歌う現地語による歌曲（詩節的なリート）」として定義されている。該当箇所の中で

教会歌 das Kirchenlied は特に、厳密に典礼的に形作られていない礼拝、読誦ミサ、ドイツ語による荘厳ミサ、私的礼拝、秘跡および準秘跡、行列、において用いられている。しかし、歌ミサ der *Missa cantata*⁸やラテン語ミサにおいても、礼拝の前後、あるいは説教の前後には用いることができる。⁹

とある。本論において扱う聖歌のすべては「詩節的」であり、これがグレゴリオ聖歌や答唱詩編、応唱、交唱との差別化という点で重要である。

なお、1936 年に札幌、光明社より出版された『ローマ字獨和辭典』には、Kirchengesang は「聖堂における唱歌」、Kirchenlied は、「讚美歌、聖歌」という訳語で説明されている。本研究の対象は「聖堂における唱歌」、Kirchenlied である。

0.2.2 教会音楽に関する教皇令

LThK の「会衆歌 Volksgesang」項目の中にも記されている通り、20 世紀以降になると、教皇令において、典礼のための音楽に関する具体的な法令が定められるようになった。教会音楽に対する最初の教皇令であり、教会音楽史上もっともよく知られた教令としては、「音楽の教皇」とも呼ばれるピウス 10 世が在位 1 年目に発布した上述の自発教令『牧者の役割を果たすにあたって *Tra le sollecitudini*』（1903 年 11 月 22 日）がある。ピウス 10 世は、よからぬ状況にある歌と教会音楽を念頭において、芸術が礼拝に奉仕することが許されてきたことを前提に、教皇の使徒的權威の法的効力の完全性に基づいて、「教会音楽の法典」としての法的権力を授け、すべてのものに心を尽くして最も忠実な従順を命

⁷ Dietrich Meyer, “Kirchenlied und Gesangbücher im 18. Jahrhundert,” in *Das 17. und 18. Jahrhundert, Kirchenmusik im Spannungsfeld der Konfessionen*, edited by W. Hochstein, C. Krummacher, (Laaber: Laaber, 2012), p. 202.

⁸ 歌ミサ (missa cantata) とは、司式司祭と歌隊 (聖歌隊) および会衆がそれぞれの典礼の部分で、役割に応じて歌っていくミサを言う。ミサの聖書朗読や典礼文もただ読まれるだけで、聖歌は全く歌われないか、ごくわずかしか歌われない読唱ミサ (missa recta) に対する言葉。(小田賢二「歌ミサ」、『新カトリック大事典』東京：研究社、1996 年、第 1 巻、687 頁。

⁹ W. Lueger, “Kirchenlied” in *LThK*, 2nd ed., vol. 5, pp. 231-233.

じている。

ピウス 10 世によれば教会音楽は、礼拝の目的、すなわち、神の賛美と信者の聖化、教化に関与し、教会儀式の尊厳と輝きを高めることに役立つものである。そのために教会音楽は、「聖性 *sanctitas*」、「形式の善 *bonitas formarum*」、「普遍性 *universalitas*」の特性を持つべきである。そして、これらの特性がみられるグレゴリオ聖歌は「教会音楽の最高の規範 *exemplar optimum sacrorum musicorum*」である。また、必要な人材や手段に不足していない場所（重要なバジリカ、カテドラル、神学院など教会機関の教会などで行われる荘厳な教会儀式）では、パレストリーナを規範とする古典的ポリフォニーも上述の特性を優れた程度で所有しているとも指摘した。カトリック教会の固有の言語はラテン語であり、それゆえに荘厳ミサの中で母語を歌うことは禁止されたが、行列などでのみ母語が用いられることが許された。

こうしたピウス 10 世の示唆は、一見、会衆歌を否定する様であるが、この自発教令中においては一般信者が祈りへ参加することも同時に促している。

本当のキリスト教精神が、すべての観点から開花し、すべての信者の中で保たれることが、いまや、我々の最も鮮やかな願いとなったので、私たちは、何よりもまず、神の家の聖性と威厳のために配慮しなければならない。なぜなら信者たちは、彼らの第一の不可欠の源泉、すなわち、教会の至聖なる神秘と、公の祭儀的な祈り[ミサ]への行動的参加から、その精神を汲みだすためそこに集っているからである。

10

そしてその際、「特に、グレゴリオ聖歌が会衆の歌として導入され、信者の人々が、かつてそうだったように、教会礼拝に再びより行動的に参加できるよう、配慮されることを望む」¹¹とも記している。

教皇ピウス 10 世によるこの教令をもとに、教会音楽は法典化の道を進んだ¹²。そして、続く教皇ピウス 11 世もまた、25 年前に発布された自発教令を踏まえながら、その後の 25 年の経験を生かした『典礼、およびグレゴリオ聖歌、および教会音楽の促進に関する使徒憲章 *Mortalium Animos*』（1928 年 12 月 10 日）を発布した。その中でピウス 11 世は、グレゴリオ聖歌の重要視、信者の典礼への積極的な参加を引き継いでいる。

¹⁰ Papst Pius X, *Motu proprio--Tra le sollecitudini*, 1903. “Etenim cum nihil Nobis potius sit et vehementer optemus ut virtus christianae religionis floreat et in omnibus Christifidelibus firmior sit, templi decori provideatur oportet, ubi Christicolae congregantur ut hoc virtutis spiritu ex priore fonte fruantur, quae est participatio divinorum mysteriorum atque Ecclesiae communium et solemnum precum.”

¹¹ Papst Pius X, *Motu proprio--Tra le sollecitudini*, 1903. “Praesertim apud populum cantus gregorianus est instaurandus, quo vehementius Christicolae, more maiorum, sacrae liturgiae sint rursus participes.”

¹² ヘンゼラー『明治期カトリック聖歌集』東京：教文館、2008、70 頁。

信者が典礼により積極的に参加するためには、会衆が歌う部分に関しては、会衆自身が歌うグレゴリオ聖歌が再び導入されるべきである。実際問題として、最も必要なことは、信者が典礼においてよそ者や傍観者のようではなく、むしろ典礼の美しさに心底感動していること、そして、彼らが与えられた規則に従って司祭や聖歌隊と交替で歌うまでに聖なる儀式に参加することである。このことは、ラテン語でプロセッショと呼ばれる祝祭的な行列において、聖職者と敬虔な信者たちが整列して道を行く時も当てはまる。もしこのことがうまくいけば、ラテン語あるいは俗語で唱えられる共同の祈りに際して、会衆が低い声でつぶやくようなことが、ほとんど、あるいはまったくなくなる。¹³

ピウス 11 世はさらに、聖職者や司式者への教育だけではなく、会衆への音楽教育の促進を要請している。以下の引用文にもある通り、音楽を宗教教育の一部と見なしているからである。

司教や教区長の指導のもとで、教区司祭ならびに修道司祭は、熱心に、個人的、あるいは他の専門家を通して、典礼と音楽に対する教育を、会衆に与える努力をしなければならない。そのような教育は、すなわち、宗教教育の一部なのである。¹⁴

これらの教皇令において、教会音楽の中でのグレゴリオ聖歌の規範的な位置づけを確認しながらも、典礼への信者の行動的な参加、さらに音楽がもつ教化的な役割が強調されていることは、会衆歌を本研究で論じるうえで重要である。なお、このピウス 11 世の教令は、日本においても信徒に告知されている。例えば、札幌の光明社から出版されていた『光明：週刊公教新聞』の中では、1929 年 4 月 28 日と 5 月 5 日の 2 週にわたって、「典禮及び聖楽に関する現教皇の教令」という記事が掲載され、教皇ピウス 11 世の教令の内容を包括的に翻訳し掲載している¹⁵。

¹³ Papst Pius XI, *Constitutio Apostolica Divini Cultus Sanctitatem—De Liturgia Deque Cantu Gregoriano et Musica Sacra Contidie Magis Provehendis*. 1928. “IX. Quo autem actuosius fideles divinum cultum participant, cantus gregorianus, in iis quae ad populum spectant, in usum populi restituatur. Ac revera pernecessesse est ut fideles, non tamquam extranei vel muti spectatores, sed penitus liturgiae pulchritudine affecti, sic caerimoniis sacris intersint — tum etiam cum pompae seu processiones, quas vocant, instructo cleri ac sodalitatum agmine, aguntur — ut vocem suam sacerdotis vel scholae vocibus, ad praescriptas normas, alternent; quod si auspiciato contingat, iam non illud eveniet ut populus aut nequaquam, aut levi quodam demissoque murmure communibus precibus, liturgica vulgarive lingua propositis, vix respondeat.”

¹⁴ Papst Pius XI, *Constitutio Apostolica Divini Cultus Sanctitatem—De Liturgia Deque Cantu Gregoriano et Musica Sacra Contidie Magis Provehendis*. 1928. “X. In hoc utriusque cleri industria desudet, praeeruntibus quidem Episcopis et locorum Ordinariis, ut, per se vel per alios rei peritos, liturgicam musicamque populi institutionem curent, utpote cum doctrina christiana coniunctam.”

¹⁵ 「典禮及び聖楽に関する現教皇の教令（一）」『光明：週刊公教新聞』1929 年 4 月 8 日、673 号、1 頁。「典禮及び聖楽に関する現教皇の教令（二）」『光明：週刊公教新聞』1929 年 5

0.2.3 「会衆歌」を研究対象とする意義

会衆が生み出す音楽に関する研究の手引書 *Studying Congregational Music: Key Issues, Methods, and Theoretical Perspectives* が 2021 年 2 月にロンドンのラウトレッジ社から出版された。この第 1 部「方法論的観点 Methodological Perspectives」の冒頭では、音楽は典礼の不可欠な部分である一方で、典礼学者や神学者による研究のなかで「会衆歌」に関する研究はそれほど行われてきていないことが指摘される¹⁶。典礼学においては聖体や典礼文、教理にかかわる研究が盛んに行われているが、音楽は特殊な知識、技術が必要な分野としてこれまで研究の中心に置かれることはなかったからである¹⁷。しかし、会衆歌の典礼内での位置づけや母語による会衆歌は、第 2 ヴァティカン公会議の典礼改革において中心的なテーマである典礼における会衆の行動的参加にかかわる重要な問題である。それゆえに、世界的な研究状況を見ると、この 10 年の間に極めて研究が活発になっている。

特に、教会共同体における会衆音楽の中でも会衆歌のテキストというのは、時代を超えた会衆音楽の動きを理解するための要素の一つであり、テキストを通して典礼における人々の信心を理解することができる¹⁸。

本研究では、典礼における会衆の参加の手段であった会衆歌に注目し、さらに非ラテン語圏にあり、グレゴリオ聖歌の浸透が難しかった日本において、どのように会衆歌が宣教的位置づけを与えられていたか、また信者の信仰教育にも寄与したかを論じる。近年、キリスト教音楽研究の中で最も注目されている研究分野である「会衆歌」の日本におけるケーススタディとして、本論を位置付けることもできるであろう。

0.3 カトリック教会における宣教とインカルチュレーション

0.3.1 カトリック教会における 20 世紀の宣教意識

宣教は「主キリストによって命名された教会の本質的使命」¹⁹である。16 世紀以降は特に、カトリックの福音宣教が世界的に拡大された。日本において初めてキリスト教がもたらされたのは、イエズス会士フランシスコ・ザビエルが 1547 年に日本人と出会い、

月 5 日、674 号、1 頁。

¹⁶ Andrew Mall, Jeffers Engelhardt and Monique M. Ingalls, eds. *Studying Congregational Music: Key Issues, Methods, and Theoretical Perspectives*. London: Routledge, 2021, p. 11.

¹⁷ Ibid., p. 11.

¹⁸ Lester Ruth, “In case you don’t have a case: Reflections on methods for studying congregational song in liturgical history” in *Studying Congregational Music*, (London: Routledge, 2021), p. 13.

¹⁹ 越前喜六「宣教」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002 年、第 3 巻、823 頁。

1549 年に来日した時である。当時から、高度の文化を持つ宣教国では、その国の文化に
適応するように心がけられており、ザビエルも日本人が文字を読めることを知ると、教理
問答書を日本語で印刷することを希望した。宣教師たちは概念規定の明確な宗教用語には
仏教用語も積極的に使用しながら宣教を試みた。しかしもちろんそこには限界があり、教
会の歴史的、伝統的用語、すなわち教理、典礼、祈祷文は原則的にラテン語またはそれと
共通性のある、ポルトガル語が用いられるようになった²⁰。

19 世紀末のパリ外国宣教会による再宣教時代には、かなり早い段階から日本語を取り
入れる動きがみられた。背景には、パリ外国宣教会の設立当初からの理念として掲げられ、
布教聖省の 1659 年の指針にも明記されるように、宣教国の風習を尊重しそれに順応する
ことが重要視されたことがある²¹。20 世紀にはいると、4 人の教皇による勅書（ベネディ
クトゥス 15 世（Benedictus XV, 1854～1922、在位 1914～1922）の使徒的書簡『マクシ
ムム・イルド *Maximum Illud*』、ピウス 11 世の回勅『レルム・エクレジエ *Rerum
Ecclesiae*』、ピウス 12 世の回勅『エヴァンゲリイ・プラエコネス *Evangelii Praecones*』、
ヨハネ 23 世（Ioannes XXIII, 1881～1963、在位 1958～1963）の回勅『プリンケプス・
パストールム *Princeps Pastorum*』）によって、さらに宣教に際しての指針が提示された。
その中には、宣教の活動は福音のメッセージとナショナリズムを混同してはいけないこと、
福音と植民地主義を推し進める宗教とを混同する危険があってもいけないことが明記され
た。ピウス 11 世は特に、宣教活動の緊急性を繰り返し強調、その土地の教会が成長する
ことを力説し、その土地の聖職者が外国人宣教師と同等の知識と権限を持つ必要性を主張
した²²。

こうしたカトリック教会における宣教態度も、現地語での聖歌集の編纂を促した背景に
あった。特に 20 世紀において、実りある宣教はそれぞれの文化の諸要素を借りることな
しにはあり得ない、すなわち宣教におけるいわゆる「インカルチュレーション」の考え方
が一般的になった²³。非ラテン語文化圏において、より多くの人々に働きかけるため、ま
た信心を広める上では、典礼文の翻訳より聖歌の翻訳は容易に、またそれほどの制限なし
に行えたのである。

0.3.2 アジア宣教の中での聖歌の意義

日本では、パリ外国宣教会をはじめとする各宣教師によって、19 世紀末、20 世紀初頭
から日本語による聖歌が導入されていたが、他の国においても同様にそうした努力を見る

²⁰ 海老澤有道「キリシタン用語」、『新カトリック大事典』東京：研究社、1998 年、第 2 巻、
448～451 頁。

²¹ M. コーナン「パリ外国宣教会」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2009 年、第 4 巻、
80～83 頁。

²² 越前喜六「宣教」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002 年、第 3 巻、826 頁。

²³ J. スィングドー「インカルチュレーション」、『新カトリック大事典』東京：研究社、1996
年、第 1 巻、533～534 頁。

ことができる。ただし、中国などのアジア諸国では、厳しい弾圧があった時代もあり、それほど研究が進んでいるわけではない。

ここで、朝鮮半島のカトリック教会の歴史を簡単に概観する。日本にカトリックが伝えられたのは 1549 年であるが、朝鮮半島においてカトリックの布教が開始されたのは、その 200 年以上後の 1784 年であった。伝来初期に続いた為政者による厳しい迫害によって多くの殉教者を出したという点では、日本のカトリック教会と朝鮮半島のカトリック教会は類似している²⁴。

1831 年 9 月、教皇グレゴリウス 16 世 (Gregorius XVI, 1765~1846、在位 1831~46) は、朝鮮教会からの司祭派遣の要請に応える形で朝鮮教区を北京教区から独立させ、パリ外国宣教会に布教を任せさせた。1886 年の韓仏修好条約によって朝鮮半島における宗教の自由が部分的ながら認められるまでは極めて厳しい迫害が行われ、数多くの殉教者が出ることになった。しかし、その後信者の数は目まぐるしく増大し、20 年後の 1905 年になると信者数は 6 万 4 千人余りに増大した。1906 年以後、日本統治下 30 余年の間にも信者数はたゆまず増加し、1926 年には 10 万人を突破した。

19 世紀末から 20 世紀初めは、まさに朝鮮半島におけるカトリックの発展期にあり、この時期に聖歌集も出版された。1923 年、朝鮮半島において最初の公式聖歌集『朝鮮語聖歌 (조선어성가)』が出版された。볼프라모 (Wolframus Fischer, 陳道光, 1903~1938) 師は新しいテキストとともに新たな聖歌を多数作曲し、典礼暦に従ってこの聖歌集を編纂した。この聖歌集に含まれた聖歌は、今日まで「伝統的な聖歌 (가톨릭성가)」として歌われ続けている。こうした聖歌集の編纂は、元山 (ウォンサン) 教区のベネディクト会による、典礼への会衆の積極的な参加を促す努力の一つとして行われた²⁵。日本と朝鮮のカトリック教会の歴史は、聖歌集の観点でも類似点を見出すことができるというよいだろう。

こうした非ラテン語圏の宣教における聖歌の役割は大きかったにもかかわらず、これまでほとんど研究が行われていない。宣教会の布教指針には聖歌の現地語訳等について言及されていないが、この研究を通して、布教戦略の中での聖歌の位置づけに関しても論じる。

0.3.3 聖歌に見られる日本における洋楽受容の一側面

会衆歌における母語使用は本論文の主題であるが、それらの会衆歌は、いずれも日本語のテキストを持った西洋旋律である。例外的に、日本人作曲家による聖歌が 20 世紀初頭

²⁴ 徐賢燮 「韓国カトリック教会の成長に関する小考」、『長崎県立大学国際情報学部研究紀要』第 14 号、2013 年、205~217 頁。

²⁵ [박물관 문화 순례] 왜관수도원 100 주년 역사전시관 『가톨릭신문 (カトリック新聞)』2015.7.5. 2951 号、12 面。

https://www.catholictimes.org/article/article_view.php?aid=268677¶ms=page%3D2%26acid%3D751 accessed Oct 20, 2021.

の聖歌集に含まれたことはあったが、日本人作曲家による聖歌が大部分を占める聖歌集が出版されるのは、第 2 ヴァティカン公会議以降のことである。すなわち、日本語で歌われていようとも、宣教師が日本にもたらした教会音楽は、日本における洋楽受容の一端を担っていたといえよう。

一方で、日本における西洋音楽の受容の一側面としてキリスト教の役割は既にこれまでも論じられてきているが、それはいずれもプロテスタント教会の讃美歌が中心でカトリック教会の礼拝における音楽に焦点が当たることは極めて少なかった。それは往々にして、カトリック教会の典礼においては、第 2 ヴァティカン公会議までラテン語が主に使われ、聖歌もそれに伴ってグレゴリオ聖歌を一部の人々（聖歌隊や聖職者）が歌ってきたと考えられてきたからである²⁶。しかし、明治以降の再宣教の歴史とそれに伴って作られた聖歌集の歴史をたどることで、日本において会衆が日本語で西洋音楽を歌うという習慣は、当初から行われてきていることがわかってきている。

さらに、プロテスタント教会とカトリック教会における讃美歌集、聖歌集の編纂は時期の点でも共通している。プロテスタント教会では、聖書をその国の言語に翻訳し、礼拝の中では会衆が共に歌うことを基本としており、宣教師の来日当初から積極的に聖歌集を編纂している²⁷。明治期には、アメリカから多くのプロテスタント教会宣教師が来日したが、各宗派でそれぞれ独自の讃美歌集を編纂した。1870 年代には、一致教会系、組合協会系、メソジスト教会系、バプテスト教会系、聖公会系がそれぞれ聖歌集を編纂し、続いて、福音系、救世軍、さらにルーテル教会系と続いた。当初はそれぞれ個々の聖歌集を使用した。1900 年、G. オルチン師（George Allchin, 1852～1935）は第 3 回宣教師協議会の中で、日本語による共通讃美歌集を持つ必要性を訴えた。その理由としては、「経済性」、「有効性」、「親交」を挙げている²⁸。これを受けて、共同で讃美歌集を出版することが決まり、五教派（メソジスト教会、浸礼教会、一致（日本基督）教会、組合教会、基督教会）による讃美歌委員会が組織され、1903 年に『讃美歌』が出版された。この聖歌集は 1921 年、1954 年に大きな改訂が行われた。統一聖歌集の編纂という点では、プロテスタント教会がカトリック教会に先行して行っており、カトリック教会が最初の統一聖歌集を編纂するにあっては、プロテスタント教会の聖歌集を踏まえていることがわかる²⁹。

このように、カトリック教会、プロテスタント教会は双方で様々な旋律を日本語聖歌集に取り入れ、歌い続けてきた。こうした旋律について、明治政府は積極的に利用し、唱歌

²⁶ 中村 理平『キリスト教と日本の洋楽』東京：大空社、1996 年、17 頁。

²⁷ 手代木俊一『讃美歌と聖歌と日本の近代』東京：音楽之友社、1999 年、84 頁。

²⁸ 同前、78 頁。

²⁹ 「新しい聖歌集に就いて」『日本カトリック新聞』1932 年 9 月 4 日（360 号）、4 頁。「新作の聖歌の時期尚早であることは、既にプロテスタント教徒も経験した。彼等の手に依つて最近出版された新聖歌集中に収められた六百の聖歌中、日本で作られたものは其の中の六分の一の百篇のみで、其の軸は全部基督教会に於いて、世界共通的に用ひられて来たものを日本歌詞にして採用したものである。」

にも影響を与えたことはこれまでも指摘されてきている³⁰。『君が代』へ讚美歌の旋律が引用されていることからそのことは明らかである。本研究を通して、唱歌と聖歌の関連性、そして日本の聖歌集に積極的に取り入れられた旋律の特徴について検証する。

0.4 これまでの日本のカトリック聖歌集に関する研究

日本のカトリック聖歌集に関する研究はこれまで限定的にしか行われてこなかった。その中で、エヴァルト・ヘンゼラー (Ewald Henseler) による功績は極めて大きい。2008年のヘンゼラーの著書『明治期カトリック聖歌集』には、日本のカトリック教会音楽の研究状況に関して、

カトリック教会の音楽も西洋音楽の多大な影響を受けたが、[.....]その音楽について体系的に研究された文献はもちろんのこと、洋楽との関連性について述べられているものはほとんど見当たらない。³¹

と指摘されている。同書の中で、ヘンゼラーは明治期の聖歌集に関して、明治期に出版された日本のカトリック聖歌集一覧とそれぞれの詳細な研究成果を明らかにしている。また、現行の『カトリック聖歌集』(1966)に関しては、その編纂経緯や選曲方法などを「『カトリック聖歌集』(1966)と日本人の作曲による聖歌」(2002)の中で詳細に論じている。この論考には、『カトリック聖歌集』に収録されている日本語聖歌の由来となったドイツ、フランス聖歌の一覧が付録として掲載されている。ヘンゼラーによる長年の研究成果のおかげで、日本のカトリック教会における明治期の聖歌に関して、大枠を知ることができている。

一方で、これらの中間にある大正、昭和初期の聖歌集の研究はこれまでほとんど行われてきていない。しかし1966年の『カトリック聖歌集』は、その元をたどれば、日本における初めての統一聖歌集『公教聖歌集』(1933)の増補改訂版(1948)にさらに改訂を加えたものである。また、『公教聖歌集』(1933)の編纂に当たって、構成や選曲においてモデルとなったのは、当時札幌で宣教を行っていたフランシスコ会司祭が編纂した札幌教区聖歌集『公教會聖歌集』(1918)である。これらの2つの聖歌集は、日本における会衆歌の伝統の始まりとして極めて重要である。

そこで本論では特に、『公教會聖歌集』、『公教聖歌集』に焦点を当て、日本における会衆聖歌の伝統を網羅的に調査することで、これまでに行われてこなかった分野に関する基礎的な研究を行う。

³⁰ 中村 理平『キリスト教と日本の洋楽』、574頁。

³¹ ヘンゼラー、安足磨由美『明治期カトリック聖歌集』、10頁。

0.5 資料調査報告

本研究で扱う文献資料は、研究対象となった聖歌集の出版時期において日本のカトリック教会において公式に出版された定期刊行物、聖書、『公教要理』、『共通規定』、独和辞典、キリスト教用語辞典などである。定期刊行物としては特に、『カトリック新聞』、雑誌『聲』、『光明：週刊公教新聞』、『キリストの光、Phos Christou』を調査対象とした。

『カトリック新聞』は日本カトリック司教団の直轄のもとに日本におけるカトリック教会全体の唯一の機関誌として1923年に『公教青年時報』の号数を受け継いで創刊された。『公教青年時報』の創刊第1号は1923年1月1日に東京の公教青年会より発行され、当初は月2回の発行を目指した。その後、1923年5月1日付(第9号)から『カトリック・タイムス』と改題された。さらに、1931年6月4日付(第273号)から『日本カトリック新聞』と改題し、週刊となった。発行場所も、東京教区・カトリック中央出版部に移管された。第2次世界大戦の影響から1945年2月25日をもって一時休刊となったが、1945年11月28日に『カトリック新聞』として復刊された³²。聖歌集の告知、聖歌の評釈、演奏会の宣伝や報告記事、また西洋音楽の楽曲解説など多くの音楽関連の記事が掲載されている。

『聲』は、1891年2月に大阪司教によって京都で発行された小冊子にさかのぼる。1899年、発行所は東京に移り、東京教区の公教雑誌として表題も『聲』となった。戦争中、一時中断したこともあるが、現在に至るまでその意義は大きく、「信者の信仰霊性を高める伝統ある雑誌として、日本では固有な雑誌である」³³と評価される。

また、日本にベネディクト会を創立した司祭の一人ヤイザル(Hildebrand Yaiser, 1901~1983)が編集を手掛けたドイツ語による雑誌(部分的にフランス語)『キリストの光、Phos Christou』(1938~1944年に発行)も調査の対象とした。

なお、『光明：週刊公教新聞』に関しては、本論の1.3.2で詳述する。

一方、宣教師が所属管区に報告している資料等については、その存在自体が不明であり、調査を行うことができていない。フルダ修道院は現在既に当時の資料を所蔵しておらず、ヘンゼラーによるとこれ以上の資料調査は不可能であるとのことであった³⁴。また日本の教会におけるアーカイブ調査を試みるため、聖歌集の出版地である北一条教会[北海道、札幌]、北十一条教会[北海道、札幌]、日本におけるカトリックの神学校(東京カトリック神学院[東京、練馬]、聖スルピス大神学院[福岡、福岡]、フランシスコ会神学院聖アントニオ修道院[東京、世田谷])、関連する教育機関(藤女子大学、光星学園[北海道、札幌]、聖グレゴリオの家 宗教音楽研究所[東京、東久留米市])、また現在、日本カトリック司教

³² 塚原嘉平治「カトリック新聞：日本」、『新カトリック大事典』東京：研究社、1996年、1145~1146頁。

³³ 三竹洋一「『聲』」、『新カトリック大事典』東京：研究社、1998年、第2巻、858~859頁。

³⁴ ヘンゼラー氏へのインタビュー中。(2021年4月14日、上智大学内SJハウス(イエズス会の修道院))

協議会の本部を置くカトリック中央協議会[東京都、江東区]での調査、聴き取りを行ったが、いずれの場所にも、日本で出版された聖歌集や典礼書本体を除くと、ほとんど当時の資料は残されていない事実が判明した。司祭や教会関係者によると、宣教師が持ち込んだ聖歌集やそのほかの資料、編纂当時の会議を記した議事録、書簡などに対して、記録の保存という概念、歴史認識が欠けており、あるいは貴重・聖なるものであるが故に、処分の手段として焼却してきた点などが明らかとなった³⁵。こうした資料状況の中で、本研究は、公式に日本に於いて出版され、当時の信者に告知された情報を重要視して研究を行った。一方、20世紀の当初にドイツ人宣教師が日本に持ち込んだと思われる聖歌集に関しては研究を通して見当を付けられており、聖歌集の比較や選別の背景は、そうした聖歌集から論じていく。

0.6 本論文の構成

本論では、まず第1章で、明治以降における日本のカトリック教会の宣教の歩みをまとめる。当初はパリ外国宣教会が日本におけるカトリック教会の宣教を一手に担っていたが、次第に他の国の宣教師が来日し、宣教地域を割譲していった。特にドイツ系の修道会、フランシスコ会の来日は日本のカトリック教会における会衆歌を作り上げることに大きく貢献した。

第2章では、日本における最初の会衆用聖歌集『公教會聖歌集』の編纂過程、またその構成聖歌について、調査結果をまとめる。特に『公教會聖歌集』に大きな影響を与えたドイツの聖歌集と比較しながら、日本においてどのように会衆聖歌集が成立したかを論じる。また、『公教會聖歌集』のテキストに注目し、その背景にある当時の天皇制や唱歌との関係、さらに版を重ねるごとに変更が加えられた典礼用語についても考察する。

第3章では、日本のカトリック教会の最初の公式聖歌集『公教聖歌集』に関してまとめる。『公教聖歌集』は、現在の『カトリック聖歌集』のモデルであるにもかかわらず、これまでほとんど研究されてきていないため、この章ではこの聖歌集の編纂過程、テキストの作詞、さらに構成聖歌に関して、調査結果を報告する。さらに、当時の日本のカトリック教会において、この聖歌集がどのように受容されたかを、当時の新聞記事や広告、雑誌の記事から明らかにする。この聖歌集がどのように普及したか、またどのように当時のカトリック教会、信徒の中で告知されたかを知ることは、日本のカトリック教会において会衆歌の伝統の確立を示す上で、極めて重要である。

第4章では、『公教聖歌集』の中に含まれるドイツから移入された個々の聖歌の分析を行う。特に、ドイツ語のテキストと日本語のテキストの比較分析を行い、日本語テキスト

³⁵ フランシスコ修道院（北海道、旭川市）、札幌フランシスコ修道院（北海道、札幌市）（2020年11月10日）、聖グレゴリオの家 宗教音楽研究所（東京、東久留米市）（2020年11月19日）。

の独自性、典礼暦にしたがった聖書箇所や『公教要理』との関連を指摘する。その中で、日本語で翻訳された聖歌を会衆が歌うことの意味、即ちそうした聖歌が宣教や教化において持っていた役割を論じる。

第1章 明治以降の日本におけるカトリック教会

1.1 日本における再宣教の歴史³⁶

開国の当初から明治後半に至るまで、宣教の中心的な役割を担ったのは、極東地区の宣教を教皇庁から委ねられていたパリ外国宣教会であった³⁷。パリ外国宣教会 (Missions Étrangères de Paris, MEP) は教皇直属の修道会であり、布教聖省の直属指示のもと宣教国に派遣されていた。布教聖省がパリ外国宣教会に日本での宣教を委任したのは 1831 年であったが、依然として江戸幕府の対外政策は揺れ動いており、当初の入国の試みは一切実らなかった。1844 年 5 月、フォルカード師 (Théodore-Augustin Forcade, 1816～1885) がついに日本への上陸に成功し、再宣教を目指す先駆者となった。ローマ教皇は日本宣教の可能性と重要性を考慮し、教区の復活を決定した。始めは自由行動も制限され、厳しい監視下に置かれたが、1846 年 3 月フォルカード師は初代日本代牧を任命された。1862 年には横浜で最初の天主堂の献堂が祝われ、1863 年にはフェレ師 (Louis-Théodore Furet, 1816～1900) とプティジャン師 (Bernard-Thadée Petitjean, 1829～1884) が長崎を新拠点とした。1865 年 2 月大浦天主堂の落成式が邦人信徒不在のまま執行されたが同年 3 月 17 日に同聖堂での歴史的な信徒発見により、教会復活が確認された。切支丹高札撤廃後には、信徒数も急増し、1876 年、日本の教会は南緯代牧区 (近畿地方以西の南日本) と北緯代牧区 (中部地方以北の北日本) に二分された³⁸。宣教師は次第に地方へも足を延ばしはじめ、宣教の種をまいていった。

1888 年に南緯代牧区が分割され、新たに近畿、中国、四国を含む中部代牧区が設立した。中部代牧区の教区長館は大阪に置かれ、九州以南の南緯代牧の教区長館は長崎に置かれた。さらに 1891 年には北緯代牧区も二分され、教皇レオ 13 世 (Leo XIII, 1810～1903、在位 1878～1903) によって 1891 年 6 月に日本教会が確立した。これをもって、管区大司教を東京に置き、函館司教区、大阪司教区、長崎司教区を東京の属司教区とする教会行政上の区分が明確になった。教区長には、ベルリオズ師 (Alexandre Berlioz, 1852～1929) (函館)、オズーフ師 (Pierre-Marie Osouf, 1829～1906) (東京)、ミドン師 (Félix-Nicolas-Joseph Midon, 1840～1893) (大阪)、クーザン師 (Jules Alphonse Cousin, 1842～1911) (長崎) がそれぞれ任命された。さらに四国は知牧区³⁹として 1904

³⁶ 本節は、M. コーナン「パリ外国宣教会【日本宣教】」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2009 年、第 4 巻、82～83 頁に基づく。

³⁷ ヘンゼラー『明治期カトリック聖歌集』東京：教文館、2008、15 頁。

³⁸ 代牧区とは、教皇の名においてその統治権を行使する使徒座代理区長によって司牧される。布教地においては、司教区が設立されるに先立って、まず一定の宣教地区が設定され、次に使徒座知牧区、そして次に使徒座代理区が設立されるのが一般的な順序であった。(枝村茂「代牧区」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002 年、第 3 巻、954 頁。)

³⁹ 知牧区とは、教皇の名においてその統治権を行使する使徒座知牧区長によって司牧される、部分教会の一形態。元来、宣教地といわれてきた地域、すなわち教会位階制がまだ完全に確立されていない地域において、特別の事情により、いまだ教区として設立されるに至っていない

年に大阪司教区から分離し、新潟と札幌もそれぞれ知牧区、代牧区として 1912 年、1915 年に函館司教区から分離した。

当初はもっぱらパリ外国宣教会によって行われていた運営も、次第に、他の宣教会、修道会も加わった。1904 年四国知牧区がドミニコ会に、1912 年新潟知牧区が神言修道会に、1915 年札幌知牧区がフランシスコ会に、1922 年名古屋知牧区が神言修道会に、1927 年鹿児島知牧区がフランシスコ会に、1928 年宮崎・大分の 2 県がサレジオ会に、1937 年京都知牧区がメリノール宣教会に、1939 年浦和知牧区がフランシスコ会にそれぞれ移任された。

1.2 各地での聖歌集の編纂⁴⁰

日本において、カトリック教会の音楽はプロテスタント教会に比べると非常に希薄であるように考えられてきたが、カトリック教会においても明治初期から聖歌集の編纂をはじめとする音楽活動は行われていた⁴¹。当時のカトリック教会における典礼では、会衆は歌う機会がほとんどなく、歌うのは司祭や聖歌隊など特定の人々であった。そうした典礼方針にもかかわらず 1870 年代のはじめに既に日本語で聖歌が歌われたことを考えると、宣教師たちが日本の宣教のために聖歌を歌うことを重視していたことがわかる。

1.1 で確認したように、日本のカトリック教会は北緯代牧区、南緯代牧区に分割されており、それぞれの代牧区で聖歌集が編纂されていた。宣教師はフランス人が多く、フランスの影響が色濃く反映されているのも特徴である。

帘功（さかばやし いさお、1930～2006）師が発表した「カトリックの典礼音楽の歴史と現状 聖歌集の変遷をめぐって」（1978）の中では、カトリック聖歌集を時代別に 4 つ（①初期聖歌集普及期、②統一聖歌集普及期（1933 年以降）、③改訂聖歌集普及期（1966 年以降）、④第 2 ヴァティカン公会議以降）に分けて考察し⁴²、さらに「讚美歌（カトリック）」（1988）では、②、③をまとめた 3 つの分類（①初期聖歌集普及期時代（明治初期～昭和初頭）、②統一聖歌集普及期（昭和初頭～同 40 年前後まで）、③典礼聖歌普及期（65 年以降））を提示している⁴³。中村理平が発表した「明治のカトリック教会と日本の洋楽 聖歌集の変遷について」（1992 年）では、明治時代の聖歌集に関して 5 つの分類（①長崎で発行され、一部日本語表記のラテン語聖歌を含む一連の『きりしたんの

い部分教会のことを指す教会行政上の用語である。（枝村茂「知牧区」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002 年、第 3 巻、1039 頁。）

⁴⁰ 聖歌集の年表一覧は【付録 1】を参照。

⁴¹ ヘンゼラー、安足磨由美「明治初期におけるカトリック教会」、『エリザベト音楽大学紀要』第 22 号、2002 年、57 頁。

⁴² 帘功「カトリックの典礼音楽の歴史と現状——聖歌集の変遷をめぐって——」、『礼拝と音楽』第 18 号、1978 年、22～29 頁。

⁴³ 帘功「讚美歌（カトリック）」、『日本キリスト教歴史大事典』東京：教文館、1988 年、594 頁。

うたひ』、②東京あるいは横浜などでルマレシャル（Jean-Marie-Louis Lemaréchal, 1842～1912）の編纂による日本語テキストのみの『聖詠』の諸版、③同じく、ルマレシャル編で楽譜とローマ字日本語テキストのついた『日本聖詠』の諸版、④片仮名表記を含むラテン語聖歌集、⑤地方教会やカトリック系学校教育のための個別聖歌集）が行われている⁴⁴。ヘンゼラーは、第2ヴァティカン公会議までの日本語聖歌集を以下の3つに分類している。

- ① 長崎で1878年に出版された『きりしたんのうたひ』、および関連する聖歌集
- ② ルマレシャルによって、1883年に出版された『聖詠』、『日本聖詠』、および、関連する聖歌集
- ③ ドイツ出身のフランシスコ会の神父たちによって札幌で1918年に出版された『公教会聖歌集』および、関連する聖歌集⁴⁵

本研究では、ヘンゼラーによる分類を採用する。研究の中心となるのは③に分類されるドイツ系の聖歌集であるが、以下の項目では、ヘンゼラーの研究をもとに、それぞれのタイプの聖歌集の概要をまとめる。

1.2.1 『きりしたんのうたひ』、および関連する聖歌集

ヘンゼラーによる1つ目の分類「長崎で1878年に出版された『きりしたんのうたひ』、および関連する聖歌集」は南緯代牧区で編纂された聖歌集を指している。南緯代牧区で編纂された最も古い聖歌集は、1878年に長崎で出版された祈祷書『オラショ並ニヲシヘ』の附録として出された歌詞聖歌集『きりしたんのうたひ⁴⁶』である。この聖歌集は残存数が少ないが、1878年と2種の1879年版の計3版の存在がヘンゼラーによって確認されている。なお、この3冊はごくわずかな相違がみられるのみである。この聖歌集は51頁からなり、1から40頁には23の日本語聖歌のテキスト、41頁にはラテン語の歌い方、さらに42～51頁には6つのグレゴリオ聖歌のラテン語聖歌が掲載されている。これらの日本語聖歌のテキストには、キリシタン用語が用いられている。楽譜はないが、ヘンゼラーの研究によって、旋律は当時フランスで歌われていた聖歌から取られ、テキストもその翻訳であったことがわかっている。翻訳の際には、もとの曲の音節に合うように翻訳されている。そのため、音楽的な音節、フレーズも原曲から引き継ぐところが多い⁴⁷。

南緯代牧区ではさらに1880年にサルモン師（Marie-Amédée Salmon, 1845～1919）

⁴⁴ 中村理平「明治のカトリック教会と日本の洋楽 聖歌集の変遷について」日本大学『大学院論集』第2号、1992年、59～79頁。

⁴⁵ ヘンゼラー、安足磨由美『明治期カトリック聖歌集』、14頁。

⁴⁶ 手代木俊一監修『明治期 讚美歌・聖歌集』第6巻、東京：大空社、1996年。

⁴⁷ ヘンゼラー、安足磨由美『明治期カトリック聖歌集』、20頁。

が編集した「手書き歌詞聖歌集⁴⁸」が編纂された。このうちの最初の 6 曲は、タイトルとその右側についた番号が『きりしたんのうたひ』の 18~23 と一致している。ヘンゼラーは、18~23 の旋律をフランスの聖歌集から発見しているが、1~17 のラテン語旋律を特定することは難しいと評価している。

このほかに、1880 年には別の「手書き歌詞聖歌集」も出版されているが、この聖歌集の印刷者、编者については記載がないため、特定は不可能である。聖歌集の編纂には、ド・ロ師 (Marc-Marie De Rotz, 1840~1914) だけではなく、「手書き歌詞聖歌集」の编者であるサルモン師をはじめとする他のパリ外国宣教会の司祭、さらには訳文校正係としての日本人の文学者らが協力したと考えられる⁴⁹。

これらの聖歌集の最大の特徴は、キリシタン用語の使用である。長崎に赴いた宣教師、特にプティジャンは、信者たちがキリシタン用語を理解していたことを踏まえ、それらの伝統的な言葉を残すことにした。プティジャンはロケーニュ師 (Joseph-Marie Laucaigne, 1838~1885) と共同で、キリシタン用語を用いた『聖教初学要理』(1868) の作成も行っている。しかし、これら一連の聖歌集はキリシタン用語そのものの問題から廃れてしまう⁵⁰。

1.2.2 『聖詠』、『日本聖詠』、および、関連する聖歌集

ヘンゼラーによる 2 番目の分類「ルマルシャルによって、1883 年に出版された『聖詠』、『日本聖詠』、および、関連する聖歌集」は、主に、北緯代牧区で編纂された聖歌集を指す。北緯代牧区には古くからの信者はおらず、キリシタンが存在した長崎とは異なる宣教活動が行われた。1865 年に作成された『聖教要理問答』も中国宣教用教会要理に基づいて、南緯代牧区のものとは異なるものが作られた。同様に、聖歌集も南緯代牧区のものとは異なるものが作成された。しかし、パリ外国宣教会の司祭が編纂したという点では長崎の聖歌集と共通しており、南緯代牧区の聖歌集と同様に、フランスの聖歌を多く取り入れた聖歌集が編纂された。

南緯代牧区で『きりしたんのうたひ』が出版されたのと同じころ、ルマルシャル師によって、北緯代牧区でも聖歌集が編纂された。なお、この手書き歌詞聖歌集は所在不明であるが、ヘンゼラーは長崎で 1880 年に編纂された「手書き歌詞聖歌集」と区別するため、この聖歌集を「手書き聖詠」(1878) と呼ぶ。この中にはラテン語聖歌と日本語聖歌が含まれている。日本には現存しないが、パリ外国宣教会総本部のアジア図書館に保管されている。

⁴⁸ 手代木俊一監修『明治期 讃美歌・聖歌集』第 11 巻、東京：大空社、1996 年。

⁴⁹ ヘンゼラー、安足磨由美『明治期カトリック聖歌集』、25 頁。

⁵⁰ ヘンゼラー、安足磨由美『日本のキリスト教音楽：明治以降』、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002 年、第 3 巻、1513 頁。

1883年、この日本語聖歌の部分が歌詞聖歌集『聖詠』として出版された。その表紙に「訂正」、「新刷」とあることから、1878年の「手書き聖詠」は、1883年の『聖詠』の旧版であることがわかる。歌詞聖歌集『聖詠』と同時に、ローマ字書きのメロディー版 *Recueil de Cantiques Japonais avec musique* も出版された。この聖歌集には1889年版以降、『日本聖詠』のタイトルが併記されている。日本のカトリック教会における初めての楽譜付き日本語聖歌集となった。

ヘンゼラーによれば、歌詞聖歌集『聖詠』は日本人一般信者用、特に学校教育用として編纂され、ローマ字書きのメロディー版『日本聖詠』は主にフランス人宣教師や聖歌隊用として印刷された⁵¹。1883年版『聖詠』のテキストは、フランスの聖歌から旋律と同時に借用され、翻訳されたが、日本の伝統的な音節構成五七による短歌形式で書かれている。こうしたテキストの作成には、ルマルシャル自身がかかわっているとともに、日本人の協力者がいたとされる。しかし1893年に『日本聖詠』が再び出版されたとき、その序文には、初版のテキストが音声構成五七にとらわれ過ぎたため、言葉が非常に難しく、歌うことや信者たちに教えることの妨げになるという批判があったことが説明されている。

『聖詠』は1883年、1889年、1893年(2種)、1896年、1903年、『日本聖詠』は1883年、1889年、1893年(2種)、1907年(伴奏譜、1922再版)にそれぞれ出版されている。『聖詠』と『日本聖詠』を比較すると、初版の1883年版から1893年までは若干の違いがみられるものの同時期に出版されているが、1896年版、1903年版の『日本聖詠』は存在しない。1893年版までの『聖詠』、『日本聖詠』では、増補改訂が繰り返されているが、1896年、1903年『聖詠』は1893年版の再版である。メロディー版の『日本聖詠』は司祭、聖歌隊等のために印刷されたものだったが、歌詞聖歌集の『聖詠』は、信者全般が使用するために作られたものであり、その必要性は非常に大きかった。『聖詠』、『日本聖詠』は1893年版を持って、一応の完成を見た。1907年には『日本聖詠』のオルガン伴奏譜付きの版が出版された⁵²。この伴奏譜はハルモニウム用で、パリ外国宣教会のパピノ師(Jazques-Edmond Papinot, 1860~1942)によって作曲されている。

『日本聖詠』、『聖詠』は日本のカトリック教会において幅広く使用された。そして、1933年に日本の最初の統一聖歌集『公教聖歌集』が編纂された際には、後述の『公会聖歌集』と並んで、重要な基盤となった。

こうした『聖詠』系列の聖歌集以外にも、明治時代にはフランスの聖歌をもとに作られた聖歌集がいくつかある。東京ではラゲ師(Emile Raguét, 1854~1929)による『公会聖歌集(明治36年版)⁵³』(1903)、大阪ではマルモニエ師(Pierre Marmonier, 1876

⁵¹ ヘンゼラー、安足磨由美『明治期カトリック聖歌集』、29頁、中村理平『キリスト教と日本の洋楽』東京：大空社、1996年、24頁、において、これらの聖歌集が主に教育現場で用いられたことが指摘されている。

⁵² 手代木俊一監修『明治期 讃美歌・聖歌集』第8巻、東京：大空社、1996年。

⁵³ 手代木俊一監修『明治期 讃美歌・聖歌集』第7巻、東京：大空社、1996年。

～1933) による『天主公教会聖歌⁵⁴』(1910)、横浜ではドマンジェル師 (Henri Anatole Wilhelm Demangelle, 1868～1929) によって、『公教聖歌⁵⁵』(1911) が出版された。

これらの聖歌集は、日曜学校やミッション・スクールなど特定の場所で用いるために作られている。ラゲ師による『公教会羅甸歌集』には日本語聖歌が含まれないが、『天主公教会聖歌』には 50 曲、『公教聖歌』には 33 曲の日本語聖歌も含まれている。

ルマルシャル編『日本聖詠』、『天主公教会聖歌』、『公教聖歌』には、重複を除くと、全 218 曲の異なる日本語の聖歌の旋律がある。これらのうち、最も多いのはマリア賛歌である。啓蒙主義時代以来無視されてきたマリア崇敬、記念祭の行列などがこの時代にみとめられるようになり、当時のヨーロッパでは数多くのマリア賛歌が存在したことが背景にあると、ヘンゼラーは指摘する⁵⁶。

1.2.3 『公教會聖歌集』および関連する聖歌集

ヘンゼラーによる 3 つ目の分類は、大正期に入ってから編纂された聖歌集である。フランス系ではなくドイツ系の聖歌を中心としている点で、長崎で出版された聖歌集やパリ外国宣教会宣教師による『日本聖詠』などの聖歌集とは大きく異なっている。

始まりとなったのは、1918 年にドイツ出身のフランシスコ会の宣教師によって札幌で出版された『公教會聖歌集』である。これは、1933 年に日本カトリック教会の統一聖歌集『公教聖歌集』を編纂する際のモデルとなった。『公教聖歌集』は 1948 年に増補改訂され、さらに 1966 年に再度改訂され『カトリック聖歌集』という名で、現在にいたるまで刊行されている。

これらの聖歌集は日本における初めての会衆用聖歌集として極めて重要であり、本論の中心である。これらに関しては、2 章、3 章の中で編纂、内容、初期受容を含めて詳述する。

1.2.4 ラテン語聖歌集

ここまでは、日本語聖歌の聖歌集に関してまとめたが、実際カトリック教会の典礼の大部分を占めていたのは、ラテン語聖歌である。ラテン語聖歌はグレゴリオ聖歌とそれ以外のラテン語聖歌に分けられるが、日本語に翻訳された聖歌と同様にフランス人宣教師によって、日本に持ち込まれた。グレゴリオ聖歌の聖歌集は、宣教師や聖歌隊用としてフランスで使用されていたものが持ち込まれた。日本で初めて作られたグレゴリオ聖歌集は、『きりしたんのうたひ』(1878 年ころ) と『手書き聖詠』である。1885 年頃『手書き聖

⁵⁴ 手代木俊一監修『明治期 讚美歌・聖歌集』第 9 巻、東京：大空社、1996 年。

⁵⁵ 手代木俊一監修『明治期 讚美歌・聖歌集』第 10 巻、東京：大空社、1996 年。

⁵⁶ ヘンゼラー、安足磨由美『明治期カトリック聖歌集』、42 頁。

詠』のうちグレゴリオ聖歌の部分が『天主教會拉丁聖歌』として独立して編纂された。1906年には「翻譯者 ルマルシャル」の名で『公教羅甸歌集』とタイトルを改めて出版され、1908年には『聖詠』と合本されて『公教會聖歌』として出版された。

1886年には北緯中央教會天主堂（築地教會）の編纂による、ラテン語聖歌集『天主教會拉丁之聖歌』（ローマ字のタイトル *Tenshu kokyokai ratin no seika*）が出版された。これには、グレゴリオ聖歌を始めとする 200 曲あまりのラテン語テキストが含まれている。1891年には、この聖歌集と同じタイトルを持つローマ字書きの聖歌集 *TENSHU KÔ-KYÔKWAÏ LATIN NO SEIKA* が出版されており、『天主教會拉丁之聖歌』の再版である可能性が高い⁵⁷。

さらに 1896年には、長崎の神学校で神学生のために *Cantus Sacri ad usum Alumnorum Seminarii Nagasakiensis*⁵⁸が編纂、出版された。神学生は、この聖歌集を用いてグレゴリオ聖歌を歌う練習を行った。鹿児島教会でラゲ師は、初めての完全日本語対訳付きの聖歌集『公教會羅甸聖歌集』（1903）を編纂した。この聖歌集では、93 曲のラテン語聖歌に読み方、和訳がつけられている。前述のマルモニエ編『天主教會聖歌』（1910）、ドマンジェル編『公教聖歌』（1911）にもそれぞれ 161 曲、116 曲のラテン語聖歌が含まれ、テキストのみならず、楽譜もついている。

しかし、明治期に出版された聖歌集の多くはテキストのみが書かれ、歌うことを目的に編纂されたとは考え難いとヘンゼラーは指摘する⁵⁹。むしろ、そのようなラテン語聖歌集は、日本人の一般信者が祈るため、あるいは唱えることが目的に作られたと思われる。

1.3 北海道におけるカトリックの布教

ヘンゼラーの聖歌分類によれば 3 つ目に当たる一連の聖歌集は、札幌で編纂、出版された。その背景には、20 世紀初期のフランシスコ会宣教師の来札がある。本節では、パリ外国宣教会からフランシスコ会が北海道の宣教を任せられた経緯、札幌がカトリック出版物の中心地となった経緯、さらに聖歌集の出版も行った光明社に関する調査結果をまとめる。

⁵⁷ ヘンゼラー、安足磨由美『明治期カトリック聖歌集』、62 頁。

⁵⁸ 手代木俊一監修『明治期 讃美歌・聖歌集』第 11 巻、東京：大空社、1996 年。

⁵⁹ ヘンゼラー、安足磨由美『明治期カトリック聖歌集』、64 頁。

1.3.1 函館司教区の成立とフランシスコ会宣教師の来札⁶⁰

明治期の日本におけるカトリックの再宣教は、主にパリ外国宣教会が担っており、北海道もその例外ではなかった。1891年に北緯大牧区が二分され、同時に司教位階制が確立すると、管区大司教区、函館司教区、大阪司教区、長崎司教区が東京の属司教区となった。そして、初代オズーフ大司教、そして函館司教にはベルリオーズ司教が就任した。ベルリオーズ師は、主任司祭をつとめた東京浅草教会で、司教に叙階され、39歳の若さで教区長に就任することになった。当時の函館の信徒は348人を数え、また函館を除く北海道の信徒数は308名であった。同年に、札幌北一条仮聖堂、司教座館が落成した⁶¹。

順調に北海道の各地に教会が設立している中、ベルリオーズ司教は、北海道で働く宣教師を捜すこと、また資金援助を要請する目的で、1905年10月にヨーロッパへ向かって横浜港を出発した。その船の中でのある紳士との出会いをきっかけに、マリアの宣教者フランシスコ修道女会の協力を得ることが決まった。そしてその修道女会の世話役として、フランシスコ会員を札幌に招致することになった。

そこでフランシスコ修道会の総長はさしあたり3人の宣教師の派遣をベルリオーズ司教に確約した。司教は、3名の宣教師に、修道女たちの修道院でのミサ聖祭執行の傍ら、将来男子中学校設立を目指した、外国語（ドイツ語、フランス語、英語）教育を要請した。司教の希望を承諾する形で、1907年1月に、フルダ管区のキノルド師（Wenseslaus Kinold, 1871～1952）、パリ生まれのベルタン師（Maurice Bertin, 1870～1968）、続いて6月に、カナダからゴーチエ師（Peter Gauthier, ?～1920）、ゴッドブー修道士（Gabriel Godbout、生没年不詳）が来札した。彼らは、当時パリ外国宣教会のラフォン師（Jean Henri Lafon, 1857～1947）が主任司祭を務める札幌の北一条教会に迎えられた。来札したばかりのフランシスコ会宣教師は、さっそく日本語の勉強をしながら、ドイツ語、フランス語、英語を教え始めた。当時の札幌には、信者80人、求道者20人ほどがいた。司祭は日本語を話せなかった上、布教地域も定まっていなかったが、語学を教え始めると、英語、フランス語、ドイツ語の語学学習希望者が100名を下らないほど集まった。

1907年9月、ベルリオーズ司教がヨーロッパ旅行から札幌へ帰ってきた。修道会員の派遣の際、フランシスコ会の総長は、宣教師本来の使命である布教も彼らにさせてほしい

⁶⁰ 北海道の宣教の歴史については、仁多見 巖『北海道とカトリック 〈戦前編〉』、札幌：「北海道とカトリック」出版委員会、1983年に詳述される。また、フランシスコ会フルダ管区が2007年に、北海道とフルダの100年間の記録として、以下の著作を出版している。

Emmanuel Dürr ed., *Von Fulda nach Hokkaido: 100 Jahre Japan-Mission der Thüringischen Franziskanerprovinz (1907 - 2007)*, Idstein: meinhardt - Verlag und Agentur, 2007. 1957年の『光明：週刊公教新聞』には、『北海道におけるフランシスコ修道会の五十年』と題して、フランシスコ会北海道布教小史（1から17）が連載されている。この節では、上記の資料、文献に基づく。

⁶¹ 小田武彦「日本におけるカトリック教会：司教区概要」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002年、第3巻、1469～1476頁。

旨を希望していたので、ベルリオーズ司教は札幌に戻るとすぐに動き始めた。司教は更なる発展が期待できる札幌市内の北部方面にフランシスコ会の修道院を建設するよう指示した。横浜のパリ外国宣教会の宣教師の援助とフランシスコ会のフルダ管区長の援助を受けて、1908年、ついに札幌北十五条東一丁目にフランシスコ会修道院（札幌北十一条教会の前身）が設立された。

1909年6月4日には、英国人、フランス系カナダ管区フィッツモリス師（Christophe Fitzmaurice, ?~1962）、チロル管区出身でローマのサン・アントニオ大学で学修をおえたフェルゴット師（Franz Vergott, 1876~1944）、フルダ、聖エリザベト管区出身ワレチン・ザウアー修道士（Valentinus Sauer, ?~1959）、バイエルン管区出身で単純誓願を立ててきたばかりのヴァイガート修道士（Marcellinus Weigert、生没年不詳）、イルルベック修道士（Herkulan Irlbeck、生没年不詳）が来札した。このころには小教区の信者は1400名となり、司教区の中で最大のものになっていた。1910年10月にはさらに、フルダ管区から、ヒップ師（Alexius Hipp、生没年不詳）、ブライトゥング師（Eusebius Breitung, 1884~1969）、シュメルツ師（Hilarius Schmelz, ?~1954）、ベッカー修道士（Rochus Becker, ?~1920）、メッツ管区から、バルテルメ修道士（Joseph Balthelme, ?~1952）、アイルランド管区からヒル修道士（Gerard Hill, ?~1943）、カナダ出身のジェリナス師（Calixte Gelinas, ?~1953）が札幌に到着した。12月にはシレジア管区出身のコヴァルツ師（Agnellus Kowartz, 1880~1937）も立て続けに到着した。このようにして、司祭10名、修道士7名がそれぞれ異なるフランシスコ会の6管区に所属し、宣教司牧に当たることになった。しかし、同じ宣教会であっても6管区に分かれていることは、言語上の問題、さらに経済的観点から不都合であった。特に、フランシスコ会フルダ管区長はしばしば布教費用の送金を行っていたが、布教地がフルダ管区に所属しているわけではないという意味では経済的な援助の義務がなかったのである。

そこで、キノルド師はフランシスコ会総長に事情を説明し、フルダが一番よいが、とにかく一管区に編入するように請願した。一度は却下されたものの、1910年秋、キノルド師が改めて布教秘書に手紙で事情を説明し、フルダ管区を指定したところ、管区長サツルニン・ゲーエル師との文通によって、承諾を得られることが保証された。その際、管区司教の承諾書を添付するように指示されていたので、ベルリオーズ司教からの承諾状を添付した請願書をローマに送ると、ついに布教聖省の承認を得ることができた。1911年9月8日、フランシスコ会の北海道布教地がフルダの聖エリザベト管区に編入することが決定した。

その後、1914年には函館地区を除く北海道全土と樺太南部が札幌知牧区として新設されドイツのフルダ管区フランシスコ会に委託された。1929年には札幌知牧区は札幌代牧区に昇格し、教区長としてキノルド司教が就任した。

こうした再宣教期初期のころから北海道で見られたドイツの宣教師とのつながりは、札幌教区聖歌集の発展に非常に大きく寄与した。

1.3.2 カトリック出版物の中心地としての札幌

札幌は、聖歌集や聖書の出版、新聞の発行など、長年にわたってカトリック系の出版物の中心であった。

1.3.2.1 『光明』誌の発行

北海道では教会の数も少なく、広大な北海道を数少ない人数の宣教師が巡回していたため、十分な要理教育を行うことが難しかった。そのため宣教の初期段階から、信者やその子供たちの宗教教育のため週刊誌の発行を目指した。また、第 1 次世界大戦が勃発したことによって、日本と交戦状態にあったドイツのフランシスコ修道会宣教師たちの外出や旅行が制限されたことも、こうした文書による宗教教育を促すこととなった。

キノルド師は、教区長になるとすぐに、週刊誌の発行のための準備を開始した。誌名は「光明」となった。初代編集長にはミーバハ⁶²師 (David Miebach, 1881～1962) が就任した。協力者として、少し前にプロテスタントからカトリックに改宗した及川鼎平とそれまで北海道の大新聞「北海タイムス」に勤めていた太田キヨがいた。

創刊号の前の予告号は、1915 年のクリスマスに発行された。『光明』が本格的に週刊誌として発行されるのは、1916 年 1 月以降である。これは、日本カトリック初めての週刊誌である。毎週日曜日に発行され、950 部が印刷され、そのうち 600 部は予約購読者の払い込みがあり、残りは無料で配布された。発行所名は最初に札幌フランシスコ会、次いで光明発行所、それから光明社になった。タブロイド判 8 頁で内容は主にドイツ出版物をもとに説教、ニュース、典礼解説、聖人物語、児童向け読物、小説などであった。

⁶² ミーバハ師は、1922 年日本に帰化し、美伯朶人 (ミバク・ダビド) を名乗るようになった。(石井健吾「ミーバハ」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2009 年、第 4 巻、896 頁。)

札幌教區長認可

週刊公教新聞 光明

刷印日一月一年五正大
 行發日二月一年五正大
 二金部一(定) 錢七金共視部月ヶ一(價)
 自丁五西條一南區札幌 所刷印版活寺小 所刷印
 日丁一東條五十五北區札幌 平 鼎 川 及 兼 人 轄 編
 日丁一東條五十五北區札幌 會 ン カ ス タ ン ラ フ 所 行 發

—((次 目))—

新 年 歌
 福 音 書 講 義
 魂 は 金 錢 で 買 は れ ぬ
 公 教 要 理 釋 義
 聖 徒 加 特 力 教 會 に 就 いて
 相 任 談 話
 新 任 教 區 現 況
 日 本 各 教 區 現 況
 其 他 金 言 一 教 會 層
 新 年 の 御 挨拶

△新年の歌△

- 一 過ぎし去年の日に、
うけたる苦樂と
新なる年に、
受くるものゝ爲め、
天に在す神に、
謝したてまつらん。
- 二 世に樂より、
苦のあはきは、
神の吾々に、
星よりも高き、
御空にまことの、
國を得さすため。
- 三 罪を以て神に、
ろひかざるやうに、
信望、愛をば、
増さしめたまひて、
愛世の入をぞ、
敬はせたまへや。

(旭川の人物)

福音書講義

耶穌割禮を授かる
 右の二節は至つて簡單ではあるが、然しそこに含まれてをる意味は仲々に深い。此時耶穌は愈々割禮の式を受けて、自ら猶太教の一信徒となり、その名も耶穌と呼ばれる事になつた。
 遠い昔に於て既に人類は眞の神の御教を忘れ去り、いつの間にか、日月星辰山川草木等、眼に見耳に觸れるやうな物を神として拜禮するやうになつた。かく人類は愚しくも偶像の前に拜禮するやうになつたので天主は此時一人の義人を選び給ひ、その子孫に依つて、齒教を他日に傳へしめんとす。御計畫をなされた。此の選にあづかつた義人こそは實に彼のアブラハムその人であつた。で、天主は、アブラハムに約束するに次ぎの如き事を以てせられたり。即ち此の義人の子孫をして大いに繁殖せしめ以て異日の中より全人類の救主をば興し給はんとの一事である。そこで神は此の特に選み給ふた國民



【図1】『光明：週刊公教新聞』1916年（大正5年）1月2日発行、1頁。

光明		光明	
第五百五十二号		第五百五十二号	
大正五年		大正五年	
一 福音書講義二	二 福音書講義二	一 福音書講義二	二 福音書講義二
三 福音書講義二	四 福音書講義二	三 福音書講義二	四 福音書講義二
五 福音書講義二	六 福音書講義二	五 福音書講義二	六 福音書講義二
七 福音書講義二	八 福音書講義二	七 福音書講義二	八 福音書講義二
九 福音書講義二	一〇 福音書講義二	九 福音書講義二	一〇 福音書講義二
一一 福音書講義二	一二 福音書講義二	一一 福音書講義二	一二 福音書講義二
一三 福音書講義二	一四 福音書講義二	一三 福音書講義二	一四 福音書講義二
一五 福音書講義二	一六 福音書講義二	一五 福音書講義二	一六 福音書講義二
一七 福音書講義二	一八 福音書講義二	一七 福音書講義二	一八 福音書講義二
一九 福音書講義二	二〇 福音書講義二	一九 福音書講義二	二〇 福音書講義二
二一 福音書講義二	二二 福音書講義二	二一 福音書講義二	二二 福音書講義二
二三 福音書講義二	二四 福音書講義二	二三 福音書講義二	二四 福音書講義二
二五 福音書講義二	二六 福音書講義二	二五 福音書講義二	二六 福音書講義二
二七 福音書講義二	二八 福音書講義二	二七 福音書講義二	二八 福音書講義二
二九 福音書講義二	三〇 福音書講義二	二九 福音書講義二	三〇 福音書講義二
三一 福音書講義二	三二 福音書講義二	三一 福音書講義二	三二 福音書講義二
三三 福音書講義二	三四 福音書講義二	三三 福音書講義二	三四 福音書講義二
三五 福音書講義二	三六 福音書講義二	三五 福音書講義二	三六 福音書講義二
三七 福音書講義二	三八 福音書講義二	三七 福音書講義二	三八 福音書講義二
三九 福音書講義二	四〇 福音書講義二	三九 福音書講義二	四〇 福音書講義二
四一 福音書講義二	四二 福音書講義二	四一 福音書講義二	四二 福音書講義二
四三 福音書講義二	四四 福音書講義二	四三 福音書講義二	四四 福音書講義二
四五 福音書講義二	四六 福音書講義二	四五 福音書講義二	四六 福音書講義二
四七 福音書講義二	四八 福音書講義二	四七 福音書講義二	四八 福音書講義二
四九 福音書講義二	五〇 福音書講義二	四九 福音書講義二	五〇 福音書講義二
五一 福音書講義二	五二 福音書講義二	五一 福音書講義二	五二 福音書講義二
五三 福音書講義二	五四 福音書講義二	五三 福音書講義二	五四 福音書講義二
五五 福音書講義二	五七 福音書講義二	五五 福音書講義二	五七 福音書講義二
五九 福音書講義二	六一 福音書講義二	五九 福音書講義二	六一 福音書講義二
六一 福音書講義二	六四 福音書講義二	六一 福音書講義二	六四 福音書講義二
六三 福音書講義二	六六 福音書講義二	六三 福音書講義二	六六 福音書講義二
六五 福音書講義二	六八 福音書講義二	六五 福音書講義二	六八 福音書講義二
六七 福音書講義二	七〇 福音書講義二	六七 福音書講義二	七〇 福音書講義二
六九 福音書講義二	七二 福音書講義二	六九 福音書講義二	七二 福音書講義二
七一 福音書講義二	七四 福音書講義二	七一 福音書講義二	七四 福音書講義二
七三 福音書講義二	七六 福音書講義二	七三 福音書講義二	七六 福音書講義二
七五 福音書講義二	七八 福音書講義二	七五 福音書講義二	七八 福音書講義二
七七 福音書講義二	八〇 福音書講義二	七七 福音書講義二	八〇 福音書講義二
七九 福音書講義二	八二 福音書講義二	七九 福音書講義二	八二 福音書講義二
八一 福音書講義二	八四 福音書講義二	八一 福音書講義二	八四 福音書講義二
八三 福音書講義二	八六 福音書講義二	八三 福音書講義二	八六 福音書講義二
八五 福音書講義二	八八 福音書講義二	八五 福音書講義二	八八 福音書講義二
八七 福音書講義二	九〇 福音書講義二	八七 福音書講義二	九〇 福音書講義二
八九 福音書講義二	九二 福音書講義二	八九 福音書講義二	九二 福音書講義二
九一 福音書講義二	九四 福音書講義二	九一 福音書講義二	九四 福音書講義二
九三 福音書講義二	九六 福音書講義二	九三 福音書講義二	九六 福音書講義二
九五 福音書講義二	九八 福音書講義二	九五 福音書講義二	九八 福音書講義二
九七 福音書講義二	一〇〇 福音書講義二	九七 福音書講義二	一〇〇 福音書講義二

【図2】「大正五年度光明索引」

『光明：週刊公教新聞』1917年（大正6年）12月30日発行、1～2頁。

1931年、東京で第1回カトリック出版統制協議会（カトリック出版社の総会議）が開催された。札幌代牧区からは、ノル師（Hugolin Noll, 1891～1957）とツィーグラ師（Titus Ziegler, 1899～1959）が出席した。この会議の中で、各地の出版物をまとめた全国紙の発刊が企画され、これに読者を譲る形で『光明：週刊公教新聞』は一時休刊したが、1945年12月に隔週発行で復刊、1952年からは毎週発行となったが、1968年12月29日の1748号をもって廃刊となった⁶³。

1.3.2.2 光明社の設立

フランススコ会は、日曜新聞『光明』のために出版社「光明社」を札幌に設立した。光明社はやがて、週刊誌の発行のみならず、宗教的な読み物、書物の発行所として、また、他の出版社刊行の書籍を扱う売店ともなり、日本のカトリック教会における最大の出版社として発展した。

「光明」の編集長は、初代ミーバハ師の後、2代目シリング師（Dorotheus Schilling,

⁶³ 鈴木宗太郎「光明」、『新カトリック大事典』東京：研究社、1998年、第2巻、853頁。

1886～1950)、3代目ルッペル師 (Timotheus Ruppel, ?～1924) が務め、1923年7月からは4代目ノル師が編集長を務めた。ノル師は、『光明：週刊公教新聞』の編集だけではなく、数々の本や小冊子パンフレットなどを出版した。後にこれらは『カトリック世界観』(1936年初版)としてまとめられ、光明社から出版された。ノル師が『日本カトリック新聞』の編纂にかかわるために、東京に赴任した際には、札幌北十一条教会の伝道士柳川徳治氏が一時的に光明社の仕事を手伝い、その後コヴァルツ師が一年間光明社の仕事に当たった。1935年7月からは、ブライトウング師が「光明」の編集長に就任した。

光明社の最初の出版大事業は、1918年初版を出した『公教會聖歌集』である。この聖歌集は、札幌と新潟教区の公認聖歌集として用いられた。また1933年に出版された全国共通の聖歌集『公教聖歌集』も光明社から発行された。

聖歌集のみならず、光明社では典礼関係の書物も多く刊行していた。ツィーグラ師は、室蘭教会の主任司祭を務める傍ら、日曜日と祝日のミサ典書の翻訳した『羅馬弥撒典書』を1935年に刊行した。さらに、1936年には、漢字入りローマ字書き『獨和辞典』が刊行された。この辞典の編者は札幌代牧区のフランシスコ会員たちだったが、この大事業の提唱者は、1927年12月7日に来札し、当時倶知安の主任司祭をしていたフリーゼ師 (Martin Friese, ?～1980) であった。彼は、外国人司祭8名と日本人数名の協力を得て、2年以上かけて『獨和辞典』を完成させた。

更に、岩見沢教会の創立者ブルト師 (Hippolyte Bulteau, 1860～1938) (フランス生まれの世俗司祭) が『光明』に連載されている聖人伝を単行本で出版するという条件で資金を寄付したため、1938年、1939年にそれぞれ上巻、下巻が完成した『カトリック聖人伝』が出版された。これらを執筆したのは、キノルド司教を含む4名のフランシスコ会員である。

1947年、日本司教会議は旧約聖書の日本語訳全訳を光明社に委嘱した。フランシスコ会札幌修道院にて進められ、1954年から1959年にかけて第1巻から第4巻までの全訳を刊行した。

1.3.2.3 光明社に関する資料

1957年1月13日(1173号)から5月19日(1190号)までの『光明：週刊公教新聞』には、「北海道におけるフランシスコ修道会の五十年」(フランシスコ会北海道布教小史1～17)が附録として連載されている。

1月13日(1173号)の表題には、「フランシスコ会 北海道布教小史(一) — 一九〇七年から一九二九年に至る分はキノルド司教の報告による— ゲルハルト・フーベル」とある。続けて、「以下記するところのフランシスコ会北海道布教小史は、本誌の無料附録として発行するもので、資料の尽きるまで毎号添録いたします」と注意書きがある。その後、17回にわたって5月19日(1190号)まで、すべてフーバー師 (Gerhart

Huber, 1896~1978) による連載が掲載された。全 17 回の小史は、25 の章で構成され、年代別に札幌におけるフランシスコ会宣教師の活動が執筆されているほか、最後は 1957 年に行われた布教五十周年記念行事について記録されている。



【図 3】 『光明：週刊公教新聞』 1957 年 1 月 13 日 (1173 号)
「フランシスコ会 北海道布教小史 (一) ゲルハルト・フーベル」

光明社は、光明社 100 周年記念事業として、『光明社の歴史資料——光明社百周年を記念して 1915 年から 2015 年』を 2016 年に光明社から非売品として出版している。光明社社長山谷篤氏による序文の中には、「かつて『光明』に連載した『フランシスコ会北海道布教小史』と『『光明』五十年の歩み』を冊子としてまとめ後世に資料として残すことにした。北海道で独自のミッションとして歩んで来た光明社の歴史をたどる大切な資料と考えたからである」とある。この資料では、歴史資料（上述の『北海道におけるフランシスコ修道会の五十年』）を掲載するとともに、光明社の歴史、歴代編集長、店舗などの写真集、光明社カット集、フランシスコ会札幌修道院が作成した光明社出版物一覧⁶⁴（書名順）が掲載されている。なお『光明：週刊公教新聞』は、上智大学（大学図書館、キリシタン文庫）、藤女子大学、北海道大学、北海道立図書館に主に所蔵されているが、各図書館に完全なものが所蔵されているわけではない。

⁶⁴ この一覧は完全ではない。

第 2 章 日本における会衆用聖歌集の成立

2.1 会衆用聖歌集の成立

2.1.1 先行研究

ドイツ語圏においては、啓蒙思想に基づく典礼改革思想を受けて 18 世紀末から会衆がカトリック教会の典礼の中で歌う習慣が確立され、会衆用の聖歌集の形が作られた⁶⁵。フランシスコ会のドイツの修道会員が来札し、札幌知牧区がドイツのフルダ管区フランシスコ会に委託されると、日本における会衆用聖歌集の編纂への動きが始まった⁶⁶。先行研究では、1912 年に来道し、亀田教会[函館、宮前町]への赴任を経て、1915 年に札幌へ到着したシリング師が、『公教会聖歌集』の編纂に当たったとされている。

『カトリック大辞典』第 3 巻の「聖歌-II. 日本に於ける歴史」の項目の以下の記述がある。

これ等 [[『日本聖詠』などの明治期のフランス系聖歌集]の聖歌集は全て聖歌隊用であったが、本来の意味の聖歌への要求が益々高まり、信者一同に國語で歌われ、かくて当時の札幌教區では讀誦ミサと主日並びに祝日とに用ひる聖歌が著名な西洋の聖歌に倣って作られかつ歌われるに至つた。フランシスコ會士シリング (Dorotheus Schilling) がこれを編輯し、傳道士横川茂一 (札幌教區) の協力により増補され、新潟教區長ライネルス (Reiners) は當時新潟教區の傳道士であつた小黒康正の協力によりこれを校訂、一卷の小聖歌集に纏め大正七[1918]年『公教会聖歌集』と題して出版した。⁶⁷

また、『新カトリック大事典』第 3 巻の「日本のキリスト教音楽：明治以降」の項目には、以下の記述がある。

大正期に入ると、札幌でドイツのフランシスコ会の司祭たちによって、新たな聖歌集の編纂が始まる。この聖歌集は 1918 年 (大正 7) 『公教会聖歌集』として出版された。数字譜つきで、日本語聖歌 79 曲、ラテン語聖歌 18 曲を含み、伴奏譜

⁶⁵ Dominik Fugger, Andreas Scheidgen, *Geschichte des katholischen Gesangbuchs* (Tübingen: Narr Francke Attempto Verlag, 2008), p. 22.

⁶⁶ こうしたドイツ人宣教師による会衆聖歌集の編纂に向けた働き、ドイツ語聖歌の翻訳が行われていたことについては、札幌北十一条教会のウルバン師のインタビューでも証言を得ることができた。

⁶⁷ Eusebius Breitung OFM, 「聖歌」、『カトリック大辞典』東京：富山房、1952 年、第 3 巻、86 頁。[]内、引用者補足。なお、ヘンゼラーは「横川茂一」の協力があつたということに関して、否定している。

(ハルモニスタ⁶⁸用)も別に出版された。これは歌詞・旋律はもとより、聖歌集の構成も当時のドイツの聖歌集に基づき典礼暦に従い編纂されている。編集者はシリング(第1次世界大戦の関連から「植竹一平」の名で編集)で、札幌版・新潟版の2種が存在する。⁶⁹

しかし、『公教会聖歌集』に関する研究は非常に限定的であり、資料状況に鑑みると具体的に誰が、どのようにこの聖歌集の編纂にかかわったかをこれ以上明らかにすることは極めて難しい。

2.1.2 ドイツ語圏のカトリック教会における会衆用聖歌集

フランシスコ会が20世紀初頭に日本に持ち込んだ「会衆用聖歌集」の存在は、ドイツ語圏における18世紀末の啓蒙思想に基づく典礼改革意識の影響を大きく受けている。先行研究の中でも、この時代にみられるカトリック聖歌集の歴史の転換点について度々言及されている。

この時代[1730年頃～1800年まで]の詩と旋律の双方が、20世紀の典礼改革に至るまでのミサに影響を与え、こんにち、なお、聖歌集に重要な位置を占めている。⁷⁰

ドイツ語圏のカトリック教会の聖歌集の歴史に関する包括的な研究書『カトリック聖歌集の歴史 *Geschichte des katholischen Gesangbuchs*』を執筆したフッガーもまた、著作の中で、カトリック聖歌集の歴史は1775年以降に始まったと指摘している⁷¹。

18世紀中葉から後期にかけて、カトリック啓蒙思想家に広がったのは、典礼祭儀からの民衆の排除に対する批判であった。ヴェルクマイスター(Benedikt Maria Werkmeister, 1745～1823)は1789年に以下の通り述べている。

すべての良い典礼の特徴は、典礼が出席者の信徒を互いに、そして司祭と、すべての点で一致させること、そして、祈りの家[聖堂]では、すべての集まっているキリスト教徒が一人の道徳的個人を構成し、いわば一つの口と心を持ち、一人の祈りが

⁶⁸ 現在は、ハルモニウムとして知られている、空気を圧縮するふいごを伴うフリー・リードの鍵盤楽器。19世紀初頭から20世紀前半に至るまで、家庭ではピアノと並び、教会ではオルガンに代わる楽器として用いられた。

⁶⁹ ヘンゼラー、安足磨由美「日本のキリスト教音楽：明治以降」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002年、第3巻、1513～1515頁。

⁷⁰ Dietrich Meyer, “Kirchenlied und Gesangbücher im 18. Jahrhundert,” in *Das 17. und 18. Jahrhundert, Kirchenmusik im Spannungsfeld der Konfessionen*, edited by W. Hochstein, C. Krummacher, (Laaber: Laaber, 2012), p. 202. []内は、引用者補足。

⁷¹ Fugger, *Geschichte des katholischen Gesangbuchs*, p. 21.

全員の祈りとならなくてはならないことである。⁷²

しかし、こうしたドイツのカトリック啓蒙思想の典礼に関する努力は典礼改革の名称にふさわしい一方で、改革当時は、包括的な受容の意味において完結しなかった。むしろこの改革は、20世紀半ばに再び取り上げられ、第2ヴァティカン公会議において規定された「行動的参加」という中心思想において頂点に達した。しかし、啓蒙思想的典礼学の意義は、一つの新しい時代を始めた出来事としてのその性格にある⁷³。

以下に、18世紀末からのドイツ語圏における聖歌集の編纂の歴史、また『公教会聖歌集』が編纂された札幌ともっとも関係が深かったフルダにおける聖歌集の編纂の歴史をまとめる。

2.1.2.1 啓蒙思想の影響を受けた聖歌集の編纂の歴史

新たな方向付けの中での最初の聖歌集として一般に挙げられるのは、リンデンボルン (Heinrich Lindenborn, 1706~1750) が作成し、1741年に最初にケルンで出版された『シオンの娘 *Tochter Sion*』である。この聖歌集の中で、リンデンボルンは、多くの既存のラテン語賛歌詩に新しい翻訳を提供している。1770年代になると、より広範囲に影響を及ぼすことになる聖歌集が、ウィーンで出版された。まず、リーデル (Franz Xaver Riedel, 1738~1773) は1773年に、新しい旋律によるラテン語賛歌の翻訳聖歌集『ローマ聖務日課からの教会歌 *Lieder der Kirche aus den römischen Tagzeiten*』を出版し、続いて、デニス (Michael Denis, 1729~1800) が、1774年に『ウィーンの首都大司教座聖堂ステファン大聖堂と全ウィーン大司教区で使用するための聖歌集 *Geistlicher Lieder zum Gebrauche der hohen Metropolitankirche bey St. Stephan in Wien und des ganzen wienerischen Erzbistums*』を出版した。リーデルとデニスの聖歌集は、大きな反響を呼び、それ以降の、啓蒙主義の聖歌集編纂が基づくところの基本的なレパートリーに含まれるようになった。このレパートリーは、啓蒙期の最も傑出した聖歌詩人であるシレジア出身のフランツ (Ignaz Franz, 1719~1790) によって、さらに著しく増大した。その中でももっとも影響力を発揮したのは、1778年にブレスラウで出版された『一般的、完全なカトリック聖歌集 *Allgemeines und vollständiges Catholisches Gesangbuch*』である。この聖歌集は1859年までの間に度々版を重ねた。さらに、1776年頃、女帝マリア・テレジア (Maria Teresia, 1717~1780) は、ウィーンでドナウ王国のために、フ

⁷² B.Werkmeister (anonum), *Beyträge zur Verbesserung der katholischen Liturgie in Deutschland*. (1st ed. Ulm, 1789), p. 346. []内は、引用者補足。

⁷³ Franz Kolschein, “Liturgiereform und deutscher Aufklärungskatholizismus,” in *Liturgiereformen--Historische Studien zu einem bleibenden Grundzug des christlichen Gottesdienstes*, edited by M. Klöckener and B. Kranemann, (Münster: Aschendorff Verlag GmbH & Co. KG, Münster, 2002), pp. 530-533.

ランツの聖歌が約半数を占める『マリア・テレジア陛下の至上命令に基づくカトリック聖歌集 *Katholisches Gesangbuch, auf allerhöchsten Befehl Ihrer k.k. apost. Majestat Marien Theresiens*』の出版促進をおこなった。1777年にはランツフトで、コールブレンナー (Johann Franz Seraph von Kohlbrenner, 1728~1783) によって『ローマカトリック教会での礼拝のための聖歌集 *Der heilige Gesang zum Gottesdienste in der römisch-katholischen Kirche*』が出版された。この聖歌集には1783年に第2部が加えられたが、第1部の出版地にちなんで『ランツフト聖歌集 *Landshut 1777*』と呼ばれ、短期間でドイツ語圏を制覇することとなった。上部ドイツの多くの司教区で認可され、抜粋や引用をもって様々な場所で再版された。この聖歌集は祈祷文も含めて80頁で構成され、「(ドイツ語) ミサ聖歌 *Singmesse*」に加えて、各教会暦の季節ごとに1曲程度と、25曲程度の聖歌が収録されている。これは、他の同時代の聖歌集と比べても極めて小規模の聖歌集であるが、そうすることで、これまでよりも読者に親密なものとして位置づけられるようになった。さらに、どの歌にもその歌と関係のある祈りが加えられてあり、信仰心を深め、内的なものにするのに役立った。一方、教会暦に従った従来通りの構成は背景に退いていった。『ランツフト聖歌集』が追求しているのは、日常生活の中の様々な機会や状況のための歌を提供することであり、コールブレンナーによるこの聖歌集は、カトリック教会の聖歌集史の中で前代未聞の成功を収めることとなった。最終的に、教皇ピウス6世 (Pius VI, 1717~1799、在位1775~1799) によって是認されたことをきっかけに、さらにドイツ語圏のカトリック教会に広まった。このように広まった啓蒙思想に基づく聖歌集は、古い聖歌集に取って代わるものとなった。

啓蒙思想に基づく改革への動きは、宗教改革のような民衆主導で行われたものではなく、また過去との断絶が徹底的に前面に押し出されていたため、どこでも熱狂をもって迎えられたというわけではなかった。長年の伝統の中で人々の間で親しまれていた聖歌遺産を廃止することは、人々の信仰生活に感情的な断絶をもたらした。しかし、礼拝に関する事柄に深く介入するヨーゼフ2世の宗教政策にみられる通り、この改革もまた政府の力や権力の行使によって進められた。バロック時代の聖歌レパートリーは排除され、ドイツ語による「ミサ聖歌 *Singmesse*」が信者のために国家的に制定された。ラテン語によるミサがカトリシズムの特徴であると理解する人々にはそれらの聖歌は受け入れ難く、また聖歌集の中にプロテスタント由来のものが含まれていることも相まって、さらにこの聖歌集はカトリック教会に受け入れられないものとなってしまった。それでも、当初の抵抗にもかかわらず、啓蒙思想による聖歌集は各地で浸透していった。⁷⁴

啓蒙主義の支配を断ち切ったのは、ギムナジウム教師のボーネ (Heinrich Bone, 1813~1893) という信徒であった。1847年にマインツで『カンターテ *Cantate*』という聖歌集を出版し、その中には385にもものぼる古いドイツ語の歌と、59のラテン語の歌を集め

⁷⁴ ここまでの18世紀の聖歌集の歴史に関しては、Fugger, *Geschichte des katholischen Gesangbuchs* の第3章の内容を中心にまとめた。

られていた。彼はカトリック典礼の中でのラテン語の優位性を宣言し、彼の聖歌集の序文の中で、

祝祭的で真に教會的（すなわち、ラテン語）なコラールが、祭壇とそれより高いところにあるオルガンから鳴り響き、会衆がこれらの音に導かれて沈黙の祈りを天に捧げることほど荘嚴なものは何一つない。⁷⁵

と記している。しかし、彼の聖歌集を教区の公式聖歌集とした教区は皆無であった。それでも後続の世代の聖歌集の編集者は、ボーネの聖歌集から聖歌を活用し〈Es kommt ein Schiff geladen〉、〈Zu Bethlehem geboren〉、〈Ist das der Leib Herr Jesu Christ〉、〈Das Heil der Welt〉のような、長期にわたり同時代の人々から忘れられていた聖歌を取り入れた。このような聖歌の復興はボーネの功績といえるだろう。

19世紀末になると、聖歌復興を推し進める「セシリア運動」が本格化した。「セシリア協会」は、荘嚴ミサにおいてドイツ語の聖歌を拒絶していたが、非典禮的な礼拝（祈りの時間、行列など）に際しては、使うべき会衆聖歌集を導入する教会音楽の奨励を目的に掲げており、1881年に出版されたモーア（Joseph Hermann Mohr, 1834～1892）による聖歌集『祈りましょう Lasset uns beten』がバンベルク(1881)、シュバイアー（1882）、ヴェルツブルク（1883）、ザルツブルク（1884）の各司教区で採用されたことで、聖歌復興は正式なものとして承認されることになった。

20世紀への変わり目には礼拝の古い形式から刷新の必要性を訴えた青年運動が始まり、その精神的な指導者グアルディーニ（Romano Guardini, 1885～1968）の影響は、典礼にまで及んだ。典礼に際しては、会衆の徹底的な参加を訴え、その手段として母語の使用を目指した。このことはセシリア運動からの方向転換となり、母語聖歌の価値を再び決定的に高めた。⁷⁶

2.1.2.2 フルダ教区の聖歌集の歴史

744年にボニファティウス（Bonifatius, 675～754）の弟子ストゥルミウス（Sturmius, c.705～779）によって、ベネディクト会の修道院が建設されると、フルダはそれ以来、ゲルマン人への宣教拠点となった。16世紀の宗教改革期には、マインツ、ヴェルツブルクの司教から所属を迫られたが、独立性を主張し、1727年に大修道院長が補佐司教に任命され、1752年に教皇庁直属の司教区が創設された⁷⁷。

⁷⁵ Heinrich Bone, *Cantate*, Mainz, 1847, p. 15.

⁷⁶ 19、20世紀の聖歌集の歴史に関しては、Fugger, *Geschichte des katholischen Gesangbuchs* の第4章の内容を中心にまとめた。

⁷⁷ 石井健吾「フルダ」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2009年、第4巻、460頁。

フルダ教区において初めて聖歌集が編纂されたのは 1778 年である。それ以前は、修道院において編纂された聖歌集や祈祷書や、教区成立以前に裁治圏に含まれていたヴェルツブルク司教区の聖歌集を使用していた。1778 年、『カトリック教会の精神に従って歌うキリスト者 *Der nach dem Sinne der katholischen Kirche singende Christ*』はベネディクト会司祭エルテル (Augustinus Erthel, 1714~1796) によってフルダ教区の最初の聖歌集として出版された。この聖歌集は教区の公式聖歌集として認可され、1779 年には、聖堂の礼拝、公的な行列などにおいて、この聖歌集に載っていない歌を歌うことは禁止された。こうしてこの聖歌集は、112 年後の 1890 年まで使われることとなった。

この聖歌集を編纂したエルテルは当時、フルダ教区の司教座聖堂の主任司祭を務めており、この聖歌集のために多くの聖歌を作詞、作曲した。初版には、著者としてのエルテルの名前はなく、フルダ司教区の司教総代理が署名している。後続版の序文には、このフルダ聖歌集の著者は「領邦出身で信心深く、並びに教養があるベネディクト会司祭エルテルである」⁷⁸とあり、先行研究でもエルテルがこの聖歌集の編纂に当たった中心人物であることは一致した見解である⁷⁹。

1778 年に出版されたこの聖歌集が啓蒙思想に根ざしていたことは、序文の最後にある以下の勧告からもわかる。

この歌を歌うとき、内容を理解していなければならない。あなたの心は、口から出ている声と一致しなければならない。あなたの舌は、この見知らぬ場所にある天上の神に捧げなければならない。神の国で永遠に賛美を捧げることにふさわしくなるように。⁸⁰

そしてこの聖歌集は、教区内における教会化の統一を果たした最初の聖歌集となった⁸¹。伝統的な聖歌集からは、完全に断絶しており、それまでフルダで用いられていた聖歌集 (*Allgemein Neu-Fuldisches Gesangbuch* (1724)) からは聖歌を一つも取り入れられていない。(なお、1724 年の聖歌集の聖歌の中には、後世において再びフルダの聖歌集に含まれるようになるものもある。) 一方、ケルンで出版された『シオンの娘 *Tochter Sion*』からは聖歌をいくつか引き継いでいる。

⁷⁸ August Erthel, *Der nach dem Sinne der katholischen Kirche singende Christ*, Stahel: Fulda, 1778, 22. Auflage 1834, Vorbereit zu der neuen, mit einem Anhang vermehrten Auflage. (ページ番号なし) “Dessen Verfasser, P. Augustinus Ertgel, S. B., ein vaterländischer, eben so frommer als gelehrter Priester, Benedictiner Ordens...”

⁷⁹ Eduard Krieg, “200 Jahre Fuldaer Diözesangesangbuch 1778-1978,” in *FuldaGbl* 55 (1979): 116.

⁸⁰ August Erthel, *Der nach dem Sinne der katholischen Kirche singende Christ*, Stahel: Fulda, 1778. (ページ番号なし) “Singt diese Lieder, euer Verstand müsse den Inhalt derselben wohl fassen, euer Herz müsse mit der Stimme des Munde übereinkommen, eure Zungen müssen sich hier in diesem fremden Lande dem Gott des Himmels weihen; damit ihr würdig gefunden werdet, sein Lob in dem Vaterlande ewig zu singen”

⁸¹ Fugger, *Geschichte des katholischen Gesangbuchs*, p. 93.

1890 年、フルダ教区においては新しい聖歌集『フルダ教区のための聖歌集、祈祷書 *Katholisches Gesang- und Gebetbuch für die Diözese Fulda*』が出版された。これは、ポーネの『カンターテ *Cantate*』と同様に、啓蒙思想によって排除されていた古い聖歌を集め、教会聖歌においても、復古主義の時代を開始するとものであった。この聖歌集の序文の中には、

これまでに存在していた教区の聖歌集の中で最も人気のある聖歌をとどめながらも、我々の教区のかつての素晴らしいドイツ語聖歌の宝庫を再び開くことにも、特に注意した。⁸²

とある。1891 年に第 2 版が出版された。

2.1.3 『公教會聖歌集』の編纂の際に模範となったドイツ聖歌集

日本において初めて会衆用聖歌集として成立した『公教會聖歌集』は、18 世紀末以来のドイツ語圏における教区聖歌集の伝統を汲み、構成、編纂方法、そして個別の聖歌にドイツの聖歌集の影響を顕著に受けている。

1918 年に出版された第 1 版は 97 曲の聖歌で構成され、そのうち 18 曲はラテン語である。これらのラテン語聖歌は歌ミサの時に用いられた。『公教會聖歌集』に含まれる日本語聖歌 79 曲に注目すると、そのうち 68 曲はドイツの聖歌に由来することを特定できた。特に大きな影響を与えた聖歌集としては、フルダ教区の聖歌集 (*Katholisches Gesang- und Gebetbuch für die Diözese Fulda*) 第 2 版 (1890 年初版、1891 年第 2 版)、さらにケルン大司教区の聖歌集 (*Gesang- und Gebetbuch für die Erzdiözese Cöln*) 第 2 版 (1887 年初版、1908 年第 2 版) であると推定できる。(以下、本論では、2 つの聖歌集を『フルダ 1891』、『ケルン 1908』と略記する。)

『公教會聖歌集』の構成聖歌の 7 割以上は、この 2 つの聖歌集にも転載されたものである。この聖歌集が編纂された 1918 年には、札幌はフルダ管区に所属していたことを考えると、フルダ教区聖歌集が札幌教区の聖歌集の編纂に当たって大きな影響力を持っていたことは極めて順当である。また、『公教會聖歌集』に含まれるミサ聖歌 (88~94) が、『フルダ 1891』に掲載される「第 2 ミサ・チクルス 2. Messgesang」(180~185) と一致することも、この聖歌集の影響を強く示唆する。さらに、『フルダ 1891』には、個々の聖歌の出典が注記されているが、その中の「新しい旋律 *Neuere Weise/ Neuere Melodie*」

⁸² Hochwürdigsten Herrn Joseph, Bishops von Fulda, *Katholisches Gesang und Gebetbuch*, 1890, p. III. “Unter Beibehaltung der beliebtesten Lieder aus dem seitherigen Diözesangesangbuch waren wir besonders darauf bedacht, den herrlichen Schatz der alten deutschen Kirchenlieder unserer Diözese wieder zu eröffnen”

も『公教會聖歌集』に含まれていることからまた、『公教會聖歌集』編纂に当たっては、フルダの教区聖歌集がモデルとなっていたと言えるだろう。

ケルン大司教区の聖歌集『ケルン 1908』からの影響は、構成聖歌だけではなく、その記譜法にも現れている。『ケルン 1908』は、数字譜で記譜されており、その序文には、当時の司教がこの数字譜を聖歌集に採用することを考案したことが書かれている。また序文の中では、この数字による記譜法は、会衆が聖歌を歌いやすくするための工夫であったことも記されている。

わたしの前任者であるクレメンツ枢機卿さま[Philippus Krementz, 1819~1899]と同様に、私は、『ケルン大司教区聖歌集・祈祷書』を聖職者、信者に勧めます。とりわけ今、それが必要だと思っております。なぜなら、この本の新しい版においては、とりわけ私の指示によって、すべての歌が数字で記譜されているからです。このことが、一般的な会衆歌が、歌うことが許されている礼拝の中で、よりよく実践され、完璧に歌われるために大きな貢献を果たすよう希望しています。⁸³

同時代のドイツ語圏における会衆用聖歌集は、五線譜、あるいは、旋律を書かずにテキストのみで編纂されていることがほとんどであることから、また、ケルンのこの聖歌集の序文に続いて、数字譜の読み方を丁寧に説明していることから、この記譜法が当時、一般的であったとは考えにくい。

アラビア数字が楽譜の中で用いられることは、タブラチュア譜などにおいて、すでに16世紀以来あり、数字のみでの記譜も、ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712~1778) によって18世紀半ばにすでに用いられていた。この時から既に、数字の上下の点がオクターヴの上下、数字が音階の主音からの番号であることも確立している。しかし、こうした数字譜はヨーロッパでは定着しなかった。一方で、アジアにおいて西洋の音楽を理解するためには有効であった。特に中国では、簡譜 *jianpu* として知られ、頻繁に使われる。明治期の日本においても数字譜はたびたび用いられており、『祝祭日唱歌集』(1893) などでも数字譜は用いられている。しかし聖歌集に限れば、日本における他の明治期の聖歌集では、フランス系聖歌集を含め、この数字記譜法は用いられていない。『ケルン 1908』をもとに、この数字記譜法を日本の聖歌集にも導入したと考えられる。なおこの記譜法は、『公教會聖歌集』の第5版(1930)まで踏襲され、さらにオルガン及びハルモニスタ用の楽譜においても、同様の数字記譜法が用いられている。

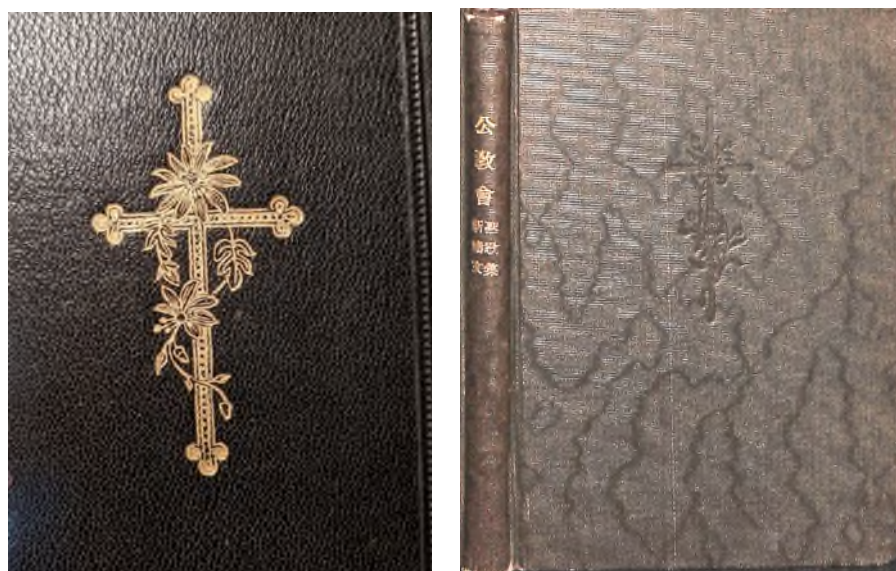
⁸³ 『ケルン 1908』、5頁。“Gleich meinem hochheiligen Vorgänger Philippus Kardinal Krementz empfehle ich Priestern und Gläubigen unser “Gesang und Gebetbuch für die Erzdiözese Cöln” und sehe mich gerade jetzt besonders dazu verlangt, weil auf meine Anordnung in der neuen Auflage des Buches, die eben erscheint, sämtliche Gesänge mit Ziffernoten versehen worden sind. Ich hoffe, dies wird wesentlich dazu beitragen, dass der allgemeine Volksgesang beim gottesdienst, dort wo er zulässig ist, immer mehr gepflegt und vervollkommnet werde.”

構成の観点から言えば、教会暦に従って各聖歌が並べられている点、ミサ聖歌がチクルスでまとまって並べられている点、祈祷書と合本で製本されている点も『フルダ 1891』、『ケルン 1908』を踏襲している。

さらに言えば、製本方法、革の表紙、大きさなども、類似している。



【図4】左から『フルダ 1891』（1916年印刷）、『公教會聖歌集』（第5版、1930年）、『公教聖歌集』（1938年版）



【図5】『フルダ 1891』（1916年印刷）の表紙に描かれる十字架と花のモチーフは、『公教會聖歌集』（1926年版）にもあしらわれている。

聖主御昇天
28

1=C(SOL)

5	5	5		1	-	1		2	.	1	2	3		1	-	0	
オ	リ	ベ	ト	ヤ		マ	ヨ	リ									
5	1	2		3	.	4	5		2	-	2		3	-	0		
あ	め	に	の	ぼ		り	て	ぞ									
3	3	3		2	-	2		1	-	1		7	-	0			
ち	ち	か	み	の		み	ぎ	に									
5	6	7		1	.	2	3		2	.	1	7		1	-		
し	ゆ	は	ざ	し	た	ま	へ	る									
3		2	1	7		1	-	-									
ア	レ	ル	ヤ														

Mr. 68. $\frac{1=As.}{\frac{3}{4}}$ 5 5 5 | i . i | 2̇ . i̇
 1. Christus fährt auf mit Freu =
 2̇ 3̇ | i . 0 | 5 i 2̇ | 3̇ . 4̇ 5̇ | 2̇ . 2̇ |
 den = schall Zum Va = ter durch die Him = mel
 3̇ . 0 | 3̇ 3̇ 3̇ | 2̇ . 2̇ | i . i |
 all'. Auf Er = den ist sein Werk voll =
 7 . 0 | 5 6 7 | i . 2̇ 3̇ | 2̇ i 7 |
 bracht, Die Himmels = pfort' ist auf = ge =
 i . 3̇ | 2̇ i 7 | i . . ||
 macht. Al = le = lu = ja!

【図6】『公教會聖歌集』（1918）聖歌28〈オリベトやまより〉（左）と『ケルン1908』聖歌68〈Christus fährt auf mit Freudenschall〉（右）

2.2 『公教會聖歌集』に収録される聖歌

2.2.1 構成聖歌とその原曲

1918年に出版された『公教會聖歌集』は1930年の第5版まで、多少の変更を加えながら、長く札幌教区、新潟教区で用いられていた。【付録2】には、『公教會聖歌集』の各版に含まれる聖歌の一覧、それらの原曲、『フルダ1891』あるいは『ケルン1908』に含まれている場合はその番号、さらに『公教聖歌集』（1933、1948）、『カトリック聖歌集』（1966）に引き継がれたものはそれぞれの番号を掲載している。

1918年に出版された第1版には97曲の聖歌が含まれる。その構成は、待降節（1から4）、聖主御誕生（5から11）、イエエスの聖名（12）、三王來朝（13）、四旬節（14から21）、御復活（22～27）、御昇天（28）、聖霊降臨（29～31）、御聖躰（32～43）、耶蘇の聖心（44、45）、聖母マリア（46～59）、守護の天使（60、61）、聖フランチスコ・ザヴェリオ（62）、日本致命者（63）、聖ヨセフ（64）、聖アロイシオ（65）、大天使聖ミカエル（66）、アシシオの聖フランツチスコ（67）、諸聖人（68）、死者の爲め（69）、諸種の聖歌（70～80）、ミサのための聖歌：聖躰降福前（81～84）、聖躰降福後（85～87）、ミサの聖歌（88～95）、歌御ミサの時（96）、葬式の時（97）となっている⁸⁴。

聖歌集と祈祷書が合本として出版されている第2版（1920）には、これらの聖歌の後には続けて『公教會祈祷文』がある。その内容は、朝の祈祷、夕の祈祷、ミサの祈祷、告白前後の祈祷、聖体拝領前後の祈祷、十字架の道行の祈祷、玫瑰花冠（ロザリオ）の祈祷、

⁸⁴ これらの表記は『公教會聖歌集』（1918）に従っている。

就業の祈禱、栄誦、食前の祈禱、食後の祈禱、諭告、異教人の感化を求むる祈禱、教父の爲にする祈禱、父母の爲にする祈禱、子女の爲に父母の祈る文、聖體を訪ひ奉る時の祈禱、聖躰を訪ひ奉る時の祈禱、聖體降福後の諭告、耶蘇受難の祈禱、耶蘇の聖心の連禱、耶蘇の聖心に身を捧げ奉る文、耶蘇の聖心に向ひ奉る祈禱、基督に向ふ時の祈禱、聖體に向ふ時の祈禱、十字架に磔れる耶蘇に向ふ時の祈禱、聖靈の降臨を望む祈禱、聖ベルナルド聖母に祈る文、聖母の悲哀に對する祈禱、聖マリアに身を捧ぐる文、聖ヨゼフに祈る文、諸聖人の連禱、完全なる痛悔の祈禱、洗禮の時の約束を尋ぎて新にする法及び心得、臨終の時の祈禱、司祭不在の時に於ける葬式の心得、聖族に對し奉る祈禱、聖族に依頼み奉る祈禱、災難に遭ふ時の祈禱、死に臨める罪びとの爲にする祈禱、聖ヨゼフの連禱、日本国民の感化を求める祈禱、である⁸⁵。

2.2.2 ドイツ語聖歌集からの影響と選曲基準

『公教會聖歌集』を編纂する際に、モデルになっていたと考えられる『フルダ 1891』、『ケルン 1908』には、一部同一の旋律が用いられているものも含めて、それぞれ 200 を超すドイツ語聖歌が掲載されている。すなわち、来日したフランシスコ会の宣教師は、日本の聖歌集を編纂するにあたって、「聖歌の選別」を行ったことが推測できる。日本においてどのような聖歌が好まれたか、あるいは、日本の聖歌集に含まれなかった聖歌に共通する特徴があるのか、以下では、聖歌集の比較の調査を踏まえて論じていきたい。

第 1 に明らかなのは、ドイツの聖歌集に含まれる聖務日課用と思われる聖歌（『ケルン 1908』では冒頭、『フルダ 1891』ではミサ聖歌の直前に、朝、晩の歌がいくつか掲載されている。）は、日本の聖歌集に含まれない。当時、聖務日課は基本的に聖職者が行うものであり、会衆用聖歌集として編纂された聖歌集には不要であったことが推察される。

続いて、音楽的な意味での選別を論じる。『フルダ 1891』と『ケルン 1908』の中で、日本の聖歌集に含まれた聖歌と、含まれなかった聖歌の対比を通して、以下の音楽的な違いを見出すことができた。

① 長い聖歌は含まれない。

日本の聖歌集に含まれる聖歌は、基本的に 3 から 5 行以内の聖歌であり、6 行を超す長めの聖歌、あるいは、極端に短い聖歌は、『公教會聖歌集』に含まれていない。

② 3 度以上の音の跳躍が大きすぎる聖歌は含まれない。

特に跳躍後に、さらにその同じ方向で跳躍するパッセージがある聖歌は、ほとんどの場合含まれていない。

③ 3 拍子系（3/4 拍子、6/4 拍子）の聖歌は少ない傾向にある。

⁸⁵ これらの表記は『公教會聖歌集』（1920）に従っている。

特に、3/4 拍子の聖歌のうち、二分音符と四分音符の組み合わせによる小節が続く聖歌は、基本的に日本には持ち込まれなかった。言語的な理由は十分に考えられる。

- ④ 完全終止が好まれ、同音連続での終止形は避けられる。
- ⑤ 調の特徴は、同じ曲でも、日本の聖歌集においては移調して移入されている例があるため、単純に比較することはできない。なお、調に関しては、ドイツの聖歌集を異なる年代、地域で横断的に見ると、同一の聖歌に関しても様々な調で記譜されており、それらの一貫性は見いだされなかった。ただし、『公教會聖歌集』の中で、日本語で歌われる全 85 曲は、 \sharp 、あるいは b が 3 つ以内の聖歌である。特に多い調としては、全体の 25%を占めるへ長調、次いで、ニ長調、ト長調となっている。

これらの特徴はいずれも、歌いやすさを求めた選別といえる。一方で、教会暦上の季節、あるいは賛美の聖歌の曲のバランスについては『フルダ 1891』と『公教會聖歌集』は類似している。

2.3 各版について

2.3.1 改訂版とその違い

札幌の光明社より、1918 年に初版が出版され、1920 年に第 2 版、1926 年に第 3 版が発行された。また、第 5 版が 1930 年に出版されている⁸⁶。なお、第 4 版は本論文の執筆に当たって確認することはできなかった⁸⁷。『公教會聖歌集』第 2 版（1918 年）、第 5 版（1930 年）は、祈祷書との合本として出版されている。そのほか、『公教會聖歌集』には、新潟版が存在する。なお、新潟版では第 4 版（1930 年）以降、『カトリック聖歌集』と改称された⁸⁸。また、伴奏譜としては、『オルガン及びハルモニスタ用』（1918 年、2 種）、『聖歌集オルガン伴奏』があるが、後者は所在不明である。抜粋本には、『公教會聖歌』（出版年不明）、『聖體降福式』（出版年不明）、『カトリック教の葬儀』（1928 年、1937 年）がある。

1933 年に『公教聖歌集』が出版されると、『公教聖歌集』はそれまで北海道、新潟を中心に用いられていた『公教會聖歌集』に取って代わるものとなった。

こうした改訂の中で、いくつかの聖歌の追加、テキストや文法の訂正、という改訂が行われていることは、当時の出版物にも書かれている。

⁸⁶ 初版は聖グレゴリオの家 宗教音楽研究所に所蔵されている。第 2 版（1920 年）は国立国会図書館デジタルコレクションにて公開されている。第 3 版、第 5 版は、瀬田修道院図書館に所蔵されている。

⁸⁷ なお、第 4 版の存在は、第 5 版の巻末にある出版年代の一覧からわかっている。

⁸⁸ ヘンゼラー、安足磨由美『明治期カトリック聖歌集』、107 頁。

大正七年に始めて公にされ、版を重ねるうちに数個の歌と曲とが除かれ、新に七八種の聖歌が加へられた外、他のは最初の儘で變化なく現在まで續いてみます。が、昨年（昭和十一年）の十一月發行の第五版を見ますと、文法の誤謬が三四個所匡されてみます。⁸⁹

同時代の記述としては、上記引用があるが、実際は、わずかな曲の加減に加えて、テキストや音の変更・訂正は、些細なものを含めるとさらに多く見られることが、より詳細な検証を通して明らかとなった。こうした変更からは、聖歌集を用いる中で、常に、より適切なテキストを検討していた姿勢を読み取ることができる。

2.3.2 『公教會聖歌集オルガン及びハルモニスタ用』

『公教會聖歌集』の伴奏譜に関しては、新潟教区から 1918 年に出版されている『公教會聖歌集オルガン及びハルモニスタ用』を参照する。

数字によるこの伴奏譜には、1 番のテキストのみがひらがなで書かれている。（その上で、補足的に漢字表記が部分的にひらがなのテキストの下に書かれている。）数字は、基本的に、聖歌旋律と一致しているが、オクターヴの表記に違いがみられる。歌の楽譜では 1 から 7 までの数字が用いられ、その範囲を超える音に関しては、数字の上、あるいは下につけられた点によって、オクターヴの位置が示されている。一方、オルガン及びハルモニスタ用の譜面では、8 以上の数字が記入されている。

これらの譜面からはどのような和声を加えて聖歌旋律を歌っていたか、知ることはできない。

【譜例 1】左から『公教會聖歌集』（1918）と『公教會聖歌集—オルガン及びハルモニスタ用』聖歌 2 〈やよすくひぬしよ〉

⁸⁹ 柏木秀雄「公教會聖歌集に就いて」『聲』1932年1月号、38頁。

2.3.3 新潟教区の『公教會聖歌集』

ここまで『公教會聖歌集』に関して、札幌での出版、使用を論じてきたが、この聖歌集は、新潟教区でも認可され、用いられた。その背景には、札幌教区と新潟教区が同じ司教区に含まれていたこと、さらに異なる修道会ではあるが、同じドイツ系の修道会が宣教を担っていたことがある。

1875年にオランダでドイツ人によって創立された神言会の宣教師は1907年9月に来日し、その後、秋田から福井までの東北・北陸6県の宣教に従事した。そこで、ベルリオーズ司教は新潟、山形、秋田における宣教を神言会修道会に委託した。さらに、1912年8月には、函館司教区に含まれていた秋田、山形、新潟の3県と東京大司教区に含まれていた富山、石川、福井の3県を合わせた新潟知牧区が新設され、神言修道会に委託されることになった。1922年に名古屋知牧区が新設されると、富山、石川、福井の3県を委譲し、1962年司教区に昇格した⁹⁰。

こうしたことを背景に、『公教會聖歌集』は、札幌と新潟両教区で公式に採用された。新潟では、さらに新潟教区独自の特殊聖歌を加えた聖歌集を出版した⁹¹。これは、『カトリック聖歌集』と呼ばれ、『公教會聖歌集』と同様に、数字譜で書かれている。『公教會聖歌集』から20曲ほど追加されている他、同じ聖歌の一部にも編曲が加えられている。

2.4 『公教會聖歌集』のテキストにみられる特徴

聖歌集の編纂に誰が当たったか、あるいはテキストを誰が書いたか、ということに関する資料は現存せず、決定づけることは不可能である。しかし、オリジナルの聖歌と日本語に翻訳された聖歌の比較をすると、明確に翻訳を行っている部分とより自由に作詞をしている部分とが明らかになる。日本人の協力を得ながら、ドイツ語のテキストをもとに作詞していることは間違いないと言えるだろう。個々の聖歌のドイツ語原文との比較は4章で行う。

この節では、『公教會聖歌集』のテキストの中で特に特徴的な、天皇制用語の使用、そして特定の典礼用語の使用、漢字表記の変遷について記す。

2.4.1 天皇制用語

⁹⁰ 小田武彦「日本におけるカトリック教会：司教区概要【新潟司教区】」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002年、第3巻、1469頁、青山玄「日本におけるカトリック教会：男子修道会（6）神言修道会」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002年、第3巻、1479頁。

⁹¹ Eusebius Breitung OFM、「聖歌－II. 日本に於ける歴史」、『カトリック大辭典』東京：富山房、1952年、第3巻、86頁。

『公教會聖歌集』のテキストには、戦前の日本の国体を彷彿させる、いわゆる「天皇制用語」が多く用いられている。その背景には、1893年（明治26年）9月に刊行された文部省編『祝祭日唱歌集』が全国の小学校に普及した結果、天皇制用語が国民の間に確実に定着していたことがある⁹²。

プロテスタント教会の讃美歌にも天皇制用語は用いられており、石丸は「明治10年代以降、讃美歌の文言は、官製唱歌に用いられる皇室用語、天皇制用語、国家神道の影響を受け続けてきた」⁹³と指摘する。こうした讃美歌における天皇制用語は長く続いたが、明治期以来の讃美歌集を根本的に見直し、特に、戦争責任への反省に立って編集・出版されたのが、『讃美歌21』（1997）である。この聖歌集には、国家神道的表現が注意深く排除されている⁹⁴。

日本のカトリック教会の聖歌に関する研究は、前述の通り、非常に限定的であるため、そうした指摘はこれまで行われてきていないが、同じことがカトリック教会の聖歌においても言える。実際、『公教會聖歌集』のテキストの中には、天皇制にあった日本においてこそ用いられたテキストが数多くみられる。その一方で、同時代のカトリックの文献や、主に司祭や聖職者などドイツ人宣教師が日本語を学ぶために作られ、多くの教会用語が含まれる『ローマ字獨和辭典』（第1版、1926）などでは、こうした用語は一切見られない。

日本人にとってなじみのある用語、さらに、当時、天皇を神と崇めていた日本の民衆にとって、神に関する文脈で理解しやすい用語として、カトリック聖歌のテキストに天皇制用語を取り入れたと考えられる。1933年の『公教會聖歌集』ではその存在感は減少傾向にあるが、それでも現行の『カトリック聖歌集』（1966）に至るまで、継続して用いられている点も特筆すべきであろう。

『祝祭日唱歌集⁹⁵』に含まれる唱歌の中の用語で、『公教會聖歌集』の中でも使われている用語は以下の通りである。

- ・大詔：おほみごと。天皇が広く国民に告げる言葉。[聖歌3]
- ・天津：あまつ [聖歌1、5、7、11、18、24、76、100、103]
- ・御稜威：みいつ。侵してはならない天皇の威光。[聖歌7、13、66、74、75、88、89、92]
- ・千代に八千代に：ちよにやちよに。千年もさらにいく千年も。永久の栄えを祈る言葉。[聖歌77]
- ・千代万代よ：ちよよろづよ。御代が永久に続くことを祝ってという言葉。[聖歌18、

⁹² 石丸新『讃美歌に見られる天皇制用語』東京：モリモト印刷株式会社、2010年、19頁。

⁹³ 石丸新『讃美歌に見られる天皇制用語』、34頁。

⁹⁴ 石丸新『讃美歌に見られる天皇制用語』、24頁。

⁹⁵ 『祝祭日唱歌集』には、〈君が代〉、〈勅語奉答歌〉、〈一月一日〉、〈元始祭〉、〈紀元節〉、〈地久節〉、〈神嘗祭〉、〈天長祭〉が収録されている。

66、74、100、102]

さらに、同様に天皇制用語として分類できる以下の用語も聖歌集の中では、使われている。なおここでは、単なる尊敬語としての用語（御国、御衣御宮殿、御教示など）を除いている。

- ・天津御軍（あまつみいくさ）
- ・天津御国（あまつみに）
- ・天津御座（みくら）（通常天皇の位、天皇の玉座を示す。）
- ・御門、御門戸（みかど）
- ・御前（みまえ）
- ・御宮殿（みとの）
- ・大御天主（おほみかみ）

2.4.2 典礼に関する用語

キリシタン発見を機に復活した最初の要理書の出版（1865年）から30年後の1895年、日本カトリック教会は四教区指定書『天主公教要理』出版を決定した。しかし、20世紀初頭、典礼の訳語の定訳は存在せず、原語が同じでも、聖歌集によって異なる言葉が用いられることは頻繁であった。また聖歌集の改訂に伴って漢字や用語そのものに変更が加えられることも度々あった。本節では『公教會聖歌集』の中に出てくる典礼用語の中でも特に重要なものを抽出し、版による変遷、同時代の他の資料との比較を行う。

➤ 神、主

初代教会以来、キリスト教が語系を異にする他文明圏に進出した時に直面した最大の課題は、キリスト教の唯一絶対の創造主宰神の訳語をめぐる用語問題である。ザビエルは来日当初（1549年）、創造主宰神デウス Deus の訳語として「大日」（大日如来）を採用したが、1555年には「デウス」が採用された。デウスの訳語「天主」の初出も、1581年にさかのぼる⁹⁶。キリシタン時代には、「デウス」として定着した⁹⁷。

『日本聖詠』の中には、「天主（きみ、おほぎみ、ぬし、てんしゅ、かみ⁹⁸）」、「御主（みあるじ）」という言葉で表現される。『ローマ字獨和辭典』（第1版1926年）では「Gott」の項目には、「天主（てんしゅ）、神（かみ）」と表記されている。なお、1896

⁹⁶ 太田淑子編『キリシタン（日本史小百科）』 H.チースリク監修、東京：東京堂出版、1999年、114頁。

⁹⁷ 海老澤有道「キリシタン用語」、『新カトリック大事典』 東京：研究社、1998年、第2巻、449頁。

⁹⁸ ヘンゼラー、安足磨由美『明治期カトリック聖歌集』、35頁。

年の『天主教要理』、1954年の『公教要理』では、一貫して「天主（てんしゅ）」が用いられる。

『公教會聖歌集』では、「天主、御天主（みかみ）」が用いられることが圧倒的に多い。さらに、1918年と1920年の比較からは、「神（かみ）」から「天主（かみ）」へ、「大御神（おほみかみ）」から「大御天主（おほみかみ）」への変更が17か所に見られ、1920年と1926年の比較からも、「神（かみ）」から「天主（かみ）」の変更が複数回みられる。「天主」への統一の流れを聖歌集の編纂、改訂の経緯からも推察できる。

また、「天主、神」と関連して、三位一体の神の三つのペルソナ（位格）は、『公教會聖歌集』の中では、「御父、聖父（みちち）、父（ちち）」、「御子、聖子（みこ）、イエス」、「聖霊（みたま）」と表現される。『日本聖詠』や『公教羅甸歌集』（1906）では、たびたび「聖霊」を「すびりとさんと」と読み、「アヴェ Ave」や「スピリト Spirito」などと並んでラテン語が日本語テキストの中に一部含まれることがあるが、『公教會聖歌集』にそのようなものは見られない。『ローマ字獨和辭典』（第1版、1926年）では、「Sohn」は「天主の御子（てんしゅのおんこ）」、「Geist, heiliger Geist」は「聖霊（せいれい）」という訳語で説明されている。

➤ イエス

『公教會聖歌集』の各版の変遷の中で、「イエス」表記の変遷も明らかである。まず、目次では、以下の通り記されている。

1918年：イエエスの聖名

1920年：イエススの聖名

1926年：イエズスの聖名

1930年：イエズスの聖名

続いて、曲中のテキストに現れる「イエス」の表記について調べていくと、1918年版は49番の聖歌で一度だけ例外的に「イエズス」と表記されているが、そのほかでは、すべて「イエスス（イエススを含む）」と表記される。1920年版は49番を含め、すべて「イエスス、イエスス」と表記される。1926年版では、新たに加えられた聖歌（105、107）のみが「イエズス」の表記となり、他はその前の版と同様に「イエスス（イエススを含む）」が踏襲される。1930年版では、すべて「イエズス、イエズス」の表記となっている。

こうした表記の変更からは、「イエズス」への統一の流れを読み取ることができる一方で、「イエス」の聖名が依然として統一されて用いられていなかった状況も明らかである。「イエス」の聖名の読み方について記された1929年『聲』の記事を以下に引用する。

希臘語では、Iêous (イエス)、羅匈語では Jesus (イエズス)、英語では Jesus (ジーザス)、獨語では Jesus (イエズス) であります。三百年前我國切支丹は Jesu (イエズ) と云ひました。明治の初年我國に渡来した佛國の宣教師は Jesus は佛國流の羅匈語發音に従つて「イエズス」と發音下ものと思ひます。希伯來語、希臘語などによれば「イエス」と發音する方が正しいかも知れませんが、現代語では母音の間に在る單獨なる S は Z の如く濁って發音するのが通例であるし、又其方が發音し易いから前記獨逸語などの如く、日本語でも「イエズス」と發音する方が可からうと思ひます。基督正教會(露教會)は希臘語の發音に従ひ「イエス」或は「イイス」と濁らないで發音し、プロテスタント教(新教)は「イエス」或は「エス」と云ひます。⁹⁹

この記事からもわかる通り、各国語によって「イエス」の發音は異なる中で、日本のカトリック教会においては「イエズス」に統一する流れを見ることができる。1935年に光明社から出版された『羅馬弥撒典書』の中では、一貫して「イエズス」が用いられている。

➤ 聖母マリア

『公教會聖歌集』の中には、マリアを表す言葉として、王后(きさき)・聖母(きみ)、天なる王后(あめなるきさい)、天主の御母(かみのみはは)、童貞マリア(をとめマリア)、姫君マリア(ひめマリア)、御母マリア(みははマリア)、聖きマリア(きよきマリア)がある。

啓蒙思想時代にはカトリック教会内のマリア信心は退潮したが、19世紀になると再び盛んになった。その信仰の根柢は、マリアは処女として聖靈の働きによって身ごもり、信仰と従順をもって、救い主イエス・キリストの母となることを受け入れ、それを見事に果たしたことにある。そのため、マリアのすべての特徴は、まことの神でありまことの人間である御子キリストの母であるということに基づいている¹⁰⁰。

マリア信心と女性尊称は不可分であったことから、上記のような様々な用語(皇后、王后、姫)が用いられたことが考えられる。しかし典礼の中でこうした言葉が用いられることはなく、典礼上は「神の母」あるいは「おとめマリア」のいずれかが用いられる。1935年に光明社から出版された『羅馬弥撒典書』の中では、「聖母マリア」、「童貞聖マリア」、「終生童貞なる聖マリア」が一貫して用いられる。一方、聖歌の中では、典礼から離れたマリア崇敬(王后、天なる王后、姫君)、そして、典礼的なマリア賛美(「天主の御母」、「童貞マリア」、「御母マリア」、「聖きマリア」)を使い分けていると考えられる。

これらのマリアの尊称の使い分けは、元の聖歌にも基づいている。例えば、聖母の聖歌

⁹⁹ 「問と答と—救世主の聖名の發音」『聲』1929年10月号、61~62頁。

¹⁰⁰ P. ネメシェギ「マリア」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2009年、第4巻、800頁。

47「いと愛たきかな」では、原曲のテキストの「天の女王 Himmelskönigin」と一致するように「天なる王后」というテキストが使われている。一方で、同じく聖母の聖歌 52「アンナの御子」では、マリアの母である聖アンナの懐（胎）にいる方への讃美が行われることを踏まえ、「姫君マリア」というテキストが用いられている。

➤ 「聖」と「御」

以下の言葉は、「聖」を言葉の頭につけることによって、聖なるもの、あるいは尊ぶべき対象、という意味を強めている。これは、「御」と互換性があるものであった。

- ・聖別め（きよめ）
- ・聖迹（みあと）
- ・聖天使（みつかひ）
- ・聖手（みて）
- ・聖教（みのり）御聖教
- ・聖旨（みむね）
- ・御教示、聖教訓（みをしへ）

➤ 秘跡

日本のカトリック教会の用語で「秘跡」と訳される言葉はラテン語の「サクラメントゥム sacramentum」である。今日では、サクラメント、聖礼天、聖奠、機密などの用語が用いられる¹⁰¹。

『公教會聖歌集』の中では一貫して「秘蹟」と表記される。カトリック教会においては「秘蹟」は「秘跡」の漢字変更が行われており、1948年の増補改訂版以降、聖歌に登場する「ヒセキ」はいずれも「秘跡」に改訂されている。

➤ いつくしみ

「慈しみ」とは、以下の通り、定義づけられるものである。

慈しみ（憐れみ） *misericordia, mercy, Barmherzigkeit, Erbarmen*

人間の罪、苦しみ等を前にして、それを包み、癒やす愛のこと。罪深い人類に対して神が取っている態度。イエスがすべての人々に対して常に示した態度、神の慈しみを体験したすべての人が他人に対して示すように神が要求している態度を表す言葉として、キリスト教の神髄を表している。日本語訳聖書において、「慈しみ」、「憐れみ」、「慈悲」などの訳語も用いられている。¹⁰²

¹⁰¹ J. アリエタ「秘跡」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2009年、第4巻、188～191頁。

¹⁰² P. ネメシェギ「慈しみ」、『新カトリック大事典』東京：研究社、1996年、第1巻、482

この概念に対する定訳は 20 世紀後半以降まで定まらず、憐憫（あわれみ）¹⁰³、慈悲（じひ）¹⁰⁴が用いられた。『公会聖歌集』には、いつくしみ、慈悲、愛憐（いつくしみ）、あわれみ、憐愍、憐憫、憐み（あわれみ）など、様々な表記がみられる。

➤ めぐみ

「恩恵（恵み）charis」は、パウロにおいて、キリスト教的な救済理解の中心を表す言葉として用いられ、イエスの死と復活によってすべての人間に対して示され、実現される神の愛を意味している¹⁰⁵。この概念に関する定訳が定められたのも、20 世紀後半以降であり、それ以前は、「恩寵（めぐみ）」、「恵（めぐみ）¹⁰⁶」「聖寵（せいちょう）¹⁰⁷」などと用いられていた。『公会聖歌集』では、「御恵（みめぐみ）」、「御恩寵（みめぐみ）」、「恩寵（めぐみ）」、「聖寵（みめぐみ、めぐみ）」と表記される。

これらの用語はキリスト教の教義の中でも重要な言葉であるが、こうした用語の定訳が定まった、第 2 ヴァティカン公会議以降のことである。第 2 ヴァティカン公会議の『典礼憲章』は、それまでラテン語中心に祝われていた典礼を、それぞれの国の言語で祝ってもよいとする方針を展開した。この方針に基づいて、各国で国語、あるいは公用語による典礼書が次々と刊行された。

典礼においても定訳の議論はかなり遅れていることを踏まえれば、聖歌においてもこのような典礼用語に関して様々な言葉が当てられていることは極めて妥当なことである。その一方で、「天主」、「イエス」、「秘跡」などにおいて、明確な変遷の形跡がみられるものもある。聖歌が信者にもたらす影響力、聖歌のテキストの重要性を示唆しているといえるだろう。

2.5 会衆用聖歌集としての特異性

2.5.1 全国的な受容

この聖歌集は、札幌教区、新潟教区における特殊な会衆歌の位置づけを生み出した。札幌教区内での日本語聖歌の歌唱については、『カトリック大辞典 第 3 巻』の「聖歌-II. 日本に於ける歴史」の項目でも以下の通り、記述されている。

頁。

¹⁰³ 天主公教会『天主公教要理』 横浜：福音印刷合賣社、1896 年、13 頁。

¹⁰⁴ 「慈悲」、『教会用語辞典』 東京：原書房、1959 年、第 1 巻、727～729 頁。

¹⁰⁵ P. ネメシェギ「恩恵（恩恵）」、『新カトリック大事典』 東京：研究社、1996 年、第 1 巻 985～992 頁。

¹⁰⁶ 天主公教会『天主公教要理』、12 頁。

¹⁰⁷ 天主公教会『天主公教要理』、12 頁。「聖寵」、『教会用語辞典』 東京：原書房、1959 年、第 1 巻、393～395 頁。

これ等『日本聖詠』などの明治期のフランス系聖歌集の聖歌集は全て聖歌隊用であったが、本来の意味の聖歌への要求が益々高まり、信者一同に國語で歌われ、かくて当時の札幌教区では讀誦ミサと主日並びに祝日とに用ひる聖歌が著名な西洋の聖歌に倣って作られかつ歌われるに至つた。¹⁰⁸

札幌教区における会衆用聖歌集の特異性は、以下に引用する『日本カトリック新聞』の記事や、雑誌『聲』の記事からも明らかである。

・佐藤清太郎、「札幌教区の『公教會聖歌集』」

(前略) 人の歌つてみるものを二三度も聞けば、自ら、後に付いて歌つて行けるやうに出来てゐる。又、さう出来てこそ聖歌として立派なものだと思ふ。(中略) 此の意味に於いて、先年、札幌教区で編纂し、**同教区の信者が一般に使用してゐる「公教會聖歌集」は舊式(旧式)だと言ふ評も有る様だが、實によく出来てゐると思ふ。**¹⁰⁹

・柏木秀雄、「公教會聖歌集に就いて」

札幌教区に生まれ育つて来た私には他教区に於て(全部ではないにしても)平常の日曜日にでも、聖歌は定まつた歌隊に委せられて**一般の信者は歌はないと云ふ事をきく度毎に奇異な感じが致します。**札幌教区では祈禱文を用ゐると同様に殆ど**凡ての信者は必ず聖歌集をも聖堂へ持つて行きます。**

(中略)

大正七年に初めて公にされ、版を重ねるうちに数個の歌と曲とが除かれ、新に七八種の聖歌が加へられた他、他のは最初の儘で變化はなく、現在まで續いてゐます。

(中略) 一體、聖歌に對して愛好を抱くか否かは、其の歌曲に依つて定まるもので、歌詞は従であります。外國語の聖歌を聴いても深い感銘の與へられるのは、此の理由からであります。(後略)¹¹⁰

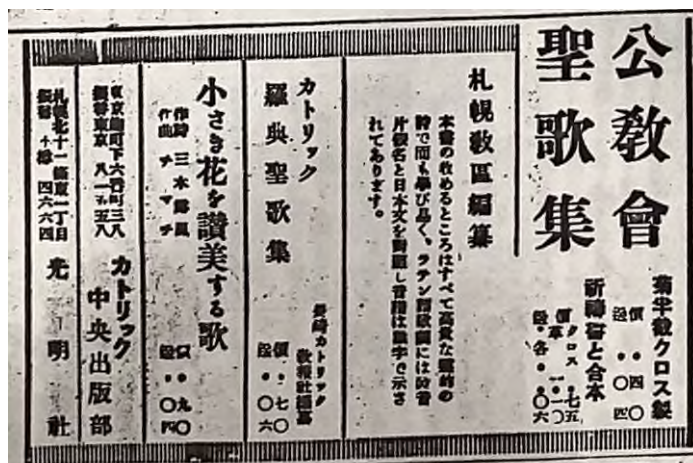
この聖歌集は全国的な位置づけを得ることになり、次第に高まる統一聖歌集の編纂への

¹⁰⁸ Eusebius Breitung OFM、「聖歌」、『カトリック大辭典』東京：富山房、1952年、第3巻、86頁。[]内、引用者補足。

¹⁰⁹ 佐藤清太郎「札幌教区の『公教會聖歌集』」、『日本カトリック新聞』1931年9月6日(308号)4頁。強調は引用者による。

¹¹⁰ 柏木秀雄「公教會聖歌集に就いて」『聲』1932年1月号、37～42頁。強調は引用者による。

機運の中にあつての「一つの理想形」として位置づけられた。例えば、『カトリック・タイムス』の1927年12月1日(162号、4頁)には小さな広告、12月21日(164号、4頁)に「年末年始の贈答品にカトリックの良書を」という記事の中で、『日本聖詠』と並んで『公教會聖歌集』も載っている。『日本カトリック新聞』の1931年11月15日(318号、4頁)、1931年11月22日(319号、4頁)にも、以下の『公教會聖歌集』の広告が掲載されている。



【図7】『日本カトリック新聞』に掲載される『公教會聖歌集』の広告¹¹¹

2.5.2 日本のカトリック聖歌集の歴史における『公教會聖歌集』の位置づけ

第1章で述べた『日本聖詠』も日本人の信徒用の聖歌集であったが、ミサや典礼において用いる「会衆用」の聖歌集ではなかった。いくつか、ミサにかかわる聖歌も『日本聖詠』には見られるが、あくまで、典礼において聖歌を担当していたのは、聖職者、聖歌隊であった。しかし『公教會聖歌集』は教会に集う会衆が歌うことを目的に編纂されており、それまでの聖歌集とは大きく目的が異なっている。その上で、個々の聖歌の選曲、またテキストにおいては会衆の理解しやすさ、歌いやすさを重視していたことも本研究を通して明らかとなった。

『公教會聖歌集』の聖歌のほとんどは、その後『公教聖歌集』に大部分が引き継がれた¹¹²。個々の聖歌を見ていくと、『公教會聖歌集』と『公教聖歌集』ではテキストが大きく異なっている部分も多々存在する。(各聖歌に関する比較分析は第4章で行う。)『公教會聖歌集』のテキストを踏まえて作詞されている『公教聖歌集』の聖歌も数多くあり、さらに言えば、第4章で詳述するように、原曲との比較では『公教會聖歌集』の方が、原詩に忠実で、より分かりやすいという点も多い。

¹¹¹ 『日本カトリック新聞』1931年11月22日、4頁。

¹¹² これらの聖歌の引継ぎに関しては、【付録2】の資料を参照。

『公教會聖歌集』は、その後の日本のカトリック教会の聖歌の歴史において、旋律、テキスト、さらに構成方法という点でも、モデルとなるものであった。日本の会衆歌の伝統を確立した聖歌集といえるだろう。

第3章 日本における最初の統一聖歌集『公教聖歌集』の成立¹¹³

3.1 統一聖歌集への機運

1962年から1965年にかけて行われた第2ヴァチカン公会議以前のカトリック教会では、ミサは基本的にラテン語で行われ、歌ミサにおいては、司祭や聖歌隊などによって、ラテン語の聖歌（グレゴリオ聖歌）が歌われていた。前述の通り、教皇ピウス10世による1903年の教会音楽に関する自発教令でも、グレゴリオ聖歌は「教会音楽の最高の規範」として礼拝の中で重要視されていた。もちろん日本においても同様である¹¹⁴。しかし、『公教聖歌集』が示している通り、会衆が礼拝の中で歌うという例もあった。主日ミサの聖歌の実態について言及されている1931年の雑誌『聲』の記事を以下に引用する。

[問] 或る教区の教會では、待降節でも四旬節でもかまはず、御ミサ中にオルガンを奏して、日本語の聖歌を盛んに歌つて居りますが、一體御ミサ中に何時でも、日本語の聖歌を歌つて（悲しみ、つ々しみ、の季節でも）よいものでせうか？受持神父或は、教区々々の自由の権利でせうか？これは各教区一致しなくてもよいものでせうか？迷つて居りますから、詳細御教示お願いいたします。（小樽 緒丘生）

[答] 歌ミサ即ち唱歌ミサ或は正式のミサの時には、羅典語の一定の聖歌の限度が、讀誦ミサ（司祭が歌ふ事なくして、ミサの祈りなどを單に讀誦するミサ）の時には、待降節、四旬節中でも、日本語の聖歌を歌つても可い。オルガンも聖歌の伴奏であれば、何時でも禁ぜられてゐません。聖歌の伴奏でなく、只オルガンのみを引くことは悲しみの季節には禁ぜられてあります。

又、待降節、四旬節でも、其季節のミサでなく、聖人の祝日のミサであれば、例へば三月十九日聖ヨゼフ聖母の浄配の大祝日は何時も四旬節中であるが、此聖人を記念するミサを行ふ時は、悲しみの節でないのと同じく喜びを表すためオルガンを引き或は其他種々の裝飾を施しても差支えありません。¹¹⁵

このように、様々な国からの宣教師が来日し始めたことで、典礼の行い方には地域差が生まれていた。それぞれ、異なる聖歌集が用いられ、日本語の聖歌が多く歌われる教会、全く歌われない教会、聖歌隊のみが歌い一般の信者が歌わない教会、信者も歌う教会など状況は様々であった。この状況については、札幌のフランシスコ会が1916年から週刊で発行していた『光明：週刊公教新聞』の中でも詳述されている。

¹¹³ 章末に、1932～1944年の関連する記事の一覧を掲載している。

¹¹⁴ 「典禮と聖歌」『日本カトリック新聞』1937年7月11日（612号）、4頁。

¹¹⁵ 「主日の御ミサの聖歌に就いて」『聲』1931年5月号、357頁。

我が國の明治以降の公教傳道は近年まで主として同一布教會—巴里外國傳道會—の手によつてなされてあつたので、どの教區でも—教區數も少なかつた—自然同じ歩調ですぐんでいみたのが、其後數々國の布教會がはたらくやうになり、教區の數も加はり旁々、カトリックとしては名實ともに同じではあるが、地上の物事にまぬかれない地方色がおのづから、その教區々に多少染分けられてくるといふ現象を呈してきたため、それが聖歌にも及んで現在のやうな差別ができたといふ結果にあるのである（……）ある處では日本語の聖歌が割合おほくうたはれるに反し他の處ではさうでなかつたり、また、日曜日の重なミサが羅典語歌ミサでない場合には少しも日本語の聖歌をしなかつたり、或は聖歌隊だけで、一般はこれにあづからない、乃至は、ミサ後に初めて一緒にうたふ。またおほくは降福祭のときにラテン語の聖歌のみを用ゐるといふ風に、更にまた、歌晴れる聖歌の數にしても、處によつて多い少いの區別があり、日曜のミサが歌ミサでないときでも、その教會の主要ミサには、信者の共同の祈りの合間々にミサに關する聖歌を加へる。それから降福祭の時にしても、ロマ聖廳から特別の許可がでてゐるので羅典語聖歌ばかりでなく、邦語の聖歌をおほく用ゐるといふ處もあり、自然聖歌がおほきな位置を占めるやうになり。¹¹⁶

こうした教區ごとの多様な実態は次第に問題視されるようになり、全国的な聖歌集統一への契機となった。『光明：週刊公教新聞』では、新しい聖歌集の編纂に当たって、いち早く次の3案を掲載している。

- ① 各教區の聖歌集を文字通り、絶對的同一の物に統一するか。
- ② 重要な聖歌の大部を同一にして他は附録として各教區任意のものを加へるか。
- ③ 各教區現在使用の聖歌集を其の儘とし、其の中にも一定共通の、聖歌數は各教區共必ず其の聖歌集に加へる事にし、之を次第に増加する様にて逐次、(一) (二) の如き統一に到らしむるの道を開くか。¹¹⁷

結果的には『公教会聖歌集』（1933）は全国統一聖歌集として、①の理念に近いものとして編纂されたことになる。

3.2 『公教聖歌集』の編纂

¹¹⁶ フランシスカン會「日本公教會各教區共通聖歌集出版に就いて」『光明：週刊公教新聞』札幌：光明社、1929年6月30日、6頁。

¹¹⁷ フランシスカン會「日本公教會各教區共通聖歌集出版に就いて」『光明：週刊公教新聞』札幌：光明社、1929年6月30日、7頁。

3.2.1 編纂過程

『公教聖歌集』の編纂に関する先行研究としては、『カトリック大辭典 第3巻』（教文館、1988年）の以下の記述がある。

昭和三年、東京に開かれた司教会議は一般聖歌集の編纂を決定し、福岡の司教ティリ（Thiry）、サレジオ會會長チマッティ（Cimatti）及び光明社のノル（Hougolin Noll）を編纂委員に任命した。併しながら、司教ティリは間もなく死し、チマッティは日本を去つたので、この事業には主としてノルが当たり、彼は大神学校のアノージュ（Anoge）及び多治見の神言会修道院のディトリヒ（Dietrich）の協力でこれを成就した。¹¹⁸

本項目では、当時の出版物を参照しながら、より詳細に編纂の実態を明らかにしていきたい。

『公教聖歌集』（1933）の凡例に「往年の日本公教會司教会議において、全教區共通用のカトリック聖歌集編纂が決議され、…」¹¹⁹とあるように、1928年10月日本公教會司教会議¹²⁰において全国公教會用聖歌集の編纂が決定され、編纂委員が3名選任された¹²¹。ただし残念ながら、統一の聖歌集の出版を決めたという首脳会議の議事録等の資料は残っていない。

1928年に出版の意向が決定した後、出版されるまで5年ほどかかったことになるが、その編纂作業が滞りなく進んだわけではなかった。1929年6月の『光明：週刊公教新聞』には、「各委員が聖歌集の編纂に向けて目下準備中である

が、委員のうち、宮崎のチマッティ神父がイタリアに帰国中でその進行が滞っている。」¹²²、という記録がある他、1930年8月号の『聲』の中で、「聖歌集の全国的統一は何時か」という問いに関する返答としては、「教会の當局者に伺ひました處、御尋ねの聖歌集

¹¹⁸ Eusebius Breitung OFM（オイセビウス・ブライトゥング）、「聖歌」、『カトリック大辭典』東京：富山房、1952年、第3巻、86頁。なお、人名やその原綴りは、原文通りに引用している。

¹¹⁹ 『公教聖歌集』札幌：光明社、1933年、3頁。

¹²⁰ 日本公教會司教会議は、教會首脳会議の一種であり、『聲』（1933年10月（657号））に説明がある。「（教會首脳会議は）二種ある。其一は司教会議（Conferentiae episcopales）もう一つは大教區（即ち地方部会）議會（Concilium provinciale）である。司教会議は地方部の司教等が集會し、首府大司教が其議長となって相互に意見を交換し、公教の利益のために施すべき改良或は最善なる方法を議し、地方部諸教區に共有なる難問を一様に解決することを講ずるのである。此司教会議は少なくとも五年毎に開會することになっている。（聖會法等二九二條）。其の決議は單に司教同志の申合せに止まり、法律とはならない。各司教は銘々自分の主権によって自ら適當と思ふ處置を其教區内に施すことが出来る。…」

¹²¹ 「日本公教會各教區共通聖歌集出版に就て」『光明：週刊公教新聞』682号、1929年6月30日、6頁。

¹²² 「日本公教會各教區共通聖歌集出版に就て」『光明：週刊公教新聞』682号、1929年6月30日、6頁。

は目下準備中であるが、何時頃発行出来るかは判らぬとの事であります」¹²³と書かれている。この記事の他にも『聲』には幾度か、「統一の聖歌集」に関する問い合わせが来ているが、いずれも明確な答えはない。

『日本カトリック新聞』において、初めて新たな聖歌集に関する記事がみられるのは、1932年9月4日の『新しい聖歌集に就いて』という記事である。ここでは、「かねて要求され、期待されてみた日本カトリック聖歌集の準備は既に具体的な仕事に取り掛り、著々進行しつつある」¹²⁴というコメントの他、聖歌集編集者の担当者や各聖歌の採用基準、さらに編纂方針まで詳細に書かれている。残念ながら、この記事の執筆者に関する記載はない。さらに、1932年11月号『聲』では、編集委員の一人であったノル師が、『日本カトリック新聞』の当記事に言及しながら、「聖歌集は今後約一年間に終了の豫定で着手されてみます」¹²⁵と書いている。当時の状況として、正式に出版の目途が立ったのは1932年ごろであったと考えられるだろう。最終的に『公教聖歌集』の初版は、1933年9月20日に光明社から出版された。

続いて、『公教聖歌集』（1933）の凡例（3～4頁）と1932年9月4日の『日本カトリック新聞』に掲載された「新しい聖歌集に就いて」の記事に基づいて、編集方針、採用基準、販売方法を以下の通り要約する。¹²⁶

方針：新しいものを作るのではなく、既存のものから選出して編纂する。その際、テキストの訂正を行って、採用する。

採用基準：

- ① 一般信者の歌うのに適したものであること。したがって、あまり高級なものは採用しない。このような聖歌は、聖歌隊に任せる。
- ② 一般向け、民衆的であるとしても、根本として、聖なる場所に適した性質のものであること。したがって、あまりに俗的なもの、マーチ式やダンス調や軍歌式の単に勇壮活発なもの、あるいはあまりに感傷的なものであってもならない。
- ③ 趣味の方面からは、千篇一律ではなく地方からの要求をも満たし得るように、出来るだけ多角的な視点から選ぶこと。およそ、200曲を見越している。

なお、これらの聖歌が必ずしも各教区のすべての要求にこたえらるゝとも限らないため、任意で各自の教区専用のもを附加することは認める。またこの聖歌集の編纂の目的は、あくまで日本語聖歌の統一であり、ラテン語聖歌に関しては、全世界的に統

¹²³ 「問と答：聖歌集の全國統一は何時か」、『聲』 1930年8月号、66頁。

¹²⁴ 「新しい聖歌集に就いて」『日本カトリック新聞』 1932年9月4日（360号）4頁。

¹²⁵ 「問と答——「聖歌集統一評議員會に就いて。」」『聲』 1932年11月号、73頁。

¹²⁶ 「新しい聖歌集に就いて」、『日本カトリック新聞』 1932年9月4日（360号）4頁に基づく。

一されたヴァティカン公刊のものを使用するのがよい。

販売方法：教区として、また個人としてこの聖歌集を購入する際は、カトリック中央出版部あるいは札幌の光明社宛てに申し込むこと。

3.2.2 編纂に関わった人物

先出の 1932 年 11 月号の『聲』の記事には、「『聖歌集統一評議委員会』といふものはありません。委員は各自の場所で互いに連絡し、協力し、且時々會議をなし、完成に向かって働いております」¹²⁷とあり、統一聖歌集の編纂に向けては、各担当者がそれぞれの担当部分を個人的に作業していた状況がわかる。また、聖歌集本体に、歌曲の選定、歌詞の改正に協力した人々の名前が挙げられていないのは、『公教聖歌集』の典礼書の性質故である、と「聖歌-II.日本に於ける歴史」を執筆したブライトウング師はその項目の中で書いている¹²⁸。

一方で、『公教聖歌集』（1933）の凡例の末尾には、「（曲譜の選集、歌詞の修正と作詞に関して）東京にある公教大神学校に深き感謝を堯明し神がその働きに酬い給はんことを祈る」¹²⁹とあり、東京大神学校を中心として作業が行われたことがわかる。関連資料を参照しながら、『公教聖歌集』の編纂の中心的な担い手の特定を試みる。

まず、1932 年 9 月 4 日の『日本カトリック新聞』に掲載された「新しい聖歌集に就いて」の記事によれば、音符方面は、3 人の司祭、宮崎のチマッティ師、東京大神学校のアノージュ師、札幌のノル師、歌詞方面で担当したのが、戸塚文卿、その他 2、3 人である¹³⁰。

チマッティ師（Cimatti, Vincenzo, 1879～1965）はイタリア生まれのサレジオ会宣教師である。1926 年に日本渡来のサレジオ会最初の宣教師として宮崎に着任、宮崎、大分の両県で宣教に従事した。チマッティ師は、たぐいまれな音楽的才能を持ち合わせており、宗教的な作品から教育的、娯楽的な作品の作曲まで数多く手がけている¹³¹。『公教聖歌集』の編纂に大きくかかわったと考えられるが、一方で、聖歌集編纂の時期がイタリア帰国の時期と重なっているのも、中心的な人物とも考えにくい。

アノージュ師は、パリ外国宣教会の司祭で、東京神学院で 1929 年より、教理神学、ラテン語、聖楽の授業を担当していた¹³²。『公教聖歌集』には、『日本聖詠』だけではなく、『天主公教会』（1910）、『公教聖歌』（1911）の聖歌が含まれていることも、各聖歌集と

¹²⁷ 「問と答——「聖歌集統一評議委員会に就いて。」『聲』、681 号、1932 年 11 月、73 頁。

¹²⁸ Eusebius Breitung OFM、「聖歌」、『カトリック大辞典』東京：富山房、1952 年、第 3 卷、86 頁。

¹²⁹ 『公教聖歌集』札幌：光明社、1933 年、4 頁。

¹³⁰ 「新しい聖歌集に就いて」、『日本カトリック新聞』1932 年 9 月 4 日（360 号）4 頁。

¹³¹ 尾原悟「チマッティ」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002 年、第 3 卷、1040 頁。

¹³² 「東京カトリック神学校史年表」*Inter Nos*, No.26、1969 年、25 頁。

の照合からわかっており¹³³、これらのパリ外国宣教会の地域で用いられていた聖歌集からの転用はアノージュ師によるところが大きいことは十分考えられる。

ノル師は、フランシスコ会フルダ管区の司祭として、1921 年に来札した。文才があり、音楽的造詣も深く、また雄弁であったことで知られる¹³⁴。『光明：週刊公教新聞』の編集長を経て、新しい『日本カトリック新聞』の発行に協力するため 1934 年に上京した。『公教聖歌集』の編纂に当たっても、『公教會聖歌集』（札幌教区聖歌集）との関連性はノル師によるところが多いと考えられる。

『公教聖歌集』の編纂方針は、新しいものを作るのではなく、既存のものから選出することであり、それまでに国内で最も広く用いられていた「フランス系」聖歌集『日本聖詠』、北海道、新潟を始めとする地域で用いられ、「ドイツ系」聖歌集『公教會聖歌集』、それぞれに精通した人が編纂にかかわっていたといえるだろう¹³⁵。

1932 年 9 月 4 日の『日本カトリック新聞』には、作詞あるいは歌詞の改訂にかかわった人物として、「戸塚師其の他二三の経験者が受け持たれてゐる」¹³⁶という記述がある。戸塚文卿（1892～1939）は、医師であり司祭で、東京カトリック神学院教授を務める傍ら、『日本カトリック新聞』の初代主筆、カトリック中央出版部長、カトリック新聞社社長、などを歴任した。また、多くの翻訳や随筆を残した¹³⁷。しかし実際に歌詞にかかわった人物は、東京大神学院の幹事を務め、英語の教師としても神学院にかかわった小倉慮人（おぐらまきと、1889～1965）である。小倉は 1914 年立教大学神学部の第 1 期生として卒業後、神戸、長野を経て新潟で聖公会の牧師をしていた。そのころ、新潟地方の教区長をしていたチェスカ師（Anton Ceska, 1877～1951）と親交を深め、新潟カトリック教会に通ってはカトリックの要理を研究、ミサに与り、やがて周囲の反対を押し切ってカトリックの洗礼を受けていた。『昭和日本の恩人—S.カンドウ師』の中で、小倉が語ったこととして、以下のような記述がある。

のち戸塚神父様とともに『公教会聖歌集』の編纂を委託されましたが、途中で戸塚神父様がおやめになったので、けっきょくわたしひとりでみんな歌詞をつくることになり、著作権も版權もすべて光明社に譲りました。¹³⁸

¹³³ 【付録 3】参照。

¹³⁴ 仁多見巖『北海道とカトリック〈戦前編〉』、札幌：「北海道とカトリック」出版委員会、1983 年、396 頁。

¹³⁵ なお、この「フランス系」「ドイツ系」の区別は、主にフランス系聖歌を含む聖歌集と主にドイツ系聖歌を含む聖歌集であることを意味する。『日本聖詠』にもドイツ由来の聖歌が含まれていたり、『公教聖歌集』にフランス聖歌が含まれていたり、さらに両聖歌集に共通する聖歌もいくつかみられる。

¹³⁶ 「新しい聖歌集に就いて」、『日本カトリック新聞』1932 年 9 月 4 日（360 号）4 頁。

¹³⁷ 武内昶篤「戸塚文卿」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002 年、第 3 巻、1322～1323 頁。

¹³⁸ 池田敏雄『昭和日本の恩人—S.カンドウ師—』東京：中央出版社、1966 年、90 頁。なお、この引用箇所にある『公教会聖歌集』は小倉の生年月日や来歴から『公教聖歌集』（1933）と判断するのが妥当である。

『公教聖歌集』には、『公教會聖歌集』（第 5 版、1930）に由来するもの、『日本聖詠』、『天主公教会』（1910）『公教聖歌』（1911）に由来するもの、そして新たに加えられた聖歌があるが、旧聖歌集から引き継がれた聖歌に関して、旋律、調的な変更よりもむしろ、テキストの変更が際立っている。旧聖歌集から引き継がれたいずれの聖歌に関して、テキストにおいて大幅な改訂が極めて多く、改訂というよりは新たな作詞が行われたと言う方がふさわしいだろう。

『公教聖歌集』（1933）の出版後には、七度にわたって小倉によるテキスト解説『評釈』が『日本カトリック新聞』に連載されている¹³⁹。また、『公教聖歌集』（1933 年）の末尾には、「歌詞小註」という項目のもと、テキストの語句説明が書き留められている。そこには、歌詞字典がこれから発売予定である旨も注記されているが、この事典の存在についてはこれまでの資料調査では確かめられていない。一方で、1938 年に出版された『公教聖歌集』第 4 版の巻末には、歌詞字典の発売予定の記載がないだけでなく、1933 年版の注釈の中に幾度か含まれていた「歌詞字典をみよ」の記載が消えており、実際に『歌詞字典』が出版されたかは、極めて疑わしいと言えるだろう。

資料状況に鑑みると『公教聖歌集』の出版に当たって行われた作詞の工程に関する調査は、難しい。一方、日本の聖歌集の中で歌い継がれてきたこれらの外国由来の聖歌のテキストの変遷は重要であり、第 4 章で、各聖歌の歌詞に関する分析と考察を行う。

3.3 『公教聖歌集』に収録される聖歌

『公教聖歌集』の初版は、全 228 曲を収録し、そのうち 212 曲が日本語聖歌、16 曲がラテン語聖歌である。5 線譜で書かれ、日本人作曲家による聖歌《なべての民よゑをあげよ》（山本直忠）を含む。

まず、ミサ聖祭の聖歌（1 から 17）が掲載される。これらのミサ聖歌は、3 つのミサ・チクルス（ミサ聖祭（一）として 7 曲、ミサ聖祭（二）として 5 曲、ミサ聖祭（三）として 5 曲）を形成する。読誦ミサの際に、ミサの進行に従ってこれらのミサ聖歌は歌われた。ただし、これらのミサ曲に共通の翻訳が当てられているわけではなく、典礼内における同じ用途の聖歌であっても異なるテキストがつけられている。

その後、教会暦に従って、以下の通り、聖歌が続く。

待降節（18 から 22）、降誕節（23 から 41）、聖名（42 から 43）、三王來朝（44 から 46）、悔悛（47 から 50）、御苦難（51 から 56）、十字架（57 から 59）、悲みの聖母（60 から 62）、枝の主日（63）、御復活（64 から 72）、御昇天（73 から 74）、聖霊（75 から 81）、三位一體（82）、聖體（83 から 94）、聖心（95 から 107）

¹³⁹ 1933 年 12 月 17 日、12 月 31 日、1934 年 1 月 14 日、1 月 28 日、2 月 25 日、3 月 18 日、3 月 25 日。

次いで、キリスト、聖母マリア、天使や聖人への賛美の聖歌が続く。

主に對する賛美（108 から 118）、キリストに對する賛美（118 から 128）、聖母（129 から 172）、天使（173 から 177）、聖人（178 から 193）

さらに、特定の典礼のための聖歌やその他の聖歌が続く。

死者（194 から 195）、葬禮（196 から 199）、天國（200 から 201）、雜（202 から 212）

ラテン語聖歌も、最後に掲載されている。これらは、歌ミサの際に歌われていた。

ラテン語聖歌（213 から 228）

3.3.1 『公教會聖歌集』と『日本聖詠』からの影響

『公教聖歌集』は、前述の通り、『公教會聖歌集』、『日本聖詠』をはじめ、その他『天主公教会』（1910）、『公教聖歌』（1911）などから聖歌を引き継ぐことで編纂された。『公教聖歌集』の構成聖歌一覧と各曲が由来する日本の聖歌集を一覧化したものを【付録 3】に掲載する。

『公教聖歌集』に対する『公教會聖歌集』と『日本聖詠』からの影響に関して、以下の点を指摘する。

- ① 2つの聖歌集の中でも、特に『公教會聖歌集』（第5版、1930）からの影響が明らかに大きい。『公教會聖歌集』の聖歌のうち、『公教聖歌集』（1933）に引き継がれなかった聖歌は8曲（3,5,17,20,37,49,53,95）に留まる。それらの中でも聖歌17と聖歌37は、1948年の増補改訂版には再び取り入れられている。
- ② 『公教聖歌集』に含まれる3つのミサ聖歌チクルスは、『公教會聖歌集』、『日本聖詠』から一つずつ、さらに新たに加えられたドイツ系の聖歌による1チクルスで構成されている。
- ③ 各教会暦の季節のための聖歌は、基本的にフランス系、ドイツ系の聖歌の双方が含まれるが、全体的な傾向としては、『公教會聖歌集』から引き継がれる聖歌が多い。ただし、聖体の祝日に関する聖歌のほとんどは『公教會聖歌集』から引き継がれるドイツ系の聖歌であり、聖心の祝日に関する聖歌はフランス系の聖歌が多くを占める。
- ④ 聖母賛歌は、フランス系の聖歌が圧倒的に多い。

3.3.2 新たに含まれた聖歌

『公教聖歌集』には、新たに日本のカトリック教会の聖歌レパートリーに含まれるようになった聖歌もあり、それらは 60 に上る¹⁴⁰。新たに含まれるようになった聖歌には、『公教聖歌集』の編纂においてモデルとなっていた『フルダ 1891』や『ケルン 1908』の聖歌集をはじめ、ドイツ系聖歌集に由来する聖歌が含まれており、大部分は特定することができた¹⁴¹。

3.3.3 伴奏譜の出版

伴奏譜の出版に先駆けて、『日本カトリック新聞』には 1933 年 10 月 29 日 (420 号) に、「新公教聖歌集伴奏に就いて」という記事が掲載されている。この記事では、新しい聖歌集の伴奏は目下準備中であるが、その発売までにはまだ時間がかかるため、『公教聖歌集』の各聖歌に「新」、「旧」の対照表を掲載していることが記されている。「旧」聖歌に関しては、新しい『公教聖歌集』の 2/3 を占める『札幌教区用聖歌集』と『日本聖詠』との 2 種を該当聖歌番号とともに挙げている。この対照表を使用することで、伴奏譜の出版までの役に立ててほしいということが意図されている。この記事の最後には、『札幌教区用聖歌集』の伴奏譜は既に絶版であるが、『日本聖詠』に関しては、東京の関口教会、および、カトリック中央出版部において特売中である、ともある。

『公教聖歌集』(1933) のための伴奏譜『聖歌伴奏譜』は 1935 年に光明社から出版された。伴奏譜といっても、四部合唱として歌えるように和声を付けた形で聖歌が掲載されていることが特徴である。また調に関しては、極めて自由であったこともわかる。1935 年の『聖歌伴奏譜』の序文を以下に抜粋して記す。

一、本書は昭和 8 年の公教聖歌集の伴奏音譜で、一部は既に使用されてきたものを採り、一部は数名の手によって新たに編曲されたのであるから、不統一があるのもやむを得ない。が、大體において公教聖歌に相應しい莊嚴味を帯びるやう意を注ぎ、輕薄に流れることは務めて避けた。

二、伴奏音譜は普通の書き方にせず、大部分は四部合唱としても歌ひ得るようにした。

三、聖歌集には一般信徒に歌ひ易からしめるため、嬰音、変音の記載を少なくした曲が多少あるが、本書には夫等を総べて、適当な高さに直しておいた。しかし、場合によっては自由に移調させても何等差し支えないのである。

(中略)

¹⁴⁰ 初版 (8, 9, 10, 12, 17, 19, 30, 35, 36, 37, 38, 46, 55, 56, 59, 63, 69, 70, 85, 88, 89, 94, 96, 98, 100, 102, 103, 109 (山本), 111, 116, 119, 122, 123, 125, 126, 128, 132, 135, 136, 139, 140, 143, 144, 145, 146, 154, 159, 163, 164, 165, 179, 182, 188, 191, 194, 195, 198, 203, 205, 207)

¹⁴¹ 『公教聖歌集』の原曲等に関しては、【付録 3】を参照。

六、殊に日曜日の「讀誦ミサ」の場合には、一番から七番のミサ聖祭の歌のみでなく、聖體の部にあるもの、或は祝日、季節に応じての他の歌をも適宜用ゐられたい。

142

3.4 統一聖歌集としての日本全体における初期受容

本項目では、この聖歌集が編纂されていた時代のカトリック教会の聖歌への認識、出版当時の『公教聖歌集』の受容に関して、同時代の新聞記事、雑誌から調査した結果を記述する。その中で、日本語聖歌への要求、さらに地域ごとに大きく異なっていた聖歌集の統一へ向けたカトリック教会全体の機運を読み取ることができる。

3.4.1 1930年代の日本のカトリック教会における会衆歌

『公教聖歌集』の出版直後は、日本における聖歌の普及が望まれた時代でもあった。『日本カトリック新聞』には、1935年8月11日と1936年1月26日に、連載で『我等の精神運動』という記事が掲載されている。その副題は、それぞれ「日本聖歌の普及に努めよ」、「聖歌の進歩」である。前者の記事は、ノル師の談話をまとめたものであり、後者に関しては筆者の明記はないが、連載であることを踏まえると、おそらくノル師によるものであると考えられる。

これらの記事の中で、ノル師は日本語聖歌の強化の必要性を訴え、そのための一つの有効な手段として『公教聖歌集』を挙げている。

我等カトリック教徒間にひろく用ひられてゐるのは、グレゴリアンの典禮的な聖歌である。然し、カトリック精神をより強めるために、また信者の生活にもつと吸引するためには、ぜひとも邦語の聖歌が必要である。又實際に何處の國に於ても、その國語の聖歌が用ひられてゐるのである。¹⁴³

大衆が個々からその邦語民衆唱歌を歌ふことによつて恐らく彼等は一層強くその祝日の気分を味ふことが出来る。

この意味で我々は絶えず一般的聖歌運動を奨励するばかりでなく、特に邦語民衆唱歌の使用を益々励ましたい。¹⁴⁴

¹⁴² ミバク『聖歌伴奏譜』札幌：光明社、1935年。

¹⁴³ 「我等の聖心運動——日本聖歌の普及に努めよ」、『日本カトリック新聞』1935年8月11日（530号）、2頁。

¹⁴⁴ 「我等の聖心運動——聖歌の進歩」、『日本カトリック新聞』1936年1月26日（537号）、4頁。

この背景には、カトリック教会の典礼がラテン語であるが故に、宣教が思うように進んでいなかったという実態がある。このことについても、以下の記述がある。

未信者中、殊に始めての聖堂を訪れてラテン語の聖歌を耳にした人の中には「どうもあなた方の英国（強調の点がついている）の歌は少しもわかりませんね」などと云うものがよくある。¹⁴⁵

また、日本カトリック出版物委員会によって 1937 年に出版された『共通規程 *Directorium commune*』の第 249 項において、『公教聖歌集』が言及されている。

すべての宣教師は教会における歌、すなわち司式者の歌も各国語の歌について、配慮すべきである。出来る限りすべての信者に、それらを教えるべきである。典礼聖歌[すなわちグレゴリオ聖歌の歌ミサ]を歌うことができない読唱ミサにおいては、各国語の聖歌が伴われることが望ましい。上述の規程に一致して従い、さらに信者の状態に適応させるためには、教区において認可された聖歌集があることが望まれる。(公教聖歌集)¹⁴⁶

上記の引用からも明らかである通り、1930 年代の日本のカトリック教会において、日本語による会衆歌が強く求められていた。『公教聖歌集』は、仮の物であったとはいえ、こうした要求にひとまず十分に応えるものであったと言えるだろう。そして、1940 年（昭和 15 年）までに 5 版を重ねながら、戦前、戦中を通して、日本のカトリック教会における統一聖歌集として極めて大きな役割を果たした。

3.4.2 『公教聖歌集』の広告に関する調査

『公教聖歌集』（1933）に関する教会内での受容は、『日本カトリック新聞』にたびたび掲載されている『公教聖歌集』（1933）に関する広告によりよく表されている。ここで、以下にその内容と掲載時期をまとめる。（「／」は広告内の改行を示す。）

➤ 初版の発売について

1933 年 11 月 19 日（423 号）4 頁

¹⁴⁵ 「我等の聖心運動——日本聖歌の普及に努めよ」、『日本カトリック新聞』1935 年 8 月 11 日（530 号）、2 頁。

¹⁴⁶ 土井辰雄編『共通規程 *Directorium commune*』東京：日本カトリック出版物委員会、1937 年、71 頁。

待望の書愈出づ！／公教聖歌集／いでやうるはしき曲を奏で／
 従来我が日本カトリック界にあつては各教区思ひ思ひに聖歌を選んでは用いて居て。
 而して、一方、聖歌の全国的統制の聲は餘程以前から聞かれ、往年の司教會議にて
 これらが議題となり、カトリック教聖歌集編纂が議決せられ数名の委員が挙げられ
 て編纂に着手したのであつたが種々重なる事情上、中途にして時期尚早たるを認め
 よつて全教区今日中の公的聖歌集編纂までの準備工作として編まれたのが本書であ
 る。

うましき歌をし謳はん

札幌市北十一条東二丁目／光明社／（振替小樽四六六四番）

東京市麴町區下六番町三八／カトリック中央出版部／（振替東京八壹五五八番）

【図8】1933年11月19日（423号）4頁に掲載される『公教聖歌集』の広告

同一の広告は11月中に再び掲載される。

➤ 初版の売り切れについて

1933年12月17日（427号）4頁

公教聖歌集／賣切／初版忽ち賣切となりました／再版は来年三月頃の豫定

札幌市北十一条東二丁目／光明社／（振替小樽四六六四番）

東京市麴町區下六番町三八／カトリック中央出版部／（振替東京八壹五五八番）

同様の売り切れの報告・広告は、さらに 1933 年 12 月 24 日 (428 号) 2 頁、12 月 31 日 (429 号) 4 頁、1934 年 1 月 28 日 (433 号) 1 頁、2 月 4 日 (434 号) 1 頁、2 月 18 日 (436 号) 3 頁、2 月 25 日 (435 号) 3 頁、にも掲載されている。

➤ クロス版の限定発売について

1934 年 3 月 4 日 (438 号) 2 頁には、追加での初版のクロス版での販売情報が掲載されている。

光明社編／公教聖歌集

品切の處、革装幀 及びクロス装幀各壹百冊を入手するを得ました。

左記定價にて御需に應じます。(後略)

同様のこの広告は 3 月 11 日 (439 号) 1 頁、18 日 (440 号) 1 頁にも掲載されている。

➤ 再版 (第 2 版) の発売について

再版に関する最初の広告は、1934 年 4 月 29 日 (446 号) 2 頁に掲載される。

光明社編／公教聖歌集／再版出来！

クロス装幀 金六拾錢 (送料金六錢)

カトリック中央出版部

さらに、5 月 13 日 (448 号) 1 頁にも、同様の広告がある。5 月 20 日以降、たびたび掲載された広告には、「おしらせ」が含まれ、より詳細に第 2 版について説明されている。

公教聖歌集・光明社編・再版

日出づる國の津々浦々までも聖歌のうましき調を漂はしめよ！

皆さま御待望の「公教聖歌集」の再版が出来ました。品切とならぬ中、どうぞ御注文の程を！

公教聖歌集に就いておしらせ

再版の公教聖歌集には、御希望に依り、附録として六種の聖歌を新に加へました。

この附録 (十二ページ) は別に多数印刷しましたから初版御所持の御方には無代で差し上げます (送料別)。個人宛にも御送附しますが、出来得る限り、教會なり、學校なりで部数を取纏め、光明社までお知らせください。

公共聖歌伴奏讀本の作成には既に着手されてありますが、種々の事情のため、尚数ヶ

月を要します。どうぞ暫くお待ちください。

都も鄙もおしなべて聖歌のくしき律もて清くも香らしめよ！

(後略)

この広告は、11回(1934年5月20日(449号)4頁、5月27日(450号)4頁、6月3日(451号)3頁、6月24日(454号)4頁、8月5日(460号)2頁、8月19日(462号)4頁、9月2日(464号)4頁、10月14日(470号)4頁、11月25日(476号)1頁、12月23日(480号)3頁、12月30日(481号)3頁)に亘り、掲載されている。

➤ 第3版の発売について

第3版に関する初めての広告は1936年5月24日(553号)1頁に掲載され、7月19日(561号)4頁、8月9日(564号)4頁、1937年2月7日(590号)4頁、8月1日(615号)3頁、と続く。

➤ 初版から3年を記念する広告と伴奏譜の発売

1937年8月29日(619号)1頁には、発行3周年を記念する広告が掲載される。

公教聖歌集／発行3周年記念特賣

来る九月三十日までの御注文に限り左の聖歌集は伴奏譜を多少に拘はらず定價の二割引で特賣致します。但送料は買費を申受けます。

普通クロス製 定價四十五錢

上等クロス製 定價六十錢

革製 定價八十錢

公教聖歌集の姉妹書／聖歌伴奏譜

本書は單にオルガン伴奏並びに練習用としてのみならず、四部コーラスにも用ゐられる。

クロス製 定價 二圓三十錢

背角革製 二圓七十錢

鄭税 十四錢

発行販賣所 札幌市北十一条東二丁目／光明社／振替小樽四六六四番

取次販賣所 東京市麴町區下六番町三八／カトリック中央書院／振替東京八壹五五八番

同一の広告はさらに、9月5日(620号)1頁、9月12日(621号)2頁、9月26日(623号)1頁にも掲載される。これら広告の特徴は、第3版の『公教聖歌集』を宣伝するとともに、「姉妹書」として『聖歌伴奏譜』の販売情報も記載があることである。また、広告にもある通り、この伴奏譜は、あくまでオルガンやその他鍵盤楽器での伴奏のためだけではなく、聖歌を四声合唱で歌う場合の和声が付随されていることが明確になっていることも重要である。

➤ 第4版以降の発売について

第4版、5版、についての広告の掲載はなく、1940年代には、聖歌集に関する広告はグレゴリオ聖歌等が含まれる『公教葬礼歌』、『公教典礼聖歌集』のものに取って代わられている。

これらの広告の頻度や内容からは、『公教聖歌集』の出版当初の聖歌集に対する期待感、そして極めて好意的な初期受容を見ることができるといえるだろう。一方で、1940年代以降、その数は急激に削減され、カトリック教会内でのグレゴリオ聖歌への傾倒の流れを反映しているといえるだろう。1948年に出版された『公教聖歌集』の増補改訂版はもはや、『日本カトリック新聞』において宣伝されることはなかった。

3.5 増補改訂版の出版と現行『カトリック聖歌集』の出版

1933年の『公教聖歌集』は1934年に第2版、1936年に第3版、1938年に第4版、1940年に第5版と版を重ね、1948年に大規模な改訂を行った増補改訂版初版が出版された。『日本カトリック新聞』1943年8月15日(930号)の第1面に、「教團公認聖歌集を編纂 教學部聖歌改訂に着手」の記事があり、8月8日15時から志村辰弥教区部長、本田忠雄師、長江邦四郎氏、およびカトリック音楽會代表として公教聖歌改訂委員を任命された西田佐市師が神田教会において第1回の会合を行い、『公教聖歌集』の改訂に関して審議し、その後6時から土井教区統括者、野田時助東京公教神学校長も出席して夕食を共にし、土井大司教より教學部の事業、今後の方針等に関する説明があつて懇談を重ねた。そして、以下の方針を持って、改訂を行うことを決めた。

- ① 語句について 先年改訂した『公教祈祷文』に則り、誤解を招きやすい語句は全面削除
- ② 一般に理解しがたい古語はわかり易い言葉に改める
- ③ 従来の物は歌詞に無理があるため、歌唱に適さないのは改めて歌唱し易いようにする
- ④ 歌の種目について 従来の種目につき統一を妨げる所を改め、あらゆる種目につき良きものを選別し、各種目に適当に配分する

⑤ **歌の内容に就いて** 純日本的感情を表現するもの、児童向けのものが少ない点を改め、出来るだけこれ等のものを収録する¹⁴⁷

長江氏はこれらの方針について、

今までまちまちに歌はれてきた聖歌が統一され、教團全体で使用するものが編纂されることは誠に結構だと思ひます。従来の聖歌は外国語を譯したものが多く、またよい曲があつてこれに歌詞を合わせて作ったといふのが少くないので、語句の使用に無理があり、従つてなめらかさを缺いてゐるものが可成りあるやうに思はれます。こんどはこの處を注意して出来るだけ歌ひ易いやうにすると共に日本的な新しいものも入れて日本天主教聖歌集の名にはづかしくないやうなものを作り上げたいと思つて居ます。¹⁴⁸

と同記事の中で、述べている。

こうして 1948 年に出版された増補改訂版は、多少の変更を加えて、現在の最新版ともいえる 1966 年の『カトリック聖歌集』となった。この 1966 年の『カトリック聖歌集』の編纂に関しては、ヘンゼラーによって詳細にまとめられている¹⁴⁹。以下にその概要を記す。『公教聖歌集—増補改訂版』(1948)は戦後のカトリック教会に広く浸透していたが、外国語の聖歌の直訳であったり、わかりにくい文語調であったり、音楽的にはフレーズとテキストが合致しない箇所が多くあったりしたため、改訂の必要性が取り上げられるようになり、1956 年 4 月 10 日から 13 日にかけて、東京で全国教区長会議が開催され、その最終日に、改訂作業の着手が決定、「聖歌集改訂委員会」が発足した¹⁵⁰。

使用頻度の低い聖歌が削除され、新たに日本語による新作の聖歌や他の聖歌集からの聖歌が 57 曲収録された。ヘンゼラーは、57 曲のうち、21 曲が既存の外国聖歌、残りの 36 曲が、新に作曲されたたろう聖歌であると記している¹⁵¹。

3.6 日本のカトリック聖歌集の歴史における『公教聖歌集』の位置づけ

『公教聖歌集』(1933)は、試験的であったとしても、初めて日本のカトリック教会が

¹⁴⁷ 「教團公認聖歌集を編纂—教學部聖歌改訂に着手」『カトリック聖歌集』930号、1943年8月15日、1頁、をもとに、現代語に改めてまとめた。

¹⁴⁸ 「教團公認聖歌集を編纂—教學部聖歌改訂に着手」『カトリック聖歌集』930号、1943年8月15日、1頁。

¹⁴⁹ ヘンゼラー、安足磨由美「『カトリック聖歌集』(1966)と日本人の作曲による聖歌」、『礼拝音楽研究』2002年、57～79頁。

¹⁵⁰ H.ノル「聖歌集問題」『光明：週刊公教新聞』1158号、1956年、1頁。

¹⁵¹ ヘンゼラー、安足磨由美「『カトリック聖歌集』(1966)と日本人の作曲による聖歌」、『礼拝音楽研究』2002年、62頁。

教区を超えた公式の聖歌集として出版した聖歌集であり、日本において会衆の礼拝内での聖歌の歌唱を促進した重要な聖歌集であることに違いない。その編纂過程や構成聖歌からも明らかである通り、フランシスコ会のドイツ系聖歌集（『公教會聖歌集』）と、フランス系の聖歌を多く含むパリ外国宣教会が使用していた聖歌集（『日本聖詠』など）をバランスよく取り入れている。旧聖歌集から引き継がれている聖歌であっても、ほとんどはそのテキストが大幅に改訂されており、より時代に即した聖歌を目指したことが見て取れる。聖歌集の出版当時、次第に増大していた日本語聖歌の需要、そして地域差への懸念に応える形で編纂されたこともあり、たびたびその存在が「試験的」、「予備的」と記されている一方で、カトリック教会にとって大きな期待感を持って受け入れられたことは明らかである。

また聖歌集の構成、オルガン伴奏譜の書き方そのものについても、後に続く聖歌集の規範を規定した点が重要である。『公教會聖歌集』は数字の楽譜であり、その点が旧式だと、非難されていた。また、『日本聖詠』などの聖歌集では、テキストはローマ字で記されていた。曲順は、ミサのための聖歌を先に配置し、続いて一般聖歌を教会暦に従って順に並べ、その後に聖人への賛歌、最後にラテン語の聖歌（グレゴリオ聖歌）を並べるのは、『公教聖歌集』（1933）において初めて採用され、この方針は、現在の『カトリック聖歌集』まで引き継がれている。

この聖歌集に関する研究はこれまでほとんど行われてきていなかったが、『公教聖歌集』（1933）を詳細に研究することで、現在の『カトリック聖歌集』への布石を正しく理解することができるだろう。

【表 1】第 3 章に関連する『日本カトリック新聞』記事一覧

年代	日付	号	ページ	タイトル	著者
1932 (325号～376号)	9月4日	360	4	新しい聖歌集に就いて	
1933 (377号～429号)	10月1日	416	4	近く発行される新しい聖歌集に就いて	
	10月29日	420	4	新公教聖歌集伴奏に就いて	編集委員の一人
	11月19日	423	1	公教聖歌集 [広告]	
	11月26日	424	1	公教聖歌集 [広告]	
	12月17日	427	1	公教聖歌集 売り切れ [広告]	
	12月17日	427	4	新聖歌集評釈 (一)	小倉虜人
	12月24日	428	2	公教聖歌集 売り切れ [広告]	
	12月31日	429	4	新聖歌集評釈 (二)	小倉虜人
	12月31日	429	4	公教聖歌集 売り切れ [広告]	
1934 (430号～481号)	1月14日	431	4	新聖歌集評釈 (三)	小倉虜人
	1月28日	433	1	公教聖歌集 売り切れ [広告]	
	1月28日	433	4	新聖歌集評釈 (四)	小倉虜人
	2月4日	434	1	公教聖歌集 売り切れ [広告]	
	2月18日	436	3	公教聖歌集 売り切れ [広告]	
	2月25日	435	3	公教聖歌集 売り切れ [広告]	
	2月25日	437	4	新聖歌集評釈 (五)	小倉虜人
	3月4日	438	2	公教聖歌集 クロス [広告]	
	3月11日	439	1	公教聖歌集 クロス [広告]	
	3月18日	440	1	公教聖歌集 クロス [広告]	
	3月18日	440	4	新聖歌集評釈 (六)	小倉虜人
	3月25日	441	4	新聖歌集評釈 (七)	小倉虜人
	4月29日	446	2	公教聖歌集 再販出来! [広告]	
	5月13日	448	1	公教聖歌集 再販出来! [広告]	
	5月20日	449	4	公教聖歌集 [広告]	
	5月27日	450	4	公教聖歌集 [広告]	
	6月3日	451	3	公教聖歌集 [広告]	
	6月20日	454	4	公教聖歌集 [広告]	
	8月5日	460	2	公教聖歌集 [広告]	
	8月19日	462	4	公教聖歌集 [広告]	
	9月2日	464	4	公教聖歌集 [広告]	
	10月14日	470	4	公教聖歌集 [広告]	
	11月25日	476	1	公教聖歌集 [広告]	
	12月23日	480	3	公教聖歌集 [広告]	
	12月30日	481	3	公教聖歌集 [広告]	

年代	日付	号	ページ	タイトル	著者
1935 (482号～533号)	8月11日	513	2	日本聖歌の普及に努めよ	ウゴリン・ノル談
1936 (534号～584号)	1月26日	537	4	聖歌の進歩	
	5月24日	553	1	公教聖歌集 第3版 [広告]	
	7月19日	561	4	公教聖歌集 第3版 [広告]	
	8月9日	564	4	公教聖歌集 第3版 [広告]	
1937 (585号～636号)	2月7日	590	4	公教聖歌集 [広告]	
	8月1日	615	3	公教聖歌集 第3版 [広告]	
	8月29日	619	1	公教聖歌集発行3周年記念特売[広告]	
	8月29日	619	1	公教聖歌集の姉妹書 聖歌伴奏譜[広告]	
	9月5日	620	1	公教聖歌集発行3周年記念特売[広告]	
	9月5日	620	1	公教聖歌集の姉妹書 聖歌伴奏譜[広告]	
	9月12日	621	2	公教聖歌集発行3周年記念特売[広告]	
	9月12日	621	2	公教聖歌集の姉妹書 聖歌伴奏譜[広告]	
	9月26日	623	1	公教聖歌集発行3周年記念特売[広告]	
	9月26日	623	1	公教聖歌集の姉妹書 聖歌伴奏譜[広告]	
1938 (637号～688号)					
1939 (689号～740号)					
1940 (741号～791号)	12月15日	789	4	公教葬礼歌 [広告]	
	12月22日	790	1	公教葬礼歌 [広告]	
	12月29日	791	1	公教葬礼歌 [広告]	
1941 (792号～841号)	1月26日	794	1	公教葬礼歌 [広告]	
	6月29日	816	1	公教葬礼歌 第3版 [広告]	
	7月6日	817	1	公教葬礼歌 第3版 [広告]	
	11月16日	835	2	公教葬礼歌 [広告]	
1942 (842号～891号)	3月21日	852	1	グレゴリオ聖歌の歌ひ方 (テ・ラローシュ原著) [広告]	
	7月13日	868	1	グレゴリオ聖歌の歌ひ方 (テ・ラローシュ原著) [広告]	
	11月8日	884	2	グレゴリオ聖歌の歌方を読みて	野村良雄
	11月29日	887	1	グレゴリオ聖歌の歌ひ方 (テ・ラローシュ原著) [広告]	
	11月29日	887	1	グレゴリオ聖歌教本-第2編-[広告]	
1943 (892号～939号)	8月15日	930	1	教団公認聖歌集を編纂 教学部聖歌改訂に着手	
	9月19日	937	1	公教典礼聖歌集 [広告]	
1944 (940号～965号)	7月16日	954	1	グレゴリオ聖歌の歌ひ方 (テ・ラローシュ原著) [広告]	
	7月31日	956	1	グレゴリオ聖歌の歌ひ方 (テ・ラローシュ原著) [広告]	

第4章 『公教聖歌集』におけるドイツ系聖歌

4.1 『公教聖歌集』に含まれるドイツ系聖歌と日本語「訳詩」の変遷の比較

この章では、第2章、第3章で示した『公教會聖歌集』と『公教聖歌集』の原曲特定を前提に、『公教聖歌集』に収録されるドイツ系聖歌に関して、そのテキストに関する分析と考察を行う。本論文では、ドイツ語会衆歌の日本における受容を論じるため、特に「ドイツ系聖歌」に限定する。ここで「ドイツ系聖歌」とするのは、『公教會聖歌集』を経て『公教聖歌集』に含まれることになった聖歌、さらに『公教聖歌集』の編纂において新たに含まれるようになった聖歌の中で、原曲をドイツ語聖歌に見出すことができるものである。ただし、これらの「ドイツ系聖歌」の中には、その起源がラテン語聖歌、あるいは例外的にフランス語聖歌であるものもある。

原曲との比較を通して日本語のテキストへアプローチしている研究はこれまで行われていない。日本の聖歌集に含まれている「日本語翻訳聖歌」とその由来となった聖歌のテキストの比較、そうしたテキストから見出すことのできる聖歌における、教化的な意義を検証する。

以下の事柄を前提に本章では各聖歌に関するテキストの分析を行う。

- ① 曲名は、各日本語、ドイツ語の冒頭テキストとする。
- ② 各節の曲名に付随している番号は、『公教聖歌集』（1933）に対応している。
- ③ 各ドイツ語テキストは、第2章に記した通り『公教會聖歌集』の編纂に当たって直接的な影響を与えたと考えられる『フルダ 1891』と『ケルン 1908』を利用した。日本への直接の移入元を特定できない聖歌に関しては、原曲のテキストをボイムカー（Wilhelm Bäumker, 1842～1905）の文献（Wilhelm Bäumker, *Das katholische deutsche Kirchenlied in seinen Singweisen*, Freiburg, 1883-1911, reprint. Hildesheim, 1962.）第1～4巻を中心に参照した。
- ④ 各ドイツ語聖歌について掲載される訳は筆者によるものである。その際、補った言葉に関しては、[]内で示している。なお、分析の過程で引用される聖書は、『新共同訳版』（1987）とする。
- ⑤ 原語表記は参照している聖歌集の表記をそのまま引用している。独文においては不自然な綴りが随所にある他、和文においては旧字体が頻繁に用いられている。なお、一部読みにくい旧字体には、（ ）内にふりがなを記した。
- ⑥ 【付録4】には本研究を行う上で用いた聖歌集、『公教聖歌集』（1933）、『公教會聖歌集』（第5版、1930）、『フルダ 1891』（印刷：1906）/『ケルン 1908』（印刷：1912頃）の譜例を一覧化して掲載している。

4.1.1 ミサ聖歌（付録4：1～12頁）

ミサ聖歌とは、ミサの最中に、典礼次第に沿って会衆が歌う歌で、啓蒙期において新たに生まれたジャンルである「ミサ聖歌 Singmesse」に分類される聖歌である。

『公教會聖歌集』では、88番から96番の聖歌による一つのミサ・チクルス、『公教聖歌集』では、1番から17番までの聖歌による3つのミサ・チクルスがミサ聖歌として掲載されている。『公教聖歌集』の3チクルスの内訳は、『公教會聖歌集』から引き継がれたもの、『日本聖詠』から引き継がれたもの、新に『公教聖歌集』に編入されたものである。このように、チクルスでミサ聖祭を掲載することは、現在まで受け継がれる慣習である。

『公教聖歌集』に含まれるミサ聖歌のうち、ドイツ系の聖歌では、『ランツフト 1777』に起源を持つ聖歌の他、19世紀においてフルダで作られた聖歌が含まれている。ドイツの聖歌集にも複数のミサ・チクルスが含まれており、特に、『フルダ 1891』には聖体拝領前後の聖歌が多く掲載されていることも特徴的である。なお『フルダ 1891』、『ケルン 1908』を始めドイツの聖歌集ではこれらの聖歌は「Messgesang（ミサ聖歌）」の項目に含まれる。

4.1.1.1 第1ミサ・チクルス

第1ミサ・チクルスに含まれる7曲のミサ聖歌は『公教會聖歌集』から引き継がれており、『フルダ 1891』における第2ミサ・チクルスと完全に一致している。『フルダ 1891』のドイツ語テキストと日本語のテキストではある程度の相違はあるものの、礼拝上の位置づけが同じであり、テキスト内容もおおむねドイツ語に沿っている。こうしたミサ・チクルスの完全な一致もまた、『公教會聖歌集』が『フルダ 1891』を模範に編纂していることを示している。

【表2】第1ミサ・チクルス

（それぞれの聖歌集の表記に従って、曲名と典礼での位置づけを記している）

『公教聖歌集』	『公教會聖歌集』	『フルダ 1891』
ミサの始まる時 1. 三位のみかみの	ミサ聖歌 88. 三位の天主の	ミサの始まりの聖歌 Zum Eingang 180. Hier liegt vor deiner Majestät
栄光の聖歌 2. あめにみさかえ	栄光 89. 天には天主に	栄光の賛歌 Zum Gloria 181. Gott soll gepriesen werden
聖福音 3. 世にたまはりし	司祭が祭壇の左方にて 福音を読む時 90. 世にたまはりし	福音朗読 Zum Evangelium p.179 Wir sind im wahren Christentum ¹⁵²

¹⁵² 旋律は聖歌 184 番と一致する。『フルダ 1891』には、当聖歌に関して、番号の記載がない。

奉献 4. きよくたふとき	司祭パンと葡萄酒を 献ぐる時 91. きよく貴き	奉献へ Zum Opferung 182. Nimm an, o Herr, die Gaben
序誦 5. いとしもきよき	司祭が祭壇の中央に立ち 聲を揚げて序誦を読む時 92. 最しも聖き	サンクトゥスへ Zum Sanktus p.180 Heilig! Heilig! Heilig! ¹⁵³
聖變化の後 6. つみびとなる身を	聖体奉擧後 93. つみ人なるわれ等	聖變化後 Nach der Wandlung 183. Sieh, Vater von dem höchsten Throne
聖體拝領前 7. いざ我がのぞみ	聖體を領くるを望む 94. 主よわがのぞみ	聖体拝領へ Zur Kommunion p. 183 O herr ich bin nicht würdig ¹⁵⁴

1. 三位のみかみの

『公教聖歌集』の第1チクルスのうちの1曲目、〈三位のみかみの〉はミサの始まる時に歌う聖歌として指定されており、『公教會聖歌集』のミサ・チクルスの1曲目〈三位の天主の〉から引き継がれた聖歌である。

1777年にコールブレンナーが司祭で作曲家であるハウナー（Norbert Hauner, 1743～1827）とともに出版した『ランツフト 1777』は、典礼音楽をドイツ語で歌うことを推奨するものであり、その中にミサ通常文を伝統的なラテン語ではなく、ドイツ語で歌えるように一連の「ミサ聖歌 Singmesse」が含まれた。〈三位のみかみの〉の原曲は、その第1曲〈Hier liegt vor deiner Majestät〉である。コールブレンナーによるドイツ語ミサ聖歌（Deutsches Hochamt）のテキストに対しては、ミヒャエル・ハイドン（Johann Michael Haydn, 1737～1806）も作曲している。ハイドンの旋律がハウナーの旋律要素と一致する箇所が多く、『フルダ 1891』に掲載されている〈Hier liegt vor deiner Majestät〉には、作曲家あるいは出典として、クエスチョン・マークとともにミヒャエル・ハイドンの名が上がっている。

20世紀初頭のミサでは、まず第1部としてミサを始めるための準備（祭壇の準備、司祭と私共の準備、罪の告白）が行われ、続いて第2部として神の賛美と教訓が唱えられた。

この聖歌はこの第2部が始まる時（祭壇の前に司祭が立つタイミング）に歌うものである。『フルダ 1891』でも、第2ミサ・チクルスの最初の曲として、準備の祈りの後のミサの開始の聖歌として掲載されている。

『フルダ 1891』 No. 180

Hier liegt vor deiner Majestät あなたの威光の御前に、

¹⁵³ 旋律は聖歌 181 番と一致する。『フルダ 1891』には、当聖歌に関して、番号の記載なし。

¹⁵⁴ 旋律は聖歌 182 番と一致する。『フルダ 1891』には、当聖歌に関して、番号の記載なし。

im Staub die Christenschar,	塵の中でキリスト教徒はいます。
das Herz zu dir, o Gott, erhöht,	神よ、彼らは心からあなたをあおぎ、
die Augen zum Altar.	祭壇を見上げています。
Schenk uns, o Vater, deine Huld,	父よ、あなたの恵みを私たちにお与えください。
Vergib uns unsre Sündenschuld.	私たちの罪をお赦してください。
O Gott, vor deinem Angesicht	神よ、あなたの面前から、
verstoss uns arme Sündern nicht,	私たち憐れな罪びとを見放さないでください。
verstoss uns nicht,	私たちを見放さないでください。
verstoss uns Sünder nicht!	私たち罪びとを見放さないでください。

日本語聖歌では、原曲と比較すると「父よ、あなたの恵みを私たちにお与えください。Schenk uns, o Vater, deine Huld」、「私たち憐れな罪びとを見放さないでください。verstoss uns arme Sündern nicht」は訳出されないが、この聖歌のミサ聖歌としての位置づけを決定づける重要な 2 つの要素（信者が神の御前にひれふしていること、罪の赦しへの願い）は忠実に訳出されている。特に、罪の赦しへの願いは、直前に行われている「罪の告白」を前提にしたテキストである。

『公教會聖歌集』と『公教聖歌集』の違いとして重要であるのは、『公教會聖歌集』（1930）には、「ふかきみめぐみ」を奉るとある一方で、『公教聖歌集』では、「奇しき聖奠（みまつり）」を奉るとある点である。聖奠とは、サクラメント（カトリックでいうところの「秘跡」）である。一般に聖公会ではサクラメントを「聖奠」と表現しており、第 3 章でも言及している通り、『公教聖歌集』の作詞にかかわった小倉がもともと聖公会の牧師であったことが関連していると考えられる。1948 年の『公教聖歌集』増補改訂版では、漢字が「聖祭（みまつり）」に変更され、その表記と読みは現行の『カトリック聖歌集』にまで続く。

2. あめにみさかえ

『公教聖歌集』に「榮光の賛歌」として収録される〈あめにみさかえ〉は、『公教會聖歌集』の「榮光」の聖歌〈天には天主に〉から引き継がれた聖歌である。原曲は〈さんみのみかみの〉と同様に、『ランツフト 1777』の中の〈Gott soll gepriesen werden〉である。『フルダ 1891』には、第 2 チクルスの 2 曲目、〈Gott soll gepriesen werden〉として掲載されている。

『フルダ 1891』 No. 181

Gott soll gepriesen werden,	神が賛美されますように。
sein Nam' gegebenedeit	その御名が祝福されますように。
im Himmel und auf Erden,	天でも地でもほめたたえられますように。

jetzt und in Ewigkeit!	今もとこしえに！
Lob, Ruhm und Dank und Ehre	三位の神に賛美、
sei der Dreieinigkeit!	ほまれ、感謝、栄光がありますように。
Die ganze Welt vermehre,	全世界が、
Gott, deine Herrlichkeit!	神よ、あなたの栄光を、崇めますように。

栄光の賛歌（栄光頌、グローリア）は典礼式文に含まれており、司祭がラテン語の式文を唱えるのと並行して会衆によって歌われたことが考えられる。栄光頌の式文はルカ 2:14（「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」）で始まり、その後、天の父である神への賛美、子である神への賛美、聖霊への賛美、という三位一体の神の聖性への賛美が記述される。このミサ聖歌においても、同じ構成が取られている。

日本語聖歌は、ルカ 2:14 の言葉で始まる点では、ドイツ聖歌と一致しているが、三位一体の神への賛美は行われない。むしろ、「あまつ聖使の歌唱（うた）に添て 我等も御稜威崇めまつる」（『公教會聖歌集』1930）からは、ルカ 2:13（すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美していった。）を踏まえたテキストであることがわかる。『公教聖歌集』と『公教會聖歌集』はわずかな文法上の相違に留まる。

3. 世にたまはりし

『公教聖歌集』の「聖福音」の聖歌〈世にたまはりし〉は、『公教會聖歌集』の「司祭が祭壇の左方にて福音を読む時」の聖歌〈世にたまはりし〉から引き継がれたものである。旋律は『フルダ 1891』で新たに作曲されて掲載された〈Wir werfen uns darnieder〉（第 3 ミサ・チクルスの中の最初の聖歌として位置付けられている）と一致する。『フルダ 1891』の 179 頁には第 2 ミサ・チクルスの福音朗読への聖歌の旋律として、この聖歌が指定されている。（ただし、二分音符は半分に分割するようにとの指示あり。）

『フルダ 1891』 p. 179

Wir sind im wahren Christentum;	私たちは、真のキリスト教を信じています。
o Gott, wir danken dir!	神よ、あなたに感謝します。
Dein Wort, dein Evangelium,	あなたの言[ことば]とあなたの福音を、
an dieses glauben wir.	私たちは信じます。
Die Kirche, deren Haupt du bist,	あなたが頭であるところの教会の教えは、
lehrt einig, heilig, wahr.	一つであり、聖であり、真理です。
Für diese Wahrheit gibt der Christ	この真理のため、キリスト教徒は
sein Blut und Leben dar.	自らの血と命をささげます。

ドイツ語テキストでも、日本語テキストでも、キリストの福音、教えへの信仰が歌われる。『公教會聖歌集』(1930)で言及される「好きおとづれ」、「聖教訓(をしへ)」、『公教聖歌集』で言及される「御言(みこと)」は、典礼の中でその後読まれる福音を指す。

福音、あるいは教会の教えを説明する際に、ドイツ語では「一つであり、聖であり、真理 *einig, heilig, wahr*」とあり、ニケア・コンスタンチノーブル信条においても告白される教会に関する信仰宣言(わたしは、聖なる、普遍の、使徒的、唯一の教会を信じます。 *Et unam, sanctam, catholicam et apostolicam Ecclesiam.*)を踏まえた言い回しともとらえられる。一方、日本語テキストにおいては「やみ路に照るたふとき聖教訓」(『公教會聖歌集』1930)とあり、ヨハネ 1:4-5(言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。)を踏まえた表現となっている。

この聖歌は『公教會聖歌集』(1930)では、「たふとき聖教訓 をはりまでも 遵守るちからを さずけたまへ」、『公教聖歌集』では、「御言たふとみ ころおきて ちからのかぎり まもりゆかなん」で閉じられる。ドイツ語原詩の最終行を援用しているともとらえられるが、ここにむしろ福音に対する当時のカトリック教会の信仰を端的に表しているといえるだろう。

4. きよくたふとき

『公教聖歌集』の第1ミサ・チクルスの4曲目、「奉献」の聖歌として掲載される〈きよくたふとき〉は、『公教會聖歌集』に掲載される「司祭がパンと葡萄酒を献ぐる時」の聖歌〈きよく貴き〉から引き継がれた聖歌である。この原曲は、『ランツフト 1777』に由来する〈*Nimm an, o Herr, die Gaben*〉である。『フルダ 1891』には、第2ミサ・チクルスの奉納への聖歌として〈*Nimm an, o Herr, die Gaben*〉が掲載されている。

『フルダ 1891』 No. 182

1. *Nimm an, o Herr, die Gaben*
aus deines Priesters Hand;
wir, die gesündigt haben,
weih'n dir dies Liebespfand.
Für Sünder hier auf Erden,
in Aengsten, Kreuz und Not,
soll dies ein Opfer werden
von Wein und reinem Brot.

主よ、あなたの司祭の手から、
供え物を受け取ってください。
罪を犯した私たちは、
あなたにこの愛のしるしをささげます。
不安と苦難と困窮にある、
この地上の罪びとのために、
これらは葡萄酒と清いパンの
ささげものとなるものです。

2. *Nimm gnädig die Geschenke,*
dreieinig großer Gott!

偉大な三位一体の神よ、
供え物を慈悲深く受け取ってください。

Erbarm dich unser, denke
an Christi Blut und Tod.
Sein Wohlgeruch erschwinge
sich hin zu deinem Thron;

und dieses Opfer bringe
uns den verdienten Lohn.

私たちを憐れんでください。
キリストの血と死を心にとめてください。
主の生け贄のかぐわしい香りが、
あなたの玉座に向かって
登っていきますように。
そしてこの生け贄が
私たちにふさわしい報いを
もたらしてくださいますように。

この聖歌は、ミサの第3部であり1935年に光明社から出版されている『羅馬弥撒典書』においては「ミサ之本體」とも記される「ミサ奉獻の行為」で歌われる。この部分では、司祭の手を通してパンと葡萄酒が神に捧げられ、神の御体と御血になり、聖体拝領を通して、私共と一致するのである¹⁵⁵。

5. いとしもきよき

『公教聖歌集』の「序誦」として掲載される〈いとしもきよき〉は、『公教會聖歌集』の「司祭が祭壇の中央に立ち、聲を揚げて序誦を読む時」の聖歌〈最しもきよき〉から引き継がれた聖歌である。日本語の聖歌集の中でこの聖歌が割り当てられている序誦は、「奉獻の部」から「犠牲の部」への橋渡しであり、これから行われる犠牲の儀式（聖変化）がいかなる意味を持っているかを教えるものである¹⁵⁶。

この聖歌の旋律は、『フルダ 1891』の181〈Gott soll gepriesen werden〉、『公教聖歌集』の2〈あめにさかえ〉と共通している。これは『フルダ 1891』において、第2ミサ・チクルスのサンクトゥスへの聖歌〈Heilig, heilig, heilig〉としても指定されている。このテキストは、『ランツフート 1777』に由来するものであり、序誦の終わりに歌われる賛美の短い聖歌（聖誦）にあたる。

『フルダ 1891』 p. 180

Heilig, heilig, heilig
ist unser Herr und Gott!
Singt mit den Engeln:
Heilig bist du, Gott Sabaoth!
Im Himmel und auf Erden
soll deine Herrlichkeit

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。
私たちの主、そして神よ。
天使とともに歌え。
聖なるあなたは万軍の神。
天においても、地においても、
あなたの栄光が

¹⁵⁵ マッケヴォイ『写真入りミサ解説』ヤコブ・コップ、片岡毅共訳、東京：中央出版社、1956年、44頁。

¹⁵⁶ マッケヴォイ『写真入りミサ解説』、64頁。

gelobt, gepriesen werden,
jetzt und in Ewigkeit.

ほめたたえられるように。
いまもとこしえに。

『羅馬弥撒典書』(1935)の序誦の結尾は「聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉、萬軍の天主なる主、主の光榮は天地に充滿てり、最高き處までホザンナ、主の名によりて來れる者は祝せられさせ給へ、最高き處までホザンナ」¹⁵⁷とあり、ドイツ語テキスト、日本語テキスト双方において典礼文の影響を強く読み取ることができる。

6. つみびとなる身を

『公教聖歌集』の「聖變化の後」の聖歌〈つみびとなる身を〉は、『公教會聖歌集』の「聖躰奉擧後」の聖歌〈つみ人なるわれ等〉から引き継がれた聖歌である。原曲は、『ラントフット 1777』に由来する〈Sieh, Vater, von dem höchsten Throne〉である。『フルダ 1891』には、第 2 ミサ・チクルスの聖變化後の聖歌として〈Sieh, Vater, von dem höchsten Throne〉が掲載されている。

『フルダ 1891』 No. 183

Sieh, Vater, von dem höchsten Throne,
sieh gnädig her auf den Altar!
Wir bringen dir in deinem Sohne
ein wohlgefällig Opfer dar.
Wir flehn durch ihn, wir deine Kinder,
und stellen dir sein Leiden vor;
er starb aus Liebe für uns Sünder;
noch hebt er's Kreuz für uns empor.

天の玉座におられる父よ、ご覧ください。
祭壇を慈悲深く見てください。
私たちは、あなたの御子によって、
御心にかなう生け贄をささげます。
あなたの子供である私たちは、
御子を通して、懇願します。
主のご受難をあなたの御前で記念します。
御子は私たち罪びとのために、
愛によって死に、
私たちのために十字架を
高くあげられました。

結尾の「私たちのために十字架を高くあげられました noch hebt er's Kreuz für uns empor」は、キリストが人々のために十字架にかけられて犠牲になったことを示している。この箇所に対応するように、『公教會聖歌集』(1930)の冒頭テキストでは「つみ人なるわれ等 救ふためにとて 十字架に付きませる」とある。イエスが人間の救いのために苦しみを受けて十字架に掛けられて死んだという教えは『公教要理』にも記されるキリスト教の重要な教理である。

¹⁵⁷ チェーグレル『羅馬弥撒典書』、94頁。

●イエズス、キリストは人を救はんが爲に何を為し給ひしや

▲イエズス、キリストは一切の人間を救はんが爲に苦を受け十字架に釘られて死し給へり¹⁵⁸

さらに、日本語のテキストでは「主の御身と血液 御教示のまにまに 今なほ奉献げて」(『公教會聖歌集』1930)と続く。これは、「私たちは、御子によって、あなたに御心にかなう生け贄をささげます。Wir bringen dir in deinem Sohne ein wohlgefällig Opfer dar.」を踏まえた内容であるが、直前に行われた聖変化の儀式が、最後の晩餐を模したものであり、その再現であることをより具体的に強調している。

7. いざ我がのぞみ

『公教聖歌集』の「聖体拝領前」の聖歌〈いざ我がのぞみ〉は、『公教聖歌集』の「聖体を領くるを望む時」の聖歌〈主よわがのぞみ〉から引き継がれた聖歌である。

旋律は、『ランツフート 1777』に由来する〈Nimm an, o Herr, die Gaben〉に基づいている。しかし、『フルダ 1891』が示す通り、この曲は聖体拝領前の聖歌として〈O herr ich bin nicht würdig〉のテキストでも歌われていた。

『フルダ 1891』 p. 183

O Herr, ich bin nicht würdig,
zu deinem Tisch zu geh'n;
du aber mach' mich würdig,
erhör mein kindlich Fleh'n.
O stille mein Verlangen,
du Seelen=Bräutigam,
im Geist dich zu empfangen,
dich wahres Gotteslamm.

主よ、私はあなたの食卓に
行くに及びません。
しかし、私をふさわしいものにしてください。
私の無邪気な願いを聴いてください。
ああ、私の求めを満たしてください。
魂の花婿[キリスト]よ、
霊のうちに受け入れることを。
あなた、すなわち真の神の小羊を。

原曲のテキストの中心は、主の食卓を囲むにあたって、「私をふさわしいものにしてください du aber mach mich würdig」という願いであるが、これはそのまま『公教聖歌集』、『公教聖歌集』にも引き継がれている(『公教聖歌集』1930:「きみを領くる いとふさはしき 者とならしめ」、『公教聖歌集』:「身をふさはしく きよめたまひて」)これは、聖体拝領を受ける前には個々の信者の靈魂の準備が必要であるとする『公教要理』

¹⁵⁸ 天主教教會『天主教要理』 横浜：福音印刷合賣社、1896年、27頁。(第一部、第四條、耶穌基督の御受難の事)

を踏まえたものである¹⁵⁹。

4.1.1.2 第2ミサ・チクルス

【表3】第2ミサ・チクルス

(それぞれの聖歌集の表記に従って、曲名と典礼での位置づけを記している)

『公教聖歌集』	『フルダ 1891』
入祭文より福音まで 8. みいつ限りなき	準備の祈願 Vorbereitungsgebet のあと 178. Gott, dem unser Knie sich beugen
奉献より聖變化まで 9. いまはのゆふげ	奉献 Opferung のあと 197. Beim letzten Abendmahle
聖變化後 10. もろ人ひれふし	聖變化 Wandlung のあと 199. Christen, beten an im Glauben
聖體拝領前 11. わがたまのかて	
聖體拝領後 12. 受けしみめぐみの	聖體拝領後 Nach der hl. Kommunion 109. Die Seele Christi heil'ge mich

8. みいつ限りなき

『公教聖歌集』の第2ミサ・チクルスの冒頭聖歌で、「入祭文より福音まで」の聖歌といして〈みいつ限りなき〉は掲載される。この聖歌の原曲は、『フルダ 1891』の第1ミサ・チクルスに準備の祈願のあとの聖歌として掲載される〈Gott, dem unser Knie sich beugen〉であり、『フルダ 1778』に由来する。

『フルダ 1891』 No. 178

1. Gott, dem unsre Knie sich beugen,
Dank und Ehre zu erzeigen
deiner höchsten Majestät,
gnädig zeige dich uns allen,
laß dir heute wohlgefallen
unser Opfer und Gebet.

神よ、あなたへの感謝と栄光を示すために、
私たちは跪いております。
偉大な神、
私たち全員に慈しみを示してください。
今日おささげするささげものと祈りを
御心になうものとしてください。

2. Gott, vor dem die Engel stehen,

天使が御前に立つ神よ、

¹⁵⁹ 天主公教會『天主公教要理』99～101頁。(第三部、聖体の事、聖體拝領の事)

schau herab von deinen Höhen,
was vor dir der Priester tut.
Auf dein Wort wird er nun handeln;
Brot und Wein wird er verwandeln
in des Mittlers Fleisch und Blut.

天の高い所から、
司祭が御前であることをご覧ください。
[司祭は]あなたの言葉に従って行動します。
即ち、パンと葡萄酒を、
仲介者[イエス・キリスト]の
肉と血にするのです。

このドイツ語聖歌はミサを始める前の準備の聖歌であるが、その内容からは、会衆が歌うことを念頭にしていることが明らかである。一方、『公教聖歌集』のテキスト内容は大きく異なり、3節までのテキストの中でこれから行われるミサを要約する内容即ち、罪の告白（雪のごときよく あらひたまへと）、聖変化と聖体拝領（いで取り喰ひて いのちを得よと）、感謝の祈り（まことの祈りは 大御座（おほみざ）のまへに とものにのぼる）、となっている。

9. いまはのゆふげ

『公教聖歌集』の「奉献より聖変化まで」の聖歌〈いまはのゆふげ〉は、『フルダ 1891』の第6 ミサ・チクルスの中に、奉献への祈りの後に掲載される聖歌〈Beim letzten Abendmahle〉に基づいている。これは、1609年のヴェルピウス（Melchior Vulpus, 1570～1615）の旋律に、シュミット（Christoph von Schmid, 1768～1854）が1807年作詞した。

『フルダ 1891』 No. 197

1. Beim letzten Abendmahle,
die Nacht vor seinem Tod,
nahm Jesus in dem Saale,
Gott dankend, Wein und Brot.

死の前の夜の
最後の晚餐で、
イエスは食事の部屋で、
葡萄酒とパンを取り、感謝をささげた。

2. “Nehmt”, sprach er, “trinket, esset!”
Das ist mein Fleisch und Blut,
damit ihr nie vergesset,
was meine Liebe tut.”

彼は言われた。「取って、飲みなさい。
これは私の体と血、
私の愛が行うことを、
あなたがたが忘れないためのものだ。」

3. Dann ging er hin zu sterben,
aus liebevollem Sinn,
gab, Heil uns zu erwerben,
sich selbst zum Opfer hin.

それから彼は、
愛に満ちた心をもって死に赴き、
私たちに救いを与えるために、
自らをおささげになった。

4. O laßt uns ihm ein Leben,
von jeder Sünde rein,
ein Herz, ihm ganz ergeben,
zum Dankesopfer weihn!

ああ、いかなる罪からも清められた命を、
彼にささげさせよ。
主に完全にささげられた私の心を
感謝の生け贄とさせよ。

日本語テキストはドイツ語テキストに対応しており、『公教聖歌集』においても、「こは我がからだ こはちしほぞ とこはのかたみ まもり繼げ」と、イエスの言葉が引用句として記されている。これらのテキストは、どちらも典礼の奉献文の内容と合致する。以下に、『羅馬弥撒典書』（1935）に記される聖変化の部を引用する。

天主よ、願はくはこれの捧物を凡てに於いて祝詞、認め、且つ主に適しきものとして嘉納し給はんことを。蓋は、是等は主の最愛なる御獨子、我等の主イエズス・キリストの御体と御血とになり給ふべければなり。

主は其の御苦難の前日に於いて、其の聖なる尊むべき聖手にて麴を執り、聖眼を天に在ます天主なる主の全能の聖父に挙げ、祝して、劈き、之を弟子等に與へて曰はく

皆之を受け且つ食せよ、之れ我が身体なり。

又主同じく晚餐終りてこの光榮ある祭爵を、其の聖なる尊むべき聖手にて執り、同じく主に感謝して、祝して、之を弟子等に與へて曰はく

皆之を受け且つ食せよ、之れ新しき且つ永遠の新約の我が血の祭爵なり。

——信仰の玄義——罪を赦さんとて汝等と衆人の爲めに流さるる我が血なり、汝等之を行ふ毎に我が記念として之を行ふべし。¹⁶⁰

10. もろ人ひれふし

『公教聖歌集』に「聖変化後」の聖歌として、〈もろ人ひれふし〉が掲載されている。この曲の旋律は、『フルダ 1891』の第 6 ミサ・チクルス〈Brüder singt im Angeltone〉と一致する。『フルダ 1891』には、聖変化後の聖歌として 198 と同じ旋律で歌うように指示されている 199 〈Christen beten an im Glauben〉が掲載されており、この聖歌が

¹⁶⁰ チェーグレル『羅馬弥撒典書』、99～100 頁。（太字強調は、『羅馬弥撒典書』に従って行った。）

「もろ人ひれふし」の原曲であると考えられる。

『フルダ 1891』 No. 199

1. Christen, beten an im Glauben! Jesus, Heiland, Mittler, wahrhaft hier als Gott mit uns, Lob und Dank sei dir geweiht!	キリスト者よ、信仰をもって祈りましょう。 イエス、主、仲介者は、 神として私とともにおられます。 賛美と感謝をあなたにささげます。
2. Flehet zu ihm um Erbarmen! Gnade, Gnade, Gnade werd' uns Sündern durch dein Blut, das für uns am Kreuze floß!	主に憐れみを祈りましょう。 恵み、恵み、恵みが 私たち罪びとに、あなたの血を通して ありますように。 あなたが十字架で私たちのために 流して下さった血を通して。

聖変化後の聖歌ではあるが、『公教聖歌集』の〈つみびとなる身を〉やその原曲のように、具体的に祭壇上の生け贄に関して語られるわけではなく、より一般的な神への賛美と感謝、として恵みを願う内容となっている。これは、日本語聖歌を見ても同様である。

11. わがたまのかて

『公教聖歌集』の第 2 チクルスの「聖體拝領前」の聖歌〈わがたまのかて〉は、『公教會聖歌集』の第 3 版（1926）以降に初めて掲載されている〈わが君イエズス〉と同一の曲である。『フルダ 1891』、『ケルン 1908』の聖歌集をはじめ、この曲の原曲を特定することができていない。

『公教聖歌集』と『公教會聖歌集』のテキストでは多くの相違もみられ、ドイツに起源を持つ聖歌ではなく、日本オリジナルの聖歌である可能性も十分に考えられる。

12. 受けしみめぐみの

『公教聖歌集』の第 2 ミサ・チクルス、「聖體拝領後」の聖歌として〈受けしみめぐみの〉は掲載されている。同聖歌は、『フルダ 1891』に〈Die Seele Christi heilige mich〉として掲載されている。『フルダ 1891』の中では、マリア賛歌の項目に分類されているが、聖體拝領後に歌うことが注記されている。1891 年の聖歌集の各聖歌の出典が記されるところには、「新しい旋律 (Neuere Weise)」とあり、この聖歌集において初めて出版された聖歌と考えられる。

『フルダ 1891』 No. 109

<p>1. Die Seele Christi heil'ge mich, der Leichnam Christi segne mich, das Blut des Heilands tränke mich, der Seite Wasser rein'ge mich.</p>	<p>キリストの魂が私を聖なるものとし、 キリストの死体が私を祝福しますように。 救い主の血が私を飲み、 脇腹から出た水が私を清めますように。</p>
<p>2. Das Leiden Christi stärke mich; o guter Jesu, höre mich; verbirg in deine Wunden mich; nichts trenn' von deiner Liebe mich.</p>	<p>キリストの苦しみが私を強めますように。 ああ、慈しみ深いイエスよ、 私の祈りを聞いてください。 あなたの傷の中に私を隠してください。 私をあなたの愛から引き離すものが 何もないようにしてください。</p>
<p>3. Vorm bösen Feinde schütze mich; in meinem Tode rufe mich; zu dir, daß ich dort ewiglich verklärt im Himmel preise dich.</p>	<p>邪悪な敵から私を守ってください。 私が死ぬときに [あなたのもとに]私をお召ください。 そして天の国に招かれたときに、永遠に あなたを賛美することができますように。</p>

他のミサ聖歌とは異なり、「神」と「私」を直接的に結びつける内容となっており、一人称が多用される。これは、ドイツ語テキスト、日本語テキスト双方にみられる特徴である。

ドイツ語のテキストの第 1 節は、ヨハネ 19 章 34 節（しかし、兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出た。）を踏まえた内容となっている。これは、『公教聖歌集』の第 1 節「主のにくとちしほ けがしきこの身を きよめ生かしめぬ」にも引き継がれている。聖体の秘跡に与ることによって得ることのできる恵みについて歌っている。

『公教聖歌集』の第 3 節「わが主わがかみよ われをばまもりて きみをとこしへに たたへさせたまへ」は、ドイツ語の第 3 テキストと酷似している。

4.1.1.3 そのほかのミサ聖歌

『公教聖歌集』にはさらに第 3 チクルスとして、4 曲が掲載されている。それらは、『日本聖詠』（13 番、15 番）、『天主公会』（14 番、16 番）に由来する聖歌である。

最後に、小児用の聖体拝領前の聖歌（17 番）が掲載されている。この原曲は、日本の明治期の聖歌集あるいは『フルダ 1891』、『ケルン 1908』をはじめとするドイツ語聖歌集には見られない。小児用のテキストとして、非常に口語的で、他の聖歌と比べても異質で

あり、『公教會聖歌集』のオリジナル聖歌の可能性も高いと考えている。

4.1.2 典礼暦上の聖歌（付録4：13～78頁）

『公教聖歌集』では「ミサ聖歌」に続いて、また『公教會聖歌集』では「ミサ聖歌」に先行する形で、一般聖歌が典礼暦に従って並べられている。この節では、典礼暦の季節ごとに個別の聖歌を分析し、原曲との比較、聖書朗読箇所や入祭唱などの典礼固有文と聖歌の内容の比較を行う。

4.1.2.1 待降節の聖歌

待降節とは、一般に次のように説明される。

降誕の祭日（12月25日）への準備期間であるとともに、**終末における第二の到来（再臨）への待望にも心を向ける期間**。典礼暦年の1年を開始する期間で、主の降誕祭から四つ前の主日にあたる待降節第1主日の前晩の祈りから始まり、主の降誕の祭日の前晩の祈りの前まで続く。¹⁶¹

『羅馬弥撒典書』（1935）には、「準備の聖節 待降節」に関して、以下の通り、説明がある。

待降節の大意は待降節第一の主日の聖福音「このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ。」（ルカ 21:28）の聖言に現れてゐる。聖會は人祖の墮落と原罪と其の人類一般に及ぼした結果とを考へて、亦天主が人間を各々信仰と聖寵と超自然の生命とに選み給ふを信じて、我等を救ひ給ふ救主の降誕を待ち望んで居る。故に此の降誕節中に、聖會は二つの待降を行ふ。即ち約二千年前童貞女マリアより降誕し給ふ主を待ち奉つるのと、生ける人と死せる人を審かん爲めに來たり給ふ主の再臨を記念するの二つである。主は御降誕を以て始め給ふた救世の聖業を再臨を以て完ふとし給ふ。故に、聖會は待降において、貧しい厩に於て、弱き幼子として生れ給ふ主ではなく、**光榮と御稜威とを以て王なる主として顯れ給ふキリストを待ち奉つる。**¹⁶²

¹⁶¹ 宮越俊光「待降節」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002年、第3巻、942頁。
（強調は引用者による。）日本カトリック典礼委員会（編）『典礼暦年に関する一般原則および一般ローマ暦』東京：カトリック中央協議会、2004年、21～22頁。

¹⁶² チェグレル『羅馬弥撒典書』、115～116頁。強調は引用者による。

以下に、待降節中の典礼の中で用いられる聖書箇所を記す¹⁶³。

【第1主日】

入祭文：詩篇 24:1-3、書簡朗読：ローマ 13:11-14、昇階誦：詩篇 24:3,4、84:8、福音朗読：ルカ 21:25-33、奉献文詩篇 24:1-3、聖体拝領誦：詩篇 84:13

【第2主日】

入祭文：イザヤ 30:30¹⁶⁴、書簡朗読：ローマ 15:4-13、昇階誦：詩篇 49:2,3-5、福音朗読：マタイ 11:2-7、奉献文詩篇 84:7,8、聖体拝領誦：バルク 5:5, 4:36

【第3主日】

入祭文：フィリピ 4:4-6、書簡朗読：パウロ 4:4-7、昇階誦：詩篇 79:2-3,2（詩篇 80）、福音朗読：ヨハネ 1:19-28、奉献文：詩篇 84:2、聖体拝領誦：イザヤ 35:4

【第4主日】

入祭文：イザヤ 45:8、書簡朗読：コリント 14:1-5、昇階誦：詩篇 144:18,21、福音朗読：ルカ 3:1-6、奉献文：ルカ 1:28、聖体拝領誦イザヤ 7:14

『公教聖歌集』には5曲（18から22）の聖歌があり、そのうち4曲が『公教會聖歌集』に由来する聖歌である。

18. よろこびの泉

『公教聖歌集』の「待降節」の聖歌〈よろこびの泉〉は『公教會聖歌集』の〈よろこびの源〉から引き継がれた聖歌であり、原曲は、7世紀のラテン語賛歌〈Conditor alme siderum〉にさかのぼる。この聖歌は、1523年にミュンツァー（Thomas Müntzer, 1489～1525）によってドイツ語に翻訳され、ドイツ語圏で待降節の聖歌〈O Heiliger Schöpfer aller Stern〉として広く浸透した。ラテン語賛歌〈Conditor alme siderum〉の旋律は1000年頃のケンプテンにあるベネディクト会修道院の聖歌集に最初に現れ、それ以来、引き継がれているものである。

ラテン語原曲 〈Conditor alme siderum〉

Conditor alme siderum,	いつくしみ深い星の創造主
aeterna lux credentium,	信じるものの永遠の光
Christe, redemptor omnium,	万人のあがない主、キリストよ
exaudi preces supplicum	嘆くものの心からの祈りを

¹⁶³ チェーグレル『羅馬弥撒典書』、117～140頁。同時に、Pope Benedict XV, *Missale Romanum*. (Reimpressio Editions XXVIII. Vatican: Bonnæ ad Rhenum, 1920)も参照した。

¹⁶⁴ チェーグレル『羅馬弥撒典書』、122頁には、イザヤ 31:30とあるが、イザヤ 31章は9節までしかなく、*Missæ Romanæ*, p. 4にはイザヤ 30:30とあるので、30章30節の誤りだと考えられる。

聞き入れてください

ドイツ語 〈O Heiliger Schöpfer aller Stern〉 B I, No.4c

O Heiliger Schöpfer aller Stern,	すべての星の聖なる創造主よ。
Ein liecht dern so sich zu dir kehrn,	あなたに立ち返る者の光よ。
Aller Menschen heil Jesu Christ	すべての人の救い主キリストよ。
Erhör die Sünder dieser frist.	いま、罪びとの願いを聞き入れてください。

この聖歌は『フルダ 1891』、『ケルン 1908』には掲載されておらず、日本においてこの聖歌が翻訳された際のドイツ語テキストを特定することができない。原曲のテキスト内容と日本語聖歌のテキスト内容は一致せず、日本語版では、イザヤ書(9:1 闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光りが輝いた、45:7 光を造り、闇を創造し平和をもたらし、災いを創造する者。わたしが主、これらのことをするものである。)を踏まえた、救い主の誕生がもたらす喜びを預言する内容が歌われる。

19. 闇路にさまよひ

『公教聖歌集』の「待降節」の聖歌として掲載される〈闇路にさまよひ〉の原曲は、1666年シュペー(Friedrich Spee, 1591~1635)による〈O Heiland, reiß den Himmel auf〉である。『公教聖歌集』において新たに加わった聖歌であるが、『公会聖歌集』に大きな影響を与えた『フルダ 1891』、『ケルン 1908』にも掲載されている聖歌である。

『フルダ 1891』 No. 2

1. O Heiland, reiß den Himmel auf, herab, herab vom Himmel lauf; reiß ab vom Himmel Tür und Tor, reiß ab, wo Schloss und Riegel vor.	救い主よ、天を引き裂いてください。 こちらへ、天から降りてください。 天のとびらと門を取り壊し、 鍵とかんぬきで閉じられているところを 取り壊してください。
2. Gott, einen Tau vom Himmel gieß, im Tau herab, o Heiland, fließ! Ihr Wolken, brecht und regnet aus den König über Jakobs Haus!	神よ、天から露を滴らせてください。 救い主よ、露と流れ降りてきてください。 あなたは、雲を破って雨を降らし、 ヤコブの家の上に王をもたらすのです。
3. O Erd', schlag aus, schlag aus, o Erd', dass Berg und Tal erneuert werd'! O Erd', hervor dies Blümlein bring,	開け、大地よ。開け、大地よ。 山も溪谷もすべて新しくなるように。 大地よこの小さな花をもたらしてください。

o Heiland, aus der Erd' entspring. 救い主よ、大地から現れてください。

原曲のテキストは、待降節第 4 主日の入祭唱に当たるイザヤ 44 章、45 章、詩編 24 章をもとに作詞されている¹⁶⁵。『公教聖歌集』では、このテキスト内容は引き継がれない。第 1 節はイザヤ 9:1（闇の中を歩む民は、大いなる光を見 死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。）を踏まえているが、第 2 節以降は極めて自由な作詞である。それでも、第 3 節「我等の切なるいのりに み顔なそむけそ」、第 4 節、6 節の「とく降したまへ」など、待降節の大意にふさわしいテキストとなっている。

20. み恵み降らせよ

『公教聖歌集』の「待降節」の聖歌〈み恵み降らせよ〉は、『公教會聖歌集』の〈メシアを降らせよ〉から引き継がれた聖歌である。原曲は、『ランツフト 1777』に掲載されている〈Thauet, Himmel, den Gerechten〉である。なおこの聖歌のテキストの初稿は、本論の 2.1.2.1 に挙げた、イエズス会司祭デニスによって 1774 年に出版された『ウィーンの首都大司教座聖堂ステファン大聖堂と全ウィーン大司教区で使用するための聖歌集』に由来する。しかし、ここでは旋律はなく、テキストのみの形で掲載された。『ランツフト 1777』に旋律とともに掲載されるこの聖歌のテキストは、デニスのものと多少の相違がみられる。『フルダ 1891』の 3b に同曲は掲載されており、日本の翻訳聖歌の直接の原形であると考えられる。

『フルダ 1891』 No. 3b

1. "Tauet, Himmel den Gerechten; Wolken, regnet ihn herab!" rief das Volk in bangen Nächten, dem Gott die Verheißung gab, einst den Mittler selbst zu sehen und zum Himmel einzugehen; denn verschlossen war das Tor, bis ein Heiland trat hervor.	「天よ露をしたたらせよ、義人たちに。 雲よ、雨を降らせよ。」 不安な夜にあって、 神の約束を受けた民よ、叫べ。 仲介者[救い主]自身と相まみえ、 天に入る約束を。 救い主が現れるまで、 扉が閉められているからだ。
---	---

¹⁶⁵ 各節とイザヤ書の関連箇所は以下の通りである。1 番：イザヤ 45:1-3（主が油を注がれた人キュロスについて主はこう言われる。わたしは彼の右の手を固く取り国々を彼に従わせ、王たちの武装を解かせる。扉は彼の前に開かれどの城門も閉ざされることはない。わたしはあなたの前を行き、山々を平らにし青銅の扉を破り、鉄のかんぬきを折り暗闇に置かれた宝、隠された富をあなたに与える。）2 番：イザヤ 45:8（天よ、露を滴らせよ。雲よ、正義を注げ。地が開いて、救いが実を結ぶように。恵みの御業が共に芽生えるように。わたしは主、それを創造する。）3 番：イザヤ 44:23（天よ、喜び歌え、主のなされたことを。地の底よ、喜びの叫びをあげよ。山々も、森とその木々も歓声をあげよ。主はヤコブを贖い／イスラエルによって輝きを現された。）

2. Gott der Vater ließ sich rühren,
daß er uns zu retten sann;
und, den Rathschluß auszuführen,
trug der Sohn sich selber an.
Schnell flog Gabriel hernieder,
brachte diese Antwort wieder:
“Sieh, ich bin des Herren Magd,
mir gescheh' , wie du gesagt!”

3. Da die Bottschaft angekommen,
war Maria im Gebet;
als das Wort Fleisch angenommen,
ging sie zu Elisabeth.
Von dem Gruße ganz durchdrungen,
ist Johannes aufgesprungen,
der von Gott geheiligt war,
eh' die Mutter ihn gebar.

4. Dieser ließ die Stimm' erschallen:
“Sünder, wacht vom Schlummer auf;
denn es naht das Heil uns allen,
hemmet euren Sündenslauf!”
Brüder laßt zu diesen Zeiten
uns das Herz zur Buß' bereiten;
wandelt auf der Tugend Bahn,
ziehet Jesum Christum an.

5. Laßt uns wie am Tage wandeln,
allzeit auf den Herrn bereit;
suchet, um gerecht zu handeln,
Wahrheit, Fried' und Einigkeit,
jenem gänzlich nachzuleben,
der uns allen Trost gegeben,
daß wir froh von hinnen gehn,
ihn im Himmel selber sehn!

神である御父は祈りを聞いて心を動かされ、
私たちを救おうと思われた。
そして、神の御心を果たすために、
御子は自らをささげられた。
すぐにガブリエルは飛んで降りてこられた。
次のような答えをもって。
「見よ！私は主のはしため
お言葉通り、この身になりますように。」

お告げが来たとき、
マリアは祈っていた。
御言葉が人となられたので、
エリザベトのところをたずねた。
マリアの挨拶が身に染みて、
ヨハネは胎内で踊り上がった。
ヨハネは、神によって祝福されていたのだ。
母[エリザベト]が身ごもる前に。

[ヨハネは]声をあげた。
「罪びとよ、眠りから目覚めよ。
救いが我々すべてに近づいている。
汝らの罪の歩みをやめなさい。」
兄妹よ、このときにあたって
悔い改めに備えよ。
徳の道を歩み、
イエス・キリストを身につけよ。

昼間に歩くように、
主を迎える準備を常にせよ。
正しく行動するために
真理と平和と一致を求めよ。
私たち全員に慰めをくださった方に
完全にならって生きていこう。
その慰めとは、私たちが喜びをもって歩み、
天においてその方自身に
会えるというものだ。

ドイツ語聖歌の第 1 節は、待降節第 4 主日の入祭唱に当たるイザヤ 45:8 (天よ、露を滴らせよ。雲よ、正義を注げ。地が開いて、救いが実を結ぶように。めぐみの御業が共に芽生えるように。わたしは主、それを創造する。) に基づいている。その後、2 節はマリアへの受胎告知 (ルカ 1:38)、3 節はエリザベト訪問 (ルカ 1:39)、4 節は洗礼者ヨハネの悔い改めの教え (マルコ 1:4) とそれぞれ続く。4 節の最後「徳の道を歩み、イエス・キリストを身につけよ *Wandelt auf der Tugendbahn, ziehet Jesum Christum an.*」は、ガラテヤ 3:27 (洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです) を踏まえているといえるだろう。悔い改めの教え、それに導かれた洗礼によって、イエス・キリストに結ばれ、キリストを着るものとなることができるという使徒の教えまでもが、聖歌のテキストに含まれていることは重要である。また第 5 節の冒頭「昼間に歩くように、主を迎える準備を常にせよ。正しく行動するために真理と平和と一致を求めよ。 *Laßt uns wie am Tage wandeln, allzeit auf den Herrn bereit; suchet, um gerecht zu handeln, Wahrheit, Friede und Einigkeit,*」の背景には、エフェソの使徒への手紙 5:8-9 (光の子として歩みなさい——光から、あらゆる善意と正義と真実が生じるのです) がある。

『ランツフト 1777』と『フルダ 1891』を比較すると、第 5 節に大きな変更がみられる。この背景には 1777 年のもとのテキスト内容が、過激すぎるものが指摘されている¹⁶⁶。

『ランツフト 1777』

5. Laßt uns wie am Tage wandeln, nicht in Fraß und Trunkenheit. Suchet, um gerecht zu handeln, Wahrheit, Fried und Einigkeit. Jenem gänzlich nachzuarbeiten, dessen Ankunft wir erwarten. Dieses ist der Christen Pflicht, wie es der Apostel spricht.	貪食や酩酊ではなく、 昼間歩いているように歩こう！ 正しく行動するために 真理と平和と一致を求めよ。 私たちがその到来を待ち望んでいる あの方に完全に従おう。 このことこそ、キリスト者の務めである。 使徒がいているように。
---	--

日本語のテキストに関しては、『公教會聖歌集』と『公教聖歌集』の間に大きな相違はない。『公教聖歌集』の初版出版に際しては、作詞を担った小倉による評釈が『日本カトリック新聞』に掲載されている。その中で、この聖歌の各節について

第 1 節：キリストのご降誕を待望していた当時の状況を歌ったもの

¹⁶⁶ Eduard Krieg, “200 Jahre Fuldaer Diözesangesangbuch 1778-1978,” in *FuldaGbl* 55 (1979): 119.

第 2 節：聖母のご受胎

第 3 節：ご降誕を表明して真理の朝日、義の太陽を暗黙の死と悲しみの世界に対照させたもの¹⁶⁷

と記されている。第 1、2 節はそれぞれ、待降節の入祭唱（イザヤ書 45:8）、マリアへの受胎告知（ルカ 1:26, 30, 35）とドイツ語テキストにもある内容であるが、第 3 節はドイツ語のテキスト内容にはない独自の内容となっている。ここでは、マタイ 4:16（暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が差し込んだ）を念頭に、イエス誕生の前の世界の暗さと誕生後の明るさの対比を描いている。この後に続く聖書箇所マタイ 4:17（そのときから、イエスは「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。）は、イエスがガラテヤで伝道を始めるときかけの言葉である。ドイツ語の 4 節以降のテキストで語られる回心や悔い改めの内容ではなく、待降節の意味、そして他の待降節の聖歌の中でもたびたびテーマとなっている主の誕生後の世界を光として強調することは、待降節を理解するため、また宣教的な意味でも重要であったと考えられる。

22. 来ませ救ひ主

『公教聖歌集』の「待降節」の聖歌〈来ませ救ひ主〉は、『公教會聖歌集』の〈やよすくひぬしよ〉から引き継がれたもので、原曲は〈Veni, veni, Emmanuel〉という中世初期のラテン語アンティフォナに、17 世紀ころ、作者不詳で旋律がつけられたものである¹⁶⁸。今日知られているドイツ語翻訳〈O komm, o komm, Emmanuel!〉の最初期のものにはヘリングスドルフ（Johannes Heringsdorf, 1605～1665）によるものがあるが、ドイツ語翻訳は他にも複数存在する。

『ケルン 1908』には〈O komm, o komm, Emmanuel!〉が掲載されている。

『ケルン 1908』 No. 6a

1. O komm, o komm, Emmanuel,	来たれ、来たれ、インマヌエルよ。
Nach dir sehnt sich dein Israel!	あなたの民イスラエル、彼を求め
In Sünd' und Elend weinen wir	罪と惨めさのうちに私たちは泣き、
Und fleh'n und fleh'n hinauf zu dir.	心からあなたに願いを求める。
Freu dich, freu dich, o Israel!	喜べ、喜べ、イスラエルよ。
Bald kommt, bald kommt Emmanuel	間もなく、間もなく、インマヌエルがくる。

¹⁶⁷ 小倉慮人「新聖歌集評釋（一）」、『日本カトリック新聞』1933年12月17日（427号）、4頁。

¹⁶⁸ Hermann Kurze, *Kirchenlied und Kultur*, (Tübingen: Francke Verlag, 2010), pp. 215-216.

原曲の冒頭、「来たれ、来たれ、インマヌエルよ O komm, o komm, Emmanuel!」は、イザヤ書 7:14（それゆえ、わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産みその名をインマヌエルと呼ぶ。）にある預言に基づくものである。

『公教會聖歌集』（1930）のテキストでは、インマヌエルの名はなく、救い主に言い換えている（「ややすくひぬしよ」）が、それ以外の点では、ほとんど原曲を念頭に置いた作詞といえるだろう。例えば、『公教會聖歌集』（1930）の第 1 節「ややすくひぬしよ 疾く降りまして つみとがに沈淪（しづ）む 我等たすけませ」、リフレイン部分「喜べもろ人 救ひ主来たまふ」も、原曲の通りの内容である。

一方『公教聖歌集』のテキストは、原曲や『公教會聖歌集』の内容とは異なっている。冒頭の「来ませ救ひ主」は共通しているが、リフレイン部分は「喜びは湧きて 笑の眉開かん」となっており、意識、あるいは意味の飛躍がみられる。

4.1.2.2 キリスト降誕に関する聖歌

1969 年に発表された『典礼暦年に関する一般原則および一般ローマ暦』に基づく現行の典礼暦において、降誕節は一般に次のように説明される。

キリストの生涯の初めの秘義を記念する典礼季節で、「主の降誕」の前晩の祈りから「主の公現」後にくる主日（通常、「主の洗礼」）まで続く。その間に、「主の降誕」の典礼（夜半、早朝、日中ミサ）、降誕の八日間、即ち聖家族の祝日（八日間中の主日もしくは 12 月 30 日）、ステファノ（12 月 26 日）、使徒・福音記者ヨハネ（12 月 27 日）、幼子殉教者の各祝日（12 月 28 日）の各祝日と八日目（1 月 1 日）の神の母聖マリアの祭日、そして主の公現が置かれている。これらは主の祭日を根幹としてこれに聖母・聖人祝日が複合してしだいに固有の季節の特徴を帯びるようになったもので、「降誕節」という概念はようやく 20 世紀に確立する。¹⁶⁹

1960 年の典礼注規の改訂、1962 年版の『ローマ・ミサ典礼書』において初めて、「降誕節」の概念が導入された。そのため『羅馬弥撒典書』（1935）には、ご降誕の大祝日から復活祭のための準備の聖節に入るまでの各典礼に関して、以下の通り記されている¹⁷⁰。

・ 12 月 25 日：ご降誕の大祝日（第一のミサ聖祭：夜中のミサ、第二のミサ：黎明

¹⁶⁹ 石井祥裕「降誕節」、『新カトリック大事典』東京：研究社、1998 年、第 2 巻、843～844 頁。日本カトリック典礼委員会（編）『典礼暦年に関する一般原則および一般ローマ暦』、20～21 頁。

¹⁷⁰ チェーグレル『羅馬弥撒典書』、141～233 頁。

のミサ、第三のミサ：日中のミサ)

夜中のミサの大意：世間の罪を意味する夜のうちに、光明よりの光明なる、永遠の聖父の御獨子は降りてこの暗を照らすものとなる。

典礼中の該当聖書箇所：入祭文：詩篇 2:7、書簡朗読：チト 2:11-15、昇階誦：詩篇 190:3,1、2:7、福音朗読：ルカ 2:1-14、奉献文：詩篇 95:11,13、聖体拝領誦：詩篇 109:3

- ・12月26日：聖ステファノ最初の殉教者の大祝日
- ・12月27日：聖ヨハネ使徒福音史家の大祝日
- ・12月28日：無幸嬰兒殉教者の大祝日
- ・降誕祭八日間中主日
- ・1月1日：我主御割禮の大祝日（降誕祭の八日目）
- ・1月2日と5日との間の主日、または此の間に主日がない場合は2日：イエズス聖名の大祝日
- ・1月5日：御公現の徹夜
- ・1月6日：吾主御公現の大祝日（御公現後第一の主日、イエズス、マリア、ヨゼフ、聖家族の祝日）
- ・御公現の八日間中の主日（御公現後第一の主日）、
- ・1月13日：御公現の大祝日の八日目
- ・御公現第二の主日
- ・御公現第三の主日
- ・御公現第四の主日
- ・御公現第五の主日
- ・御公現第六の主日

『公教聖歌集』には、19 曲のご降誕の聖歌（23 から 41）、罪なき嬰兒（41A）、聖名（42、43）、新年の歌（42A）、3 曲の三王来朝（主の公現）の聖歌（44 から 46）が収録されている。

23. 更ゆく静寂を

『公教聖歌集』の「御降誕」の聖歌〈更ゆく静寂を〉は、『公教會聖歌集』の〈静寂けき真夜なか〉から引き継がれた聖歌である。この曲に関しては『公教聖歌集』の出版当初に『日本カトリック新聞』に評釈が掲載されているが、その中でも言及されている通り、この曲は、クリスマスの曲としてもっとも有名なドイツの聖歌に基づいている¹⁷¹。原曲は、1818 年にグルーバー（Franz Xaver Gruber, 1787～1863）によって作曲された

¹⁷¹ 小倉慮人「新聖歌集評釈（二）」、『日本カトリック新聞』1933年12月31日（429号）、4頁。

〈Stille Nacht〉である。

ここで注目すべきは、『公教聖歌集』のもととなっている『フルダ 1891』、『ケルン 1908』にこの聖歌が含まれていないことである。一方、プロテスタントの讚美歌集には早い時期からこの聖歌は掲載されており、その影響を考えることができる。

また、『公教聖歌集』、『公教聖歌集』ではテキストが大きく異なる。『公教聖歌集』は、他の聖歌と同じように、ドイツ語の原曲の影響が強くみられるが、『公教聖歌集』は独自の作詞ともいえるだろう。

24. きけ妙なるしらべ

この聖歌は『公教聖歌集』に初めて掲載される「御降誕」の聖歌である。原曲は『フルダ 1778』において掲載された〈Auf! Christen, singt festliche Lieder〉で、この聖歌集の編纂者であるエルテルによるものである。

『フルダ 1778』と『フルダ 1891』を比較すると、前者は、11 節のテキストとともにニ長調で掲載されている一方で、後者は、6 節までのテキストとともにハ長調で掲載されている。『フルダ 1778』では、アラ・ブレーヴェで書かれているが、1891 年版では、音価を半分にした 4/4 で書かれている。また、経過音を加える形の旋律的な変更が 2 か所ある。

2 つの聖歌集のテキストを比較すると、2 節以降に変更箇所がみられる。変更・改訂箇所注目すると、特に、情熱的なテキストが削除され、より客観的なテキストに変更されている。『フルダ 1778』は、啓蒙期の典礼改革に基づいた聖歌集であり、他の聖歌をみても、情熱的、分かりやすさを追求するが故に世俗的な表現も用いられている。これらを修正した形といえるだろう。ドイツ語の聖歌では、前半の節（1778 年版では 5 節まで、1891 年版では 4 節まで）で、約束されていた通り、救い主がベツレヘムの馬小屋で生まれ、そのことを天使たちが羊飼いたちに告げ、喜びの歌が世界を満たした、というクリスマスの奇跡が描かれる。後半（1778 年版では 6 節から 11 節、1891 年版では 5 節と 6 節）では、イエス・キリスト自身への祈りがテキストの内容となっている。

『フルダ 1891』 No. 9

1. Auf! Christen, singt festliche Lieder und jauchzet mit fröhlichem Klang!	キリスト者よ！喜びの歌を歌い、 喜びの音を叫べ！
Es shalle auf Erden laut wieder süß tönender Jubelgesang!	地上に再び、 歓喜の歌が鳴り響く。
Der Vater hat unser Verlangen und seine Verheißung erfüllt;	父は私たちの願いと、 約束を満たしてくださった。
der Heiland, nach welchem wir rangen, erscheinet im Fleische verhüllt.	我々が待ちわびていた救い主は、 肉をまとって現れた。

2. Im Stalle bei Bethlehems Toren
hat mitten in nächtlicher Zeit
Maria, die Jungfrau, geboren,
den Heiland, der alle erfreut.
Dies schönste der menschlichen Kinder
ist Gott, in der Menschheit Gewand;
es ward uns als Mittler der Sünder
aus göttlicher Liebe gesandt.

ベツレヘムの馬小屋の中で、
真夜中に、
おとめマリアは生んだ。
私たちみなを喜ばせる救い主を[生んだ]。
この最も美しい幼子は、
人となられた神である。
彼は、神の愛によって
我々の罪を贖う方として遣わされた。

3. Dies große Geheimnis erklären
die Engel den Hirten im Feld;
sie singen dem Schöpfer zu Ehren
und singen von Frieden der Welt.
Es eilen aus Bethlehems Fluren
die Hirten zum Stalle geschwind
und werden auf englischen Spuren
geleitet zum göttlichen Kind.

天使たちはこの偉大な神秘を
野の羊飼いたちに告げた。
彼らは創造主の栄光を歌い、
世界の喜びを歌う。
ベツレヘムの地から来た
羊飼いたちは、馬小屋へ急ぎ、
天使の足跡に導かれて、
神なる幼子のもとへ行く。

4. O, laßt uns in ihre Gesänge,
einstimmen mit fröhlichem Ton,
erwidern die himmlische Klänge
und singen dem göttlichen Sohn,
die Krippe kniefällig umringen,
in welcher der Heiligste liegt,
die Herzen zum Opfer ihm bringen,
der alles mit Liebe besiegt.

彼らの、喜びにあふれた歌に
参加させたまえ。
天使たちの歌に答え、
神なる御子をほめ歌い、
聖なる御子が横たわる
飼い葉桶の周りに跪き、
心から御子を礼拝する。
御子はすべてを愛を持って支配する。

1891年版で削除されている2節後半、4節後半のテキスト。

『フルダ 1778』2節後半

Sieh! Rosen und Lilien blühen
Im Antlitz des Kindes hervor:
Die Lippen und Augen doch glühen
von Schönheit im reizenden Klor!

見て、バラとユリが
子供の顔に咲く。
眼と唇は、
美しく輝く。

『フルダ 1778』 4 節後半

Sie werfe zur Krippe sich nieder,	彼女は飼い葉桶に身をかがめる。
Im tiefesten Staube gebuckt;	最も深い塵の中にある
Von himmlischen Freuden entzuckt	神の喜びに喜びながら。

日本における当聖歌は、後者のフルダ聖歌集を引き継ぐ旋律、調性で記譜されている。テキストは 3 節までであるが、終始、ドイツ語聖歌でいうところの前半にあたるクリスマスの奇跡に関して語られる。特徴的な表現としては、第 1 節で「鄙にもみやこにも」という言葉で「全世界」を意味し、第 2 節の「宮居ぞかしこき」の「宮居」は通常、神社や皇宮を意味するが、聖歌の中では転じて、「みどり子を抱くマリア」を意味しているところである。また第 3 節は、待降節の聖歌の中でも頻繁に歌われていた明暗の対比を再び持ち出し、キリスト誕生がもたらす光のイメージを増幅させている。

26. みそらゆく

『公教聖歌集』の「御降誕」の聖歌〈みそらゆく〉は、『公教會聖歌集』の〈みそらより〉から引き継がれた聖歌である。旋律は、カルリ (Georg Caspar Carli) によってアウグスブルクで 1800 年に出版された *Melodien in den katholischen Kirchengesangen* に掲載された〈Sohn Gottes〉(B III, No. 220) に基づいている。この旋律は、後の聖歌集では、フェルスペル (Christoph Bernhard Verspoell, 1743~1818) によるテキストとともに、〈O selige Nacht, im Himmel Pracht〉として掲載されるようになった。日本の聖歌のもととなったのは、『ケルン 1908』のご降誕の聖歌〈O selige Nacht, im Himmel Pracht〉である。

『ケルン 1908』 No. 11

1. O selige Nacht!	聖なる夜。
In himmlischer Pracht	天の栄光の中で、
Erscheint auf der Weide	羊の番をしていた羊飼いたちに、
Ein Bote der Freude,	喜びにあふれた天使が
Den Hirten, die nächtlich die Herde bewacht.	現れた。
2. Wie tröstlich er spricht:	天使は喜びをもって伝えた。
“O fürchtet euch nicht!	「恐れるな。
Ihr waret verloren,	あなた方は見失っていた。
Heut' ist euch geboren	今日お生まれになった。
Der Heiland, der allen das Leben verspricht.,	全てのものに命を約束する救い主が。」

3. “Seht Bethlehem dort,
Den glücklichen Ort!
Da werdet ihr finden,
Was wir euch verkünden,
Das sehnlich erwartete göttliche Wort.”

「さあ、ベツレヘムへいこう。
幸いなる場所へ。
そこで、私たちがあなたがたに
告げ知らせたものを見つけるだろう。
切に待ち望んでいた神の御言葉を。」

4. Voll Freuden sie sind,
Sie eilen geschwind
Und finden im Stalle
Das Heil für uns alle:
In Windeln gewickelt das göttliche Kind.

羊飼いたちは喜びに充ち、
彼らは急ぐ。
そして飼い葉桶に眠る御子を見つける。
私たちすべての救いを見る。
おくるみに眠る神の子である。

5. Eilt, Christen, geschwind
Zum göttlichen Kind.
Eilt, Fromme und Sünder,
Eilt, Eltern und Kinder,
Ihm weihet die Herzen von Liebe entzünd't.

急げ！キリスト者よ。
神の御子のところへ。
急げ！敬虔な人も罪びとも。
急げ！親も、子供も。
愛に燃えた心を御子にささげよう。

6. O tröstliche Zeit,
Die alle erfreut!
Du linderst die Schmerzen,
Du weckest die Herzen
Zum Danke, zur Liebe, zur himmlischen Freud'.感謝と愛と天の国の喜びへと。

ああ、慰めの時よ、
それはみなを喜ばせる。
あなたは痛みを和らげ、
あなたは心を目覚めさせる

ドイツ語の第 1、2 節はルカ 2:8-11、第 3 節はルカ 2:15、第 4 節は 2:16 に描かれるイエス誕生に際しての羊飼いと天使の会話がもととなっている。第 5、6 節のテキストは聖書本文から離れ、キリストの誕生に際しての人々の反応をパラフレーズした内容となっている。

『公教会聖歌集』（1930）の第 1 節では、闇（悲しき世）に光をもたらした救い主の誕生が歌われる。これは、前述の通り、たびたび待降節の聖歌でも取り上げられてきた、キリスト誕生による光の世界とそれ以前の暗闇の世界を念頭に置いている。第 2 節はルカ 2:14、第 3 節はルカ 2:15 に基づいて作詞され、第 4 節は誕生した神の子を崇める内容となっている。

一方、『公教聖歌集』では、第 1 節から第 3 節までルカ 2:8-12 に基づいた天使と羊飼いのやり取りが歌われる。第 4 節はそれまでの聖歌のテキスト内容にはない教化的な内容

「わがこころ くらきとき みつかひ来よ 光り出でよ へりくだりて 吾が待てば」となっている。日本の聖歌もドイツの聖歌も、ルカによる福音書を利用しながらキリスト降誕を描き、最後にそれを踏まえたパラフレーズが行われているという構成は同じである。

『公教聖歌集』の第3版以降に26Aとして掲載される〈みそらゆく〉は、テキストは26と同一である。旋律はケルン1852年に掲載される〈Ihr Hirten erwacht!〉である。ボイムカーによればこの旋律は上述の〈O selige Nacht!〉のテキストにも当てはめて歌われてきており、日本においてもその習慣が踏襲された形である¹⁷²。

27. あれ聞こゆる歌

『公教聖歌集』の「御降誕」の聖歌〈あれ聞こゆる歌〉は、『ケルン1908』に掲載される〈Laßt uns das Kindlein grüssen〉（作詞作曲、不詳）と同じ旋律を持つ。

『ケルン1908』No. 20

1. Laßt uns das Kindlein grüßen	幼子に挨拶しよう
Und fallen ihm zu Füßen;	幼子の前に跪こう。
Laßt uns im Geist uns freuen,	心から喜び、
Das Kindlein benedeien!	幼子を賛美しよう。
R: O Jesulein süß, o Jesulein süß!	おお、愛しい幼子イエスよ。 おお、愛しい幼子イエスよ。
2. Lasst uns dem Kindlein singen,	幼子のために歌おう。
Ihm Dank und Opfer bringen;	幼子のために感謝と生け贄をささげ、
Laßt uns das Kindlein ehren	幼子をたたえよう。
Und seine Gnad' begehren,	その恵みを願おう。
R: O Jesulein füß, o Jesulein füß!	おお、幼子イエスよ。おお、幼子イエスよ。

このドイツ語聖歌は、幼子イエスへの賛美のテキスト内容である。一方、日本語のテキストではまず、ルカによる福音書（第1節はルカ2:13-14、第2節はルカ2:10、第3節はルカ2:8-9）のキリスト降誕場面が描かれる。キリスト降誕の物語を改めてテキストにすることで、典礼との結びつきを強化しているとも考えられる。第4節で初めて、ドイツ語聖歌の中で、キーワードとなっている挨拶・拝む、という内容が出てくる。第4節「いざ入りて ふしをおがまん」、第5節「御子の稜威ほめ」は、ドイツ語の第1節を踏まえた訳詩といえるだろう。

日本語の第5節、またドイツ語聖歌の1節、2節を通して歌われるのは、幼子イエスへ

¹⁷² B IV, p. 428.

の信心である。なお、この聖歌の主題である幼きイエスへの信心はアッシジのフランシスコによって創始され、その信仰は 17 世紀から 19 世紀に頂点を迎えた¹⁷³。

31. やみに棲むひと

『公教聖歌集』の「御降誕」の聖歌〈やみに棲むひと〉は、『公教會聖歌集』の〈闇裡（くらき）に棲む人〉から引き継がれた聖歌で、原曲は、ルターとトリラー-Valentin Triller (1493~1573)による〈Es kam ein Engel hell und klar〉である。『フルダ 1891』にも〈Es kam ein Engel hell und klar〉として 13 節までのテキストとともに収録されている。

『フルダ 1891』 No. 12

1. Es kam ein Engel hell und klar von Gott aufs Feld zur Hirtenschar;	天使が明るく輝かしく、 神のもとから羊飼いの群れのいるところへと やって来た。
die wurden bald gar hoch erfreut, der Engel sprach mit Fröhlichkeit:	羊の群れは喜びを得る。 そして天使は喜びをもって語る。
2. "Vom Himmel hoch, da komm' ich her; und bring' euch viel der guten Mähr,	天の高みから私はやって来た。 あなたがたに多くのよい知らせを 持って来た。
der guten Mähr bring' ich so viel, davon ich singen und sagen will.	多くのとてもよい知らせを持って来たので、 そのことについて歌って、話したい。

『フルダ 1891』のテキストは 上述の第 1、2 節を含め、ルカの 2 章をもとにテキストが書かれている。一方、『公教會聖歌集』（1930）のテキストは、第 4 節はその内容を踏まえているが、第 2 節までは独自のテキストとなっている。第 1 節の「闇裡に棲む人...今ぞのぼります」では主の降誕前後の明暗の対照性が描かれ、第 2 節の「生命の真清水（ましみづ）今ぞ湧き出づる」では渴きをいやす主が描かれる。こうした表現は、それぞれイザヤ 60:1-3¹⁷⁴、イザヤ 58:11¹⁷⁵を踏まえており、福音書ではなく預言書をもとにしている。

この聖歌もまた、ドイツ語聖歌よりも日本語聖歌の方がより具体的、明確に主のご降誕

¹⁷³ 戸田三千雄「幼きイエスへの信心」、『新カトリック大事典』東京：研究社、1996年、第1巻、909頁。

¹⁷⁴ 起きよ、光を放て。あなたの光が来て主の栄光があなたの上に昇ったのだから。見よ、闇が地を覆い密雲が諸国の民を包む。しかし、あなたの上には主が輝き出で主の栄光があなたの上に現れる。国々はあなたの光に向かって歩み王たちはあなたの曙の輝きに向かって歩む。

¹⁷⁵ 主は常にあなたを導き干上がった地でもあなたの渴きを癒やし骨を強くされる。あなたは潤された園のように水の涸れない水源のようになる。

が人々にもたらす喜びについて描かれている例といえるだろう。『公教會聖歌集』のテキストの大筋は『公教聖歌集』にもそのまま引き継がれている。

35. いざ世のとも

『公教聖歌集』の「御降誕」の聖歌として掲載される〈いざ世のとも〉はもっともよく知られるクリスマス・キャロルの一つである。原曲は、ラテン語聖歌〈Adeste Fideles〉であるが、作曲者については特定されていない。『公教會聖歌集』、『日本聖詠』をはじめとするフランス系聖歌集、『フルダ 1891』、『ケルン 1908』のいずれにも含まれず、日本への移入元を特定することは難しい。

ドイツ語版である〈Auf gläubige Seelen〉は、モール（Joseph Mohr, 1792～1848）によって 1877 年に出版された聖歌集に掲載されている。元のラテン語の詩は 4 節で構成され、キリストの誕生を喜ぶ内容となっている。

Adeste fideles læti triumphantes,	信者よ、喜びと勝利を喜べ
Venite, venite in Bethlehem.	来たれ、ベツレヘムに来たれ
Natum videte Regem angelorum:	天の王が生まれた。
Venite adoremus (3×)	賛美しよう。
Dominum,	主であるキリストを。

37. みまやの燈火

『公教聖歌集』の「御降誕」の聖歌〈みまやの燈火〉の原曲は、〈Laßt uns das Kindlein grüßen〉である。『フルダ 1891』にも以下の通り、掲載されている。

『フルダ 1891』 No. 16

1. Laßt uns das Kindlein grüßen,	幼子に挨拶しよう
ihm unser Herz aufschließen,	彼に私たちの心を開き、
mit Andacht es erfreuen,	崇敬心をもって彼を喜ばせ、
von Herzen benedeien,	心から祝福しよう。
o Jesulein süß, o Jesulein süß.	おお、愛しい幼子イエスよ。
	おお、愛しい幼子イエスよ。

この聖歌もまた、幼子イエスの信心が歌われる。一方、『公教聖歌集』のテキストでは、イエスの誕生を讃美する内容であり、降誕節の聖歌としてはふさわしいが、原曲のテキスト内容は反映されていない。

38. 救ひの御子は

『公教聖歌集』の「御降誕」の聖歌〈救ひの御子は〉の原曲は、シュペーによって1637年までに成立したとされる〈Zu Bethlehem geboren〉である。『フルダ 1891』、『ケルン 1908』にもクリスマス聖歌として掲載されている。

『フルダ 1891』 No. 13

- | | |
|--|--|
| 1. Zu Bethlehem geboren
ist uns ein Kindelein;
das hab' ich auserkoren,
sein eigen will ich sein,
eia! eia! sein eigen will ich sein. | ベツレヘムで
我々のために幼子が生まれた。
私はこの子を選んだ。
私は彼のものでありたい。
ああ、私は彼のものでありたい。 |
| 2. In seine Lieb' versenken
will ich mich ganz hinab;
mein Herz will ich ihm schenken
und alles, was ich hab'.
eia! und alles, was ich hab. | 私は彼の愛の中に、
私自身を完全に沈めたい。
私の心、私の持っているすべてを、
彼に贈りたい。
ああ、私が持っているすべてを。 |
| 3. O Kindelein, von Herzen
will ich dich lieben sehr,
in Freuden und in Schmerzen,
je länger mehr und mehr,
eia! je länger mehr und mehr. | おお、幼子イエスよ。心から
私はあなたを愛したい。
喜びにおいても痛みにおいても。
できるだけ長く、ずっと、ずっと。
ああ、できるだけ長く、ずっと、ずっと。 |
| 4. Dazu mir Gnade gebe,
bitt'e ich aus Herzensgrund,
daß, ich allein dir lebe

jetzt und zu aller Stund',
eia! jetzt und zu aller Stund. | そのために私に恵みを与えよ。
心の底からお願いする。
あなたのためにのみ
生きることができるように。
今も、そしてとこしえに。
ああ、今も、そしてとこしえに。 |
| 5. Dich, wahren Gott ich finde
in meinem Fleisch und Blut;
so fest auch mich verbinde
mit dir, mein höchstes Gut,
eia! mit dir höchstes Gut. | まことの神よ、私はあなたを
肉と血の中に見出します。
それゆえに私をしっかり結び付ける。
あなたに。私の最高の善であるあなたに
ああ、私の最高の善であるあなたに。 |

6. Laß mich von dir nicht scheiden,	私をあなたから離してくれるな。
knüpf zu, knüpf zu das Band,	結び付けよ。その絆を結び付けよ。
die Liebe zwischen beiden;	[私とあなたとの]愛の絆を。
nimm hin mein Herz zum Pfand.	私の心を担保として、預かれ。
eia! nimm hin mein Herz zum Pfand.	ああ、私の心を担保として、預かれ。

ドイツ語のテキストを見ると、一人称をふんだんに使った非常に情熱的な内容となっている。一人称を使うことによって、キリストと自分の関係が非常に密接なものとして描かれている。一方、日本語のテキストにはそのようなものは一切見られず、他の降誕の聖歌と同様に、ルカによる福音書をもとにしたキリスト誕生の喜びと御子への賛美と崇敬が極めて客観的に描かれている。

41. ゆふやみせまる

『公教聖歌集』の「御降誕」の聖歌〈ゆふやみせまる〉は、『公教會聖歌集』の「天使祝詞」〈御恩寵満てる〉と同一の旋律であるが、テキスト内容は大きく異なっている。原曲は、〈Es ist ein' Ros' entsprungen〉(B I, No. 78)であり、1599年にケルンで始めて出版された際には、マリア賛歌であった。その後、様々なテキスト、和声とともに、プロテスタント教会、カトリック教会の双方の聖歌として収録されている。プレトリウスが、マリアから幼子イエスへと視点を変え、1609年に『シオンのムーサたち *Musae Sioniae*』に収録したものが、もっとも広く用いられている。『フルダ 1891』には、ご降誕の聖歌として収録されている。

『フルダ 1891』 No. 10

1. Es ist ein' Ros' entsprungen,	一つの根から、
aus einer Wurzel zart.	一つの芽がでた。
wie uns die Alten sungen;	預言者が私たちに告げていたように
aus Jesse kam die Art.	エッサイの株から一つの種が生まれた。
und hat ein Blümlein bracht	寒い冬のさなか、
mitten im kalten Winter,	夜半に、
wohl zu der halben Nacht.	小さな花がさいた。
2. Das Röslein, das ich meine,	私が言っているのは、
davon Isaias sagt,	イザヤが預言した小さなバラのことである。
Maria ist, die Reine,	清き方マリアは、
die uns das Blümlein bracht.	私たちにその花をもたらしてくれた。

Aus Gottes ew'gem Rat
hat sie ein Kind geboren
und blieb doch reine Magd.

神の永遠のはからいによって、
彼女は一人の子供を産んだ。
それでも清きはしために留まった。

3. Das Kind hat sie empfangen
aus heil'gen Geistes Kraft;
Gott Sohn kam mit Verlangen
zur reinem Jungfrauschaft.
In einem armen Stall
ward uns der Fürst geboren,
der uns macht selig all.

マリアはその御子を
聖霊の力によって身ごもった。
神の御子は、
清きおとめを望んで、やって来た。
貧しい馬小屋で、
主が私たちのためにお生まれになった。
その方は私たち皆を幸せにしてくださった。

4. Den Hirten brachte Kunde
davon ein englisch Heer
und sagt, wo zur Stunde
Christus geboren wär'.
Zu Bethlehem im Stall
das Kind alsbald sie fanden,
gar hoch sich freuten all.

羊飼いにそのことについてお告げがあった。
天の群れが
こういった。時が来て
キリストが生まれた。
ベツレヘムの馬屋で、
その幼子を間もなく見つける。
みなが喜ぶ。

5. Das Kindlein ward genennt,
wie es der Engel lehrt;
sein Nam' ist wohl bekennet
im Himmel und auf Erd.
Es Jesus ist genannt.
In diesem süssen Namen
man alles Gut befand.

幼子はまもなく名付けられる。
天使が教えていたように。
彼の名前が、告げられた。
天においても地の上においても。
即ちイエスと名付けられたのである。
この愛しい名前のうちに
すべてのよいものを人々は見つけた。

6. Ein Stern mit hellen Scheine
drei König' führt' geschwind
aus Morgenland mit Eile
zum neugebornen Kind;
sie brachten reichen Gold
und opferten mit Freuden
ihm Weihrauch, Myrrh'n und Gold.

とても明るい光を放つ星が、
東方からやってくる 3人の王を
急いで、導いた。
新しい御子へと、導いた。
彼らは豊かな金を持ってきて
喜びをもって御子に
黄金、乳香、没薬をささげた。

7. Lob, Ehr' sei Gott dem Vater, dem Sohn und heil'gen Geist! Maria, Gottes Mutter, Dein' Hilf' an uns auch leist und bitt dein liebes Kind, daß es durch seine Güte zu Hilf' uns komm' geschwind.	父と子と聖霊である、 神に栄光あれ！ マリア、神の母よ、 私たちを助けてください。 あなたの御子が 御父の慈しみのうちに、 私たちを助けてくださいますように。
--	---

ドイツ語聖歌のテキスト第 1 節はイザヤ 11:1 (エッサイの株から一つの芽が萌え出でその根から若枝が育ちその上に主の霊がとどまる。知恵と分別の霊／思慮と勇気の霊主を知り、畏れる霊。)を持ち出しながら、イエスの誕生を描いている。第 2 節ではルカによる福音書、あるいは第 6 節に関してはマタイによる福音書をもとにした降誕物語が、綴られる。

『公教聖歌集』において、もとのドイツ語聖歌と全く異なる内容で作詞されている聖歌は極めて少ないが、この聖歌は例外的に、完全に独立したテキストとなっている。聖歌の用途も、降誕の聖歌としてではなく天使祝詞として掲載されている。ただし、御母マリアをもっとも祝福されたものとして歌う第 1 節、汚れることなく神の母となったことを歌う第 2 節にはご降誕のもとの聖歌との広い意味での関連を指摘することもできる。

一方、『公教聖歌集』では、原曲や聖書箇所との関連性は薄いですが、再び、キリスト降誕の場面が独自に描かれている。

42. あふぐもたふとし

『公教聖歌』の「聖名」の聖歌として掲載される〈あふぐもたふとし〉は、『公教聖歌集』の「イエスの聖名」に分類される〈主の聖名を知るは〉から引き継がれた聖歌である。イエスの聖名は、1721 年以來祝われるようになった祝日で、降誕後の最初の日曜日に祝われる。アッシジのフランチェスコは、「特別の崇敬をもってみ名を敬うことを望み」(『アッシジの聖フランシスコ大伝記』10:6)、イエスの名に対する信心を浸透させた。そのため、フランシスコ会の中で発展した信心である¹⁷⁶。この大祝日の入祭唱のフィリペ 2:10-11 (こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。)にある通り、天上、地上、地獄は皆ことごとく膝を屈めて「救う者」であるイエスを認めるものである¹⁷⁷。

この聖歌の原曲は、『フルダ 1891』に新しい旋律として掲載されている〈Jesu wie

¹⁷⁶ 戸田三千雄「イエスの名」、『新カトリック大事典』東京：研究社、1996年、第1巻、371～372頁。

¹⁷⁷ チェーグレル『羅馬弥撒典書』、184頁。

süss!) である。ここでは 13 節までのテキストがつけられており、非常に情熱的なイエス崇敬が描かれる。

『フルダ 1891』 No. 23

- | | |
|--|---|
| 1. Jesu, wie süß! Wer dein gedenkt,
sein Herz in Freuden wird versenkt;
doch süßter über alles ist,
wo du, o Jesu selber bist. | いとしいイエスよ。あなたを思う人は誰でも、
その心は喜びに浸される。
あなた、イエスがおられるところが、
何よりも愛しい。 |
| 2. Kein Lied so süß zum Herzen bringt,

kein Klang kein Ton so lieblich klingt,
so wonnig kein Gedank ist,
als Gottes Sohn, Herr Jesus Christ. | どんな歌もそれほどの愛しさを心にも
もたらさないし、
どんな音、どんな旋律も
それほど愛らしくは響かない。
あなた、神の子、主イエス・キリストよ。 |
| 3. Dem Sünder bist du Trost und Ruh,

wer dich begehrt, dem ruft du zu,

wer dich nur sucht, der hat dich schon,
und wer dich find't, o welch ein Lohn! | あなたは罪びとにとって
なぐさめ、安息である。
あなたを求め、あなたを呼び、
あなたを捜す誰もが、
すでにあなたのもとにいる。
あなたを見つけるものは、
なんと報いられることか。 |
| 4. Kein Mund es je aussprechen kann,
kein Wort kein Lied kann's zeigen an,

nur wer's erfährt, der weiß dabei,
was Jesum lieben Süßes sei. | どんな口もそれを表現することはできない。
どんな言葉、どんな歌も
それを示すことはできない。
それを経験できるもののみが、
イエスが愛した愛しさを知ることができる。 |
| 5. Wer Jesum liebt, trinkt Seligkeit
vom Lebens quell der Ewigkeit,
hat immer Licht und hellen Tag,
weiß nicht, was er noch wünschen mag. | イエスを愛するものは、
命の幸福を永遠の泉から飲み、
そしていつも光と明るい日々のもとにいる。
彼が他に何を望むかを知らずに。 |

『公教会聖歌集』は、『フルダ 1891』の 5 節までのテキストにそれぞれ対応する形で翻訳されている。イエスの信心をそれぞれの側面から描きながらも、過剰に情熱的あるいは

は主観的になることなく、極めてよい訳といえるだろう。

『公教聖歌集』ではそれらのテキストを引き継ぎながらも、新たな作詞もされている。特に特徴的なのは、第 6 節「ちちみこみたまの 三つのくらみなる かみの御名にこそ 世々みさかえあれ」を通して、三位一体の神への賛美が行われるところである。

44. 光りもくすしき

『公教聖歌集』に「三王来朝」（主の公現）の聖歌として掲載される聖歌〈光りもくすしき〉は、『公教會聖歌集』の聖歌〈奇しき光明の〉から引き継がれた聖歌である。原曲は、シュペーによる〈Es führt drei König Gottes Hand〉に由来する。主の公現とは、キリストの生涯の始まりとともに神の救いが現れたことを祝う祭日である¹⁷⁸。

『ケルン 1908』 No. 23

1. Es führt drei Kön'ge Gottes Hand	神の御手によって
Durch einen Stern aus Morgenland	一つの星を通して
	東方から 3 人の王が導かれた。
Zum Christkind durch Jerusalem	エルサレムを通過して、
In einen Stall gen Bethlehem.	ベツレヘムの馬小屋にいる、
	幼子キリストにやって来た。
Gott, führ auch uns zu diesem Kind,	神よ、私たちがこの子へと導いてください。
Gib, daß wir seine Kinder sind.	私たちがその子であるようにしてください。
2. Der Stern war gross, und hell sein Glanz,	その星は大きく、その輝きは明るい。
Darin ein Kind mit goldem Kranz.	その中に金色の花輪に包まれた御子がいる。
Ein goldnes Kreuz sein Zepter war,	金色の十字架が彼の王笏である。
Sein Haupt schien wie die Sonne klar.	彼の頭は、太陽のように輝く。
O Gott, erleucht vom Himmel fern	ああ、神よ、天から遠くまで
Die ganze Welt mit diesem Stern!	この星で照らしてください。
3. Aus Morgenland in aller Eil'	はるばると東方から、何百マイルも遠くから
Sie reisten weit, viel hundert Meil';	彼らは旅をして、急いでやって来た。
Sie zogen hin zu Land und See,	陸と海を通過して、霜と雪を通過して、
Bergauf, bergab, druch Reif und Schnee.	山を越え、山を下りやって来た。
Zu dir, o Gott, die Pilgerfahrt	神よ、あなたのもとに向かう私たちの巡礼は
Uns dünke nie zu schwer und hart!	決して重荷でも苦しみでもありません。

¹⁷⁸ 石井祥裕「公現（主の）」、『新カトリック大事典』東京：研究社、1998年、第2巻、838頁。

『公教聖歌集』、『ケルン 1908』ともに、マタイ 2 章に基づいて、イエスを求めて占星術の学者たちが東の方からエルサレムを通過して、ベツレヘムへ向かう様子が描かれている。特筆すべきは、『公教聖歌集』の第 4 節「暗き世のたびぢ い行くわれらこそ のぞみの光を絶えせずぞ見まし かみの正道に かがやくそのほし」であり、こうした待降節の聖歌においても度々言及されていた光と闇の対比は、聖書を踏まえつつ、キリスト誕生に対するより具象的なイメージを信者に抱かせる効果がある。

4.1.2.3 準備の聖節

降誕節に続いて、復活祭の聖節となる。これは 3 つの部分、すなわち① 準備の聖節（七、六、五旬節と四旬節を含む）、② 御復活の大祝日、③ 復活節（祝日の後から御昇天の大祝日と其の八日間）に分かれている。

準備の聖節の時期には、「信者は痛悔の業を爲し、悔悛と静肅とを守り断食とを行う」¹⁷⁹。灰の水曜日を以て四旬節が始まり、「主の御受難、受洗、および我等の悔悛」¹⁸⁰を想う時期となる。

なお、現在の『ローマ典礼暦』（*Calendarium Romanum*, 1969）においては、四旬節の本来の意義を明確化するため、四旬節に準ずる期間とされた四旬節前の 3 週間（七旬節、六旬節、五旬節）が廃止されている¹⁸¹。つまり「四旬節は、灰の水曜日に始まり、主の晩餐の夕べのミサの前まで続く」¹⁸²。

『公教聖歌集』には、4 つの悔悛聖歌（47 から 50）、9 つの苦難、十字架に関する聖歌（51 から 59）、4 つの悲しみの聖母の聖歌（60 から 62）、枝の主日のための聖歌（63）が含まれている。

47. まぼろしの影を

『公教聖歌集』の「悔悛」聖歌〈まぼろしの影を〉は、『公教會聖歌集』の〈うき世のたのしみ〉から引き継がれた聖歌である。原曲は、〈Gott, vor deinem Angesichte〉であり、テキストは『ランツフート 1777』に由来する。『ケルン 1908』にもこの聖歌は四旬節の聖歌として掲載されており、日本への直接の影響は『ケルン 1908』と考えられる。

『ケルン 1908』 No. 36

1. Gott, vor deinem Angesichte 神よ、憐れな回心者の群れが

¹⁷⁹ チェグレル『羅馬弥撒典書』、237 頁。

¹⁸⁰ チェグレル『羅馬弥撒典書』、256 頁。

¹⁸¹ 石井祥裕「四旬節」、『新カトリック大事典』東京：研究社、1998 年、第 2 巻、1200～1201 頁。

¹⁸² 日本カトリック典礼委員会（編）『典礼暦年に関する一般原則および一般ローマ暦』、20 頁。

Liegt die arme Büßerschar;	あなたの御顔にいます。
Sie bekennt mit Reu' und Schmerzen.	彼らは痛悔を持って、
Ihre Sünden am Altar.	祭壇で自らの罪を告白します。
Dein Gebot hab' ich verachtet,	私はあなたの掟を軽んじました。
Diente nur der Lust der Welt;	この世の欲望にだけ奉仕しました。
Ach, ich habe Gott verlassen	私は神を見捨てました。
Und den Weg des Heils verfehlt	そして、救済への道を逃してしまいました。

『公教聖歌集』が出版された際に『日本カトリック新聞』に掲載された小倉による一連の評釈によれば、この聖歌は聖書の「放蕩息子のたとえ」（ルカ 15:11-32）を踏まえている。日本語のテキストでは、特に『公教聖歌集』の第 2 節（みちちは扉に ゆび折りまちて わが名呼び給ふ）にその内容がみられる。

原曲では、特にルカによる福音書の放蕩息子のたとえに限定できるようなテキスト内容はない。むしろ罪の告白にテキスト全体の焦点が当てられている。同様の罪の告白の内容は『公教聖歌集』（1930）の方の訳詩にも現れている。特に第 1 節の「日ごとに つみををかし来ぬ」、第 2 節の「つみとがかさねし われにしあれば」などでは直接的なそうした表現がみられる。十字架上のイエスの受難にも触れている点でも、『公教聖歌集』のテキスト内容は、原詩と共通しているといえる。

この聖歌に関しても、『公教聖歌集』の方が原詩に忠実で、『公教聖歌集』はより自由に作詞している傾向が見て取れる。

51. いばらのかむり

『公教聖歌集』の「御苦難」の聖歌〈いばらのかむり〉は、『公教聖歌集』の「四旬節」の聖歌〈いばらの冠冕〉から引き継がれたものである。この聖歌は、プロテスタント教会では〈血しおしたたる〉（由木康作詞）として知られている。

元となっている聖歌は〈O Haupt voll Blut und Wunden〉である。これは、17 世紀のルター派讃美歌作者ゲルハルト（Paul Gerhardt, 1607～1676）が、クレルヴォーのベルナルド（Bernardus Claraevallensis, 1090～1153）によって作詞されたラテン語テキストを 1653 年にドイツ語翻訳し、ハスラー（Hans Leo Hassler, 1564～1612）の世俗歌の旋律を転用したものである。ドイツにおける受難コラールとして極めて有名であり、バッハはこの旋律を編曲し、4 声の和声を付けて《マタイ受難曲》を始めとして、他の声楽作品にも利用した。

『フルダ 1891』にも以下の通り、掲載される。

『Fulda1891』 No. 44

1. O Haupt voll Blut und Wunden, 血と傷にあふれる御子の頭よ

voll Schmerz, bedeckt mit Sohn,
o Haupt, zum Spott gebunden,
mit einer Dornenkron!
O Haupt, sonst schön gekrönt
mit höchster Ehr' und Zier,
jetzt aber frech verhöhnet,
gegrüßet seist du mir!

2. Der Purpur deiner Wangen,
der Lippen frisches Rot,
all Schönheit ist vergangen
in bitterer Todesnot.
Doch strömt aus deinen Blicken
noch himmlische Geduld,
selbst Sünder zu beglücken
mit unverdienter Huld.

3. Ach, Herr, was du geduldet,
ist alles meine Last;
ich habe das verschuldet,
was du getragen hast.
Ich, Jesu, bin's, ich Armer,
der dies verdient hat.
O tilge, mein Erbarmer,
all' meine Missetat!

4. Laß an dem Kreuz mich stehen
in Demut, Herr, bei dir.
Dir willig nachzugehen,
das einzig ziemet mir.
Ich will dich nicht verlassen;
und wenn mein Auge bricht,
dann lasse mich umfassen,
dich, meine Zuversicht.

5. Ich danke dir von Herzen,

痛みにあふれている。
あざけりにあって、
イバラの冠をつけさせられている頭よ。
最高の荣誉と誉の冠を
受けているはずの頭よ。
いまや、あざけりを受けておられる方よ。
私はあなたを敬う。

あなたの頬の血色、
唇の鮮やかな赤、
すべての美しさは消え去った。
苦い死の苦しみの中に
それでもあなたのまなざしからは、
神の子としての忍耐があふれている
罪びとさえも、値しない恵みによって
幸せにする。

ああ、主よ。あなたは罪の重荷を、
すべて耐え忍んだ。
私はあなたが担われたことに対して
負い目がある。
ああ、イエスよ、その苦しみこそ、
憐れな私が受けるにふさわしいものだった。
慈しみ深い主よ、
私のすべての悪行を滅ぼしてください。

主よ、あなたの十字架の前に
恭しく立たせてください。
それはあなたに従って進むことのみが
唯一、私にふさわしいことです。
私はあなたから離れることはありません。
そしてもし私が目を覚ましたら
あなたを完全に信頼させてください。

私はあなたに心から感謝する。

o Jesu, bester Freund,
für deine Todesschmerzen;
wie gut hast du's gemeint!
Ach gib, daß ich mich halte
zu dir und deiner Treu',
daß nimmermehr erkalte
im Herzen Lieb' und Reu'.

最良の友イエスよ、
あなたの死の苦しみに感謝する。
あなたの御心にしたがって、
ああ、あなたとあなたの忠実さのもとに
いさせてください。
心の中に愛と悔い改めが
凍り付くことがないようにしてください。

6. Wenn ich einst werde scheiden,
o, dann verlaß mich nicht!
Sei auch in Todesleiden
mein Trost, mein Heil, mein Licht'.
Wenn mir am allerbängsten
einst um das Herz wird sein,
dann reiß mich aus den Angsten
kraft deiner Angst und Pein.

いつか私が死ぬとき、
私から離れないで
死の苦しみにある時も、
私の慰め、光りとなってください。
あなたの不安と苦しみの力で
私の心が不安に襲われるときも、
私の不安から、
引き裂いでください。

『公教會聖歌集』（1930）のテキストの第1節「いばらの冠冕 かむせられ 葦にて打たれ 唾液かけられ 鮮血したたる 主の御顔貌の いたましき態 見るかなしさ」は、ドイツ語聖歌の第1節を踏まえて訳されており、イエスの受難の苦しみが描写される。一方、ドイツ語テキストの2節以降に見られる個人的な思いや願いは日本語の聖歌のテキストからは排除され、より一般的に、主の受難が人間を救う最も深い恵みにあふれた行為であったことがテキストの中で強調される。イエスの受難とその意味に対する理解を信者に改めて示すことができるテキストとなっている。『公教聖歌集』は『公教會聖歌集』に基づいて、変更はわずかしは見られない。

52. 夕闇かげくらく

『公教聖歌集』の「御苦難」の聖歌〈夕闇かげくらく〉は、『公教會聖歌集』の「四句節」の聖歌〈聞け空くもれる夜〉から引き継がれた聖歌である。小倉による評釈の中には、この曲がロザリオの「苦しみの玄義」を歌ったもので、通夜の式などにロザリオと並行して用いることもできるという説明がある¹⁸³。

『公教會聖歌集』と『公教聖歌集』のテキストは、ロザリオの「苦しみの玄義」に沿う形で5節の構成（1. ゲッセマネの痛み、2. キリストの鞭うち、3. いばらの冠、4. 十字架を担うキリスト、5. 死去）を取る。

¹⁸³ 小倉慮人「新聖歌集評釋（七）」、『日本カトリック新聞』1934年3月25日（441号）、4頁。

55. 身は釘うたれつ

『公教聖歌集』の「御苦難」の聖歌〈身は釘うたれつ〉は、1567年にライセントリットで出版された聖歌集に由来するベーシェンシュタイン（Johann Böschenstein, 1472～1540）による〈Da Jesus an dem Creutze stund〉に基づく聖歌である¹⁸⁴。

小倉による評釈にも、この聖歌が400年あまり前の聖歌であることが記されている。小倉によれば、『公教聖歌集』における第7節までのテキストは、テキスト各節ごとに、十字架上のキリストの最後の7つの言葉を一語ずつ移したものであり、それゆえ、この聖歌は聖金曜日（正午から3時まで）にふさわしい¹⁸⁵。

第1の言葉：父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか分からないのです。（ルカ 23:34）

第2の言葉：よく言っておくが、あなたは今日私と一緒に楽園にいる（ルカ 23:43）

第3の言葉：女よ、見なさい。あなたの子です（ヨハネ 19:26）

第4の言葉：エリ、エリ、レマ、サバクタニ。（わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか）（マタイ 27:46）

第5の言葉：渴く（ヨハネ 19:28）

第6の言葉：成し遂げられた（ヨハネ 19:30）

第7の言葉：父よ、私の霊を御手に委ねます。（ルカ 23:46）

『フルダ 1891』に収録される〈Da Jesus an dem Creutze stund〉では、2節から8節までで歌われるイエスの7つの言葉の前後にそれぞれ説明的な1節、9節テキストが加えられる。

『フルダ 1891』 No. 46

1. Da Jesus an dem Kreuze stund und ihm sein Leib war ganz verwund't, mit bitterlichen Schmerzen, die sieben Worte, die er sprach, betracht in deinem Herzen.	イエスが十字架の上に立った時、 そしてその時、彼はかなり負傷していたが、 痛みを伴いながら、 彼が語った7つの言葉を 心において顧みてください。
---	--

2節から8節で、7つの言葉がそれぞれ歌われる。

¹⁸⁴ B I, p. 445

¹⁸⁵ 小倉慮人「新聖歌集評釋（七）」、『日本カトリック新聞』1934年3月25日（441号）、4頁。

9. Wer Jesum ehret immerfort,
und oft gedenkt der sieben Wort',
des will auch gedenken
und ihm durch seines Sohnes Tod,
ein ew'ges Leben schenken.

イエスのことをたたえ、
其の7つの言葉をいつも思い起こす人は
神のことも思う人です。
神は、その人々に、御子の死を通して、
永遠の命を贈るでしょう。

56. なやみ疲れまし

『公教聖歌集』の「御苦難」の聖歌〈なやみ疲れまし〉の原曲は〈O Traurigkeit, o Herzeleid〉である。第1節はシュペーによって、2から8節はリスト（Johann Rist, 1607～1667）によって書かれたが、作曲者は不詳である。

『フルダ 1891』には、47〈O Traurigkeit, o Herzeleid〉として6節のテキストとともに、掲載されているが、第2節以降のテキストは、リストによるものとは大きく異なっている。

『フルダ 1891』 No. 47

1. O Traurigkeit, O Herzeleid!
Ist das nicht zu beklagen?
Gott des Vaters einig Kind
wird ins Grab getragen.

ああ悲しいことよ、ああ痛ましいことよ。
なんと嘆かわしいものか。
父である神のひとり子が
墓へと運ばれる。

2. O höchstes Gut, unschuld'ges Blut!
Wer hätt' das mögen denken,
dass der Mensch den Schöpfer sollt',
an das Kreuz aufhenken!

ああ最高の善よ、汚れのない血よ。
誰が思っただろう。
人間が創造主を
十字架にかけることになるとは。

『フルダ 1891』と『公教聖歌集』では、テキストは内容が大きく異なっている。『公教聖歌集』においては、1節から3節までのテキストで、イエスが十字架を担いでゴルゴタの丘を登っていく姿が描かれる。第4節では、3節までの情景描写から一転している。「罪は死のつるぎ 神わがために ひとたび死して いのちたまふ」とあり、イエスの十字架上の死は、全世界のすべての人の罪を償うもので、その信仰があれば、罪が赦され、新しい命を受けることができるという、キリスト教の中心的な教えそのものが歌われる。ローマの信徒への手紙 5:8（そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。）を始め、聖書の随所にこのことは示される。

57. こよなきめぐみの

『公教聖歌集』の「十字架」の聖歌〈こよなきめぐみの〉は、『公教會聖歌集』（第2版以降）の「栄光の十字架」の聖歌〈こよなきめぐみの〉から引き継がれた聖歌である。元となった聖歌は、『フルダ 1891』に掲載される〈Christ spricht zur Seele〉である。この聖歌の出典聖歌集として、『フルダ 1891』には「Padernborn 1609」が示唆されている。

『フルダ 1891』 No. 36

1. Christ spricht zur Seel':	キリストは魂へ語り掛ける
“O Tochter mein, heb auf dein Kreuz,	「私の娘よ、あなたの十字架に上り、
schick dich darein	そこに自分を送りなさい。
es kann und mag nicht anders sein;	それ以外であってはならない。
das Kreuz, das ich getragen hab',	私があなたのために運んだ十字架を、
mußt du, mein Kind, nicht werfen ab.	子供よ、決して払いのけてはならない」

『公教會聖歌集』と『公教聖歌集』のテキストはおおむね一致するが、それらは原曲の詩からは離れて、極めて自由に作詞されている。『公教會聖歌集』（1930）の第1節「こよなきめぐみの きみが十字架を 悦びおへかし 萬のはらから」、第5節「こよなくうれしき 主の十字架をば 喜び負はなん 臨終（いまは）の時まで」からは、イエスの十字架によって救われている喜びをもって自分たちも自分の十字架を担ごう、という十字架に対する深い信心を読み取ることができる。

58. 頌めよたたへよ

『公教聖歌集』の「十字架」の聖歌〈頌めよたたへよ〉は『公教會聖歌集』の〈頌めよたたへよ〉から引き継がれた聖歌である。原曲はラテン語聖歌〈Crux ave benedicta〉である。ドイツ語版聖歌〈Sei, heiliges Kreuz, gegrüßet〉は、1810年に出版された *Psalteriolum Cantionum catholicarum a RR, PP, Soc. Jesu etc. Ed. Novissima. Cum Permissu Superiorum. Treviris, J. A. Schroell* にテキストのみ掲載されている¹⁸⁶。

Sei, heiliges Kreuz, gegrüßet,	聖なる十字架よ、あなたに挨拶します。
An dem mein Gott gebüßet	そこで私の神は、贖われました
Für aller Menschen Schulden	すべての人間の罪を
Aus Lieb und freien Dulden.	愛と進んで受けた忍耐をもって。

『公教會聖歌集』（1930）、『公教聖歌集』は各テキストの中で、十字架への信心を歌い

¹⁸⁶ B IV, p. 135.

上げる。その中では、輝き、ほめたたえあげられる十字架、畏れられる十字架、救いをもたらす十字架がそれぞれ表現されている。

60. 傷ましくも立てる

『公教聖歌集』において「かなしみの聖母」の聖歌として掲載される〈傷ましくも立てる〉は、19世紀の聖歌集に多く掲載されている〈Göttlich, Jesus, ist die Liebe〉に由来する。原曲では、悲しみの聖母ではなく、イエスの受難に焦点が当たっている。

B IV, No. 74

Göttlich, Jesus, ist die Liebe,	イエスよ、それは神なる愛です。
die du mir bewiesen hast;	あなたが私たちに明かしてくださった愛。
du, Gott, bist aus Liebestriebe Mensch,	神なるイエスよ、
	あなたは愛に駆られて人となり、
und trägst die Kreuzeslast.	十字架の重荷を背負いました。
Menschenheiligt die am Herzen,	人間の救いはあなたの御心にあります。
Sünder sind sie allzumal;	人間はみな罪びとです。
und du duldest ihre Schmerzen,	あなたは人間の痛みを耐え忍び、
geht für sie in Todesqual.	彼らのために死の苦しみへと向かいました。

一方『公教聖歌集』では、十字架のふもとで悲しむ聖母（第1節）、復活したイエスと出会う聖母（第2節）が描かれ、第3節ではより一般的な聖母賛美が行われる。特に、第2節「贖ひのみこころは 母のみ知ります み弟子らは打散り ヨハネのみ在き 主は母をみ弟子に 御弟子をみ母に あたへつ委ねつつ 事切れたまひぬ」は、ヨハネ19:26-27（イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。）をもとにした内容である。

61. み子の十字架の

『公教聖歌集』の「悲しみの聖母」の聖歌〈み子の十字架の〉は、『公教會聖歌集』の「聖母の御悲哀」の聖歌〈御子の十字架の〉から引き継がれた聖歌である。小倉の評釈には、「有名なスタバト・マーテルである」¹⁸⁷と記述されている。

スタバト・マーテルとは、キリストの受難に立ち会う聖母マリアの悲しみを黙想する歌である。悲しみに暮れる聖母への崇敬は、特に、ルカ 2:35「あなた自身も剣で心を刺し

¹⁸⁷ 小倉慮人「新聖歌集評釋（七）」、『日本カトリック新聞』1934年3月25日（441号）、4頁。

貫かれます」やヨハネ 19:25-27（イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「女よ、見なさい。あなたの子です」と言われた。）をもとに開花した¹⁸⁸。特にその信仰は、13世紀から広まり、続誦の形式で典礼に取り入れられた。多くの続誦はトリエント公会議で廃止、あるいは制限されたが、スタバト・マーテルは、1727年に導入された「悲しみの聖母の祝日」（9月15日）のミサの続誦および聖務日課の賛歌となった¹⁸⁹。

中世に成立したラテン語の原詩は、トーディ（Jacopone da Todi, ca. 1230～1306）によるもので20節までのテキストを持つ。日本の聖歌集に掲載されるスタバト・マーテルと同一旋律は『ケルン 1908』の53〈Christi Mutter stand mit Schmerzen〉として、20節までのテキストとともに掲載されている。

『公教会聖歌集』は14節までであり、基本的にラテン語の原詩に沿う形で各節が日本語に翻訳され、原文の15節から20節までのテキストは省略されている。一方、『公教聖歌集』では、旋律を2度連ねる形で記譜されており、8節までで構成されている。そのため、実質、16行分あることになる。その内容は、4節までは『公教会聖歌集』の8節までに相当と同じである。その後も、多少の違いはあるが、基本的にラテン語の原詩から一部が選択されて、日本語のテキストを構成している。

4.1.2.4 復活祭から聖霊降臨まで

復活節は、聖土曜日に始まり聖霊降臨後の土曜日に終わる。これは、①御復活から御昇天まで、②御昇天から聖霊降臨の大祝日の前日まで、③聖霊降臨の大祝日とその八日間に分けられる。

復活祭は、「主の勝利の日であつて、主が悪魔に打ち勝ち給ふた如く、各人の心の戦ひに於いても、主の勝利を得給ふもの」¹⁹⁰である。また、「我等は洗禮なり悔悛なりを以て、罪の墓より恩寵の生命に至ることを得るのも主の御復活に依るのであるから、復活は救ひの大祝日である」¹⁹¹。

復活祭から聖霊降臨祭の聖節までの復活節の典礼は以下の通り構成される。

吾主御復活の主日

白衣の主日（御復活祭の八日目）

¹⁸⁸ 鈴木宣明「マリアの悲しみ」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2009年、第4巻、816頁。

¹⁸⁹ 宮崎正美「スタバト・マーテル」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002年、第3巻、524頁。

¹⁹⁰ チェグレル『羅馬弥撒典書』、329頁。

¹⁹¹ チェグレル『羅馬弥撒典書』、329頁。

御復活後第二の主日
御復活後第三の主日
御復活後第四の主日
御復活後第五の主日
祈願祭（御復活後第五の主日後の月、火、水曜日）
吾主御昇天
御昇天八日中の主日

なお、第 2 ヴァティカン公会議の典礼刷新を受けて 1969 年に公布された新しい典礼暦では、復活節は、次のように説明されるものとなっている。

復活の 8 日間、および主の昇天と聖霊降臨の祝祭の重要性を保ちながらも、古代の実践に立ち返り、復活の主日から聖霊降臨の主日までの 50 日間を一つの祝日として歓喜のうちに祝うことにし、特にアレルヤを歌うにふさわしい季節とした。

192

『公教聖歌集』には、7 つの復活の聖歌（64 から 70）、喜びの聖母の聖歌（71、72）、御昇天の聖歌（73、74）が含まれる。

64. いはへやうたへ

『公教聖歌集』の「御復活」の聖歌〈いはへやうたへ〉は『公教會聖歌集』の〈祝賀へやうたへ〉から引き継がれた聖歌である。原曲は、1774 年にデニスによって作詞され、1835 年にダック（Augustin Duck, 1798～1845）によって作曲された〈Der Heiland ist erstanden〉である。『フルダ 1891』にも復活の聖歌として〈Der Heiland ist erstanden〉が掲載されている。

『フルダ 1891』 No. 58

1. Der Heiland ist erstanden,
befreit von Todesbanden,
der als ein wahres Osterlamm
für mich den Tod zu leiden kam.
Alleluja.

救い主は復活した。
死の束縛から解放された。
真の過ぎ越しの小羊として、
私のために死の苦しみを受けた方よ。
アレルヤ。

¹⁹² 宮越俊光「復活節」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2009年、第4巻、4巻、346～347頁。日本カトリック典礼委員会（編）『典礼暦年に関する一般原則および一般ローマ暦』、19頁。

2. Nun ist der Mensch gerettet
und Satan angekettet.
Der Tod hat keinen Stachel mehr,
der Stein ist weg, das Grab ist leer.
Alleluja.

今や人々は救われ、
サタンは鎖でつながれている。
死は、もはや苦痛ではない。
石は退けられ、墓は空っぽになった。
アレルヤ。

3. Der Sieger führt die Scharen,
die lang gefangen waren,
in seines Vaters Reich empor,
das Adam sich und mir verlor.
Alleluja.

勝利者は長い間とらわれていた人々を、
父の御国へと導き上げる。
アダム以来失っていた父の御国へと
引き上げる。
アレルヤ。

4. O, wie die Wunden prangen,
die er für mich empfangen!
Wie schallt der Engel Siegesgesang
dem Starken, der den Tod bezwang!
Alleluja.

ああ、我々のために被った傷が
なんと輝いていることか！
死を征服した強き御方への勝利の歌を
天使がなんと声だかく響かせていることか！
アレルヤ。

5. Mein Glaube darf nicht wanken;
o tröstlicher Gedanken!
Ich werde durch sein Auferstehn
gleich ihm aus meinem Grabe gehn.
Alleluja.

私の信仰のために揺らいではならない。
なんと慰めになることか！
私は彼の復活を通して、
彼のように私の墓から出るだろう。
アレルヤ。

日本語のテキストは、上記のドイツ語のテキストの内容と合致するものではないが、5節のうち最初の4節では、ドイツ語テキストの第1節、4節をもとに、イエスの復活の喜び、死の世界からの復活が勝利のイメージが描かれる。最終節である第5節では、「よろこび謳歌へ 主のごとわれら またよみがへりて あめ昇り往かん アレルヤ」（『公教會聖歌集』1930）とあり、復活後のキリスト昇天にも触れている点が特徴的である。

『公教會聖歌集』と『公教聖歌集』では、わずかな言い回し以外の相違はない。

65. しろたへの衣に

『公教聖歌集』の「御復活」の聖歌〈しろたへの衣に〉は、『公教會聖歌集』の〈しろき衣裳きて〉から引き継がれた聖歌である。テキストは、クロップシュトック（Friedrich Gottlieb Klopstock, 1724～1803）によるもので、旋律は、民衆歌〈Der Gutzgach auf dem Zaune saß〉に由来するものである。

B IV, No. 111

Preis dem Todes Überwinder,	死に打ち勝った方をたたえよう。
Sieh er starb auf Golgotha,	見よ、その方はゴルゴタで死んだ。
Preis dem Heiliger der Sünder,	罪びとを清める方をたたえよう。
Preis ihm und Alleluja.	彼をたたえよう。アレルヤ。
Lasst des Bundes Harfe klingen,	契約の琴を鳴らそう。
Lasst uns, lasst uns freudig singen:	喜びをもって歌おう。
Alleluja Jesus lebt,	アレルヤ。イエスは生きている。
Jesus lebt, Jesus lebt,	イエスは生きている。イエスは生きている。
Alleluja Jesus lebt.	アレルヤ。イエスは生きている。

ドイツ語のテキストも日本語のテキストも、死に打ち勝った主への賛美の歌が歌われる。しかし『公教聖歌集』（1930）ではそれだけで留まらず、第 3 節ではキリストが神と人間の取り次ぎ主であること（「主は甦がへりて 御さかえたかく ちちなる天主の みぎにのぼりて 我等のためにぞ 懇求したまへる」）、第 4 節ではキリスト昇天（「仰げやもろびと みそらをたかく あまつ御座より 主ぞ招きたまふ 浮世をわすれて 主を愛慕まつれ」）に関しても歌われている。

なお、『公教聖歌集』と『公教聖歌集』では多少の言い回しの相違はあるが、内容としては大きく異なることはない。

68. わがきみイエズス

『公教聖歌集』の「御復活」の聖歌〈わがきみイエズス〉は、『公教聖歌集』の〈わがきみイエズス〉から引き継がれた聖歌である。原曲は、フェルスペルによって作詞作曲され、1810 年に *Gesänge beyr Römischkatholischen Gottesdienste* の中で最初に出版された〈Wahrer Gott, wir glauben dir〉である。『ケルン 1908』には以下のテキストで掲載されている。

『ケルン 1908』 No. 61

1. Wahrer Gott, wir glauben dir,	真の神[キリスト]よ、 私たちはあなたを信じます。
Du bist mit Gottheit und Menschheit hier;	あなたは神と人類とともにここにいます。
Du, der den Satan und Tod überwand,	あなたは、サタンと死を克服し、
Der im Triumph aus dem Grabe erstand:	勝利のうちに、墓からよみがえりました。
Preis dir, du Sieger auf Golgotha,	あなたを賛美します。ゴルゴタの勝利者、
Sieger, wie keiner! Alleluja.	比べる方のいない勝利者である。アレルヤ。

2. Jesu, dir jauchzt alles zu, Herr über Leben und Tod bist du! In deinem Blute gereinigt von Schuld,	イエスよ、全てのものがあなたに叫びます。 あなたは、生と死の主です。 あなたの血によって、 私たちは罪から清められました。
Freu'n wir uns wieder der göttlichen Huld; Gib, daß wir stets deine Wege geh'n, Glorreich wie du aus dem Grabe ersteh'n!	私たちはあなたのいつくしみを再び喜びます。 あなたが墓から復活したように、 栄光に満たされて、 あなたの道を進ませてください。

上述のドイツ語テキストにある通り、『公教会聖歌集』と『公教聖歌集』でも、第 1 節は墓からの復活、第 2 節は受難を通した罪の贖いがテーマとなっている。ただし、ドイツ語テキストで「サタンと死を克服し den Satan und Tod überwand」とあるところを、「死と陰府の権力に打ち勝ち」(『公教会聖歌集』1930) と変更することによって、内容はさらにわかり易くなっている。

69. よろづのくにたみ

『公教聖歌集』に掲載される「御復活」の聖歌〈よろづのくにたみ〉の原曲は、〈Freu Dich erlöste Christenheit〉である。テキストは、最初の 2 節はトゥーリン (Ernst Xaver Turin, 1738~1810) によるもので、1787 年に出版されたマインツ教区の聖歌集 (*Neues christkatholisches Gesang und Gebetbuch für die mainzer Erzdiözes*) に基づいている。旋律は、1838 年にリンブルクで出版された聖歌集に基づいている¹⁹³。

B IV No. 113

1. Freu dich, erlöste Christenheit, freu dich und singe! Der Heiland ist erstanden heut, Halleluja! Singt fröhlich: Halleluja!	喜べ、あがなわれたキリスト教徒よ、 喜び歌え！ 救い主が今日復活した。 ハレルヤ！喜び歌え！ハレルヤ。
2. Drei Tage nur hielt ihn das Grab, freu dich und singe! Er warf des Todes Fesseln ab,	墓が彼を引き止めたのは 3 日だけだ。 喜び歌え！ 彼は死の鎖を投げ棄てた。

¹⁹³ ケルン大司教区のホームページに掲載される GL337 〈Freu dich, erlöste Christenheit〉のテキストを引用する。各節の由来については以下の通り、注意書きがある。1,2 Mainz 1787, 3-4 Paderborn 1886, 5-6 Regensburg 1881, 7 unbekannt. Erzbistum Köln, s. v. "Freu dich, erlöste Christenheit", accessed Oct 20, 2021, FreudicherloesteChristenheit.pdf (erzbistum-koeln.de)

Halleluja! Singt fröhlich: Halleluja!	ハレルヤ！喜び歌え！ハレルヤ。
3. Die Wunden rot, jetzt o wie schön, freu dich und singe! Wie Sonn- und Mondglanz anzusehn, Halleluja! Singt fröhlich Halleluja!	赤い傷よ。今はなんて美しいのだ。 喜び歌え！ 太陽と月のきらめきの如く見える。 ハレルヤ！喜び歌え！ハレルヤ。
4. Die Seite, die geöffnet war, freu dich und singe! Zeigt sich als Himmelspforte dar. Halleluja! Singt fröhlich Halleluja!	開かれた脇腹は、 喜び歌え！ 天の門として示される。 ハレルヤ！喜び歌え！ハレルヤ。
5. O Christ, nun feste Hoffnung hab, freu dich und singe! Auch du wirst gehn aus deinem Grab. Halleluja! Singt fröhlich Halleluja!	キリスト者よ、今や確固たる希望を持って。 喜び歌え！ 君も墓からやがて出ることになる。 ハレルヤ！喜び歌え！ハレルヤ。
6. Das Weizenkörnlein nicht verdirbt, freu dich und singe! Wiewohl es in der Erd stirbt. Halleluja! Singt fröhlich Halleluja!	小麦の穀粒は腐らない。 喜び歌え！ それでも、地に落ちて死んだとしても。 ハレルヤ！喜び歌え！ハレルヤ。
7. So wirst zum Leben du erstehn, freu dich und singe! Und deinen Heiland ewig sehn, Halleluja! Singt fröhlich Halleluja!	だからそのように君は命へと復活する。 喜び歌え！ そして救い主と永遠に相まみえる。 ハレルヤ！喜び歌え！ハレルヤ

『公教聖歌集』のテキストは第 1 節「よろづのくににたみ いはへうたへ 主はよみがへれり」、第 2 節「しの桎梏（かせ）くだきて みはかひらき 主はよみがへりぬ」、第 3 節「あいなるみきずは 陽にもまさり 照りいでかがやく」と、それぞれドイツ語テキストの 1 から 3 節に対応している。一方、第 4 節のテキスト「陰府にうち捷ちし われらの主に 世々みさかえあれ」は、全体の主題としては一致しているものの、他の詩節のように対応するドイツ語詩節はない。原曲では第 5 節以降、復活への信仰の先にある信者に対する教えが述べられており、『公教聖歌集』ではその代わりに、再度、復活とキリストの死への勝利が強調されていることになる。

70. よろこびたたへよ

『公教聖歌集』の「御復活」の聖歌〈よろこびたたへよ〉は、『公教會聖歌集』第3版(1926)の〈よろこび讃へよ〉から引き継がれたものである。『公教會聖歌集』(1926)の〈よろこび讃へよ〉は、初版(1918)、第2版(1920)の〈よろこびたたへよ〉(この聖歌の旋律は〈Erschalle laut, Triumphgesang!〉に基づく)の代わりに掲載された。そのため、この2つの聖歌は同一のテキストである。

原曲は、『ランツフト 1777』において初めて出版された〈Das Grab ist leer〉である。日本語聖歌とドイツ語原曲では旋律上の相違が中間部分にあるが、原曲として考えて問題ないだろう。この聖歌は、復活祭のための聖歌で、コールブレンナーによる詩とハウナーによる旋律がつけられている。8行ずつの5節で構成され、各節の最後でハレルヤが歌われる。日本の聖歌集に直接的な影響を与えたと考えられる『ケルン 1908』の聖歌集では、同じく5節で構成されるが、『ランツフト 1777』のテキストとは第2節以降は異なる。

『ケルン 1908』 No. 57

- | | |
|---|--|
| 1. Das Grab ist leer, der Held erwacht,
Der Heiland ist erstanden;
Da sieht man seiner Gottheit Macht,
Sie macht den Tod zu Schanden.
Ihm kann kein Siegel, Grab, noch Stein,
Kein Felsen widersteh'n;
Schließt ihn der Unglaub' selber ein,
Er wird ihn siegreich seh'n .
R: Alleluja! | 墓は空だ。英雄は目覚めた。
救い主が復活した。
人々は彼の神的な力をみた。
それは死をつぶした。
いかなる封印も墓も石も、
岩石も抗うことはできない。
不信心が彼を閉じ込めても、
[救い主は]不信心に勝利するだろう。
ハレルヤ。 |
| 2. Frohlocket, Christen, Gottes Sohn,
Der Hölle Überwinder,
Schwingt sich vom Kreuz zum Vaterthron
Als Mittler für uns Sünder.
Es drückt dem teuern Lösungskauf
Der Herr von Wort und Tat
Das Siegel der Vollendung auf,
Wie er's verheißen hat. | 喜べ。キリスト者よ。神の子よ。
地獄の征服者、
神の子は十字架から父の玉座へと回帰する。
罪びとのための仲介者として。
貴重な贖われたものに対して、
主は言葉と行いをもって
完成の封印を押す。
それは約束していた通りに。 |
| 3. Der Christen Glaub' ist nun gestützt
Durch Jesu Allmachtswerke;
Der zu des Vaters Rechten sitzt, | キリスト者の信仰はいまや、
イエスの全能の御業に支えられている。
彼は、父の右の座につき、 |

Gibt seinen Jüngern Stärke.
Sie schauen jetzt die Göttlichkeit
Der Lehre und der Macht,
Und geh'n mit Unerschrockenheit
In Tod und Grabesnacht.

弟子たちに強さを与える。
彼らは今、
御教えと力の神性を見ている。
そして恐れることなく
死と墓の夜に向かっていく。

4. Der uns're Schuld zu tilgen kam,
Den Kreuzestod zu leiden,
Er, unser wahres Osterlamm,
Erwarb uns Himmelsfreuden.
Er ruft uns Sündern liebeich zu:
"Der Friede sei mit euch!"
Bringt Gnade, Heil und Seelenruh',
Und stürzt des Satans Reich.

私たちの罪を消し去るために主は来られた。
十字架の死の苦しみを受けるために。
主は私たちの真の過越の小羊、
私たちのために天の喜びを得られた方。
主は私たち罪びとを、愛をもって呼ばれる。
「平和があなたがたと共にあるように！」
恵み、救い、魂の安息をもたらして下さる。
そしてサタンの王国を打倒する。

5. Dir danken nun, Herr Jesu Christ,
Die Völker aller Zungen,
Daß du vom Tod erstanden bist,
Das Heil uns hast errungen.
Herr, bleib' bei uns, wenn's Abend wird,
Daß wir nicht irre geh'n,
So wird die Herde wie der Hirt
Einst glorreich aufersteh'n.

主イエス・キリスト、今あなたに感謝する
あらゆる言語の諸民族は、
あなたが死から復活したこと、
私たちに救いをもたらしたことを。
主よ、夜になっても共にいてください、
私たちが迷わないように。
羊飼いのように、この群れがいつか
栄光のうちに復活するようにしてください。

ドイツ語テキストでは、主の復活、昇天、さらにそれに基づくキリスト教信仰について、内容豊かに歌われる。一方、『公教會聖歌集』と『公教聖歌集』では、第 3 節までのテキストがすべて復活をテーマにしている。『公教會聖歌集』（1930）においては第 1 節「陰府の権力にぞ うちかちたまへる」、第 2 節「死の戸を開きて よみがへりましぬ」は、第 3 節「瑩墓（はか）をいでましぬ」と、それぞれイエスが死者の世界に打ち勝って、復活したことを強調する内容となっている。

71. ああみははマリア

『公教聖歌集』の中で「喜びの聖母」として掲載される〈ああみははマリア〉は、『公教會聖歌集』の〈やよ聖母マリア〉から引き継がれた聖歌である。原曲は、1623 年にシュペーによって作詞された〈Laßt uns erfreuen herzlich sehr〉である。この聖歌は、『ケルン 1908』にも掲載されている。

『ケルン 1908』 No. 64

1. Laßt uns frohlocken herzlich sehr!

Alleluia.

Maria seufzt und weint nicht mehr.

Alleluia.

Der Himmel ist von Wolken rein,

Alleluia.

Jetzt glänzt der liebe Sonnenschein!

Alleluia.

心から喜ぼう。

アレルヤ。

マリアはもはやため息もつかず泣かない。

アレルヤ。

空には雲一つない。

アレルヤ。

いまや、愛すべき日の光が輝いている。

アレルヤ。

2. Wo ist, o freudenreiches Herz,

Alleluia.

Wo ist jetzt all dein Weh und Schmerz?

Alleluia.

Wie wohl ist dir, o Herz, wie wohl!

Alleluia.

Du bist nun aller Freuden voll!

Alleluia.

どこにあるのか、喜びに満ちた心よ。

アレルヤ。

どこにあるのか、

今あなたの苦しみと痛みは。

アレルヤ。

なんて幸せなこと！

心よ。なんて幸せなことよ！

アレルヤ。

あなたは今すべての喜びに満ちている。

アレルヤ。

3. Sag, o Maria, Jungfrau rein,

Alleluia.

Kommt das nicht her vom Sohne dein?

Alleluia.

Ach, ja, dein Sohn erschienen ist,

Alleluia.

Kein Wunder, daß du fröhlich bist,

Alleluia.

清きおとめマリアよ。言ってください。

アレルヤ。

それはあなたの息子から来たのではないか。

アレルヤ。

ああ、確かにあなたの息子は現れた。

アレルヤ。

あなたが喜んでいることは不思議ではない。

アレルヤ。

4. Aus seiner heil'gen Wunden Mal',

Alleluia.

Entströmt ein heller Freudenstrahl,

Alleluia.

Der nun nach bitterm Leid und Schmerz

彼の聖なる傷跡から、

アレルヤ。

明るい喜びの光があふれ出てくる。

アレルヤ。

いまやひどい苦しみと痛みを後にしたものだ

Alleluia.	アレルヤ。
Mit Wonn' erfüllt dein Mutterherz.	あなたの母としての心は喜びで満ちている。
Alleluia.	アレルヤ。
5. Dich grüßen wir mit Innigkeit,	親密さをもってあなたに挨拶する。
Alleluia.	アレルヤ。
O Mutter, in der Freudenzeit.	ああ、母よ。喜びの時にいる方よ。
Alleluia.	アレルヤ。
O send auch uns ein Tröpflein her	ああ、私たちにも雫を送ってください。
Alleluia.	アレルヤ。
Aus deinem großen Freudenmeer.	あなたの大きな喜びの海から。
Alleluia.	アレルヤ。

『公教會聖歌集』と『公教聖歌集』のテキストは、上記のドイツ語テキストと同様に、各行ごとにアレルヤを挿入する形で構成されている。第1節「やよ聖母マリア なみだ拭ひませ 雲はれわたりて 天つ日出でたり」、第2節「憂苦も悲しみも 痕跡なく消失せ よろこび楽しみ いまこそ涯なき」（『公教會聖歌集』1930）はそれぞれ、原曲の1節、4節を踏まえた内容で作詞されている。

一方、3節、4節は、元のテキストにはない内容である。3節では、「見よ聖子耶蘇は 死の権力に勝ち 陰府の門破りて 墓を出でましぬ」（『公教會聖歌集』1930）と、他の復活の聖歌でたびたび歌われてきた、イエスの死の世界への勝利としての復活が再度描かれている。4節は、聖母マリアとともにイエスの復活の歌を響かせよう、という内容である。

『公教聖歌集』は『公教會聖歌集』のテキスト内容を引き継いでいる。

72. あめなるきさい

『公教聖歌集』に「喜びの聖母」の聖歌〈あめなるきさい〉は、『公教會聖歌集』の「天の元后」の聖歌〈天なる王后（きさい）〉から引き継がれたものである。原曲は、〈Freu dich, du Himmelskönigin〉である。原曲は、多くのドイツ語圏の聖歌集に17世紀以来登場する。日本へ直接影響を与えたのは、『フルダ 1891』の〈Freu dich, du Himmelskönigin〉と考えられる。

『フルダ 1891』No. 64

1. Freu' dich, du Himmelskönigin,	喜べ。天の女王よ！
freu' dich, Maria!	喜べ。マリアよ！
R: Freu' dich, das Leid ist alles hin.	苦しみはすべてなくなった。

Alleluja! Bitt Gott für uns, Maria!	アレルヤ。私たちのために祈ってください。 マリアよ、
2. Den du zu tragen hast verdient, der hat uns allesamt gesühnt.	あなたが身ごもるにふさわしいとされた 御子は私たちすべてを贖ってくださった方。
3. Er ist erstanden von dem Tod, wie vorgesagt der wahre Gott.	彼は死から復活した。 真の神が約束してくださったように。
4. Woll'st uns, Maria, doch beistehn, daß wir mit ihm glorreich erstehn.	マリアよ、私たちをいつも助けてください。 私たちが御子とともに 栄光のうちに復活するように。

曲の冒頭、マリアへ呼びかけるテキストは、原曲（喜べ。天の女王よ！Freu dich, du Himmelskönigin!）と『公教会聖歌集』（1930）の〈天なる王后 歎びたまへ〉は一致している。

『公教会聖歌集』（1930）ではその後、第1節と第2節で、預言通り、マリアが身ごもった御子が復活したことを歌う（爾に投胎（やど）りたまへる者は 宣まへる如 甦がへらせり）。このテキストには、原曲の第2節、3節の内容との関連がみられる。

『公教聖歌集』は『公教会聖歌集』のテキスト内容を引き継いでいる。

73. オリブのやまより

『公教聖歌集』の「御昇天」の聖歌〈オリブのやまより〉は、『公教会聖歌集』の「聖主御昇天」の聖歌〈オリベト山より〉から引き継がれた聖歌である。なお、上述の通り、これまでの復活の聖歌の中では既に、キリスト昇天が触れられていることが多い。

キリストの昇天は、キリストが現世での生涯を完結し、昇天の凱旋の歌に開かれる天の門から、変容した姿で、贖いの初穂である古聖所の大祖を伴って、神の御栄光に王として入られるものである¹⁹⁴。パウロはフィリピへの手紙 2:7-10 の中で、キリストについて、「人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで獣人でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです」と記している。

主の公現の主日の典礼内の聖書箇所としては、以下の通り指定されている¹⁹⁵。

¹⁹⁴ チェグレル『羅馬弥撒典書』、381頁。

¹⁹⁵ チェグレル『羅馬弥撒典書』、383～387頁。

入祭誦：使徒言行録 1:11、朗読：使徒言行録 1:1-11、福音朗読：マルコ 16:14-20、奉献文詩篇 46:6、聖体拝領誦：詩篇 67:33,34

『公教聖歌集』の中には、主の公現の聖歌は 2 つあり、ドイツ系の聖歌は〈オリブのやまより〉のみである。原曲は、〈Christus fährt auf mit Freudenschall〉であり、テキストはボーネ (Heinrich Bone, 1813~1893) によるものである。日本の聖歌集編纂にあたって影響を与えたのは、『ケルン 1908』に掲載されたものと考えられる。

『ケルン 1908』 No. 68

- | | |
|---|--|
| 1. Christus fährt auf mit Freudenschall
Zum Vater durch die Himmel all'.
Auf Erden ist sein Werk vollbracht,
Die Himmelsport' ist aufgemacht.
Alleluja! | キリストは、喜びの響きとともに、
天を通過して父のもとへ昇る。
地上では彼の働きは成就し、
天の門が開かれている。
アレルヤ！ |
| 2. Im Himmel, unserm Vaterland,
Sitzt er zu Gottes rechter Hand.
Sein' Herrlichkeit und Majestät
Weit über alles Denken geht.
Alleluja! | 私たちの父の御国である天で、
彼は神の右の座につく。
彼の栄光と威光は
すべての考えを超える。
アレルヤ！ |
| 3. Drum sei gelobt im höchsten Thron
Der aufgefah'ne Menschensohn!
Wir seh'n hinauf, er sieht herab:

Nie geht uns seine Hülfe ab!
Alleluja! | いと高き玉座[神の右の座]におられる
復活した人の子がたたえられますように。
主を仰ぐ私たちを、
主は目にとめてくださいます。
私たちには彼の助けが尽きることはない。
アレルヤ！ |
| 4. Dort will er unser Mittler sein,
Des soll sich alle Welt erfreu'n.
Dann wird der Tag erst freudenreich,

Wann wir ihn seh'n im Himmelreich.
Alleluja! | そこで主は私たちの仲介者でおられます。
全世界よ、そのことを喜べ。
そうすれば、
天の御国で彼と会いまみえるその日は、
喜びにあふれたものとなるでしょう
アレルヤ！ |

『公教聖歌集』において、上記のテキストとの関連性がみられるのは、第 1 節と 4 節

である。第 1 節では、ドイツ語テキストの第 2 節を踏まえ、イエスが昇天した後に父の右の座についたことが歌われる。『公教会聖歌集』(1930)の第 2、3 節(「ガリラヤ人等よ 何故悲しみつつ 空をあふぎ見て 爾曹は立てるや」「爾曹をはなれて 天のぼりし 主は 再び来ますと 聖天使告示せり」)は、使徒言行録 1:11(「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたイエスは、天に昇って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またお出でになる。」)に基づいている。第 4 節は、ドイツ語テキスト第 4 節を踏まえ、天において人々が主と相まみえることができるという内容である。

4.1.2.5 聖霊降臨際の聖節

聖霊降臨の主日は、「聖霊降臨の出来事ならびに教会とその宣教活動の始まりを祝う」¹⁹⁶ものである。第 2 ヴァティカン公会議による典礼暦の改訂に伴い、「御復活の主日から聖霊降臨の主日に至るまでの 50 日間は、一つの祝日として、またより適切には『大いなる祝日』として、歓喜に満ちて祝われる」¹⁹⁷とされ、固有の八日間は祝われなくなった。しかし、それ以前には、聖霊降臨祭の聖節は、聖霊降臨の大祝日と其の八日間として祝われた¹⁹⁸。

この約束された聖霊の派遣(降臨)の出来事は、使徒言行録 2:1-42「五旬祭の日が来て、かれらがみな一緒に集まっていると、突然、天から激しい風が吹いてくるような音が聞こえ、彼らが座っていた家にみち、火のような舌が現れ、分かれて、おのおの上にとどまった。すると、彼らはみな、聖霊に満たされ、霊がいわせるままに、いろいろの国の言葉で話し始めた」に記されている。

聖霊降臨の主日に関連する聖書箇所、また続誦は以下の通りである¹⁹⁹。

入祭誦：知恵の書 1:7、朗読：使徒言行録 2:1-11、福音朗読：ヨハネ 14:23-31、奉献文：詩篇 67:29-31、聖体拝領誦：使徒言行録 2:2,4

続誦：聖霊來たり給へ、天より御光の輝きを發ち給へ。

貧しき者の父、恩恵の施與主、心の明にます者來たり給へ。

最優れたる慰主、靈魂の甘露なる珍客、精神を爽快にする清涼藥。

勞れたる時の憩、暑き時の涼み、憂ふる時の慰。

至つて福なる光よ、主を信ずる者の心に來たり充ち給へ。

主の扶助あるに非ざれば、人には全體罪ならざる所なけん。

¹⁹⁶ 宮越俊光「聖霊降臨」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002年、第3巻、770～771頁。

¹⁹⁷ 日本カトリック典礼委員会(編)『典礼暦年に関する一般原則および一般ローマ暦』、19頁。

¹⁹⁸ チェグレル『羅馬弥撒典書』、393頁。

¹⁹⁹ チェグレル『羅馬弥撒典書』、396～401頁。

希はくは汚れたるを清め、乾けるを潤し、傷すけられたるを癒し給へ。
硬きを靡かせ、冷えたるを暖め、曲れるを直くし給へ。
主を頼む信者に神聖なる七恵を施し給へ。
善徳の功を積み、救霊の域に至り、永遠に歡ぶを得せしめ給へ、アメン、アレルヤ。

『公教聖歌集』には、7つの聖霊の聖歌（75 から 81）が掲載され、そのうち3つ（75～77）がドイツ系の聖歌である。

75. みたまよゆたけき

『公教聖歌集』の「聖霊」の聖歌〈みたまよゆたけき〉は、『公教會聖歌集』の〈やよ聖きみたま〉から引き継がれた聖歌である。もととなった聖歌は、伝統的なラテン語聖歌〈Veni Creator〉である。18世紀の啓蒙思想に基づく典礼改革期にドイツ語に翻訳され、新たなテキストがリンデンボルン（Heinrich Lindenborn, 1706～1750）によって作詞され、『シオンの娘 1741』に7節までのテキストとともに掲載された。20世紀の『フルダ 1891』、『ケルン 1908』の聖歌集にこの聖歌は含まれておらず、日本の聖歌集編纂に当たって直接的な影響を与えた形を特定するのは困難である。

『シオンの娘 1741』の聖歌は7節までのテキストを持ち、聖霊の7つの賜物を念頭にした構成と考えられる。最初の5つの内容は聖霊賛美句であり、6、7節のテキストは父と子と聖霊の全聖性に言及しながら、三位一体性の説明が行われる。こうした構成は『公教會聖歌集』の〈やよ聖きみたま〉にも共通する。

『公教聖歌集』も7節までのテキストを持つことに関しては共通するが、その内容はドイツ語の詩や『公教會聖歌集』とは大きく異なっている。

『シオンの娘 1741』 LXXXI. p. 284.

- | | |
|--|----------------------------|
| 1. Komm komm o Geist, der alles schafft, | 聖霊よ、来てください、すべての創造主よ。 |
| Besuch mit deiner hochsten Kraft, | あなたの最高の力をもってきてください。 |
| und fülle mit dem Gnaden, | そして、恵みで満たしてください。 |
| Schein die Herzen deren, welche dein. | あなたが作られたものの
心を照らしてください。 |
| 2. Der du der Tröster wirst genannt, | あなたは慰め主と呼ばれる方、 |
| Ein Gabe von des Höchsten Hand, | いと高きものの御手の、恵み。 |
| Ein Brunn des Lebens Liebe vol, | 愛に満ちた命の泉。 |
| Ein Salbung, so uns stärcken sol. | 私たちを強める塗油。 |

- | | |
|---|---|
| <p>3. Dein sieben Gaben sind besant.
O Finger gottes rechter Hand,
der stumme Zunden redend macht
Gleichwie der vater zugesagt</p> | <p>7つの贈り物が送られています。
神の右の手の指よ。
沈黙していた舌が語るようになった。
まさしく、御父が約束されたように。</p> |
| <p>4. Entzünd in uns des Lichtes, Schein,
Dem Herzen giess die Liebe ein,
Und was in uns ist matt uns schwach,
Durch deine Kraften stärker mach.</p> | <p>私たちのうちに光をともしてください。
心に愛を注いでください。
疲れ切った弱い私たちの心を
あなたの力で強くしてください。</p> |
| <p>5. Vertreib von uns die Feinde weit.
Schenck uns des Friedens wahre Freud.
Ach führe das Herze allzeit an
zu meiden, Was uns schaden kan.</p> | <p>私たちから敵を遠ざけてください。
私たちに平和の真の喜びを送ってください。
いつでも私たちを傷づけるものを
避けられるよう、心を導いてください。</p> |
| <p>6. Schick uns die Gnad
vom höchsten Thron,
Dass man den Vater, samt den Sohn,
Und Dich, der du bist beider Geist,
Erkenne recht und ewig preist.</p> | <p>いと高き玉座から
恵みを贈ってください。
御父、御子とその両方の霊であるあなたを
正しく悟らせてください。
永遠に賛美するようにさせてください。</p> |
| <p>7. Dir sen, O Vater, jederzeit,
Und auch dem Sohne Lob bereit
Zusamt dem Geist, den schick zur Gab
Der Sohn in diese Welt herab!</p> | <p>御父よ、あなたにいつも、
そして御子に賛美をささげます。
さらにあなたと御子がこの世に恵みとして
送ってくださる聖霊にも賛美をささげます。</p> |

77. 聖霊よ天降りて

『公教聖歌集』の「聖霊」の聖歌〈聖霊よ天降りて〉にはヴェニ・クレアトルと併記されている。この聖歌は『公教會聖歌集』の〈聖霊よ天降りて〉から引き継がれた聖歌である。日本へ直接の影響を与えたのは、『フルダ 1891』の〈Komm, heiliger Geist, kehr bei uns ein〉と考えられる。この聖歌には、「旋律はヴェニ・クレアトル・スピリトゥスの短縮版 Verkürzte Melodie des Veni Creator Spiritus」との注記がある。また、『フルダ 1891』には、もとのグレゴリオ旋律とともに、ラテン語聖歌の項目の中に 215 〈Veni Creature Spiritus〉も掲載されている。その聖歌の注にも、聖歌 78 が 215 の翻訳版であることは記載されている。なお、『フルダ 1891』のテキストは、より一般的なルターのドイツ語翻訳とは大きく異なっている。

『フルダ 1891』 No. 78

1. Komm, heil'ger Geist,
kehr' bei uns ein,
besuch das Herz der Kinder dein,
erfülle sie all' mit deiner Gnad',
die deine Macht erschaffen hat
- 聖霊よ、来てください。
私たちのところに来て、
あなたの子供の心をたずねてください。
あなたの力が生み出したあなたの恵みで
彼ら全員を満たしてください。
2. Der du der Tröster wirst genannt,
vom höchsten Gott ein Gnadenpfand,
ein Lebensbrunn, Licht, Lieb' und Glut,
der Seele Salbung, höchstes Gut.
- あなたは慰めをくれる人、
最高の神からの恵みの誓い、
生命の泉、光、愛、輝き
魂の塗油、もっとも高い神です。
3. O Schatz, der siebenfältig ziert,
o Finger Gottes, der uns führt,
Geschenk, vom Vater zugesagt,
du, der die Zungen reden macht.
- ああ、七重の宝よ、
ああ、我々を導く神の指よ、
父から約束された贈り物、
舌を話すようにしてくれる方である。
4. Entzünd in uns des Lichtes Schein,
gieß Lieb' in unsre Herzen ein,
stärk unsers Leib's Gebrechlichkeit
mit deiner Gnad' zu jeder Zeit.
- 私たちの光の輝きに光を付け
私たちの心に愛を注ぎ
常に、あなたの恵みを持って
私たちのもろい命を強めてください。
5. Treib weit von uns des Feind's Gewalt,
in deinem Frieden uns erhalt,

daß wir, geführt von deinem Licht,
in Sünd' und Leid verfallen nicht.
- 敵の暴力から私たちを遠ざけてください。
あなたの平和の中で
私たちを守ってください。
私たちが、あなたの光に導かれて、
罪や苦しみに陥らないようにしてください。
6. Den rechten Glauben uns bewahr,
daß wir bekennen immerdar
des Sohns und Vaters Majestät
und dich, der aus von beiden geht.
- 私たちに正しい信仰を守らせてください。
いつも告白できるように。
御子と御父の威光を。
両者から来られるあなた[聖霊]を。
7. Dem Vater Lob im höchsten Thron
und seinem auferstanden Sohn,
- 最高の玉座におられる御父と
復活した御子に賛美がありますように。

dem Tröster auch der Christenheit
jetzt und in alle Ewigkeit.

御子は、キリスト教世界の今、
そして永遠の慰め主でもあります。

日本語のテキストには〈Veni Creator Spiritus〉らしさは残っていない。『フルダ 1891』は、聖霊の賜物の「7」を念頭において 7 節までのテキストで作詞されているが、日本語聖歌は 6 節までとなっており、そうした点も抜けている。

『公教聖歌集』（1930）の第 1 から 5 節は、「聖霊よ天降りて」と始まり、いずれも聖霊への祈りがささげられるが、6 節は、三位一体の神への賛美のテキスト（聖父聖子聖霊の 三位一に在す たふとき天主に 世々御榮あれ）である。

4.1.2.6 三位一体の大祝日

古代の教会暦には三位一体の祝日はなかったが、1334 年に教皇ヨアンネス 22 世（Ioannes XXII, 1244?~1334、在位 1316~1334）がこの祭日を一般暦に加えた²⁰⁰。この日は救済史的な具体的な出来事を主題として掲げているわけではないが、教理崇敬心に基づく祭日である。

慈しみ深い御父が御子の誕生、死と復活、および聖霊の派遣によって救済の業を全うしたことを記念して毎年祝う降誕節と復活節が終わってから、この祭日に父と子と聖霊をほめたたえることは適切なことであるといえよう。²⁰¹

『羅馬弥撒典書』（1935）には、三位一体の大祝日の典礼中には、三位一体である神の御慈悲と、御哀憐とを賛美し、その御恩を感謝するように勧められる²⁰²。

三位一体の祝日の典礼における各聖書箇所は以下の通りである²⁰³。

入祭誦：トビト 12:6、書簡朗読：ローマ 11:33-36、昇階誦：ダニエル 3:55-56、福音朗読：マタイ 28:18-20、奉献文：トビト 12:6、続誦：ルカ 6:36-42

『公教聖歌集』には、三位一体の主日の聖歌として 1 曲（82）掲載されている。

²⁰⁰ 石井祥裕「三位一体【三位一体の祭日】」『新カトリック大事典』東京：研究社、1998 年、第 2 巻、1120 頁。

²⁰¹ P. ネメシェギ「三位一体」『新カトリック大事典』東京：研究社、1998 年、第 2 巻、1118~1119 頁。

²⁰² チェグレル『羅馬弥撒典書』、404 頁。

²⁰³ チェグレル『羅馬弥撒典書』、403~408 頁。

82. 父なるみかみよ

『公教聖歌集』の「三位一體」の聖歌〈父なるみかみよ〉は、『公教會聖歌集』第2版（1920）以降に掲載される〈愛なる天主よ〉から引き継がれた聖歌である。原曲は、『フルダ 1778』において初めて掲載された、エルテルによる〈Gott, wir preisen deine Güte〉である。『フルダ 1778』と『フルダ 1891』はともに13節あり、テキストの変更は見られない。

『フルダ 1891』 No. 87

1. Gott, wir preisen deine Güte mit frohlockendem Gemüte; du bist unser Herr allein. Alles muß dich Vater nennen, deine höchste Macht bekennen; jede Kreatur ist dein.	神よ、我々はあなたの善意をたたえます。 喜びの心をもってあなたたたえます。 あなたは唯一の主。 万物はあなたを父と呼ばなければならない。 あなたの至上の力を認めなければならない。 すべての被造物はあなたのもの。
2. Engel, Kräfte mit den Thronen, alle, die im Himmel wohnen, Cherubim und Seraphim, preisen dich, Gott, ohn' Aufhören in vereinten Jubelchören; "Heilig" tönet ihre Stimm'.	天使、権力をもつ諸勢力、 天に住むすべてのもの、 ケルビムとセラフィムは、 神であるあなたを絶えず賛美します。 喜びの声を一つに合わせて。 「聖なるかな」とその声は響きます。

ドイツ語聖歌では、主である神、天使、使徒や聖人、イエス、イエスの聖名への賛美の言葉が13節にわたって叙述されている。一方、日本の聖歌では、三位一体の主日のための聖歌であることを踏まえて、第1節は父としての神、第2節では子としての神、第3節は聖霊としての神という三つの聖性を一連のテキストの中に当てはめるといって、極めて簡潔な方法をとっている。

旋律の観点では、原曲（『フルダ 1778』）は変ロ長調、『フルダ 1891』がハ長調、『公教會聖歌集』、『公教聖歌集』がト長調、という違いがある。また、『フルダ 1778』ではアラ・ブレーヴェで、二分音符単位で記譜されているが、『フルダ 1891』、そして日本の聖歌集では、4/4、四分音符単位で記譜されている。音の相違はない。

4.1.2.7 キリストの聖体の大祝日

聖体の祝日とは、キリストの聖体の秘跡のために捧げられる主の祝日であり、伝統的に三位一体の主日後の木曜日とされるが、その次の主日に祝うこともできる。この祝日が普

及するのは 14 世紀初めの教皇ヨハネス 22 世のときからで、聖体行列の日²⁰⁴として一般化した²⁰⁵。

『羅馬弥撒典書』（1935）には、聖霊降臨後第一主日の木曜日として、吾主キリストの聖體の大祝日が記されている。聖體の大祝日の典礼に関する聖書箇所と続誦は、『羅馬弥撒典書』の中で以下の通り指定されている²⁰⁶。

入祭誦：詩篇 80:17

書簡朗読：1 コリント 11:23-29

昇階誦：詩篇 144：15～16

続誦

シオンよ、汝が救主を讃へよ、讃歌と頌榮もて汝が王、汝が牧者を讃め謳へ。
汝が力の限り主をば讃へよ、主は萬の讃美に優りて偉大なり、いかなる讃美も主に足らへることなし。
今日しも謳ふは生けるパンにて、人の生命の素にぞあるなれ。
是こそ聖き晩餐の折に、主が十二聖徒に與へし其のパンなれや。
奇しき聖業に適はしの頌歌、聖意にかなふ讃美の歌もて、汝が歡喜びを高らにのべよ。
蓋は今日こそ、主の餐宴の制定を祝はん、莊嚴の日なれば。
新約の王は新約の法の過越祭定めて、舊約のそれをば収め給へり。
新たのものは舊きに代り、實體は假象を、光明は暗黒をば遂に除けり。
キリスト其の晩餐に自ら爲せしは、紀念に為せとの聖旨ぞ畏こし。
聖き制定の救ひの犠牲のパンと葡萄酒を献け奉つる。
パンは御肉に、葡萄酒は御血に化するの教義は信ずる者に與へらるるなり。
自然の法をば越へて、通曉れぬ事も見えざる事をも、生ける信仰は確かむるなり。
實體はあらぬ、パンと葡萄酒の形色のもとにぞ、貴き現實はかくれて潜めり。
御肉は糧に御血は飲料、いづれのものにも完きキリストこもり居ませり。
これを領くるも切らるる事なく、劈かるる事なく、析たるる事なく全体を領くなれ。
一人領くるも千人領くるも、ひとしく饗くれど一は生命に、一は死滅に至るの差別ぞ。
善きには生命、悪きには死滅、看よ同じく領くるも其の果は異ひり。
秘跡は劈かるも夢な迷ひぞ、斷片にこもるは全体とおなじを。

²⁰⁴ 聖体行列とは、聖体礼拝の一形式で、聖体顕示台などを用いて聖体を奉持して屋外を巡回する行列をさす。特に、キリストの聖體の祭日やその前後に勧められ、聖体に対する信仰と崇敬を表すしるしとして行われる。（宮越俊光「聖体行列」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002年、第3巻、732頁。）特にゲルマン国民は、この行列の習慣を非常に歓迎したといわれている。（ビーリッツ、カール・ハインリッヒ『教会暦—祝祭日の歴史と現在』松山与志雄訳、東京：教文館、2003年、185頁。）

²⁰⁵ 石井祥裕「聖体【祭日】」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002年、第3巻、729頁。

²⁰⁶ チェグレル『羅馬弥撒典書』、409～416頁。

折たるものは假象のみにて實體は劈かれず、減ることなし。

看よ、天使のパンは旅人の糧となり、實に子等の糧なれば、犬には投るまじ。

舊約のイザアクの犠牲、過越祭の羔、荒野に先祖の受けたるマンナは、其は皆其の
表なり

善き牧者、眞の糧なるイエズス、我等を憐み、我等を牧し、我等を護り、生けるもの
の國にて幸福をば見せしめよ。

萬を識り萬を能へ給へば、世を経る我等を養ひ給ひて、何れの日にか諸聖者諸共世嗣
を受けしめ、共に饗宴に與からしめ給へ。アメン、アレルヤ。

福音朗読：ヨハネ 6:56～59

奉献文：レビ 21:6

聖体拝領誦：1 コリント 11:26～27

なお聖体については、天主公教會から 1911 年に出版された『天主公教要理』中で、以
下の通り解説されている。

●聖躰の秘蹟とは何ぞや

▲聖躰の秘蹟は、パンと葡萄酒の形色の中にキリストの御體と御血の籠れる秘蹟なり

●聖躰の秘蹟には唯キリストの御體と御血のみ籠れるや

▲否、御靈魂も天主の性も全く聖躰の中に籠れるなり²⁰⁷

『公教聖歌集』には、11 の聖体の主日の聖歌（83 から 94）が含まれ、そのうち 1 曲
を除いて、すべて原曲をドイツの聖歌に見出すことができる。

83. 神こそ此處にいませ

『公教聖歌集』の「聖體」の聖歌〈神こそ此處にいませ〉は、『公教會聖歌集』の〈た
ふとき御まえに伏し〉は、から引き継がれた聖歌である。この原曲は、『ランツフト
1777』に掲載された〈Wir beten an dich〉である。『フルダ 1891』には、聖体拝領前後
の聖歌として 202 〈Wir beten an dich〉が掲載されている。また、この聖歌の出典とし
て、「ミヒヤエル・ハイドン」の名前も記されている。

『フルダ 1891』 No. 202

1. Wir beten an dich,
wahres Engelsbrot,
dich, Heiland, Herr,

あなたに祈ります。
眞の天使のパンであるあなたに。
救い主、主、

²⁰⁷ 天主公教會『天主公教要理』、95 頁。（第 3 部、聖躰の秘蹟の中にイエズスキリストの在す事）

barmherz'ger, großer Gott!
Heilig, heilig, heilig!
Du bist allezeit heilig.
Sei gepriesen ohne End'
in dem heil'gen Sakrament!

憐れみ深い偉大な神よ。
聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、
あなたは常に神聖です。
聖体のうちに終わりなく
賛美されますように。

2. Wir bitten dich,
erbarm dich, liebster Gott,
und segne uns,
gibt uns das täglich Brot.

あなたに願います。
神よ、憐れみたまえ。
愛に満ちておられる神よ、私たちに祝福し、
日々のパンを与えてください。

聖体の祝日のための聖歌であり、テキスト内容は、1、2 節とも、聖体への賛美と感謝が歌われる。『ランツフート 1777』では、2/4 で八分音符が支配的であるが、『フルダ 1891』では 4/4 で四分音符が支配的である。こうした『フルダ 1891』の旋律の特徴は、そのまま日本の聖歌にも引き継がれている。

日本語のテキストの中には「パン」という直接的な言葉はないものの、「我君イエズスこもりゐます たへなる秘蹟 永遠に稱えん」(『公教會聖歌集』1930) という表現において、イエスが現存する秘蹟、すなわち聖体への賛美が歌われている。また、第 2 節では「われらを やしなふ霊糧 (かて)」(『公教會聖歌集』1930) とあり、これも婉曲的に聖体を表現している。説明的であることによって、より具体的に聖体の意味を捕らえながらテキストを歌うことができる。

84. きよけき御身體

『公教聖歌集』の「聖體」の聖歌〈きよけき御身體〉は、『公教會聖歌』の〈きよき童貞なる〉から引き継がれた聖歌である。原曲は、15 世紀にさかのぼる〈Lobt all zungen〉である。『フルダ 1891』には、聖体の聖歌として 90 〈Preiset, Lippen, das Geheimnis〉が掲載されている。この聖歌には、「パンジェ・リングワ Pange lingua」の注記がある。〈Pange lingua gloriosi corporis mysterium〉とは、中世ラテン語の聖歌で、聖体の祝日のためにトマス・アクイナス (Thomas Aquinas, 1225~1274) によって作曲されたと考えられている。『フルダ 1891』のテキストは、ポーネの『カンターテ』(1847) から変更を加えたものである。また、旋律に関しては「グレゴリオ聖歌旋律の短縮版 Verkürzte Chormelodie」とある通り、元のラテン語のグレゴリオ聖歌を短縮したものとなっている。

『フルダ 1891』 No. 90

1. Preiset, Lippen, das Geheimnis

唇よ、栄光に満ちたこの体と

dieses Leibs voll Herrlichkeit
und des unschätzbaren Blutes,
das, zum Heil der Welt geweiht,
Jesus Christus hat vergossen,
König aller Wesenheit.

計り知れないほど尊い血の
神秘を賛美せよ。
世の救いのために聖別されたこの血は、
すべての存在の王、
イエス・キリストが流したものである。

2. Uns gegeben, uns geboren,
von der Jungfrau, keusch und rein,
ist auf Erden er gewandelt,
Saat der Wahrheit auszustreun',
und zum Ende seines Lebens
setzt er dies Wunder ein.

汚れなく、純潔なおとめから生まれ、
私たちに与えられたイエスは、
地上を歩まれ、
真理の種をまいた。
そして、生涯の終わりに
この奇跡を制定する。

3. In der Nacht beim letzten Mahle,
wo er mit der Jünger Schar
nach der Vorschrift des Gesetzes
bei dem Osterlamme war,
gab mit eigener Hand den Seinen
er sich selbst zur Speise dar.

最後の食事の夜、
弟子たちとともに
律法の規程に従って、
過越の小羊のもとにいた。
そして、ご自分の手で自分自身を
食べものとしてささげた。

4. Durch das Wort, wird Brot zum Fleische
und zum Blute wird der Wein,
Gott und Mensch und Leib und Seele;
sieht es auch der Sinn nicht ein.
einem reinen Herzen g'nüget
fester Glaube schon allein.

その言葉を通して、パンは体となり、
葡萄酒は血となった。
神と人[は一つとなり]、
身体と魂は[も一つとなった]。
感覚はそれを見ることがない。
純粋な心には、堅い信仰だけで十分である。

5. Tiefgebeugt laßt uns verehren
ein so großes Sakrament!
Dieser Bund wird ewig währen,
und der alte hat ein End';
unser Glaube soll uns lehren,
was das Auge nicht erkennt.

深く身をかがめて礼拝させてよ。
これほどに偉大な秘跡を。
この契約は永遠に続く。
古いものは終わったのだ。
私たちの信仰は、私たちに教えてくれる。
眼が見分けないものを。

6. Gott, dem Vater und dem Sohne
sei Lob, Preis und Herrlichkeit,

父であり子である神は、
賛美、賞賛、栄光に満ちている。

mit dem Geist im höchsten Throne,
eine Macht und Wesenheit.
Singt in lautem Jubeltone:
göttliche Dreieinigkeit!
Amen.

最高の玉座に霊とともにある
力ある存在よ！
大声でたたえよう！
三位一体の神を！
アーメン。

『公教会聖歌集』（1930）のテキストは、第 1 節、2 節の各結尾に、「御身をほめん」、
「御血をほめん」とあり、それぞれ、人となって生まれ、救いのために犠牲となった身体、
人々の罪を清めるために流した血への賛美が行われる。これは、ドイツ語テキストの 2
節と 1 節をそれぞれ踏まえている。さらに『公教会聖歌集』（1930）の第 3 節では、聖変
化を通して賜ることのできる恵みへの賛美が歌われ、これはドイツ語テキストの第 4 節
に対応している。『公教会聖歌集』（1930）の第 4 節は、ドイツ語テキストの第 5 節と同
様に、三位一体の神を賛美して、この聖歌が締めくくられる。

『公教会聖歌集』では、第 3 節が新たに作詞され、ヨハネ 6:54（わたしの肉を食べ、わ
たしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。）に基
づくテキスト「主よ乞ひ願はく 肉に生かされ 衰への身にし ちから歸へりて 生命よ
ろこびの 永遠ならましを」となっている。

85. 尊ぶとき聖堂ぬち

『公教会聖歌集』の「聖體」の聖歌〈尊ぶとき聖堂ぬち〉の原曲は〈Kommt her, ihr
Kreaturen〉である。テキストは ザイデンブッシュ（Johann Georg Seidenbusch, 1641
～1729）によるもので、『フルダ 1891』に掲載されるこの聖歌には、新しい旋律との注
記がある。

『フルダ 1891』No. 95

1. Kommt her, ihr Kreaturen all,
komm, was erschaffen ist;
kommt her und sehet allzumal,
was da zugegen ist!
Das ist das heil'ge Sakrament;
das sollt ihr loben ohne End'.
O daß ich's loben könnt'
allzeit bis an mein End'.

すべての被造物よ、ここに来なさい。
造られたものよ、来なさい。
ここに来て、ここに何があるかを
見なさい。
これは聖なる秘跡。
あなたがたがたたえるべきものです。
ああ、私の生涯の終わりまで、いつも
たたえることができますように。

2. Stimmt an, stimmt an, ihr Seraphim,
die ihr von Liebe brennt;

歌いだす、セラフィムよ。
あなたは愛で燃えている。

ihr Thronen, Fürsten, Cherubim,
singt, was ihr singen könnt!
Herrschaften, Mächt', und Kräfte all,
Erzengel, Engel ohne Zahl:
lobsinget ohne End'
dem höchsten Sakrament!

王、王女、ケルビム、
あなたがたが歌うことができますように！
主、権力、すべての力、
大天使、数えられない天使
最高の秘跡を
終わりなくほめ歌おう。

3. Ihr Patriarchen allgemein
und ihr Propheten all,
auch ihr Jungfrauen, keusch und rein,
mit der Apostel Zahl,
ihr Martyrer und Beichtiger
und du gesamtes Himmelsheer:
lobsinget ohne End'
dem heil'gen Sakrament!

すべての族長、
すべての預言者、
純潔なおとめたち、
使徒たち、
すべての殉教者、証聖者、
天の群れのすべて。
最高の秘跡を
終わりなくほめ歌おう。

日本語のテキストは原曲から離れて自由に作詞されている。日本語の聖歌の中では、聖体が「いのちのかて」、「霊を生かしたまふ」ものであることが強調され、聖体の意味をわかりやすく伝えている。こうした聖体への信仰は、聖体の祝日の福音朗読にも指定されているヨハネによる福音書 6:53-58²⁰⁸を根拠としている。

87. いのちのかてにと

『公教聖歌集』の「聖體」の聖歌〈いのちのかてにと〉は、『公会聖歌集』の〈我身わが靈魂を〉から引き継がれた聖歌である。原曲は、17世紀のケルンにさかのぼる〈Das Heyl der Welt〉である。ポーネの『カンターテ』（1847）にも掲載される聖歌である。『フルダ 1891』、『ケルン 1908』に収録される。

『フルダ 1891』 No. 93

1. Das Heil der Welt, Herr Jesus Christ,
wahrhaftig hier zugegen ist.

世の救い、主イエス・キリストは
本当にここにおられます。

²⁰⁸ イエスは言われた。「はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」

Im Sakrament das höchste Gut
verborgen liegt mit Fleisch und Blut.

秘跡の中に最高の善が、
肉と血をもって隠されているのです。

2. Hier ist das wahre Osterlamm,
das für uns starb am Kreuzesstamm;
das nimmt hinweg von uns die Sünd'
und machet uns zu Gottes Kind.

ここに十字架上で私たちのために死んだ
真の過越の小羊がいます。
小羊は、私たちから罪を取り除き、
私たちを神の子としてくださいます。

3. Das wahre Manna, das ist hie,
davor der Himmel beugt die Knie;
dies ist das rechte Lebensbrot,
das uns beschützt vor ew'gem Tod.

真のマンナ[聖体]がここに 있습니다。
その前では、天が跪きます。
これは真の命のパンです。
私たちを永遠の死から守ってくださります。

4. O Arch, o Manna, o Monstranz,

in dir hast du die Gottheit ganz;
in dir ist Gott und Mensch zugleich,
o Sakrament, wie gnadenreich!

ああ、ご聖櫃におられ聖体顕示台に置かれる
マンナ[聖体]よ。
あなたのうちにすべての神性があります。
あなたのうちに神と人がともにおられます。
おお聖体の秘跡よ、
なんと恵みにあふれていることよ。

5. O was für Lieb', Herr Jesus Christ,

den Menschen hier bewiesen ist!
Wer die genießt in dieser Zeit,

wird leben in all' Ewigkeit.

ああ、主イエス・キリストよ、
あなたはなんとという愛を
人に示してくださったことか。
地上においてこのご聖体の恵みを
味わう人々は、
とこしえに生きるでしょう。

この聖歌でも日本語のテキストは、原詩から離れて極めて自由に作詞されている。『公教会聖歌集』(1930)の第1節に「たふとき御身と御血をたまひぬ」とあるように、聖体の聖歌としての内容となっているが、3節では、三位一体の神への賛美が行われており、より広い意味での賛美の聖歌となっている。ドイツ語の詩の方が、より具体的な聖体への信仰が情熱的なテキストで語られている。

88. 秘蹟にこもれる

『公教聖歌集』の「聖體」の聖歌〈秘蹟にこもれる〉の原曲は、〈Uns zum Himmel zu erheben〉である。この聖歌は、1807年にシュミット(Christoph von Schmid, 1768~

1854 によって作詞され、旋律はビューラー (Franz Bihler (Bühler), 1760~1823) によって作曲され、1810 年の *Katholisches Gesangbuch zum allgemeinen Gebrauche bei öffentlichen Gottesverehrungen*. (München, 1810) で最初に出版された²⁰⁹。

日本への直接の移入元となった聖歌集を特定することはできないが、原詩とその翻訳を以下に掲載する。

- | | |
|---|---|
| 1. Uns zum Himmel zu erheben,
stiegst du, Herr, zum Staub herab,
gabst für uns dein teures Leben,
sankst für unser Heil ins Grab.
Ref.: Heilig, unaussprechlich heilig
bist du, unser Herr und Gott. | 主よ、私たちが天に引き上げるために、
あなたは塵となって降りて来てくださった。
私たちのために貴重な命を与え、
私たちの救いのために墓に沈んだ。
主であり神であるあなたは聖なる方。
表現できないほど聖なる方。 |
| 2. Ach, kein Mensch, der Engel keiner
kann dir gleich an Liebe sein,
ewig soll mein Herz sich deiner,

o du ewige Liebe, freuen. | ああ、どんな人も、どんな天使も
愛においてあなたと比べることができません
私の心が永遠にあなたのももの
なりますように。
おお、永遠の愛であるあなたよ。 |
| 3. Sehn wir dann in jenem Leben,
Jesus, dich von Angesicht,
lohnst du unser Tun und Streben
ewig mit des Himmels Licht. | 天において私たちは
あなたイエスと相まみえるでしょう。
あなたは私たちの行いと努力を
天の光をもって永遠に酬いてくださいます。 |

原曲のテキストは、聖体自体への崇敬ではなく、聖体を拝領することによる信者の信仰生活、そして聖体による命の完成がテーマとなっている。『公教聖歌集』では、1 節、2 節を通して、ドイツ語テキストの第 1 節を踏まえたイエスの誕生とその賛美が語られる。

特徴的なのは、第 3 節「昔しはユデアの 境域におはせ いまは隈もなく 人棲むかぎり 近くおはしましし 恵みをぞたまふ」であり、イエスの救いの御業がユダヤ人だけではなく、全ての人に向けられたものであることが歌われる。

90. シオンよ汝が歌を

『公教聖歌集』の「聖體」の聖歌〈シオンよ汝が歌を〉は、『公教會聖歌集』の〈シオンの人びとよ〉から引き継がれた聖歌であり、ラウダ・シオン（聖体の祝日の続誦）であ

²⁰⁹ B IV, pp. 88, 127.

る。原曲は、『フルダ 1778』に掲載されるエルテルによる。『フルダ 1891』には〈Auf Zion, preise deinen König〉として、15 節のテキストで掲載されている。それぞれ、Lauda Sion の文字があり、聖体の祝日の典礼における続誦のドイツ語訳である。

『フルダ 1891』 No. 91

1. Auf! Zion, preise deinen König, den Heiland preis, o Christentum! Mag alles; es ist doch zu wenig, was du beginnst zu seinem Ruhm. Such deinen Hirten hoch zu loben; ihm töne lauter Jubelklang. Sing, was du kannst; er ist erhoben hoch über allen Lobgesang	シオンよ、立て、あなたの王をたたえよ、 救い主、キリストを賛美せよ。 すべてのことを成し遂げたとしても、 神の誉には及ばない。 シオンの羊飼いを賛美するため、 歓びの大きな音をあげよ。 力の限り歌え。救い主は高められる。 すべての賛美の上に。
--	--

『公教會聖歌集』と『公教聖歌集』でも同じく、続誦をもとに作詞されている。聖体の祝日のためには多くの聖歌がある中で、これは明確に続誦をラテン語、あるいはドイツ語をもとにしており、典礼の中での使用を意図して作詞しているといえるだろう。

91. 天使のパン

『公教聖歌集』の「聖體」の聖歌〈天使のパン〉は、『公教會聖歌集』の〈旅客（たびびと）の糧〉から引き継がれた聖歌である。この聖歌のドイツの由来は 1838 年のリンブルクの聖歌集に収録される三位一体の聖歌〈Gott, Vater! Sei gepriesen〉である²¹⁰。これは、より古い詩〈Gelobt sein Gott der Vater〉(B I, No. 302) の改訂版である。

『フルダ 1891』には、「祈願祭²¹¹ Mittwoch und in allgemeinen Anliegen」の聖歌 68b 〈Gelobt sei Gott der Vater〉、三位一体の聖歌〈Wir beten drei Vertonen〉として、この旋律が 2 度掲載されている。

『フルダ 1891』 No. 68b

Gelobt sei Gott der Vater auf seinen höchstem Thron und auch der Seligmacher, sein eingeborner Sohn.	父なる神に賛美あれ いと高き玉座におられる方に。 そして、救い主、 父のひとり子に[賛美あれ]。
---	---

²¹⁰ B IV, pp. 518-519.

²¹¹ 祈願日、祈願祭とは、特別の祈りと改心の日と定められた日で、ミサの結びに祈願行列が行われた。主の昇天の祝日直前の月曜日から水曜日までの 3 日間。(宮越俊光「典礼暦【祈願日と四季】、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002 年、第 3 巻、1230 頁。)

Heiligste Dreifaltigkeit,
unzerteilte Einigkeit!
Jung und alt, gross und klein,
preist Gott alle insgesamt.

いとも聖なる三位[の神]、
分割されることなく一体。
老いも若きも、大なるも小なるも
皆ひとつになった神をたたえよ

『公教聖歌集』では、聖体の聖歌として掲載されているため、このドイツ語テキストとの関連を見出すことはできない。

92. 秘蹟にこもりて

『公教聖歌集』の「聖體」の聖歌〈秘蹟にこもりて〉は、『公教會聖歌集』の〈愛なる我が君〉から引き継がれた聖歌である。原曲は、フェルスペル（Christoph Bernhard Verspoell, 1743～1818）によって作詞され、1826年にボンで最初に出版された〈Fest soll mein Taufbund immer stehn〉である²¹²。『ケルン 1908』には、もとの聖歌の第1節を省略した形の〈Du Gottmensch bist mit Fleisch und Blut〉として掲載されている。

B IV, No. 151

1. Fest soll mein Taufbund immer stehn,	私の洗礼の絆を、 いつも堅固なものとしてください。
ich will die Kirche hören!	私は教会に耳を傾けます。
Sie soll mich allzeit gläubig sehn und folgsam ihren Lehren!	常に、私を、信仰深く、 教会の教えに従順なものとしてください。
Dank sei dem Herrn, der mich aus Gnad' In seine Kirch' berufen hat,	主に感謝します。 恵みを持って教会に私を呼んでくれた主に。
Nie will ich von ihr weichen!	私は教会から離れることはありません。

『ケルン 1908』 No. 87

1. Du Gottmensch bist mit Fleisch und Blut	神であり人であるあなたよ、肉と血をもって
Wahrhaftig hier zugegen,	あなたはたしかにここにおられます。
Und dein Genuss, o höchstes Gut!	最高の善である方よ、
Bringt meiner Seele Segen,	その肉と血をいただくことは私の魂に、
Dir, ew'ge Wahrheit, glaube ich,	祝福をもたらします。永遠の真理である あなたに私は信頼します。
In diesem Glauben stärke mich,	この信仰において私を強めてください。

²¹² B IV, pp. 542-543.

Bis ich dich ewig sehe.	私があなたと永遠に相まみえるまで。
2.Dein Fleisch und Blut wird meinem Geist	あなたの御体と御血は、
Zum Guten Stärke geben.	私の精神により力を与えてくださいます。
Und führt mich, wie dein Mund verheißt,	そしてあなたが約束してくれた通り、
Gewiss zum ew'gen Leben.	永遠の命へと私を導いてくださいます。
Dir, gü'tige Allmacht, traue ich,	慈悲深い全能のあなたに信頼します。
In dieser Hoffnung stärke mich,	この希望によって私を強めてください。
Bis ich dich einst besitze.	あなたと相まみえるまで。
4. Du starbst für mich und setzest ein	あなたは私のために苦しみ、制定します。
Dies Denkmal deiner Liebe,	このあなた愛の記念を。
Dass du ganz mein, und ich ganz dein	あなたは完全に私のもの、私も完全に
In Ewigkeit verbliebe.	永遠に、あなたのものであり続けます。
Mein Jesu, liebvoll dank' ich dir:	私のイエスよ、
	愛を持ってあなたに感謝します。
Vermehre deine Liebe in mir,	私の中のあなたの愛を豊かにしてください。
Lass mich dich ewig lieben.	あなたを永遠に愛させてください。

『ケルン 1908』では、おそらく聖体の聖歌としての適性から、第 2 節以降のみが掲載される。これは、ヨハネの 6 章に基づいた聖体信心がテーマとなっている。特に、第 4 節はヨハネ 6:56（わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしはまたいつもその人の内にいる。）を踏まえたテキストである。

『公教会聖歌集』（1930）はドイツ語聖歌から直接翻訳した内容ではないが、同じくヨハネ 6 章を踏まえた聖体賛美のテキストとなっている。特に、第 1 節において主に対して、「いのちのかてよ」と呼びかけるが、これは、ヨハネ 6:48（わたしは命のパンである）を踏まえている。第 2 節のテキストの冒頭、「秘蹟に籠もれる 愛しきわがきみ」は、聖体におけるイエスの存在を強調する。

『公教聖歌集』は、『公教会聖歌集』のテキストを部分的に継承しているものの、原曲からはかけ離れ、また聖体賛美という点でも意味が薄れてしまっている。

93. よろこびの國の

『公教聖歌集』の「聖體」の聖歌〈よろこびの國の〉は、『公教会聖歌集』の〈よろこび稱へよ〉から引き継がれた聖歌である。原曲は、テキスト、旋律ともに、ミュンヘンで 1845 年に出版された *Marienliedern gedichtet von Guido Görres. In Musik gejetzt von*

Kaspar Aiblinger に掲載された 〈O höchstes Gut, O Heil der Welt〉である²¹³。『ケルン 1908』には、行列の聖歌として掲載されている

『ケルン 1908』 No. 90

- | | |
|--|---|
| 1. O höchstes Gut, o Heil der Welt!
Der Friede ruht in deinem Zelt,
Dir neiget sich der Erdenkreis,
Wir grüßen dich mit Ehrenpreis:
R: Sei hochgelobt in Ewigkeit
o Sakrament der Seligkeit | 最高の善よ、世の救いよ！
あなたの幕屋[聖櫃]には平和があり、
全地はあなたの前にひれふします。
私たちはあなたを賛美します。
至福の秘跡よ、
永遠にたたえられますように。 |
| 2. Du Lamm, zum Opfer auserwählt,
Am Kreuzesstamm mit uns vermählt,
Dir folgt geschmückt die Hochzeitsschar
Und bringt entzückt Dir Blumen dar. | 生け贄として選ばれた小羊であるあなたは、
十字架の上で私たちの花婿となりました。
婚宴に招かれた人々は、あなたに従い、
花を持って美しく飾ります。 |
| 3. Dein siegreich Kreuz strahlt hell hervor,

Die Fahnen flattern hoch empor,
Es grüsst der Glocken Feierton
Dir jubelt alles, Gottes Sohn! | 勝利に満ちたあなたの十字架は
輝かしい光を放ち、
勝利の御旗は高くなびく。
祝いの鐘があなたを迎え、
神の子はみな、あなたを喜び迎えます。 |
| 4. Der Weihrauchduft und Festgesang
Erfüllt die Luft den Weg entlang;
Die Liebe schmücket den Altar
Und bringt dir Jubellieder dar. | 乳香の香りと祝いの歌は、
行列の道を満たし、
愛は祭壇を美しく飾り、
あなたに歓喜の歌をささげます。 |

『公教會聖歌集』（1930）では『ケルン 1908』の第 1 節の結尾「永遠にたたえられますように o Sakrament der Seligkeit」がそのままリフレイン部分（絶えせず稱へよ）として継承されている。一方、そのほかのテキストには明確な関連性はない。

『ケルン 1908』にみられる聖体行列への言及は特徴的である。しかしこうした要素も『公教會聖歌集』と『公教聖歌集』には含まれない。日本の両聖歌集では、聖体賛美のテーマから離れ、より一般的な神への賛美の聖歌となっている。

²¹³ B IV, p. 660.

94. ああ主よ眼にこそ見えねど

『公教聖歌集』に「聖體」の聖歌として掲載される〈ああ主よ眼にこそ見えねど〉の原曲は、シュペーによる聖体賛美、あるいは聖体行列のための聖歌〈O Christ hie merch〉である。『フルダ 1891』の〈O Christ, hie merk〉には以下の通り、掲載されている。

『フルダ 1891』 No. 94

- | | |
|--|--|
| 1. O Christ, hie merk,
den Glauben stärk und schau dies Werk;
dies Brot all Gut, Gott,
Fleisch und Blut enthalten tut. | キリストよ、ここに気づき、
信仰を強め、この働きを見てください。
神よ、肉と血が含まれるこのパンは、
すべてよいことを行います。 |
| R: Ave Jesu, wahres Manhu, Christe Jesu!
Dich, Jesum süß,
ich herzlich grüß, O Jesu, süß! | 真のマンナ、イエス・キリストよ。
恵みに満ちた方、
ああ、イエスよ。
私は心からあなたをお迎えます。 |
| 2. In der Monstrantz
ist Christus ganz,
kein Brotsubstantz;
vom Brot allein Gestalt
und Schein vor Augen dein. | 聖体顕示台におられる聖体は、
完全にキリストであり、
パンの実質はありません。
目にみえるパンの形と
外見があるだけです。 |
| 3. Kein Brot ist da,
nicht bei, noch nah in Hostia.
Was darin ist, Herr Jesu Christ,
du selber bist. | ここにはパンはありません。
ホステアの近くにおられるのではなく、
その中におられるのは主イエス・キリスト、
あなたご自身であるのです。 |
| 4. Nun beug die Knie, Gott selbst ist hie,
weißt du nicht, wie.
Wie das geschieht,
der Glaub' wohl sieh das Auge nicht. | 跪いてください。神ご自身がここにいます。
どのようにはわかりません。
何が起きているか、目では見えなくても、
信仰では見えます。 |
| 5. Mit Cherubim
und Seraphim erhebe die Stimmen
und preise Gott, Gott Sabaoth,
in diesem Brot. | ケルビムと
セラフィムとともに、声を上げ、
このパンにおける
万軍の神を賛美します。 |

6. Vor meinem Tod	私が死の苦しみにある時、
in letzter Not, Christ, Mensch und Gott,	人であり神である方キリストよ。
gib diese Speise mir	楽園への旅のこの糧を
auf die reise zum Paradeiß.	お与えてください。

上記の通り、ドイツ語テキストでは、極めて明快に、聖体の意味や聖体におけるキリストの実存性について書かれている。『公教聖歌集』のテキストにおいて、第 2 節まではドイツ語テキストを踏まえた聖体信心が行われている。特に、第 1 節の「眼にこそ見ねどいまよ聖體ぬちおはす」、第 2 節の「麴麴ぬち人の性さへも 身隠り 隠ろひ 主おはす 御言かしこみわれ信ず」には、ドイツ語テキストとの関連性を見出せる。

一方、第 3 節「トマスの 疑雲うち晴れ みずて信ずる神の子の 聖なる 生命よこもりて いざ弱き我を生かせよ」には、「聖トマの祈りより」という注意書きが併記されている。これは、『公教會祈祷書』の「聖體に對する聖トマの祈祷」²¹⁴で「其が果して主なるや否やに惑へども、唯耳に聞る所に因て確く信ずるを得るなり。」を受けて、作詞されていると考えられる。また、第 2 節の「十字架に 神の性かくれ 麴麴ぬち人の性さへも 身隠り 隠ろひ 主おはす 御言かしこみわれ信ず」もまた、トマの祈りの言葉を用いながら作詞されている部分である。

4.1.2.8 イエスの聖心の大祝日

イエスの聖心の信心は、十字架上のイエスの脇腹が槍で突き刺され、心臓が貫かれたことを、愛の象徴である「心」という理念に結びつけることによって中世以来、芽生えた。イエスの聖心への信心の歴史において特に重要な位置を占めているのは、17 世紀のフランスの司祭ジャン・ユード (Jean Eudes, 1601~1680) であり、彼が創立したイエズス・マリア会 (ユード修道会) は、現在に至るまでイエスとマリアの聖心に対する信心を育て、広めている²¹⁵。

『羅馬弥撒典書』(1935) には、聖霊降臨後第二の主日後の金曜日に、至聖なるイエズスの聖心の大祝日が規定されている²¹⁶。この祝日は、1765 年に教皇クレメンス 13 世 (Clemens XIII, 1693~1769、在位 1758~1769) によって特定の教区で行うことが許され、1856 年に教皇ピウス 9 世によって全教会にこれを行うことを規定された²¹⁷。

²¹⁴ 札幌教区教皇代理ヴェンセスラウス・キノルド『公教會祈祷書』札幌：光明社、1930 年、104~105 頁。

²¹⁵ M. ゴンザレス「イエスの聖心」、『新カトリック大事典』東京：研究社、1996 年、第 1 巻、372~374 頁。

²¹⁶ チェグレル『羅馬弥撒典書』、423 頁。

²¹⁷ M. ゴンザレス「イエスの聖心」、『新カトリック大事典』東京：研究社、1996 年、第 1 巻、373 頁。

以下、イエスの聖心の大祝日の典礼における関係聖書箇所を記す²¹⁸。

入祭文：詩篇 32:11,19、書簡朗読：エフェソ 3:8-19、昇階誦：詩篇 24:8,9、栄
誦：詩篇 102:8-10、福音朗読：ヨハネ 19:31-37、奉献文：詩篇 68:21

イエスの聖心の典礼において、その精神がもっともよく現れるのが、序誦（現在の
ミサ典礼書における「叙唱」）である。

耶蘇の至聖なる聖心の序誦

（前略）聖なる主、全能の父、永遠の天主、主は十字架に磔けられ給へし處にても
主をば兵卒の槍にて貫かしめ給へり。蓋は、開かれたる聖心は神性の溢れを蒙れる
至聖所にして、主の御哀憐と御聖籠との谷川となり、且つ我等に對する愛熱に絶え
ず燃え立つ聖心が、信心なる者には憩ひの處となり、悔悛する者には救霊の避難所
とならん爲めなればなり。されば天使お大天使、玉座と主權、又凡ての天軍と共に
主の御光榮の讚美を窮りなく謳はん。（後略）

『公教聖歌集』の中には 14 曲の聖心の聖歌（95 から 107）が含まれるが、『公教會聖
歌集』は 2 曲（44、45）に限定される。

『ケルン 1908』では、聖体の祝日用の聖歌の後には、聖体拝領の歌が続き、その後に
「イエスの聖心 Herz Jesu Lieder」の聖歌が掲載されている。これは、イエスの聖心の
祝日にふさわしい聖歌であり、〈きよけき主のあい〉の原曲はそのうちの一つである。一
方、『フルダ 1891』では、聖体の祝日のための聖歌の直後に、マリア賛歌が掲載されてお
り、イエスのみ心のための聖歌はない。降誕節の聖歌のあとに、イエス賛歌がまとめられ
ているが、この聖歌が日本の中で取り入れられたのは、信望愛、我主を愛する歌、聖名の
歌などであり、聖心の部類には含まれていない。前述の通り、イエスの聖心への信心を広
めたのはフランス司祭ジャン・ユードであり、こうしたフランス中心の信心ゆえにフラン
ス系の聖歌が多く、日本の聖歌集においてもその背景が引き継がれているといえるだろう。

95. 愛のいけにへの

公教聖歌集の「聖心」の項目に掲載される〈愛のいけにへの〉は、『公教會聖歌集』の
「耶蘇の聖心」として掲載される〈愛の犠牲の〉から引き継がれた聖歌である。『フルダ
1891』には、この曲と同一旋律の聖歌 〈Deinem Heiland, deinem Lehrer (Lauda
Sion)〉があるが、これは聖体の祝日に分類される聖歌とテキストである。この聖歌の出
典として『フルダ 1891』には、「フランスの旋律」と書かれている。

²¹⁸ チェグレル『羅馬弥撒典書』、86～87、423～424 頁。

96. きよけき主の愛

『公教聖歌集』の「聖心」の聖歌〈きよけき主の愛〉は、『公教聖歌集』において新たに日本の聖歌集レパートリーに含まれるようになった聖歌である。原曲は、〈O Herz Jesu, Sitzt der liebe〉である。テキストは18世紀に成立したものであるが、この旋律と共に最初に出版されたのは、1844年のケルンの聖歌集においてである²¹⁹。『ケルン 1908』にも「イエスの聖心 Herz Jesu Lieder」の項目に、以下のテキストとともに掲載されている。

『ケルン 1908』 No. 101

1. O Herz Jesu, Sitzt der liebe, Zieh mein Herz mit heiligem Triebe Zu dir hin, o höchstes Gut! Lass es sein, wie du gewesen, Ein Altar, der unverwesen, Brenn' vor reiner Liebesglut,	イエスの聖心、愛の座よ、 私の心をあなたのもとへと 駆け立ててください。最高の善よ！ かつてのようについてください。 朽ちることのない祭壇におられる方よ。 あなたの純粋な愛の激情を 燃えたたせてください。
2. Sieh, o Jesu, sieh mein Sehnen, Sieh mein Aug' voll heisser Tränen Und mein Herz von Lieb' entflammt! Hilf mir, Jesu, dich nur lieben, Stets in dieser Lieb' mich üben, Die aus deinem Herzen stammt.	イエスよ。見てください。 私の思い焦がれる心を顧みてください。 私の目は熱い涙でいっぱいです。 私の心は愛で燃えています。 イエスよ、わたしを助けてください。 あなただけを愛することができますように。 あなたの心からあふれ出る、 この愛をもって私を鍛えください。

『公教聖歌集』のテキストも、原曲のテキストと同様に、「こころに燃えし」や「愛のほのほ」、「愛の火はげしく 燃えずてやはある」などという表現を用いて、主への愛を情熱的に歌っている。

97. しらべもたへに

『公教聖歌集』の「聖心」の聖歌〈しらべもたへに〉は、『公教會聖歌集』の〈聲たからかに〉から引き継がれた聖歌である。この聖歌の原曲は、1877年にモールの聖歌集に掲載された61〈Dem Herzen Jesu singe〉である。旋律自体は、世俗的な民衆歌に由来

²¹⁹ B IV, pp. 561-562.

している。

『公教聖歌集』では、97A として、異なる旋律の同一テキスト聖歌〈しらべもたへに〉も掲載されている。この旋律は、ツヴィシク (Alberich Zwyszig, 1808~1854) によって作曲されたものである²²⁰。(この旋律が初めて出版されたのは、『ツヴィシクの旋律による 2つのソプラノ独唱声部、4声合唱とオルガンのための、聖なるイエスに関する歌 *Lied vom heiligsten Herzen Jesu für 2 Sopran-Solostimmen mit 4 Chorstimmen und Orgelbegleitung in Musik gesetzt von A. Alberich Zwyszig*』においてである。

B IV. No. 171

Dem Herzen Jesu singe	私の心よ。
Mein Herz in Liebeswonn',	イエスの聖心に向かって 愛の喜びを持って歌え。
Durch alle Wolken bringe	すべての雲を貫いて、
Der laute Jubelton;	声高らかに喜びの歌がもたらされる。
Gelobt, gebenedeiet Soll sein zu jeder Zeit	賛美と祝福がいつもあるように。
Das heiligste Herz Jesu	イエスの最も聖なる聖心が
In alle Ewigkeit,	いつも賛美されるように。
In alle Ewigkeit	代々、永遠に。

『公教會聖歌集』(1930)の第1節は「聲たからかに しらべあはせ 君の御こころ 讃め稱へよ」とあるように、原曲のテキストをそのまま引き継いでいる。第2節では、イエスが人々のために受けた苦しみへの賛美がささげられる。『公教聖歌集』にもこれらの2節は共通するが、さらに第3節が加えられている。「愛の火もゆる 主のみこころ」という言葉によって、情熱的なイエスへの信心が示される。

103. イエズスの聖心

『公教聖歌集』の「聖心」の聖歌として掲載される〈イエズスの聖心〉のドイツ語原曲は、〈O mein Jesus〉である。レーゲンスブルクで出版された *Jubilemus Deo* (1927) によればテキストはゼンマー (Peter Sömer, 1832~1902) によって書かれた²²¹。

Regensburg 1927, No. 178

O mein Jesus, gibt mir Schwingen,	私のイエスよ、私に翼を与えてください
Dass ich frei von allen Dingen	すべてのものから解放されて、
Eile in dein Herz hinein;	あなたの聖心に向かって急ぐことが

²²⁰ B IV, pp. 559, 560.

²²¹ *Jubilemus Deo*, 1927, pp. 159-160.

Denn zu diesem sel'gen Orte
Öffnet uns der Speer die Pforte,
O wie wohl wird mir da sein

できるように。
というのは、この聖なる場所に向かって、
槍が私たちに門を開いているからです。
ああ、そこにいくことができたなら
なんと幸せなことでしょう。

『公教聖歌集』に掲載されるこの聖歌とドイツ語テキストの間の一致は見られない。
『公教聖歌集』では、特に、イエスの苦しみ、傷を讃え、それを励みに世の戦いに打ち勝
とうとするキリスト者の心が描かれている。

107. よろづの國の

『公教聖歌集』に「聖心」の聖歌として掲載される〈よろづの國の〉は、『公教會聖歌
集』の第3版(1926)に「大和を聖心に」の聖歌として掲載される〈万国の主よ〉から
引き継がれたものである。

この聖歌の原曲は、ナポレオン率いるフランス軍の侵攻に対抗して行われた戦争から
100年を記念して、1896年に作詞、作曲された〈Auf zum Schwur, Tirolerland〉である²²²。
詩はゼーバー (Joseph Seeber, 1856~1919)、旋律はミッテラー (Ignaz Mitterer,
1850~1924) によるものである。

B IV, No. 180

Auf zum Schwur, Tiroler Land,
hebe zum Himmel Herz und Hand!
Was die Väter einst gelobt,
da der Kriegssturm sie umtobt:
Das geloben wir aufs Neue:
Jesu Herz, dir ewige Treue!
Das geloben wir aufs Neue:
Jesu Herz, dir ewige Treue!

チロルの土地よ。
誓いのために、心と手を天に上げよ！
戦争の時に先祖たちに
かつて約束されたことを、
今私たちは新たにたたえるのです。
イエスの聖心よ、
あなたに忠実でありますように。

1796年の戦争当時、チロル地方は市民軍を組織し、チロルをイエスの聖心にささげる
ことを決めていたため、こうした聖歌が作曲された。日本においては、「チロルの土地」
を「大和の國」に変更しながらも、概ね原詩の内容を踏まえた作詞を行っている。『公教
會聖歌集』(1930)の第1節「万国の主よ やまとのくにを 主のみこころに ささげま
つらん」、第2節「闇なる敵を 打伏すイエズス 御王國の勝利を とともに得させよ」、

²²² B IV, p. 565.

第3節「聖心のくに かがやききたる いさをしの武士 あめにて榮へん」は、いずれも戦争や戦い、そして勝利という原曲のイメージをそのまま日本に当てはめている。

4.1.3 聖人、天使、マリア賛美の聖歌（付録4：79～107頁）

典礼暦の各季節のための聖歌のあと、主に対する賛美、キリストに対する賛美、聖母に対する賛美、さらに天使や特定の聖人への賛美の聖歌が続く。この節では、それらの聖歌に関しても、原曲との比較を通して、受容の経過を明らかとしていく。

4.1.3.1 主・キリストに対する賛美の聖歌

『公教聖歌集』には、108から128番までの21曲、主への賛美の聖歌が並んでいる。

108. われら神を讃め

テ・デウムとは、日曜日または祝日の朝課において、また特に喜びを表現したり、神に感謝を捧げたりするときに歌われる聖歌である。ラテン語の名称 *Te Deum laudamus* は「神よ、あなたを（私たちはほめたたえます）」の意²²³。現在の日本の典礼では、「賛美の賛歌」と呼ばれている²²⁴。

『公教聖歌集』の「主に對する賛美」の聖歌〈われ神をほめ〉は、『公教會聖歌集』の「天主を讚美する」聖歌〈讃めよ稱へよ〉から引き継がれた聖歌である。また、わずかな旋律上の違いはあるものの、『日本聖詠』1907年にも収録され、ここにはJ.ハイドンの和音付けも掲載されている。

ドイツ語での原曲は、*Gesangbuch der Maria Theresia* (1774) に由来するフランツのテキストによる〈*Grosser Gott, wir loben dich*〉であるが、『フルダ 1891』、『ケルン 1908』に掲載される旋律は、ポーネの『カンターテ』(1852²²⁵)に基づいている。

『フルダ 1891』 No. 86

1. Großer Gott, wir loben dich;	偉大なる神よ、私たちはあなたを讃えます。
Herr, wir preisen deine Stärke.	主よ、私たちはあなたの強さを讃えます。
Vor dir neigt die Erde sich	大地はあなたの前にひれふし、
und bewundert deine Werke.	あなたの創られたものに驚嘆します。

²²³ 齋藤克弘「テ・デウム」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002年、第3巻、1163頁。

²²⁴ 日本カトリック典礼委員会『典礼聖歌』東京：カトリック中央協議会、1980年、428～429頁。

²²⁵ ポーネによる『カンターテ』は1847年から1879年までの間に7版を重ね、1852年版において初めて旋律が含まれた。

Wie du warst vor aller Zeit,
so bleibst du in Ewigkeit.

すべての時間の前に存在したように、
あなたは永遠に留まります。

2. Alles, was dich preisen kann,
Cherubim und Seraphinen
stimmen dir ein Loblied an;
alle Engel, die dir dienen,
rufen dir stets ohne Ruh'
"Heilig, heilig, Heilig!" zu.

あなたを讃えることができるものすべて、
そしてケルビムとセラフィムは
あなたに賛美の歌を歌います。
あなたに仕えるすべての天使は
絶えずほめ歌います。
「聖なる、聖なる、聖なる方」と
呼びかけます。

3. Heilig, Herr, Gott Sabaoth,
heilig, Herr der Himmelsheere,
starker Helfer in der Not!
Himmel, Erde, Luft und Meere,
sind erfüllt von deinem Ruhm;
alles ist dein Eigentum!

聖なるかた、主よ、万軍の神よ。
聖なるかた、天の群れの主よ。
困っているときの、力強い助け主。
天、地、空、海、
それらはあなたの栄光で満たされています。
すべてはあなたのもの。

4. Der Apostel Christi Chor,
der Propheten hehre Menge
schickt zu deinem Thron empor
neue Lob- und Dankgesänge;
der Blutzegen lichte Schar
lobt und preist dich immerdar.

使徒たちの聖なる合唱、
預言者たちの高貴な群れは、
あなたの玉座に
新たな賛美と感謝の歌をささげます。
殉教者たちの輝かしい群れは、
いつまでもあなたをほめたたえます。

『公教聖歌集』と『公教聖歌集』にこの旋律は引き継がれ、テキストは『公教聖祈禱書』にも掲載される「天主に御恵みを感謝する祈」に基づいている。

110. 主こそわが榮譽よ

『公教聖歌集』の「主に對する賛美」の聖歌として掲載される〈主こそわが榮譽よ〉の原曲は、〈Ich wil dich lieben〉(テキスト：シレジウス (Angelus Silesius, 1624～1677、旋律：ゲオルギウス (Josephus, Georgius, 1620～1668)) である²²⁶。

『フルダ 1891』 No. 196

²²⁶ B III, p. 275.

1. Ich will dich lieben, meine Stärke,
ich will dich lieben, meine Zier;
ich will dich lieben, Gott, im Werke,
will weih'n mein Leben einzig dir;
ich will dich lieben, schönstes Licht,
bis mir das Aug' im Tode bricht.

私の強さよ、私はあなたを愛したい。
私のほまれよ、私はあなたを愛したい。
私はあなたを愛したい。
神よ、御業をもって、
私の命をただあなたのために捧げる
ものとしてくださる。
私はあなたを愛したい。
もっとも美しい光よ。
私が死を迎えるときまで。

2. Ach, daß ich dich so spät erkannte,
du hochgelobte Schönheit du,
nicht eher dich mein eigen nannte,
du höchstes Gut, du wahre Ruh'!
In tiefster Seel' bin ich betrübt,
daß ich dich, Gott, so spät geliebt.

ああ、賞賛すべき美しさである
あなたに気づくのがとても遅かった。
これまで私はあなたの名を知らなかった。
いと高き善、真の安息よ。
そのことを心底、悲しんでいます。
神よ、私があなたを愛するのが
遅かったことを悲しんでいます。

『公教聖歌集』の第1節「主こそわが榮譽よ ひかりよたからよ 美しきやすらひよ
たぐひなき友よ まごころつくして 愛で仕へまつらん」は、原曲のテキスト第1節と
強い関連性をもっている。『公教聖歌集』の第3節にある、「徒空（あだ）にすぎし日の
みゆるしをねがふ」という言葉は、原曲の第2節「神よ、わたしがあなたを愛するのは
遅かったことを悲しんでいる In tiefster Seele bin ich betrübt, dass ich dich, Gott, so
spat geliebt.」という内容とも重なり、ここでも原曲との関連性がみられる。第4節では、
「聖アウグスチノの言葉より」と注意書きにある通り、アウグスティヌスの『告白』から
言葉がパラフレーズして作られている。

114. み神のたまひし

『公教聖歌集』の「信望愛」の聖歌〈み神のたまひし〉は、『公教會聖歌集』の〈天なる御かみの〉から引き継がれた聖歌である。信望愛（信仰、希望、愛）とは、神によって人間の心に注ぎ入れられ、人間を直接に神と関係づける対神徳である²²⁷。

『天主教要理』の中に説明される信望愛について、以下に引用する。

²²⁷ P. ネメシェギ「対神徳」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002年、第3巻、950～951頁。なお、「対神徳」という言葉は聖書には見当たらないが、コリント13章13節「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」を始め、信仰、希望、愛を並べて、キリスト者の生活の中で最も²²⁷重要なこととして記している箇所は聖書の中で多くみられる。

- 超性徳の中の優れたる者は何ぞや
- △信望愛の三の対神徳なり
- 何故の信望愛の三徳を対神徳と謂ふや
- △信望愛は直接の天主に對するの徳なればなり
- 信徳とは何ぞや
- △信徳とは天主の真理の源にてましますに因りて其の教を堅くする超性徳なり
(中略)
- 望徳とは何ぞや
- △信徳とは天主の御約束を依頼して希望するの超性徳なり
- 天主は如何なる御約束を爲し給ひしや
- △現世にては善く求むる者の聖寵を賜んとの御約束、又其聖寵に依て天主の誠を守る者をば来世の福楽を與んとの御約束なり
(中略)
- 愛徳とは何ぞや
- △愛徳とは全善なる天主を愛し、又天主を愛する爲の他人をも愛するの超性徳なり

228

この原曲は、『フルダ 1891』の「イエス賛歌 Jesuslieder」として掲載される〈Ich glaub' an Gott in aller Not〉である。

『フルダ 1891』 No. 27

- | | |
|--|--|
| <p>1. Ich glaub' an Gott in aller Not,
auf Gott all' Hoffnung baue.
ich liebe Gott bis in den Tod;
auf diese Lieb' ich traue;
Jesu, dir leb' ich,
Jesu, dir sterb' ich,
dein bin ich tot und lebendig.</p> | <p>私はどんな苦しみにある時も神を信じます。
全ての希望を神にかけています。
私は死ぬまで神を愛し、
この愛を信頼します。
イエスよ、私はあなたに生き、
イエスよ、私はあなたに死にます。
私はあなたに結ばれて生き、死ぬのです。</p> |
| <p>2. Das Heil allein kann sicher sein
in meines Jesu Wunden;
in deinem Tod, o liebster Gott,
das Leben wird gefunden,</p> | <p>私のイエスよ、救いは確かなものです。
私のイエスの傷においても、
あなたの死においても、愛する神よ、
命は見いだされます。</p> |

²²⁸ 天主公教會『天主公教要理』、80～82頁。

5. Am letzten End' in deine Händ'
will ich die Seel geben;
O Jesu mein, nun bin ich dein,

gib mir das ew'ge Leben.

最後には、あなた御手に
私の魂をささげます。
おお私のイエスよ、
いまや私はあなたのもの。
私に永遠の命を与えてください。

ドイツ語のテキストでは、第 1 節で信望愛の 3 つの要素を歌い、その後は、イエスへの献身が情熱的に歌われる。一方、『公教會聖歌集』、『公教聖歌集』では、3 節構造の中で、信望愛の 3 つの要素がそれぞれ順番に歌われる。

117. 身もたまも

『公教聖歌集』の「奉献」の聖歌〈身もたまも〉は、『公教會聖歌集』の「諸種の聖歌：主に身を献ぐる」の〈身もたまも〉から引き継がれた聖歌である。原曲は、〈Jesu, dir lebe ich〉であり、『フルダ 1891』にはミサ聖歌の「聖変化前後のための聖歌」の一つとして掲載される。この聖歌のテキストが最初に見られるのは、『聖なるロザリオの勝利 *Triumph des Hl. Rosenkrantz*』(Augsburg, 1667) においてである²²⁹。

『フルダ 1891』 No. 204

1. Jesu, dir leb' ich;
Jesu, dir sterb' ich;
Jesu, dein bin ich
im Leben und im Tod

イエスよ、私はあなたに生き
イエスよ、あなたに死にます。
生きているときも死ぬときも、
私はあなたのもの。

2. Jesu, dein bin, ich,
Jesu, dein bleib ich,
Jesu, dich lieb' ich in alle Ewigkeit.

イエスよ、私はあなたのもの。
イエスよ、私はあなたに留まる。
イエスよ、代々永遠にあなたを愛します。

3. O sei mir gnädig,
sei mir barmherzig,
führ mich, o Jesu, in deine Seligkeit.

慈しみと憐れみが
私にありますように。
イエスよ、
あなたの至福へと導いてください。

『フルダ 1891』の影響が最もみられるのは、『公教會聖歌集』(1930) の第 2 節「世に

²²⁹ B IV, p. 522.

あるもよを去るもとことには御手に頼ん」というテキストである。1節、3節はより自由に作詞されているが、生きるときも死ぬときも、あるいは死ぬまで、神に身も魂もささげるというテーマは、両聖歌に共通しているといえるだろう。なお『公教聖歌集』と『公教會聖歌集』では、第1節の「委かせ奉らん」が「委ねまつらなん」に改訂される以外の変更はない。

原曲との重要な違いは、旋律に見いだされる。『フルダ 1891』に掲載される聖歌は、第3音で終止するが、『公教會聖歌集』と『公教聖歌集』では、いずれも主音で旋律が終わるよう、編曲されている。これは、完全終止を好んだ日本の他の聖歌と一致する特徴である。

118. あめなるみ神に

『公教聖歌集』の「奉献」の聖歌〈あめなるみ神に〉は、『公教會聖歌集』の「切願」の聖歌〈あめなる天主に〉から引き継がれた聖歌である。この原曲は、〈Heilige! über alles heilige〉である。この旋律は、〈Grosse Sorgen, grosse Schmerzen〉(B III, No.185)の変形版として成立したものである²³⁰。

B IV, No. 344

Heilig! Über alles Heilig!	聖なるかた。すべてを超えて聖なる方。
Heilig bist du unser Gott!	私たちの神であるあなたは聖なる方。
Was du thust willst ist heilig;	あなたがなさることはすべて聖なること。
Heilig: seh uns dein Gebot.	聖なるかたよ、 あなたの掟を私たちは見えています。
Herr! Du hast es uns gegeben,	主よ、あなたは掟を私たちに 与えてくださいました。
dass das ganze Erdenleben uns bereite nach der Zeit eine frohe Ewigkeit.	私たちの地上の命が天の永遠の命を 喜ばしいものとしてくださいますように。

『公教會聖歌集』、『公教聖歌集』ともに、原曲テキストとの関連性は指摘できない。

119. うるはしの主のみこころ

『公教聖歌集』の「キリストに對する歌」として掲載される〈うるはしの主のみこころ〉の原曲は、〈Schönster Herr Jesu〉である。この旋律は民衆歌に由来しており、ホフマン (August Heinrich Hoffmann, 1798~1874) とリヒター (Ernst Richter, 1808~1879) によってはじめて〈Schönster Herr Jesu〉の名で出版された。また、この聖歌は

²³⁰ B IV, pp. 684-685.

プロテスタント教会でも広く歌われるものである²³¹。

B IV, No. 184

Schönster Herr Jesu,	もっとも美しい主イエスよ
Herrscher aller Herren,	すべての支配者である、
Gottes eingeborner Sohn,	神の御ひとり子よ。
dich will ich lieben,	私はあなたを愛します。
dich will ich ehren,	私はあなたをたたえます。
meiner Seele Freund' und Wonn'!	私の魂に喜びがありますように。

『公教聖歌集』のテキストには原曲との関連は薄いですが、そのテキストにはイザヤ 35:2 (花を咲かせ大いに喜んで、声をあげよ。砂漠はレバノンの栄光を与えられカルメルとシヤロンの輝きに飾られる。人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る。)、雅歌 4:8 (花嫁よ、レバノンからおいで おいで、レバノンから出ておいで。アマナの頂から、セニル、ヘルモンの頂から獅子の隠れが、豹の住む山から下りておいで。)などを踏まえながら、イエスへの信心が描かれる。

120. わが爲十字架に

『公教聖歌集』に「我が主を愛する歌」として掲載される〈わが爲十字架に〉は、『公教聖歌集』第5版(1930)に「愛の歌」として掲載される〈われは主をあいす〉から引き継がれた聖歌である。旋律は、『公教聖歌集』の「葬禮(小児)」の聖歌〈しらゆりと聖く〉、『公教聖歌集』第2版以降に掲載される「小児の埋葬」の聖歌〈野の白百合にも〉と共通する。

原曲は、『フルダ 1891』にもイエス賛歌の歌として掲載される〈O du mein gott ich liebe dich〉(B IV no.337)である。テキストはボーネ『カンターテ』(1847)から引き継がれたものである²³²。

『フルダ 1891』 No. 28

1. O du mein gott, ich liebe dich;	おお、私の神よ、
	私はあなたを愛しています。
nicht, daß du selig machest mich,	愛さなければ
auch nicht, weil,	あなたの幸せに与ることもなく、
die nicht lieben dich,	永遠に地獄へ
zur Hölle gehen ewiglich.	行くことになります。

²³¹ B IV, pp. 568-569.

²³² B IV, pp. 678-679.

2. Die Lieb', so ich zu dir gefaßt,	私のイエスよ、この愛は、十字架の上で、
du selbst in mir erwecket hast,	私のために不安と苦しみに耐えたときに、
da du am Kreuz, o Jesu mein,	目覚めさせてくださったものであり、
für mich ertrugst all' Angst und Pein.	あなたのためにつかんでいるものです。

『公教聖歌集』（1930）の第1節「われは主をあいす むくひはのぞまず 主にならひてただ あいのためあいす」、第2節「わがため十字架に なやめる我がきみ たふときあいをば われにさづけませ」は、上記の原曲テキストと関連する内容となっている。題名にもある通り、「イエスへの愛」が様々な表現で作詞されている。なお、この聖歌には、「フランシスコザベリオ作」という注意書きがついている。

4.1.3.2 聖母に対する賛美の聖歌

『公教聖歌集』には、129～172まで、44曲の聖母に関する聖歌が載っている。この中には、ロザリオの歌や無原罪の聖母の歌、さらに聖母月のための聖歌、聖母被昇天の聖歌などが含まれる。44曲のうち半数以上がフランス系の聖歌である。豊富な聖母関連の聖歌には、啓蒙期に一度下火となったマリア信仰の復活が背景にあると考えられる²³³。特にフランス系ではマリア信仰が根強く、フランス系聖歌の数が多いことに如実に表れている。

129. あな慶たきかな

『公教聖歌集』の「聖母」の聖歌〈あな慶たきかな〉は、『公教聖歌集』の〈いと慶たきかな〉から引き継がれた聖歌である。この聖歌の原曲は、〈Glücksel'ge Himmelskönigin〉である。

B IV, No.203

Glücksel'ge Himmelskönigin, o Maria	天の祝福された女王、マリアよ。
Der Christen Schutz und Helferinn, o Maria	キリスト者を守り、
	助けてくださる方、マリアよ。
Jungfrau, dich verehren wir;	おとめマリアよ、
	私たちはあなたを礼拝します。
Unser Lob erschallt von dir:	私たちはあなたへの賛美の歌を
	響かせます。

²³³ 鈴木宣明、「マリア」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2009年、第4巻、810頁。

Gross bist du, o Königin!
Ehret sie, preiset sie;
Gross ist unser Königin.

女王よ、あなたは偉大です。
この方を賛美し、たたえよう。
私たちの女王は偉大です。

マリアを賛美する際に、原文にも、「天の祝福された女王 Glücksel'ge Himmelskönigin」とあるが、そうした女王としてのマリア像は、そのまま日本語聖歌のテキストにもみられる（天なる王后）。

第4節まである日本語のテキストは、恵みに満ちたマリア、汚れなき母への賛美、そしてマリアの百合にも勝るゆかしい美徳、明星にもまさる栄ある御名を賛美する内容となっている。

130. あまつみはは

『公教聖歌集』の「聖母」の聖歌〈あまつみはは〉は、『公教會聖歌集』の〈あまつ御母〉から引き継がれた聖歌である。（この聖歌は『公教會聖歌集』初版では、46番、第2版以降では57番に掲載される。）

原曲は〈Maria zu lieben〉であり、『フルダ 1891』と『ケルン 1908』にも収録されている。

『フルダ 1891』 No. 115

1. Maria zu lieben ist allzeit mein Sinn,
hab' ihr mich verschrieben,
ihr Diener ich bin.
Mein Herz, o Maria,
brennt ewig zu dir
von Liebe und Freude,
o himmlische Zier.

マリアを愛することは常に私の望みです。
私は私自身をマリアに託しました。
私はマリアの僕です。
マリアよ、
私の心はあなたに向かって
愛と喜びで永遠に燃えます。
ああ、天にあって優美な方よ。

2. Maria, du milde, du füße Jungfrau,
nimm auf meine Liebe,
so wie ich vertrau';
du bist ja die Mutter,
dein Kind will ich sein,
im Leben und Sterben dir einzig allein.

マリアよ、あなたは優しくおとめです。
私の愛を受け入れてください。
私が信頼するように。
あなたは母です。
私はあなたの子になりたい。
生きるのも死ぬのも、あなたのためです。

3. Ach, hätt' ich der Herzen
nur tausendmal mehr;

ああ、もし私が
1000倍以上の心を持っていたら、

dir tausend zu geben,
das ist mein Begeh'r;
nimm Freund' und Verwandte
mit Leib und mit Seel',
nimm, was ich nur liebe,
in deinen Befehl!

それをあなたにすべてささげます。
それが私の願いです。
私の友や親戚の
体と魂も受け入れてください。
私が愛するものを御心のうちに
受け入れてください。

4. So oft mein Herz klopft,
befehl' ich mich dir;
so oft ich nur atme,
verbind' ich dich mir!
Dich lieb' ich auf ewig,
dich lieb' ich allzeit,
so bin ich mit Freuden
zu sterben bereit

心臓が鼓動する度に
あなたのことを思い、
呼吸する度に
あなたとの結びつきを深めます。
あなたを永遠に、
そしていつも愛します。
そして喜びをもって
死ぬことに備えています。

5. O Mutter, nun segne den ewigen Bund!
Dein Name versiegle
mein Herz und den Mund,
dich ruf' ich im Tode,
dann reich mir die Hand
und zieh mich nach oben
ins himmlische Land!

母よ、永遠の契約を祝福してください。
あなたの名は、
私の心と口を完成してくださいます。
私は死ぬときに
あなたを呼びます。
その時、手を差しのべ、
天の国へと導いてください。

ドイツ語のテキストでは、極めて情熱的なマリア信仰が歌い上げられる。『公教会聖歌集』(1930)の第1節は「あまつ御はは せいマリア 爾が御まへに かしこみつ ささげまつる いく千代も かはらぬあい 受けたまへ」というマリアへの賛美のテキストだが、第2節では、イエスに母として捧げた愛を我々にも授けてくださるようにとの祈り、第3節では、イエスに私たちを導き、御心にかなうようにさせてくださいという祈り、第4節では、死ぬまで待つてくださるようにとの祈りがささげられている。『公教会聖歌集』のテキストはおおむね『公教会聖歌集』を踏まえている。

131. うるはしきよけし

『公教会聖歌集』の「聖母」の聖歌〈うるはしきよけし〉は、『公教会聖歌集』の〈いときよくいと愛しき〉から引き継がれた聖歌である。『フルダ 1891』に掲載される〈O du heilige, du jungfräuliche〉から引き継がれている。

『フルダ 1891』 No. 124

- | | |
|---|---|
| 1. O du heilige, du jungfräuliche,
füße Mutter Maria!
O Unversehrte, allzeit Geehrte,
hilf uns, hilf uns, Maria! | 聖なるおとめ、
母なるマリアよ。
汚れなく、永遠に尊敬される方よ。
私たちを助けてください。助けてください。 |
| 2. O du Trösterin, Schutz und Helferin,
bitt für uns, o Maria!
Du kannst empfangen,
was wir verlangen,
hilf uns, hilf uns, Maria! | 私たちを慰め、守り、助けてくださる方、
マリアよ、私たちのために祈ってください。
私たちが何を必要としているか、
あなたはわかっているでしょう。
私たちを助けてください。助けてください。 |
| 3. Sieh uns Zagende, Angst Ertragende,
hilf uns, Mutter Maria!
Tröste die Herzen, lindre die Schmerzen,
hilf uns, hilf uns, Maria! | 怖れ、不安に耐えている私たちを見て、
助けてください。母なるマリアよ。
心を慰め、痛みを和らげてください。
私たちを助けてください。助けてください。 |
| 4. Jungfrau, neige dich, Mutter,
zeige dich, bitt für uns, o Maria!
Gottes Erbarmen trägst du in Armen,
hilf uns, hilf uns, Maria! | おとめマリアよ、あなたにひれふします。
姿を現し、私たちのために祈ってください。
神の憐れみを腕に担って
私たちを助けてください。助けてください。 |
| 5. Durch die Leiden dein,
durch die Freuden dein
bitt für uns, o Maria!
Unser Vertrauen wollest anschauen,
hilf uns, hilf uns, Maria! | 苦しみにある時も
喜びにある時も、
私たちのために祈ってください。マリアよ。
私たちの信頼を顧み、
私たちを助けてください。助けてください。 |

『公教会聖歌集』はドイツ語聖歌と同じく 5 節構成で、テキスト内容も一致している。このテキストの背景には、聖母マリアを神と人間との仲介者とする信仰が深くかかわっている。キリスト教会において、仲介者とは、テモテへの手紙 2:5（神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。）にある通り、イエス・キリストであるが、カトリック教会では、教父時代の終わりころからマリアを仲

介者と見なす信仰がある²³⁴。マリアの執り成しについては、現在の教会憲章でも以下の通り記述されている。

マリアは天に上げられた後も、この救いをもたらす務めをやめることなく、帰って数々の執り成しによって、われわれに永遠の救いのたまものを得させ続ける。マリアはその母としての愛をもって、まだ度が続けている自分の子の兄弟たち、また危機や困難の中にある兄弟たちが幸福な祖国に到達するまで、彼等を見守る。こうして、聖なる処女は、教会において弁護者、扶助者、援助者、仲介者の称号を以て呼び求められている。しかしこのことは、唯一の仲介者であるキリストの尊厳と効力を何ら損なわず、何者をも付加しないという意味において理解される。²³⁵

こうしたマリア信仰を踏まえたテキストであると考えられる。この内容は『公教会聖歌集』と『公教聖歌集』にも引き継がれている。例えば、『公教会聖歌集』（1930）の第2節「み母マリアよ わがのぞみ わがねがひ とりなし給へ」、『公教聖歌集』の第4節「主の聖母 執り成せば 神の恵み繋（さまね）し」とある。

133. アンナの御子

『公教聖歌集』の「聖母」の聖歌〈アンナの御子〉は、『公教会聖歌集』の〈アンナの御子〉から引き継がれた聖歌である。『ケルン 1908』には〈Ros, o schöne Ros〉として掲載される。

『ケルン 1908』 No. 144

Ros', O schöne Ros', In Sankt Annä Schoß!	ああ、美しいバラよ。 聖アンナの懐にいるバラよ、
Welche Wunder-ros' – Blüht in diesem Schoß, Füllt mit süßem Duft – Allumher die Luft!	なんと奇跡なバラであることよ。 その懐で育ち、あたり一帯をすべて 甘い香りで満たしてください。
Keines Frühlings Pracht Jemals hat gebracht	このバラほど、いかなる春の輝きも もたらしたことはなかった。
Eine solche Ros', Als Sankt Annä Schoß.	そのようなバラ、 聖アンナの懐にいるバラよ、

²³⁴ 荒木関巧、P.ネメシエギ「マリア」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2009年、第4巻、800頁。

²³⁵ 第2バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会『第二バチカン公会議公文書改訂公式訳』東京：カトリック中央協議会、2013年、200頁。（『教会憲章』第8章キリストと教会の神秘の中の神の母、聖なる処女マリアについて3. 聖なる処女マリアと教会、マリアの執り成し、62項）

Selbst das Paradies Ihr den Vorzug ließ,	あの樂園でさえ、
	あなたには劣ります。
Freudenreicher Tag, Wo Sankt Anna sprach:	喜びに満ちた日に
	聖アンナが語ります。
“Kommt, ihr Kinder all’, Singt mit süßem Schall,	「さあ、子供たちみな、来なさい。
Singt der schönen Ros’ Auf der Mutter Schoß!”	母の懐にいる美しいバラに向かい、
	甘美な歌声でたたえなさい」

『公教聖歌集』は『公教會聖歌集』のテキストを概ね引き継いでいるが、ドイツ語の詩との直接的な関係は薄い。ドイツ語ではマリアが比喩的に「バラ」と表されるが、日本語では、「ユリ」が用いられる。

日本語のテキストの特徴としては、「姫君マリア」という用語が用いられていることである。王后、女王のイメージがマリアとして先行することが多いが、ここではマリアの母アンナの名前と共に、姫としてのマリアへの賛美が送られる。

160. こころも清けき

『公教聖歌集』の「無原罪の聖母」の聖歌〈こころも清けき〉は、『公教會聖歌集』の「聖母の汚れなく御やどり」の聖歌〈罪の汚れなき〉から引き継がれた聖歌である。『フルダ 1891』の〈Mutter Christi, hoch erhoben〉に基づいている。

『フルダ 1891』 No. 125

1. Mutter Christi, hoch erhoben in dem schönen Himmel droben, aller Engel Königin, unsre Frau und Mittlerin. Deinen Segen uns mitteile, uns zu helfen nicht verweile! o Maria, steh uns bei, daß uns Gott barmherzig sei!	美しい天に高くあげられた キリストの母よ、 すべて天使の女王、 私たちの女主人、取り次ぎの方よ。 あなたの祝福を私たちに分けてください。 すぐに助けてください。 マリアよ。私たちと共にいてください。 神が私たちにとって慈しみ深くあるように。
2. Du, o Jungfrau voll der Gnaden, weißt von keinen Sündenschaden, voller Glanz und Tugendschein, allzeit heilig, allzeit rein.	恵みに満ちたおとめよ、 あなたは罪の汚れを知らず、 輝きと徳に満ちています。 永遠に聖なる方、永遠に清い方よ。
3. O du Zuflucht aller Sünder,	すべての罪びとの逃げ場である方よ

schau uns an Adamskinder,
die gesündigt ohne Zahl,
weinen in der Jammertal.

アダムの子である私たちを顧みてください。
数えきれない罪を犯し、
嘆きの谷で泣いている私たちを。

ドイツ語の第 1 節で「私たちの女主人、取り次ぎの方よ。unsre Frau und Mittlerin.」とマリアに呼びかけるテキストと、『公教會聖歌集』（1930）の第 2 節で「サタンの誘惑いかに繁くとも うち勝つ能力 主に懇求めてよ」と主への取り次ぎをマリアに願うテキストには、聖歌 131 でも指摘したマリアを「仲介者」とする内容が見て取れる。この聖歌でも、マリアへの呼びかけの際、原曲の「キリストの母 Mutter Christi」、「すべて天使の女王、私たちの女主人、取り次ぎの方 aller Engel Königin, unsre Frau und Mittlerin」に対応するように、「天主の母」、「天なる王后」という使い分けが行われている。

163. 皐月のきさいを

『公教聖歌集』の「聖母月²³⁶」の聖歌〈皐月のきさいを〉は、シュービガー（Anselm Schubiger, 1815～1888）によって作曲され、ゲレス（Guido Görres, 1805～1852）によって作詞された〈Maria, Maienkönigin〉に基づいている²³⁷。

B IV, No. 258

Maria, Maienkönigin!
Dich will der Mai begrüßen;
O segne seinen Anbeginn,
Und uns zu deinen Füßen!

マリアよ、5月の女王よ。
五月があなたを迎えようとしています。
ああ、5月の始まりを祝福してください。
私たちはあなたにひれふします。

『公教聖歌集』においても、皐月をマリアの月として祝うことが書かれるが、第 2 節以降は自由な詩となっている。

164. 風もかをりて

『公教聖歌集』の「聖母月」の聖歌〈風もかをりて〉の原曲は、前曲と同じく、シュービガーによって作曲され、ゲレスによって作詞された〈Es blüht der Blumen〉である。

B IV, No. 265

²³⁶ 聖母月とは、5月をマリアを敬う月とするマリア信心の伝統である。5月を通してマリア崇敬のために祈り続ける信心は近世以来の習慣である。（石井祥裕「聖母月」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002年、第3巻、753頁。）

²³⁷ B IV, p. 622.

Es blüht der Blumen eine auf ewig grüner Au;	花は、常緑の草地に咲く
Wie diese blühet keine,	これほどに咲くものは他になく、
so weit der Himmel blau.	どこまでも天が青い。
Wenn ein Betrübter weinet,	悲しむ人が泣くとき、
Getröstet ist sein Schmerz:	その痛みは慰められる。
Wenn ein Betrübter weinet,	悲しむ人が泣くとき、
Getröstet ist sein Schmerz:	その痛みは慰められる。
wenn ihm die Blume scheint in's leidenvolle Herz	悲しんでいる人の心に花が咲けば、
	その痛みは和らげられる。

『公教聖歌集』のテキストは、原曲との直接的な関連は見られない。『公教聖歌集』のテキストでは、この聖歌が聖母月（5月）のための聖歌であることから、「木陰」、「若草」、「雲雀」など春を彷彿させる語句とともにマリア賛歌が行われる、
 なお、聖歌、163、164のテキストはともに、教化的な内容、あるいはマリアへの信心を促すものではない。

171. あやに奇しき

『公教聖歌集』の「聖母の御名」の聖歌〈あやに奇しき〉は、『公教會聖歌集』の「マリアの聖名」の聖歌〈あな芳香はしき〉から引き継がれた聖歌である。『ケルン 1908』の〈Ave Maria, klare, Du lichter Morgenstern!〉に基づいている。

『ケルン 1908』 No. 150

Ave Maria, klare, Du lichter Morgenstern!	アヴェマリア、清き方、輝く暁の星よ。
Dein Glanz, o Wunderbare,	あなたの輝きは、なんと素晴らしいことよ。
Verkündigt uns den Herrn,	私たちに主を告げ知らせる方。
Erwählt von Ewigkeit,	永遠から選ばれて、
Zur reinsten Mutter Gottes,	いと清き神の母、
Zum Trost der Christenheit	キリスト者の慰めとなった方。

『公教會聖歌集』、『公教聖歌集』ではいずれもこの聖歌は聖母の御名を讃える聖歌として区分されており、そのテキストには「マリアの御名 となふるごとに よろこび満つ」、「聖きマリアの 御名ぞ頼らん」（『公教會聖歌集』1930）とある。そのため、原曲との関係は見られない。

4.1.3.2 天使に対する賛美の聖歌

『公教聖歌集』の中に、天使賛美の歌は、173～177まで4曲ある。

173. みつかひの長と

『公教聖歌集』の「大天使ミカエル」の聖歌〈みつかひの長と〉は、『公教會聖歌集』のみつかひの首と〉から引き継がれた聖歌である。この旋律は、1619年にケルンで出版された〈O ihr Heiligen Gottes freundt〉(B III, No.114)と一致するが、この聖歌は聖人全般のための聖歌であるため、日本の両聖歌集の聖歌との関係はテキストという点では見られない。

175. わが身のまもりの

『公教聖歌集』の「天使」の聖歌〈わが身のまもりの〉は、『公教會聖歌集』の〈われを守ります〉から引き継がれた聖歌である。これは、『フルダ 1891』の133〈Du mein Schutzgeist〉に基づいている。

『フルダ 1891』 No. 133

1. Du mein Schutzgeist, Gottes Engel,
weiche, weiche nicht von mir;

私の保護者、神の天使よ、
離れないでください。

私から離れないでください。

leite mich durchs Tal der Mängel
bis hinauf, hinauf zu dir.

欠乏の底にある私を引き上げてください。

あなたのところまで、

引き揚げ、導いてください。

2. Lass mich stets auf dieser Erde
deiner Führung würdig sein,

この地上に生きる私たちを
あなたの指導にふさわしいものと
させてください。

dass ich stündlich besser werde,
nie mich darf ein Tag gereuen.

私が絶えず、よりよくなり、
一日も後悔することがないように。

3. Sei zum Kampf an meiner Seite,
wann mir der Versuchung winkt;
steh mir bei im letzten Streite,

戦いの際には私のそばにいてください、
誘惑が待ち受けているとき。

この戦いの最後まで、

私のそばにいてください。

wann mein müdes Leben sinkt.

私の命が疲れ果てるときも。

4. Sei in dieser Welt voll Mängel
stets mein Freund mein Führer hier;

私の友達であり、私の指導書である方よ、
欠乏しているときにもそばにいてください。

du mein Schutzgeist, Gottes Engel weiche, あなたは私の守り手、神の天使、
weiche nicht von mir! 私から離れないでください。

『公教聖歌集』と『公教會聖歌集』のテキストはほとんど一致するが、そのテキスト内容は、ドイツ語のテキストと関連する点が多くみられる。『公教會聖歌集』（1930）の第1節「われを守ります あめの聖使よ」は、ドイツ語テキストの第1節「わたしの保護者、神の天使よ Du mein Schutzgeist, Gottes Engel」を踏まえているといえるだろう。第2節「いざなひ遠ほざけ」、第3節「臨終（いまは）のきはにも みちびきたまへ」は、いずれもドイツ語詩の第3節を踏まえている。

天使をどのようなもの存在として信仰し、信頼するかが端的に語られる聖歌である。

4.1.3.3 聖人に対する賛美の聖歌

『公教聖歌集』の中には、ヨゼフに関する聖歌（178,179）、ペトロに関する聖歌（181、182）、日本殉教者（183～186）、フランシスコ・ザビエル（187、188）、アッシジのフランシスコ（189）、聖アロイジオ（190）、小さき花の聖テレジア（191）、諸聖人（192、193）が含まれている。

178. み子とその母の

『公教聖歌集』の「聖ヨゼフ」の聖歌〈み子とその母の〉は、『公教會聖歌集』の〈頌べきヨゼフよ〉から引き継がれた聖歌である。ヨゼフに関しては、1870年に、ピウス9世が「普遍教会守護の聖人」であることを宣言している²³⁸。『フルダ 1891』に新たに掲載された聖歌〈Vater Joseph, schau hernieder〉に基づいている。

『フルダ 1891』 No. 146

1. Vater Joseph, schau hernieder; deine Kinder singen dir ihre Weisen, ihre Lieder, und ihr Herz sie bringen dir, dich zu grüßen mit dem füßen, lieben Kindlein Jesus Christ.	父なるヨゼフよ、見下ろしてください。 あなたの子供はあなたに向かって 彼らの方法で歌います。 あなたの子供たちは、 歌をもって心をあなたにささげ、 幼子イエスとともにおられる あなたにひれふして挨拶します。
2. Vater Joseph, schau hernieder;	父なるヨゼフよ、見下ろしてください。

²³⁸ 清水宏「ヨゼフ」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2009年、第4巻、1157頁。

alle sind wir Kinder dein;
allen wolle du hinwieder
ein gar truer Vater sein,
wie dem kleinen, himmlische seinen,
füßen Kindlein Jesus Christ.

私たちはみなあなたの子供です。
あなたはすべての者に対して、
いつも忠実な父親でいてください。
小さな神の御子
イエス・キリストとともに。

3. Vater Joseph, schau hernieder;
deine Kinder rufen dich,
und an deine Rechte wieder
schmiegen sie vertrauend sich.
O begleite, führe, leite
sie zum Kindlein Jesus Christ.

父なるヨセフよ、見下ろしてください。
あなたの子供はあなたを呼びます。
そして、あなたの子供たちは
信頼をもって寄り添います。
ヨセフよ、共にいて導いてください。
私たちを幼子イエス・キリストへ。

4. Vater Joseph, schau hernieder;
von uns wend dein Auge nie,
segne deine Kinder wieder,
wie du oft gesegnet sie
mit dem reinen, mit dem kleinen,
füßen Kindlein Jesus Christ.

父なるヨセフよ、見下ろしてください。
私たちから目をそらさないでください。
あなたの子供たちを
再び祝福してください。
清い方、小さな方である幼子
イエスキリストとともに
[祝福してください]。

『公教会聖歌集』では、もとのドイツ語のテキストのように、言葉が繰り返されることはない。ドイツ語の詩を踏まえた内容というよりは、直接的なヨセフへの賛美の内容となっている。特に、第 2 節「聖子をば育くむ やしなひおやに 爾を選みてぞ」(『公教会聖歌集』1930) からは、に神から選ばれ、イエスを育て上げたことの功績がヨセフへの賛美として歌われる。『公教聖歌集』は、原曲と『公教会聖歌集』のいずれも反映されず、詩的な表現を用いた内容となっている。

179. 聖ときヨゼフよ

『公教聖歌集』の「聖ヨゼフ」の聖歌〈聖ときヨゼフよ〉は、おそらく 1810 年にフェルスベル (Christoph Bernhard Verspoell, 1743~1818) によって作詞された〈Heiliger Joseph, höre uns flehen〉に基づく聖歌である²³⁹。

B IV, No. 278

²³⁹ B IV, pp. 635, 636.

Heiliger Joseph, höre uns flehen,	聖なるヨセフよ、
Nimm das Lob, das wir dir weih'n;	私たちの願いを聴いてください。
Du, den Gott hat ausersehen,	私たちがあなたにささげる賛美を
Nährer seines Sohnes zu sein.	受け取ってください。
Welch ein Vorzug, welch ein Lohn!	神は御子の養い親として
	あなたを選ばれました。
Bitt bei deinem Pflegesohne	それはあなたにとって優位なことで、
Für uns, heiliger Schutzpatron!	あなたの信仰への報いでもあります。
	御子イエスとともにいて、
	私たちのために祈ってください。
	聖なる保護者よ。

『公教聖歌集』の第1節「汝は聖子の父 み選ぶうけにし」は、ドイツ語テキストの「神は御子の養い親としてあなたを選ばれました。Du, den Gott hat ausersehen Nährer seines Sohnes zu sein.」を踏まえている。

183. かたくな人の

『公教聖歌集』の「日本聖殉教者」のための聖歌〈かたくな人の〉は、『公教會聖歌集』の「日本致命聖人」の聖歌〈大和しまねの〉から引き継がれた聖歌である。旋律は、『ケルン 1908』に掲載される〈O Hirt, von Gott erkoren〉に基づくが、この聖歌は最初のケルンの司教である、聖マテルネスへの賛歌として掲載されている。

賛美する対象が異なるため、日本語の聖歌集では、独自の作詞が行われている。

187. やまと島根に

『公教聖歌集』の「聖フランシスコ・ザベリオ」の聖歌〈やまと島根に〉は、『公教會聖歌集』の〈やまと島根に〉から引き継がれた聖歌である。この旋律は、マリア賛歌の聖歌である〈Kommt, o Christen, kommet all〉(B IV, No.209)と共通するものである。

賛美の対象が異なるため、テキストは言うまでもなく引き継がれていない。日本語のテキストは、独自に、日本に来日し、迫害の中で宣教を行ったフランシスコ・ザビエルへの賛美の言葉がつけられている。

190. わかき聖者

『公教聖歌集』の「聖アロイジオ」の聖歌〈わかき聖者〉は、『公教會聖歌集』の〈いと浄き〉から引き継がれた聖歌である。イエズス会員だったアロイシウス (Gonzaga Aloysius, 1568~1591) は、1605年にイエズス会員として最初の福者となり、1726年に

列聖、同年、教皇は彼を青少年の守護聖人と宣言した²⁴⁰。

原曲は、『ケルン 1908』の聖人賛歌〈Gegrüsst sei tausendmal〉である。

『ケルン 1908』 No. 199

1. Gegrüßt sei tausendmal, Gelobt sei ohne Zahl O Aloysi! Du bist mein Schutzpatron An Gottes Gnadenthron, O Aloysi!	大いに迎えられ、たたえられよ。 アロイジオ。 あなたは私の守護聖人である。 神の恵みの座にあるアロイジオ。
2. So wie der Lilien Pracht Hier unter Dornen lacht, So glänzt zu unsrer Freud' Noch deine Heiligkeit.	棘の下でも ユリが美しく咲くように、 あなたの聖性はなお輝き、 私たちの喜びとなる。
3. Du Blum' der Reinigkeit, Der Zucht und Sittsamkeit, O hilf mir, keusch und rein Wie du auf Erden sein!	純潔の花、 そして節制と規律の方よ。 私を助けたまえ。 あなたのように純潔でいられるように。
4. Schütz mich vor Üppigkeit, Vor Stolz und Eitelkeit; Halt von Verführung frei Mich, meinem Gott getreu.	贅沢、傲慢、 虚栄から守りたまえ。 私を誘惑から守りたまえ。 私の神に忠実でいられるように。

日本語テキストにはドイツ語テキストとの類似性はみられるが、明確な引用などは見られない。特に、『公教會聖歌集』（1930）では、1 曲の中に「聖アロイジオ」を 2 回歌うテキストになっており、そのため、内容がかなり削減されてしまっていることがある。

193. 世の軍に勝ちし

『公教聖歌集』の「諸聖人」のための聖歌〈世の軍（いくさ）に勝ちし〉は、『公教會聖歌集』の〈身もたまも献げて〉から引き継がれた聖歌である。原曲は『フルダ 1778』にある〈Im Himmel müsse Lob erschallen〉である。『フルダ 1891』にも、同曲は聖人のための聖歌の一つとして含まれている。

²⁴⁰ J. P. ドネリ「アロイシウス」、『新カトリック大事典』東京：研究社、1996年、第1巻、1巻、249頁。

『フルダ 1891』 No. 139

- | | |
|--|--|
| 1. Im Himmel müsse Lob erschallen,
auf Erden müsse jeder Christ
von Freude an dem Tage wallen,
der den Aposteln heilig ist!
Die Welt singt ihre Herrlichkeit,
der Himmel priest sie jederzeit. | 天において賛美よ、鳴り響け。
地上にあって、すべてのキリスト者は、
使徒たち[諸聖人]にとって
聖なるこの日に喜べ。
世界は、彼らの栄光をほめ歌い、
天は常にそれを賛美する。 |
| 2. Zu euch erheben wir die Hände,
ihr wahren Lichte dieser Welt,
die ihr an aller Zeiten Ende
von Gott zu Richtern seid bestellt.
Hört unser demutvolles Flehn
und macht es in Erfüllung gehn. | 私たちは諸手をあげてあなた方をたたえる。
あなたがたはこの世の真の光。
あなたはすべての時の終わりにいます。
神によって裁き手として任命されています。
私たちの謙虚な嘆願を聴いて、
それをかなえてください。 |
| 3. Den Sündern schließt ihr zu die Pforte,
die zu des Himmels Erbe führt;
ihr öffnet sie mit einem Worte den Sündern,
die die Reue rührt;
löst uns in diesem Lebenslauf
von allem Sündenbanden auf. | あなたがたは罪びとたちに対して
天の国に入る門を閉ざす。
そして、あなたがたは天の国に入る門を
悔い改める罪びとにはただちに開ける。
この世において私たちをすべての罪の束縛
から解き放ってください。 |

原曲のドイツ語テキストと『公教會聖歌集』と『公教聖歌集』では異なるテキストを持つが、それぞれにおいて、殉教者や聖人、神のために命を捧げた人々への賛美が行われる。

4.1.4 葬礼の聖歌（付録 4：108～114 頁）

『公教聖歌集』には、死者、葬儀、葬礼、天国に関する聖歌が 194～201 までである。ミサ聖歌、典礼暦上の聖歌、キリスト、聖母、聖人や天使への賛美の聖歌の後に、まとまって葬礼の聖歌が掲載されることも、『公教會聖歌集』、『フルダ 1891』、『ケルン 1908』等と共通している。

194. 世に在りしときの

『公教聖歌集』の「死者」のための聖歌〈世に在りしときの〉は、『フルダ 1891』に掲載される〈O Heiliger Dreifaltigkeit〉に由来する。

『フルダ 1891』 No. 169

1. O Heiliger Dreifaltigkeit,
sieh an die lieben Seelen,
die wir in ihrem schweren Leid
dir herzlich anbefehlen.
Erbarme dich, erbarme dich,
nimm sie vom Leidensorte;

die Finsternis schließ ewiglich,
mach auf die Himmelspforte!

2. O Vater, voll Barmherzigkeit,
sieh an die armen Sünder,
halt ein die Allgerechtigkeit,
erbrarm dich deiner Kinder.

3. O Jesu, laß dein Heilig Blut
für sie um Gnade sprechen;
durch deinen Tod lösche ihre Glut
und heile die Gebrechen.

4. O heiliger Geist, hernieder eil',
sie mild zu übertauen,
vollende ihres Glaubens Heil,
daß sie dich bald anschauen.

5. O Mutter der Barmherzigkeit,
sieh deiner Kinder Zähren,
die weinend in Verlassenheit
nach deiner Hilf' begehren.
ach bitt für sie, ach bitt für sie,

du Mutter reich und milde;
sprich gut für sie,
und führe sie

聖なる三位の神よ、
召された人たちを顧みてください。
いま私たちが苦しみの中で
そのことを心からお祈りします。
憐れみたまえ。
苦しみの場所から
彼らを連れ出してください。
闇は永遠に閉じ、
天の門が開きますように。

憐れみに満ちた父よ、
貧しい罪びとを顧みてください。
正しい裁きを行ってください。
あなたの子を憐れんでください。

イエスよ、あなたの聖なる血をもって、
彼らのために恵みをお与えください。
あなたの死を通して、煉獄の火を消し、
傷をいやしてください。

聖霊よ、急いで来て、
彼らの苦しみを和らげてください。
彼らの信仰の救いを完成してください。
彼らがあなたにすぐに相まみえることが
できるように。

憐れみの母よ、
あなたの子の涙を見てください。
彼らは見捨てられて泣き、
あなたに助けを求めています。
ああ、彼らのために祈ってください。
彼らのために祈ってください。
豊かで寛大な母よ、
彼らのために取り次ぎ、
彼らを天の園へと

in himmlische Gefilde!

導いてください。

原曲テキストは 5 節までで構成されており、三位の神、続いて父なる神、イエス、聖霊、母へそれぞれ祈る内容となっている。『公教聖歌集』は 4 節で構成されており、主、イエス、聖霊、母の四者に向けられた祈りの言葉である。

196. 往にけるその霊

『公教聖歌集』の「葬禮」のための聖歌〈往にけるその霊〉は、『公教會聖歌集』の「死者の爲め」の聖歌〈烈しき火焰に〉から引き継がれた聖歌である。『フルダ 1891』に掲載される、葬禮の聖歌 162a 〈Herr, gib Frieden dieser Seele〉をもとにしている。

『フルダ 1891』 No. 162a

1. Herr, gib Frieden dieser Seele,
nimm sie auf zum ew'gen Licht.
Gib Erbarmen ihr und zähle,
Vater, ihre Mängel nicht.

主よ、この魂に平和をお与えください。
永遠の光を受け取ることができますように。
父よ、彼らに憐れみを与えてください。
そして、彼らの欠点を数えないでください。

2. Gib ihr, was dein Sohn erworben
durch sein schweres Kreuz und Leid,
durch den Tod, den er gestorben:
Gnade für Gerechtigkeit.

あなたの御子が
重い十字架と苦しみ、
そして死を通して獲得した、
義のための恵みをお与えください。

3. Wasche sie mit seinem Blute,
schaff' sie neu durch sein Gebet;

彼らを御子の血で洗い、
彼らが御子の祈りによって新たに
生まれるようにしてください。

Dorn und Geißel, Speer und Rute
dich für sie um Gnade fleht.

棘、やり、鞭による苦しみを通して
彼らのための恵みが求められますように。

『公教會聖歌集』は、第 1 節、2 節を通して憐れみと安らぎを願い、第 3 節でイエスの十字架が言及される。この内容は、第 1 節と 2 節のテキストを踏まえたものである。一方、『公教聖歌集』はより自由に作詞されており、原曲のニュアンスは残っていない。

197. 最終のやすみの

『公教聖歌集』に「葬禮」の聖歌として掲載される〈最終のやすみの〉は『公教會聖歌集』の「埋葬」の聖歌として掲載される〈靈魂のふるさと〉から引き継がれた聖歌である。『フルダ 1778』に由来する聖歌であり、『フルダ 1891』にも〈Wie der Hirsch in

schuwüllen Tagen〉として引き継がれている。

『フルダ 1891』 No. 170

1. Wie der Hirsch in schwülen Tagen bei des heißen Durftes Klagen nach der frischen Quelle schreit, also schreit nach ihrem Scheiden jede Seel' in ihrem Leiden nach des Himmels Seligkeit.	蒸し暑い日に鹿が、 水を求めて嘆くのとじように、 どの魂も、別れのあと 苦しみの中で 天国の至福を求めて 叫びます。
--	---

原曲の冒頭には、詩編 42:2（涸れた谷に鹿が水を求めるように神よ、わたしの魂はあなたを求める。）のイメージがみられるが、日本語の聖歌には見ることはできない。より一般的な内容で、故人が神のいる永遠の平安を得ることのできる天の国へ行ったことが歌われる。

198. 世を去る友をば

『公教聖歌集』に「葬禮」の聖歌として掲載される〈世を去る友をば〉は、ポーネの『カンターテ』（1847）に由来する〈Herr, wir bitten dich〉に基づいている。

B IV, No. 376

Herr, wir bitten dich, ach denke An die Seelen in der Qual, Gib Erbarmen Herr, und schenke Die so grosse Schuldenzahl.	主よ、私たちはあなたにお願いします。 ああ、煉獄の苦しみにある魂を 顧みてください。 主の憐れみを与え、 そのものたちに罪の贖いをお与えください。
---	---

原曲のテキストでは煉獄の苦しみが言及され、罪の贖いによって人々が救われることがテーマとなっている。日本語のテキストには、原詩との関連は直接的には見られない。

199. しらゆりと清く

『公教聖歌集』に掲載される「葬禮（小児）」のための聖歌〈しらゆりと清く〉は、『公教聖歌集』の「小児の埋葬」の聖歌〈野の白百合にも〉から引き継がれた聖歌である。旋律は、『公教聖歌集』の 120 〈わが爲十字架に〉、『公教聖歌集』（第 5 版、1930）の 104 〈われは主をあいす〉とも共通する。『フルダ 1891』の聖歌集でも、同様に同じ旋律を用いるように指示があるが、この聖歌の原曲は、死者のための聖歌として掲載される〈Zum Vater, der im Himmel〉である。

『フルダ 1891』 No. 172

1. Zum Vater, der in Himmel wohnt
und über allen Engeln thront,
ging dieses Kind wie Engel rein,

um ewig froh und schön zu sein.

天に住み、
すべての天使の上に君臨している父よ。
この子は、天使のように純潔のまま
天に行きました。
永遠に幸せに、美しくあるために。

2. Des Lebens Leid, der Welt Gefahr
ward ihm noch nicht hier offenbar;
Das Barn zerriß, die Seel' erhob
sich frei empor zu Gottes Lob.

生きることの苦しみやこの世の危険は、
その子にはまだ明らかになっていません。
飼葉桶を引き裂き、その魂は神のもとに、
賛美と共に天に召されました。

3. Auf Flügeln eilt es himmel an,

kein Feind es da aufhalten kann,
geht ohn' Gericht zum Himmel ein;
o welch ein Glück kann größer sein!

翼をもって天に向かって
急いで登っていきます。
どんな敵もそれを止めることはできません。
審判なしに天に入れてください。
ああ、それ以上の幸せはあるでしょうか。

4. Von Gott geliebt, von Gott gewählt,
ist's nun den Heil'gen zugezählt,
geschmückt mit Glanz und Ehrenzweig,
den lieben sel'gen Engeln gleich.

神に愛され、神によって選ばれたその子は、
もはや聖人の列に加えられます。
愛され、祝福された天使と同じように、
輝きと栄誉をもって飾られます。

5. So schaut's herab vom Himmel hoch
und bittet für die Seinen noch.
weiß was uns gut und selig macht,

und gibt auf unsre Schritte acht.

だから、その子は天から見下ろし、
彼のもののためにお祈りしています
何が私たちにとってよく、
私たちを幸せにするかを知り、
私たちの歩みに注意を払ってください。

6. O Gott, der du die Seelen schusst,
hinauf zu dir die Reinen rufst,
gib, daß wir einst von Sünden rein,
wie dieses Kind geh'n himmelein.

罪びとには門を閉ざし、
清いものは呼び寄せる神よ。
私たちが罪から清められ、
この子らのように天に上ることが
できるようにしてください。

『公教會聖歌集』、『公教聖歌集』には、いずれも原曲のテキストの影響が強くみられる。特に、『公教會聖歌集』(1930)の第2節「速くも入りぬる 聖なるつどひの 榮光みなぎる あめなる御殿に」は、原曲の第4節、『公教會聖歌集』(1930)の第3節「罪とが知らでぞ 御國に入りにし」は原曲の第2節「生きることの苦しみやこの世の危険は、その子にはまだ明らかとなっておりません。Des Lebens Leid, der Welt Gefahr ward ihm noch nicht hier offenbar」、『公教會聖歌集』(1930)の第5節「みちちよ御父よ われらを浄めて 愛し子のごとく 御國にいれてよ」は原曲の第6節にそれぞれ基づいている。

『公教聖歌集』の最終第5節「聖父聖子聖霊よ 聖母よヨゼフよ 聖人よ天使よ 愛くしみたまへ」は新しい内容であり、こうした三位一体の神、そしてマリア、ヨゼフ、天使と聖人への同時の呼びかけが行われるのは、この聖歌集において唯一の例である。

200. さかえも幸も

『公教聖歌集』の「天國」の聖歌〈さかえも幸も〉は、『公教會聖歌集』の〈榮光とさちと〉から引き継がれた聖歌である。この聖歌の旋律は、『フルダ 1891』の待降節の聖歌7〈Maria, sei gegrüßet〉あるいは、聖体賛美の聖歌106〈Im Himmel und auf Erden〉と一致している。しかし用途が異なるため、テキストに関する関連性や共通点はない。

4.1.5 そのほか (付録4: 115~116頁)

204. ほめよ稱へよ

『公教聖歌集』の「聖會」の聖歌〈ほめよ稱へよ〉は、『公教會聖歌集』の「母なる聖會」の聖歌〈ほめよ稱へよ〉から引き継がれた聖歌である。原曲は、モールによる、〈Ein Haus voll Glorie schauet Weit〉である。

B IV, No. 359

Ein Haus voll Glorie schauet

神の御手によって不滅の石で造られた、

Weit über alle Lande,

榮光で満ちあふれた家は、

すべての土地を見渡します。

Aus ewigen Steinerbauet

神よ、私たちはあなたを賛美します。

Von Gottes Meisterhand.

神よ、私たちはあなたをたたえます。

Gott! Wir loben dich; Gott, wir preisen dich; ああ、あなたの家の中で、

O lass im Hause dein Uns all geborgen sein! 私たちみな安全でいられますように。

この聖歌は、教会への賛美の歌であるが、原曲と日本語の関係は直接的なものではない。

209. こよひも 仇の手より

『公教聖歌集』の「夕べの歌」、〈こよひも仇の手より〉は、『公教會聖歌集』の「夜の守護を求むる」聖歌の〈我天主よ〉から引き継がれた聖歌である。『フルダ 1891』に、〈In dieser Nacht sei du mein Schirm und Wacht〉として掲載されている。

『フルダ 1891』 No. 176

1. In dieser Nacht sei du mein Schirm und Wacht; o Gott, durch deine Nacht wollst mich bewahren vor Sünd' und Leid, vor Satans List und Neid; hilf mir im letzten Streit, in Todsgefahren.	この夜、 あなたは私を見守り、保護してくださる方。 神よ、あなたはあなたの夜を通して、 罪と苦しみから 私を守り、 サタンの策略やねたみから守ってください。 そして、最後の戦い、死の危険において 私を助けてください。
2. O Jesu mein, die heil'gen Wunden dein, sollen meine Ruhstatt sein, das Bett der Seelen; in dieser Ruh' schließ mir die Augen zu, mein'n Leib und alles tu' ich dir befehlen.	私のイエスよ、 あなたの聖なる傷は、 私の憩いの場所、 魂の寝床となってください。 この安息の中で、 私は目を閉じ、 わたしの身体とすべてがあなたの御心に 従うものとなりますように。
3. O güt'ge Frau, Maria auf mich schau! Mein Herz dir anvertrau! in meinem Schlafen; sankt Joseph dich bitt', hilf mir väterlich; Schutzengel streit' für mich mit deinen Waffen!	ああ、よい方、 マリアよ。顧みてください。 私の心はあなたを信頼します。 私が眠っているときも。 聖ヨセフよ、あなたに祈ります。 父のように私を助けてください。 守護の天使よ、あなたの武器をもって、 戦ってください。

『公教聖歌集』（1930）の 1 節、2 節のテキスト、（特に 1 節の、「罪をふせぎ」、「魔に勝たしめ」、そして 2 節における「聖マリア、天つ聖使、聖ヨゼフよ（中略）われ等を（中略）守護りませ」）において、ドイツ語テキストの第 1 節、3 節の影響をみることが

できる。

『公教聖歌集』では、『公教會聖歌集』の2つのテキストの間に、もう一節加わる形で、第3節までで構成されている。加えられた第2節には「みきずに 活されし身」という、イエスが人間のために負った傷について言及され、ドイツ語テキストの第2節を踏まえていることがわかる。『公教聖歌集』は3節を通して、ドイツ語に忠実な訳詩といえるだろう。

4.2 個別のテキスト研究を通じた考察

『公教聖歌集』は、『公教會聖歌集』をモデルに、日本における初めての統一聖歌集として編纂された。個別の聖歌のドイツ語聖歌との比較検証は、前述した通りであるが、それらの全体的な特徴、そして個別聖歌の分析を通して、『公教聖歌集』、あるいは日本語聖歌全般に見られたカトリック教会における役割を以下で論じる。

4.2.1 啓蒙期に成立した聖歌に関して

日本のカトリック教会における『公教會聖歌集』と『公教聖歌集』のような会衆のための教区聖歌集の歴史が、啓蒙思想に基づく典礼改革意識の中で始まったものであることは既に言及した通りである。当時、新たに作曲、作詞された多くの聖歌は、その後200年にわたってカトリック教会の中で重要なレパートリーとして受け継がれ、日本においてもこれらの聖歌は広く伝承している。

『公教聖歌集』の中で、18世紀の改革期の聖歌集に由来する聖歌は以下の通りである。

【表4】啓蒙期の聖歌集に由来する聖歌

聖歌区分	『公教聖歌集』	原曲	18世紀聖歌集
ミサ聖歌	1. 三位のみかみの	Hier liegt von deiner Majestat	Landshut 1777
ミサ聖歌	2. あめにみさかえ	Gott soll gepriesen werden	Landshut 1777
ミサ聖歌	3. 世にたまはりし	Wir sind im wahren Christentum	Landshut 1777
ミサ聖歌	4. きよくたふとき	Nimm an, o Herr, die Gaben	Landshut 1777
ミサ聖歌	5. いとしもきよき	Heilig, Heilig, Heilig	Landshut 1777
ミサ聖歌	6. つみびとなる身を	Sieh, Vater von dem höchsten Throne	Landshut 1777
ミサ聖歌	7. いざ我がのぞみ	O Herr, ich bin nicht würdig	Maria Theresia 1774
待降節	20. み恵み降らせよ	Taut, Himmel, den Gerechten	Landshut 1777
待降節	24. きけ妙なるしらべ	Auf, Christen, singt festliche Lieder	Fulda 1778

御復活	70. よろこびたたへよ	Das Grab ist leer!	Landshut 1777
聖霊	75. みたまよゆたけき	Kom, kom, O Gesit	Tochter Sion 1741
三位一体	82. 父なるみかみよ	Gott, wir preisen deine Güte	Fulda 1778
聖體	83. 神こそ此處にいませ	Wir bethen an	Landshut 1777
聖體	90. シオンよ汝が歌を	Auf! Zion, preise deinen König	Fulda 1778
信望愛	114. み神のたまひし	Ich glaub' an Gott in aller Not	Tochter Sion 1741
諸聖人	193. 世の軍に勝ちし	Im Himmel musse Lob erschallen	Fulda 1778
葬礼	197. 最終のやすみの	Wie der Hirsch in schwülen Tagen	Fulda 1778
天国	200. さかえも幸も	Maria, sei gegrusset	Fulda 1778

この一覧からもわかる通り、20 世紀の日本に持ち込まれた聖歌の中には、啓蒙期においてあらたに作られた聖歌が多く含まれている。特に、啓蒙思想期の典礼改革に伴う新たな聖歌の作曲を最も特徴づける「ミサ聖歌 Singmesse」が、聖歌集のレパートリーの重要な部分であり続けたことがわかる。

一般聖歌、ミサ聖歌、ともに『シオンの娘 1741』、『ランツフト 1777』、そして『フルダ 1778』に由来しているものが多く、啓蒙期において中心的な役割を担った聖歌集の影響力の大きさを示している。

一方、これらの聖歌は改訂されることなく伝承されてきていたわけではなく、『公教聖歌集』聖歌 20 番〈み恵み降らせよ〉の原曲〈Thauet, Himmel, den Gerechten〉で指摘したように、18 世紀の聖歌と 20 世紀の聖歌を比較すると、過激過ぎる啓蒙期の思想、ロマンティックな要素を排除する改訂が行われていたことも明らかとなった。このようなテキストの改訂は頻繁に行われており、日本語聖歌とドイツ系聖歌のテキストの比較を正確に行うには、直接的影響力を持った 20 世紀の聖歌集を踏まえなければならないことも重要である。

4.2.2 ドイツ語の詩との内容の比較

『公教聖歌集』と『公会聖歌集』は多くのドイツ語由来の聖歌で構成されているが、個別の聖歌について上述している通り、それらは決して単純な「翻訳聖歌」ではない。日本にこれらの聖歌が移入される際、原曲をそのまま翻訳している例もあったが、より多くの場合は聖歌自体のテーマを取り入れつつ自由に作詞されていた。

聖歌集の編纂に当たって『フルダ 1891』や『ケルン 1908』をはじめとする同時代のドイツ語聖歌集は当然模範となったが、ドイツ語の原曲の内容をすべて汲み入れることはそもそも日本語では不可能であった。さらに、より重要なことは、日本語聖歌のためのテキストの翻訳、作詞には、日本における宣教、日本人信者の教化を果たすための原曲との違いが見いだされた点である。以下、各聖歌のテキスト分析を通して、導き出された日本語

テキストに関する考察を行う。

➤ ミサ聖歌

『公教聖歌集』には 3 つのミサ・チクルスが収録されており、そのうち 2 つがドイツ系に分類される。これらのドイツ系ミサ聖歌には『フルダ 1891』の聖歌集の影響が極めて強い。『公教聖歌集』において新たに加えられたミサ聖歌のいずれもが『フルダ 1891』に原曲を見出すことができ、1933 年の『公教聖歌集』の編纂時点においてもなお、『フルダ 1891』の影響力が強かったことがわかる²⁴¹。

またこれらのミサ聖歌は、ミサ通常文のテキストを含むものもあるが、ラテン語のミサ曲とは異なり、統一されたテキストがあったわけではない。一方、ミサの式次第の中での役割が非常に明確であるため、これらのミサ聖歌は、典礼暦の聖歌や聖人賛美の聖歌に比べて、原曲に忠実な訳が当てはめられていることが多い。その際、聖書箇所や序誦、式文を引用するなど、より厳格に作詞が行われている。

またこれらの聖歌は典礼との結びつきが当然強いいため、各典礼上の位置づけに従って、その内容や意味を説明するテキストとなっている。例えば、福音朗読の前であれば福音書が持つ意味、聖体拝領前後の聖歌であれば、聖体拝領を受けるために行うべき心の準備、聖変化の意味、聖体の秘跡の教理などが説明される。これは、ラテン語で行われるミサにおいて信者がその内容を把握するため、そして自らその礼拝の一部に参加していることを強く感じさせる目的があると考えられる。『公教要理』に定められる典礼の基礎を踏まえた、非常に教化的なテキストとなっている。

➤ 典礼暦、聖書箇所との関連

典礼暦は、もともとキリストの過越の神秘、顕現の神秘を中心とする枠組みによって成立している。ただしキリストの生涯の出来事の記念の他に、マリアに関する祝日、使徒や殉教者など聖人に関する祝日があり、これらは次第に典礼暦の中で締める割合も大きくなった。その結果、キリストの生涯を 1 年の周期として記念するという典礼暦本来の姿を覆い隠すことになり、その状況を反省する形で、教皇ピウス 10 世の頃から典礼暦の見直しが始まった。パウルス 6 世の 1969 年 2 月 14 日付自発使徒書簡『ミステリイ・パスカーリス *Mysterii paschalis*』によって、典礼暦年に関する一般原則と新しい一般ローマ暦が認可され、現在に至っている²⁴²。

²⁴¹ なお『フルダ 1891』は、1949 年に新たに教区聖歌集 (*Katholisches Gesang- und Gebetbuch für das Bistum Fulda. Neu bearb. und hrsg.* Fulda: Verl. Bischofl. Stuhl) が編纂されるまで、何度も版を重ねた。

²⁴² 宮越俊光「典礼暦」、『新カトリック大事典』東京：研究社、2002 年、第 3 巻、1229 頁。

聖歌集が編纂された 20 世紀初頭、現在のような年間の概念はなく、典礼暦の中心はあくまで、キリストの神秘の様々な側面を記念する諸節（待降節、降誕節、四旬節、聖なる過ぎ越しの三日間、復活節）、そして各聖人の祝日によって成り立っていた。そのため、各季節の特徴はより色濃く典礼に反映されていた。

聖歌集においても、一般聖歌のうち、前半は各典礼暦上の季節に従った聖歌が収録されている。その際、ドイツ語聖歌と日本語聖歌では、典礼暦上の位置づけにおいて交差はほとんど見られず、原曲の典礼暦上の位置づけと同じ目的の聖歌として日本の聖歌集にも収録されている。

しかし日本語聖歌を作詞する際にドイツ語テキストをそのまま翻訳しているわけではなく、それぞれの典礼暦上の位置づけ、各典礼において読まれる聖書箇所を踏まえて作詞されている。特に、入祭唱、書簡朗読、福音朗読に基づくテキスト内容は多い。また、同じ典礼暦の季節のためには同じメッセージを繰り返し用いていることもある。例えば、待降節の聖歌には度々イザヤ書が引用され、イエス誕生の前の世界の暗さと誕生後の明るさを対比的に描くテキスト多く見られた。また復活節の聖歌には、聖歌 65〈しろたへの衣に〉、68〈わがきみイエズス〉、70〈よろこびたたへよ〉において見られるように、死の世界に打ち勝ったイエスのイメージが繰り返しテキストの中で語られた。聖書の内容をよりわかり易くパラフレーズし、それらを通して教理を教える、あるいは伝える目的が聖歌のテキストにあったことは明らかである。

また「キリストの聖体の大祝日」のための聖歌に含まれる、聖体賛美の聖歌においてはたびたび、聖変化を通して賜ることのできる恵みへの賛美、秘跡としての聖体の意味、聖体におけるイエスの現存、さらに聖体の秘跡を受けるものがどのような精神的準備をしていなければならないか、ということが語られる。これらの聖体賛美の聖歌は、聖体の祝日だけではなく、聖体賛美式あるいは聖体拝領の前後で歌うことも十分に可能であったと考えられるが、ミサにおいて一番重要である聖体の秘跡に関して非常に教化的なテキストとなっているといえるだろう。

➤ キリスト、マリア、天使、聖人への賛美の聖歌に関する分析

聖人とは、「神の恩恵を特に豊かに受け、キリスト者として優れた生き方と死に方をし、教会によって崇敬に値すると判断された人々」²⁴³である。カトリック教会においては、中世以来、マリア崇敬を始め、聖人崇敬がますますさかんになり、困難に遭遇した信者は聖人の名を唱えて代願を求めた。このことについては、第 2 ヴァティカン公会議の『教会憲章』においても、以下の通り説明されている。

²⁴³ P. ネメシェギ「聖人」、『新カトリック大事典』 東京：研究社、2002 年、第 3 巻、712 頁。

教会は、自分の血を流して信仰と愛の最高のあかしを立てた使徒とキリストの殉教者たちが、キリストにおいて我々により固く結ばれていることを常に信じ、聖なる処女マリアおよび聖なる諸天使と同じように、彼等を特別な愛情をもって敬い、彼等の執り成しを信心深く祈り求めてきた。²⁴⁴

『公教聖歌集』の中で、聖母マリアへの賛美の聖歌はフランス系のものが多いが、ドイツ系だけでも 10 曲以上収録され、会衆歌の中でのマリア賛歌の重要性が際立つ。

これらのマリア賛歌の中で、祈りを神へ届けてくれるよう、マリアの取り次ぎを願う聖歌もいくつか見られた。こうしたドイツ語のテキストは、日本語にも部分的に継承されているが、原曲ほどは前面に出てこない。むしろ、汚れなきマリア、御子の母マリア、人々を救い、癒やし、守る、恵みに満ちたマリアへの直接の賛美が、繰り返し歌われる。

また、そのほかの聖人や天使を讃美する日本語聖歌の中では、各聖人、あるいは天使の説明がある程度されたうえで、賛美の言葉が続く。また、日本語聖歌の独自の内容を含む聖歌も多くみられ、典礼暦の聖歌ほどは、原曲との関連がみられない。

4.2.3 『公教聖歌集』と『公教聖歌集』のテキストの違い

『公教聖歌集』は『公教聖歌集』に含まれる聖歌のほとんどを引き継いでおり（引き継がれない聖歌はわずか 10 曲）、聖歌集の構成においても『公教聖歌集』に倣っている。

『公教聖歌集』と『公教聖歌集』では、全く異なるテキストがつけられている聖歌も多いが、『公教聖歌集』を踏まえた新たなテキスト、そしてほとんど変更のないテキストも多くみられた。大きく異なっている聖歌では、『公教聖歌集』の方がより原曲に忠実な場合が多い。その際、『公教聖歌集』では比喩的な言葉や詩的な言葉が多く用いられ、内容がわかりにくくなってしまうものも多い。

また第 2 章で『公教聖歌集』について指摘した天皇制用語は、依然として残る一方で、減少傾向にある。

4.2.4 聖歌におけるテキストの重要性

『ケルン 1908』の序文には、聖歌の教化的な意義、さらにテキストの重要性について以下の通り、述べられている。

²⁴⁴ 第 2 バチカン公会議文書公式改訂特別委員会『第二バチカン公会議公文書改訂公式訳』190 頁。（『教会憲章』第 7 章 旅する教会の終末的正確および天上の教会との一致について、50 項 聖人の崇敬および死者の記念）

会衆によって歌われる聖歌は、歌い手[の心]をつかみ、ただ聞いている者たちを高揚させる真の祈りであるので、これらの神聖なテキストの言葉が、はっきりと正しく発音され、その内容が理解できるように歌われることが重要である。特に後者に注目する。歌の内容は、しばしば、もっとも深い信仰の神秘を詩的な形式の中で含んでいる。例えば聖体に関する歌では、**歌い手にとって、とりわけ学校や信仰教育を受けている若者たちに、説教を通してあるいは講演会などの形で説明されるのと同様に、[教理が]説明されなければならない。**そしてそれに続いて、**敬虔な考え方や宗教感情が目覚めるよう**でなければならない。さらに、そのような中から、聖なる聖歌の演奏が行われなければならない。できるだけ青年たちが、テキスト全体を暗唱するように導かれることが望ましい。(中略) この聖歌集が、広い大司教区のすべての小教区において、その新たな形で、純粋なカトリック信仰を養い、神への愛を燃え上がらせ、天のエルサレムへのあこがれを目覚めさせることができるように望む。天のエルサレムにおいては、我々が神と相まみえ、天使と聖人とともに永遠のアレルヤを、心をつなげて叫ぶことを望む。²⁴⁵

この序文の記事からもわかる通り、会衆が歌う聖歌は教会において極めて重要な役割を担っていた。

これは日本の会衆歌においても同様である。原曲との関連を持つものであっても、持たないものであっても、聖歌のテキストを通して教理を理解し、神を賛美することで、信仰教育上の役割を果たしていたことは明らかであった。そのうえで、さらに天皇制用語や万葉集からの言い回しを用いることでより、会衆に親しみのある言葉でアプローチしていると言えるだろう。

また日本語聖歌を通して、日本における日本人による独自の宣教活動の場が与えられたことも、特筆すべきであろう。大正時代は、外国人司祭の教えを翻訳することで教理を理解することが主であったが、次第に日本人司祭が増えたこともあり、日本におけるキリスト教神学が確立していった。こうした神学史と平行して今後聖歌の内容をさらに検証することで、神学的著作以外での神学論の展開という、聖歌の日本の宣教の歴史における位置づけをより正確にとらえることができるだろう。

4.3 『公教聖歌集』のドイツ系聖歌の音楽的な特徴

4.3.1 『公教聖歌集』全体の音楽的特徴

『公教聖歌集』は、3割程度がへ長調、その後ト長調、ハ長調、ニ長調と続く。♯、♭が

²⁴⁵ 『ケルン 1908』、7～8頁。強調は引用者によるものである。また、[]内は、引用者による補足である。

3つ以内の長調が、『公教聖歌集』全体の9割近くを占めている。前述している通り、『公教聖歌集』の中には、グレゴリオ聖歌を短縮し、拍節的に編曲して用いられているものもあるため、旋法を用いた聖歌も例外的に幾つかある。しかし基本的には、完全終止を用いて主音で終止するものがほとんどである。拍子は、4/4拍子が全体の6割を占め、拍節的な聖歌が並んでいる。わずかな例外を除いて、5行以内の聖歌で構成され、短いものは2行、長いものは6、7行で構成されている。これらは、『公教聖歌集』に含まれるドイツ系、フランス系、双方に共通してみられる特徴である。

4.3.2 ドイツ系聖歌とフランス系聖歌の違い

第2章において《公教會聖歌集》の構成聖歌についても言及した通り、日本に移入されたドイツ系の聖歌はどれも歌いやすく、リズムは単純で、臨時記号も少なく、順次進行が多い。フランス系聖歌とドイツ系聖歌で最も大きな違いは、旋律のリズムである。

『公教聖歌集』（1933）に含まれるフランスの聖歌の半数以上が付点のリズムを持つ一方で、ドイツ系に関しては、その割合は2割以下にとどまる。特に、もともとテキストに寄り添う複雑なリズムを持つフランス語聖歌は、日本語のテキストに当てはめられると、歌い難さが生じる。フランス系、ドイツ系の聖母マリアのための聖歌を以下に掲載する。

無 原 罪 の 聖 母 161



1. けがれもあらず - あれまししをとめ
いまよ、あめにませば ほしとかがやきて
まさやけ - くみ - ひかりを わがよに - お
く - りませ なれこそわ - がた - まの
たらちねのははなればみたすけをぞ
たまへかし わがあやふき - とし

【譜例2】『公教聖歌集』聖歌161 〈けがれもならず〉

Salut, ô Vierge immaculée Saut, ô vierge immaculée, brillante étoile du matin,
que l'âme incertaine et troublée n'a jamais invoquée en vain!

De tes soldats exauce les prières, du haut du ciel daigne les protéger.

160 無原罪の聖母

1. ころもきよけき つみなきマリアよ
2. おもひもことばも ひごとのしわざも

われらをあめに みちびくかどよ
ながみてにより きよめわかちつ

こよなくめでたき みははときみをし
サタンのいざなひををしくはらひて

たたへあがめて ひにけにーうたはん
みあとただしく たのしくーいきなん

【譜例 3】『公教聖歌集』160 〈ころも清けき〉

Mutter Christi, hoch erhoben in dem schönen Himmel droben,
aller Engel Königin, unsre Frau und Mittlerin.

Deinen Segen uns mitteile, uns zu helfen nicht verweile!

O Maria, steh uns bei, daß uns Gott barmherzig sei!

また、リズムに関しては、付点の有無だけではなく、いかに 1 曲の間で支配的な音価が継続するかということも歌い易さに影響を与える。ドイツ系の聖歌には、四分音符が曲を通して連続して使われることが極めて多い。このシラブル様式は、テキストの 1 シラブル（音節）に多くの音が含まれるメリスマ様式よりも、歌い易く、テキストの内容も聴き取り易い。

御 苦 難 55 56 御 苦 難

1. みはくぎうたれつ あたをあくはれみでて
2. けふよいましなこ そ あまつくにはあぞと
3. こはきみのこなり こはながはは

しらでこそな一せ ちちゆ るしまいせとは
われとはよもに一に 主はあづ つみはとけましまし
みははみでし一に

みいのりやたふとり
すくはれれけかーも
たふと

1. なやみつかれまし みころもあかく
2. せおひますじふじかをみならはなく
3. ゴルゴタかなしくじふじかはたちて
4. つみはしのつるぎかみわがために

ちにそみたまひ みちゆくーきみと
たすけまらす すべをなーみと
おひまししきみ すかかーしぬ
ひとたびしして いのちたーまふ

【譜例 4】 『公教聖歌集』聖歌 55、56
(いずれも、ドイツ聖歌をもとにした聖歌)

一方、フランス系の聖歌では、付点などの複雑なリズムが用いられているだけでなく、一見リズムが単純に見える聖歌でも、1曲を通して支配的な音価が存在しない、あるいは様々組み合わせられていることによって、歌い難さが生じている。

<p>101 聖 心</p> 	<p style="text-align: center;">天 國 201</p> 
<p>192 諸 聖 人</p> 	<p>202 聖 家 族</p> 

【譜例 5】『公教聖歌集』聖歌 101、192、201、202

(いずれも、フランス聖歌をもとにした聖歌)

これは、ドイツ語圏においてルターの宗教改革以来息づく、コラールの伝統があることが関係していると考えられる。

我々、ドイツ国民は、昔から、テキストと旋律において推奨することのできる古い歌や、卓越して美しい聖歌、を持っている。他国の人々がうらやむような、そのような宝物は、隠されておくべきではなく、それゆえ、この『ケルン大司教区聖歌

集・祈祷書』に含まれる母語による聖歌は、将来、さらに若い者から老いた者まで、促進されるようになることを望む。²⁴⁶

このようなプロテスタントにおけるコラールの伝統、さらに 18 世紀末の啓蒙思想を反映したカトリック教会の新たな聖歌が、カトリック教会の会衆歌のレパートリーを作り出し、日本にもたらされた、といえるだろう。

²⁴⁶ 『ケルン 1908』、8 頁。

結論

本研究は、日本のカトリック教会における会衆歌の系譜と宣教的意義を明らかにするものである。

第 1 章では、先行研究に基づいて、明治以降におけるカトリック教会の歩みと再宣教時代の聖歌集の編纂の歴史を概観した。これまで、明治期の聖歌集に焦点を当てた研究、また現行の『カトリック聖歌集』（1966）の編纂に関する研究はあったが、『カトリック聖歌集』に至るまでの聖歌集に関する研究は、ほとんど行われてこなかった。そこで、第 2 章では日本に於ける最初の会衆用聖歌集『公教會聖歌集』（1918）、第 3 章では日本に於ける初めての全国統一聖歌集『公教聖歌集』（1933）に関して、その編纂過程、初期受容、それらを構成する聖歌の原曲の特定を行った。

『公教會聖歌集』は 1918 年に札幌教区聖歌集として編纂されたが、やがて全国的に知られるようになり、1933 年の『公教聖歌集』の編纂の際には、そのモデルとなった。これは、典礼奉仕者や聖職者のためではなく会衆用の聖歌集であった点で、そしてさらには、日本語聖歌の収集であった点で、同時代の他の聖歌集からは際立っていた。この聖歌集の編纂に当たっては、札幌の宣教を担っていたフルダ管区のフランススコ会宣教師の働きが極めて重要であった。ドイツ人宣教師によってドイツ語聖歌の選別、翻訳が行われ、フルダ管区の聖歌集をモデルに編纂された。このことが現在に至るまで、『カトリック聖歌集』がドイツ的といわれる所以である。

初めての統一聖歌集となった『公教聖歌集』は、札幌教区の『公教會聖歌集』に加えて、パリ外国宣教会の宣教地域において広く用いられていた『日本聖詠』の聖歌を取り入れ、さらに新たな聖歌も加えながら編纂された。出版当時の資料調査の結果、この聖歌集は、カトリック教会において当時求められた信者の母語での典礼への参加に応えるものであることが明らかとなった。出版当初は「試作版」という名目だったが、結果的に『公教聖歌集』の全国的受容を通して、それまで限定的だった日本語による会衆歌が全国に広まった。1948 年に大規模な増補改訂が行われ、さらに 1966 年には、1948 年版『公教聖歌集』を改訂する形で『カトリック聖歌集』が出版された。その後、『カトリック聖歌集』は、現在に至るまで、大きな改訂もなく使われ続けている。日本のカトリック教会における会衆歌の伝統は、『公教聖歌集』における外国聖歌の受容を通して明らかになるのである。

このように外国聖歌で構成されるカトリック教会の聖歌集には、日本における西洋音楽の受容という側面もあった。『公教會聖歌集』の出版当時には、既に日本において唱歌が普及していた。リズムや音程などの点から音楽的に極めて単純な聖歌は、日本国民に親しまれていた響きと親和性を持ち、グレゴリオ聖歌などのラテン語聖歌よりもはるかに歌いやすかった。また、聖歌の中には、唱歌と共通するテキストが天皇制用語を含めて多用され、そのことによってテキストの内容を理解しながら斉唱することが容易となった。日本における西洋音楽の受容においてプロテスタント教会の讃美歌の果たした役割は先行研究

でも度々指摘されることではあるが、同じことがカトリック教会の聖歌集にも十分に言えるであろう。

第4章では、『公教聖歌集』の中で、特にドイツから移入された聖歌の原曲と日本語聖歌のテキストの比較を行った。この中に『公教會聖歌集』の聖歌はほぼすべて含まれる。分析の結果、日本語のテキストは多くの場合、ドイツ語の原曲テキストの単純な翻訳ではなく、原曲に基づきながらも、より教化的な内容が加えられていることが明らかとなった。また日本語聖歌は、個人の信心や主観的な信仰告白ではなく、むしろ聖書や教理を念頭にした各典礼暦や秘跡に関する叙事的なテキスト、キリスト、マリア、天使、聖人への直接的な賛美のテキストを基本としていた。こうした聖歌のテキスト分析は、日本語聖歌にみられる教化的、あるいは宣教的な位置づけを示している。第2ヴァティカン公会議以前のカトリック教会の典礼は、基本的にラテン語で行われており、そのことは非ラテン語圏において、宣教の障害にもなっていた。そうした中で、信者に寄り添い、そして教理を伝える手段として、会衆歌が担う役割は極めて重要だった。

そもそも日本にドイツ人フランシスコ会宣教師の手を通してもたらされた会衆歌の伝統の背景には、聖歌は、会衆が理解して歌うことで、歌い手にも聞き手にも教理を伝える役割を持つことができる、という理念があった。複数ある節を繰り返し歌い、また聞くことで、典礼への参加、そして理解を促そうとしたことは間違いないだろう。典礼における母語の使用、典礼への信者の参加は、18世紀末にドイツ語圏を中心に発した啓蒙思想に基づく典礼への改革における課題であり、その改革を通して、新たな聖歌の作曲、プロテスタント圏の讚美歌の受容やラテン語聖歌の翻訳を通じたレパートリーの拡大が行われた。そのレパートリーは現在に至るまで、カトリック教会において重要であり、20世紀初頭以来、日本においても歌い続けられている。啓蒙期の典礼改革思想は、第2ヴァティカン公会議よりはるか前に、花開いていたといえるだろう。啓蒙思想に基づく聖歌がカトリック教会の会衆歌のレパートリーの構築、ラテン語文化圏にない日本などの宣教に役立ったことは明らかである。

『公教聖歌集』、『公教會聖歌集』の構成聖歌の中には、現在に至るまで歌われ続けている旋律が数多くある。100年以上にわたって、日本のカトリック教会において歌われ、信者にも親しまれてきたこれらの旋律を今後継承していくには、必要に応じてテキストの改訂などを行う必要があるだろう。また、2019年度日本カトリック司教協議会第1回臨時司教総会においては「新しい歌を主に歌えー聖歌の創作と認可および公表に関する指針ー」が公布された。このような現在の聖歌に関する問題意識の芽生えの中で、改めてこれまで歌い継がれてきた原曲に立ち返り、再度その聖歌が持つ典礼的な意味を日本語聖歌に反映させることは意義深い。そうした作業において本研究が一端を担えれば幸いである。

参考文献表

- 秋山憲兄『新共同訳聖書 コンコルダンス—聖書語句索引』 東京：新教出版社、1997年。
- 安足磨由美「リードオルガンによる聖歌伴奏譜——『カトリック聖歌集』（1966）まで」、
『リードオルガンリサーチ』 No.1、1999年。
- 安足磨由美「山本直忠、その宗教音楽家としての活動」、『エリザベト音楽大学紀要』 第
22号、2002年、1～12頁。
- 新垣壬敏『賛美、それは沈黙のあふれ』 東京：教文館出版部、2001年。
- 新垣壬敏『『典礼聖歌』の軌跡』、『礼拝音楽研究』 第6号、2006年、75～95頁。
- 新垣壬敏『賛美のいけにえ』 東京：教文館出版部、2010年。
- 池田敏雄『昭和日本の恩人——S.カンドウ師——』 東京：中央出版社、1966年。
- 石丸新『讚美歌に見られる天皇制用語』 東京：モリモト印刷株式会社、2010年。
- 太田淑子編『キリシタン（日本史小百科）』 H.チースリク監修、東京：東京堂出版、
1999年。
- 加藤いつみ「現行の『カトリック聖歌集』が受け継いだ明治期の聖歌」、『名古屋市立大学
人文社会学部研究紀要』 8号、2000年3月、149～164頁。
- カトリック北11条教会編『フルダから札幌へ——カトリック北11条（聖フランシスコ）
教会創建75周年記念』 札幌：カトリック北11条教会、1984年。
- カトリック北11条教会編『フルダから札幌へ——カトリック北11条（聖フランシスコ）
教会創建100周年記念』 札幌：カトリック北11条教会、2013年。
- キノルド、ヴェンセスラウス『公会堂祈祷書』 札幌：光明社、1930年。
- 共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳——旧約聖書続編つき』 東京：日本聖書協会、
1987年。
- 栗山義久「『カトリック文庫』資料紹介——聖歌集について」『南山大学図書館カトリック
文庫通信』、名古屋：南山大学図書館「カトリック文庫」プロジェクト、1995年、2
～6頁。
- 光明社（編）『光明社の歴史資料——光明社百周年を記念して』 札幌：光明社、2016年。
- 五野井隆史『日本キリスト教史』 東京：吉川弘文館、1990年。
- 帘功「カトリックの典礼音楽の歴史と現状——聖歌集の変遷をめぐって——」、『礼拝と音
楽』 第18号、1978年、22～29頁。
- 帘功「讚美歌（カトリック）」、『日本キリスト教歴史大事典』 東京：教文館、1988年、
594頁。
- 斎藤克弘「教会音楽公文書」、『新カトリック大事典』 東京：研究社、1998年、第2巻、
243頁。
- 徐賢燮「韓国カトリック教会の成長に関する小考」、『長崎県立大学国際情報学部研究紀要』
第14号、2013年、205～217頁。

- 第 2 バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会『第二バチカン公会議公文書改訂公式訳』
東京：カトリック中央協議会、2013 年。
- 高木一雄『明治カトリック教会史 1』 東京：教文館、2008 年。
- 高木一雄『明治カトリック教会史 2』 東京：教文館、2008 年。
- 土屋吉正『暦とキリスト教』 東京：カトリック淳心会 オリエンズ宗教研究所、増補改訂版、2009 年。
- チーグレク、チト訳編、『羅馬弥撒典書』 札幌：光明社、1935 年。
- 手代木俊一監修『明治期 讃美歌・聖歌集』 第 6、7、8、9、10、11 巻、東京：大空社、1996 年。
- 手代木俊一『讃美歌と聖歌と日本の近代』 東京：音楽之友社、1999 年。
- 手代木俊一『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典』 東京：港の人、2008 年。
- 手代木俊一『日本における讃美歌』 東京：日本キリスト教団出版局、2021 年。
- 天主公教会『天主公教要理』 横浜：福音印刷合賣社、1911 年。
- 土井辰雄編『共通規程 *Directorium commune*』 東京：日本カトリック出版物委員会、1937 年。
- 東京カトリック神学校「東京カトリック神学校史年表」 *Inter Nos*、No.26、1969 年。
- 中村理平『キリスト教と日本の洋楽』 東京：大空社、1996 年。
- 中村理平「明治のカトリック教会と日本の洋楽 聖歌集の変遷について」、日本大学『大学院論集』第 2 号、1992 年、59～79 頁。
- 仁多見巖『北海道とカトリック〈戦前編〉』 札幌：「北海道とカトリック」出版委員会、1983 年。
- 日本カトリック司教協議会 常任司教委員会（著、監修）『カトリック教会のカテキズム要約(コンペンディウム)』 東京：カトリック中央協議会、2010 年。
- 日本カトリック典礼委員会(編)『典礼暦年に関する一般原則および一般ローマ暦』 東京：カトリック中央協議会、2004 年。
- バルバロ、フェデリコロ『毎日のミサ典書』 東京：ドン・ボスコ社、1955 年。
- ビーリッツ、カール・ハインリッヒ『教会暦—祝祭日の歴史と現在』松山与志雄訳、東京：教文館、2003 年。
- フーバー、ゲルンハルト「北海道におけるフランシスコ修道会の五十年（フランシスコ会北海道布教小史 1～17）」、『光明：週刊公教新聞』 光明：附録、1957 年。
- ブライトゥング、オイセビウス (Breitung, Eusebius)「聖歌（日本における歴史）」、『カトリック大辞典』東京：富山房、1952 年、第 4 巻、85～87 頁。
- ヘンゼラー、エヴァルト『日本のカトリック教会音楽目録(稿)：聖歌集・聖歌（1865-1968）』 広島：エリザベト音楽大学、1990 年。
- ヘンゼラー、エヴァルト、安足磨由美「『カトリック聖歌集』（1966）と日本人の作曲による聖歌」、『礼拝音楽研究』 2002 年、57～79 頁。

- ヘンゼラー、エヴァルト、安足磨由美「明治初期におけるカトリック教会」、『エリザベト音楽大学紀要』 第22号、2002年、57～65頁。
- ヘンゼラー、エヴァルト、安足磨由美「モトゥ・プロプリオ（1903年）と日本の典礼運動——『フォス・キリストォ』にみられる聖歌について」、『エリザベト音楽大学紀要』 第23号、2003年、15～24頁。
- ヘンゼラー、エヴァルト、安足磨由美『明治期カトリック聖歌集』 東京；教文館、2008。
- ヘンゼラー、エヴァルト、安足磨由美「カトリック教会の聖歌集・資料紹介」、『異文化交流と近代化：京都国際セミナー1996』「異文化交流と近代化」 京都国際セミナー1996組織委員会、東京：大空社、1998年、302～308頁。
- 前川公美夫『北海道音楽史』 札幌：亜璃西社、2001年。
- 升岡知子『『公会堂聖歌集』（1918年、1933年）の歴史と編纂について』（エリザベト音楽大学卒論）1991年。（本文は所蔵がないため、要旨をエリザベト音楽大学より提供していただいた）
- 増田良二「小倉慮人」『キリスト教人名事典』 東京：教文館、2020年、176頁。
- マッケヴォイ.H、『写真入りミサ解説』 ヤコブ・コップ、片岡毅共訳、東京：中央出版社、1956年。
- 三谷尚『「カトリック聖歌集」の原典、原曲を探る——「カトリック聖歌集」の原典資料および独語・米語等による原曲』 私家版、2000年。
- 山東功『唱歌と国語——明治近代化の装置』 東京：講談社、2008年。
- ラゲ、エゲ『我主イエズスキリストの新約聖書』 鹿児島：公会堂、1910年。
- ローラン修士、岳野慶作訳『小教區のスコレ及び聖歌隊』 キリスト教学校修士会、1953年。
- Bäumker, Wilhelm. *Das katholische deutsche Kirchenlied in seinen Singweisen*. Freiburg, 1883-1911, reprint., Hildesheim, 1962.
- Cornehl, Peter. "Liturgische Formen in der Zeit der Aufklärung." In *Das 17. und 18. Jahrhundert, Kirchenmusik im Spannungsfeld der Konfessionen*. pp. 180-190. Edited by Wolfgang Hochstein and Christoph Krummacher. Laaber: Laaber, 2012.
- Dürr, Emmanuel ed. *Von Fulda nach Hokkaido: 100 Jahre Japan-Mission der Thüringischen Franziskanerprovinz (1907 - 2007)*. Idstein: Meinhardt - Verlag und Agentur, 2007.
- Ebenbauer, Peter. "Volkslied" in *LThK*, 3rd ed., vol. 10, p. 862.
- Fellerer, Karl Gustav. "Volkslied" in *LThK*, 2nd ed., vol.10, pp. 851-854.
- Fellerer, Karl Gustav. "Die Enzyklika ›Annus qui‹ des Papstes Benedikt XIV." In *Geschichte der katholischen Kirchenmusik, Bd. 2: Vom Tridentinum bis zur Gegenwart*. Kassel:

- Bärenreiter, 1976.
- Fleck, Zeno OFM. "Choralschung der Christen (Mitteilungen aus meiner Choralpraxis)." In *Phos Christou- Werkblätter für Liturgie* 1939/2 (1939): pp. 92-94.
- Franz, Ansgar. (Herausgeber) "Kirchenlied im Kirchenjahr Fünfzig neue und alte Lieder zu den christlichen Festen." Tübingen: Narr Francke Attempto Verlag, 2002.
- Fugger, Dominik, Andreas Scheidgen. *Geschichte des katholischen Gesangbuchs*. Tübingen: Narr Francke Attempto Verlag, 2008.
- Härtig, Michael. "Von der Aufklärung zur musikalischen Klassik (ca. 1730 bis 1800)." In *Geschichte der katholischen Kirchenmusik*, pp. 173-175. Karl Gustav Fellerer ed. Kassel: Bärenreiter, 1976.
- Heine, Herbert, Hermann Kurze. "Kirchenlied" in *LThK*, 3rd ed., vol. 6, pp. 22-24.
- Kohlschein, Franz. "Die liturgischen Reformanliegen des deutschen Aufklärungskatholizismus: 1780-1830." in *Liturgisches Jahrbuch* 39 (1989): 168-177.
- Kohlschein, Franz. "Liturgiereform und deutscher Aufklärungskatholizismus." In *Liturgiereformen--Historische Studien zu einem bleibenden Grundzug des christlichen Gottesdienstes*, pp. 511-534. Edited by Martin Klöckener and Benedikt Kranemann. Münster: Aschendorff Verlag GmbH & Co. KG, Münster, 2002.
- Krieg, Eduard. "200 Jahre Fuldaer Diözesangesangbuch 1778-1978." In *FuldaGbl* 55 (1979): 110-155.
- Kriegbaum, Bernhard. "Fulda" in *LThK*, 2nd ed., vol. 4, pp. 218-220.
- Kurze, Hermann. *Kirchenlied und Kultur*. Tübingen: Francke Verlag, 2010.
- Lang, Paul. *Heinrich Fidelis Müller (1837-1905) Priester und Komponist Leben und Werk*. Fulda: Fuldaer Verlagsanstalt, 2005.
- Lueger, W. "Kirchenlied" in *LThK*, 2nd ed., vol. 5, pp. 231-233.
- Mall, Andrew, Jeffers Engelhardt and Monique M. Ingalls, eds. *Studying Congregational Music Key Issues, Methods, and Theoretical Perspectives*. London; Routledge, 2021.
- Meyer, Dietrich. "Kirchenlied und Gesangbücher im 18. Jahrhundert." In *Das 17. und 18. Jahrhundert, Kirchenmusik im Spannungsfeld der Konfessionen*, pp. 191-203. Edited by Wolfgang Hochstein and Christoph Krummacher. Laaber: Laaber, 2012.
- Obermair, Gilbert ed. *Die schönsten Kirchenlieder aus fünf Jahrhunderten*. München: Heyne, 1980.
- Oorschot, Theo G. M. van. *Friedrich Spee: Geistliche Lieder*. Tübingen und Basel: Francke, 2007.
- Papst Benedict XV. *Missale Romanum*. Reimpresio Editions XXVIII. Vatican: Bonnae ad

Rhenum, 1920.

Papst Pius X. *Motu proprio Tra le sollecitudini*. 1903.11.22.

Papst Pius XI. *Constitutio Apostolica Divini Cultus Sanctitatem—De Liturgia Deque Cantu Gregoriano et Musica Sacra Contidie Magis Provehendis*. 1928.12.20.

Unverricht, Hubert. “Die orchesterbegleitete Kirchenmusik von den Neapolitanern bis Schubert.” In *Geschichte der katholischen Kirchenmusik*, Bd. 2, pp. 157–172. Karl Gustav Fellerer ed. Kassel: Bärenreiter, 1976.

➤ ウェブページ

[박물관 문화 순례] 왜관수도원 100 주년 역사전시관 『가톨릭신문 (カトリック新聞)』
2015.7.5. 2951号、12面。

https://www.catholictimes.org/article/article_view.php?aid=268677¶ms=page%3D2%26acid%3D751 accessed Oct. 20, 2021.

➤ 辞典・事典類

Buchberger, Michael ed. *Lexikon für Theologie und Kirche*. Freiburg: Herder-Verlag, 1st ed. 1930-1938, 2nd ed. 1957-1968, 3rd ed. 1993-2001.

Sato, F. X. *Ecclesiastical Japanese = Kyōkai yōgo jiten*. 東京：原書房、1959年、第1巻、第2巻。

札幌教區宣教師共著『ローマ字獨和辭典』 札幌：光明社、1936年。

『カトリック大辭典』 東京：富山房、1952年。

デュフル、X. レオン『聖書思想事典』ゼノン・イエール、東京：三省堂、1999年。

『新カトリック大事典』 東京：研究社、第1巻、1996年。

『新カトリック大事典』 東京：研究社、第2巻、1998年。

『新カトリック大事典』 東京：研究社、第3巻、2002年。

『新カトリック大事典』 東京：研究社、第4巻、2009年。

藤森美究『日本の讚美歌・聖歌曲 旋律 INDEX (旋律事典)』 東京：燦葉出版社、2004年。

『キリスト教人名事典』 東京：教文館、2020年。

➤ 聖歌集 (年代順)

Lindenborn, Heinrich. *Neues Gott und dem Lamm geheiligtes Kirchen- und Hauß-Gesang der auf dem dreyfachen Wege der Vollkommenheit nach dem himmlischen Jerusalem wandernden Tochter Sion*. Köln: Gereon Arnold Schauberg. 1741.

Riedel, Franz Xaver. *Lieder der Kirche aus den römischen Tagzeiten Lieder der*

- Kirche aus den römischen Tagzeiten und dem Meßbuche übersetzt.* Wien: Augustin Bernardi, 1773.
- Denis, Michael. *Geistliche Lieder zum Gebrauche der hohen Metropolitankirche bey St. Stephan in Wien und des ganzen wiener Erzbistums.* Wien: Schulz, 1774.
- Ignaz, Franz. *Allgemeines und vollständiges katholisches Gesangbuch worin neue geistliche Lieder zu finden sind, welche Morgens und Abends, in der Kirche bey der heiligen Messe, zur Predigt, bey Processionen und allen Theilen des Gottesdienstes, an den Festtagen des Herrn und der Heiligen Gottes; wie auch zu Hause bey der Arbeit, in allerley Umständen und Nöthen, nensonders bey Begräbnissen, zum Unterricht, Trost und Erbauung frommer Seelen gebraucht werden können.* Breslau: Johann Friedrich Korn d. Ä., 1778.
- Katholisches Gesangbuch, auf allerhöchsten Befehl Ihrer k.k. apost. Majestät Marien Theresiens.* Wien: Verlag der katechetischen Bibliothek, o.J. 1776.
- Kohlbreuner, Johann Franz Seraph. *Der heilige Gesang zum Gottesdienste in der römisch-katholischen Kirche.* Erster Theil: Landshut: Maximilian Hagen, München: Johann Georg Rueprecht, 1777.
- Erthel, August. *Der nach dem Sinne der katholischen Kirche singende Christ.* Stahel: Fulda, Johann Jakob Stahel, 1778.
- Werkmeister, Benedikt Maria, *Gesangbuch, nebst angehängten öffentlichen Gebet, zum Gebrauch der katholischen Hofkapelle in Stuttgart.* Stuttgart 1784, 4. Aufl. Ulm 1797.
- Verspoell, Christoph Bernhard. *Gesänge bey dem Römischkatholischen Gottesdienste.* Münster : Aschendorff, 1810.
- Bone, Heinrich: *Cantate! Katholisches Gesangbuch nebst Gebeten und Andachten für alle Zeiten und Feste des Kirchenjahres.* Mainz: Kirchheim, Schott und Thielmann, 1847.
- Bone, Heinrich: *Cantate! Katholisches Gesangbuch nebst einem vollständiges Gebet und Andachtsbuche.* Zweite, sehr vermehrte Auflage, Paderborn: F. Schöningh, 1851.
- Mohr, Joseph. *Jubilate Deo! Lieder für den katholischen Gottesdienst.* Regensburg: Friedrich Pustet 1877.
- Katholisches Gesang- und Gebetbuch für die Diözese Paderborn.* Paderborn: Junfermann, 1902.
- Katholisches Gesang- und Gebetbuch für die Diözese Fulda.* Herausgegeben im Auftrag des hochwürdigsten Herrn Joseph, Bischof von Fulda, Fulda:Fuldaer Actiendruckerei, 1890. 2nd ed. 1891.

Gesang- und Gebetbuch für die Erzdiözese Cöln. Cöln am Rhein: Bachem, 1908.
Jubileum Deo : eine Sammlung deutscher und lateinischer Kirchenlieder ; zum Gebrauch der deutschen Ordensprovinz der Patres Oblaten der unbefleckten Jungfrau Maria. Regensburg : Pustet, 1927.

天主公教會『公教會聖歌集』 札幌教區長認可、札幌：光明社、1918年（初版）、1920年（第2版）、1926年（第3版）、1930年（第5版）。

天主公教會『公教會聖歌集——オルガン及びハルモニスタ用』 新潟教區長認可、札幌：光明社、1918年。

光明社編『公教聖歌集』 札幌：光明社、1933年（初版）、1934年（第2版）、1936年（第3版）、1938年（第4版）、1940年（第5版）、1948年（増補改訂版）。

ミバク『聖歌伴奏譜』 札幌：光明社、1935年。

光明社『典礼聖歌集——PARVUMGRADUALE』 札幌：光明社、1943年。

聖歌集改訂委員会『カトリック聖歌集』 札幌：光明社、1966年。

日本カトリック典礼委員会『典礼聖歌』 東京：カトリック中央協議会、1980年。

➤ 定期刊行物（新聞、雑誌）

『カトリック・タイムス』 東京：公教青年会、1923年～1931年。

『日本カトリック新聞』 東京：カトリック中央出版部、1931～1944年。

『カトリック新聞』 東京：中央出版社、2021年。

『聲』 東京：新友社、1929年10月号

『聲』 東京：カトリック中央出版部、1930年8月号、9月号、1931年5月、1932年1月

号、11月、1933年10月。

『光明：週刊公教新聞』 札幌：光明社、1916年、1917年、1929年、1956年、1957年。

謝辞

本研究は、コロナ禍にあって渡欧による資料調査が困難となり、もともとの研究計画を遂行することが不可能になったことを受けて、研究テーマを拡大、展開して行ったものです。本論文を完成するにあたり、多くの方々よりご支援を賜りましたことをこの場を借りてお礼申し上げます。

2020 年度を以て退官された前主任指導教員土田英三郎名誉教授は私を研究の道に導いてくださいました。

現在の主任指導教員の東京藝術大学音楽学部沼口隆准教授には、コロナ禍の中で研究テーマの展開を考え始めた当初から多くのご助言をいただき、本研究を最初から最後まで支えていただきました。

上智大学神学部非常勤講師、オリエンズ宗教研究所『聖書と典礼』編集長、石井祥裕先生には、この論文には欠かせない神学分野への導き、草稿の繰り返しの確認など多大なるお力添えをいただきました。

東京藝術大学音楽学部大角欣矢教授は、指導教員会議でのご指導の他、大学院ゼミを通して本研究の出発点となる気づきのきっかけを与えてくださいました。

東京藝術大学音楽学部福中冬子教授には、指導教員会議、学内発表を通して、様々なご助言をいただきました。

日本のカトリック聖歌集に関する研究の第 1 人者、イエズス会司祭、時津ハインツ神父さま（エヴァルト・ヘンゼラー氏）には、未発表のご研究成果や日本のカトリック音楽研究において研究がまだ不十分なところなど、御教示いただきました。

典礼委員会委員長、広島司教区白浜満司教さまには、カトリック教会における聖歌の現状についてご教示いただいた他、プライベートにお持ちの一般信徒による研究成果のご提供をいただきました。

本論文の執筆に当たり日本国内の資料調査を多く行いました。そしてその都度、全国の聖職者、教会関係者に多くのご協力をいただきました。日本各地の教会（北一条教会、北十一条教会、麴町教会、関町教会、吉祥寺教会、広島祇園教会、カトリック幟町教会）、各修道院（イエズス会修道院（S.J.ハウス、福岡修道院）、汚れなきマリア修道会町田修道院）、カトリック神学校（東京カトリック神学院、聖スルピス大神学院、フランシスコ会神学院聖アントニオ修道院）、カトリック系教育機関（藤女子大学、光星学園、聖グレゴリオの家 宗教音楽研究所）、カトリック中央協議会カトリック新聞社の皆さまに感謝の意を表したいと思います。

また、ご支援いただきました日本カトリック大学連盟、独立行政法人日本学生支援機構にも感謝申し上げます。

最後に、本論文の執筆にあたってあらゆるサポートと応援をしてくれた家族に感謝いたします。

別冊

- ・【付録 1】 聖歌集目録
- ・【付録 2】『公教會聖歌集』の原曲と伝承の系譜
- ・【付録 3】『公教聖歌集』の原曲と伝承の系譜
- ・【付録 4】 テクスト分析資料

【付録 1】

- ・ 1933 年『公教聖歌集』が出版されるまでに、日本において出版された聖歌集の目録を以下に掲載する。
- ・ なお本目録を作成するに当たって、ヘンゼラー『明治期カトリック聖歌集』 東京：教文館、2008 を参照した。

聖歌集目録

年代	聖歌集タイトル、出版地・出版社、編者、曲数、楽譜の有無 []はヘンゼラーによる	備考
1878	『きりしたんのうたひ』長崎、ド・ロ?、29 曲（日本語 23、羅典語 6）、歌詞のみ。	『オラシヨ並ニヲシヘ』（1878 年 9 月「マリヤジョゼフ准」）の付録として刊行。
1878 年頃	[手書き聖詠] 横浜、[ルマレシャル]、29 曲（日 29、羅?）、歌詞のみ。	『聖詠』1883、天主公教會拉丁聖歌（1885?）の前身。[手書き聖詠]の印刷版と思われる。
?	[] [ルマレシャル]、52 曲（日 30、羅 22）、歌詞のみ。	[手書き聖詠]の印刷版。『聖詠』1883、天主公教會拉丁聖歌（1885?）の前身。
1880	[手書き歌詞聖歌集] [長崎]、34 曲（日）、歌詞のみ。	「復刻版第 11 巻」
1880 年頃	[] [長崎地方]、2 曲（日）、歌詞のみ。	手書き歌詞集の断片。
1883	『聖詠 完』[横浜?]、ルマレシャル、パウロ（日本人協力者）、30 曲（日）、歌詞のみ。	「復刻版第 6 巻」
1883	『Recueil de Cantiques Japonais avec musiques』横浜、ルマレシャル、楽譜付き。31 曲（日）、[楽譜付き日本語聖歌集]。	「復刻版第 6 巻」 『聖詠』（1883）のメロディー版。

聖歌集目録

年代	聖歌集タイトル、出版地・出版社、編者、曲数、楽譜の有無 []はヘンゼラーによる	備考
1885 頃	『天主公教拉丁聖歌』[東京?]、[ルマレシャル]、ラテン語聖歌、歌詞のみ。	「手書き聖詠」(1878 頃)、および」その印刷版のラテン語部分をもとに編纂。
1886	『天主公教拉丁之聖歌 Tenshu kôkiokai ratin no seika』東京、約 203 曲(羅)、歌詞のみ。	
1889	『聖詠 完』[ルマレシャル]、74 曲(日)、歌詞のみ。	「復刻版第 6 卷」 1883 年『聖詠』の増補改訂版。
1889	『日本聖詠』横浜、ルマレシャル、74 曲(日)、楽譜付き。	1883 年版 <i>Recueil de Cantiques</i> の増補改訂版。1889 年版『聖詠』のメロディー版。
1889	<i>Echos de la France, ou Petit Recueil de Chants à l'usage des Élèves de l'École de l'Étoile du Matin</i> 東京、暁星学園編、64 曲(日 7、仏 50、英 7)、楽譜付き。	暁星学園生徒用小歌集。
1891	<i>TENSHU KÔ-KYÔKWAÏ LATIN NO SEIKA</i> 横浜、152 曲(羅)、歌詞のみ。	『天主公教會拉丁之聖歌』(1886) の改訂版。
1893	『聖詠』[ルマレシャル]、[80 曲(日)]、歌詞のみ。	1889 年版『聖詠』に対する増補分 80 曲のみを掲載。

聖歌集目録

年代	聖歌集タイトル、出版地・出版社、編者、曲数、楽譜の有無 []はヘンゼラーによる	備考
1893	『聖詠 完』東京、[ルマレシャル]、154 曲（日）、歌詞のみ。	1889 年版『聖詠』の増補改訂版、1889 年版と 1893 年『聖詠』の合本。「復刻版第 6 巻」
1893	『日本聖詠』東京。ルマレシャル、80 曲（日）、楽譜付き。	1893 年版『聖詠』（80 曲）のメロディー版。
1893	『日本聖詠』東京、ルマルシャル、154 曲（日）、楽譜付き。	1893 年版『聖詠』（154 曲）のメロディー版。
1896	『聖詠 完』[ルマレシャル]、154 曲（日）、歌詞のみ。	1893 年版『聖詠』（154 曲）の再版。 ただし、「新版」と表記。
1896	<i>Cantus Sacri ad usum Alumnorum Seminarii Nagasakiensis</i> 長崎、神学院編、150 曲（羅:116、日：34）、楽譜付き。	長崎の神学院学生用聖歌集。 「復刻版第 11 巻」
1903	『公教會羅甸歌集』東京（三才社）ラゲー、93 曲（羅）、歌詞のみ。	1917 年、1919 年に長崎で再版。
1903	『聖詠 完』東京（三才社）。歌詞のみ。154 曲（日）。	1896 年版『聖詠』（154 曲）の再版。
1906	『公教羅甸歌集』横浜（福音印刷合資会社）、ルマレシャル、87 曲（羅）、歌詞のみ。	1885 年頃『天主教拉丁聖歌』の増補改訂版。「復刻版第 7 巻」

聖歌集目録

年代	聖歌集タイトル、出版地・出版社、編者、曲数、楽譜の有無 []はヘンゼラーによる	備考
1907	『日本聖詠』東京（三才社）、ルマレシャル、パピノ、158 曲（日）、楽譜および伴奏つき。	「復刻版第 8 巻」。1922 年に再版。
1908	『公教會聖歌』東京（三才社）[ルマレシャル]、鈴木龍六 242 曲（日：155、羅：87）、歌詞のみ。	『聖詠』（1903）と『公教會羅甸』（1906）を合本して出版。
1909	[] 「ラテン語聖歌集 楽譜附、普通一般の聖祭及儀式用（小形）、聖體降福祭用（中形）」	所在不明。
1910	Recueil de Chants religieux 『天主公教會聖歌』大阪（聖若瑟教育院活版部）、マルモニエ、211 曲（羅：161、日：50）、楽譜付き。	「復刻版第 9 巻」
1911	『公教聖歌』横浜（福音印刷合資会社）、ドマンジュール、177 曲（羅 116、日 33 曲、仏 28、楽譜付き。	「復刻版第 10 巻」
1912 頃	[] [長崎]、97 曲（羅）、楽譜付き（ネウマ譜）。	ピウス 10 世によって採用されたソレム唱法に基づく聖歌集。
1913	『通俗讚美歌』ラゲー編。	
1913	『聖體降福祭聖歌』マルモニエ編。	
1916	『公教會羅甸聖歌集』ティリー編。	1923 年版あり。

聖歌集目録

年代	聖歌集タイトル、出版地・出版社、編者、曲数、楽譜の有無 []はヘンゼラーによる	備考
1916	『公教會羅甸』 ストルツ編。羅、日、仏聖歌。	
1916	Litanies de la Très Sainte Vierge ストルツ編	
1916	『死人のミサ及び葬式』 ラゲー編	
1917	『公教會羅甸歌集』 ラゲー編	1919 年版あり。
1918	『公教會聖歌集』 札幌。植竹一平＝シリング編。	第 2 版：1920 年、第 3 版：1926 年、第 4 版、第 5 版：1930 年版。
1920?	[] セン・ジュスタン編	
1922	『日本聖詠』 ルマレシャル、パピノ編	
1923	『公教會聖歌』 ルマレシャル編	
1923	[] 光明社（札幌）	『クリスマスの鐘』 附録、1934 年版あり。
1925	『公教日曜學校唱歌集』 美伯朶人＝ミーバッハ編	1927 年版、1931 年版。
1928	『小さき花を讃美する歌』 チマッティ曲	
1930	『公教聖歌』 サン・モール修道会、東京	
1930?	『公教聖歌集』 関口小神学校	
1931	『聖歌集』 大分（ドン・ボスコ社）	
1931	『公教聖歌』 八王子教会	
1931	『カトリック羅典聖歌集』 長崎教報社	1934 年版、1942 年版、1948 年版、1954 年版。
1931	『邦語讃美歌集』 大浦教会	
1932	『セイカ』 小倉教会	

聖歌集目録

年代	聖歌集タイトル、出版地・出版社、編者、曲数、楽譜の有無 []はヘンゼラーによる	備考
1932	『ミサ聖祭聖歌』鈴木一郎編	1934年版、1936年版、1938年版、1940年版。 教区用付録版（1934年、広島教区） 『聖歌伴奏版』1935年、 『聖歌集ハルモニスタ伴奏版』1936年、 1948年に増補改訂（1964第6版）、『聖歌伴奏譜』1951年、 1963年。
1932	『日本聖詠』鈴木一郎編	
1933	『公教聖歌集』光明社（札幌）	

【付録2】

- ・この付録には『公教會聖歌集』の各版に含まれる聖歌の一覧を掲載している。
- ・また、各聖歌に関して、それらの原曲が『フルダ 1891』あるいは『ケルン 1908』に含まれている場合はその番号、さらに『公教聖歌集』(1933、1948)、『カトリック聖歌集』(1966)に引き継がれたものはそれぞれの番号も掲載している。

【付録2】

	公会聖歌集 (1918)	公会聖歌集 第2版 (1920)	公会聖歌集 第3版 (1926)	公会聖歌集 第5版 (1930)	原曲聖歌	Fulda 1891	Koln 1908	公会聖歌集 (1933)	公会聖歌集 (1948)	カトリック聖歌集 (1966)
待降節	1. 歓喜の源泉よ (F)	1. 歓喜の源泉よ (F)	1. 歓喜の源泉よ (F)	1. よろこびの源よ (F)	O Heiliger Schöpfer aller Stern			18. よろこびの泉	101. よろこびの泉	101. とくわきながれよ
待降節	2. ややすくひぬしよ (G)	2. ややすくひぬしよ (G)	2. ややすくひぬしよ (G)	2. ややすくひぬしよ (G)	O komm, o komm, Emmanuel		6 a	22. 来ませ救ひ主	106. きませ救い主	105. 来ませ救い主
待降節	3. 神よ降しませ (F)	3. 悩みに沈める (B)	3. 悩みに沈める (B)	3. 悩みにしづめる (B)	Aus hartem Weh die Menschheit klagt	5	4			
待降節	4. メシアを降らせよ (C)	4. メシアを降らせよ (C)	4. メシアを降らせよ (C)	4. メシアを降らせよ (C)	Tauet, Himmel, den Gerechten	3b		20. み恵降らせよ	103. み恵みふらせよ	
聖主御誕生	5. 闇裡に棲む人 (C)	5. 闇裡に棲む人 (C)	5. 闇裡に棲む人 (C)	5. 闇裡に棲む人 (C)	Es kam ein Engel hell und klar	12		31. やみに棲むひと	119. やみにすむ人よ	119. 見よひつじかいら
聖主御誕生	6. 天使の歌唱 (G)	6. 天使の歌唱 (G)	6. 天使の歌唱 (F)	6. 聖天使の歌唱 (G)	Lasst uns das Kindlein grussen		20			
聖主御誕生	7. いぶせき厩に (B)	7. いぶせき厩に (B)	7. いぶせき厩に (B)	7. いぶせきまやに (B)				25. 身こそいぶせき	115. 身こそいぶせき	115. まきばのよわの
聖主御誕生	8. 静寂けき、真夜半 (B)	8. 静寂けき、真夜半 (B)	8. 静寂けき、真夜半 (B)	8. 静寂けき、真夜なか (B)	Stille Nacht			23. 更ゆく、静寂を	111. しずけき	111. しずけき
聖主御誕生	9. 天空より (C)	9. 天空より (C)	9. 天空より (C)	9. みそらより (C)	O selige Nacht, im Himmel Bracht		11	26. みそらゆく	116. みそらゆく	
聖主御誕生	10. 草木も睡眠る (F)	10. 草木も睡眠る (F)	10. 草木も睡眠る (F)	10. 草木も睡眠る (F)				34. ものみな眠る	118. ものみなねむる	118. ものみなねむる
聖主御誕生	11. 可愛たき御子の (F)	11. 可愛たき御子の (F)	11. 可愛たき御子の (F)	11. 可愛たき御子の (F)				40. らうたき御子の	128. らうたきみこ	
イエスの聖名	12. 主の聖名を知るは (D)	12. 主の聖名を知るは (D)	12. 主の聖名を知るは (D)	12. 主の聖名を知るは (D)	Jesu wie süß	23		42. あぶぐもたふたし	146. あおぐも尊し	
三王来朝	13. 奇しき光明の (D)	13. 奇しき光明の (D)	13. 奇しき光明の (D)	13. 奇しき光明の (D)	Es führt drei König Gottes Hand		23	44. 光りもくすしき	151. ひかりもくすしき	151. 苦しきやみの夜
四旬節	14. いばらの冠冕 (C)	14. いばらの冠冕 (C)	14. いばらの冠冕 (C)	14. いばらの冠冕 (C)	O Haupt voll Blut und Wunden	44		51. いばらのかむり	171. いばらのかむり	171. いばらのかむり
四旬節	15. 聞け空くもれる夜 (F)	15. 聞け空くもれる夜 (F)	15. 聞け空くもれる夜 (F)	15. 聞け空くもれる夜 (F)	Wer hat dich mein Jesum gefangen			52. 夕闇かけくらく	173. 夕闇かけくらく	173. 星かけくらく空
四旬節	16. 主よ憐れみ (C)									
		16. こよなき恵の (G)	16. こよなき恵の (G)	16. こよなきめぐみの (G)	Christ spricht zur Seele	36		57. こよなきめぐみの	186. こよなきめぐみの	186. こよなくうれしや
四旬節	17. ゴルゴタの山 (F)	17. ゴルゴタの山 (F)	17. ゴルゴタの山 (F)	17. ゴルゴタの山 (F)	Vom Himmel ein Englischer Bot				172. ゴルゴタの山	172. ゴルゴタ
十字架	18. 頌めよたへよ (F)	18. 頌めよたへよ (F)	18. 頌めよたへよ (F)	18. 頌めよたへよ (F)	Sei, heiliges Kreuz gegrüßet			58. 頌めよたへよ	187. ほめよたえよ	187. ほめよたえよ
悔悛	19. うき世のたのしみ (C)	19. うき世のたのしみ (C)	19. うき世のたのしみ (C)	19. うき世のたのしみ (C)	Gott, vor deinem Angesicht		36	47. まぼろしの影を	161. まぼろしのかげ	
悔悛	20. 主はおのが弟子のために (F)	20. 父はおのが弟子のため (F)	20. 父はおのが弟子のため (F)	20. ちちはおのが弟子のため (F)						
聖母の御悲哀	21. 御子のじふ字架の (F)	21. 御子の十字架の (F)	21. 御子の十字架の (F)	21. 御子の十字架の (F)	Christi Mutter stand mit Schmerzen		53	61. み子の十字架の	192. み子の十字架	191. 神のひとりご
御復活	22. 祝へうや歌へ (G)	22. 祝へうや歌へ (G)	22. 祝へうや歌へ (G)	22. 祝賀へやうたへ (G)	Der Heiland ist erstanden	58		64. いはへやうたへ	201. いわえやうたえ	201. よろこびうたえ
御復活	23. わがきみイエス (F)	23. わがきみイエス (F)	23. わがきみイエス (F)	23. わがきみイエズス (F)	Wahrer Gott! Wir glauben dir		61	68. わがきみイエズス	205. わがきみイエズス	205. わが君イエズス
御復活	24. 白き衣裳着て (F)	24. 白き衣裳着て (F)	24. 白き衣裳着て (F)	24. しろき衣裳着て (F)	Preis dem Todes-Ueberwinder			65. しろたへの衣に	202. しろたえのきぬ	202. ま白きよそおい
御復活	25. よろこびたへよ (G)	25. よろこびたへよ (G)			Erschalle laut, Triumphgesang!		58			
御復活			25. よろこびたへよ (B)	25. よろこび讃へよ (B)	Das Grab ist leer		57	70. よろこびたへよ		
御復活	26. やよ聖母、マリア (D)	26. やよ聖母マリア (D)	26. やよ聖母マリア (D)	26. やよ聖母マリア (D)	Laßt uns frohlocken herzlich sehr		64	71. ああみははマリア	211. ああみ母マリア	211. み母マリアさま
天の元后	27. 天なる王后 (F)	27. 天なる王后 (F)	27. 天なる王后 (F)	27. 天なる王后 (F)	Freu dich, du Himmelskönigin	64		72. あめなるきさい	212. あめなるきさい	212. 母なるマリア
聖主御昇天	28. オリベト山より (G)	28. オリベト山より (G)	28. オリベト山より (G)	28. オリベト山より (G)	Christus fährt auf mit Freudenschall		68	73. オリブのやまより	216. オリヴの山	216. オリベト山より

	公会聖歌集 (1918)	公会聖歌集 第2版 (1920)	公会聖歌集 第3版 (1926)	公会聖歌集 第5版 (1930)	原曲聖歌	Fulda 1891	Koln 1908	公会聖歌集 (1933)	公会聖歌集 (1948)	カトリック聖歌集 (1966)
聖霊降臨	29. 聖霊よ天降りて (B)	29. 聖霊よ天降りて (B)	29. 聖霊よ天降りて (A)	29. 聖霊よ天降りて (A)	Komm, heiliger Geist,kehr bei uns ein		78	77. 聖霊よ天降りて	223. みたまよもりて	223. みたまよりて
聖霊降臨	30. やよ聖きみたま (G)	30. やよ聖きみたま (G)	30. やよ聖きみたま (G)	30. やよ聖きみたま (G)	Kom, kom, O Gesit			75. みたまよゆたけき	221. みたまよゆたけき	221. 天よりたまわる
聖霊降臨	31. 來ませ聖霊よ (F)	31. 來ませ聖霊よ (F)	31. きませ聖霊よ (F)	31. 來ませ聖霊よ (F)	Veni, sancte Spiritus			76. きませみたまよ	222. きませみたま	222. 風の音して
御聖躰	32. たふとき御前に伏し (C)	32. たふとき御前に伏し (C)	32. たふとき御前に伏し (C)	32. たふとき御まへに伏し (C)	Wir bethen an	202		83. 神こそ此處にいませ	244. とうときみまえに	244. とうときみまえに
御聖躰	33. わが身わが靈魂を (G)	33. わが身わが靈魂を (G)	33. わが身わが靈魂を (G)	33. 我身わが靈魂を (G)	Das Heil der Welt, Herr Jesus Christ	93	85	87. いのちのかてにと	248. いのちのかて	248. いのちのかて
御聖躰	34. きよき童貞なる (C)	34. きよき童貞なる (C)	34. きよき童貞なる (C)	34. きよき童貞なる (C)	Preiset, Lippen, das Geheimnis	90		84. きよけき御身體	241. きよけきみからだ	241. 聖なるみからだ
御聖躰	35. 愛なる我が君 (D)	35. 愛なる我が君 (D)	35. 愛なる我が君 (D)	35. 愛なる我が君 (D)	Fest soll mein Taufbung immer stehn		87	92. 秘蹟にこもりて	246. 秘蹟にこもりて	246. ひせきにこもりて
御聖躰	36. シオンの人々よ (D)	36. シオンの人々よ (D)	36. シオンの人々よ (D)	36. シオンの人びとよ (D)	Auf Sion, den Heiland preisen, o Christentum	91		90. シオンよ汝が歌を	242. シオンよなが歌	243. すべてのくにたみよ
御聖躰	37. 大空の星辰の (D)	37. 大空の星辰の (D)	37. 大空の星辰の (D)	37. 大空の星辰の (D)	Himmelsau, licht und blau		91		252. そらのほし	
御聖躰	38. 旅人の糧 (G)	38. 旅人の糧 (G)	38. 旅人の糧 (G)	38. 旅人の糧 (G)	Gott, Vater! Sei gepriesen			91. 天使のパン	243. みつかいのパン	242. みつかいのパン
御聖躰	39. よろこびたたへよ (Es)	39. よろこびたたへよ (Es)	39. よろこびたたへよ (Es)	39. よろこび稱へよ (E)	O höchstes Gut, o Heil der Welt!		90	93. よろこびの國の	251. よろこびたたえよ	251. よろこびたたえよ
御聖躰	41. ラテン語	41. ラテン語	41. ラテン語	41. ラテン語						
御聖躰	41. ラテン語	41. ラテン語	41. ラテン語	41. ラテン語						
御聖躰	42. ラテン語	42. ラテン語	42. ラテン語	42. ラテン語						
御聖躰	43. ラテン語	43. ラテン語	43. ラテン語	43. ラテン語						
耶穌の聖心	44. 愛のいけにへの (D)	44. 愛のいけにへの (D)	44. 愛のいけにへの (D)	44. 愛の犠牲の (D)	Deinem Heiland, deinem Lehrer	92		95. 愛のいけにへの	261. 愛のいけにへの	261. 愛のいけにへの
耶穌の聖心	45. 聲たからかに (F)	45. 聲たからかに (F)	45. 聲たからかに (F)	45. 声たからかに (F)	Dem Herzen Jesu singe			97. しらべもたへに	264. しらべもたえに	264. しらべもたえに
聖母マリア	46. 天つ御母 (F)	57. 天つ御母 (G)	57. 天つ御母 (G)	57. あまつ御母 (G)	Maria zu lieben ist allzeit mein Sinn	115	178a	130. あまつみはは	302. あまつみはは	302. あまつみはは
聖母マリア		46. 諸人舉りて (D)	46. 諸人舉りて (D)	46. もろびと舉りて (D)	Cor dulce, Cor amabile			99. もろびと舉りて	267. もろびとごぞりて	267. もろびとごぞりて
聖母マリア	47. いと愛たきかな (B)	47. いと愛たきかな (C)	47. いと愛たきかな (C)	47. いと愛たきかな (C)	Gegrüßet Seist Du, Königin			129. あな慶たきかな	303. あなめでたきかな	303. めでたしマリアよ
聖母マリア	48. 讃め奉る歌詞は (C)	48. 讃め奉る歌詞は (C)	48. 讃め奉る歌詞は (C)	48. 讃め奉る歌詞は (C)				138. ささぐる歌こそ	308. ささぐる歌	308. ささぐるうたごえ
聖母マリア	49. 天主の御母と (G)	49. 天主の御母と (G)	49. 天主の御母と (G)	49. 天主のみははと (G)	O Unbefleckt Empfangnes		151			
聖母マリア	50. きよらけく咲く (F)	50. きよらけく咲く (F)	50. きよらけく咲く (F)	50. きよらけく咲く (F)	O Palme, sonnenklare			134. たかくたふとく	306. きよらけく咲く	306. きよらけく
聖母マリア	51. いときよく (C)	51. いときよく (D)	51. いときよく (D)	51. いときよく (D)	O du heilige	124		131. うるはしきよけし	301. うるわしきよけし	301. きよけし
聖母マリア	52. アンナの御子 (C)	52. アンナの御子 (C)	52. アンナの御子 (C)	52. アンナの御子 (C)	Ros, o schöne Ros		144	133. アンナの御子	305. アンナのみ子	
天使祝詞	53. 聖龍満てる (F)	53. 聖龍満てる (F)	53. 聖龍満てる (F)	53. 御聖龍満てる (F)	Es ist ein Reis entsprungen	10		41. ゆふやみせまる	129. ゆうやみせまる	124. ゆうやみせまる
聖母の汚なき御やどり	54. 罪の汚れなき (F)	54. 罪の汚れなき (F)	54. 罪の汚れなき (F)	54. 罪の汚れなき (F)	Mutter Christi, hoch erhoben	125		160. こころも清けき	351. こころもきよけき	331. つみのけがれなく
聖母被昇天	55. わが主のおんはは (F)	55. わが主のおんはは (F)	55. わが主のおんはは (F)	55. わが主の御母 (F)				167. わが主の みははよ		
マリアの聖名	56. あな芳香はしき (A)	56. あな芳香はしき (A)	56. あな芳香はしき (A)	56. あな芳香はしき (A)	Ave Maria, klarer und lichter Morgenstern		150	171. あやに奇しき	371. あやにくすしき	367. いともとうおとき
聖母感謝文	57. 我魂主を崇奉り (C)									
聖母感謝文	58. アヴェ・マリス・ステラ (F)	58. アヴェ・マリス・ステラ (F)	58. アヴェ・マリス・ステラ (F)	58. アヴェ・マリス・ステラ (F)				137. めでたきかな	336. めでたきかな	337. めでたきかな
聖母の連禱	59. キリエ エレイソン (F)	59. キリエ エレイソン (F)	59. キリエ エレイソン (F)	59. キリエ エレイソン (F)						
守護の天使	60. 日ごと朝々々々 (G)	60. 日ごと朝夕 (G)	60. 日ごと朝夕 (G)	60. 日ごとあさゆふ (G)				174. あさなゆふなに	382. あさなゆふなに	
守護の天使	61. われを守ります (C)	61. われを守ります (D)	61. われを守ります (D)	61. われを守ります (D)	Du mein Schutzgeist Gottes Engel	133		175. わが身のまもりの	383. わが身のまもりの	
聖フランツイスコ サヴェリオ	62. やまと島根に (F)	62. やまと島根に (F)	62. やまと島根に (F)	62. やまと島根に (F)	Kommt, o Christen, kommet all			187. やまと島根に	412. やまとしまねに	412. 我が日のもとに

	公会聖歌集 (1918)	公会聖歌集 第2版 (1920)	公会聖歌集 第3版 (1926)	公会聖歌集 第5版 (1930)	原曲聖歌	Fulda 1891	Koln 1908	公会聖歌集 (1933)	公会聖歌集 (1948)	カトリック聖歌集 (1966)
日本致命聖人	63. 大和嶋根の (G)	63. 大和嶋根の (G)	63. 大和嶋根の (G)	63. 大和しまねの (G)	O Hirt, von Gott erkoren		196	183. かたくな人の	406. かたくな人	406. みおしえまもりて
聖ヨセフ	64. 頌むべきヨセフよ (Es)	64. 頌むべきヨセフよ (Es)	64. 頌むべきヨセフよ (Es)	64. 頌むべきヨセフよ (Es)	Vater Joseph, schau hernieder	146		178. み子とその母の	391. み子とその母	391. 聖なるかぞくの
聖アロイシオ	65. いとど淨き (F)	65. いとど淨き (F)	65. いとど淨き (F)	65. いとど淨き (F)	Gegrüsst sei taufendmal		199	190. わかき聖者	416. いともきよき	415. わかきものの
大天使聖ミカエル	66. 天使の首と (F)	66. 天使の首と (F)	66. 天使の首と (F)	66. みつかひの首と (F)	O ihr Heiligen Gottes freundt		203	173. みつかひの長さ	381. みつかいのおさ	381. みつかいの
アジシオの 聖フランツイスコ	67. 貧しき者の父よ (D)	67. 貧しき者の父よ (D)	67. 貧しき者の父よ (D)	67. まづしきものの父よ (D)	O Franziskus, du Vater der Armen			189. まづしきをもとめて	417. まづしきをもとめて	414. まづしきをもとめて
諸聖人	68. 身も霊も献げて (C)	68. 身も霊も献げて (D)	68. 身も霊も献げて (D)	68. 身もたまも献げて (D)	Im Himmel musse Lob erschallen	139		193. 世の軍に勝ちし	438. 世のいくさ	431. 世のいくさ
死者の爲め	69. 烈しき火焰に (F)	69. 烈しき火焰に (F)	69. 烈しき火焰に (F)	69. はげしきほのほに (F)	Herr, gib Frieden dieser Seele	162a		196. 往にけるその霊	443. いにけるそのたま	443. いにけるそのたま
諸種の聖歌： 主に身を捧ぐる	70. 身も霊も (C)	70. 身も霊も (C)	70. 身も霊も (C)	70. 身もたまも (D)	Jesu, dir leb' ich	204		117. 身もたまも	2. みもたまも	2. みもたまも
耶穌を愛す	71. われを愛して (B)	71. われを愛して (B)	71. われを愛して (B)	71. われをあいして (B)				121. われを愛して	285. われをあいして	285. ふかき主の愛
信望愛	72. 天なる御かみの (F)	72. 天なる御かみの (G)	72. 天なる御かみの (G)	72. 天なるみかみの (G)	Ich glaub' an Gott in aller Not	27		114. み神のたまひし	4. み神のたまひし	3. われらにたまひし
葡萄樹	73. 奇しき葡萄樹 (G)	73. 奇しき葡萄樹 (G)	73. 奇しき葡萄樹 (G)	73. 奇しきえびかづら (G)	Prage deiner Liebe Zeichen			124. 我こそひと樹の	284. くしきえびかづら	284. くしきぶどうの木
天主を讃美する	74. 讃めよ稱へよ (F)	74. 讃めよ稱へよ (F)	74. 讃めよ稱へよ (F)	74. 讃めよ稱へよ (F)	Grosser Gott, wir loben dich	86	125	108. われら神を讃め	11. われかみをほめ	12. われ神をほめ
天國	75. 榮光と幸福と (Es)	75. 榮光と幸福と (Es)	75. 榮光と幸福と (Es)	75. 榮光とさちと (Es)	Maria, sei gegrüset	7		200. さかえも幸も	42. さかえもさちも	41. さかえもさちも
夜の守護を求むる	76. わが天主よ (C)	76. わが天主よ (D)	76. わが天主よ (D)	76. 我天主よ (D)	In dieser Nacht	176		209. こよひも 仇の手より	50. こよひも	50. このゆうべ
罪の赦免を乞う (詩篇五十五章)	77. 吁、天主 (F)									
切願		77. 天なる御天主に (B)	77. 天なる御天主に (B)	77. 天なる天主に (B)	Heilige! über alles heilige			118. あめなるみ神に	1. あめなるみかみ	1. あめなるみかみ
平和の爲めの聖歌	78. ラテン語	78. ラテン語	78. ラテン語	78. ラテン語						
教皇陛下のため	79. ラテン語	79. ラテン語	79. ラテン語	79. ラテン語						
Versiculi et Responsorie	80. ラテン語	80. ラテン語	80. ラテン語	80. ラテン語						
聖體降福前	81. ラテン語	81. ラテン語	81. ラテン語	81. ラテン語						
聖體降福前	82. ラテン語	82. ラテン語	82. ラテン語	82. ラテン語						
聖體降福前	83. ラテン語	83. ラテン語	83. ラテン語	83. ラテン語						
聖體降福前	84. ラテン語	84. ラテン語	84. ラテン語	84. ラテン語						
聖體降福後	85. ラテン語	85. ラテン語	85. ラテン語	85. ラテン語						
聖體降福後	86. ラテン語	86. ラテン語	86. ラテン語	86. ラテン語						
聖體降福後	87. ラテン語	87. ラテン語	87. ラテン語	87. ラテン語						
ミサの聖歌	88. 三位の御神の (G)	88. 三位の御天主の (A)	88. 三位の御天主の (A)	88. 三位の天主の (G)	Hier liegt von deiner Majestat	180		1. 三位のみかみの	51. さんみのみかみ	61. さんみのみ神
祭光	89. 天には神に (G)	89. 天には天主に (G)	89. 天には天主に (G)	89. 天には天主に (G)	Gott soll gepriesen werden	181		2. あめにみさかえ	52. あめにみさかえ	62. 天にみさかえ
司祭が祭壇の左方にて 福音を讀む時	90. 世にたまはりし (F)	90. 世にたまはりし (G)	90. 世にたまはりし (G)	90. 世にたまはりし (G)	Wir sind im wahren Christentum	184* p. 179		3. 世にたまはりし	53. 世にたまわりし	63. 世にたまわりし
司祭パンと葡萄酒を 献ぐる時	91. きよく貴き (C)	91. きよく貴き (C)	91. きよく貴き (C)	91. きよく貴き (C)	Nimm an, o Herr, die Gaben	182		4. きよくたふとき	54. きよくとうとき	64. きよくとうとき
司祭が祭壇の中央に立ち 声を上げて序語を讀む時	92. 最しも聖き (G)	92. 最しも聖き (G)	92. 最しも聖き (G)	92. 最しも聖き (G)	Heilig! Heilig! Heilig!	181* p. 180		5. いとしもきよき	55. いとしもきよき	65. いとも尊き
聖体奉挙後	93. 罪人なるわれ等 (C)	93. 罪人なるわれ等 (D)	93. 罪人なるわれ等 (D)	93. つみ人なるわれ等 (D)	Sieh, Vater von dem höchsten Throne	183		6. つみびとなる身を	56. つみびとなる身	66. 罪びとなるわれら
聖体を領くるを望む	94. 主よわがのぞみ (C)	94. 主よわがのぞみ (C)	94. 主よわがのぞみ (C)	94. 主よわがのぞみ (C)	O herr ich bin nicht würdig	182* p. 183		7. いざ我がのぞみ	57. いざ我がのぞみ	67. いざわがのぞみ
聖体拝領後	95. 神こそ我が榮譽 (C)	95. 天主こそ我が榮譽 (D)	95. 天主こそ我が榮譽 (D)	95. 天主こそ我が榮譽 (D)	Ich will dich lieben, meine Starke	196				

	公会聖歌集 (1918)	公会聖歌集 第2版 (1920)	公会聖歌集 第3版 (1926)	公会聖歌集 第5版 (1930)	原曲聖歌	Fulda 1891	Koln 1908	公会聖歌集 (1933)	公会聖歌集 (1948)	カトリック聖歌集 (1966)
Missa de Angelis : 歌御ミサの時	96. ラテン語	96. ラテン語	96. ラテン語	96. ラテン語						
葬式の時	97. ラテン語	97. ラテン語	97. ラテン語	97. ラテン語						
埋葬	なし	98. 霊魂の故郷 (D)	98. 霊魂の故郷 (D)	98. 霊魂のふるさと (C)	Wie der Hirsch in schwülen Tagen	170		197. 最終のやすみの	444. おわりのやすみ	444. おわりのやすみ
小児の埋葬	なし	99. 天なる使に (D)	99. 野の白百合にも (D)	99. 野の白百合にも (D)	Zum Vater, der in Himmel wohnt	172		199. しらゆりと清く	451. きよきしらゆり	451. 清き白百合
三位一體	なし	100. 愛なる御天主よ (G)	100. 愛なる御天主よ (G)	100. 愛なる天主よ (G)	Gott, wir preisen deine Güte	87		82. 父なるみかみよ	231. 父なるみ神	231. 父なるみ神
聖ペテロ	なし	101. いと聖なる (F)	101. いと聖なる (F)	101. いと聖なる (F)				181. 誰が建てつる	401. たがたてつる	
母なる聖會	なし	102. 讃めよ稱へよ (A)	102. 讃めよ稱へよ (A)	102. ほめよ稱へよ (A)	Ein Haus voll Glorie schauet			204. ほめよ稱へよ	31. ほめよたたえよ	31. ほめよたたえよ
主禱文	なし	103. 天に在す (F)	103. 天に在す (F)	103. あめに在す (F)	Jesus, Jesus, come to me			112. 天にます	6. あめにます我等の父	5. てんにまします
愛の歌	なし	なし	104. われは主を愛す (D)	104. われは主をあいす	O du mein gott ich liebe dich	28		120. わが爲十字架に		
御聖體拝領前	なし	なし	105. わが君イエズス (A)	105. わが君イエズス (A)				11. わがたまのかて		
人類の母なる聖母	なし	なし	106. いと高き御母 (As)	106. いと高き御母 (As)	三木露風 (作曲)			136A. いとたかき聖母よ		
大和を聖心に	なし	なし	107. 万國の主よ (B)	107. 万國の主よ (B)	Auf zum Schwur, Tirolerland			107. よろづの國の		
泰教の誓ひ	なし	なし	108. 救霊の水に (C)	108. たすかりの水に (C)				206. みすくひの水に		

【付録3】

- ・この付録には『公教聖歌集』（1933）の構成聖歌を掲載している。
- ・ドイツ由来の聖歌は黄色（■）、フランス由来の聖歌はピンク（■）で示した。
- ・4 から7 行目には、各聖歌が『公教聖歌集』（1933）以前に日本の聖歌集に掲載されている場合、その聖歌集とその番号、あるいはページ番号を記載している。
- ・8、9 行目には、各聖歌の原曲が『フルダ 1891』あるいは『ケルン 1908』に含まれている場合はその番号を掲載している。
- ・先行研究の欄には、エヴァルト・ヘンゼラー氏と安足磨由美氏による論文（『カトリック聖歌集』（1966）と日本人の作曲による聖歌』2002 年）の付録に掲載される原曲を掲載している。なお、×印は、研究論文の付録に掲載されていないことを示している。

【付録3】

ドイツ由来の聖歌は黄色（■）、フランス由来の聖歌はピンク（■）で示した。

	分類	公教聖歌集 (1933)	公会聖歌集 (1918)	日本聖詠 (1907)	天主公会 (1910)	公教聖歌 (1911)	Fulda 1891	Koln 1912	原曲(歌詞冒頭)	典拠	先行研究 (ヘンゼラー、2002)	カトリック 聖歌集 (1966)	調性	拍子	Auftakt
1	ミサ聖祭(一) ミサのはじまる時	三位のみかみ	88				180		Hier liegt vor deiner Majestät	Landshut 1777	B IV, No.433	61	G	4/4	○
2	栄光の聖歌	あめにみさかえ	89				181		Gott soll gepriesen werden	Landshut 1777	B IV, No.438	62	G	4/4	○
3	聖福音	世にたまはりし	90				184* p.179		Wir sind im wahren Christentum	Landshut 1777	Fulda 1907, No.184	63	G	4/4	○
4	奉献	きよくたふとき	91				182		Nimm an, o Herr, die Gaben	Landshut 1777	Fulda 1907, No.182	64	C	4/4	○
5	序誦	いとしもきよき	92				181* p.180		Heilig, Heilig, Heilig	Landshut 1777	B IV, No.438	65	G	4/4	×
6	聖變化後	つみびとなる身を	93				183		Sieh, Vater von dem höchsten Throne	Landshut 1777	Fulda 1907, No.183	66	D	3/4	○
7	聖體拝領前	いざ我がのぞみ	94				182* p. 183		O Herr, ich bin nicht würdig	Gesangbuch der Maria Theresia (1774)	Fulda 1907, No.182	67	C	4/4	○
8	ミサ聖祭(二) 入歳分より福音まで	みいつ限りなき					178		Gott, dem unsre Knie sich beugen	Fulda 1891	×		F	4/4	×
9	奉献から聖變化まで	いまはのゆふげ					197		Beim letzten Abendmahle	Liegnitz 1828	×		C	4/4	○
10	聖變化後	もろ人ひれふし					199		Christen, beten an im Glauben!	Fulda Dompfarrl. Chor	×		C	4/4	×
11	聖體拝領前	わがたまのかて	105 (1930)								×		A	4/4	×
12	聖體拝領後	受けしめぐみの					109		Die Seele Christi heilige mich,	Fulda 1891	×		C	4/4	○
13	ミサ聖祭(三)	いけにへを		75									F	4/4	○
14	聖體拝領前	汚れしき眼にこそ見えぬ			29								D	4/4	○
15	聖體拝領前	あいの主よ		79									G	6/8	×
16	聖體拝領後	あめつちの主よ			30								D	4/4	○
17	聖體拝領前 (小児用)	わたしのむねに											F	6/8	×
18	待降節	よるこびの泉	1						O Heiliger Schöpfer aller Stern	羅: Conditor alme siderum	B I, No.4c	101	F	4/4	○
19	待降節	闇路にさまよひ					2	5	O Heiland, reiß die Himmel auf	Würzburg 1622	B I, No.24b	102	ドリア	3/4	×
20	待降節	み恵み降らせよ	4				3b		Thauet Himmel den Gerechten!	Landshut 1777	×		C	4/4	○
20A	待降節	み恵み降らせよ											C		
21	待降節	あはれみの神		46					Venez, divin Messie		Lille-Paris, 1896	103	G	4/4	○
22	待降節	来ませ救ひ主	2					6a	O komm, o komm, Emmanuel!	羅: Veni, veni, Emmanuel	B IV, No.5	105	e	4/4	○
23	御降誕	更ゆく、静寂を	8						Stille Nacht	Leipzig 1838	B IV, No.28	111	C	6/8	×
24	御降誕	きけ妙なるしらべ					9		Auf Christen sing festliche Lieder	Fulda 1778, B IV, No.11	×		C	4/4	○
25	御降誕	身こそいふせき	7								1918年『公教聖歌集』 7番	115	B	4/4	○
26	御降誕	みそらゆく	9					11	O selige Nacht!	Sohn Gottes, Augsburg 1800, B III No.220/ Bonn 1826, BIV No.12	×		C	4/4	○
26A	御降誕	みそらゆく (『公教聖歌集』1936)							Ihr Hirten, erwacht	Koln 1852, BIV No.13	×		B	3/4	○
27	御降誕	あれ聞こゆる歌	6					20	Lasst uns das kindlein grüßen		×		F	3/4	○
28	御降誕	あめには		49									B	2/4	×
29	御降誕	なべてのひとを		52									g	3/4	○
30	御降誕	神にはみさかえ											G	4/4	○
31	御降誕	やみに棲むひと	5				12		Es kam ein Engel hell und klar	Leisentritt 1567	B I, No.82	119	C	4/4	○
32	御降誕	すくひの御子は			8								C	3/8	×
33	御降誕	けふみあるじは		51					Le Fils du Roi de gloire		Marseille, 1928, no.137	117	Es	6/8	○

	分類	公教聖歌集 (1933)	公会聖歌集 (1918)	日本聖詠 (1907)	天主公会 (1910)	公教聖歌 (1911)	Fulda 1891	Köln 1912	原曲 (歌詞冒頭)	典拠	先行研究 (ヘンゼラー、2002)	カトリック 聖歌集 (1966)	調性	拍子	Auftakt
34	御降誕	ものみな眠る	10								1918年『公会聖歌集』 10番	118	F	3/8	○
35	御降誕	いざ世のとも							Auf gläubige Seelen	羅: Aeste fideles	B IV, No.25	113	G	4/4	○
36	御降誕	あふげや仰げや							Les Anges dans nos campagnes			121	F	2/4	×
37	御降誕	みまやの燈火					16		Lasst uns das kindlein grüßen (聖歌27とは異なる歌詞)	Köln 1619	×		F	3/4	○
38	御降誕	救ひの御子は				13	12		Zu Bethlehem geboren	Köln 1638	B I, No.169	114	F	4/4	○
39	御降誕	ひさかたの		48					Il est ne, le divin Enfant		Paris 18??, No.63	122	F	2/4	×
40	御降誕	らうたき御子の	11								×		F	4/4	×
41	御降誕	ゆふやみせまる	53				10		Es ist ein Reis entsprungen	Köln 1599	B I, No.78	124	F	4/4	○
42	聖名	あふぐもたふたし	12				23		Jesu wie süß!	Fulda 1891	×		ミクソリ ディア	3/4	×
43	聖名	あはれこの		54							1922年版『日本聖詠』 54番	146	F	4/4	○
44	三王来朝	光りもくすしき	13				23		Es führt drei König Gottes Hand		Regensburg, 1926, No.21	151	D	3/4	○
45	三王来朝	あもり来ます		53									F	6/8	×
46	三王来朝	愛しき御子はも											C	4/4	○
47	梅棧	まぼろしの影を	19					36	Gott, vor deinem Angesicht		×		C	3/4	×
48	梅棧	きみならで		22					Entendrons-nous vanter		Paris, 18??, No.19	162	F	6/8	×
49	梅棧	おそれなき		34							1922年版『日本聖詠』 34番	163	a	2/4	×
50	梅棧	まなかひに		40					Au fond des brulants		Paris, 1869, No.156	164	a	4/4	×
51	御苦難	いばらのかむり	14				44		Gott Vater der du oben	Corner 1631	B II, No.395	171	フリギア	4/4	○
52	御苦難	夕闇かけらく	15						Wer hat dich mein Jesum gefangen	Brauns Echo 1675	B IV, No.63	173	F	3/4	○
53	御苦難	うけましし		57					Au sang qu'un Dieu va repandre		Paris, 1869, No.67	174	e	3/4	○
54	御苦難	はしらになひつ		59							1922年版『日本聖詠』 59番	178	g	4/4	○
55	御苦難	身は釘うたれつ					46		Da Jesus an dem Creutze hung	Leisentree 1567	B I, No.197	179	フリギア	4/4	○
56	御苦難	なやみ疲れまし					47		O Traurigkeit, o Herzeleid	Mainz 1628	Fulda 1907, No.47	176	e	4/4	○
57	十字架	こよなきめぐみの	16				36		Christ spricht zur Seel	PAerborn 1609	Fulda 1907, No.36	186	G	4/4	○
58	十字架	頌めよたたへよ	18						Sei, heiliges Kreuz gegrüßet	Psalterium Cantionum 1810	?	187	F	4/4	○
59	十字架	伴びしき日のとも							Heil'ges Kreuz, sei hochverehret		Limburg, 1934, No.52	188	G	2/4	×
60	悲しみの聖母	傷ましくも立てる		102					Göttlich, Jesus, ist die Liebe	Herold 1808	B IV, No.74	192	d	4/4	×
61	悲しみの聖母	み子の十字架の	21					53	Christi Mutter stand mit Schmerzen	Bone 1847	Regensburg 1926	191	F	4/4	×
61A	悲しみの聖母	み子の十字架の					53		Christi Mutter stand mit Schmerzen	Corner 1631	×		F	4/4	×
62	悲しみの聖母	あさにけに		100							1922年版『日本聖詠』 100番	193	G	4/4	○
63	枝の主日	み榮え君にあれや									1933年版『公教聖歌集』 63番	196	D	4/4	×
64	御復活	いはへやうたへ	22				58		Der Heiland ist erstanden	Fulda 1891	Fulda, 1907, No.58	201	G	4/4	○
65	御復活	しろたへの衣に	24						Preis dem Todes-Ueberwinder	Düsseldorf 1836	B IV, No.111	202	F	4/4	×
66	御復活	いざいざよろこべ			15				Qui c'est a Dieu qu'aura recours		Reims, 1922	203	Es	2/4	×
67	御復活	よろこべ今日ぞ		61					Jesus parait en vainqueur		Marseille, 1928	204	F	4/4	○
68	御復活	わがきみイエズス	23					61	Wahrer Gott! Wir glauben dir	Verspoell 1810	B IV, No.107	205	F	4/4	×
69	御復活	よろづのくにたみ							Freu Dich erlöste Christenheit	Limburg 1838	B IV, No.113		B	4/4	○
70	御復活	よろこびたたへよ	26 (1926)						Das Grab ist leer!	Landshut 1777	B III, No.52	206	B	3/4	○

	分類	公教聖歌集 (1933)	公会聖歌集 (1918)	日本聖詠 (1907)	天主公会 (1910)	公教聖歌 (1911)	Fulda 1891	Koln 1912	原曲(歌詞冒頭)	典拠	先行研究 (ヘンゼラー、2002)	カトリック 聖歌集 (1966)	調性	拍子	Auftakt
71	喜びの聖母	ああみははマリア	26					64	Laßt uns erfreuen herzlich sehr	Köln 1623	B I, No.280	211	D	4/4	○
72	喜びの聖母	あめなるきさい	27				64		Freu dich, du Himmelskönigin	Limburg 1838, B IV No. 113	?	212	F	4/4	○
73	御昇天	オリブのやまより	28					68	Christus fährt auf mit Freudenschall	Köln 1880	B IV, No.115	216	G	3/4	×
74	御昇天	ひさかたの		62					Armons-nous, la voix du Seigneur		Marseille, 1928, no.27	217	F	4/4	○
75	聖霊	みたまよゆたけき	30						Kom, kom, O Geist	Tochter Sion 1741	B III, No.54	221	G	4/4	○
76	聖霊	きませみたまよ	31						Veni, sancte Spiritus		Paris, 1877, No.332	222	F	4/4	○
77	聖霊	聖霊よ天降りて	29				78		Kom heiliger Geist warer trost	羅: Veni Creator Spiritus	B I, No.344	223	ミクソリ ディア	4/4	○
78	聖霊	ひさかたの天つみ空より		11					Esprie-Saint, descendenz en nous		Paris, 1877, No.15	226	G	4/4	○
79	聖霊	ひさかたのそのみやこ指し		63					Esprit-Saint, Dieu de lumiere		Paris, 19??, No.102	227	F	4/4	○
80	聖霊	ちよろづに		64					Un Dieu vient se faire entendre		Paris, 19??, No.2	224	G	3/4	○
81	聖霊	みたまよくだりて			19						1933年版『公教聖歌集』 81番	225	F	3/4	×
82	三位一體	父なるみかみよ	100				87		Gott, wir preisen deine Güte	Fulda 1778	Fulda, 1907, No.87	231	G	4/4	×
83	聖體	神こそ此處にいませ	32				202		Wir bethen an	Landshut 1777	B III, No.68	244	C	4/4	○
84	聖體	きよけき御身體	34				90		Preiset, lippen, das Geheimnis	羅: Pange lingua gloriosi corporis mysterium, Bone 1847	B I, No.371	241	C	4/4	○
85	聖體	尊とき聖堂ぬち					95		Kommt her, ihr Kreaturen	Fulda 1891	Fulda, 1907, No.95	245	F	4/4	○
86	聖體	眼にこそ隠れおはせれ		70					Qu'ils sont aimes		Paris, 1899, No.46	247	G	4/4	○
87	聖體	いのちのかてにと	33				93	85	Das Heyl der Welt	Köln 1638	B I, No.406	248	G	4/4	○
88	聖體	秘蹟にこまれる							Uns zum Himmel zu erheben	München 1810	Modling, 1933, No.193	249	G	3/4	○
89	聖體	留めたまひける							Segnes, Jesus, deine Herde	Liegnitzer 1828	Modling, 1933, No.191	250	F	4/4	○
90	聖體	シオンよ汝が歌を	36				91		Auf! Zion, preise deinen Konig	Fulda 1778	Fulda 1907, No.91	243	D	4/4	○
91	聖體	天使のバン	38				68b, 85		Gelobt sei Gott der Vater	Limburg 1838, Trier 1847	B IV, No.129	242	G	4/4	○
92	聖體	秘蹟にこもりて	35					87	Fest soll mein Taufbung immer stehn	Bonn 1826	B IV, No.151	246	D	3/4	×
93	聖體	よろこびの國の	39					90	O höchstes Gut, O Heil der Welt	München 1845	B IV, No.315	251	Es	4/4	○
94	聖體	ああ主よ眼にこそ見えねど					94		O Christ hie merch	Köln 1623	B I, No.394	253	C	4/4	○
95	聖心	愛のいけにへの	44				92		Deinem Heiland, deinem Lehrer	fränkische weise(Fulda 1891)	Fulda 1907	261	D	4/4	×
96	聖心	きよけき主の愛						101	O Herz Jesu, Sitz der Liebe	Köln 1844	B IV, No.174	262	F	4/4	×
97	聖心	しらべもたへに	45						Dem Herzen Jesu singe	Mohr 1877	B IV, No.171	264	F	4/4	○
97A	聖心	しらべもたへに							Dem Jezu-Herzen singe	Einzeldrck vor 1858	B IV, No.169	265	C	4/4	○
98	聖心	率や來よ主の御許に											B	4/4	○
99	聖心	もろ人擧りて	46 (1920)						Cor dulce, Cor amabile		Paris, 1877, no.341	267	D	3/4	×
100	聖心	春はうばらよ							Ein Herz hat sich erschlossen		Regensburg, 1926, no.118	263	D	4/4	○
101	聖心	悩みしげき旅なれば			23				Piite, mon Dieu		Paris, 1911, no.159	266	F	2/4	○
102	聖心	あふぐもかしこし									1930年版『公教聖歌集』 p.37	268	G	3/4	○
103	聖心	イエズスの聖心							O mein Jesus, gib mir Schwingen	Regensburg 1927	×		D	4/4	×
104	聖心	ひじりらを		88									D	4/4	○
105	聖心	八隅しし		87					Du sejour de la glorie		Montreal, 1905, no.74	269	F	6/8	○
106	聖心	あわれみの聖心		90					O mon Dieu, mon Sauveur		Paris, 1911, no.33	270	G	4/4	○
107	聖心	よろづの國	107 (1926)						Auf zum Schwur, Tirolerland	Brixen 1896	B IV, No.180	271	B	3/4	○
108	主に對する賛美	われら神を讃め	74	18			86	125	Grosser Gott, wir loben dich	Bone 1852	B III, No.219e	12	F	3/4	×
109	主に對する賛美	なべての民よ							山本直忠			11	Es	4/4	×
110	主に對する賛美	主こそわが榮譽よ					196		Ich wil dich lieben	Heiligen Seelen Lust 1657	B III, No.202	13	D	3/4	×

	分類	公教聖歌集 (1933)	公会聖歌集 (1918)	日本聖詠 (1907)	天主公会 (1910)	公教聖歌 (1911)	Fulda 1891	Koln 1912	原曲(歌詞冒頭)	典拠	先行研究 (ヘンゼラー、2002)	カトリック 聖歌集 (1966)	調性	拍子	Auftakt
111	主に求む	なみだのかわく隙なく											B	4/4	○
112	主祷文	天にます我等の父よ	103		1				Jesus, Jesus, come to me		New York, 1884	5	F	2/4	×
113	主祷文	天にますみちちよ		5									F	3/4	×
114	信望愛	み神のたまひし	72				27		Ich glaub' an Gott in aller Not	Tochter Sion 1741	Fulda 1907, No.27	3	G	4/4	○
115	信望愛	かみにませば		11					Pour trouver le Seigneur		Avignon, 1827	4	B	3/4	×
116	摂理	わが友よなべて											F	4/4	×
117	奉献	身もたまも	70				204		Jesu, dir lieb' ich	Liegnitz 1828	B IV, No.133b	2	D	4/4	×
118	奉献	あめなるみ神に	77						Heilige! über alles heilige	Herold 1808	B IV, No.344	1	B	4/4	×
119	キリストに対する 賛美	うるはしの主のみこころ							Schönster Herr Jesu	Glatzz 1894	B IV, No.184	288	D	4/4	×
120	我が主を愛する歌	わが爲十字架に	99 104				28		O du mein Gott	Mohr 1877	B IV, No. 337		D	4/4	○
121	愛の歌	われを愛して	71								1918年『公会聖歌集』 71番	285	G	4/4	×
122	熱き願ひ	みこころにきよめられ							W.J. Maher			287	G	4/4	×
123	御主を慕ふ	振放し見れば							Am hohen Himmel winket		Regensburg 1926, No.35	43	C	4/4	○
124	葡萄の樹	我こそひと樹の	73						Prage deiner Liebe Zeichen		Regensburg, 1926, No.119	284	G	3/4	×
125	善き牧者	よき牧守の											フリギア	4/4	○
126	信頼	みそらに聞ゆる											e	3/4	○
127	熱心	わが身わがたま			3				O toi, Mere cherie		Paris, ?	14	F	3/4	○
128	王なるキリスト	あめつちを造り							Dank sei dem Heiland Jesus Christ	Regensburg, 1902, No.165	×		D	4/4	×
129	聖母	あな慶たきかな	47			p.68			Glucksel'ge Himmelskonigin	Herold 1808	B IV, No.203	303	C	4/4	○
130	聖母	あまつみはは	57				115	178a	Maria zu lieben		B III, No.121	302	G	3/4	○
131	聖母	うるはしきよけし	51				124		O du heilige	Bonn 1827	B IV, No.199	301	D	4/4	×
132	聖母	うるはしくも							Kommt her ihr Engel Chör	Einsiedeln 1773	B III, No.111	304	Es	3/4	×
133	聖母	アンナの御子	52					144	Ros, o schöne Ros	Köln 1852, B IV, No.191	×		C	6/8	×
134	聖母	たかくたふたく	50						O Palme, sonnenklare		Munchen 1936, No.118	306	F	4/4	○
135	聖母	われらの母なる							De concert avec les anges		Marseille 1928, No.181	307	F	3/4	○
136	聖母	いとたかき聖母よ											C	6/8	×
136A	聖母	いとたかき聖母よ	106						三木露風		三木露風		A	4/4	×
137	聖母	めでたきかな	58						Ave, maris stella		Paris, 1877, No.353	337	F	4/4	×
138	聖母	ささぐる歌こそ	48								1918年『公会聖歌集』 48番	308	フリギア	4/4	○
139	聖母	彼の丘こえこの川ゆき											C	2/4	×
140	海の星	そらのかなた							Meerstern, ich dich grüße!		Regensburg 1926, No.154	338	F	4/4	×
141	海の星	天の門きみはのぼり		116					Les saints et les anges		Paris 19??, no.113	322	G	3/4	○
142	海の星	ああ僕かしき				p.77						339	F	6/8	○
143	暁の星	なつかしのははよ										345	C	3/4	○
144	暁の星	あかつきの星よ							Du haut des cieux		Saint-Hyacinthe, 195?	346	C	3/4	○
145	聖母	うつし世にも							Ave Maria zart	Georg Braun 1675	×		D	3/4	×
146	聖母	おおマリア美しき											D	4/4	×
147	聖母	あめなる きさいの	55	126	45	p.73							F	3/4	×
148	聖母	聖母よ汝が子等は				p.76							F	4/4	×
149	聖母	愛のみははよ				p.75			J'irai la voir un jour P.Janin				Es	6/8	○
150	聖母	嬉しき此殿に				p.81							C	4/4	○
151	聖母	わが霊のひとりし				p.79							D	4/4	×
152	聖母	やまとはよろこびの兆		117									G	3/4	○

	分類	公教聖歌集 (1933)	公教會聖歌集 (1918)	日本聖詠 (1907)	天主公教会 (1910)	公教聖歌 (1911)	Fulda 1891	Koln 1912	原曲(歌詞冒頭)	典拠	先行研究 (ヘンゼラー、2002)	カトリック 聖歌集 (1966)	調性	拍子	Auftakt	
153	聖母	いのりするところのきはみ				p.74					L'ombre s'etend sur la terre		G	3/4	×	
154	聖母	香をし高みみ國のかけ											G	2/4	○	
155	天使祝詞	きよき處女とて		7					Coeur de Jesus, que le ciel et la terre		?	331	C	3/8	×	
156	天使祝詞	めでたしみ恵み充てる		6					Concordi laetitia		Paris, 1877, no.244	332	F	3/8	×	
157	ロザリオの第1串	天使の宣りたまへば		135							1922年版『日本聖詠』 135版	371	G	2/4	×	
158	ロザリオの第2串	見やよゲッセマニの園		136							1933年版『公教聖歌集』 158番	372	G	2/4	×	
159	ロザリオの第3串	死の刺よ今いづこ							Venez, le Rosaire a la main		Marseille, 1928, no.248, クーブレ	373	D	3/4	×	
160	無原罪の聖母	こころも清けき	54				125		Mutter Christi, hoch erhoben	Eichsfeld 1622	Fulda 1907, No.126	311	F	4/4	×	
161	無原罪の聖母	けがれもあらず				p.66			Salut, ô Vierge immaculée P.Lambillotte				F	4/4	○	
162	無原罪の聖母	あめつちの		109							1922年版『日本聖詠』 109番	332	G	6/8	×	
163	聖母月	皇月のきさいを							Maria, Maienkonigin!	Schwäbisch Hall 1851	B IV, No.258	351	B	4/4	○	
164	聖母月	風もかをりて							Maria, Maienkonigin!	Marienrosen 1845	B IV, No.265	352	B	4/4	○	
165	聖母月	うるはしみ							Noble epoux de Marie		Marseille 1928, No.275	353	Es	6/8	×	
166	聖母月	たのしけく		92							1922年版『日本聖詠』 92番	354	F	6/8	○	
167	被昇天	わが主のみははよ	55	126	45	p.73							F	3/4	×	
168	被昇天	みつかひ秋の宮居に		124							1922年版『日本聖詠』 124b版	361	C	4/4	×	
169	聖母の御名	わがみはは御名懐かしみ		97							L'ombre s'etend sur la terre	Paris 1977, No.129	368	B	3/4	×
170	聖母の御名	いざ行かな君し護らば		98									G	2/4	×	
171	聖母の御名	あやに奇しき	56					150	Ave Maria, klarer und lichter Morgenstern	Köln 1844	B IV, No.145e	367	A	4/4	○	
172	聖母 (小児用)	マリアさま	111								×		G	6/8	○	
173	大天使ミカエル	みつかひの長と	66						O ihr Heiligen Gottes freundt	Köln 1599, 1613	B II, no.114	381	F	4/4	○	
174	天使	あさなゆふなに	60								×		G	4/4	○	
175	天使	わが身のまもりの	61				133		Du mein Schutzgeist Gottes Engel	Fulda 1891	×		D	4/4	×	
176	天使	人毎に守らく嬉し		143					O Welt, ich kann dich nicht mehr achten		Bocholder Melodie, 1852	382	F	2/4	×	
177	天使	ゆく手は小暗く									1930年版『公教聖歌』 p.141	383	D	3/4	×	
178	聖ヨゼフ	み子とその母の	64				146		Vater Joseph, schau hernieder	Fulda 1891	Fulda 1907	391	D	4/4	×	
179	聖ヨゼフ	聖きヨゼフよ							Heil'ger Joseph, hor'uns flehen	Köln 1852	B IV, No.278	392	C	4/4	×	
180	聖ヨゼフ	みかみはみづからの		141					Le Dieu que nos soupirs appellent		Paris 1846, No.23	393	C	4/4	×	
181	聖ペトロ	誰が建てつる	101 (1920)										F	4/4	○	
182	聖ペトロ	かみの子の							O Dieu, dont je tiens l'etre		Paris 1911, No.61	401	F	4/4	○	
183	日本殉教者	かたくな人の	63					196	O Hirt, von Gott erkoren		Koln 1908, no.196	406	G	4/4	○	
184	日本殉教者	雄々しくも潔ぎよき		151					J'engageai ma promesse		Reims, 1922, no.65	407	B	4/4	○	
185	日本殉教者	しきしまの		150					Celebrons ce grand jour		Paris, 1911, no.149	408	C	4/4	○	
186	聖フランススコ・ ザベリオ	日のもとに		149									D	4/4	×	

	分類	公教聖歌集 (1933)	公会聖歌集 (1918)	日本聖詠 (1907)	天主公会 (1910)	公教聖歌 (1911)	Fulda 1891	Koln 1912	原曲 (歌詞冒頭)	典拠	先行研究 (ヘンゼラー、2002)	カトリック 聖歌集 (1966)	調性	拍子	Auftakt
187	聖フランシスコ・ザベリオ	やまと島根に	62						Kommt, o Christen, kommet all	Luremburg 1847	B IV, no.209	412	F	4/4	×
188	聖フランシスコ・ザベリオ	おおせいなるフランシスコよ									1933年版『公教聖歌集』 188番	413	D	4/4	○
189	アシジの 聖フランシスコ	まづしきをもとめて	67						O Franziskus, du Vater der Armen		Köln 19??, no.186	414	D	3/4	×
190	聖アロイジオ	わかき聖者	65					199	Gegrüsst sei tausendmal		×		F	4/4	○
191	小さき花の 聖テレジア	夕星のかげの							M.J.Sheehan			422	G	6/8	○
192	諸聖人	今日し幾千代の		145					Marchons au combat		Reims, 1922. no.27	432	G	4/4	○
193	諸聖人	世の軍に勝ちし	68				139		Im Himmel müsse Lob erschallen!	Fulda 1778	Fulda, 1907, no.139	431	D	4/4	○
194	死者	世に在りしときの					169		O Heiligste Drei faltigkeit	Bone 1852	×		d	4/4	○
195	死者	やさしき御母よ							O Maria, voll der GnAen	Köln 1852	B IV, no.375 ?	442	F	4/4	×
196	葬禮	往にけるその霊	69				162a		Herr, gib Frieden dieser Seele	Fulda 1891	Fulda, 1907, 162a	443	F	4/4	×
197	葬禮	最終のやすみの	98				170		Wie der Hirsch in schwülen Tagen	Fulda 1778	Fulda, 1907, no.170	444	C	4/4	×
198	葬禮	世を去る友をば							Herr, wir bitten dich, ach denke	Bone 1852	B IV, no.376	445	d	4/4	×
199	葬禮 (小児)	しらゆりと清く	99				172		Zum Vater, der in Himmel wohnt	Heidelberg, Missionsbüchlein 1717	Fulda, 1907, 28	451	D	4/4	○
200	天國	さかえも幸も	75				7		Maria, sei gegrusset	Fulda 1778	Fulda, 1907, no.7	41	Es	4/4	○
201	天國	待てしばし		42					Des elus eternelle patrie		Paris, 18??	42	B	4/4	○
202	聖家族	ああイエズスマリア		134					Mein Testament		B IV, no.186	291	F	6/8	○
203	聖家族	憂ひ悲しみに							O ma Reine, o Vierge Marie		Paris, 19??, no/132	292	F	4/4	○
204	聖會	ほめよ稱へよ	102						Ein Haus voll Glorie schauet	Mohr 1875	B IV, no.359	31	A	4/4	○
205	救霊の水	主に頼みまつる											C	4/4	○
206	奉教の誓ひ	みすくひの水に	108								×		C	4/4	○
207	邦國のため	日出づる國							Des coueurs reconnaissants		?	32	Es	4/4	○
208	幼児の歌	をさなきを愛で		14									F	2/4	×
209	夕への歌	こよひも 仇の手より	76				176		In dieser Nacht	Mohr 1881	B III, no.161	50	D	4/4	○
210	善き終わりを願ふ	わがたまのみくになりに行く		33									A	6/8	×
211	勤行を卒へて	たふとき勤行を		133									F	4/4	×
212	聖堂を出づるとき	神よ宮を去りて		154					Dein gedenk ich, sinkt die Sonne nieder		Bocholder Melodie, 1852	22	C	4/4	×
213		バンジエ リングア	42												
214		オエス カヴァイアトルム													
215		アドロテオパニス													
216		オサルタリス	41												
217		アドロテデオテ	40												
218		パニス アンジュリクス	43												
219		タントウム エルゴ (一)	81												
220		タントウム エルゴ (二)	82												
221		タントウム エルゴ (三)	83												

	分類	公教聖歌集 (1933)	公教會聖歌集 (1918)	日本聖詠 (1907)	天主公教会 (1910)	公教聖歌 (1911)	Fulda 1891	Koln 1912	原曲 (歌詞冒頭)	典拠	先行研究 (ヘンゼラー、2002)	カトリック 聖歌集 (1966)	調性	拍子	Auftakt	
222		タントウム エルゴ (四)	84													
223		タントウム エルゴ (五)														
224		タントウム エルゴ (六)														
225		アドレムス (一)	85													
226		アドレムス (二)	86													
227		アレルヤ	87													
228		歌ミサ	96													

【付録 4】

・第 4 章で分析している聖歌に関する譜例集。

『公教聖歌集』(1933)、『公教會聖歌集』(第 5 版、1930)、『フルダ 1891』(印刷：1906) / 『ケルン 1908』(印刷：1912 頃) の順に一覧化している。

4.1.1 ミサ聖歌

第一ミサ・チクルス

1. 三位のみかみの

『公教聖歌集』(1933)

1 ミサ聖歌 (一)
ミサの始まる時

さ-んのみかみの みまへ-にふし
み-いつか しこみ へりく-だりて
く-じきみまつりを た-たへたてまつる
ちちなるみか-み このみこのた-ま
きよめて みちび-きませ

み き こ ち 稱 奇 へ 御 み 三
ち よ の ち へ し り 稜 ま 位
び よ の ち へ し り 稜 ま 位
き め 身 なる た へ し り 稜 ま 位
ま て の なる た へ し り 稜 ま 位
ま て の なる た へ し り 稜 ま 位
せ た ま みる た へ し り 稜 ま 位

『公教會聖歌集』(1930)

ミサの聖歌
1=G 88 ト調

5 | 1 1 1 3 | 3 2 2, 4 | 3 42 1 7 | 1-0
さ んのみか かのみ まへにふし
5 | 1 1 1 3 | 3 2 2, 4 | 3 42 1 7 | 1-0
み いたなか しこみへりくだりて
31 | 5 5 5 4 | 4 3 3, 31 | 5 5 5 4 | 4 3 3,
ふ かきみめ ぐみなた へたてまつる
5 | 1 1 3 5 | 5 4 2, 5 | 1 1 3 5 | 5 4 2,
ち なるみかみよつ みさかな づるし
5 | 1 7 6, 4 | 3 42 1 7 | 1-0 ||
れ ぎごさき いてよ

聴^き祈^いつ 父^ちた ふ へ 御^みみ 三^{さん}
き 求^{もと}み なる へ か り 稜^りま 位^い
容^{よう}い 請^こと なる へ か り 稜^りま 位^い
れ 願^{ねが}が 天^{てん}た み だ り 威^いへ に の
て よ を 主^{しゅ}を ま め だ り を 伏^ふか 天^{てん}
よ 赦^{ゆる}免^{めん}し る を て 伏^ふか 主^{しゅ}の

『フルダ 1891』(印刷:1906)

Zum Eingang.
G=Es Mich. Haydn. (?)

180. 1. Hier liegt vor dei-ner Ma-je-stät im
das Herz zu dir, o Gott, er-höht, die

178 2. Messgefäng.

Staub die Christen-schar, Schenk uns, o Ba-ter
Au-gen zum Al-tar. Wer = gib uns unj-ge
dei = ne Huld, O Gott, vor dei = nem
Sün-den-schuld. ver = stoß uns ar = me
An = ge = sichts Sün-der nicht, ver =
stoß uns Sün-der nicht.

2. あめにみさかえ

『公教聖歌集』(1933)

榮光の聖歌 2



あめにみさかえ
みかみにあれ
ちはよきひとに
やすけさあれ
いざみつかひの
うたにそへて
われらもみいつ
あがめまつらん

『公教會聖歌集』(1930)

榮 光

1=G 89 ト調

5 1 1 2 2 3-4, 2 3 42 1 7 1-, 0
あ めに はか みに み さか えあ れ
5 1 1 2 2 3-4, 2 3 42 1 7 1-, 0
ち に すむ ひ さは や すらかな れ
2 2 7 1 6 7 1 2, 2 2 3 1 7 6 5-, 0
あ まつ か ひの う たに そえ て
5 1 1 2 2 3-4, 2 3 42 1 7 1- 0
わ れら し み い つ あ がめ まつ る

崇 我 歌 あ 平 地 御 天
め 等 唱 ま 安 に 祭 に
ま も に つ ま 住 光 は
つ 御 添 聖 かな 住 光 天
る 稜 て 使 の れ 人 れ 主
威 の は 人 れ 主 に

『フルダ 1891』(印刷:1906)

Zum Gloria.

181. G-Es



1. Gott soll ge-prie-sen wer-den, sein Nam' im Him-mel und auf Er-den, jetzt und in be-ne-deit Lob, Ruhm und Dank und Eh-re E-wig-keit. der Drei-fal-tig-keit! Die gan-ze Welt ver-meh-re, Gott, dei-ne Herr-lich-keit.

3. 世にたまはりし

『公教聖歌集』(1933)

3 聖福音

よにたまはりしあめなるさち
 くらきををてらすおとづれなり
 みことふとみこころおきて
 ちからのかぎりまもりゆかなん

世にたまはりし
 あめなるさち
 くらきを照らす
 おとづれなり
 御言たふとみ
 こころおきて
 ちからのかぎり
 まもりゆかなん

『公教會聖歌集』(1930)

司祭が祭壇の左方にて
 福音を読む時

1=G 90 ト調

5 | 1 3 2 1 | 6-5, 5 | 67 1 2 2 | 1-, 0
 よにたまはりしあめのさちの
 5 | 1 3 2 1 | 6-5, 5 | 67 1 2 2 | 1-, 0
 よきおとづれぞやみちにて
 1 | 3 2 1 7 | 7-6, 6 | 2 1 7 6 | 5-, 0
 たふときをしへまはりまで
 5 | 1 3 2 1 | 6-5, 5 | 67 1 2 2 | 1-0||
 ましるちからなまづけたまへ

世にたまはりし
 あめの幸福の
 好きおとづれぞ
 やみ路に照る
 たふとき聖教訓
 をはりまでも
 遵守るちからを
 さづけたまへ

一一五

『フルダ 1891』(印刷:1906)

2. Messgesang. 179

Zum Evangelium.

Gesang: (Im Ton v. Nr. 184, indem die halben Noten in Viertel aufgelöst werden.) Wir sind im wahren Christentum; * o Gott, wir danken dir! * Dein Wort, dein Evangelium, * an dieses glauben wir. * Die Kirche, deren Haupt du bist, * lehrt einig, heilig, wahr. * Für diese Wahrheit gibt der Christ * sein Blut und Leben dar.

4. きよくたふとき

『公教聖歌集』(1933)

奉 献 4

二

一

あめに往くみち
きよめたまひて
わが身わがたま
わがわがたまひて
御座にをさめ
守らせたまへ

二
伊物とともにぞ
わが身わがたま
わがわがたまひて
いまささぐる

ちちなるかみよ
さづけたまへ

我がつみゆるし
常世のいのち

ささぐる御座に
受けたまひて

きよくたふとき
みいけにへを

『公教會聖歌集』(1930)

司祭パンと葡萄酒を献ぐる時

1=C 91 ハ調

34 | 5 1 5 4 | 4-3, 5 | 6 2 1 7 | 1-0
 き よくたふ さ き こ のいけに へ

34 | 5 1 5 4 | 4-3, 5 | 6 2 1 7 | 1-0
 し さいので よりう けたまひ て

5 | 2 3 4 3 | 3-2, 5 | 2 3 4 3 | 3-2,
 わ がつみゆ るじ と はのいの ちみ

34 | 5 1 5 4 | 4-3, 5 | 6 2 1 7 | 1-0 ||
 さ づけたま ひれ ち なるか み

二

一

天に往くまで
聖別め給ひて
わが身わが霊
供物と共にぞ
授けたまひね
我が罪ゆるし
司祭の手より
きよくたふとき

まもりたまへ
爾が有となし
わがものみな
さへげまつる
ちなる天主
永遠の生命を
受けたまひて
このいけにへ

『フルダ 1891』(印刷:1906)

E-Fis

182.

1. Nimm an, o Herr, die Gaben aus
wir, die gesündigt haben, weih'n

12*

180 2. Messgefäng.

deines Priesters Hand; Für Sünden hier auf
dir dies Liebespfand. in Aengsten, Kreuz und
Erden soll dies ein Opfer werden von
Wein und reinem Brot.

2. Nimm gnädig dies Geschenke, * dreieinig großer
Gott! * Erbarm dich unser, denke * an Christi Blut und
Tod. * Sein Wohlgeruch erschwinde * sich hin zu deinem
Thron; * und dieses Opfer bringe * uns den verdienten
Lohn.

5. いとしもきよき

『公教聖歌集』(1933)

5 序 唄

いともしもきよき あまつみかみ
 みさかえまよにあまねくあれ
 たへなるみいつ あめにつちに
 かちみちぬるをあふぎまつる

光^あ ち 満^あ ち ぬる を
 あ ち 満^あ ち ぬる を
 あ ち 満^あ ち ぬる を
 あ ち 満^あ ち ぬる を

た へ なる み 一 つ
 あ ち 満^あ ち ぬる を
 あ ち 満^あ ち ぬる を
 あ ち 満^あ ち ぬる を

み さ か え ま よ に
 あ ま ね く あ れ
 あ ま ね く あ れ
 あ ま ね く あ れ

い と し も き よ き
 あ ま つ み か み
 あ ま つ み か み
 あ ま つ み か み

5

『公教會聖歌集』(1930)

司祭が祭壇の中央に立ち
 聲を揚げて序説を読む時

1=G 92 ト調

5 | 1 1 2 2 | 3 - 4, 2 | 3 42 1 7 | 1 - 0
 い と し も き よ き あ ま つ み か み
 5 | 1 1 2 2 | 3 - 4, 2 | 3 42 1 7 | 1 - 0
 そ の み さ か え は よ く あ ま ね く
 2 | 2 7 1 6 | 7 1 2, 2 | 2 31 7 6 | 5 - 0
 あ め に も ち に も み ち み ち ぬ る
 5 | 1 1 2 2 | 3 - 4, 2 | 3 42 1 7 | 1 - 0 ||
 た へ なる み 一 つ あ ふ ぎ ま つ る

あ 妙^た 充^あ 天^{てん} 代^{だい} 其^{その} あ 最^{さい}
 ふ なる ち にも 々^た の ま し も
 ぎ 御^ご 満^{まん} ち 地^ち わ の 御^ご つ み き
 ま 稜^{りやう} ち ぬる にも 光^{くわう} 光^{くわう} み き
 つ 稜^{りやう} ぬる にも 榮^{えい} 榮^{えい} か み よ
 る 威^い る も は は み き

二七

『フルダ 1891』(印刷:1906)

Zum Sanctus.
 Gesang: (Im Ton von Nr. 181.) Singt: Heilig, heilig,
 heilig * ist unser Herr und Gott! * Singt mit den
 Engeln: Heilig * bist du, Gott Sabaoth! * Im Himmel
 und auf Erden * soll deine Herrlichkeit * gelobt, gepriesen
 werden, * jetzt und in Ewigkeit.

6. つみびとなる身を

『公教聖歌集』(1933)

聖變化の後 6

つみびとなる身を
すくはためにと

じふじかにつきて たがしまししちを

をしへのまにまに ひごとささげつつ

すくひのみめぐみを こひねがひまつる

6

『公教會聖歌集』(1930)

聖體奉擧後 83 二調

1=D

1 3 4 | 5-67 | 1̇7 6 | 6 5,0 | 5 2 4 | 3-5 | 64 2 | 1-0 |

つみびと なるわれら すくはため にとて

1 3 4 | 5-67 | 1̇7 6 | 6 5,0 | 5 2 4 | 3-5 | 64 2 | 1-0 |

じふじかに つきませる じゆのおみさちしほ

5 2 3 | 2-3 | 54 3 | 3 2,0 | 5 2 3 | 2-3 | 54 3 | 32,0 |

みなしへのまにまに いまなほささげて

1 3 4 | 5-67 | 1̇7 6 | 6 5,0 | 5 2 4 | 3-5 | 64 2 | 1-0 |

すくひのみ めぐみを れがひたてまつる

祈 救 今 御 主 十 救 つ
求 贖 な 教 の 字 ふ み
た の ほ 訓 御 架 た 人
て み ほ 奉 の 身 に 付 た なる
ま め 献 の ま と 付 ませ にと
つ め げ 此 血 ませ せて わ
る め げ 液 せ せて 等

二八

『フルダ 1891』(印刷:1906)

183. C-D

1. Sieh, Va-ter, von dem höch-sten Thro-ne,
Wir brin-gen dir in dei-nem Soh-ne

sieh gnä-dig her auf den Al-tar!
ein wohl-ge-fäl-lig D-e-pfer dar.

Wir flehn durch ihn, wir dei-ne Kin-der,
und stel-len dir sein Lei-den vor;

er starb aus Lie-be für uns Sün-der;
noch hebt er's Kreuz für uns em-por.

7. いざ我がのぞみ

『公教聖歌集』(1933)

7 聖體拜領前

い-ざわがのぞみ わがいのちよ
 い-さをしもなく 主をむかへな
 みをふさばしく きよめたまひて
 こ-よなきめぐみ さづけたまへ

いざ我がのぞみ
 わがいのちよ
 いさをしもなく
 主をむかへな
 きよめたまひて
 こよなきめぐみ
 さづけたまへ

7

『公教會聖歌集』(1930)

聖體を領くるを望む

1=C 94 ハ調

34	5 1̇ 5 4	4-3, 5	6 2̇ 1̇ 7	1̇-0
レ	よわがの	ぞみみ	そなはし	て
34	5 1̇ 5 4	4-3, 5	6 2̇ 1̇ 7	1̇-0
こ	ゝろなき	よめき	みなうく	る
5	2 3 4 3	3-2, 5	2 3 4 3	3-2,
い	さふさは	しきも	のさなら	しめ
34	5 1̇ 5 4	4-3, 5	6 2̇ 1̇ 7	1̇-0
た	へなるめ	ぐみま	したまひ	ね

増* た者い き と み 主)
 したへどい き と み 主)
 たへどい き と み 主)
 まなるらさふををそよわ
 ひめらしさは領くるをなはが
 ねぐめしはくるをきしての
 み

一一九

『フルダ 1891』(印刷:1906)

Gesang: (Im Ton von Nr. 182.) O Herr, ich bin nicht würdig * zu deinem Tisch zu geh'n; * du aber mach' mich würdig, * erhör mein kindlich Fleh'n. * O stille mein Verlangen, * du Seelen-Bräutigam, * im Geist dich zu empfangen, * dich wahres Gotteslamm.

第2 ミサ・チクルス

8. みいつ限りなき

『公教聖歌集』(1933)

ミサ聖祭(二) 8
入祭文より福音まで

みいつかぎりなき あめなるみちちよ
 なくすしきにへして あなたふとみこは

かしこみのらく みはけがしかれば
 いましめのらく これよわがからだ

ゆきのごときよく あらひたまへと
 いでとりくもひて いのちをえよと

三	二	一
御 ^み 聖 ^{せい} 光 ^{こう} さ ^さ ゆ ^ら ぎ	い ^い まし ^め 告 ^こ ら ^く	奇 ^き し ^き 犠 ^ぎ 牲 ^{せい} し ^て
しめし告 ^こ ぐ ^ら く	いで ^い 取 ^と り ^あ ひ ^て	雪 ^ゆ の ^ゆ き ^の よ ^く
大 ^{だい} 御 ^{おん} 座 ^ざ の ^ま へ ^に	い ^い まし ^め 告 ^こ ら ^く	か ^か し ^こ み ^の ら ^く
と ^と も ^も に ^の ぼ ^ぼ ろ ^ろ と	い ^い の ^の ち ^ち を ^を 得 ^と よ ^と	あ ^あ め ^め な ^な る ^る み ^み ち ^ち ち ^ち よ
ま ^ま こ ^こ の ^の 祈 ^{いの} り ^は	こ ^こ れ ^れ よ ^よ わ ^わ が ^が ら ^ら だ	あ ^あ ら ^ら ひ ^ひ た ^た ま ^ま へ ^へ と
煙 ^け の ^の け ^け ぶ ^ぶ り	あ ^あ な ^な 尊 ^た と ^と 御 ^み 子 ^こ は	身 ^み は ^は 犠 ^ぎ 牲 ^{せい} し ^か れ ^れ ば

8

『フルダ 1891』(印刷:1906)

F=As Fuld. G. 8

178.

1. Gott, dem un-^ser Knie sich beu-^gen
 Dank und Eh-^{re} zu er-^{zei}-gen

1. Messgesang. 173

dei-^{ner} höch-^{sten} Ma-^{je}-stät, gnä-^{dig} ze-^{ge}
 laß dir heu-^{te}

dich un-^s al-^{len}, un-^{ser} D-^{pfer} und Ge-^{bet}.
 wohl-^{ge}-fal-^{len}

2. Gott, vor dem die Engel stehen, * schau herab von
 deinen Höhen, * was vor dir der Priester tut. * Auf
 dein Wort wird er nun handeln; * Brot und Wein wird
 er verwandeln * in des Mittlers Fleisch und Blut.

9. いまはのゆふげ

『公教聖歌集』(1933)

9 奉獻より聖變化まで



1. いまはのゆふげをはりまして
 2. こはわがからだこはちしほぞ
 3. かみのひとりごはしらつかせ

かみのこひつじのりてたまふ
 とこはのかたみまもりつげと
 いきをなきみをすくひたまふ

五	四	三	二	一
すくひの わが身 わが みか み が た ま	主よ あいに しよ め な な	かみの ひとり 子 を	「こは 我が からだ か た み	いまは のゆ ふ げ を は り ま し て
くしき よめた まへ	わすれ やす る そ の み こ と ば	はしら 附 かせ す く ひ た ま ふ	こはち しほ ぞ ま も り つ げ と	宣り て 賜 ふ

9

『フルダ 1891』(印刷:1906)

197. C=D Stegntz. G. 28. 1833



1. Beim letz-ten A-bend-mah-le, die
 Nacht vor sei-nem Tod, nahm Je-sus in dem

6. Meßgefang. 199



Saa-le, Gott dankend, Wein und Brot.
 2. „Nehmt“, sprach er, „trinket, esset!“ Das ist mein Fleisch
 und Blut, * damit ihr nie vergeßet, * was meine Liebe tut.
 3. Dann ging er hin zu sterben, * aus liebevollem Sinn,
 gab, Heil uns zu erwerben, * sich selbst zum Opfer hin.
 4. O laßt uns ihm ein Leben, * von jeder Sünde rein,
 ein Herz, ihm ganz ergeben, * zum Dankesopfer weihn!

10. もろ人ひれふし

『公教聖歌集』(1933)

聖 變 化 後 10

もろびとひれふしをがみまつれ
 あもりきませるすくひぬしなり
 すくひといのちをたまへる主ぞ
 いかでかわれらまつろはでやは

いかで	救 ^{すく} ひ	天 ^{あめ} 降 ^{くだ} り	もろ人 ^{もろびと}
まつろは	た ^{たま} まへる	す ^{すく} ひぬし	をがみ
でやは	のちを	来 ^き ませる	まつれ
	主 ^{しゅ} ぞ		

10

『フルダ 1891』(印刷: 1906)

199. (Im Ton von Nr. 198.) 1. V. Christen, betet an im Glauben!
 H. Jesus, Heiland, Mittler, * wahrhaft
 hier als Gott mit uns, * Lob und Dank sei dir geweiht.
 2. V. Flehet zu ihm um Erbarmen! * H. Gnade,
 Gnade, Gnade * werd' uns Sündern durch dein Blut,
 das für uns am Kreuze floß!

11. わがたまのかて

『公教聖歌集』(1933)

11 聖體拜領前



1. わがたまのかてとこしへの主を
 2. 主にありいくるかよわきわれは

こころにうけて いのちをえまし
 そのちとにくに ちからをえまし

六	五	四	三	二	一
主 ⁽¹⁾ あらたにつくり	いざ主 ⁽¹⁾ われも身を棄て	かくもけがれし きよめたすけて	きみ我がために いけにへとたり	主 ⁽¹⁾ その血と肉に	わがたまのかて こころに受けて
全 ⁽¹⁾ 生かしめたまへ	そなへはなりぬ 新たに生きたん	いやしきわれを 賜ひしいのち	十 ⁽²⁾ 賜ひし聖 ⁽²⁾ 詞	かよわきわれは ちからを得まし	とこしへの主 ⁽¹⁾ いのちを得まし

11

『公教會聖歌集』(1930)

御聖體拜領前

1=A 105 イ調

3 4 5 | 2 1 7 | 0 3 2 1 7 | 6 1 7 6 5, 0 |
 わがきみ エズス わがあい きませ

5 6 7 | 1 1 | 2 2 3, 0 | 4 2 1 3 2 | 1 7 1 0 ||
 こころの ともさ あふぞう れしき

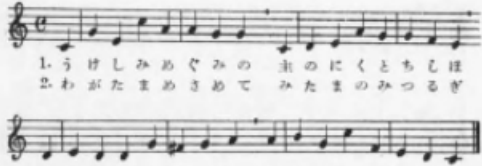
六	五	四	三	二	一
きよきみ手もて どこはの幸福を	主 ⁽¹⁾ よ來たりませ みめぐみのあめ	主 ⁽¹⁾ よこのつみに たいひとことに	こひしきわが主 ⁽¹⁾ どこはにわれど	主 ⁽¹⁾ なく生くるに いのちのきみよ	わが君 ⁽¹⁾ エズス こころのともど
われをばあらひ あたへたまひぬ	そなへは成りぬ 降らしめたまへ	けがれし身をば きよめたまひぬ	とくきたりませ すまはせたまへ	われはたへ得ず 主 ⁽¹⁾ エズス來ませ	わがあい來ませ 遭ふぞうれしき

一四七

12. 受けしめぐみの

『公教聖歌集』(1933)

聖 體 拜 領 後 12



1. 受けしめぐみの 主のにくとちしほ
 2. わがたまめさめて みたまのみつるぎ

けがしきこのみを きよめいかしめぬ
 かざしたたかはな きよきみいくさよ

<p>三</p> <p>わが主^れわがかみよ きみをとこしへに</p> <p>われをばまもりて たたへさせたまへ</p>	<p>二</p> <p>わが靈魂^らめさめて かざしたたかはな</p> <p>みたまのみつるぎ きよきみいくさよ</p>	<p>一</p> <p>受けしめぐみの けがしきこの身を</p> <p>主^れのにくとちしほ きよめ生^かかしめぬ</p>
--	--	---

12

『フルダ 1891』(印刷: 1906)

C-D Neuere Weise.

109. 

ach der H. Kommunion. Die See-le Chri-sti heil'-ge mich, der
 Leichnam Christi seg-ne mich, das Blut des Heilands
 trän-le mich, der Sei-te Was-ser rein'-ge mich.

2. Das Leiden Christi stärke mich; * o guter Jesu, höre mich; * verbiß in deine Wunden mich; * nichts trenn' von deiner Liebe mich.

3. Vom bösen Feinde schütze mich; * in meinem Tode rufe mich; * zu dir, daß ich dort ewiglich * verklärt im Himmel preiße dich.

(Obiges kann auch im Tone von Nr. 23 gesungen werden.)

4.1.2 典礼曆上の聖歌

➤ 待降節の聖歌

18. よろこびの泉

『公教聖歌集』(1933)

待 降 節 18

1. よろこびのいづみはやとくわきいで
 2. さきはひのあめよいまかふりしきり
 3. まことのひじりよあけぼのもたらし

かわけるころに おとづれたまひね
 のろはれしつちを あがひきよめこそ
 とよひかりしめ あもあやにさやに

一 よろこびの泉 早く湧きいで
 濁けるところに おとづれ給ひね

二 さきはひの雨よ 今か降りしきり
 涙はれしつちを 晴ひきよめこそ

三 まことの日知よ あけぼの甞らし
 とよ光り示せ 眼もあやに明に

四 露はみめぐみの 玉しき光たさば
 あを人草はも 息づきてあらなん

五 天なるひかりよ いざやとく来ませ
 望みいやたかく 我等まつものを

18

『公會聖歌集』(1930)

待 降 節

1=F 1 へ調

3 | 1 3 5 5 | 6 4 5, 5 | 6 4 5 4 | 3 2 3 |
 よ ろ こ び の も さ よ さ く ぐ だ り た ま へ

5 | 4 2 3 4 | 3 2 1, 1 | 3 4 5 4 | 3 2 3 ||
 の も や ま も う み も あ ふ ぎ て ぞ ま て る

六	五	四	三	二	一
天上なる光榮よ 御救拯の幸福よ	みめぐみの露よ 蒼生民衆にぞ	かやき渡れる 暗中に棲むひと	まことの生命の ころろ存分計り	あはれみの雨よ 呪はれし地をば	よろこびの源よ 野もやまも海も
われらの希望よ いまくだりたまへ	罪に枯死ぬべき 降りそぎたまへ	あまねく照明しね わまたつ御光明よ	あふるゝ清泉よ われらに飲ませよ	うるほはせたまへ あまつ大空より	疾く降りたまへ あふぎてぞ待てる

19. 闇路にさまよひ

『公教聖歌集』(1933)

19 待降節



1. やみぢにさまよひ いためるわれらは
 2. なみだのたにをば あへぎゆくぞうき
 3. あめなるみちちよ かなしむわれらの


すくひのひかりをかわきまのぞむ
 すくひのきみはもいづこにかおはす
 せちなるいのりにみかほなそむけそ

六	五	四	三	二	一
われらの望みよ 天なるすくひを	世はさながらなる 平和のほぎうた	かみ我が御神よ 絶えざるみ光り	切なるいのりに あめなる御父よ	なみだの谷をば 救ひのきみはも	闇路にさまよひ すくひの光りを
永久の慰さめよ とく降したまへ	たたかひの巻 響くぞ待たるる	とく降したまへ ねばたまの闇に	かなしむ我等の み顔なそむけそ	喘ぎゆくぞ憂き いづこにか在す	傷めるわれらは かわき待ち望む

19

『フルダ 1891』(印刷:1906)

D-D Rheinfels. G.-B. 1698

2. 

1. O Heiland, reiß den Him-mel auf, her-ab, her-ab vom Himmel lauf; reiß ab vom Him-mel Tür und Tor, reiß ab, wo Schloß und Rie-gel vor!

2. Gott, einen Tau vom Himmel gieß, * im Tie-herab, o Heiland fließ! * Ihr Wolken, brecht und regn-aus * den König über Jakobs Haus!

3. O Erd', schlag aus, schlag aus, o Erd', * die Berg und Tal erneuert werd'! * O Erd', hervor die Blümlein bring, * o Heiland, aus der Erd' entspring!

Advent 3

4. Wo bleibst du, Trost der ganzen Welt, * darauf die Welt all' Hoffnung stellt? * Ach komm, ach komm vom höchsten Saal * und tröst' uns in dem Jammertal!

5. O klare Sonn', o schöner Stern, * dich wollen wir anschauen gern; * o Sonn' geh auf! Dh'n' deinen Schein * wird Finsternis ohn' Ende sein.

6. Hier leiden wir die größte Not, * vor Augen steht der en'ge Tod; * ach komm, führ uns mit starker Hand * vom Glend in das Vaterland.

20. み恵み降らせよ

『公教聖歌集』(1933)

待 降 節 20

1. みめぐみふらせよ おほざらのくも
2. ひじりらのいのり あめにひびかひ

あまといでまして メシアよきませ
つかひはマリアに おくられにけり

けがれにしづめるよをあがひたまふ
みたまのちからやをとめにやどりて

きみをばみまくたのいのれーばー
かみのみこそあもりましーかー

三 二 一

来たりいきづけ
この庭のべに
眞理のまひかり
あさひと照りぬ
愛といのちなる
あめつゆ繁に
かみの御子こそ
天降りまししか
聖靈のちからや
處女にやどりて
天使はマリアに
おくられにけり
聖者等のいのり
あめに響かひ
きみをば見まく
たみのいのれば
汚れにしづめる
世を晴ひたまふ
天戸いでまして
救主よ來ませ
み恵み降らせよ
大ざらのくも

20

『公教會聖歌集』(1930)

1=C 4 ハ調

5 4 | 3 3 3# 4 | 5 5, 4 4 | 3 16 53 42 | 3-
メシ アをふら せよみそ らのくも よ

5 5 | 1 7 6 5 | 5# 4, 6 1 | 7 13 27 16 | 5-
あめ のさひら きてみす くひくだ せ

5 4 | 3 3 6 5 | 5 4, 4 3 | 2 2 5 4 | 4 3,
つみ さがにし づむよを あがなへ よこ

3 4 | 5 5 6 7 | 1-, 1 6 | 5 3 54 32 | 21 ||
むか しのひじ り よすがら れぎ ぬ

三 二 一

いざみなうたへ
生命をあたふる
朝日のひかりは
御恩龍の雨露は
みかみのまな子
聖靈の御ちから
天使マリアに
あつきその祈禱
むかしの聖人等
罪とがに沈淪む
天の戸ひらきて
メシアを降らせよ

こゑたからかに
清泉をあふる
晴き世照らし
天より降り
入胎させたまふ
その身に降りて
告げにしく
天に聴えて
夜すがら祈求ぬ
世を贖なへよと
み救ひくだせ
天空の雲よ

五

『フルダ 1891』(印刷:1906)

G.G. Neuere Melodie.

3b.

„Taufet, Himmel, den Gerechten; Wolken, regnet ihn her-ab!“ rief das Volk in bangen Nächten, dem Gott die Verheißung gab, einst den Mittler selbst zu sehen und zum Himmel ein-zu-gehen; denn verschlossen war das Tor, bis ein Hei-land trat her-vor.

2. Gott der Vater ließ sich rühren, * daß er uns zu erretten sann; * und, den Rat-schluss auszuführen, * trug er Sohn sich selber an. * Schnell flog Gabriel her-ieder, * brachte diese Antwort wieder: * „Sieh, ich bin es Herren Wagn, * mir gescheh', wie du gesagt!“

3. Da die Botschaft angekommen, * w v Maria im Bebet; * als das Wort Fleisch angenommen, * ging sie zu Elisabeth. * Von dem ersten Gruß durchdrungen, * ist Johannes aufgesprungen, * der von Gott geheiligt war, * h' die Mutter ihn gebar.

4. Dieser ließ die Stimm' erschallen: * „Sünder, wach vom Schlummer auf; * denn es naht das Heil uns allen, * hemmet euren Sündenlauf!“ * Brüder laßt zu diesen Zeiten * uns das Herz zur Buß' bereiten; * wandelt auf der Tugend Bahn, * ziehet Jesum Christum an.

5. Laßt uns wie am Tage wandeln, * allzeit auf den Herrn bereit; * suchet, um gerecht zu handeln, * Wahr-heit, Fried' und Einigkeit, * jenem gänzlich nachzuleben, * der uns allen Trost gegeben, * daß wir froh von hin-ner gehn, * ihn im Himmel selber sehn!

22. 来ませ救ひ主

『公教聖歌集』(1933)

22 待降節

1. 来ませすくひぬし あめのかどいでて
 2. 来ませ救ひ主 天の門いでて
 3. 来ませ救ひ主 愛のみ翼に

我等を育くみ 涙ぬぐひませ

23

『公教會聖歌集』(1930)

1=G 2 ト調

3 | 4 3 2 1 | 1 7 6 7, 1 | 2 3 5 4 3 | 2 1 2 3,
 や や す く ひ ぬ し よ さ く あ も り ま し て
 3 | 4 3 2 1 | 1 7 6 7, 3 | 6 7 1 2 3 | 2 1 7 6,
 つ み さ が に し づ む わ れ ら た す け ま せ
 (折返し)
 5 | 1 2 3 4 | 3 2 1, 1 2 | 3 3 6 7 | 1 7 6 ||
 よ ろ こ べ も ろ び さ す く ひ ぬ し き た ま ふ

一 や や す く ひ ぬ し よ 疾く降りまして
 つ み さ が に 沈 淪 せ 我 等 た す け ま せ
 (折返し) 喜 べ も ろ 人 救 ひ 主 来 た ま ふ

二 や や す く ひ ぬ し よ 君 が ひ か り も て
 や み 路 に さ ま よ ふ 民 等 照 ら し ま せ

三 や や す く ひ ぬ し よ 今 疾 く 天 降 り て
 か な し み の な み だ 拭 ひ 取 り た ま へ

『ケルン 1908』(印刷:1912頃)

Mr. 6a. 6=F. 3/4 1. O komm, o komm, Em-ma-nu-

el, Nach dir sehnt sich dein Is-ra-el! In

3 | 4 3 2 1 | 1 7 6
 1 | 2 3 5 4 3 | 2 1 2 3 |

28 Adventslieder.

4 3 2 1 | 1 7 6 7 3 | 6 7
 Sünd' und Elend wei-nen wir Und seh'n und
 1 2 3 | 2 1 7 6 5 | 1 2 3 4 |
 seh'n hin-auf zu dir. Freu dich, freu dich, o
 3 2 1 | 1 2 | 3 3 6 7 | 1 7 6 ||
 Is-ra-el! Bald kommt, bald kommt Emma-nu-el.

2. O komm, du wahres Licht der Welt, *
 Das uns're Finsternis erhellst. * Geh auf, o
 Sonn', mit deiner Pracht, * Zerstreu den
 Rebel und die Nacht! — R. Freu' dich zc.

3. O komm, du holdes Himmelkind, *
 Und rett uns von dem Fluch der Sünd'! * Wir
 seuffzen tief in schwerer Schuld, * O bring uns
 deines Vaters Huld. — R.

4. O komm, Erlöser, Gottes Sohn, *
 Und bring uns Gnad' von Gottes Thron! * Mit
 Davids Schlüssel niedersteig, * Schließ auf,
 schließ auf das Himmelreich! — R.

5. Komm, starker Gott, Gott Sabaoth, *
 Mach frei dein Volk von aller Noth! * Mit
 Jesses neuem Herrscherstab * Treib weit von
 uns die Feinde ab! — R.

➤ キリスト降誕に関する聖歌

23. 更ゆく静寂を

『公教聖歌集』(1933)

御 降 誕 23



四

いく年かぞへて おもひ出うれしみ うたひや明かす

代々のその日 主を偲ぶ我等 直にあふまで

三

ゆめなやぶりそ まふねに在はして

いまは馬屋の 熟睡ぞ安けき 上るのあらし

二

神には みさかえ とこしへなれとふ 定するまきもり

地にはやすき 歌を著けみ 主をやりし

一

更ゆく 静寂を はるかにきこえく みつかひやうたふ

まきのそらゆ 妙なる祝歌 しらべぞよき

24

『公會聖歌集』(1930)

1=B 8 調 $\frac{6}{8}$

5.6 5 3., | 5.6 5 3., | 2̇ 2̇ 7., | 1̇ 1̇ 5., | 6 6

しづけき まよなか まきば のそら はる

1. 7 6 | 5.6 5 3., | 6 6 1. 7 6 | 5.6 5 3., |

かにき こゑくる みつかひの ほぎうた

2̇ 2̇ 4. 2̇ 7 | 1. 3., | 1. 5 3 5. 4 2 | 1. 1 0 ||

すくひぬしこそ いまあれませ

三	二	一
しづけきまよなか たふときみどり子の いどいみじくも	しづけきまよなか 身に浸む寒冷氣をも 聖子のすがたの	静寂けき真夜なか はるかに聞こえ来る 「すくひぬしこそ
来たりあふげ いつくしみの光明 やみをぞ照らす	知らぬ顔に睡むる いとやかしこき	まき場の大空 聖天使の祝ぎうた いま生れませ」と

24. きけ妙なるしらべ

『公教聖歌集』(1933)

24 御降誕

しきけたへなるしらべ よろこびのこゑを
 聖をとめこそはマリア まづしきうまやに
 ひなにもみやこにも ひびかふそのうた
 たびのやどりさむみ みこはあれましぬ
 ちちのみちかひなりて きよけきをとめ
 あめつちつくりしきみ かよわきたみの
 うるはしきみこをぞあげさせたまひし
 こころにきたりてしあみやぞかしこき

一 きけ妙なるしらべ
 御にもみやこにも
 父のみ響ひなりて
 聖はしき御子をぞ
 處女こそはマリア
 たびのやどりさむみ
 あめつち造りし君
 こころに來りてし
 曙光ほのぼのと
 御民のかなしみは
 のぞみとあいと信
 世は常しなへなる

二 上りしきうまやに
 み子は生ましぬ
 かよわきたみの
 宮居ぞかしこき

三 夜は明はなれて
 よろこびに變り
 ゆたかくそだち
 春をぞことほぐ

25

『フルダ 1891』(印刷：1906)

Weihnachten. C-D Jub. G. B. 1778.

9.

1. Auf! Christen, singt fest-liche Lie-der und
 Es schal-le auf Er-den laut wie-der süß-
 jauchzet mit fröh-li-chem Klang! Der Va-ter hat
 tö-nen-der Zu-bel-ge-sang! Der Va-ter hat
 un-ser Ver-lau-gen und sei-ne Ver-hei-ßung er-

Weihnachten. 11

fällt; der Hei-land, nach welchem wir ran-gen, er-
 schei-net im Flei-sche ver-hüllt.

2. Im Stalle bei Bethlehems Thoren * hat mitten in
nächtlicher Zeit * Maria, die Jungfrau, geboren * den
Heiland, der alle erfreut. * Dies schönste der menschlichen
Kinder * ist Gott, in der Menschheit Gewand; * es ward
uns als Mittler der Sünder * aus göttlicher Liebe gesandt.

3. Dies große Geheimnis erklären * die Engel den
Hirten im Feld; * sie singen dem Schöpfer zu Ehren *
und singen vom Frieden der Welt. * Es eilen aus Beth-
lehems Thuren * die Hirten zum Stalle geschwind * und
werden auf englischen Spuren * geleitet zum göttlichen
Kind.

4. O, laßt uns in ihre Gesänge * einstimmen mit fröh-
lichem Ton, * erwidern die himmlischen Klänge * und
singen dem göttlichen Sohn, * die Krippe kniefällig um-
ringen, * in welcher der Heiligste liegt, * die Herzen
zum Opfer ihm bringen, * der alles mit Liebe besiegt.

5. O ewiger, himmlischer König, * der du alle Welten
erschufst, * ist's denn deiner Liebe zu wenig, * daß du in
das Leben uns ruffst? * Muß selbst deine Gottheit sich
neigen * zur niedrigen Knechtesgestalt? * Wer könnte
mehr Liebe erzeigen? * O Wunder der Liebesgewalt!

6. Was atmet, soll alles dich loben, * dich, Herr auf
dem himmlischen Thron. * Du sendest uns Sündern
von oben * den ewigen göttlichen Sohn. * Gib, daß
wir stets besser erkennen, * wie innig uns Jesus geliebt; *
gib, daß wir vom Bösen uns trennen, * und meiden,
was Jesus betrübt.

26. みそらゆく

『公教聖歌集』(1933)

26 御降誕

1. みそらゆく みつ - かひの
 2. よるののにと き - ならでし
 3. やよこらよすく - ひぬし

つばさか はし りよきおとづれにと
 かがま やひくち にそあ れます

も た ら し つ つ く だ り ぐ る
 ゆ め や は た ぶ る ぞ あ ま ま ば つ か ひ

四 三 二 一

へりく 四 わが 三 「や 二 ゆめ 一 みそら
 だりて みつか 告ぐる うま や 輝よ りの りゆく
 来よ こころ は誰ぞ あま 破る るに とく つかひ
 吾が 光り 生ます ます きの とく だり 来
 待で 出きと ずかひ とり にも りに 来
 てば よき ぞと ぬし たり なら だり 来
 ばよき かと ぬし たり なら だり 来

27

『公教會聖歌集』(1930)

I=C 9 調4

1 | 1-3 4 | 5-0 i | 72 5#4 | 5-0
 み そら よ り ひ か り み ゆ

5 | i-2 7 | i-5, 5 | i-2 7 | i-5,
 き け み つ か ひ か な し き よ に

5 | 3-3 4 | 5-5, i | 2-i 7 | i-0||
 よ る こ び な ば つ ぐ る こ ろ

四 三 二 一

身も靈魂をも 召されにし いづきまつれ
 永遠無窮に さへげつゝ

天主の子等 馬槽にます すくひぬし

いざいそげ うまやのなか みどり子こそ

あなうれし 馬槽にます すくひぬし

いどゆたけき 聖旨にかなふ

さかえあれ 人びとには めぐみあれ

「みかみには 聖旨にかなふ」

よるこびをば

さかえあれ 人びとには めぐみあれ

みそらより きけみつかひ よるこびをば

ひかり見ゆ 悲しき世に 告ぐるころ

『ケルン 1908』(印刷:1912頃)

11. ^{1=C}/₄ 1 | 3 3 4 | 5 . i | 7 2
 1. O se = li = ge Nacht! In himm =
 5 4 | 5 . 5 | i 2 7 | i 5 5 |
 li = scher Pracht Er = scheint auf der Wei = de Ein
 i 2 7 | i 5 5 | 3 3 4 | 5 5 i |
 Bote der Freude, Den Hir = ten, die nächstlich die
 2 i 7 | i ? ||
 Her = de be = wacht.

2. Wie tröstlich er spricht: * „D, fürchtet euch nicht! * Ihr waret verloren, * Heut' ist euch geboren * Der Heiland, der allen das Leben verspricht.“

3. „Seht Bethlehem dort, * Den glücklichen Ort! * Da werdet ihr finden, * Was wir euch verkländen, * Das sehnlichst erwartete göttliche Wort.“

4. Voll Freuden sie sind, * Sie eilen geschwind * Und finden im Stalle * Das Heil für uns alle: * In Windeln gewickelt das göttliche Kind.

5. Gilt, Christen, geschwind * Zum göttlichen Kind. * Gilt, Fromme und Sünder, * Gilt, Eltern und Kinder, * Ihm weihet die Herzen, von Liebe entzünd't.

Weihnachtslieder. 35

6. O tröstliche Zeit, * Die alle erfreut! * Du linderst die Schmerzen, * Du weckst die Herzen * Zum Danke, zur Liebe, zur himm = lischen Freud'.

27. あれ聞こゆる歌

『公教聖歌集』(1933)

御 降 誕 27

1. あれきこゆるうたあめよりぞもるる
 2. よをすくひのかみけふあれましぬと
 3. みあれのよはにはひつじはのにあり

かみにはきかえちにはよるこび
 ひつじかひたちしめされしめし
 ほしほみそらにあはれときよの

とこしへにてあれかしと
 うちみみてかかめぐる
 みすくひのさちをつぐ

五 四 三 二 一

あれ聞こゆる歌
 かみにはさかえ
 とこしへに
 世をすくひの神
 ひつじかひたち
 うち笑みて
 降誕の夜には
 ほしはみそらに
 みすくひの
 み生のありしは
 見よ見よ御母
 いざ入りて
 あやに畏しと
 ぬかつくわらべ
 きよくこそ

天よりぞもる
 地にはよろこび
 あれかしと
 けふ生ましぬと
 示されしめし
 かけめぐる
 羊は野にあり
 あはれ時世の
 さちを告ぐ
 この御誕なりや
 御子とまに在す
 ふしをがまん
 御子の稜威ほめ
 なみだや落つる
 さきくこそ

28

『ケルン 1908』(印刷: 1912 頃)

1=G. $\frac{3}{4}$ Nr. 20. $\frac{3}{4}$ 1. $\left\{ \begin{array}{l} \text{Laßt uns das Kind=lein grü=} \\ \text{Und sal=ten ihm zu Fil=} \end{array} \right.$

3 ? $\left\{ \begin{array}{l} \text{Laßt uns im Geist uns} \\ \text{ben;} \end{array} \right.$ $\left\{ \begin{array}{l} \text{Das Kind=lein be=ne=} \end{array} \right.$

44 Weihnachtslieder.

3 . 1 | 2 ? :|| 1 | 5 6 7 | 1 . 3 |

freu = = en, } R. D. Je=ju=lein süß, o
 bei = = en! }

4 3 2 | 1 ? ||

Je=ju=lein süß!

2. Laßt uns dem Kindlein singen, * Ihm Dank und Opfer bringen; * Laßt uns das Kindlein ehren * Und seine Gnad' begehren, * R. D. Jesulein etc.

3. Laßt uns das Kind erfreuen, * Ihm unsre Herzen weihen; * Und laßt uns Leib und Leben * In seine Hände geben. * R.

4. Laßt uns das Kindlein lieben, * Mit Sünden nie betrüben, * In Freuden und in Leiden * Vom Kindlein nimmer scheiden. * R.

5. Laßt uns sein' Diener werden, * So lang wir sind auf Erden; * Es wird uns einst belohnen * Mit ew'gen Himmelskronen. * R.

31. やみに棲むひと

『公教聖歌集』(1933)

御 降 誕 31

1. やみにすむひとよるこびのくにの
 多しかげゆくひといのちのしのみづの
 みただしきとあーいもたらしたまへる

あけゆくみそらにはなてよーまーなめこ
 わきいづるみみずやむすびてーのーのなれ
 すくひのみここそとははきーみーなれ

五 四 三 二 一

愛しけやし御子 かみにはさかえ ただしきとあい 死 臨ゆくひと やみに棲むひと
 石づあしかたく 聲もたからかに 救ひの御子こそ 湧出づる見ずや 明けゆくみ空に

たのしき國をば 人にはめぐみと とはの王なれ いのちの清水の よるこびの國の
 まもりたまひね うたふを聞けや 擲びてのめよ 放てよまなこ

32

『公教會聖歌集』(1930)

聖 主 御 誕 生

1=C 5 ハ調

i | 7 6 7 5 | 6 7 i, i | i 5 5 34 | 5 4 3,
 く ら き に す む ひ さ さ く き た り あ ふ げ

3 | 6 6 5 7 | i 6 5, i | 7 6 5 6 | 4 3 2 1 ||
 す く ひ の あ ま つ ひ い ま ぞ の ぼ り ま す

四 三 二 一

神には御榮光 天主の獨り子 死の蔭行く人 闇裡に棲む人
 唱ふる天使と 凡てのもの皆 生命の眞清水 救ひの天津日

人にはめぐみと 今夜ぞ生れます 疾く來り擲飲べ 疾く來り仰望げ
 共に讃めうたへ 御前にひれ伏せ 今ぞ湧き出づる 今ぞのぼります

六

『フルダ 1891』(印刷:1906)

14 Weihnachten.

Beifentritt 1567.

12.

1. Es kam ein En-gel hell und klar von
 Gott aufs Feld zur Hir-ten-schar; die wur-den bald gar
 hoch er-streut, der En-gel sprach mit Fröh-lich-keit:

2. „Vom Himmel hoch, da komm' ich her * und bring' euch viel der guten Mähr, * der guten Mähr bring' ich so viel, * davon ich singen und sagen will.

3. „Der gnäd'ge Gott im höchsten Thron * hat euch gesandt den lieben Sohn; * der ist euch heut ein Mensch gebor'n * von einer Jungfrau auserlor'n.

4. „Zu Bethlehem in Davids Stadt, * wie euch die Schrift verheissen hat, * da ist der Heiland Jesus Christ; * drum fürcht't euch nicht zu dieser Frist!

5. „Das neugeborne Kindelein * liegt dort in einem Krippelein; * mit Luchlein ist da eingehüllt, * der alle Ding' mit Kraft erfüllt.“

6. Darnach kam eine große Schar * der lieben Engel hell und klar, * die fangen gar ein schönes Lied * und freuten sich von Herzen mit.

7. Sie sprachen: „Gott sei Preis und Dank! * Ihm singen wir den Lobgesang; * den Menschen sei auf Erden Fried'. * Wohlauß, singt all' ein neues Lied!“

8. Die Hirten gingen allgemein * und suchten dieses Kindelein; * sie fanden's, wie der Engel sagt, * mit Maria, der reinen Magd.

9. Willkommen feist du, Kindelein zart, * wie liegst du elend hier und hart! * Du König, Schöpfer aller Ding', * hält dich dein Volk so gar gering!

10. „Hast du denn sonst kein' Herberg hie, * daß du
mußt liegen bei dem Vieh? * Dein Kissen ist das dürre
Gras, * davon ein Ochs und Esel aß!

11. „Der Sammet und die Seiden dein * sind gar
geringe Windelein; * ach, dein' Geburt, wie arm und
schlecht! * So sagte uns der Engel recht.

12. „O liebes Kindlein, bloß und arm, * dich unser
aller heut erbarm, * wir wollen dir auch dienen gern *
als unserm wahren Gott und Herrn.“

13. Gelobet sei der höchste Gott, * der uns erlöst aus
aller Not; * ihm singen wir mit Innigkeit * Lob, Preis
und Dank in Ewigkeit.

35. いざ世のとも

『公教聖歌集』(1933)

御 降 誕 35

1. いざよのとーも りからやから
 らちむれつどへべートレヘム
 すくひぬしけふあれましぬ
 きたりてをがめきたりてをがめ
 きたりてをがめキリストぞ

四	三	二	一
か が や き の	愛 の み か み ぞ	世 の 恐 し き は	い ざ 世 の と も
こ そ 建 て れ	し り へ に 退 き	い で し 光 り を	打 ち む れ 集 へ
	あ と も な し	夜 は 明 け ゆ き	す く ひ ぬ し
	あ と も な し	あ と も な し	け ふ 生 ま し ぬ
	あ と も な し	あ と も な し	キ リ ス ト ぞ
	あ と も な し	あ と も な し	キ リ ス ト ぞ

36

37. みまやの燈火

『公教聖歌集』(1933)

御 降 誕 37

1. みまやのともしびかそけくゆらぎて
 2. あとにはちちははめぐしみこまもり
 3. あらしなさわぎそなみなうちよせそ

ひつじかひたちみかみをほめつつ
 さしくるなみだもとどめあへまさで
 まづしくはあれどよろこびあふるる

かへりゆくよはしづか
 たふとしとのらせたまふ
 きよきさちさきくあれ

三	二	一
きよきさち	「たふとし」と	みまやの燈火
貧乏はあれど	「たふとし」と	羊飼ひたちは
よろこび溢るる	宜(よろこ)ませたまふ	み神をほめつつ
波なうちよせそ	止(とど)めあへまさで	夜はしづか
	愛(あ)ぐし御(ご)子(こ)守(まも)り	幽(か)げくゆらぎて

『フルダ 1891』(印刷: 1906)

F-G Köln. G.-B. 1619.

16.

1. Laßt uns das Kindlein grüßen,
 ihm unser Herz aufschließen,
 mit Andacht es erfreuen,
 von Herzen beneiden, o Jesulein

すい、o Jesulein すい!

2. Laßt uns dem Kindlein neigen, * ihm Lieb' und
 Dienst erzeigen; * laßt uns hoch jubilieren * und ge-
 lich triumphieren.

3. Laßt uns dem Kindlein singen, * ihm unser Op-
 bringen, * ihm alle Ehr' beweisen * mit Loben und
 Preisen.

4. Laßt uns zu seinen Füßen * Haupt, Herz und
 Hand begrüßen, * anbeten und verehren * und sein
 Gnad' begehren.

5. Laßt uns sein' Diener werden, * so lang wir
 auf Erden; * es wird uns reichlich lohnen * mit
 verweilten Kronen.

6. Laßt unsre Stimme schallen, * es wird dem
 gefallen; * o macht ihm alle Freuden, * bald will
 um uns viel leiden.

38. 救ひの御子は

『公教聖歌集』(1933)

38 御降誕

1. すくひのみこはくだりませり
 2. あまつみかみのみめぐみをば
 3. まぶねにいますかみのみこを

いざもろともーにうたひまつら
 こぞりてわれーらたたへまつら
 ときはかきはーにあいしまつら

よるこーびりーたひーまつら
 よるこーびたーたへーまつら
 よるこーびあーいしーまつら

四	三	二	一
よるわが尊とき御子の こ身わが御子の び	よるときは堅磐に こ	よる舉りてわれら こ	よる救ひの御子は 共
ささげ奉らん みまへに伏し 献げまつらん	あいし奉らん 愛しまつらん かみの御子を	たたへ奉らん 讃(まつ)らん みめぐみをば	うたひ奉らん 歌ひまつらん くだりませり

39

『フルダ 1891』(印刷: 1906)

13. C-C Kölner Psalter 1638.

1. Zu Beth-le-hem ge-bo-ren ist uns ein Kindelein; das hab' ich auser-lo-ren, sein eigen will ich sein, e = ja! e = ja! sein ei-gen will ich sein.

2. In seine Lieb' verjerten * will ich mich ganz hinab; * mein Herz will ich ihm schenken * und alles, was ich hab', * eja! und alles 2c.

3. O Kindelein, von Herzen * will ich dich lieben sehr, * in Freuden und in Schmerzen, * je länger mehr und mehr, * eja! je länger 2c.

4. Dazu mir Gnade gebe, * bitt' ich aus Herzens-grund, * daß ich allein dir lebe * jetzt und zu aller Stund', * eja! jetzt und 2c.

5. Dich wahren Gott ich finde * in meinem Fleisch und Blut; * so fest auch mich verbinde * mit dir, mein höchstes Gut, * eja! mit dir 2c.

16 Weihnachten.

6. Laß mich von dir nicht scheiden, * knüpf zu, knüpf zu das Band, * die Liebe zwischen beiden; * nimm hi mein Herz zum Pfand, * eja! nimm hin 2c.

41. ゆふやみせまる

『公教聖歌集』(1933)

御 降 誕 41

1 ゆふやみせまる ダビドのむら
2 ともしびきえて さとびといね
なれぬたびぢにつかれしみを
たまのひかりはさしいできぬ
をとめマリア いこはせたまる
かみのみこぞ マリアはえある
うまやのうち
ははたりたまふ

四 語りつたへなん
くすしき御子よ
いざやもろびと
うたひまつれ
美し母よ
をがみまつる

三 ひつじかひ等は
そらより告ぐる
ふけゆく夜半
そのよるこび

二 ともしび消えて
かみの御子ぞ
さし出で来ぬ
さとびと寝ね

一 なれぬたびぢに
をとめマリア
うまやのうち
つかれし身を
ダビドのむら

『公教會聖歌集』(1930)

天 使 祝 詞 53 ~調1

1=F

5 | 5 5 6 5 | 5 - 3, 4 | 3 2 1 7 | 1 -, 0
み めぐみ、 てる み は、マ リ ア
5 | 5 5 6 5 | 5 - 3, 4 | 3 2 1 7 | 1 -, 0
い まじと、 も に し、ぞ ま し ま す
3 | 2 7 1 6 | 5 -, 0 5 | 5 5 6 5 | 5 - 3,
な みなのう ち な れ に す ぐ れ じ
4 | 3 2 1 7 | 1 - 0 ||
も の は あ ら じ

三 二 一

御身とふかき 罪いとふかき 罪いとふかき 御母マリアよ 平生の日に
御恩籠満てる 御身とふかき 御母マリアよ 平生の日に
御恩籠満てる 御身とふかき 御母マリアよ 平生の日に
御恩籠満てる 御身とふかき 御母マリアよ 平生の日に

六八

『フルダ 1891』(印刷:1906)

12 Weihnachten. C-B 851n. G.-B. 1599.

10.

1. Es ist ein' Ros' entsprungen aus einer Wurzel
wie uns die A-ten sun-gen; aus Jese kam die
zart und hat ein Blümlein bracht mitten im kalten
Art, Win-ter wohl zu der hal-ben Nacht.
2. Das Röslein, das ich meine, * davon Isaias sagt, *
Maria ist, die Reine, * die uns das Blümlein bracht. *
Aus Gottes ew'gem Rat * hat sie ein Kind geboren *
und blieb doch reine Magd.
3. Das Kind hat sie empfangen * aus heil'gen Geistes
Kraft; * Gott Sohn kam mit Verlangen * zur reinen
Jungfrauschafft. * In einem armen Stall * ward uns
der Fürst geboren, * der uns macht selig all.
4. Den Hirten brachte Kunde * davon ein englisch
Heer * und sagte, wo zur Stunde * Christus geboren
wär'. * Zu Bethlehem im Stall * das Kind alsbald sie
fanden, * gar hoch sich freuten all.
5. Das Kindlein ward genennet, * wie es der Engel
lehrt; * sein Nam' ist wohl bekennet * im Himmel und
auf Erd. * Es Jesus ist genannt. * In diesem süßen
Namen * man alles Gut befand.
6. Ein Stern mit hellem Scheine * drei König' führt
geschwind * aus Morgenland mit Eile * zum neugebornen
Kind; * sie brachten reichen Sold * und opferten mit
Freuden * ihm Weihrauch, Myrr'h'n und Gold.
7. Lob, Ehr' sei Gott dem Vater, * dem Sohn und
heil'gen Geist! * Maria, Gottes Mutter, * dein' Hilf'
an uns auch leist * und bitt dein' liebes Kind, * daß
es durch seine Güte * zu Hilf' uns komm' geschwind.

42. あふぐもたふとし

『公教聖歌集』(1933)

42 聖名

1. あふぐもたふとし みこイエスのみな
 出うたへどつきせぬ こほしきそのみな
 かわするるときなく よもひもおもひて

いづこにあるべき きみにまさるなは
 うたへどらたへど あかぬことばかも
 わがむねをどるよ かみのみななれば

一 あふぐもたふとし み子イエスの御名
 いづこにあるべき きみにまさる名は

二 うたへどつきせぬ 戀ほしきその御名
 うたへどらたへど あかぬ「言」かも

三 わするるときなく 夜も目もおもひて
 わがむねをどるよ かみの御名なれば

四 その名はいく千代 へりくだるひとの
 むねよりむねより ひびかひ響かふ

五 かばかりたふとき イエスの御名をば
 すくひのちからと われら仰ぎゆかん

六 ちちみこみたまの 三つのくらゐなる
 かみの御名にこそ 世々みさかえあれ

『公教會聖歌集』(1930)

イエスの聖名

1=D 12 =調

5 5 6 | 5-3 | 2-2 | 3-0 | 3 4 5 | 6-5 |
 じゆのみ なを じる は まこと のよ

5-4 | 3-0 | 2 2 3 | 2-7 | 6-6 | 5-0 |
 るこ び これに まさ りた る

5 5 5 | 6-5 | 5-4 | 3-0 ||
 よるこ び あ ら じ な

一 主の聖名を知るは まことのよろこび
 これにまさりたる よろこびあらしな

二 うたへよたへよ こゑもたからかに
 斯ばかりたふとき 我が主の聖名をば

三 悔ひしころもて いのりもとむれば
 みかほのひかりを あふがしめたまふ

四 つたなきわれらが ことばに盡くせじ
 たへなる主のあい ぐすしき御めぐみ

五 わが君イエスぞ われらのよろこび
 ちち主のさかえ 世々のほまれなる

『フルダ 1891』(印刷:1906)

23. G-A Neuere Melodie

1. Je-su, wie süß! Wer dein ge-denkt
 sein Herz in Freu-den wird ver-senkt; doch sü-ß
 ü-ber al-les ist, wo du, o Je-su sel-ber bist

2. Kein Lied so süß zum Herzen dringt, * kein klar
 kein Ton so lieblich klingt, * so wonnig kein Gebet
 ist, * als Gottes Sohn, Herr Jesus Christ.

3. Dem Sünder bist du Trost und Ruh, * wer d
 begehrt, dem rufst du zu, * wer dich nur sucht, der
 dich schon, * und wer dich find't, o weich ein Lohn!

4. Kein Mund es je aussprechen kann, * kein We
 kein Lied kann's zeigen an, * nur wer's erfährt, d
 weiß dabei, * was Jesum lieben Süßes sei.

5. Wer Jesum liebt, trinkt Seligkeit * vom Leber
 quell der Gnigkeit, * hat immer Licht und hellen Tag
 weiß nicht, was er noch wünschen mag.

6. O Jesu, dich will suchen ich * im Herzen still und
 öffentlich, * am Abend und im Schlaf der Nacht, * und
 morgens, wann der Tag erwacht.

7. Will suchen dich und rufen dir * im Tempel und
 an Grabes Tür, * will fassen deinen Kreuzestamm *
 und sein zu dir, o Gotteslamm.

8. O Jesu, höchste Gültigkeit, * du Hoffnung aller
 Traurigkeit, * du Gnadenbrunn, du Selengut, * o Lieb'
 in unserm Fleisch und Blut!

9. O gib von dieser Liebe dein, * gib, Jesu, mir ein
 Tröpflein; * dich ruf' ich, Jesu, tausendmal, * wann
 kommst du, Herr, vom Himmelsaal!

10. Wann kommst du, Lust der Seele mein, * mein
 Lob', mein Ruhm, mein Trost allein, * du aller Lieb'
 Vollkommenheit, * der ganzen Welt Glückseligkeit!

11. Schon fühl' ich dich, schon halt' ich dich; * o Jesu,
 Gott, wie liebst du mich! * Was ich begehrt, genieß' ich
 schon, * mein Herz glüht auf von Liebestohn.

12. O Herr, wie süß, o sel'ge Blut! * O Jesu, Jesu,
 höchstes Gut! * Bleib' wohnen, Herr, sprich, was ich
 soll; * die Seel' ist aller Gnaden voll.

13. Wohin du willst, ich folge dir, * nichts soll fortan
 dich rauben mir; * mein Herz ist dein, bewahr es dir, *
 o liebster Jesus, bleib bei mir!

44. 光りもくすしき

『公教聖歌集』(1933)

44 三王來朝

1. ひか-りもくす-しき ほしにみちび-かれ
 2. はる-けきたび-ちを ペトレ-ムに-こて
 3. ひか-るのや-しろ みた-りかしこ-みて
 みた-りのほ-か-せら き-たりま-えたりしと
 もゆ-るそのみ-ぞき-た-あつりしと
 おも-ひもゆか-しく た-まつりしと
 われらも-き-をにぞ-た-づ-ねをが-ま-まし
 われらも-き-をにぞ-た-づ-ねをが-ま-まし

四 三 二 一
 光りもくすしき ほしにみちびかれ
 みたりの博士ら 来たりまみえたり
 われらも君をぞ たづねをがままし
 はるけき旅路を ペトレムに來し
 燃ゆるその望み その愛たふとし
 われらも君にぞ ころささげまし
 三種のぬやしろ 三人かしこみて
 思ひもゆかしく たてまつりしごと
 われらも物みな ささげまつらまし
 暗き世のたびち い行くわれらこそ
 のぞみの光りを 断えせず見まし
 かみの正道に かがやくそのほし

45

『公教會聖歌集』(1930)

三王來朝

1=D 13 =調

1 | 13 4 | 5-3 | 45 6 | 5-, 5 | 1-6 | 7-5 |
 くすしきひかりのほしにみち
 65 #4 | 5-, 1 | 12 3 | 4-6 | 54 3 | 4-, 5 | 51 2 |
 びかれみたりのはかせのきてを
 3-5 | 3-2 | 1-, 3 | 6-5 | 6-1 | 13 4 | 5-,
 がみしごまわれらにもきみに
 5 | 56 7 | 1-5 | 43 2 | 1- ||
 まみえさせたまへ

四 三 二 一
 奇しき光明の 星にみちびかれ
 三人の博士の 来て拜みしごと
 我等にも君に 拜謁えさせ給へ
 遙けき旅路を ペトレムに來て
 御前に博士の ひざまづきし如
 我等にも君に 齊さまつらせよ
 尊とき因由の 三種のいやしろ
 三人が畏こみ 奉まつりしごと
 我等の物みな 献げしめたまへ
 暗き世の旅路 たどる我等をば
 妙なる光明の 星もてみちびき
 天主の正道を 履ましめ給ひね

五星のひかりをば
 消さんと謀計し
 へロデは亡びて
 御くにぞ榮行
 我主の御稜威を
 永久に讚め奉れ

Mr. 23. $\frac{1=Es.}{3}$ 1. Es führt drei Kön' = ge
 4 5 6 | 5 $\hat{\circ}$ 5 | 1 . 6 | 7 . 5 | 6 5 4 |
 Got=tes Hand Durch ei=nen Stern aus Mor=gen=

48 Weihnachtslieder.
 5 $\hat{\circ}$ 1 | 1 2 3 | 4 . 6 | 5 4 3 |
 land Zum Christkind durch Je = ru = sa=
 4 $\hat{\circ}$ 5 | 5 1 2 | 3 . 5 | 3 . 2 |
 lem In ei = nen Stall gen Beth = le=
 1 $\hat{\circ}$ 3 | 6 . 5 | 6 . 1 | 1 3 4 |
 hem. Gott, führ auch uns zu die=sem
 5 $\hat{\circ}$ 5 | 5 6 7 | 1 . 5 | 4 3 2 | 1 $\hat{\circ}$ ||
 Kind, Gib, daß wir sei=ne Kin=der sind.

2. Der Stern war groß, und hell sein Glanz,
 * Darin ein Kind mit goldnem Kranz. * Ein
 goldnes Kreuz sein Zepter war, * Sein Haupt
 schien wie die Sonne klar. * O Gott, erleucht
 vom Himmel fern * Die ganze Welt mit diesem
 Stern!

3. Aus Morgenland in aller Eil' * Sie reisten
 weit, viel hundert Meil'; * Sie zogen hin zu
 Land und See, * Bergauf, bergab durch Reif
 und Schnee. * Zu dir, o Gott, die Pilgerfahrt
 * Uns dünke nie zu schwer und hart!

4. Herodes sie gar fürstlich ehrt, * Doch
 andre Lust ihr Herz begehrt; * Den Königshof
 sie lassen steh'n, * Geschwind sie hin zur Krippe
 geh'n. * Gott, laß auch uns nicht weichen ab, *
 Vom guten Weg bis an das Grab!

5. Und als sie kamen in den Stall, * Auf ihre
 Knie sie fielen all'; * Dem Kind sie brachten
 alle drei * Gold, Weihrauch, Myrrhen nach
 der Reih'. * Gott, nimm von uns als Opfergut
 * Herz, Leib und Seel', Gut, Ehr' und Blut!

Weihnachtslieder. 49
 6. Durch Weihrauch stellten fromm sie dar,
 * Daß dieses Kind Gott selber war; * Die
 Myrrh' auf seine Menschheit wies, * Das Gold
 des Königs Würde pries. * O Gott, halt uns
 bei dieser Lehr', * Dem Irrtum und dem
 Abfall wehr'!
 7. Maria sie willkommen hieß, * Legt an ihr
 Herz das Kindlein süß: * Das war die Zehrung
 auf den Weg, * Ihr frei Geleit durch Heg und
 Steg. * Gott, gib auch uns dies Himmelsbrot
 * Zur letzten Reif', wann kommt der Tod!

➤ 準備の聖節

47. まぼろしの影を

『公教聖歌集』(1933)

梅 俊 47

1. まぼろしの影を おひしわがた
 2. みちちはとほそにゆびをりま
 まあはきゆめさめていまだかなしき
 てわがなよびたまふうれしきみこ
 主よこひねがばくつみのみゆるし
 みむねのまにまにこころをきさげ
 いざかへりゆかなあいのふるさと
 いざやしたははなきよきみことは

三 二 一

みめぐみの光り
 血潮のいづみに
 徳ぶみかむりの
 悔ゆるわが胸に
 いざや従はなん
 み旨のまにまに
 わが名呼び給ふ
 みちちは屏に
 いざ歸り行かな
 主よこひ願はく
 淡きゆめさめて
 まぼろしの影を
 追ひしわがたま

48

『公教會聖歌集』(1930)

梅 俊 19

I=C へ調

1-54 | 3-4 | 56 4 | 4 3,0 | 56 b7 | b7 6 5 | 54 3 |
 うきよのたのしみむなしきほま

32,0 | 5-5 | 6-7 | 1-7 | 7 6,0 | 3-2 | 1-7 |
 れあけくれもとめてみまへな

65 #4 | 5-0 | 5-5 | 6-6 | 7-7 | 1 5,0 |
 はなれみすくひのみちも

54 3 | 17 6 | 56 4 | 43,0 | 1-54 | 3-4 | 56 4 |
 きよきみのりもなみしてひご

4 3,0 | 54 3 | 17 6 | 53 2 | 21 0 ||
 きに つみおかしきめ

一

うき世のたのしみ
 むなしきはまれ
 あけくれもとめて
 御まへをはなれ
 みすくひのみちも
 きよき御聖教も
 蔑視して日ごとに
 つみおかし來ぬ

四 三 二

こ 悔 十 加 あ つ
 め ろ ひ 字 い み は 御 み
 ぐ エ し が 架 ば の い は 御 ま
 み ズ こ つ の ら ひ な れ ま と
 の 決 の み く か と ほ な み へ
 ひ 定 御 ろ の る む り 見 た 出
 か め あ も の ふ し ら 子 す け づ
 り し ど て か み さ の ず て き べ
 を に さ さ れ ず づ き せ き

わ 十 十 ち わ
 れ 字 架 身 身 身
 あ した が ひ ま つ り なる か み は
 ふ を ば ゆ る し ら ぬ し の ば せ た ま ふ
 が せ た ま へ

三 三

Nr. 36. $\frac{1=D}{\frac{3}{4}}$ $\dot{1} . \overline{54} | 3 . 4 | 5 6 4 |$
 1. Gott, vor dei = nem An = ge =
 $4 3 0 | \overline{56} 7 | \overline{76} 5 | \overline{54} 3 | \overline{32} 0 |$
 sichte Liegt die ar = me Bü = ßer = ßar;
 $5 . 5 | 6 . 7 | \dot{1} . 7 | 7 6 0 |$
 Sie be = fennt mit Neu' und Schmerzen
 $3 . 2 | \dot{1} . 7 | \overline{65} 4 | 5 . 0 |$
 Ih = re Sün = den am Al = tar.
 $5 . 5 | 6 . 6 | 7 . 7 | \dot{1} 5 0 |$
 Dein Ge = bot hab' ich ver = achtet,

Fastenlieder. 65

$\overline{54} 3 | \dot{1} \overline{76} | \overline{56} 4 | \overline{32} 0 | \dot{1} . \overline{54} |$
 Dien = te nur der Lust der Welt; Ach, ich
 $3 . 4 | \overline{56} 4 | 4 3 0 | \overline{54} 3 |$
 ha = be Gott ver = las = sen Und den
 $\dot{1} \overline{76} | \overline{53} 2 | 1 . . ||$
 Weg des Heils ver = seht.

2. Dich, den allerbesten Vater, * Der mich unaussprechlich liebt, * Jesum Christum, den Erlöser, * Hab' ich oft und tief betriibt. * Gott, du kennst mich großen Sünder, * Ich erkenne meine Schuld, * Bin nicht wert, dein Kind zu heißen, * Und doch hast du noch Geduld.

3. Aus der Größe der Veröhnung, * Aus den Geißeln und der Kron' * Seh' ich meiner Bosheit Größe, * Denn für mich starb Gottes Sohn. * Jesus sah der Sünder Menge, * Sah die Bein, den Tod, das Grab; * Todesangst beugt' ihn zur Erde, * Als er wog die Schulden ab.

4. Da er unsre Schuld getragen, * Unfre Krankheit nahm auf sich, * Spricht er: Büßer, sei getröstet, * Meine Wunden heilen dich! * O mein Heiland, mein Erlöser, * Viel hast du für mich getan! * Ach, mein kaltes Herz erwärme, * Bänd in mir die Liebe an!

5. Mutter Jesu, sieh am Sohne, * Was er für mich Sünder litt; * Daß ich meine Sünd' beweine, * Teil mir deine Schmerzen mit. * Mit Maria Magdalena * Will ich wahre Buße tun, * Und bei meines Jesu Füßen * Soll mein Geist auf ewig ruh'n.

Wg. Erlangbuch. 3

51. いばらのかむり

『公教聖歌集』(1933)

御 苦 難 51

1. いばらのかむり おしかぶされ
 ぶきのふにかはる おみかげかこみ

2. しもとにうたれつばきせられ
 ののしりさわ あたむらがり

3. ちしほはなまぬを 主のみにかしほの
 にくみやまぬを 主のみにかしほの

4. いかにめぐみに ひたに負ひて
 身に十字架を みたに負ひて
 御名かくはしみ み跡行かなん

四 三 二 一

『公教會聖歌集』(1930)

四 句 節 14

1=C ハ調

3 | 6 5 4 3 | 2-3, 7 | 1̇ 1̇ 7 7 | 6-, 0
 いばらのかむりかむらせられ

3 | 6 5 4 3 | 2-3, 7 | 1̇ 1̇ 7 7 | 6-, 0
 よしにてうたれつばかけられ

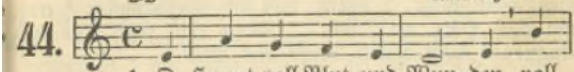
1̇ | 7 5 6 7 | 1̇-1̇, 5 | 6 5 4 4 | 3-, 0
 ちしほしたるしゆのみかほの

1̇ | 7 2̇ 1̇ 7 | 6-7, 2 | 4 3 2 5 | 3-0 ||
 いたまじきさまみるかなしき

<p>二</p> <p>昨日にかはる のしり騒ぐ 憎みもやらず 涙ながらに</p>	<p>一</p> <p>いばらの冠冕 華にて打たれ 鮮血したる いたましき態</p>	<p>三</p> <p>主の御苦しみ 地獄に墮べき われ等憐れみ 深きめぐみの</p>	<p>四</p> <p>わが身わが靈 いかで恩寵に たゞ十字架を 御名ほめ稱へ</p>
<p>其の御すがた 夥多なる仇敵 つくしみの 寛そなはせり</p>	<p>かむらせられ 唾液かけられ 主の御顔貌の 見るかなしさ</p>	<p>抑も誰が爲め 罪惡おかせる すくはんと ほかはあらし</p>	<p>さうぐるとも むくひ得べき 日々負ひつゝ すゝみ行かん</p>

Fastenzeit. 49

E-B Rürnberg. 1801.

44. 

1. O Haupt voll Blut und Wun-den, voll
o Haupt, zum Spott ge-bun-den, mit
Schmerz, be-deckt mit Hohn, O Haupt, sonst schön ge-
ei-ner Dornen-kron! D Haupt, sonst schön ge-
krö-net mit höchster Ehr' und Zier, jezt a-ber frech ver-
höhnet, ge-grü-ßet seist du mir!

2. Der Purpur deiner Wangen, * der Lippen frisches
Rot, * all Schönheit ist vergangen * in bitterer Todesnot. *
Doch strömt aus deinen Blicken * noch himmlische Geduld, *
selbst Sünder zu beglücken * mit unverdienter Guld.

3. Ach, Herr, was du gebuldet, * ist alles meine Last; *
ich habe das verschuldet, * was du getragen hast. * Ich,
Jesu, bin's, ich Armer, * der dies verdienet hat. * O tilge,
mein Erbarmet, * all' meine Missetat!

4. Laß an dem Kreuz mich stehen * in Demut, Herr,
bei dir. * Dir willig nachzugehen, * das einzig ziemet
mir. * Ich will dich nicht verlassen; * und wenn mein Auge
bricht, * dann lasse mich umfassen, * dich, meine Zuversicht.

5. Ich danke dir von Herzen, * o Jesu, bester Freund, *
für deine Todes-schmerzen; * wie gut hast du's gemeint! *
Ach gib, daß ich mich halte * zu dir und deiner Treu', *
daß nimmermehr erkalte * im Herzen Lieb' und Neu'.

6. Wenn ich einst werde scheiden, * o, dann verlaß
mich nicht! * Sei auch in Todes-leiden * mein Trost, mein

4

50 Fastenzeit.

Seil, mein Licht'. * Wenn mir am allerbängsten * ein
um das Herz wird sein, * dann reiß mich aus
Angsten * kraft deiner Angst und Pein.

55. 身は釘うたれつ

『公教聖歌集』(1933)

御 苦 難 55

1. みはくぎうたれつあまはあはれにみであ
 2. はふよきまのしこなれそりあつなはあはれにみであ
 3. こはよきまのしこなれそりあつなはあはれにみであ

しわらでこそも一せとちちゆびのしまいせまとは
 むれとはこもでたにし一にちつ主はあづまのけらましめ
 みすはのりやにふとり
 いたくはのりやにふとり
 いたくはのりやにふとり

五 身は釘うたれつ 仇をあはれみて
 身は釘うたれつ 父ゆるしませ」と
 身は釘うたれつ 父ゆるしませ」と
 身は釘うたれつ 父ゆるしませ」と

56

六

み誓ひことごと
 その如くなりて
 「事をはりぬ」と
 主は宣ひけり
 いまはのときに
 七
 「父よわが罪を
 御手にぞ委ぬ」と
 言おごそかに
 事切れたまひし
 事切れたまひし
 事切れたまひし

『フルダ 1891』(印刷:1906)

H-H Reifentritt 1867.

46.

1. Da Je-sus an dem Kreu-ze stund und
 4*

52 Haftzeit.

ihm sein Leib war ganz verwand't mit bit-ter-li-chen
 Schmerzen, die sie-ben Worte, die er sprach, be-
 tracht in dei-nem Her-zen.

2. Zuerst sprach er gar liebe-reich * zum Vater in d
 Himmelreich * mit Kräfte-n und mit Sin-nen: * „Vater
 o Gott, sie wissen nicht, * was sie an mir be-ginnen.“

3. Darnach denkt' der Barmherzigkeit, * die Gott d
 Schächer noch verleiht, * da er sprach mild und süße
 Fürwahr, du wirst heut bei mir sein * in Freud'
 Paradiese.“

4. Der Herr auch seiner Mutter dacht', * da er d
 dritte Wort ihr sagt' * zum Trost in ihren Zähren:
 „Sieh deinen Sohn! Johannes soll * als Mutter d
 dich ehren.“

5. Der Schmerzen Blut stieg immer mehr. * „W
 dürstet, ach, mich dürstet sehr!“ * sprach, der die W
 ernähret. * Es war der höchsten Liebe Durst, * die un
 Heil begehret.

6. Nun denk', o Mensch, der großen Pein, * darin
 sprach: „Ach Vater mein, * wie hast du mich verlassen
 Das Elend, das ich leiden muß, * ist über alle Maße

7. Das sechste war ein kräftig Wort; * das sch
 uns auf die Himmelsport' * und tröstet man's
 Sünd'er. * „Es ist vollbracht mein Leiden groß *
 alle Menschenkinder.“

8. Zuletzt sprach er vor seinem End': * „Nimm mei
 Geist in deine Hand'!“ * Ach Vater, ich muß sterben

du wollest den Sündern gnädig sein, * nicht lassen sie verderben!

3. Wer Jesum ehret immerfort * und oft gedenkt der sieben Worte, * des will auch Gott gedenken * und ihm durch seines Sohnes Tod * ein ewiges Leben schenken.

56. なやみ疲れまし

『公教聖歌集』(1933)

56 御 苦 難

1. なやみつかれまし みるもあかく
 2. 世おひますじか みをならはなく
 3. ゴルゴタかなしく じか はたちて
 4. つみはしのつるぎ かみわがために

ち に そ み た ま ひ す ち ゆ く ー き み と
 た す け ま ら す す べ を な ー み と
 お ひ と た び し し き み かい の ち た ー ま ふ

四 三 二 一

ひとたび死して
 罪は死のつるぎ
 かかりましぬ
 十字架は立ちて
 ゴルゴタ哀しく
 すべを無みと
 人等は泣く
 脊負ます十字架
 血に染みたまひ
 みち行くきみ
 なやみ疲れまし
 みころもあかく

23

『フルダ 1891』(印刷:1906)

E-H Mainz 1628.

47.

1. O Traurigkeit, o Herzeleid! Ist
 das nicht zu beklagen? Gott des Vaters einig Kind
 wird zu Grab getragen.

2. O höchstes Gut, unschuld'ges Blut! * Wer hätte
 das mögen denken, * daß der Mensch den Schöpfer
 sollt' * an das Kreuz aufhengen!

3. O heiße Zäh'r, fließ immer mehr! * Wen soll das
 nicht bewegen, * da sich über Christi Tod * auch die
 Felsen regen!

4. Es muß ja sein aus Marmorstein * der Juden
 Herz gewesen, * daß sie noch zu solcher Pein * lachten,
 wie wir lesen.

5. Wie schwer ist doch der Sünde Joch, * daß es
 konnt' unterdrücken * Gottes Sohn, als er das Kreuz *
 trug auf seinem Rücken!

6. O großer Schmerz! O hartes Herz, * steh' ab von
 deinen Sünden, * wann du willst nach deinem Tod *
 Gottes Gnade finden.

57. こよなきめぐみの

『公教聖歌集』(1933)

十 字 架 57

1. こよなきめぐみの きみがじふじかを
 2. わきいでながるる いのちのましみつ

よろこびおへかしまたみのこらはも
 じふじかのかけにたえずぞくままし

みたみのこらはも
 たえずぞくままし

一 こよなきめぐみの きみが十字架を
 よろこびおへかし (魚群) 民の子等はも

二 湧き出でながるる いのちの眞清水
 十字架のかけに (魚群) 絶えず波ままし

三 よろこびたのしみ 幸はふことごと
 十字架よりこそ (魚群) 醜の身に受けめ

四 とこ世とこ春の あめなるみ國に
 しめしゆくひかり (魚群) ただ主の十字架

五 こよなくうれしき きみが十字架を
 よろこび擔はん (魚群) いまはの時まで

58

『公教會聖歌集』(1930)

榮 光 の 十 字 架

1=G 16 ト調

5 | 1 7 6 5 | 1 2 3, 3 | 4 3 2 1 | 3 2 1,
 こ よ な き め ぐ み の き み が じ ふ じ か を

2 | 3 2 1 7 | 6 6 5, 5 | 1 2 3 1 | 4 3 2,
 よ ろ こ び お へ か し よ ろ づ の は ら か ら

3 | 4 3 2 1 | 3 2 1 ||
 よ ろ づ の は ら か ら

五 四 三 二 一

喜こび負はん (折返し) 主の十字架をば
 こよなくうれしき 天なるみくにへ
 十字架に由てぞ (折返し) 我等は受らめ
 よろこびたのしみ 幸福てふさち皆
 十字架の下にぞ (折返し) 絶ぜで溢るゝ
 わき出でながれる しのちの眞清水
 悦こびおへかし (折返し) 萬のほらから
 こよなきめぐみの きみが十字架を

一九

『フルダ 1891』(印刷:1906)

Fastenzeit. 39

Baberhorn. G.-B. 1609.

36.

1. Christ spricht zur Seel: „O Tochter mein, heb
 auf dein Kreuz, schick dich da-rein es kann und mag nicht
 anders sein; das Kreuz, das ich ge-tra-gen hab', mußt
 du, mein Kind, nicht wer-fen ab.

2. „Wohlan, o Seel', es hilft hier nicht, * es hilft nicht
 teib noch süß Gesicht; * dich an das Kreuz nur mutig
 richt! * Es muß doch sein, beug dich nur her; * das
 Kreuz nimm auf, wär's noch so schwer.

3. „Wohlauf, greif zu, beherzt greif zu, * umfaß das
 Kreuz! Was jagest du? * Bergauf, bergab, ohn' Raft
 und Ruh, * durch lauter Dorn und Disteln geh, * nicht
 um dich sieh, still nirgend steh!“

4. „O süßester Herr Jesu Christ, * ich weiß, daß du
 so gütig bist, * dein Herz so mild, so lieblich ist; * wa-
 rum bist du denn mir so hart, * da ich doch bin so jung
 und zart?“

5. „O, liebe Seel', so glaub mir frei, * daß in dem
 Kreuz dein' Wohlfahrt sei; * ich durch das Kreuz dich
 benedei, * dir helf' zu einem großen Lohn, * zum Thron,
 zum Scepter und zur Kron'.“

6. Darauf die Seel' sich kurz bedacht', * hob auf das
 Kreuz mit aller Macht, * sie küßt' das Kreuz, das Gott
 gebracht; * um solche Gab' dankt' sie dem Herrn * und
 trug das Kreuz von Herzen gern.

58. 頌めたたへよ

『公教聖歌集』(1933)

58 十 字 架

1. ほめよ たたへよ ちよよろづよに
 2. あまつみくにを あがれるゆけとも
 3. よのなみかぜは あきあるし
 4. せめよる あたも あらぶるし

こよなき たからの きよきじ ふじか
 じかか のの に
 じかか のの に

一 頌めたたへよ 千代よろづ代に
 こよなき實の きよき十字架を
 二 あまつみくにを あこがれ行けば
 十字架の橋立て きよかやぐ
 三 世のなみかぜは 吹き荒るるとも
 十字架の導びく みちぞ安けき
 四 攻めよる仇も あらぶる獅子も
 十字架に戦懐き 疾くこそ逃ぐれ
 五 あめにゆくまで 間なく暇なく
 十字架を掲なん みちの技折に
 六 あまつみくにの すぐひの門を
 開くは十字架の 血に染む鐘ぞ
 七 あなたふとしや すぐひの道の
 しるべも著けき 聖教の十字架

59

『公會聖歌集』(1930)

十 字 架
 1=F 18 へ調

3 | 4 3 2 1 | 2-3- | 3 3 6 5 | 5 4 3- |
 ほめよたへよ ちよよろづよも

2 5 6 5 | 3 3 4 3 | 2 2 3 4 | 3 2 1 ||
 こよなき たからの きよきじ ふじか

一 頌めたたへよ 千代よろづ代も
 此上なき實の きよき十字架
 二 あまつみくにに 勇みてのほれ
 十字架の橋立て 憧憬るゝひとは
 三 世の波浪かせは 吹き荒るゝとも
 十字架の橋より 渡りてぞ行け
 四 攻め寄る仇敵も あらぶる獅子も
 十字架を見れば 疾くこそ逃ぐれ
 五 天國に行くまで しばしの間だに
 手よりな放しそ 十字架のつる
 六 あまつみくにの すぐひの門戸を
 開きてぞ入るゝ 十字架のかぎ

60. 傷ましくも立てる

『公教聖歌集』(1933)

60 悲しみの聖母

1. いたまし—くもたてる 主のじふじのきに
 2. あがひの—みこころは ははのみしります

た だ ず み—む か ひ ま す み は は の み す が た
 み で し ら—は う ち ち り ョ ハ ネ の み あ り き

よ の—つ み を お ふ み こ かな し み め す は は
 主 は—は は を み で し に み で し を み は は に

わ れ ら の た め に こ そ か く あ り ま し し か
 あ た へ つ ゆ だ ね つ つ こ と き れ た ま ひ ぬ

<p>三</p> <p>海のごとくひろき 神のみめぐみをし み子の賜ふいのち いまもかも動しき</p> <p>聖母ごたふとき</p>	<p>二</p> <p>あはへつ委ねつつ 主は母をみ弟子に 御弟子をみ母に 事切れたまひぬ</p>	<p>一</p> <p>贖ひのみこころは み弟子らは打散り 母のみ知ります ヨハネのみ在き</p>	<p>一</p> <p>傷ましくも立てる たたずみ向ひます 世の罪を負ふ御子 われらの爲にこそ 主の十字の木に 聖母のみすがた かなしみ召す母 かく在まししか</p>
---	--	--	--

61. み子の十字架の

『公教聖歌集』(1933)

悲しみの聖母 61

1. みこのじふじかの みもとにたたずみ
 2. られひやいかなる みかみのまなごの
 みははなげかす つしのぎさしたりやし
 みははのみこころ つしのぶもかしこし
 みこころのいたで えたむへのおはすみ
 みこをおふ

六 かくもわが爲に 主こそ苦みをうけ給ひしか
 愛のいた手なる 五つのみ傷よわれに印させ

五 みいのち終りて 母は悲しみあめつち暗し
 聖母よわれにも 主を思ふ心を足らはせ給へ

四 例しへもあらぬ 十字架の痛み母は見ませり
 いとも傷ましき いまはのみ委母は見ませり

三 見る眼も惨はし 偲びて誰かはたもと涙さぬ
 み子のみ苦しき 歎きます母のみすがた悲し

二 愛ひやいかなる み神の愛子の母のみこころ
 偲ぶもかしこし 子を思ふ親のみむねの痛み
 御母のうれひ

一 み子の十字架の 下に佇すみ 母をなげかす
 剣さしたりや み心のいたで 聖母へて在す

七 世にある限りは
 母とともにぞ
 御子を偲ばなん
 十字架のもとに
 ひれふして我や
 歎かひあらなん

八 母よわれはも
 みそばに侍りて
 いのりや爲まし
 いでや勇み立ち
 世と戦ひつつ
 みあとしたはな

『公教聖歌集』(1930)

聖母の御悲哀 21 ~調子

1=F

1 2 3 3 | 4 4 3 3, | 5 5 4 4 | 3 3 2 2, |
 みこのじ ふじかの みもさに たたずみ

1 2 3 4 | 2 2 1 0 ||
 みはな げかす

一 御子の十字架の 御下に佇立すみ
 御母悲痛かす

二 両刃のつるぎに ころろ貫ぬかれ
 悲しみ居ます

三 愁歎や如何なる 天主のまな子の
 御母のうれひ

四 御子の御苦しみ 見て悲しみます
 母心情如何に

十四 十字架の御下に	十三 我も世のかぎり	十二 斯くもわが爲に	十一 五つの御きづを	十 主を愛する火を	九 偲ぶもかしこき	八 最どいたはしき	七 譬へんものなき	六 御子の苦しみに	五 御哀歎しのびて
袖袂をぬらさぬ	悲痛ます御は	十字架の御苦惱	臨終時の御悶痛	御母のかなしみ	燃えしめ給ひね	つらぬき給ひね	なやみまし、愛	御母とともぞ	われも佇立みて
ひとばあらじな	見るだにかなし	見ませる御は	見ませる御は	抑も如何ばかり	わがころろにも	われらの心胸に	われにも賜與へ	なみだ流がさん	どもになげかん

Stabat mater.

Mr. 53. ^{1=F.} $\frac{4}{4}$ 1 2 3 3 | 4 4
1. Chri-sti Mut-ter stand mit
3 3 | 5 5 3 4 4 | 3 4
Schmerzen Bei dem Kreuz und weint von
3 2 ||: 1 2 3 5 4 3 | 2 2 1 . :||
Her-zen, Als ihr lie - ber Sohn da hing.

2. Durch die Seele voller Trauer * Ganz
versenkt in Todessehauer, * |: Jetzt das Schwert
der Schmerzen ging. :|

3. Ach, wie war's der Auserkornen, * Da
sie sah den Eingebornen, * |: Wie er mit dem
Tode rang! :|

4. Angst und Trauer, Qual und Bangen *
Alles Leid hielt sie umfangen, * |: Das nu-
je ein Herz durchdrang. :|

5. Wessen Auge kann der Zähren * Be-
dem Jammer sich erwehren, * |: Der die Mutter
Christi drückt? :|

6. Wer nicht sollte sich betrüben, * Der die
Mutter mit dem lieben * |: Sohn in solcher Not
erblickt? :|

7. Seines Volkes Schuld zu zahlen, * Sah
sie Jesum voller Qualen * |: Und von Wunden
blutig rot. :|

8. Sah ihr süßes Kind verlassen, * Ohne
Trost am Kreuz erblassen, * |: Da ihm naht
der bitt're Tod. :|

9. O du Mutter, Brunn' der Liebe, * Daß
ich mich mit dir betrübe, * |: Laß mich fühlen
deine Pein! :|

10. Meine Seel' mit Lieb' entflamme * Zu
dem süßen Gotteslamme, * |: Daß ich ihm
gefall' allein. :|

11. Heil'ge Mutter, drück die Wunden, *
Die dein Sohn für mich empfunden, * |: Tief
in meine Seele ein! :|

12. Laß mich auch mit Jesu dulden, * Was
er litt für meine Schulden; * |: Laß mich teilen
seine Pein. :|

13. Laß mich herzlich mit dir weinen * Und
mit Christi Schmerz vereinen * |: Mich, so lang
mein Leben währt. :|

14. Bei dem Kreuz mit dir zu weilen, * An
dein Leid mit dir zu teilen, * |: Das ist, was
mein Herz begehrt. :|

15. O du Krone der Jungfrauen, * Wollest
gnädig auf mich schauen, * |: Deine Schmerzen
teil mit mir! :|

16. Laß mich stets im Herzen tragen * Christi
Wunden, Tod und Plagen * |: Und beweinen
sie mit dir. :|

17. In des Sohnes Schmerz versunken, *
Mache mich vom Kreuze trunken * |: Und von
seinem heil'gen Blut. :|

18. Laß, o Jungfrau, zu den Flammen, *
Sein Gericht mich nicht verdammen, * |: Wann
die Welt vergeht in Blut. :|

19. Laß mich zu der Schar der Frommen,
* Herr, durch deine Mutter kommen * |: Sieg-
reich aus des Lebens Streit! :|

20. Und wenn einst der Leib wird sterben, *
Laß dann meine Seele erben * |: Paradieses
Herrlichkeit. :|

Jedesmal 100 Tage Abt. Pius IX. 18. Juni 1876.

➤ 復活祭から聖霊降臨まで

64. いはへやうたへ

『公教聖歌集』(1933)

御 復 活 64

1. いはへやうたへしとよみにかち
 2. みつかひたちとともになん
 3. やよマダレナなぞやなます

よみがへりし主のたふときみさかえ
 よみがへりし主のめでたきかちうた
 よろこびうたへよ主よみがへりしぞ

アレール
 アレール
 アレール

五 四 三 二 一

またよみがへりて 主のごとわれら 天にこそ往かめ
 よろこびうたへ 主を讃め稱へよ
 アレールヤ
 幕を出でましし 成し遂げまして
 アレールヤ
 やよマダレナ 主がへりしぞ
 アレールヤ
 主がへりし主の 主がへりしぞ
 アレールヤ
 みつかひたちと ともに歌はなん
 アレールヤ
 主がへりし主の めでたき凱歌
 アレールヤ
 いはへやうたへ 死と陰府に勝ち
 主がへりし主の たふとき御榮え
 アレールヤ

66

『公教會聖歌集』(1930)

御 復 活 22

1=G 調

5 | 1 6 5 5 | 3-1, 5 | 6 5 4 3 | 3-2,
 いはへやうたへしとよみにかち

2 | 2 1 7 6 | 1 6 5, 5 | 1 5 6 1 | 7 1 2- |
 よみがへりし主のたふときみさかえ

5 (43) 2- | 1-0 ||
 アレールヤ

一 祝賀へやうたへ 死と陰府に勝ち
 よみがへりし主の たふとき御榮光
 アレールヤ

二 みつかひたちと ともに謳歌はん
 よみがへりし主の めでたき凱歌
 アレールヤ

三 やよマダレナよ なせ爾は哭くや
 よろこびうたへよ しゆを稱讃へよ
 アレールヤ

四 すくひの偉業を 成し遂げまして
 墳墓を出でましし しゆを稱讃へよ
 アレールヤ

五 よろこび謳歌へ 主のごとわれら
 またよみがへりて あめ昇り往かん
 アレールヤ

二八

『フルダ 1891』(印刷:1906)

58. C-F G. 2/4

1. Der Heiland ist erstanden befreit von
 To-des-banden, der als ein wahres O-ster-lamm für
 mich den Tod zu lei-den kam. A = le = lu = ja!

2. Nun ist der Mensch gerettet * und Satan ange-
 tettet. * Der Tod hat keinen Stachel mehr, * der Stein
 ist weg, das Grab ist leer. * Alleluja!

3. Der Sieger führt die Scharen, * die lang gefa-
 waren, * in seines Vaters Reich empor, * das Adam
 und mir verlor. * Alleluja!

4. O, wie die Wunden prangen, * die er für
 empfangen! * Wie schallt der Engel Siegs-gefang *
 Starcken, der den Tod bezwang! * Alleluja!

5. Mein Glaube darf nicht wanken; * o tröstliche
 danken! * Ich werde durch sein Auferstehn * gleich
 aus meinem Grabe gehn. * Alleluja!

6. Die Nacht, die mich dort decket, * bis mich
 Engel wecket, * ist kurz; dann ruft mein Heiland m
 ins Reich, wo niemand stirbt, zu sich * Alleluja!

7. O Meer der Seligkeiten! * Um sie mir zu bereit
 ging mein Erlöser hin vor mir. * Erstandener, ich
 dir. * Alleluja!

8. Ja, durch ein neues Leben * will ich zur
 streben, * wo du mit deinem Vater thronst * und
 gute Tat belohnst. * Alleluja!

9. Dann werd' ich im Gerichte * vor deinem
 fichte * von deinem Blute glänzend stehn * und zu
 Ammes Hochzeit gehn. * Alleluja!

10. O du, der uns zum Leben * ein neues Recht
 geben, * wie du vom Grab erstanden bist, * erweck
 uns, Herr Jesu Christ! * Alleluja!

65. しろたへの衣に
『公教聖歌集』(1933)

65 御復活

しろたへの衣に こころさやけく
しるのはかざして よろこびをどれ
主はしにうちかちよみがへりましぬ
あめつちこぞりさけびうたへ

主のみさかえを
四 三 二 一
わが 仰げやもろびと 今のはよりまし かくる方なく かくて 黄泉路の門をし 死の主を 朽ちざる生命を 主のみさかえを (をりかへし) 主は死に打ち勝ち 死へりましぬ 主は死に打ち勝ち 死へりましぬ 主は死に打ち勝ち 死へりましぬ 主は死に打ち勝ち 死へりましぬ 主は死に打ち勝ち 死へりましぬ

心さやけく
かなしみわすれ
よろこびうたへ
主がへりましぬ
ほめようたへ

『公教會聖歌集』(1930)

1=F 24 へ調

1 2 1 5 | 1 2 3 1, | 3 4 5 (6 5) | 4 4 3 - |
しろきこ ろもきて かなしみ わすれ
1 2 1 5 | 1 2 3 1, | 3 4 5 (6 5) | 4 4 3 - |
しるのは てにもち よろこび うたへ
5 5 6 6 | 5 4 (3 2) 1, | 5 5 6 6 | 5 4 (3 2) 1, |
しはしに うちかち よみがへ りまじぬ
3 3 4 3 | 2 4 3 - | 5 4 3 - | 4 3 2 - |
(折返し) あめつち こぞり ほめよ うたへ
5 5 (6 5) 4 3 | 2 2 1 - ||
しるの み さ かえを

四 三 二 一
浮世をわすれて 仰げやもろびと 我等のためによ 我々のためにぞ 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち
(折返し) 主の御榮えを 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち

主を愛慕まつれ 主ぞ招きたまはる 主を愛慕まつれ 主ぞ招きたまはる 主を愛慕まつれ 主ぞ招きたまはる

主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち

主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち

主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち 主は死に打ち勝ち

68. わがきみイエズス

『公教聖歌集』(1933)

御 復 活 68

1. わがきみイエズス よみとしに
 2. わがきみイエズス たふときち
 ちかちて よみよりしよりにいでて
 をもて よのつみのあがなひを
 はかうちひらきましぬ。ことほぎよろ
 いまやなしとげましぬ。われらも主に
 こびて いのちの主をほめよ
 よりて いでやしにかたまし

二 一

われらも主によりて
 今や成し遂げましぬ
 世の罪のあがなひを
 たふとき血をもて
 わがきみイエズス
 ことほぎよろこびて
 いのちの主をほめよ
 墓うちひらきましぬ
 陰府と死に勝ちて
 陰府より出でて
 わがきみイエズス

70

『公教會聖歌集』(1930)

1=F 23 ~調4

3 2 1. 1 | 4 3 2, 0 | 5 4 3 3 4 5 |
 わがきみ イエズス しきよみのち
 4 2 1, 0 | 2 2 2 3 3 3 | 4 4 3 2, 0 |
 からに うちかちてよみがへり
 3 3 3 4 4 4 | 5 5 4 3, 0 | 5 6 5 5 4 3 |
 おくつきないでましぬ よろこびこと
 4 3 2 3, 0 | 5 4 3 6 5 4 | 3 2 1 - ||
 ほきて いのちのしほめよ

二 一

死に等し勝つ身と成すぬ
 我れも主の血を
 成すぬ
 世の罪のあがなひを
 たふとき血をもて
 わがきみイエズス
 ことほぎよろこびて
 いのちの主をほめよ
 墓うちひらきましぬ
 陰府と死に勝ちて
 陰府より出でて
 わがきみイエズス
 死に等し勝つ身と成すぬ
 我れも主の血を
 成すぬ
 世の罪のあがなひを
 たふとき血をもて
 わがきみイエズス
 ことほぎよろこびて
 いのちの主をほめよ
 墓うちひらきましぬ
 陰府と死に勝ちて
 陰府より出でて
 わがきみイエズス

『ケルン 1908』(印刷: 1912 頃)

Nr. 61. 1=F. 3 2 1 1 | 4 3 2. |

5 4 3 3 4 5 | 4 2 1. |
 1. Wahrer Gott, wir glau-ben dir,
 Du bist mit Gott-heit und Mensch-heit hier;
 2 2 2 3 3 3 | 4 4 3 2. |
 Du, der den Sa-tan und Tod ü-ber-wand,

96 Osterlieder.

3 3 3 4 4 4 | 5 5 4 3. |
 Der im Tri-umph aus dem Gra-be erstand:
 5 6 5 5 4 3 | 4 3 2 3. |
 Preis dir, du Sie-ger auf Gol-ga-tha,
 5 4 3 6 5 4 | 3 2 1 ? ||
 Sie-ger, wie kei-ner! Al-le-lu-ja!

2. Jesu, dir jauchzt alles zu, * Herr über
 Leben und Tod bist du! * In deinem Blute
 gereinigt von Schuld, * Freu'n wir uns wieder
 der göttlichen Guld; * Gib, daß wir stets deine
 Wege geh'n, * Glorreich wie du aus dem Grabe
 ersteh'n.

69. よろづのくにたみ

『公教聖歌集』(1933)

69 御復活

1. よろづのくにたみ いはへうたへ
 2. しのかせくだきて みはかひらき
 3. あいなるみきず はひにもまさり

主はよみがへれり アレルヤ
 主はよみがへりぬ アレルヤ
 てりいでかがやく アレルヤ

アレルヤ アレルヤ
 アレルヤ アレルヤ
 アレルヤ アレルヤ

四 三 二 一

アレルヤ アレルヤ アレルヤ アレルヤ
 世々みさかえあれ 陰府にうち捷し われらの主に
 アレルヤ

あいなるみきずは 照りいでかがやく アレルヤ
 陽にもまさり

死の柩^{くわ}くだきて 主はよみがへりぬ アレルヤ
 みはかひらき

よろづのくにたみ いはへうたへ
 主はよみがへれり アレルヤ
 アレルヤ

71

70. よろこびたたへよ

『公教聖歌集』(1933)

御復活 70

1. よろこびたたへよ わがすくひぬしは
 2. あめよりくだりてひとみなのために

よみのちからにぞ うちかちたまへる
 しのとをひらきて よみがへりましぬ

うたへよ たたへよ アレルヤ
 主をほぎまつれよ アレルヤ

三 二 一

みちかひたがはず しのめとともに
 つはものまもる はかを出でましぬ
 あなたふときかな アレルヤ

あめよりくだりて 人類みなのために
 死の門をひらきて よみがへりましぬ
 主を祝ぎまつれよ アレルヤ

陰府のちからにぞ うち勝ちたまへる
 うたへよ たたへよ アレルヤ

よろこびたたへよ わがすくひぬしは
 陰府のちからにぞ うち勝ちたまへる
 うたへよ たたへよ アレルヤ

72

『公教會聖歌集』(1930)

1=B 25 調 ㊦

5 | 1̣-5 | 3-3 | 4-5 | 6-,5 | 67̣ 1̣ | 23̣ 42̣ |
 よろこび たへよ わがす くひ

1̣-7 | 1̣-,5 | 1̣-1̣ | 6-7 | 1̣7̣ 6 | 5-,2̣ |
 ぬし はよ みの ちか らにぞ う

3̣ 2̣ 1̣ | 7 1̣ 2̣ | 1̣-,3̣ | 42̣ 5 | 6-1̣ |
 ちかち たまへ る う たへ よ た

2̣1̣ 7 | 1̣-,3̣ | 42̣ 7 | 1̣- ||
 う へ よ ア レ ル ヤ

三 二 一

御約束たがはず しのめとともに
 兵卒等まもれる 瑩墓をいでましぬ
 あなたふときかな アレルヤ

主を祝ぎ奉れよ アレルヤ

天より降臨りて 人類みなのために
 死の戸を開きて よみがへりましぬ

うたへよ 讃へよ アレルヤ

よろこび讃へよ わがすくひぬしは
 陰府の権力にぞ うちかちたまへる
 うたへよ 讃へよ アレルヤ

『ケルン 1908』(印刷:1912頃)

Osterlieder. 91

Mr. 57. $\frac{1=B}{3/4}$ 5 | 1̣ . 5 | 3 . 3 |
 1. Das Grab ist leer, der
 4 . 5 | 6 . 5 | 6 7 1̣ | 2̣ 3̣ 4̣ 2̣ |
 Feld er - wacht, Der Hei - land ist er -
 1̣ . 7 | 1̣ 5 | 1̣ . 1̣ | 6 . 7 | 1̣ 7 6 |
 stan - den; Da sieht man sei - ner Gott - heit
 5 . 3̣ | 2̣ 1̣ 7 | 1̣ . 7 | 7 . 6 |
 Macht, Sie macht den Tod zu Schan -
 5 5 | 1̣ . 1̣ | 6 . 5 | 4 . 3̣ |
 den. Ihm kann kein Sie - gel, Grab noch
 2 . 2̣ | 3̣ 2̣ 1̣ | 7 1̣ 6 | 5 5 |
 Stein, kein Fel - sen wi - der - steh'n; Schließt
 1̣ . 1̣ | 6 . 7 | 1̣ 7 6 | 5 . 3̣ | 4 . 5 |
 ihn der Un - glaub' sel - ber ein, Er wird ihn
 6 . 7 | 1̣ 3̣ | 2̣ . 4̣ 2̣ | 1̣ . 7 |
 sieg - reich seh'n, Er wird ihn sieg - reich
 1̣ 3̣ | 4 2̣ 5 | 6 . 1̣ | 2̣ 1̣ 7 | 1̣ . 3̣ |
 seh'n. Al - le - lu - ja, Al - le - lu - ja, Al -
 4 2̣ 7 | 1̣ 3̣ ||
 le - lu - ja.

2. Frohloset, Christen, Gottes Sohn, * Der
Hölle Überwinder, * Schwingt sich vom Kreuz
zum Vaterthron * Als Mittler für uns Sün-
der. * Es drückt dem teuren Löfungslauf * Der

Herr von Wort und Tat * Das Siegel der
Vollendung auf, * |: Wie er's verheißen hat. :|
All. All. All.

3. Der Christen Glaub' ist nun gestützt *
Durch Jesu Allmachtswerke; * Der zu des
Vaters Rechten sitzt, * Gibt seinen Jüngern
Stärke. * Sie schauen jetzt die Göttlichkeit *
Der Lehre und der Macht, * Und geh'n mit
Unerschrockenheit * |: In Tod und Grabesnacht. :|
All. All. All.

4. Der uns're Schuld zu tilgen kam, * Den
Kreuzestod zu leiden, * Er, unser wahres Oster-
lamm, * Erwarb uns Himmelsfreuden. * Er
ruft uns Sündern liebeich zu: * „Der Friede
sei mit euch!“ * Bringt Gnade, Heil und Seelen-
ruh', * |: Und stürzt des Satans Reich. :|
All. All. All.

5. Dir danken nun, Herr Jesu Christ, *
Die Völker aller Zungen, * Daß du vom Tod
erstanden bist, * Das Heil uns hast errungen. *
Herr, bleib' bei uns, wenn's Abend wird, *
Daß wir nicht irre geh'n, * So wird die Herde
wie der Hirt * |: Einst glorreich aufersteh'n. :|
All. All. All.

71. ああみははマリア

『公教聖歌集』(1933)

71 喜びの聖母

ああみははマリア アレルヤ
 なみだぬぐひませ アレルヤ
 よろこびまませ アレルヤ
 みこよみがへりぬ アレルヤ
 アレルヤ アレルヤ アレルヤ

三 二 一

ああみははマリア アレルヤ
 なみだぬぐひませ アレルヤ
 よろこびまませ アレルヤ
 御子よみがへりぬ アレルヤ
 アレルヤアレルヤ アレルヤ
 憂きよかなしみよ アレルヤ
 いまはいづこそや アレルヤ
 見よ勝ちうたこそ アレルヤ
 果つるを知らえぬ アレルヤ
 アレルヤアレルヤ アレルヤ
 ああ御子イエズス アレルヤ
 死のちからくだき アレルヤ
 陰府の門やふりて アレルヤ
 み墓よ出でます アレルヤ
 アレルヤアレルヤ アレルヤ
 (次頁参照)

73

四

みははと御子にぞ
 アレルヤ
 ちからのかぎり
 アレルヤ
 ほぎうたささげ
 アレルヤ
 もろびとようたへ
 アレルヤ
 アレルヤ
 アレルヤ

『公教會聖歌集』(1930)

1=D 26 調全

1 | 1 2 3 1 | 3 4 5, i | 7 6 5,
 や よ み は マ リ ア ア レ ル ヤ
 1 | 1 2 3 1 | 3 4 5, i | 7 6 5,
 な み だ ぬ ぐ ひ ま せ ア レ ル ヤ
 i | i 5 5 4 | 3 4 5, 4 | 3 2 1,
 く も は れ わ た り て ア レ ル ヤ
 i | i 5 5 4 | 3 4 5, 4 | 3 2 1,
 あ ま つ ひ い で た り ア レ ル ヤ
 i | 7 6 5, i | 7 6 5, 4 | 3 2 1 ||
 ア レ ル ヤ ア レ ル ヤ ア レ ル ヤ

一 やよ聖母マリア アレルヤ
 なみだ拭ひませ アレルヤ
 雲はれわたりて アレルヤ
 天つ日出でたり アレルヤ
 アレルヤ アレルヤ
 アレルヤ

二 憂苦も悲しみも アレルヤ
 痕跡なく消失せ アレルヤ
 よろこび楽しみ アレルヤ
 いまこそ涯なき アレルヤ
 アレルヤ

四

うたへや祝賀曲 アレルヤ
 聖母どもろども アレルヤ
 主の蘇がへりを アレルヤ
 よろこび祝ひて アレルヤ
 アレルヤ、アレルヤ、アレルヤ

三

見よ聖子耶蘇は アレルヤ
 死の権力に勝ち アレルヤ
 陰府の門破りて アレルヤ
 墓を出でましぬ アレルヤ
 アレルヤ、アレルヤ、アレルヤ

Maria Osterfreuden.

Mr. 64. ^{1=Es.} 1. 1 2 | 3 1 3 4 |
⁴ 1. V. Laßt uns froh-locken herz-lich
 5 . $\dot{1}$ 7 | 6 . 5 $\hat{\circ}$ | 1 . 1 2 |
 sehr! R. M = le = lu = ja! V. Ma = ri = a
 3 1 3 4 | 5 . $\dot{1}$ 7 | 6 . $\hat{\circ}$
 seufzt und weint nicht mehr, R. M = le = lu = ja!
 $\dot{1}$ | $\dot{1}$ 5 5 4 | 3 4 5 . | 4 3
 V. Der Himmel ist von Wolken rein, R. M = le =
 2 . | 1 . 0 $\dot{1}$ | $\dot{1}$ 5 5 4 | 3 4
 lu = ja! V. Jetzt glänzt der lie = be Sonnen =
 5 . | 4 3 2 . | 1 $\hat{\circ}$ $\dot{1}$ 7 | 6 . 5 . |
 schein! R. M = le = lu = ja, M = le = lu = ja,
 $\dot{1}$ 7 6 . | 5 . 4 3 | 2 . 1 $\hat{\circ}$ ||
 M = le = lu = ja, M = le = lu = ja!

Osterlieder. 99

2. Wo ist, o freudenreiches Herz, * M. *
 Wo ist jetzt all dein Weh und Schmerz? *
 M. * Wie wohl ist dir, o Herz, wie wohl! *
 M. * Du bist nun aller Freuden voll! * M. *
 M. M. M.

3. Sag, o Maria, Jungfrau rein, * M. *
 Kommt das nicht her vom Sohne dein? * M. *
 Ach ja, dein Sohn erschienen ist, * M. * Kein
 Wunder, daß du fröhlich bist. * M. * M. M. M.

4. Aus seiner heil'gen Wunden Mal' * M. *
 Entströmt ein heller Freudenstrahl, * M. * Der
 nun nach bitterm Leid und Schmerz * M. *
 Mit Wonn' erfüllt dein Mutterherz. * M. *
 M. M. M.

5. Dich grüßen wir mit Innigkeit, * M. *
 O Mutter, in der Freudenzeit. * M. * O
 send auch uns ein Tröpflein her * M. * Aus
 deinem großen Freudenmeer. * M. * M. M. M.

72. あめなるきさい

『公教聖歌集』 (1933)

喜びの聖母 72

1. あめなるきさいよろこびたまへアレルヤ
 2. みことのごとくよみがへりたりアレルヤ

いましにやどりあもりしきみはアレルヤ
 よろこびいさみいはひまつらなんアレルヤ

よ ろ こ び い さ み は ひ ま つ ら ん	よ ろ こ び い さ み は ひ ま つ ら ん	二 み 言 の ご と く は り た り	あ も り し き み は	い ま し に や ど り	あ め な る き さ い	一 あ め な る き さ い
---	---	---	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	--------------------------------------

74

『公教會聖歌集』 (1930)

天の元后 27 ♪ へ調

1=F

1 | 1 5 3 2 | 1 1, 2 2 | 5 4 3 2 | 3, 4 2 2 | 1 -,
 あめなるきさいよろこびたまへアレルヤ

5 5 | 6 5 3 4 | 5 -, 5 5 | 6 5 3 2 | 1, 4 2 2 | 1- 0 ||
 いまこにやどりたまへるものはアレルヤ

一 天 なる 王 后	二 宣 ま へ る 如 し	爾 に 投 胎 り	た ま へ る 者 は	祝 ひ ま つ ら ん	よ ろ こ び 勇 み
------------------------	---------------------------------	-----------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------

歡
こ
び
た
ま
へ
ア
レ
ル
ヤ
ア
レ
ル
ヤ
ア
レ
ル
ヤ

『フルダ 1891』 (印刷: 1906)

Opfern. 69

F.F. Konstantz, G.-B. 1600. — Fulda 1895.

64. 1. Freu' dich, du Him-mels-tö-ni-gin, freu' dich, Ma-ri-a! Freu' dich, das Leid ist al-les hin. M-le-lu-ja! Bitt Gott für uns, Ma-ri-a!

2. Den du zu tragen hast verdient, * der hat uns alleamt ge-führt.

3. Er ist erstanden von dem Tod, * wie vorgefagt der wahre Gott.

4. Woll'ft uns, Maria, doch beistehn, * daß wir mit ihm glorreich erstehn.

73. オリブのやまより

『公教聖歌集』(1933)

73 御昇天

1. オリブのやまより のぼり
2. ガリラアびとらよ などや

まししくににちなるみかみの
かなしみつつそらあふぎたてる

みぎにぞーまします アレールヤ
主はのぼりましぬ アレールヤ

四 われらもあめに
みむねにかなひて
この憂世を
主にぞ會ひ奉らん

三 ふたたび來ますと
あめに對し
みつかひぞ告らす

二 ガリラアびと等よ
空あふぎ立てる
主はのぼりましぬ

一 オリブのやまより
のぼりましし國に
ちなるみかみの
みぎにぞ在します

75

『公教會聖歌集』(1930)

聖主御昇天 28 調ト

1=G

5 5 5 | 1-1 | 2̇1 2̇3 | 1-, 0 | 5 1 2 |
オリベ ト ヤ マ ヨ リ あめに

3̇4 5 | 2-2 | 3-, 0 | 3 3 3 | 2-2 |
のぼりてぞ ちかみの

1-1 | 7-, 0 | 5 6 7 | 1̇2 3 | 2̇1 7 |
みぎに しはざしたまへ

1-, 3 | 2̇1 7 | 1-0 ||
るアレールヤ

四 聖旨にかなひて
主に會ひ奉らん
アレールヤ

三 爾曹をはなれて
聖天使告せり
アレールヤ

二 ガリラア人等よ
空をあふぎ見て
爾曹は立てるや
アレールヤ

一 オリベト山より
父天主の右手に
主は座し給へる
アレールヤ

『ケルン 1908』(印刷: 1912 頃)

Mr. 68. 1=As. 5 5 5 | i . i | 2̇ . i
3/4 1. Christus fährt auf mit Freu =
2̇ 3̇ | i . 0 | 5 i 2̇ | 3̇ . 4 5 | 2̇ . 2̇ |
den-schaft Zum Va-ter durch die Him-mel
3̇ . 0 | 3̇ 3̇ 3̇ | 2̇ . 2̇ | i . i |
all'. Auf Er-den ist sein Werk voll=
7 . 0 | 5 6 7 | i . 2̇ 3̇ | 2̇ i 7 |
bracht, Die Himmels = pfort' ist auf = ge =
i . 3̇ | 2̇ i 7 | i . . ||
macht. Al = le = lu = ja!

2. Im Himmel, unserm Vaterland, * Sieht
er zu Gottes rechter Hand. * Sein' Herrlichkeit
und Majestät * Weit über alles Denken geht,
* All.

Pfingstlieder. 103

3. Drum sei gelobt im höchsten Thron *
Der aufgefah'r'ne Menschensohn! * Wir seh'n
hinauf, er sieht herab: * Nie geht uns seine
Hülfe ab! * All.

4. Dort will er unser Mittler sein, * Des soll
sich alle Welt erfreu'n. * Dann wird der Tag
erst freudenreich, * Wann wir ihn seh'n im
Himmelreich. * All.

➤ 聖霊降臨際の聖節

75. みたまよゆたけき

『公教聖歌集』(1933)



75 聖 霊

1. みたまよゆたけき きみがみめぐみを
2. あめよりたまはる はるさめにまさり
3. こころやまぶしき ねぎごとや繁き

あけがしきここの身に 主はきたりたまふ
あめよりおろくる みめぐみのつゆぞ
日にけにしげく 身ぞうるほひける
いなつたまものはるさめにまさり
いろも香もきよく 地に花咲かせよ
悪しきは罰しぞ い往けるをみれど
つよき七果をば ひき具しこそ来め
主よわがこころを たかぶりなさせせ
守らひたまへや みかどに入るまで
アメン

77

『公教會聖歌集』(1930)

1=G 30 ト調

1 | 1 76 5 12 | 3 2 1, 71 |
 や よ き よ き み た ま わ

2 2 6 7 | 1 6 5, 5 | 1 1 2 3 |
 れらに く だりて ゆ た け き み

4 3 2, 3 | 4 3 27 12 | 3 2 1 ||
 めぐみみ た さ せ た ま ひ ね

(終りに) 1762 | 17 1- ||
 ア — メン

一 やよ聖きみたま
 われらにくだりて
 ゆたけき御恩寵
 満たさせたまひね

二 御父のたまはる
 なぐさめのみたま
 いのちの清泉よ
 もゆる聖愛の火よ

七	六	五	四	三
七	聖	主	精	七
ち	父	の	神	つ
よ	聖	平	よ	た
さ	子	安	わ	ふ
よ	聖	御	き	と
き	霊	助	を	ど
み	の	力	を	さ
た	身	に	つ	ま
ま	に	て	よ	も
を	も	て	め	の
ぞ	く	仇	聖	に
	す	敵	愛	わ
	さ	さ	の	が
	と	り	火	身
	ら	り	を	に
	せ	な	も	あ
	た	る	や	た
	ま	聖	し	め
	ま	子	め	た
	ひ	こ	た	ま
	ね	の	ま	へ
		世	ひ	
		々	ね	
		は		
		め		
		う		
		た		
		は		
		ん		
		ん		
		ア		
		ー		
		メン		

77. 聖霊よ天降りて

『公教聖歌集』(1933)

77 聖 霊 (ヴェニ クレアトル)

1. みたまよあもりて みめぐみのあめに
 2. みたまよあもりて かよわきわれらを
 かわけるところを うるほはせたまへ
 たすけつつよめつ みちびかせたまへ

六 五 四 三 二 一

父み子みたまの 位ぞ三つなる
 ひとりの御神に 世々み榮えあれ

聖霊よ天降りて み恵みのあめに
 乾けるところを うるほはせ給へ

聖霊よあもりて か弱きわれらを
 たすけつつよめつ みちびかせ給へ

聖霊よあもりて み光りを照らし
 たへなる御教を さとらしめ給へ

聖霊よあもりて 厳くしきほのほ
 眠れるところに 驚えたたせ給へ

聖霊よあもりて いにしへの如く
 くすしき御業を 世に満たし給へ

79

『公教會聖歌集』(1930)

聖 霊 降 臨

1=A 29 イ調

5 | 6 5 4 5 | 1 2 1, 1 | 5 6 7 1 2 | 3 3 2,
 み たまよあ もりてみ めぐみの あめに

2 | 3 1 6 5 | 7 1 2, 5 | 1 6 4 6 | 5 5 5 ||
 か はけるこ ゝるをう るほはせ たまへ

六 五 四 三 二 一

たふとき 聖父聖子聖霊の
 天主に 奇しき御わざを
 聖霊よ天降りて 天主にも人にも
 聖霊よ天降りて 聖なる御教理を
 御ちからを授け 聖霊よ天降りて
 御ちからを授け 聖霊よ天降りて
 加はける心情を 聖霊よ天降りて

世々御榮あれ 三位一に在す
 世に示し給へ 往古のごとく
 愛の火燃させ 盡さしめ給へ
 悟らしめ給へ 御光明を照し
 強くなし給へ 屏弱き我等に
 露ははせ給へ 御恩寵の雨に

三五

『フルダ 1891』(印刷:1906)

Pfingsten.

G-F Verstärkte Melodie des Veni Creator Spiritus

78.

1. Komm, heil'ger Geist, lehr' bei uns ein,
 such das Herz der Kin-der dein, er-füll sie all' mit
 dei-ner Gnad', die dei-ne Macht er-schaf-fen hat.

2. Der du der Tröster wirst genannt, * vom höchsten
 Gott ein Gnadenpfand, * ein Lebensbrunn, Licht, Lieb'
 und Blut, * der Seele Salbung, höchstes Gut.

3. O Schak, der siebenfältig ziert, * o Jünger Gottes,
 der uns führt, * Geschenk vom Vater zugesagt, * du, der
 die Zungen reden macht.

4. Entzünd in uns des Lichtes Schein, * gieß Lieb' in
 unsre Herzen ein, * stärk unser's Leib's Gebrechlichkeit *
 mit deiner Gnad' zu jeder Zeit.

5. Treib weit von uns des Feind's Gewalt, * in deinem
 Frieden uns erhalt, * daß wir, geführt von deinem Licht, *
 in Sünd' und Leid verfallen nicht.

6. Den rechten Glauben uns bewahr, * daß wir be-
 fennen immerdar * des Sohns und Vaters Majestät *
 und dich, der aus von beiden geht.

7. Dem Vater Lob im höchsten Thron * und seinem
 auferstandnen Sohn, * dem Tröster auch der Christen-
 heit * jetzt und in alle Ewigkeit.

83

➤ 三位一体の大祝日

82. 父なるみかみよ

『公教聖歌集』(1933)

三位一体 82

1. ちなくみかみよしあみれわれをのたまへは
 2. あまくだりましよはこぐわのらいたまひよ
 3. せいなるみたまよはこぐわのらいたまひよ

なわがいらとごはわれらにもかてはりて
 わがいらとごはわれらにもかてはりて
 わがいらとごはわれらにもかてはりて

みくちひのしよのちをへすめくひみびをたませり
 みくちひのしよのちをへすめくひみびをたませり
 みくちひのしよのちをへすめくひみびをたませり

三 聖なるみかみよ 父なるみかみよ あはれみを賜へ
 わが業をはり 恵みのいづみよ
 み光りさしそへ みちびきたまへ

二 あま降りましし 御子我等の主は
 われらをまねき 血汐もてきよめ
 朽ちぬ世の幸を めぐみたまへり

一 なれのいとこし子 われらに代りて
 きゝいれ給ひて めぐみたまへ

84

『公教會聖歌集』(1930)

三位一体 100

I=G 調

1 5 2 5 | 3 4 3 2, | 1 3 6 1 | 4 3 3 2, |
 あいなる みかみよ あはれみ たまひね

1 5 6 1 | 7 7 1-, | 5 3 3 2 | 5 4 4 3, |
 なれのいとこし子 われらのねぎごと

1 5 6 1 | 7 1 2 2, | 1 5 6 1 | 7 7 1- ||
 きゝいれ たまひて めぐみたまへ

三 聖なる御靈よ さよめたまひね みちびき給へよ	二 天降りまし、 われらをめぐめ 聖ならしめてよ	一 愛なる天主よ なれのいとこし子 きゝいれ給ひて
めぐみの源泉よ 勤務を果てなば あまつみくにへ	御父のひとり子 聖血にて清めて 千代よろづ代に	あはれみ給ひね 我等のねぎごと めぐみたまへ

『フルダ 1891』(印刷: 1906)

87.

C-B Gult. G. 23.

1. Gott, wir preisen dei-ne Gü-te mit froh-
 lo-cken-dem Ge-müt-te; du bist un-ser Herr al-
 lein. Al-les muß dich Va-ter nen-nen, dei-ne höch-ste
 Macht be-fen-nen; je-de Kre-a-tur ist dein.

2. Engel, Kräfte mit den Thronen, * alle, die im
 Himmel wohnen, * Cherubin und Seraphim, * preisen
 dich, Gott, ohn' Aufhö-ren * in vereinten Jubelchören; *
 „Heilig“ tönet ihre Stimm'.

3. Heilig, der du bist und warest, * der du dich uns
 offenbarest, * heilig bist du, unser Gott! * Himmel, Erde

sind erfüllt * von dem Glanz, der dich umhüllet, * groß Gott, Gott Zebaoth!

4. Die Apostel und Propheten, * die dich, Höchster dort anbeten, * preisen deine Majestät. * Von den Jüngern die ihr Leben * und ihr Blut für dich gegeben, * du immerdar erhöht.

5. In Personen unterschieden * bist du, Gott; wir glauben hienieden * deine Kirche festiglich. * Dir, o Vater, dir, dem Sohne, * dir, dem Geiste auf dem Throne, * unterwirft und neigt sie sich.

6. Jesus, großer Himmelkönig, * was man spricht ist viel zu wenig * gegen deine Herrlichkeit. * Dich, o alles tief sich beuget, * hat der Vater schon gezeugt vor dem Anfang aller Zeit.

7. Von der Sünde, von dem Bösen * um uns Menſchen zu erlösen, * nimmst du Fleisch im Jungfrau-Schooß. Durch dich sind des Himmels Pforten * deiner Herrlichkeit eröffnet worden; * von dem Tod machst du sie los.

8. Sitzend auf des Vaters Throne * trägst du die Glorietrone; * Glanz und Klarheit ist dein Kleid. Einstens wirst du wieder kommen * und die Sünden aller Frommen * richten in Gerechtigkeit.

9. Herr, wir flehen: Hilf uns allen; * laß uns nicht in den Tod nicht fallen, * für die du am Kreuz erbläst. * Laß daß wir nach unserm Sterben * jene Himmelsgeheimnisse erben, * die du uns erworben hast.

10. Herr, hilf deinem Volk auf Erden; * laß es stets nach weisem Rate * auf dem sichern Lebenspfade und erhöh' es, dir zum Ruhm.

11. Deinen Namen täglich preisen, * allezeit dir zu erweisen, * ist für uns die süß'ste Pflicht. * Laß uns deinen Schutz empfinden; * halt uns heute frei von Sünden, * rein vor deinem Angesicht.

12. Herr, du willst nicht, daß wir sterben, * nein, wir sollen nicht verderben; * o, so zeig uns deine Güte

Schöne gnädig aus Erbarmen, * nimm uns auf mit Vaterarmen, * tilge jede Sündenschuld.

13. Gott und Vater, das Vertrauen, * so wir kindlich auf dich bauen, * laß doch in Erfüllung gehn. * Nichts soll uns die Hoffnung rauben; * stärke sie, stärk' unsern Glauben; * laß uns nicht in Schanden stehn.

➤ キリストの聖体の大祝日

83. 神こそ此處にいませ

『公教聖歌集』(1933)

83 聖 體

1. か み こ そ こ に い ま せ
 た ふ さ き み ま へ に ふ し
 ぶ こ こ ろ を さ さ げ ま つ り

ぬ か づ き を が み ま つ る
 も だ し て ま ち お は す を
 お と な ふ よ る こ び は も

キリカヘシ
 ひ と と な り し 主 せ い ひ つ ぬ ち

ひ せ き に や ど り お は し ま ー し ま す

一 神こそ 此處にいませ
 ぬかづき をがみまつる

(をりかへし)
 人となりし主(聖體ぬち)
 秘蹟にやどり 座し在す

二 みかたち 見まつらねど
 もだして 待ちおはすを

三 ところを ささげまつり
 おとなふ よろこびはも

85

『公會聖歌集』(1930)

御 聖 體 32 一調

1=C

5 | 5 4 3, 5 | 6 5 4 3 | 2-, 0
 た ふ さ き み ま へ に ふ し

5 | 5 4 3, 5 | 6 5 4 3 | 2-, 0
 つ し み を が み ま つ る

(折返し)
 5-2- | 7-5-, | 2-1- | 7-, 0- |
 わ が き み イ エ ズ ス

5 5 6 #4 | 5-5-, | 5 5 4 3 |
 こ も り あ ま す た へ なる

2 3 4-, | 3 45 6 54 | 3 2 1- ||
 ひ せ き さ は に た へ ん

一 たふどき 御まへに伏し
 つしみを がみまつる

(折返し)
 我君(わがきみ) イエズス こもりあます
 たへなる秘蹟(ひせき) 永遠に稱へん

二 みかみよ しゆくし給へ
 われらを やしなふ靈糧

『フルダ 1891』(印刷:1906)

202. G=A Wlch. Geydn. ①

1. Wir be-ten an dich, wah-res En-ge-
 dich, Heiland, Herr, barmherz'ger, gro-ßer
 brot, Sei-lig, hei = lig, hei = lig!
 Gott!

Du bist all-zeit hei = lig. Sei ge-prie-sen oh-ne-Ende!
 in dem heil'-gen Sa-krament!

2. Wir bitten dich, * erbarm dich, liebster Gott, * um!
 segne uns, * gib uns das täglich Brot. * Heilig x.

84. きよけき御身體

『公教聖歌集』(1933)

聖 體 84

1. きよけきみからだ あかきみちしほ
 2. 主よこひねがはく ちにあらはれて
 3. 主よこひねがはく にくにいかさ

われらにたまひて いのちのかてと
 けがれしみのつみゆきとましかるく
 おとるへのみにしちかからかへりて

われとにへせりしかみのあいはもアメン
 あらひすすがれてわがあらましを
 いのちよるこびのとはならましを

四 三 二 一

一 きよけき御身體 あかき御血潮
 われらに賜ひて 生命のかてと
 我と犠牲せりし 神の愛はも

二 主よ乞ひ願はく 血に洗はれて
 けがれし身の罪 雪とましろく
 あらひ滌がれて 吾があらましを

三 主よ乞ひ願はく 肉に生かされ
 衰への身にし ちから歸へりて
 生命よろこびの 永遠ならましを

四 三位のみさかえ いや遠長に
 ひとり御神に よろづ代つかへ
 人みないのち 神に歸へらへ
 アメン

86

『公教會聖歌集』(1930)

1=C 34 ハ調

3 4 3 2 | 5 5 6 i̇ | i̇ 2 i̇ 7 | 6 6 5 - |
 きよきを さめなる はより うまれ

5 6 7 i̇ | 7 5 6 5 | 6 i̇ 5 3 | 6 6 2 - |
 みすくひ のために いけにへ として

5 5 5 3 | 4 5 6 5 | 6 7 i̇ 5 | 4 2 3 - ||
 きよげた まひにし おんみを ほめん

(終りに) 2-1-||
 アーメン

四 三 二 一

一 きよき童貞なる
 御すくひの爲に
 献げたまひにし

二 われらの罪をば
 此上なく尊とき
 流したまひにし

三 パンを御身體に
 御言葉によりて
 御恩恵たまはる

四 聖父聖子聖靈の
 永遠もかきはも
 あめつち舉りて

一 母より生まれ
 織性として
 御身をほめん

二 潔めんために
 天主の眞子の
 御血をほめん

三 葡萄酒を血に
 變化らせ給ひ
 我しゆを讃ん

四 三位の天主に
 御榮光あれど
 謳へよ讃めよ
 アーメン

『フルダ 1891』(印刷:1906)

Fronleichnam.
 E-E Verkürzte Choralmelodie.

90.

(Pange lingua.) 1. Preiset, Lip-pen, das Ge-heim-nis die-ses
 Leibs voll Herrlichkeit und des un-schät-ba-ren Blutes,
 das, zum Heil der Welt geweiht, Je-sus Christus hat ver-
 gos-sen, Kö-nig al-ler We-sen-heit. (Am Schlus.) A-men.

2. Uns gegeben, uns geboren, * von der Jungfrau
 leusch und rein, * ist auf Erden er gewandelt, * Saat
 der Wahrheit auszutreu'n, * und zum Ende seines
 Lebens * seht er dieses Wunder ein.

3. In der Nacht beim letzten Mahle, * wo er mit der
 Jünger Schar * nach der Vorschrift des Gesetzes * bei
 dem Ofterlamme war, * gab mit eigner Hand den Seinen *
 er sich selbst zur Speise dar.

4. Durch das Wort wird Brot zum Fleische * und zum
 Blute wird der Wein, * Gott und Mensch und Leib und

96 Fronleichnam.

Seele; * sieht es auch der Sinn nicht ein, * einem rein
 Herzen g'nüget * fester Glaube schon allein.

5. Tiefgebengt laßt uns verehren * ein so großes Sa-
 krament! * Dieser Bund wird ewig währen, * und
 alte hat ein End'; * unser Glaube soll uns lehren,
 was das Auge nicht erkennt.

6. Gott dem Vater und dem Sohne * sei Lob, Pre-
 und Herrlichkeit, * mit dem Geist auf höchstem Thron
 eine Macht und Wesenheit. * Singt in lautem Jubel-
 tone * göttliche Dreieinigkeit! Amen.

85. 尊ぶとき聖堂ぬち

『公教聖歌集』(1933)

85 聖 體

1. たふときみやぬち 主はおはして
 出をかへたかどの みでしつどへ
 なくてぞえたへぬい のちのかて
 しのひすぎこせの いのちのみけ
 あさなさなたまふ さちよるこびよ
 たふときちとにく かたみのみりよ
 た たへうたも なみだ しみみ
 つぎにつぎて いちとせぞ

三	二	一
あ あ み め ぐ み	こ と ば 人 と な り	尊 と き 聖 堂 ぬ ち
今 は ホ ス テ ア の	た ふ と き 血 と 肉	無 く て ぞ え た ぬ
食 す 身 を 養 な ひ	こ と ば 人 と な り	朝 な 朝 な た ま ふ
う れ し き か も	世 に く だ り て	幸 よ ろ こ び よ
	み す が た も て	主 は お は し て
	い く ち と せ ぞ	い の ち の か て
	い の ち の 御 餐	な み だ 繁 み
	記 念 の 御 式 典 よ	

87

『フルダ 1891』(印刷:1906)

95. C=D Neuere Weise

1. Kommt her, ihr Kre=a=tu=ren all, komm
 kommt her und je=het all=zu=mal, was
 was er=schaffen ist; Das ist das heil'=ge
 da zu=ge=gen ist!
 Sa=kra=ment; das sollt ihr lo=ben oh=ne End'.
 daß ich's lo=ben könnt' all=zeit bis an mein End'
 2. Stimmt an, stimmt an, ihr Seraphim, * die
 von Liebe brennt; * ihr Thronen, Fürsten, Cherubim
 singt, was ihr singen könnt! * Herrschaften, Mächt'
 Kräfte all, * Erzengel, Engel ohne Zahl, * lobsinget oh
 End' * dem höchsten Sakrament!
 3. Ihr Patriarchen allgemein * und ihr Propheten all
 auch ihr Jungfrauen, keusch und rein, * mit der Apo
 Zahl, * ihr Martyrer und Beichtiger * und du gesam
 Himmelsheer, * lobsinget ohne End' * dem heil'
 Sakrament!
 4. O Sonn' und Mond und all ihr Stern', * die
 am Himmel brennt, * lobpreiset mein'n und euren Herr
 im höchsten Sakrament! * All Berg und Tal, all Bäu

und Frucht, * all Laub und Gras, vergeßt es nicht: *
Lobpreiset ohne End' * das heil'ge Sakrament!

5. Ihr Fisch' im Meer, ihr Tier' im Feld, * und was
in Lüften schwebt, * lobsinget dem in aller Welt, * durch
den ihr alle lebt. * Hier ist er in Gestalt von Brot * und
bleibt doch der gewalt'ge Gott; * den lobet ohne End' *
in diesem Sakrament!

6. Ihr all', die hier zugegen sind, * lobsingt mit
Herzensmacht, * sing, jung und alt, sing, Greis und Kind, *
sing', wer zum Himmel tracht'; * dies ist das wahre
Himmelsbrot, * das rettet von dem ew'gen Tod; * drum
preiset ohne End' * das höchste Sakrament!

7. Und du, Maria, Jungfrau rein, * schau deinen
lieben Sohn * bei uns in den Gestalten klein, * bei dir
im Himmelsthron; * hilf, Mutter, uns lobpreisen ihn, *
hilf, daß wir all' empfangen ihn * an unserm letzten
End' * im heil'gen Sakrament!

8. Gott, dir sei Lob im höchsten Thron, * der du uns
Vater bist, * und deinen eingebornen Sohn, * der unsre
Speise ist; * dem Tröster auch der Christenheit * sei
gleiche Ehr' in Ewigkeit; * gelobt sei ohne End' * das
höchste Sakrament!

87. いのちのかてにと

『公教聖歌集』(1933)

87 聖 體

1. いのちのかてにと 主のあたまへましまして
 2. きざのひらけつとる 主のあたまへましまして
 3. わがためしにましまし 主のあたまへましまして
 4. ちちみこみたまの 主のあたまへましまして

たふときちたにくなどうけざらめやら
 まのちあちたなり主のこのこふにいます
 いのちをうけよと 「生命をうけよ」と
 ひせきにありて わがため死にまし
 秘跡にありて ちちみこみたまの
 われを生かします ひとつのみかみよ

四 ちちみこみたまの
 秘跡にありて
 われを生かします

三 わがため死にまし
 「生命をうけよ」と
 ちちみこみたまの

二 昨日の日受けつる
 みめぐみに添へて
 またもあらたなり
 主のたまふちから

一 いのちのかてにと
 主のあたまへましまして
 たふとき血と肉
 など受けさらめや

『公教會聖歌集』(1930)

1=G 33 ト調

1 | 1 2 1 5 | 6 7 1, 3 | 4 2 3 12 | 3 2 1, |
 わがみわがたまをやしなはがために

1 | 2 3 4 4 | 3 3 2, 5 | 6 7 12 3 | 2 2 1 ||
 たふときおんみと おんちをたまひぬ

一	我身わが靈魂を	養はんがために
二	あめなる御門を	開きしいけにへ
三	永遠無窮の生命	みちから賜ひぬ
四	三位のみかみを	われらに授くる
五	たふとき御身を	御血をたまひぬ
六	仇敵を禦ぐべき	世々ほめ稱へん

『フルダ 1891』(印刷:1906)

93. C-G Köfner Pfalter 1891

1. Das Heil der Welt, Herr Jesus Christ, war-
 haf-tig hier zu-ge-gen ist. Im Sa-kra-ment des
 höchte Gut ver-bor-gen liegt mit Fleisch und Blut.

Fronleichnam. 101

2. Hier ist das wahre Osterlamm, * das für uns starb am Kreuzestamm; * das nimmt hinweg von uns die Sünd' * und machet uns zu Gottes Kind.
 3. Das wahre Manna, das ist hier, * davor der Himmel beugt die Knie; * dies ist das rechte Lebensbrot, * das uns beschützt vor ew'gem Tod.
 4. O Arch, o Manna, o Monstranz, * in dir hast du die Gottheit ganz; * in dir ist Gott und Mensch zugleich, * o Sakrament, wie gnadenreich!
 5. O was für Lieb', Herr Jesu Christ, * den Menschen hier bewiesen ist! * Wer die genießt in dieser Zeit, * wird leben in all' Ewigkeit.

88. 秘蹟にこまれる

『公教聖歌集』(1933)

聖 體 88

1. ひせきにこまれる すくひぬしこそ
 2. もろびとひれふしちのはたてまで
 3. むかしはユデアのきかひにおはせ

きよきをとめにしきたりまししかけ
 あさひのめぐりにミサうちつづけり
 いまはくまもなくひとすむかぎり

いまはそをかをばちをやどりせす
 みやむいやさかえほめうたかたし
 ちかくおはしましめぐみをぞたまふ

(前同)	三	二	一
近くおはしまし	昔 <small>むかし</small> はユデアの	もろ人 <small>まろひと</small> ひれ伏 <small>ひたす</small> し	秘蹟 <small>ひせき</small> にこまれる
恵 <small>あま</small> をぞたまふ	いまは限 <small>かぎ</small> もなく	朝日 <small>あさひ</small> のめぐりに	救 <small>すく</small> ひぬしこそ
	人棲 <small>ひと</small> むかぎり	宮居 <small>みや</small> いやさかえ	来 <small>きた</small> りまししか
	境城 <small>さかい</small> におはせ	ほめ歌 <small>うた</small> たかし	地 <small>ち</small> に宿 <small>とど</small> りせず
		地 <small>ち</small> の果 <small>はた</small> まで	

90

90. シオンよ汝が歌を

『公教聖歌集』(1933)

聖 體 (ラウダ シオン) 90

1. シオンよながうたを うたへ高らかに
2. ちからのかぎりもて ながかみをほめよ

ながすくひのぬしを あめのおほきみを
なべてのつくりぬし いかたにたふとも

きみはながかひぬし ながなぞしります
すぎて たたへまつる おそれなどかある

うたへよ そのほめうた あめにひびくま
こらよ ながもださば いしにぞちさげん

一 シオンよ汝が歌を うたへ高らかに
二 汝がすくひの主を あめの大神を
三 君はなが牧ひぬし 汝が名ぞ知ます
四 うたへそのほめ歌 天にひびくまで
五 ちからの限りもて なが神をほめよ
六 なべてのつくり主 いかたに稱ふとも
七 超きて稱へまつる 畏れなどかある
八 子らよ汝が黙さば 石ぞ立ち叫ばん
九 恩ぶそのいにしへ ニサンの夕月
十 照る高樓に主は 十二の御弟子に
十一 きよき肉と血もて おのが身を強ぬ
十二 いのち活くる糧と 法典定めましぬ
十三 すぎこしの祭りは いまぞ新らしき
十四 いのち契りましし 新約の血
十五 流れながれゆきて あまねく人の世
十六 すくひ生かし給ふ み恵みぞかしこ

92

八 見ゆるはホステアの 見ゆるはホステアの
燃えたつころもて 燃えたつころもて
秘蹟にありたまふ 秘蹟にありたまふ

七 御酒は血にかはりて 御酒は血にかはりて
眼に見ゆるならねど 眼に見ゆるならねど
食しまつらねばなど 食しまつらねばなど

六 「斯くにして我をば 御宜の血と肉の
パンの肉血の御酒 日のめぐり行くなべ

五 世のあがなひ爲まく のぼりてみからだを
ゆだねまかせて血を いざや主のいけにへ

九 いみじきたからこそ 御酒のしたたりよ
お坐しかくれたりと 全きみからだを
かてよ飲みのよと みころよたふと

十 ホステアのくだけよ 主はうちこもりて
われらにぞたまはる 食しまつるホステア

十一 みつかひのパンなり イサアクのいけにへ
善きひつじかひなる いく千代かはりなき

十二 手負ひし小牡鹿の 谷にあへくごと
つかれいきづきつつ 主を戀ひこひて
傷手いやしたまふ 愛によるこの身

十三 あなや主は我歌 上なきよるこび
わがつよき行よ わがたき城よ
世を知召す主を 友よほめうたへ
いざや衆り歌へ 聲のかぎりして

十四 主よ御入る時 わが靈魂をば
聖けき體にぞ 迎へたまへかし
心禮装とのへ 心まへに進みて
かがやきの聖委 喜びぞがまん

93

『公教會聖歌集』(1930)

1=D 36 調 変

5 | i 5 6 i | 5 4 3 - | 1, 5 5 i | 7 i 6 6 | 5 - , 0
シオンのひ さびさ よほめう たなうた ひ

5 | i 5 6 i | 5 4 3 - | 1, 5 5 i | 7 i 6 6 | 5 - , 0
さ はにあが めまつ りまご るつくし て

5 | 3 1 6 5 | 4 3 3 - | 2, 2 2 3 | 4 3 5 3 | 2 - , 0
す くひぬし にあま すひつじ もりのな さ

5 | 3 1 6 5 | 4 3 3 - | 2 - , 0 i | 6 5 4 3 | 3 2 1 ||
よ るこびた ムへよ ヤ よ るこびた ムへよ

一 シオンの人びとよ
ほめ歌をうたひ
永遠に崇めまつり
まごゝろ盡して
救世ぬしにります
牧羊者等の首長
よろこび稱へよや
よろこび稱へよ

八 葡萄酒を御血なる
 執れを領くるとも
 永遠無窮の生命を
 めぐみこそ妙なれ

九 天よりくだりにし
 救ひ主 イエズ、よ
 しんかうと希望と
 齋きまつらせてよ

十 わが身も我が靈も
 拙なき此の身をば
 此の世に在る間も
 さきはひ給ひてよ

パンを御身なる
 御恩寵かはらず
 我が身に與ふる
 めぐみぞ妙なる

眞實のパンなる
 われ等を憐れみ
 龍くしみを増し
 いつき奉らせよ

みな献げまつる
 憐れみめぐみて
 世を去りて後も
 さきはひ給へよ

四七

五 パンは主の御身体
 くすしき變化をば
 救ひの御めぐみを
 主を稱へまつらん

六 我眼にこそ見えす
 かしこみ領くる時
 主ぞわれと一つに
 いごと奇しきかな

七 葡萄酒のいろにも
 主のかくれ在らず
 おん身はわれの糧
 領くる身ぞ嬉しき

葡萄酒は主の血
 かしこみ仰ぎて
 祈りもごめつ、
 主をたへ奉る

分明に證悟らね
 我身に入り來て
 ならせ給ふなる
 いごと奇しきかな

パンの形にも
 奇しき御工なる
 御血は飲みもの
 領くるぞ嬉しき

二 秘蹟にこもり在す
 尊とき我が主をば
 ちからの有る限り
 讃め稱へまつれよ

三 尊き主 イエズは
 定めまし、式典を
 傳へしめたまひて
 世に遺したまへり

四 主は御靈言を以て
 我等がたすかりの
 深き御いつくしみ
 ほめ歌ひまつらん

御前にひれ伏し
 聲の有るかぎり
 高らかにうたひ
 讃め稱へまつれ

最終の聖晚餐に
 紀念にせよとて
 永遠無窮の生命
 世に遺しませり

パンと葡萄酒を
 犠牲と成ませる
 永遠に畏こみつ
 ほめ歌ひまつる

四五

『フルダ 1891』 (印刷 : 1906)

91.  **91.** *(Lauda 1. Zion)* Auf! Zi-on, prei-se dei-nen Kö-nig, den Hei-land preis, o Chri-sten-tum! Was al-leß; es ist doch zu wo-nig, was du be-ginnst zu sei-nem Ruhm. *Ende*
 dei-nen Hir-ten hoch zu lo-ben; ihm tö-ne laut
 Ju-bel-klang. Sing, was du kannst; er ist er-ho-ben hoch ü-ber al-len Lob-ge-sang.
 2. Dem Brot gebühren Lobgesänge, * das lebt in uns heute vor die Augen stellt. * Dies ist das Brot, * in dem Saale, * in jener großen Salems-Stadt, * zu letzem Abendmahl * der Jünger Schar genossen

Fronleichnam. 97

3. Süß, mutig, prächtig müsse schallen * ein jauchzend Lob- und Freudenlied; * es müsse lieblich widerhallen * im ganzen Christenvolks-Gebiet! * Denn heute wird der Tag gefeiert, * an dem der Herr der Zwölfen Zahl * sein Fleisch, in Brots-gestalt geschleiert, * zur Speise gab zum erstenmal.

4. Bei diesem Tische ward geschlossen * des neuen Königs Testament. * Die neuen Oestern sind entsprossen, * die alten haben nun ein End'. * Der Vorzeit Schatten sind entschwunden, * die Wahrheit glänzt mit aller Pracht. * Das Neue haben wir gefunden; * das Licht vertreibt die finstre Nacht.

5. Was Jesus uns hat wollen schenken * beim Tisch, und was er da getan, * das soll zu seinem Angedenken * gesch'h'n; sein Will' geschieht hieran. * Drum fahren Priester fort zu wandeln * das Brot, den Wein auf dem Altar * und bringen, da sie also handeln, * Gott ein gefällig Opfer dar.

6. Das Brot wird wunderbarer Weise * zu wahren Fleisch, der Wein zu Blut. * Sie sind der Seelen Trank und Speise; * sieh, was die Kraft der Worte tut. * Kein Mensch kann dieses Wunder fassen; * den Sinnen bleibt es zugedeckt. * Die Seele muß sich führen lassen * vom Glauben, welchen sie erweckt.

7. Kein Wesen, nein, nur Brots-gestalten * sind es, die unser Aug' erblickt; * es ist darin für uns enthalten, * was selbst die Seraphim entzückt. * Das Fleisch ist eine wahre Speise, * das Blut ein Trank für jung und alt. * Tod ist der Christus, den ich preise, * ganz in der Brots- wie Weins-gestalt.

8. Wenn wir sein Fleisch und Brot genießen, * bleibt Jesus ganz und unzerstückt. * Sein heil'ger Leib wird nicht zerrissen, kein Glied zerbrochen und entrückt. * Wenn einer ist und tausend essen, * so werden alle gleich ernährt; * sein Leib (das sollst du nicht vergessen) * wird durch das Essen nicht verzehrt.

7

9. Es stellt der Böse samt dem Frommen * bei dem heiligen Mahl sich ein; * doch weil sie beide un- kommen, * muß ungleich auch die Wirkung sein. * Ist der Fromme sich das Leben, * der Sünder ist da den Tod. * O Sünder, wolle dich bestreben * nicht zu essen dieses Brot.

10. Wenn nun das Sakrament gebrochen * in E und zerteilt wird, * muß sich dem Glauben in jochen * der Sinn, der sonst sich leicht verirrt. * Jedem Teil ist ganz verborgen, * was noch zuvor Ganzen war. * Dies halte fest und ohne Sorgen * so gewiß, als wunderbar.

11. Nur jenes, was die Sinn' erreichen, * (das verborg'ne Wesen nicht) * nur jenes äußerliche Zei- ist es, das man in Stücke bricht. * Die Stellung nicht umgestürzt * an dem, der hier zugegen ist. * seinem Leib wird nichts verkürzt, * ganz unverletzt Jesus Christ.

12. (Ecco panis.) Das Brot der Engel, das Leben * samt Gott- und Menschheit in sich hält, * Speise wird dies Brot gegeben * uns Wanderern dieser Welt. * Fürwahr, ein Brot der Gotteskinder, * man dem Hund nicht geben soll, * Dies Brot ist nicht dich, o Sünder, * du seist denn Schmerz- und reu.

13. Zum Voraus war dies Brot in Bildern * auf mannigfache Art; * im Schatten sollt' es schildern, * da er dem Herrn zum Opfer ward. * Himmelsbrot, mit dem sich nährte * das Volk im Testament; * das Lamm, das Israel verzehrte, * reicheten hier ihr Ziel und End'.

14. Erbarm dich, Jesus, unsrer Seelen, * o guter du wahres Brot; * verzeih uns, die wir öfters sei- und übertreten dein Gebot. * Ach weide die, die da trauen, * und schütze sie in dieser Zeit. * Laß uns Himmelsreiche schauen * dein Antlitz durch die Er-

15. O du, vor dem sich nichts verhüllet, * vor sich nichts verbergen kann; * du, dessen Hand mit

uns füllet, * o Gott, hör unsre Seufzer an! * Laß uns, o Herr, dereinst gelangen * zu deinem Tisch im Himmels- reich * und mach, ist diese Zeit vergangen, * uns dort den Himmelsbürgern gleich.

91. 天使のパン

『公教聖歌集』(1933)

聖 體 91

1. みつかひのパンたびぢのかて
2. キリストいまはこのみかてに

あめのマンナよ うゑしわれらの
かくれやおはせ みくにいりせば

ここにきたり みちさそたまへ
まみえぞまつる ただにさやか

ニ

見えぞまつる
直に分明に

隠れやおはせ
み國入りせば

このみかてに
キリスト今は

一

天使のパン
たび路のかて
あめの饗饌よ
饑えし我等の
ここに來り
満ちさせ給へ

94

『公教會聖歌集』(1930)

1=G 38 ト調

5 | 1 7 1 2 | 3-2, 5 | 67 1 2 17 | 1-,
た びぢの か て み つ か ひ の パ ン

5 4 | 3 5 4 3 | 2-, 3 2 | 1 23 4 3 | 2-,
あ め の マ ン ナ よ う ゑ て も さ む る

3 2 | 1 1 4 3 | 2-, 5 4 | 3 43 2 2 | 1-0 ||
わ れ ら が こ ゝ る み ち た ら は せ よ

ニ

今キリストは
パンの形色に
隠れ在せど
天國に昇らば
最鮮明にぞ
見奉まつらん

一

旅客の糧
聖天使のパン
天の奇饌よ
餓えて求むる
われ等が心
満足らはせよ

『フルダ 1891』(印刷:1906)

68b. C-c Simburg, G. 27

1. Ge-lobt sei Gott der Va-ter au-
und auch der Se-sig-ma-cher, sei-

sei-nem höchsten Thron R. Sei-lig-ste Drei-falt-

ein-ge-bor-ner Sohn. fei-

feit, un-zer-teil-te Ei-nig-keit! Jung und alt

groß und klein, preist Gott al-le as-ge-mein

Bei dieser Singweise werden die vorstehenden Strophen in je 2 Stro-

die zweite Str. beginnt: Gelobt sei auch der Tröster; - die 3.: Berlei-

die Gemüter; - die 4.: 'Berleib', daß u. f. w.

92. 秘蹟にこもりて

『公教聖歌集』(1933)

92 聖 體

1. ひせきにこもりて われらのう
 品あやになつかしき なぐさめぬ
 ちにとどまりたまへるをがみ
 しよさみしきひのともこころ
 まつれば ああエマヌエルよ こころ
 のかてよ きみしましませば よにお
 になだよふ くしきやすけさ
 それあらず くしきへいわよ

一 秘蹟にこもりて
 われらのうちに
 とどまりたまへる
 をがみまつれば
 ああエマヌエルよ
 心にただよふ
 奇しきやすけさ

二
 あやになつかしき
 なぐさめぬしよ
 さみしき日の友
 こころのかてよ
 君に在しませば
 世に怖れあらず
 奇しき平和よ

95

『公教會聖歌集』(1930)

1=D 35 ニ調

5 3 1 | 17 1 | 25 4 | 43, 0 | 3 2 1 | 64 2 | 1-7 |
 あいなるわがきま いじきなぐさ
 1-0 | 5 3 1 | 17 1 | 25 4 | 43, 0 | 3 2 1 | 64 2 |
 めめぐみのいつみよいのちのか
 1-7 | 1-0 | 5 5 5 | 6-6 | 7-7 | 1-0 | 5 4 3 |
 てよきみをこそめうみか
 6-4 | 25 4 | 43, 0 | 3 2 1 | 64 2 | 1-7 | 1-0 ||
 はくごさくしたひまつりて

一 愛なる我が君 美しきながさめ
 めぐみの泉よ いのちのかてよ
 君をこそ望め 飢え渴くごさく
 慕ひまつりて

二 秘蹟に籠れる 愛しきわがさみ
 我靈に入りて やしなひとなり
 永遠のいのち 清き永久の幸福
 御ちから賜へ

四三

『ケルン 1908』(印刷: 1912 頃)

130 Fronleichnamsgesänge.

1. Es. 3/4 1. ||: 5 3 1 | 17 1 |
 Nr. 87. { Du Gottmensch bist mit
 Und dein Ge = nuß, o

2 5 4 | 4 3 0 | 3 2 1 | 6 4 2 |
 Fleisch und Blut Wahr = haf = tig hier zu =
 höch = fles Gut, Bringt mei = ner See = le

1 . 7 | 1 . . : || 5 5 5 | 6 . 6 | 7 . 7 |
 ge = gen, } Dir, ew'ge Wahrheit, glau = be
 Se = gen. }

1 . 0 | 5 4 3 | 6 . 4 | 2 5 4 | 4 3 0 |
 ich, In diesem Glauben stärke = fe mich,

3 2 1 | 6 4 2 | 1 . 7 | 1 . . ||
 Bis ich dich e = wig je = = he!

2. Dein Fleisch und Blut wird meinem Geist
 * Zum Guten Stärke geben, * Und führt mich,
 wie dein Wort verheißt, * Gewiß zum ew'gen
 Leben. * Dir, gut'ge Allmacht, traue ich, * In
 dieser Hoffnung stärke mich, * Bis ich dich einst
 besitze.

3. Du starbst für mich und setztest ein *
 Dies Denkmal deiner Liebe, * Daß du ganz
 mein und ich ganz dein * In Ewigkeit ver =
 bleibe. * Mein Jesu, liebvoll dank' ich dir: *
 Vermehre deine Lieb' in mir, * Laß mich dich
 ewig lieben!

93. よろこびの國の

『公教聖歌集』(1933)

聖 體 93

1. よろこびのく-に-のおほぎ-みに
 2. わがしたひま-つ-る きみが-みか
 ま-す-主 みも-ろ-におはして
 ら-だ-よ かり-ほ-はいぶせし
 われ-ら-にちかづき かぞへ-もつ-
 かし-こ-みもあらず はづか-しめ-
 きせぬ みめ-ぐ-み-を-ぞた-ま
 さはに しぬ-び-や-お-はす-らみ

三 二 一

つぐのひ祈りて 主(ま)に仕(つか)へ奉(た)らん
 率(り)へりくだりて 禮(れい)まひ奉(た)らん
 數(た)多(た)主(ま)を無(な)みし 畏(おそ)れなきひとに
 はづか(は)しめ多(た)に 忍(しの)びや在(あ)らずらん
 假(かり)宮(みや)はいぶせし 畏(おそ)こみもあらず
 わが慕(こ)ひまつる 君(きみ)がみからだよ
 數(た)へもつきせぬ み惠(めぐみ)をぞたまふ
 聖(せい)體(たい)におはして われらに近づき
 一(いつ) よろこびの國(くに)の 大(だい)君(きみ)にます主(ま)主(ま)

96

『公教會聖歌集』(1930)

1=E 39 變(へい)ホ調(てい)

5 | 3 2 1 3 | 54 34 2, 5 | 3 23 1 3 |
 よ ろ こ び た へ よ ひ せ き に あ
 34 56 2, 2 | 43 21 2 2 | 1 2 3,
 も り て わ れ ら さ す み ま す
 2 | 43 21 2 2 | 1 2 3, (折返し) 5 |
 た ふ さ き し エズ た
 1 12 3 34 | 5 6 5, 5 | 17 65 65 34 | 5 42 1 ||
 え せ ず た へ よ さ き は ひ た ま ふ し

四 門(かど)こそ此(こ)所(ところ)なれ	三 あめなる御(み)國(くに)の 擲(ひ)飲(び)て崇(た)めよ	二 つぎせぬ生(いの)命(ち)の こよなく樂(たの)しき	一 たへなる平(へい)安(あん)の 絶(た)えせず稱(た)へよ (折返し) 我(われ)等(ら)ど任(ま)りまます	よろこび稱(た)へよ 秘(ひ)蹟(せき)に天(あ)降(り)て 聖(せい)主(しゅ)にエズス
いざみな詣(ま)りてよ	光(ひかり)榮(え)に入る(い)るべき	愛(あい)なるわがきみ くすしき真(ま)清(しみず)水(みづ)	溢(あふ)るゝところぞ 此(こ)所(ところ)なる御(み)殿(でん)堂(どう)	さきはひ給(たま)ふ主(ま)

『ケルン 1908』(印刷: 1912 頃)

Prozessions-Lied.

Nr. 90. 1=Es. 5/4

1. O höchstes Gut, o Heil der Welt!
 Der Friede ruht in deinem Zelt,
 Dir nei = get sich der Erden = kreis,
 Wir grü = ßen dich mit Eh = renpreis:
 R. Sei hoch = ge = lobt in Ewigkeit,
 O Sa = tra = ment der Se = ligkeit!

2. Du Lamm, zum Opfer auserwählt, * Am Kreuzestamm mit uns vermählt, * Dir folgt geschmückt die Hochzeitschar * Und bringt entzückt dir Blumen dar. * R. Sei hochgelobt zc.

3. Dein siegreich Kreuz strahlt hell hervor, * Die Fahnen flattern hoch empor, * Es grüßt der Glocken Feierton, * Dir jubelt alles, Gottes Sohn! * R.

4. Der Weihrauchdust und Festgesang * Erfüllt die Luft den Weg entlang; * Die Liebe schmückt den Altar * Und bringt dir Jubellieder dar. * R.

5. Froh stimmt ein der Vögel Chor, * Ihr Loblied dringt zu dir empor; * Dir huldigt Feld und Wald und Flur, * Da du durchwandelst die Natur. * R.

6. Wir beten an, o höchstes Gut, * Im Staub gebeugt dein Fleisch und Blut; * Du gibst dich uns, o Himmelspfand, * Wir geh'n mit dir zum Vaterland. * R.

7. Herr, öffne deine milde Hand * Und segne uns und Stadt und Land; * Nimm uns, o Herr, in deine Hut, * Die du erkaufst mit deinem Blut. * R.

8. Entfernen von unsern Hütten weit * Krieg, Brand und Pest und teure Zeit; * Erhalt den Frieden uns, o Gott, * Und gib uns unser täglich Brot. * R.

9. Im wahren Glauben halt uns treu, * Von allem Übel mach uns frei; * Laß hier der Tugend Weg uns geh'n * Und selig dort dein Antlitz seh'n. * R.

94. ああ主よ眼にこそ見えねど

『公教聖歌集』(1933)

94 聖 體

1 ああ主よ眼にこそ見えねど
 2 じじかにかみのきがかくれ
 いまよせいいたぬちおはす
 パンぬちひとのさがさへも
 こもりみかくりみかしこし
 みかくりかくろひ主おはす
 をがみまつるそのみかしら
 みことかしこみわれしんぞ

三 トマスの疑雲うち晴れ
 聖なる生命よこもりて
 いざ弱き我を生かせよ
 (C. Schmalz)

二 十字架に 神の性かくれ
 薔薇ぬち人の性さへも
 身隠り 隠ろひ 主おはす
 御言かしこみわれ信す

一 ああ主よ 眼にこそ見えねど
 いまよ聖體ぬちおはす
 をがみまつるその御體

97

『フルダ 1891』(印刷:1906)

94. G-A Stöln 1623.

1. O Christ, hier merke den Glauben
 stark und schau dies Werk; dies Brot all Gut, Gott,
 Fleisch und Blut ent-hal-ten tut. R. A-ve Je-su,
 wah-res Man-hu, Chri-ste Je-su! Dich, Je-sum
 süß, ich herz-lich grüß', o Je-su, süß!
 2. In der Monstranz * ist Christus ganz, kein Brot-
 substanz; * vom Brot allein Gestalt und Schein vor
 Augen dein. * ∴ Ave Jesu etc
 3. Kein Brot ist da, * nicht bei, noch nah in Hostia. *
 Was darin ist, Herr Jesu Christ, du selber bist.
 4. Nun beug die Knie, * Gott selbst ist hier, weigt du

102 Fronleichnam.

nicht, wie. * Wie das geschieht, der Glaub' wohl sieht
 das Auge nicht.
 5. Mit Cherubim * und Seraphim erhebe die Stimme
 und preise Gott, Gott Sabaoth, in diesem Brot.
 6. Vor meinem Tod * in letzter Not, Christ, Mein
 und Gott, * gib diese Speis' mir auf die Reif' zu
 Paradies.

➤ イエスの聖心の大祝日

95. 愛のいけにへの

『公教聖歌集』(1933)

聖 心 95

1. あいのいけにへの 主のみこころこそ
 是つみとがけがれを たふときちしほに
 是きみがみこころを かがみとあふぎて

われらのごみ うきよのなぐさめ
 あらひきよめて わがすくひぬしの
 おもひをきよめ あゆみをただして

つきぬよるこびの くをんの一いづみ
 おほみこころをば かましくみ
 さかえのかむりを えましくほりする

四 三 二 一

君がみこころに 我等は祈らなん 聖教のひかりを 君がみこころに
 愛のいけにへの 主の聖心こそ
 われらのごみ 愛世のなぐさめ
 盡きぬ喜びの 久遠のいづみ
 つみとが穢れを たふとき血汐に
 あらひきよめて 我がすくひ主の
 大御心をば 畏こみゆかなん
 君がみこころを かがみと仰きて
 おもひを浄め あゆみを匡して
 榮光のかむりを 得まく欲りする
 我等は祈らなん 國々島々
 聖教のひかりを かしこみ仰きて
 君がみこころに 添ひまつる日を

98

『公教會聖歌集』(1930)

耶 蘇 の 聖 心 44 = 調

1=D

3 4 5 3 | 4 2 3 4 5 | 3 4 5 3 | 4 2 3 4 5 |
 あいのい けにへの 主のみこ ころこそ

6 7 1 5 | 4 3 3 2 | 4 4 3 2 | 5 5 4 3 |
 われらの のごみ このよの なぐさめ

4 4 3 2 | 5 5 4 3 | 6 7 1 6 4 | 3 2 1 - ||
 つきせぬ よるこび 主はのさ ちなれ

四 三 二 一

君がみこころに 聖教のひかりに 國々島々 聖教のひかりに
 愛のいけにへの 主の聖心こそ
 われらのごみ 愛世のなぐさめ
 盡きぬ喜びの 久遠のいづみ
 つみとが穢れを たふとき血汐に
 あらひきよめて 我がすくひ主の
 大御心をば 畏こみゆかなん
 君がみこころを かがみと仰きて
 おもひを浄め あゆみを匡して
 榮光のかむりを 得まく欲りする
 我等は祈らなん 國々島々
 聖教のひかりを かしこみ仰きて
 君がみこころに 添ひまつる日を

98

『フルダ 1891』(印刷:1906)

92. (Lauda Sion) 1. Dei-nem Heiland, dei-nem Leh-rer, Si-on
 dei-nem Hir-ten und Er-näh-rer, Si-on

stimm ein Lob-lie-d an; preis nach Kräf-ten sei-ne
 da kein Lob-spruch, sei-ne

Wir-de, Zier-de sei-ner Grö-ße glei-chen kann.

2. Dieses Brot sollst du erheben, * welches lebt und gibt das Leben, * das man heut den Christen zeigt — * dieses Brot, das einst im Saale * Christus bei dem Abendmahle * den zwölf Jüngern dargereicht.

3. Unser Lob soll laut erschallen * und das Herz in Freude wallen; * denn der Tag hat sich genah't, * da der Herr zum Tisch der Gnaden * uns zum erstenmal geladen * und dies Brot geopfert hat.

4. Statt des unvollkommenen Alten, * statt des Osterlamm's erhalten * wir ein neues Sakrament; * sieh, der Wahrheit muß das Zeichen, * wie die Nacht dem Lichte weichen, * und das Vorbild hat ein End'.

5. Was von Jesu dort geschehen, * sollen wir, wie er, begeh'n * zum Gedächtnis seinem Tod, * uns zum Heile, ihm zur Ehre * weihen wir nach heil'ger Lehre * hier zum Opfer Wein und Brot.

6. Doch, wie uns der Glaube lehret, * wird das Brot im Fleisch verlehret * und in Christi Blut der Wein; *

was dabei das Aug' nicht sieht, * dem Verstande selb entfliehet, * sieht der feste Glaube ein.

7. Unter zweierlei Gestalten * große Dinge sind gehalten, * eingehüllt der Gottheit Glanz: * Blut als Trank und Fleisch als Speise; * doch auf wunderbare Weise lebt in beiden Christus ganz.

8. Wer zu diesem Gastmahl eilet, * nimmt ihn ganz und ungeteilt, * ungebrosen, unverzehrt. * Einer kommt und tausend kommen, * keiner hat doch mehr genommen und der Herr bleibt unverzehrt.

9. Fromme kommen, Böse kommen, * alle haben genommen, * die zum Leben, die zum Tod. * Bösen merkt er Straf und Hölle, * Frommen ihres Heiles Quelle so verschieden wirkt dies Brot.

10. Teilt man endlich die Gestalten, * so wird jeder Teil enthalten, * was das Ganze selber ist; * nicht die Wesen, nur das Zeichen * kann die Teilung hier erreichen; * ungeteilt bleibt Jesus Christ.

11. Sieh, dies ist das Brot der Kinder, * der Gerechten nicht der Sünder, * welches auch die Engel nährt; * war schon im Mannabrote, * in des Osterlammes Tod und in Isak vorerklärt.

12. Guter Hirt, du wahre Speise, * Jesu, stärke uns auf der Reise * bis in deines Vaters Reich; * nähr uns hier im Jammertale, * ruf uns dort zum Hochzeitsmahl mach uns deinen Heil'gen gleich.

96. きよけき主の愛

『公教聖歌集』(1933)

96 聖心

1. きよけき主の愛を われらの心に
 主とのひはげしく もえや このほのぼの
 あいのひはげしく もえや このほのぼの

もえしめたまへに このまこと
 あがれそらのくにに このまこと
 みよこにさびさぐれたばとよひにうけたまへに

三 愛の火はげしく 燃えずてやはある
 みよこにさびさぐれたばとよひにうけたまへに
 永久にかがやく

二 主と共に生きて その愛のほのぼ
 あがれ空へに あまつみにて
 よろこびの歌の ひびかふまでに

一 きよけき主の愛 われらの心に
 燃えしめたまへ この身と靈魂とを
 み手に捧ぐれば 主よ受けたまへ

99

『ケルン 1908』(印刷: 1912 頃)

Mr. 101. 1=F. 1 2 3 3 | 3 3
 4/4 1. O Herz Je = su, Sitz der
 3 2 | 2 3 4 4 | 4 4 4 3 |
 Lie = be, Zieh mein Herz mit heil'gem Trie = be
 3 3 2 3 1 | 7 6 5 5 | 5 3
 Zu dir hin, o höch = steß Gut! Laß es
 1 7 | 1 3 3 2 | 2 7 5 5 | 2 2
 sein, wie du ge = we = sen, Ein Al = tar, der un = ver =
 2 1 | 2 3 4 3 | 4 5 6 5 | 2 3
 we = sen, Brenn' vor reiner Liebes = glut, Brenn' vor
 4 2 1 | 3 2 1 7 1 | 5 ||
 rei = ner Lie = bes = glut.

2. Sieh, o Jesu, sieh mein Sehnen, * Sieh
mein Aug' voll heißer Tränen * Und mein
Herz von Lieb' entflammt! * Hilf mir, Jesu,
dich nur lieben, * Stets in dieser Lieb'
mich üben, * |: Die aus deinem Herzen
flammt. :|

3. Ach, in dieser Lieb' mich halte! * Jesu,
daß sie nicht erkalte, * Schließe in dein Herz
mich ein. * Dort allein mit dir zu leben, *
Deiner Lieb' ganz hingegeben, * |: Soll mein
Trost, mein Leben sein. :|

4. Fort, o Welt, ich hab's versprochen, *
Deine Bande sind gebrochen, * Fort, o Welt,
nun bin ich frei! * Denn dein Lieben ist nur
Lügen, * Deine Freuden nur betrügen, * |: Je-
sus ist allein getreu. :|

5. Er allein gibt wahre Freuden, * Er
allein versüßt das Leiden, * Er allein bringt
Trost im Schmerz. * Kommt, ihr Herzen,
kommt mit Hoffen, * Kommt, die Liebestür steht
offen. * |: Kommt zum süßen Jesu-Herz! :|

97. しらべもたへに

『公教聖歌集』(1933)

聖 心 97

1. しらべもたへに こゑたからに
 主のみこころをほめたたへよ
 いざやもろびととこしなへに
 ほめたたへよ 主のみこころ
 主のみこころ

一 しらべもたへに こゑたからに
 主のみこころを ほめたたへよ

(をりかへし)
 いざやもろびと とこしなへに
 ほめたたへよ 主のみこころ

二 なやみくるしみ 汝がためにし
 みこころこそは 受けましけれ

三 愛の火もゆる 主のみこころ
 めぐみあふれて なれを光たす

100

『公教會聖歌集』(1930)

1=F 45 へ調

1 | 1 3 5 6 | 5 4 3, 5 | 4 3 2 2 | 1-0
 こ ゑたから かに し らべあは せ

1 | 1 3 5 6 | 5 4 3, 5 | 4 3 2 2 | 1-0
 き みのみこ ころ ほ めたたへ よ

(折返し)
 5 | 2 3 4 3 | 3-2, 2 | 3 4 5 5 4 | 5-0
 ほ めたたへよ と こしなへに

5 | 1 3 5 6 | 5 4 3, 5 | 1 1 2 3 | 4-0
 き よきイエズ スのお ほみこころ

2 | 3 5 4 3 2 | 1-0 ||
 た へまつ れ

一 聲 たらからかに
 君の御あはせ
 讃めたるよ

(折返し)
 ほめよ稱へよ
 聖きイエズスの
 おほみこころの
 たへまつれ

二 我か な た お 聖 ほ
 の た ぎ や た お 聖 ほ
 み め り み た お 聖 ほ
 こ う も み へ ほ き こ
 け な し ま ほ き こ
 ろ し く み つ れ ろ の へ

103. イエズスの聖心
『公教聖歌集』(1933)

103 聖 心



1 イエズスのみこころ われらのたすけよ
 2 いつつのみきずは あげにそみたまひ
 3 みてにつくわれぞ いざいさみたてよ

よのた-かひに きずつ-きつかる-る
 われらの-ために いたみ-くるしみ-て
 みむねの-ままに たたか-ひふるひ-て

このみのと りでと きみや た-たせる
 にぶれるところを はげまし-たまふ
 かちのかむりをば あめにう-けまし

四	三	二	一
君はわがのぞみ いのちの清水 裂かれし御臨に ほとばしる泉 我が愛にこそ	勝利の冠をば あめに受けまし みむねのままに たたかひ振ひて いざ勇み立てよ	鈍れるところを はげましたまふ われらの爲めに 痛みくるしみて 五つの御きずは あけに染み給ひ	イエズスの聖心 世のたたかひに この身の償と きみや立たせる われらの助けよ 傷つきつかるる

107

107. よろづの國の

『公教聖歌集』(1933)

聖 心 107

1. よろづのくにの きみたる イエズス
 2. わがひのもと のくにをさきはひ
 やまとのくにを なれにぞささぐ
 かみのみくにと なさしめたまへ
 きみのみこころに われらとこしへに
 まごとをぞちかはし 主よわたりたまへ

三 間(ま)にむか伏(ふ)す 敵(てき)をくじきて
 み旗(はた)のもとに かちうたあがる

二 わが目(め)のもと の國(くに)をさきはひ
 神(かみ)のみくにと なさしめたまへ

(をりかへし)
 君(きみ)のみこころに 我等(われら)とこしへに
 忠誠(ちゅうせい)をぞ誓(ちか)はん 主(ま)よ王(わ)たり給(たま)へ

一 よろづの國(くに)の 君(きみ)たる イエズス
 やまとのくにを なれにぞささぐ

111

『公教會聖歌集』(1930)

大和を聖心に

1=B 107 調 6/8

5. 5 | 1. 3 4 5 | 6 - , 6. 6 | 2. 1̇ 7 6 | 5 - ,
 ばん こくのしよ やま とのくにを

5. 5 | 6. 2 3 4 | 3 - , 5 6 | 7. 6 5 4 | 5 - ,
 しよの みこころに ささ げまつらん

5. 5 | 1. 3 4 5 | 7 6, 2. 2 | 5. 3 3. 2 | 2 1,
 わが きみ イエズ スにいま こそつかへん

5. 5 | 3. 3 2 1 | 2 1, 4. 4 | 3. 1 6. 7 | 7 1 ||
 さこ しへのち かひしよ わたりたまへ

三 聖(せい)心(しん)のくに
 いさをしの武士(ぶし)
 わめにて榮(さか)へん

二 御(み)王(わ)國(くに)の勝(か)利(り)を
 打(う)伏(ふ)す イエズス
 ともにて得(え)させよ

(し返折)
 我(わ)君(きみ) イエズスに
 今(いま)こそつかへん
 主(ま)よ王(わ)たり給(たま)へ

一 万(ばん)國(こく)の主(ぬし)よ
 主(ま)のみこころに
 ささげまつらん
 やまとのくにを

4.1.3 キリスト、マリア、天使、聖人、への賛美の
聖歌

➤ 主・キリストに対する賛美の聖歌

108. われら神を讃め

『公教聖歌集』(1933)

主に対する讚美 (テアリア) 108

1. われら一かみをほめ 主とぞたへまつる
2. せいなるわがみかみ
とこしへののちを あめつちほぐなべに
とよる一づのいき ひきみきたまわが主
みつかひらたふ ケルビム のうた
あめつちにみつ そのみさかえと
セラフム のうた まなく一ひまなし
さけぶそのこゑ みそらにとよむ

四 三 二 一

われら神を讃め 主とぞ稱へ奉る
とこしへの父を 天地脱ぐなべに
みつかひらたふ ケルビム のうた
セラフム の歌 間なくひまなし
「聖なる聖なる 聖なるわが御神
ちよろづの軍 率来たまふ我主
あめつちに滿つ その御榮えと
さけぶそのこゑ みそらに響む
尊ときみ弟子ら 聖ある聖者ら
命をささげし 証し人らこそり
生みに届くもの 証し人らこそり
堂りもあらぬ 御後成がやく
父と子と聖靈 三つに御座せど
ただひとり神 世を救ひの爲に
をとめにやどり 天にゆきたまふ
死と陰府に勝ち 天にゆきたまふ

六 五

主よ御民のため 主よ御民のため
み國の榮光をば 主よ御民のため
かぎりなく保ち 主よ御民のため
日にけに守ませ 主よ御民のため
われらはいのる 主よ御民のため
きみのあはれみ 主よ御民のため
主よるわれに 主よ御民のため
罪な賜ひそ

『公教會聖歌集』(1930)

天主を讚美する 74 へ調

1=F

1-1 | 17 1 | 23 2 | 1-0 | 3-3 | 32 1 | 5-3 | 32, 0 |
ほめよたへよ とこしへのちよな
1-1 | 17 1 | 23 2 | 1-0 | 3-3 | 32 1 | 5-3 | 32, 0 |
たへよほめよ あめなるみかみを
2-3 | 4-2 | 3-4 | 5-0 | 6-6 | 54 3 | 43 2 | 1-0 |
いくちよるづの みつかひたちも
2-3 | 4-2 | 3-4 | 5-0 | 6-6 | 54 3 | 43 2 | 1-0 ||
せいなるかなと たえずぞうたふ

一 讚めよ稱へよ とこしへの父を
稱へよ讚めよ あめなる天主を
幾千よろづの みつかひたちも
聖なるかなと 絶えずぞうたふ

二 世にも遍ねき 聖なるつどひは
御稜威長とき ちくなる天主と
尊とき聖子と なぐさめぬしの
聖靈をおがめ みな讚めうたふ

三 父なるかみの 永の聖子にます
光榮のきみぞ 世を救はんため
かゝやく天の み宮殿をあどに
童貞にやどり 世に生れませる

四 よみに打勝ち 天の門ひらきて
父のさかえの 右にのぼりまし
この世の末に あらゆるひとを
さばかん爲に あらはれたまふ

五 尊とき血にて わがなひ給ひし
我らを祝福み 聖人等とともに
あまつみ國の 永久のさかえの
輝やくうちに 入らしめたまへ

六 ほめよ稱へよ 聖父聖子聖靈の
あやに畏こく たふとき天主を
皆もろどもに こゑをあけて
はめうた歌ひ あがめまつれよ

『フルダ 1891』 (印刷 : 1906)

86. F-G Neuere Weise.

1. Gro-ßer Gott, wir lo-ben dich;
Vor dir neigt die Er-de sich

90 Dreifaltigkeit.

Herr, wir prei-sen dei-ne Stär-ke. Wie
und be-wun-dert dei-ne Wer-ke.

warst vor al-ler Zeit, so bleibst du in E-wig-keit

2. Alles, was dich preisen kann, * Cherubim und raphinen, * stimmen dir ein Loblied an; * alle die dir dienen, * rufen dir stets ohne Ruh' * „Heilig, heilig!“ zu.

3. Heilig, Herr, Gott Sabaoth, * heilig, Herr Himmelsheere, * starker Helfer in der Not! * Du, Erde, Luft und Meere, * sind erfüllt von deinem Ruhm; alles ist dein Eigentum!

4. Der Apostel Christi Chor, * der Propheten Menge * schickt zu deinem Thron empor * neue und Dankgesänge; * der Blutzengen lichte Schar * und preist dich immerdar.

5. Auf dem ganzen Erdenkreis * loben Große dich Kleine; * dir, Gott Vater, dir zum Preis * singt heilige Gemeinde, * ehrt mit dir auf seinem Thron deinen eingebornen Sohn.

6. Sie verehrt den heil'gen Geist, * der uns allen zugehöret, * der mit Kraft die Seelen speist * und alle Wahrheit lehret, * der mit dir, Herr Jesu Christi und dem Vater ewig ist.

7. Du, des Vaters ew'ger Sohn, * hast die Wahrheit angenommen, * bist vom hohen Himmelsstern * uns auf die Welt gekommen, * hast uns Gottes Gebraucht, * von der Sünd' uns frei gemacht.

8. Durch dich steht das Himmelstor * allen, zu glauben, offen; * du stellst uns dem Vater vor, * wir sindlich auf dich hoffen; * du wirst kommen im Gericht, * wann der letzte Tag anbricht.

Dreifaltigkeit. 91

9. Herr, steh deinen Dienern bei, * welche dich in Demut bitten. * Kauftest durch dein Blut uns frei, * hast den Tod für uns gelitten; * nimm uns nach vollbrachtem Lauf, * zu dir in den Himmel auf.

10. Sieh dein Volk in Gnaden an, * hilf uns, segne Herr dein Erbe! * Leit es auf der rechten Bahn, * daß der Feind es nicht verderbe. * Gib, daß wir durch Buß' und Flehn * dich im Himmel mögen sehn.

11. Alle Tage wollen wir * dich und deinen Namen preisen * und zu allen Zeiten dir * Ehre, Lob und Dank erweisen; * laß uns nur von Sünden rein, * dir stets wohlgefällig sein.

12. Herr erbarm, erbarme dich! * über uns sei stets dein Segen; * deine Güte zeige sich * uns auf allen unsern Wegen, * wie wir hoffen allezeit, * Vater der Barmherzigkeit!

110. 主こそわが榮譽よ

『公教聖歌集』(1933)

主に對する讚美 110

1 主こそわがほまれよ ひかりよたからよ
 2 いのちよよるこびよ ちからよたすけよ
 3 あはれみのみかみよ あめのみたすけに

うましきやすらひよ たぐひなきともよ
 ながなごきめをこそ われはまちのぞめ
 とこしへのさちこそ さだやかにあらめ

まごころつくして めでつかへまつらん
 ながみいつくしみ なにかは一たつらん
 あだにすぎしひのみゆるしをねがふ

四	三	二	一
燃えよ愛の火よ	数多あやまちてし のこりなく果して	徒空にすぎし日の	あはれみの御神よ とこしへの幸こそ
			定やかにあらめ みゆるしをねがふ
			何にかはたとへん われは待ちのぞめ
			ちからよたすけよ 愛で仕へまつらん
			美しきやすらひよ まごころつくして
			いのちよ歡喜よ 汝が慰めをこそ
			ながみいつくしみ ながみいつくしみ
			主こそわが榮譽よ 美しきやすらひよ

114

『フルダ 1891』(印刷:1906)

E-Fis Angelus Silesius 1657.

196.

1. Ich will dich lie-ben, mei-ne Stär-ke,
 ich will dich lie-ben, mei-ne Zier; ich will dich
 lie-ben, Gott, im Wer-ke, will weih'n mein Le-ben
 ein-zig dir; ich will dich lie-ben, schönstes Licht,
 bis mir das Aug' im To-de bricht.

2. Ach, daß ich dich so spät erkannte, * du hochgelobte
 Schönheit du, * nicht eher dich mein eigen nannte, * du
 höchstes Gut, du wahre Ruh'! * In tiefster Seel' bin
 ich betriibt, * daß ich dich, Gott, so spät geliebt.

3. Ich ging verirrt und war verblendet, * ich suchte
 Ruh' * und fand sie nicht; * ich hatte mich von dir ge-
 wendet * und liebte das geschaffne Licht; * nun aber ist's
 durch dich gescheh'n * daß ich in dir mein Heil ersch'n.

198 6. Meßgesang.

4. Erhalte mich auf deinen Stegen * und laß mich
 nimmer irre gehn; * laß meinen Fuß auf deinen Wegen
 nicht straucheln oder stille steh'n; * laß meinen Sinn, Gei-
 und Verstand * stets sein zu dir, mein Gott, gewandt!

114. み神のたまひし

『公教聖歌集』(1933)

信 望 愛 114

1. みかみのた-まひし まことぞたふとき
 2. みいつくし-みこそ あふれにあ-ふれ

とはにかは-りなき みめぐみの-もとの
 のぞみはか-がやく そのあけぼ-のよ

よるこびわく このいづみに
 主のみちかひ おもひいでて

いのちくま-まし
 みそらをあ-ふぐ

三 二 一

わがつくり主に ころをつくし
 世の人ことごと あいもて聴ぶ
 あいもて知る あいのくにに
 身をや捧げなん

み愛くしみこそ あふれにあふれ
 希望はかがやく そのあけぼのよ
 主のみちかひ おもひ出でて
 みそらをあふぐ

いのち汲ままし
 よるこび湧く このいづみに
 永久に變りなき みめぐみのもと
 み神のたまひし 眞理ぞたふとき

118

『公教會聖歌集』(1930)

信 望 愛 72 ト調

1 G

5 | 1 2 3 4:3 | 2 1 2, 5 | 1 2 5 4:3 | 2-1,
 あ めなるみ かみのし めしたま ひし

5 | 1 2 3 4:3 | 2 1 2, 5 | 1 2 5 4:3 | 2-1, 0 |
 たふときまことはつきせぬま ちの

3-2 1 | 71 2-, | 3-2 1 | 71 2, 5 | 1
 わきい づる いづみ ぞま あふ

2 5 4 3 | 2-1 ||
 ぎたてま づる

三 二 一

わが身も靈をも 主にさづけつゝ
 愛慕れまつりて ちからのかぎり
 人皆を愛くしみ たえず勤勞まん

必らずあたる 望みたてまつる
 最熱き心情もて 望みたてまつる

わふる、聖寵と 無窮ぬいのちを
 湧出づる泉ほど 仰ぎたてまつる

たふとき眞理は 盡きせぬ幸福の
 湧出づる泉ほど 仰ぎたてまつる

一天なるみかみの 啓示したまひし
 たふとき眞理は 盡きせぬ幸福の
 湧出づる泉ほど 仰ぎたてまつる

『フルダ 1891』(印刷:1906)

C-D Tochter Zion 1741.

27.

1. Ich glaub' an Gott in al-ler Not, auf
 ich lie-be Gott bis in den Tod; auf
 Gott all' Hoffnung bau-e, Je-su, dir leb' ich;
 die-se Lieb' ich trau-e; Je-su, dir sterb' ich; dein bin ich tot und le-ben-dig!

2. Das Heil allein kann sicher sein * in meines Jesu
 Wunden; * in deinem Tod, o liebster Gott, * das Leben
 wird gefund'n. * Jesu zc.

3. Ein büßend Herz in Reu' und Schmerz * soll
 nimmermehr verzagen; durch wahre Reu' von Sünden
 frei, * darf ich zu Jesu sagen; * Jesu zc.

4. Geh fort, o Welt; was dir gefällt, * das machet
 mich verdrossen; * in Gott allein mein' Ruh' soll sein; *
 es ist nun fest beschlossen. * Jesu zc.

5. Am letzten End' in deine Händ' * will ich die
 Seele geben; * o Jesu mein, nun bin ich dein, * gib
 mir das ew'ge Leben! * Jesu zc.

117. 身もたまも

『公教聖歌集』(1933)

117 奉 献

1. みもたまも 主にささげ
 2. 上にあるもよをさるも
 3. あめにゆくそのひまで

みこころにゆだねまつらなん
 とこしへにみてにたよらん
 いときよくまもらせたまへ

三 あめにゆくその日まで
 二 とこしへに頼らなん
 一 みこころにゆだねまつらなん

121

『公教會聖歌集』(1930)

諸種の聖歌
 主に身を献ぐる
 70 =調4

I D

3-2 3 | 5-4-, | 2-3 4 | 6-5-, |
 みもた まも じゆにさ さげ

5-5 5 | 1-6, 6 | 5 3 4 3 | 2-1- ||
 みこころにまかせまつらん

三 あめに往くその日まで
 二 よを去るも世にあるも
 一 主よにささげみこころに
 委せ奉らん
 御手に頼ん
 とことはに
 らん
 らん
 護らせ給へ

『フルダ 1891』(印刷:1906)

204. E-Fis Neue Melodie

1. Je-su, dir leb' ich; Je-su, dir sterb' ich;
 Je-su, dein bin ich im Le-ben und im Tod.
 2. Jesu, dein bin, ich, * Jesu, dein bleib ich, * Jesu,
 dich lieb' ich in alle Ewigkeit.
 3. O sei mir gnädig, * sei mir barmherzig, * führ mich,
 o Jesu, in deine Seligkeit.

118. あめなるみ神に

『公教聖歌集』(1933)

奉 献 118

1. あめなるみかみーに みさかえーあれと
 2. あいなるみかみーよ きさぐるーいのり

みもたまもなべーて ささげまーつれば
 ことたらであれーど ねがひさーさぐる

つとめといこひーの いづれのきはにーも
 うれしきかなしーき くさぐさのこころ

みむねをひたにかしこみーてあらん
 しのびあはれみきこしめーしませ

二

一
 あめなるみ神に み栄えあれと
 身も靈もなべて 捧げまつれば
 務めと慰ひの 何れの際にも
 みむねをひたに 畏みてあらん

二
 愛なるみかみよ ささぐる祈り
 言足らであれど ねがひ捧ぐる
 嬉しき悲しき くさぐさの心
 しのびあはれみ 聞き召しませ

『公教會聖歌集』(1930)

切 願 77

1=B₇ 口調委

1 5 6 6 | 5 4 32 1, | 1 6 2 17 | 6 6 5 - |
 あめなる みかみに みさかえ あれと

1 5 6 6 | 5 4 32 1, | 1 6 2 17 | 6 6 5 - |
 こころも みもみな しゆにぞ ささげ

1 2 3 1 | 4 3 27 5, | 1 2 3 1 | 4 3 27 5, |
 つとむる さきにも やすまん さきにも

1 7 6 6 | 2 1 7 - | 1 2 3 43 | 2 2 1 - ||
 みむねか しこむ さちぞい かにや

二

一
 あめなるみ神に み栄えあれと
 身も靈もなべて 捧げまつれば
 務めと慰ひの 何れの際にも
 みむねをひたに 畏みてあらん

二
 愛なるみかみよ ささぐる祈り
 言足らであれど ねがひ捧ぐる
 嬉しき悲しき くさぐさの心
 しのびあはれみ 聞き召しませ

119. うるはしの主のみこころ

『公教聖歌集』(1933)

119 キリストに対する歌

1. うるはしーの主のみこころ
 2. カルメルーの もりのことーり
 3. ヘルモンーの つゆとくだーり

たとーしへーもなし さきいでーし
 さへーづるーなべに おもほゆーる
 わがーようーるほす みこころーの

みちかひーの シャロンのーはなよ
 いにしへーの みたまらーのうたし
 あいのみーづ さやにさーやけし

三	二	一
あいのみづ	いにしへの	うるはしの
我世うるほす	みづるなべに	例しへもなし
さやにけし	思ほゆる	咲きいでし
みこころの	森の小とり	主のみこころ
露とくだり	み民らのうた	
ヘルモンの		

123

120. わが爲十字架に
『公教聖歌集』(1933)

我が主を愛する歌 120

1. わがためじじかに つきしものはたぞ
2. われは主をあいす ひねもすやすがら
3. わがためにぞ主は みさかえすてまし

みかみのひとりご 主イエズスキリスト
わするまもなく われは主をあいす
なやみくるしみて いきたえたまへる

五	四	三	二	一
わが主(主)が神(主)よ 我(主)とはに愛(主)せん 量(主)り知らぬ主(主)の 愛(主)にこたへて	ふかきその愛(主)に 天(主)をも陰(主)府(主)をも 忘れてひたぶる きみをのみ慕(主)ふ	わが爲(主)にぞ主(主)は み榮(主)え榮(主)てまし なやみ苦しみて 息(主)絶(主)えたまへる	われは主(主)を愛(主)す ひねもすやすがら 忘(主)るる間(主)もなく われは主(主)を愛(主)す	わが爲(主)十字架(主)に つきしものはたぞ み神(主)のひとり子(主) 主(主)イエズスキリスト

124

『公教會聖歌集』(1930)

愛の歌 (フランサスコザベリア作)
1=D 104 二調

5 | 3 1 6 5 | 4 3 2, 2 | 3 #4 5 7 | 6 6 5,
わ れは しな あいすむ くひはの ぞまず

5 | 1 5 6 5 | 4 3 2, 5 | 6 7 1 3 | (4) 3 2 1 ||
しにならひ てたどあ いのため あいす

五	四	三	二	一	
死(主)れは主(主)をあいす 死(主)をもあいのため	たふどきみあいの わが主(主)を愛(主)さん	あめをも陰(主)府(主)をも わすれてどこはに	みさかえの主(主)なる いき絶(主)えたまへり	わがため十字架(主)に なやめる我がさみ われにさづけませ	われは主(主)をあいす 主(主)にならひてた あいのためあいす むくひはのぞまず

『フルダ 1891』(印刷:1906)

28. G=A Heibelberg. Wiffionsbüchl. 1717.

1. O du mein Gott, ich lie-be dich; nicht,

30 Jesulieder.

daß du se-lig machest mich, auch nicht, weil, die nicht

lie-ben dich, zur Höl-le ge-hen e-wig-lich.

2. Die Lieb', so ich zu dir gefaßt, * du selbst in mir
erwecket hast, * da du am Kreuz, o Jesu mein, *
mich ertrugst all' Angst und Pein.

3. Ach, wie viel Tränen, Schweiß und Blut * gabst
du für mich, o höchstes Gut! * Den Tod sogar gelitt
hast * allein um meine Sündenlast.

4. Wie soll denn ich nicht lieben dich, * da du so se
geliebet mich! * Ich liebe dich aus Lieb' allein, * jod
auch kein' Höll' und Himmel sein.

5. Wie du mich liebst, so lieb' ich dich * ach, laß mi
lieben ewiglich! * Zur Liebesglut gieß Schmerz und
Pein, * laß sterben mich aus Lieb' allein.

➤ 聖母に対する賛美の聖歌

129. あな慶たきかな

『公教聖歌集』(1933)

129 聖母

1. あなめでたきかな主のはは
 2. けがれなきみははわれら
 3. きみばらのはなとかをりて

かみのみめぐみぞあふるる
 みくにむかへてまもらへ
 うつしよをまねくさきはへ

あめなるきさいつきせぬさちのうましき

いづみあめのくにとはのよろこび

四 嬉しき御名をば したがひて
 かがやくみ榮え 稱へなん

三 きみ薔薇の花と かをりて
 現し世を豊多く さきはへ

二 けがれなき聖母 われら
 み國にむかへて まもらへ

一 あな慶たきかな 主の聖母
 神のみめぐみぞ あふるる
 (をりかへし)
 あめなる后 つきせぬ幸の
 美しき泉 天の聖國の
 常の喜び

133

『公會聖歌集』(1930)

聖母マリア

1=C 47 ハ調

34 | 5 5 5 6 | 5 34 5, 4 | 3 2 1,
 い さ め て た き か な お ん は

34 | 5 5 5 6 | 5 34 5, 4 | 3 2 1, 0 |
 あ ま つ み め ぐ み に み ち た ま

(折返し)
 1 7 6 21 | 7 6 5, 0 | 1 7 6 21 | 7 6 5, 0 |
 あ め な る き さ い てんしのよ るこび

1 2 3 1 | 2 7 1, 0 | 1 7 6, 0 | 2 1 7, 0 |
 つ き せ ぬ さ ち の と は の も さ い

1 2 3 1 | 2 2 1 ||
 な れ な ぞ あ ふ ぐ

四 まさりて榮え 爾が御名
 さやけき光明の 明星にも

三 まさりて可慕き 爾が美德
 きよらけき花の 百合にも

二 寸毫汚れもなき 御はよ
 爾のきよさこそ たへなれ

一 (折返し)
 わまつ御恩寵に 満たまふ
 いと慶たきかな おんは
 天なる王后 天使の喜こび
 盡せぬ幸の 永久の源泉と
 爾をぞ仰ぐ

130. あまつみはは聖マリア

『公教聖歌集』(1933)

聖 母 130

あまつみはは聖マリア
 まごこ みるははて せいかいども マリタ リごま アをも
 ながみまへに か しこみ つ
 さあな げつさ つみけ るもし たよみ へこば とてら
 かたい ずふま なとも らきの ねなち どをも うたさ けまか たひえ まけゆ へりく
 四 わが身と 霊 いまささけ
 三 そだちませば 主に召され 身も 霊も
 二 まごころもて 養育し立てし いたくしみ
 一 あまつみはは 聖マリア 世の子等が 汝がみまへに 下さげまつる いたへ言 かなならねど うけたまへ

134

『公教會聖歌集』(1930)

1=G 57 ト調

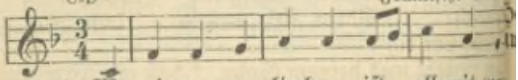
5 1 1 2 3 3, 34 5 3 2 1 -	あ まつ み は せ い マ リ ア
5 1 1 2 3 3, 34 5 3 2 1 -	な が み ま へ に か し こ み つ
34 5 3 5 4 2, 4 3 1 3 2 -	さ あ な げ ま つ る い く ち よ も
5 1 1 2 3 3, 34 5 3 2 1 -	か は ら め あ い う け た ま へ

一	あまつみはは	せいマリア
二	みどり兒なる	い) エズス君
三	真ごころもて	いつくしみ
四	養育したてし	そのあいを
五	授けまつる	授けまつる

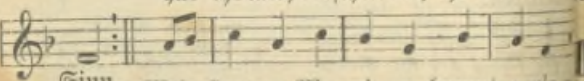
一	あまつみはは	せいマリア
二	爾が御まへに	かしこみつ
三	さげまつる	いく千代も
四	かはらぬあい	受けたまへ

四	わがたましひ 平常の日にも いと平安けく あまつくに	三	なれの御手に 奉獻ぐるわれ エズス君の かなはせてよ
二	わがからだ 臨終時にも 守護りませ のぼるまで	一	身も靈魂も みちびきて 聖ころに 永遠無窮に

『フルダ 1891』 (印刷 : 1906)

115. 

1. Ma-ri = a zu lie-ben ist all-zeit me-
hab' ihr mich verschrieben, ihr Die-ner ich



Sinn, Mein Herz, o Ma-ri = a, brennt e-wig
bin,

Marienlieder. 119



dir von Lie-be und Freu-de, o himmli-sche Zier.

2. Maria, du milde, du süße Jungfrau, * nimm auf
meine Liebe, so wie ich vertrau'; * du bist ja die Mutter,
dein Kind will ich sein, * im Leben und Sterben dir einzig allein.

3. Ach, hätt' ich der Herzen nur tausendmal mehr; * dir
tausend zu geben, das ist mein Begeh'r; * nimm Freund'
und Verwandte mit Leib und mit Seel', * nimm, was ich
nur liebe, in deinen Befehl!

4. So oft mein Herz klopft, befehl' ich mich dir; * so
oft ich nur atme, verbind' ich dich mir! * Dich lieb' ich
auf ewig, dich lieb' ich allzeit, * so bin ich mit Freuden
zu sterben bereit.

5. O Mutter, nun segne den ewigen Bund! * Dein
Name versiegle mein Herz und den Mund, * dich ruf' ich
im Tode, dann reich mir die Hand * und zieh mich nach
oben ins himmlische Land!

131. うるはしきよけし

『公教聖歌集』(1933)

131 聖母

1. うるはしきよけしをとめマ
 2. なげきとかなしみいまはき
 3. みこころるづくしよはあけ

リアけがれのなきかみのゆ
 えてつきみこはいきよみは

ははめぐしうつかくしかきみよく
 けはばと一はもわひらつかくしかがみやは
 うせお

四 ながさめたのしみ 尤あふれよ
 主の聖母 執り成せば 神の恵み繁し

三 みこころ 盡くしの 夜は明けゆき
 御子は活き 陰府は失せ 面影美し聖母

二 なげきと かなしみ いまは消えて
 罪のやみ 去りゆけば 永久の光輝く

一 うるはしきよけしをとめマリア
 けがれなき 神のはは 愛し美し君よ

135

『公教會聖歌集』(1930)

I=D 51 =調委

5-6- | 5. 4 34, | 5-6- | 5. 4 34, |
 いと きよく いと はしき

5-5- | 6-, 7 1 | 7-6- | 5-, 0- |
 なご め マリ ア よ

2.3 2 3 | 4.5 4-, | 3.4 3 4 | 5.6 5-, |
 け がれ なき あまつ は

17 65 | 16 5 4 | 3-2- | 1-0- ||
 み め ぐ み た ま へ

一 いとぎよくいと愛しき童貞マリアよ
 けがれなきあまつは、みめぐみ賜へ

二 ながさめののがれ場のみ母マリアよ
 わがのぞみわがねがひどりなし給へ

三 わがよわさわがなやみたすけ給ひね
 くるしさをわづらひをいやし給ひね

四 かへりみてみそなはし祈禱聴さませ
 いと奇しきくすりをばさづけ給ひね

五 みこころのいつくしみそとぎ給ひね
 よりすがるこひしたふ我をたすけて

『フルダ 1891』(印刷:1906)

C-B (Zuerst Einzelne, bei der Wiederholung Alle.) Solist

124.

1. O du hei=li=ge, du ju
 frau=li=che, sü=ße Mutter Ma=ri=ol
 D Un=ver=kehr=te, all=zeit Ge=ehr
 hilf uns, hilf uns, Ma=ri=a!

Marienlieder. 127

2. O du Trösterin, Schutz und Helferin, bitt für uns, o Maria! * Du kannst empfangen, was wir verlangen, hilf uns, hilf uns, Maria!

3. Sieh uns Jagende, Angst Ertragende, hilf uns, Mutter Maria! * Tröste die Herzen, lindre die Schmerzen, hilf uns, hilf uns, Maria!

4. Jungfrau, neige dich, Mutter, zeige dich, bitt für uns, o Maria! * Gottes Erbarmen trägt du in Armen, hilf uns, hilf uns, Maria!

5. Durch die Leiden dein, durch die Freuden dein bitt für uns, o Maria! * Unser Vertrauen wollest anschauen, hilf uns, hilf uns, Maria!

133. アンナの御子

『公教聖歌集』(1933)

133 聖母

アンナの御子
はしきひめ
かぐはしく
さきいでし
にはのべの
ゆりのはな
いゝるもか
もかむさびて
きよけくも
みえにけり
たがうゑし
みさをか
も
いやたかく
み初もひの
あまかけ
る
あまをとめ
かみの
はは
たたへ
まし

神の母
あま期ける
たたへまし
いやたかく
みおもひの
誰が植えし
みさをかも
きよけくも
見えにけり
色も香も
神さびて
庭のべの
百合のはな
かくはしく
咲きいでし
アンナの御子
はしき姫

137

『公教會聖歌集』(1930)

1=C 52 ハ調 $\frac{6}{4}$

1-1 2̇1 2 | 3̇-3-0 | 1-1 2̇1 2 | 3̇-3-0 |
 アンナのみこ はしきひめ
 3-4 5̇6 5 | 3̇-3-0 | 5-4 3̇2 1 | 2̇-2-0 |
 かぐはしき エデンのはな
 3-4 5̇6 5 | 3̇-3-0 | 5-4 3̇2 1 | 2̇-2-0 |
 うつしよに さきにほふ
 5̇6 5 1-34 | 5̇-5-0 | 5-4 3̇5 46 | 5̇-5-0 |
 さきにほふ ちらゆりは

3-4 5̇6 5 | 3̇-3-0 | 5-2 3̇2 1 | 2̇-2-0 |
 はるのよに さはなれど
 1-1 3-46 | 5̇-5-0 | 1-1 3-46 | 5̇-5-0 |
 たぐひなき ひめマリ
 5-5 4̇4 | 3̇-3-0 | 3-3 4̇5 6 | 5̇-5-0 |
 このくいき はなにほふ
 1-5 5-32 | 1-1-0 | 2-5 5-21 | 7-7-0 |
 みそのこ そ めでたけれ
 3-2 17 6 | 5̇-5-0 | 5-3 34 2 | 1-1-0 |
 たへばや このはなを

たへばや	みそのこ	この奇しき	たぐひなき	はるの野に	咲きはほふ	うつし世に	芳香はしき	アンナの御子
此の百合を	めでたけれ	はなにほふ	姫君マリア	膨多なれど	白百合花は	咲きにほふ	エデンの花	愛しき姫君

『ケルン 1908』(印刷: 1912 頃)

Mariä Geburt.

Nr. 144. ^{1=C.} 1. 1 2 1 2 | 3..3.0 |
⁶/₄ 1. Ros', o schön-ne Ros',
 1 . 1 2 1 2 | 3..3.0 | 3.4 5 6 5 |
 In Sanct An-nä Schoß! Welche Wunder-

Lieder zur hl. Mutter Gottes. 199

3..3.0 | 5.4 3 2 1 | 2..2.0 |
 ros'— Blüht in die-sem Schoß,
 3.4 5 6 5 | 3..3.0 | 5.4 3 2 1 |
 Fällt mit sü-ßem Duft— All-um-her die
 2..2.0 | 5 6 5 | 1. 3 4 | 5..5.0 |
 Luft!— Kei-nes Früh-ling's Pracht
 5.4 3 5 4 6 | 5..5.0 | 3.4 5 6 5 |
 Jemals hat ge-bracht Ei-ne sol-che
 3..3.0 | 5.2 3 2 1 | 2..2.0 |
 Ros',— Als Sanct An-nä Schoß.
 1. 1 3.4 6 | 5..5.0 | 1. 1 3.4 6 |
 Selbst das Pa-ra-dies— Ihr den Vor-zug
 5..5.0 | 5.5 4 3 4 | 3..3.0 |
 lieb,— Freu-den-rei-cher Tag,—
 3.3 4 5 6 | 5..5.0 | 1. 5
 Wo Sanct An-na sprach: „Kommt, ihr
 5. 3 2 | 1..1.0 | 2. 5 5. 2 1 |
 Kin-der all',— Singt mit sü-ßem
 7..7.0 | 3. 2 1 7 6 | 5..5.0 |
 Schall, Singt der schön-nen Ros'—
 5.3 3 4 2 | 1..1.. ||
 Auf der Mut-ter Schoß!"

200 Lieder zur hl. Mutter Gottes.

2. Ros', o schöne Ros' * In Sanct Annä
 Schoß! * Zweig von edler Art * Bracht' dies
 Röslein zart, * Das, von Gott behilt't, *
 Herrlich aufgeblüht. * Wurzel, so war tot, *
 Bracht' die Rose rot; * Anna, hochbetagt, *
 Hat der Welt gebracht * Dieses Mägdelein, *
 Makellos und rein, * Das mit Tau der Gnad'
 * Gott genähret hat. * Kindlein, süß und zart,
 * Sproß von edler Art, * Bitt für uns, o
 Ros', * In Sanct Annä Schoß!

3. Ros', o schöne Ros' * In Sanct Annä
 Schoß! * Groß ist deine Kraft, * Reiche Gnad'
 sie schafft. * Rosen-Arznei * Wirkt gar vieler-
 lei: * Sie erfrischt den Mut, * Küßt des
 Herzens Blut, * Macht uns auch bereit * Zu
 dem letzten Streit. * Ros', o schöne Ros', *
 Weil dein' Kraft so groß, * Und dein'
 Arznei * Wirkt so vielerlei, * Deine Kraft
 uns send * Jetzt und an dem End'. * Bitt für
 uns, o Ros' * In Sanct Annä Schoß!

160. こころも清けき

『公教聖歌集』(1933)

160 無原罪の聖母

1. こころもきよけき つみなきマリアよ
 罪もひもことばもひごとのしわざも
 われらをあめに みちびくかどよ
 ながみてにより きよめわかちつ
 こよなくめでたき みははときみをして
 サマシンのひををしくはらひて
 たたへあがめて ひにけにーうたは
 みあとだしく たのしくい

三 二 一
 こころも清けき 罪なきマリアよ
 われらをあめに みちびくかどよ
 こよなく愛たき みははと君をし
 たたへあがめて 日にけに歌はん
 思ひもことばも 日ごとの行爲も
 汝が御手により きよめわかちつ
 悪魔のいざなひ 雄々しく拂ひて
 みあとだたく 樂しく生きなん
 汚れを知らざる 聖母のまな子と
 いやしきわれも ころろ足らひて
 み神のみははに 祈ごとと捧げつ
 こひねがはまし きよきみたすけ

165

『公教會聖歌集』(1930)

聖母の汚なき御やどり

1=F 54 へ調

1 3 5 3 | 6 4 4 3, | 6 5 4 3 | 5 3 3 2, |
 つみのけ がれなき きよきみ はこそ
 3 2 4 3 | 4 5 6 - | 5 6 5 3 | 4 2 1 - |
 あまつみ くにゝ いるゝか ぎなれ
 1 1 2 2 | 3 4 3 2, | 1 1 2 2 | 3 4 3 2, |
 こよなく めでたく めぐみに みちたる
 1 2 3 2 | 3 4 5 - | 5 6 5 4 2 | 3 2 1 - ||
 みはマ リアを いざほめ うたは

三 二 一
 かしこみ仰ぎ 最も麗はしき 天主の母なる
 いと憐みある うち勝つ能力 サタンの誘惑 浄からんため 思ひも言葉も 御母マリアを
 罪の汚れなき 此上なく慶く 御國に 入るゝ門戸なれ 罪の汚れなき 此上なく慶く 御國に 入るゝ門戸なれ
 かしこみ仰ぎ 最も麗はしき 天主の母なる 君がみこゝろを 君がみこゝろを 君がみこゝろを
 かしこみ仰ぎ 最も麗はしき 天主の母なる 主に懇求めてよ 主に懇求めてよ 主に懇求めてよ
 かしこみ仰ぎ 最も麗はしき 天主の母なる 平常にまもりて 平常にまもりて 平常にまもりて
 かしこみ仰ぎ 最も麗はしき 天主の母なる すべてに行爲も すべてに行爲も すべてに行爲も
 かしこみ仰ぎ 最も麗はしき 天主の母なる 聖寵に満ちたる 聖寵に満ちたる 聖寵に満ちたる
 かしこみ仰ぎ 最も麗はしき 天主の母なる 聖寵に満ちたる 聖寵に満ちたる 聖寵に満ちたる
 かしこみ仰ぎ 最も麗はしき 天主の母なる 聖寵に満ちたる 聖寵に満ちたる 聖寵に満ちたる

『フルダ 1891』(印刷:1906)

(Eingetne.) F-F Gchsfeld. G.-B. 1622.

125.

1. Mut-ter Chri-sti, hoch er-ho-ben in dem
 schönen Him-mel dro-ben, al-ler En-gel Kö-ni-gin,
 uns-re Frau und Mitt-le-rin. R. Dei-nen Se-gen
 uns zu hel-fen
 uns mit-tei-le, nicht ver-wei-le; o Ma-ri-a, steh uns bei,
 daß uns Gott barm-her-zig sei.

2. Du, o Jungfrau voll der Gnaden, * weist von keinem Sünden-schaden, * voller Glanz und Tugend-schein, * allzeit heilig, allzeit rein. * R. Deinen Segen ic.

128 Marienlieder.

3. O du Zuflucht aller Sünder, * schau uns an Adams-kinder, * die gefündigt ohne Zahl, * weinen in Jam-mertal.
 4. Laß uns deine Hilf' erscheinen, * laß uns nicht ge-bens weinen, * führ' uns zu dem Gnadenthron * ver-föhne uns deinem Sohn.
 5. Daß er uns die Sünd' verzeihe, * sie zu mei-nen Gnad' verleihe, * daß wir leben in der Buß', * sterben dem Frieden-sfuß.
 6. Bitt, daß Gott nach diesem Leben * uns die Sei-keit mög' geben; * o Maria, Jungfrau rein, * laß dir be-fohlen sein!

163. 皐月のきさいを
『公教聖歌集』(1933)

聖 母 月 163



1. きつきのきさいを きつきはうたふ
2. マリアのみまへにちぐさみだれて
みどりのまきばにみははのこらは

ひととせめぐりて ゆりさくごつ
いるとりどりにぞ にほふくにぼら
ひつじのどとくぞ むれつどひつつ

マリアしゅくしませしゅくせられませぬ
みかざりにせまくちはきいでつ
さゆりてにかざしことほぎまつる

四	三	二	一
みははの御恵み	み母立ちませば	みどりの牧場に	皐月のきさいを
世は宛がらなる	さゆり手に騎し	羊のごとくぞ	ひと年めぐりて
みははの御恵み	あまつ風吹き	ことほぎ奉る	百合せく五月
地に満足らふ	とこ春なして	群れ集ひつつ	観せられませ
		聖母の子等は	千草みだれて
		地に咲出でぬ	にほふ國原

168

164. 風もかをりて

『公教聖歌集』(1933)

164 聖母月

1. かぜもか-を-り-てあをばわ-か-ば
 2. わかぐさ-も-ゆ-るののつか-さ-に

さつきせせら-ぎくしきしらべ
 ひともとさけ-るそのしらゆり

こかげにたまたす-はのみはは
 みさをかぐはし-はのをとめ

みかげしたひわ-れ-らこそゆけ
 いざたたへ^{なん}ひ-と-のかがみと

三	二	一
あふぎあふぎ あがれる雲雀 高きころの 御榮うたはん	いざ ^{なん} 稱 ^へ はし 操 ^か か ^は はし 一本 ^さ 本 ^さ 咲 ^け る そのしらゆり とはのをとめ 人のかがみと	わか草 ^も 萌 ^も ゆる 野 ^の の高 ^{たか} 處 ^{ところ} に みかげしたひ 我等 ^{われら} こそ行 ^い け 五月 ^ご せ ^ご せらぎ 木 ^き 蔭 ^{かげ} に立 ^た たす とはのみはは 奇 ^あ し ^き きしらべ あを葉 ^は わか葉 ^は

169

171. あやに奇しき

『公教聖歌集』(1933)

聖母の御名 171

1. あやに—くすし—き そ—の—みなこ—そ
 2. あやに—うれし—き マ—リ—アの—み—な

あめに—もちに—も た—ぐ—ひあら—じ
 おもひ—いづれ—ば こ—こ—ろをど—る

よ—べは—けふし あ—らた—にこ—そ
 わ—れは—いのち

いのち—のはは—に あふ—こ—こちす—れ
 みはは—の—きた—り た—す—けたまふを

— あやに奇しき その御名こそ
 天にも地にも たぐひあらじ
 呼べは今日し あらたにこそ
 いのちの母に あふ心地すれ

二 あやに嬉しき マリアの御名
 思ひいづれば ころろをどる

われは祈らん いまはのとき
 聖母の來たり 助けたまふを

176

『公教會聖歌集』(1930)

マリアの聖名 56 イ調子

1=A

5 | 1̇ 76 5 1̇ | 34 5- , 17 | 67 1̇ 2̇ 17 | 1̇ -, 0
 あ な か ぐ は し き マ リ ア の み な

5 | 1̇ 76 5 1̇ | 34 5- , 17 | 67 1̇ 2̇ 17 | 1̇ -, 0
 さ な ふ る ご そ に よ る こ び み つ

12 | 3̇ 23 4 3̇ | 2̇ -, 0 12 | 3̇ 23 4 3̇ | 2̇ -, 0
 い き く す し き マ リ ア の み な

5 | 1̇ 76 5 1̇ | 34 5- , 17 | 67 1̇ 2̇ 17 | 1̇ -, 0 ||
 た た ふ る と き ぞ な み し づ ま る

— あな芳香はしき マリアの御名
 どなふるごとに よろこび満つ
 いとくすしき マリアの御名
 稱ふるごときぞ 波濤しづまる

二 いと愉快しき マリアの御名
 いまもたへて 憂愁は去りぬ
 わが靈魂の緒 絶ゆるきはも
 聖きマリアの 御名を頼らん

『ケルン 1908』(印刷: 1912 頃)

150. 1=B. 4/4 1. { U = = ve Ma = ri = a,
 Dein Glanz, o Wunder=
 Ma-re, Du lich-ter Mor-gen = stern!
 ba-re, Ver = kin-digt uns den Herrn, }

Nieder zur hl. Mutter Gottes. 205

Er-wählt von E-wig-keit, Er-wählt von
 Ewigkeit Zur rein-sten Mutter Got-tes, Zum
 Trost der Christen = heit.

2. Ohn' Sünd' bist du empfangen, * Wie es die Kirche lehrt, * Und von der falschen Schlangen, * Bliest du ganz unverfehrt. * |: O Jungfrau, keusch und rein, |: * Kein Lob auf dieser Erde * Kann deiner würdig sein.

3. Ein Gruß aus Engels Munde, * Gefandt vom höchsten Thron, * Bracht' dir die frohe Kunde * Von Gottes ew'gem Sohn: * |: Du sollst die Mutter sein: |: * Und doch auch Jung-frau bleiben, * Ganz makellos und rein!

4. Es wird dich übertauen * Des Allerhöchsten Kraft, * Gesegnetste der Frauen, * In reiner Jungfrauschaft. * |: Gott selbst, er wird dein Sohn; :| * Du sollst ihn Jesus nennen, * Und ewig ist sein Thron.

5. Da sagte mit Begehren * Aus Lieb' die Jungfrau rein: * Ich bin die Magd des Herren * Und will gehorsam sein; * |: Ihm dien' ich für und für. :| * Ich glaub', was er gesprochen, * Dein Wort gescheh' an mir!

6. Maria auferkoren, * O Mutter, unverfehrt! * Du hast den Herrn geboren * Des Himmels und der Erd, * |: Dein Schöpfer ward dein Kind. :| * O wunderbare Mutter, * Vergleich' man nicht find't.

➤ 天使に対する賛美の聖歌

173. みつかひの長と

『公教聖歌集』(1933)

大天使聖ミカエル 173

1. みつかひの長と きみえらまれました
 2. まもりのつはもの かちうたうたひて

あめなるみかみの おほみちからをば
 みいくさにむかふ あたもあらなくに

うけましたたかふ そのきよきいくさ
 みつかひの長は みまへにやすきや

みはたぞかーがやく
 ことほぎまーつれる

三

わが魂はも けだしや被れて
 きみの守らひを こひ願はましを
 聖なるミカエル みつかひの長よ
 われを護りませ

二

衛りのつはもの 勝ち歌うたひて
 みいくさに向ふ 仇もあらなくに
 みつかひの長は みまへに平和や
 ことほぎ奉れる

一

みつかひの長と 君えらまれました
 あめなる御神の 大みちからをば
 受けまし戦ふ その聖きいくさ
 み旗ぞかがやく

178

『公教會聖歌集』(1930)

大天使聖ミカエル

1=F 66 へ調

5 | 1 1 2 2 | 3 2 1, 4 | 3 2 1 1 | 6 7 1 |
 み つかひの 長と きみえらまれました

5 | 1 1 2 2 | 3 2 1, 4 | 3 2 1 1 | 6 7 1 |
 あ めなるみ かみのみ いづみち から

(12) | 3 2 3 4 | 5 6 5, 5 | 6 5 3 4 | 5 6 5 |
 う けませる きみなわ がまもり て

5 | 4 3 2 5(4) | 3 2 1 ||
 あ ふぎま つ らまし

三

稱我 天主にそむきし
 へうたはまし 我等をみちびく

二

崇聖 天主に奉仕ふる
 めまつかエルをば 旗もつきみにぞ

一

仰あめなる天主の
 ぎまつからまし 受けませる君を

選
 まれ給ひて
 みいつ御能力を
 我が守護者ぞぞ

あ
 まつ御軍の
 召され給ひにし
 たかき聖天使と

千
 万の仇敵を
 あめなる御國へ
 聖ときミカエル

175. わが身まもりの
『公教聖歌集』(1933)

天 使 175

1 わが身のまもりの あまつつかひよ
いざなひしりぞけ みくにすすみ
むらがるあたをば うちしりぞけて

みてにぞゆだねる このみこーのたま
いそしみはげみて つとめをはたさん
いまはのきはにも きみよみまもれ

一 わが身のまもりの あまつつかひよ
み手にぞゆだねる この身このたま

二 いざなひしりぞけ みくにすすみ
いそしみはげみて 務めをはたさん

三 むらがるあたをば うちしりぞけて
いまはのきはにも きみよ見まもれ

180

『公教會聖歌集』(1930)

1 = D 61 = 調 4

1 3 5 3 | 2 3 4 3, | 6 5 4 3 | 2 2 2 - |
われをま もります あめのつ かひよ

3 5 6 5 | 1 1 7 5, | 1 5 6 4 3 | 2 2 1 - |
ゆだねま つらまし わがみ し たまも

一 われを守ります あめの聖使よ
委ねまつらまし 我が身も靈魂も

二 いざなひ遠ざけ 善き行爲進め
祈禱のつとめも 勉勵しませてよ

三 むらがる敵をも うち退却かせ
隣終のきはにも みちびきたまへ

『フルダ 1891』(印刷:1906)

C-D Neuere Weise.

133.

1. Du mein Schutzgeist, Gottes Engel, weiche,
weiche nicht von mir; lei-te mich durchs Tal der
Män-gel bis hin-auf, hin-auf zu dir.

2. Laß mich stets auf dieser Erde * deiner Führung
würdig sein, * daß ich stündlich besser werde, * nie mich
darf ein Tag gereu'n.

134 Zu den hl. Engeln.

3. Sei zum Kampf an meiner Seite, * wann mir
Versuchung winkt; * steh mir bei im letzten Streit,
wann mein müdes Leben sinkt.

4. Sei in dieser Welt voll Mängel * stets mein Führer
mein Führer hier; * du mein Schutzgeist, Gottes Engel
weiche, weiche nicht von mir!

➤ 聖人に対する賛美の聖歌

178. み子とその母の

『公教聖歌集』(1933)

178 聖ヨゼフ

1. みことそのははのみほごのひじり
 2. みあれのやどりによかぜをさむみ
 よのすくひぬしはきみにまもられ
 ヘロデのやいばをからくものぶれ
 たをやあのをとめみははのマリア
 すなやまこえゆきころばにのせて
 きみのうしろみかにやすけくましき
 みこみははまもりゆきしきみはも

四 三 二 一

あやに懐かしき
 のぞみの光りを
 あやふき胸の
 太しく響かる
 杖にゆくての
 主にある我等も
 唯かしきマリアの
 聖なる家族を
 導きしきし
 聖きところに
 やすみ慰はな
 道しめしませ
 大さき御柱
 寄る蔭にして
 われらに賜ふ
 聖ヨゼフはも

み子とその母の
 君にまもられ
 聖母のマリア
 安けくましき
 夜風を寒み
 からくも道れ
 小驛馬に乗て
 ゆきし君はも
 導きしきし
 聖きところに
 やすみ慰はな
 道しめしませ
 大さき御柱
 寄る蔭にして
 われらに賜ふ
 聖ヨゼフはも

183

『公教會聖歌集』(1930)

聖ヨゼフ 64 變ホ調

1=Es

1 2 3 1 6 7 1 1, 2 3 4 3 2 1 2 -	ほむべき ヨゼフよ なはよの ほまれ
3 4 5 3 1 2 3 3, 3 4 5 5 6 6 5 -	われわれ のごみ このよの はしり
1 5 6 6 5 3 4 4, 3 2 1 1 2 2 3 -	よるこび こさほぎ いざほめ うたは
1 5 5 6 5 3 4 4, 3 2 1 1 2 2 1 -	よるこび こさほぎ いざほめ うたは

一 頌べきヨゼフよ 爾は世のほまれ われくの希望 この世のはしら 喜び祝はぎ 讃歌はん

二 よろづの物みな 創造りし天主は 聖子をば育くむ やしなひおやに 爾を選みてぞ ほまれを賜ふ

(折返し) あめなるさかえに

三 天つちも陰府も かしこみ服従らふ その御こゑにぞ 聖子なる天主は したがひたまふ

(折返し) へりくだりなれに

四 うまぶねの中に ながめてよろこび 臥します聖子を しろがみまつる なれこそ得たれ

(折返し) こよなき幸福をば

五 聖父聖子聖霊に 世々さかえあれ みかみにいのり みちびきたまへ

『フルダ 1891』 (印刷 : 1906)

Zu den Heiligen. 143

F-F Neuere Melodie.

146. 

1. Va-ter Jo-seph, schau her-nie-der; dei-ne
Kinder sin-gen dir ih-re Wei-sen, ih-re Lie-der,
und ihr Herz sie brin-gen dir, dich zu grü-ßen
mit dem sü-ßen, lie-ben Kindlein Je-sus Christ.

2. Vater Joseph, schau hernieder; * alle sind wir Kinder
dein; * allen wolle du hinwieder * ein gar treuer Vater
sein, * wie dem kleinen, himmlisch feinen, * süßen Kindlein
Jesus Christ.

3. Vater Joseph, schau hernieder; * deine Kinder rufen
dich, * und an deine Rechte wieder * schmiegen sie ver-
trauend sich. * O begleite, führe, leite * sie zum Kindlein
Jesus Christ.

4. Vater Joseph, schau hernieder; * von uns wend dein
Auge nie, * segne deine Kinder wieder, * wie du oft ge-
segnet sie * mit dem reinen, mit dem kleinen, * süßen
Kindlein Jesus Christ.

179. 聖ときヨゼフよ
『公教聖歌集』(1933)

聖 ヨ ゼ フ 179

1. たふときヨセフよなはみこのちのち
2. うきことしぎて主のみゆだねのし
3. へりくだりなれにしたーがひまし

みえらーみうけにしみめぐみーうたはん
わがきーみとははをみつきーまひきり
イエズスーをはぐくむちえまーしけり

きよーきもりびと いのーらせたまへ

われーらのために

四 三 二 (をりかへし) 一

ときはの憩ひに 臨終にも聖子は イエズスを育む へりくだり汝に 憂き事しのぎて わが君と母を 主のみ委ねの 聖ときヨゼフよ 汝は聖子の父

導びきにけり み側にいまし 幸得ましけり 従がひましし みつき給ひき 祈らせたまへ み恵み歌はん

184

183. かたくな人の

『公教聖歌集』(1933)

日本聖殉教者 183

1. かたくなびとーの せーめさいなみ
 2. せめもなやみーも 主ーのじふじか

よきところもーて かーまもりてし
 そのさかづきーは わーれこそとれ

をーをしきせいーと みをしへのたーめ
 たーれか主のたーめ をしむいのちーと

いのちやすてし ほめたたーへまーし
 いさみましける みひじりーらは一も

三 二 一

わが日の本に 日とかがやき
 とはのみ國に 尊ときかむり
 先だちうけし わが聖者等よ
 我らのために みたすけ賜へ

かたくな人の 責めさいなみ
 善き心もて 見まもりてし
 雄々しき聖徒 み教へのため
 生命やすてし ほめ稱へまし

迫りも患難も 聖教のため
 耐へ忍びにし 尊聖人たち
 我が日の本の 御救霊のため
 我等はげまし いそしませてよ

大和しまねの 蒼生民衆
 めぐみの露に 潤ほすべく
 血潮ながして 御聖教のため
 盡瘁し諸聖人 頌めうたはまし

生命を捨て、 天主の御名
 尊崇め給ひし 尊聖人たち
 空禪の身体は 朽もこそすれ
 芳はしき名は 世々に盡きせじ

188

『公教會聖歌集』(1930)

日本致命聖人 63 調 5/4

1=G

5 | 1 1 1 2 | 34 3, 67 | 1 2 3 2 | 1-, 0
 や まさしま れのあ なひとぐ さ

5 | 1 1 1 2 | 34 3, 67 | 1 2 3 2 | 1-, 0
 め ぐみのつ ゆにう るほすべ く

34 | 5.4 3 5 | 43 2, 4 | 3.2 1 3 | 21 7- |
 ち しほなが してみ なしへの ため

1 7 6 2 | 7 6 5 - | 1 2 3 43 | 2 17 1 ||
 つくじま ひじり ほめうた はまし

三 二 一

我等はげまし いそしませてよ
 我が日の本の 御救霊のため
 耐へ忍びにし 尊聖人たち
 迫りも患難も 聖教のため
 空禪の身体は 朽もこそすれ
 芳はしき名は 世々に盡きせじ

大和しまねの 蒼生民衆
 めぐみの露に 潤ほすべく
 血潮ながして 御聖教のため
 盡瘁し諸聖人 頌めうたはまし

生命を捨て、 天主の御名
 尊崇め給ひし 尊聖人たち
 空禪の身体は 朽もこそすれ
 芳はしき名は 世々に盡きせじ

四 榮光のかむり
 永久にうけて
 天にかいやく
 みひじりたち
 よわき我等を
 守りたすけて
 きよき御跡を
 迎らしめてよ

Zum hl. Maternus, ersten Bischof
von Köln.

1=G. ||: 5 | 1 1 2 2 |
Nr. 196. $\frac{4}{4}$ 1. { O Hirt, von Gott er-
Die du dem Herrn ge-
3 4 3 6 7 | 1 2 3 2 | 1 . 0 :||
to = ren, Zur Rettung uns ge = sandt, }
bo = ren, Be = schütz mit star = ker Hand. }
3 4 | 5 . 4 3 5 | 4 3 2 4 | 3 . 2
R. O hei = li = ger Ma = ter = nus, O hei = li =
1 3 | 2 1 7 . | 1 7 6 2 | 7 6
ger Ma = ter = nus, Steh uns bei, hilf uns
5 . | 1 2 3 4 3 | 2 1 7 1 ||
treu, Daß uns Gott barm = her = zig sei!

2. Dies Land, von Nacht umhüllet, * In
Lodeschatten lag; * Durch dich mit Licht
erfüllet, * Sah es den hellen Tag. * R. O heiliger zc.

3. Du hast hier ausgestreuet * Des Glaubens
heil'ge Saat, * Gereinigt und erneuet * Dies
Volk durch Wort und Tat. * R.

4. Auf Gott allein vertrauet * Hast du in
Müh' und Not, * Und demutsvoll geschauet *
Auf Jesu Kreuz und Tod. * R.

5. Dann rief der Herr zum Lohne * Dich
aus dem Tränenland, * Und nun am ew'gen
Throne * Strahlst du im Siegesgewand. * R.

6. So hilf nun deinen Kindern * Durch
dein Gebet bei Gott; * Erlebe Gnad' den Sün-
dern, * Rett uns vom ew'gen Tod. * R.

7. Erhalt uns treu im Glauben, * Daß
weder Macht noch List * Den Schatz uns möge
rauben, * Der unvergänglich ist. * R.

8. In allen Leibsgefahren * Wollst unser
Schützer sein, * Vor Krankheit uns bewahren,
* Von Unheil uns befrei'n. * R.

9. Hilf, daß wir Kraft erlangen * In allem
Erdenleid, * Und daß wir einst empfangen *
Des Himmels Seligkeit. * R.

187. やまと島根に

『公教聖歌集』(1933)

聖フランシスコ・ザベリオ 187

1. やまとしまねに はるばるきて
2. やまとしまねに あをひとぐさ

あたのさきなみ しのぎかちし
なびかせましし けきちから

きみがいさをもて われらのたかひ
あめよりたまひて みくさのさちを

まもらひませ
いのりたまへ

二

大和しまねに あをひとぐさ
靡かせましし たけきちから
天より賜ひて 聖戦のさちを
いのりたまへ

一

やまと島根に はるばる来て
仇の迫害 しのぎ勝ちし
きみが功もて われらの戦ひ
まもらひませ

192

『公教會聖歌集』(1930)

聖フランシスコ、ザベリオ

1=F 62 へ調

1 5 1 2 | 3 2 1-, | 5. 4 3 4 5 | 4-3-, |
 やま しま ねに わた り き た り
 1 5 1 2 | 3 2 1-, | 5. 4 3 4 5 | 4-3-, |
 あだの な やみを しの ぎ ま し
 5 5 6 6 | 4 4 5 5, | 3 3 4 4 3 | 2 2 3 3, |
 たぐひも まれなる きみが い さをにて
 5. 4 3 4 5 | 4-3- ||
 いのり た ま へ

二

やまと島根の 蒼生民衆
 聖教のかせに うち靡けし
 きみが偉勳を 尊崇ぐ我等をば
 まもりたまへ

一

やまと島根に 渡り来り
 あだの迫害を 凌ぎまし
 類例も稀なる きみが功勳にて
 いのりたまへ

190. わかき聖者

『公教聖歌集』(1933)

190 聖アロイジオ

1. わかきひじり せ、アロイジオ きみのみなに
 2. まなびのみち なほくすすみ ほまれたかく

こころさきげ われはしのぶ そのみあとを
 こころひくき あてなるきみ あやにきよし

四	三	二	一
わかき聖者を まもらひませ	君はわかき 人のまもり	病める者を 床にまみひ	わかき聖者 聖アロイジオ
罪のえやみ しげき世に	生命すてし きみぞたふと	投病しげき そのさ中に	君のみ名に こころさきげ
			われは徳ぶ そのみあとを
			学びのみち 直くすすみ
			ほまれ高く こころひくき
			貴なるきみ あやにきよし

195

『公教會聖歌集』(1930)

聖アロイシオ 65 へ調

1=F

1 1 2 3. 2 1-, 0 3 3 4 5. 4 3-, 0
い さゞきよ き あ まつびじり
5 6 5 4 4 3-, 0 5 5 3 4. 5 4-, 0
せ、アロイシオ し らべあはせ
3 3 1 2. 3 2-, 0 5 4:3 2 2 1-0
ま はにほめん せ、アロイシオ

三	二	一
こころ 潔く 持たせ給へ	弱きわれを 守りたまへ	いとど 淨き あまつ 聖人
聖ア ロイ シオ	聖ア ロイ シオ	聖ア ロイ シオ

『ケルン 1908』(印刷:1912頃)

190. 1=F. 3/4 1. Begrüßt sei tau = jend = mal,

3 3 4 | 5. 4 3̇ | 5 6 5 | 4. 3̇ |
 Gelobt sei oh = ne Zahl R. O A = lo = y = fi!

5 5 3 | 4. 5 4̇ | 3 3 1 |
 Du bist mein Schut = pa = tron An Got = tes

2. 3̇ 2̇ | 5 4 3 | 2. 1̇ ||
 Gna = denthron, R. O A = lo = y = fi!

2. So wie der Lilien Pracht * Hier unter
 Dornen lacht, * R. So glänzt zu unsrer Freud' *
 Hoch deine Heiligkeit. * R.

3. Du Blum' der Reinigkeit, * Der Zucht
 und Sittsamkeit, * R. O hilf mir, keusch und
 rein * Wie du auf Erden sein! * R.

4. Schütz mich vor Üppigkeit, * Vor Stolz
 und Eitelkeit; * R. Halt von Verführung frei *
 Mich, meinem Gott getreu. * R.

5. Weck Gottesfurcht in mir, * So wie sie
 war in dir; * R. Laß Andacht in mir blüh'n *
 Und Gottes Liebe glüh'n. * R.

6. Gehorsam zierte dich: * Laß zieren ihn
 auch mich. * R. Mach mich vom Stolze frei *
 Und Demut mir verlei. * R.

7. Ich folge dir getreu; * Du, Heil'ger, steh
 mir bei * R. In aller meiner Not, * Im
 Leben und im Tod. * R.

193. 世の軍に勝ちし
『公教聖歌集』(1933)

諸 聖 人 193

1. よのいくさにかちし 主のよきつはもの
2. みよいのちのかむり あめにかがやけば
3. むらがるあかしびと きみのなをたたへ

ひたにみあとならひ みをすてしひじり
さかえゆくそのなも ゆかしまるちりよ
とこしへのみくにに たえずぞささぐる

みのりのはたてに あさひぞかーがやく
たかきいさをもち よをばまーりませ
ことほぎをなれや ありたしーうけめ

三 二 一

むらがる證し人 君の名をたたへ
永遠のみくにに 絶えずぞ捧ぐる
ことほぎを汝や 在立たし受けめ

世の軍に勝ちし 主のよき兵士
直にみあと傲ひ 身をすてし聖者
み教の旗手に 朝日ぞかがやく

見よ命のかむり 天にかがやけば
榮えゆく其名も ゆかし殉教者
高きいさをもち 世をば守りませ

198

『公教會聖歌集』(1930)

諸 聖 人 68 調子

1=D

5 | 3 1 3 5 | 6 7 i - | i , 1 7 1 | 6 5 4 3 | 2 - , 0
みもたまも さいげ て みかみ につかへし

5 | 3 1 3 5 | 6 7 i - | i , 1 7 1 | 6 5 4 3 | 2 - , 0
あまつさか えうく るかしこ きひじりの

2 | 3 1 7 1 | 2 3 4 , 4 | 3 6 5 4 2 | 3 2 1 ||
き よきあさ ふみてい ざやす まよし

四 三 二 一

奇しきみめぐみを 奇しきみめぐみを 奇しきみめぐみを 奇しきみめぐみを
とこしへの平安を とこしへの平安を とこしへの平安を とこしへの平安を
わはれみ豊かなる 三一の天主よ 三一の天主よ 三一の天主よ
あはれみ豊かなる 三一の天主よ 三一の天主よ 三一の天主よ
きよきやもめたち われをまもりてよ 主の爲忍びて 主の爲忍びて
生命のかむり得し 修士どどうてい女 修士どどうてい女 修士どどうてい女
世の憎みあざけり 主の爲忍びて 主の爲忍びて 主の爲忍びて
わがつみのゆるし いのりもどめてよ いのりもどめてよ いのりもどめてよ
追られころされし みでし殉教者等 堅く守りつゝ 堅く守りつゝ 堅く守りつゝ
みかみのまさ道を 堅く守りつゝ 堅く守りつゝ 堅く守りつゝ
さよきあど履みて いざやすまよし いざやすまよし いざやすまよし
天つさかえ受くる かしこきひじりの かしこきひじりの かしこきひじりの
身もたまも献げて 天主に仕へし 天主に仕へし 天主に仕へし

九二

『フルダ 1891』(印刷:1906)

139. (Apostel.) 1. Im Him-mel müs=je Lob er=schal- von Freu-de an dem La=ge wal-

len, auf Er-den müs=je je=der Christ
len, der den A=po-steln hei=lig ist!

Die Welt fingt ih-re Herr-sich-keit, der Him-mel
preist sie je=der-zeit.

2. Zu euch erheben wir die Hände, * ihr wahren Licht dieser Welt, * die ihr an aller Zeiten Ende * von Gott zu Richtern seid bestellt. * Hört unser demutvolles Flehen und macht es in Erfüllung gehn.

3. Den Sündern schließt ihr zu die Pforte, * die des Himmels Erbe führt; * ihr öffnet sie mit einem Worte den Sündern, die die Reue rühret; * löst uns in die- sem Lebenslauf * von allen Sündenbanden auf.

4. Die Krankheit weicht im Augenblicke, * wenn euer Gebete weichen helfet; * auch kehret der Seelen Heil zurück; O heilet unsern schwachen Geist, * erwerbt bei Gott ein Blut und Kraft, * die neue Tugend in uns schafft.

Zu den Heiligen. 189

5. Kommt Jesus einstens auf der Wolke * und sitzet mit euch zu Gericht, * dann flehet, wenn er allem Volke * ein ewigwährend Urteil spricht, * daß er zu jener Schreckenszeit * uns führe in die Seligkeit.

6. Der Vater sei von uns gepriesen, * gepriesen sei auch Gottes Sohn! * Dem heiligen Geist sei Ehr erwiesen * auf einem und dem höchsten Thron! * Der heiligsten Dreieinigkeit * sei Lob und Dank von uns arweihet!

4.1.4 葬禮の聖歌

194. 世に在りしときの

『公教聖歌集』(1933)

194 死者

1. よにありしときの つみのつぐのひ
 2. みこなるイエズス このよにきたり

きりてののちにてはたすきだめに
 じまじかのくるしみおひましにけり

かなしみなげける たまこそのうけれみ
 そのみちしほこそきよめのいづみ

そのみのきよめを主よたすけませ
 またくあらひもて主よすくひませ

四 三 二 一

は永なあうれくせいまたそ十字脚そのかな去罪
 や遠やめはれしきのるなる洗くみ血子なる身のしみのりてのの後にのつぐのひ
 疾のゆるみはれしきのるなる洗くみ血子なる身のしみのりてのの後にのつぐのひ
 くみはれしきのるなる洗くみ血子なる身のしみのりてのの後にのつぐのひ
 りてののちにてはたすきだめに
 じまじかのくるしみおひましにけり
 かなしみなげける たまこそのうけれみ
 そのみちしほこそきよめのいづみ
 そのみのきよめを主よたすけませ
 またくあらひもて主よすくひませ

なぐさめ給へ
 うましき給へ
 論し給へ
 かへり給へ
 得せ給へ
 朽ちぬ命と
 絶えぬ命と
 絶えぬ命と
 汝が力もて
 主よ救ひませ
 浄めのいづみ
 負ましにけり
 この世に來り
 主よ助けませ
 罪のつぐのひ
 果たす運命に
 憐れ
 憐れ
 憐れ

199

『フルダ 1891』(印刷:1906)

169. A-A Fuld. G. 28.

10. O hei=lig=ste Drei=fal=tig=keit, sieh
 die wir in ih=rem schweren Leid dir
 an die lie=ben See=len, R. Er=bar=me dich, er=
 herz=lich an=be=feh=sen.

bar=me dich, nimm sie vom Leidens=or=te; die Him=
 mel=spor=te!

2. O Vater, voll Barmherzigkeit, * sieh an die arme
 Sünder, * halt ein die Allgerechtigkeit, * erbarm dich
 deiner Kinder. * R. Erbarme dich etc.

3. O Jesu, laß dein heilig Blut * für sie um Gnade
 sprechen; * durch deinen Tod lösch ihre Blut * und heil
 die Gebrechen.

Für die Abgestorbenen. 165

4. O heil'ger Geist, hernieder eil, * sie mild zu über=
 taufen, * vollende ihres Glaubens Heil, * daß sie dich
 bald anschauen.

5. O Mutter der Barmherzigkeit, * sieh deiner Kinder
 Jähren, * die weinend in Verlassenheit * nach deiner
 Hilf' begehren. * Ach bitt für sie, * ach bitt für sie, * du
 Mutter reich und milde; * sprich gut für sie, * und führe
 sie * in himmlische Gefilde!

196. 往にけるその霊

『公教聖歌集』(1933)

196 葬 禮

1. いにけるそのたま いまよいづこ
 出とこしへのちちよ あいのみてに
 ぶあめなるみははよ かへりゆきし

みかみのみもとに やすらにおはせ
 おほひはぐくみて まもらせたまへ
 ながこのなみだを ぬぐはせたまへ

一 往にけるその霊 いまよいづこ
 み神のみもとに 休らに御座せ

二 とこしへの父よ 愛の御手に
 覆ひ羽含みて 守らせたまへ

三 あめなる御母よ かへりゆきし
 汝が子の涙を ぬぐはせ給へ

四 旅路をまもりの みつかひらよ
 同胞よ友よ なぐさめ給へ

201

『公教聖歌集』(1930)

死者の爲め 69 1=F へ調

1 2 3 2 | 1 7 6 5, | 1 2 3 4 | 3 2 1, 0 |
 はげしき ほのほに くるしむ たまを

2 2 3 5 | 5 4 5 5, | 4 4 3 2 | 1 7 1 0 ||
 かみよあ はれみて すくひを たまへ

一 はげしきほのほに
 くるしむ靈魂を
 天主よ哀憐みて
 すくひをたまへ

二 みめぐみあはれみ
 かぎりなき主よ
 とこしへの安息
 かれらにたまへ

三 エズスの十字架の
 血をもてきよめ
 あまつみ光明を
 あふがしめてよ

『フルダ 1891』(印刷:1906)

Für die Abgestorbenen. 159
 Meßgejänge. — Nr. 207 u. 210.
 F-F Neuere Weise.

162a.

1. Herr, gib Frieden die-ser See-le, nimm sie
 auf zum ew'-gen Licht. Gib Er-bar-men ihr und
 zäh-le, Va-ter, ih-re Män-gel nicht.

2. Gib ihr, was dein Sohn erworben * durch sein
 schweres Kreuz und Leid, * durch den Tod, den er ge-
 storben: * Gnade für Gerechtigkeit.

3. Wasche sie mit seinem Blute, * schaff' sie neu durch
 dein Gebet; * Dorn und Geißel, Speer und Rute * dich
 für sie um Gnade fleht.

4. Auch der süßen Mutter Schmerzen * stellen wir dir
 bittend vor, * wie sie mit verwund'tem Herzen * zu dem
 Kreuzbaum blickt empor.

5. Ach, durch dieses Sohnes Leiden, * ach, durch dieser
 Mutter Schmerz, * Vater, nimm zu ew'gen Freuden *
 diese Seele himmelwärts!

197. 最終のやすみの
『公教聖歌集』(1933)

葬 禮 197



四 三 二 一

再たび會ふ日を 御代とこしへの 御代とこしへの 疑がはで待たん
 御代とこしへの 御代とこしへの 御代とこしへの 疑がはで待たん
 御代とこしへの 御代とこしへの 御代とこしへの 疑がはで待たん
 御代とこしへの 御代とこしへの 御代とこしへの 疑がはで待たん

四 三 二 一

再たび會ふ日を 御代とこしへの 御代とこしへの 疑がはで待たん
 御代とこしへの 御代とこしへの 御代とこしへの 疑がはで待たん
 御代とこしへの 御代とこしへの 御代とこしへの 疑がはで待たん
 御代とこしへの 御代とこしへの 御代とこしへの 疑がはで待たん

『公教會聖歌集』(1930)

葬 禮 98

1=C 98 ハ調

1 2 3 5 | 5 4 3 2, | 1 2 3 5 | 5 4 3 2, |
 みたまの ふるさと さこよの いこひは
 5 6 7 5 | #4 4 5-, | 1 1 6 5 | 6 5 4 3, |
 いづこに あらん はてなき さきはひ
 1 1 6 5 | 6 5 4 3, | 2 3 4 3 | 2 2 1 - ||
 ちよなる やすきは いづこに あらん

四 三 二 一

天なるみくにへ 入れしめたまへ 御父よあはれみ 影をささざる うれしや御くに 涙もうれひも 今ぞ行くかな 暮なき春日の 出にし靈魂は 何處にあらん 永世の休息は 入れしめ給へ 永世の春なる 逝にし友をば うれしや御國 涙もうれひも 今ぞ行くかな 暮なき春日の 出にし靈魂は 何處にあらん 永世の休息は

一三九

『フルダ 1891』(印刷:1906)

170.

C:C Fuld. G.-B.

1. Wie der Hirsch in schwülen Tagen nach der
 bei des hei-ßen Durstes Plagen
 frischen Quel-le schreit, al-so schreit nach ih-rem
 je-de Seel' in ih-rem
 Schei-den nach des Himmels Se-lig-keit.
 Lei-den

2. Wer allhier nicht heilig wandelt, * wer nicht heilig
 denkt und handelt, * geht dort nicht zum Himmel ein. *
 Wer nicht rein ist, muß bezahlen * seine Schulden in den
 Qualen, * in des Kerfers schwere Pein.

3. Steig' im Glauben, meine Seele, * in des Kerfers
 finstre Höhle; * neige hin dein horchend Ohr. * „Schwerer
 sind hier unsre Peinen, * als die Erdbewohner meinen.“ *
 Diese Stimme tönt empor.

4. „Ihr, die ihr noch lebt auf Erden, * könnet unsre
 Tröster werden; * ach, und ihr verschiebt es noch!“ * Euch

hat Gott Gewalt gegeben, * uns aus dieser Pein ^{er}heben; * ach erbarmt, erbarmt euch doch!

5. Unsern Brüdern beizuspringen, * laßt uns Gott das Opfer bringen * durch den Priester am Altar. * Wen Almosen und Kasteien * laffet uns zum Himmel schreien! Gott nimmt unsere Wünsche wahr.

6. Jesus, Bräutigam der Seelen, * laß sie doch nicht länger quälen, * lindre ihre Pein geschwind. * Mache Herr, sie frei vom Leide; * schmück' sie mit dem Hochzeitkleide, * die längst deine Bräute sind.

7. Vater, freilich sind sie Sünder; * doch sie sind auch deine Kinder, * und du hast ein Vaterherz. * Lang seufzen sie vergebens, * Gott, nach dir, dem Quell des Lebens; * ende, Vater, ihren Schmerz!

8. Milder Hirt, sie sind die Schafe * deiner Heerde, laß die Strafe, * die sie drückt geendigt sein; * führe sie zu jener Weide, * wo des Himmels Lust und Freude blüht, wonach sie seufzen, ein.

198. 世を去る友をば

『公教聖歌集』(1933)

198 葬 禮



1. よをさるとも一をば うしとなもひそ
 思あいのみある一じよ かなしきわかれ
 品主にたまはりては 主にめさるるぞ

しこそかみにゆく かしどでなりせば
 みむねとあふぎて しのびてあらな
 こよなきみめぐみ 初もふもなみだ

四	三	二	一
たふとき御蔭を 逝きにし靈をぞ	主に賜はりては 此上なき御恩寵	愛のみあるじよ み旨とあふぎて	世を去る友をば 死こそ神にゆく
たのみまつりて 御手にゆだねる	主に召さるるぞ おもふもなみだ	かなしきわかれ 忍びてあらなん	憂しとな想ひそ 門出なりせば

203

199. しらゆりと清く
『公教聖歌集』(1933)

葬 禮 (小 兒) 199

1. しらゆりとときよく にほひしをさなご
 2. はやもうましごは せいなるつどひの
 ふつみもしらゆきの けがれなきたまは

いまぞそのむくろ とどめてゆきける
 しかえのぎにこそ かへりゆきにーしか
 かみのふとこるに たのしくすままし

五	四	三	二	一
聖父聖子聖靈よ 聖人よ天使よ 愛くしみたまへ	「来たれ幼児」と み手に揺取りて 親びます御主 祝し恵みませ	罪もしらゆきの 神のふところに けがれなき靈は 樂しく住ままし	はやも美し子は 榮えの座にこそ 聖なるつどひの 歸りゆきにしか	しらゆりと清く いまぞその響散 留めて往きける 匂ひしをさなご

204

『公教會聖歌集』(1930)

小 兒 の 埋 葬

1=D 99 =調 4

5 | 3 1 6 5 | 4 3 2, 2 | 3 #4 5 7 | 6 6 5,
 の しらゆ りにもま さりてき よけき

5 | 1̇ 5 6 5 | 4 3, 2, 5 | 6. 7 1̇ 3 | (43) 2 1 ||
 ら たきいさ しごのさ ちなぞう たはめ

五	四	三	二	一
みちよ御父よ 愛し子のごとく われらを淨めて 御國に入れてよ	さかえの御國に ねぎごと傳へよ 入りにし愛し子 ちなる天主に	罪が知らでぞ 汝が幸福偲べば 御國に入りにし なみだぞ溢るゝ	速くも入りぬる 榮光みなぎる 聖なるつどひの あめなる御殿に	野の百合にも 可愛き愛し子の まさりて清けき 幸福をぞ歌はめ

一四〇

『フルダ 1891』(印刷:1906)

172. (Zum Ton von Nr. 29).

1. Zum Vater, der im Himmel wohnt * und über allen Engeln thronet, * ging dieses Kind wie Engel rein, * um ewig froh und schön zu sein.

2. Des Lebens Leid, der Welt Gefahr * ward ihm noch nicht hier offenbar; * das Garn zerriß, die Seel' erhob * sich frei empor zu Gottes Lob.

3. Auf Flügeln eilt es himmelan, * kein Feind es da aufhalten kann, * geht ohn' Gericht zum Himmel ein; * o welch ein Glück kann größer sein!

4. Von Gott geliebt, von Gott gewählt, * ist's nun den Heil'gen zugezählt, * geschmückt mit Glanz und Ehrenzweig, * den lieben sel'gen Engeln gleich.

5. So schaut's herab vom Himmel hoch * und bittet für die Seinen noch. * weiß was uns gut und selig macht, * und gibt auf unsre Schritte acht.

6. O Gott, der du die Seelen schiffst, * hinauf zu dir die Reinen ruffst, * gib, daß wir einst von Sünden rein, * wie dieses Kind geh'n himmelein.

Erbarne dich, Gott, über mich. — Nr. 30.
 Herr, aus der Tiefe ruf' ich dir. — Nr. 31.

200. さかえも幸も

『公教聖歌集』(1933)

200 天 國

1. さかえもさちもみちにみてる
 2. よのうさつらさあたのせめき

いとまたのしきあまつみくに
 いのちのかぎりたへのばなん

みつかひたちちかみをたたへて
 あめにのぼりかみにまみゆる

うたのひびく
 さちのひまで

一 さかえも幸も みにみてる
 いともしき あまつみに
 みつかひたち 神をたたへて
 うたのひびく

二 世の憂さ辛さ 仇の迫害
 生存のかぎり たへ忍ばなん
 あめにのぼり 神にまみゆる
 さちの日まで

三 あまつ使ひよ ひじりたちよ
 我をとまなひ あまつくにの
 そのみさかえ 仰ぎみるまで
 みちびきませ

205

『公教會聖歌集』(1930)

天 國

1=Es 75 變ホ調

5 | 1 2 3 4 | 5 6 5, 4 | 3 1 7 1 | 2-, 0
 さ か え さ ち さ み ち あ ふ る

5 | 1 2 3 4 | 5 6 5, 4 | 3 1 7 1 | 2-, 0
 い と ま た の し き あ ま つ み く に

5 | 2 7 2 4 | 4 3, 0 5 | 6 6 7 7 | i-i,
 み か み ほ る み つ か ひ た ち の

4 | 3 4 2 3 2 | 1-0 ||
 う た ぞ ひ び く

一 榮光とさちと 充ちあふるゝ
 いども樂しき あまつみくに
 みかみほむる 聖天使たちの
 うたぞひびく

二 世の憂つらさ ものどもせで
 生存のかぎり 堪えしのびて
 あめにのぼり 光榮のかむり
 いたいかまし

三 わまつ聖使よ ひじりたちよ
 我をみちびき あまつくにの
 天主の御稜威 拙なき身にも
 あふがしめよ

『フルダ 1891』(印刷:1906)

7. C-c Sub. G-B.

1. Ma-ri-a, sei ge-segnet, du lichter Morgen-
 der uns den Tag aufschlie-ßet, den neuen Tag des
 Stern, er-wählt von E-wig-keit, zu sein die
 Mut-ter Got-tes zum Trost der Christenheit.

2. Ohn' Sünd bist du empfangen, * wie dich die Kirche
 ehrt, * und von der falschen Schlangen * bleibst du
 ganz unverehrt. * O Jungfrau, keusch und rein, * kein
 Lob auf dieser Erde * kann deiner würdig sein.

3. Ein Gruß ward dir gesendet * vom allerhöchsten
 Thron, * durch Gabriel gesendet, * erwirkt vom ew'gen
 Sohn. * „Du sollst bald Mutter sein * und doch auch
 Jungfrau bleiben, * keusch, heilig, ewig rein.“

4. „Es wird dich übertauen * des Allerhöchsten Kraft, *
 gesegnetste der Frauen * in reiner Jungfrauschaft. *
 Dies göttlich Unterpand * vom heil'gen Geist empfangen, *
 wird Gottes Sohn genannt.“

5. Da sagte mit Begehren * aus Lieb' die Jungfrau
 rein: * „Ich bin die Magd des Herren * und will ge-
 horfam sein. * Ihm dien' ich für und für; * ich hoff
 auf seinen Willen; * dein Wort gescheh' an mir.“

Advent 9

6. Maria, süß und milde, * du hast alleit begehrt *
 nach Gottes höchstem Wilde; * darum ist dir's gewährt. *
 Durch den du selber bist, * der Schöpfer alles Lebens, *
 aus dir geboren ist.

7. Nun bist du hoch erhoben * in deines Kindes Land, *
 da dich die Engel loben * zu seiner rechten Hand. * Die
 Freud hat nun kein End; * o keusche Gottesmutter, *
 Gnad', Hilf und Trost uns send!

4.1.5 そのほかの聖歌

204. ほめよ稱へよ

『公教聖歌集』(1933)

204 聖 會

1. ほめよ たたへよ かみのみくに
 2. ひごとあさゆふをやみもなく

あーいのははな-る きよき-つどひ
 を-しへみちび-く みたま-はまし

とこしへに いやさかえ
 たたへつつ いのりつつ

かみのみいつぞかぎりもなし
 みなをよぶものならひ一つく

四 三 二 一

天なる聖福を 千代萬づ代に 世にも慶たき 聖なる群
 みたみらよ はらからよ 聖なる群
 神の御徳威ぞ かしきりもなし
 とこしへに いやさかえ
 愛の母なる きよきつどひ
 ほめよ稱へよ 神のみに
 愛の母なる きよきつどひ

209

『公會聖歌集』(1920)

母なる聖會 102 1調

1=A

5 | 5 1̇ 6 7 | 1̇ - 5, 5 | 6 6 5 4 | 3 - , 0
 ほ めよ た た へ よ こ ん む ほ が ら か

34 | 5 5 6 7 | 1̇ 3 2, 1 | 7 6 7 1̇ 6 | 5 - , 0 - |
 あ い の は な る き よ き つ ど ひ

1̇ - 3 - | 2. 7 5, 0 | 1̇ - 3 - | 2. 7 5,
 と こ し へ に う た は で や

5 | 1̇ 1̇ 2 2 2 2 | 3 - , 0 3 | 5 4 3 2 2 | 1̇ - 0 ||
 な れ の み め ぐ み み な も る さ も

三 二 一

た 御光榮を あらはさなん
 も の み な を さ げ て ぞ
 み む ね 長 み 千 代 よ ろ づ 代
 富 貴 も 榮 譽 も 主 に ぞ あ る
 と き は 聖 磐 に か ぎ り も な く
 た へ で や み め ぐ み を
 を し へ 導 く あ り が た さ よ
 日 ごと あ さ 夕 を 止 も な く
 汝 の み め ぐ み み な も る さ も
 と こ し へ に う た は で や
 愛 の 母 な る き よ き つ ど ひ
 ほ め よ 稱 へ よ 聲 は が ら か

四 世にも慶たき
 あいの教會
 万代までも
 いや繁榮えて
 いとし我が
 はらからに
 天の幸福をぞ
 あたへ給へ

209. こよひも 仇の手より

『公教聖歌集』(1933)

タベの歌 209

1. こよひも あたのてより
2. みきずに いかされしみ

まもりたまへ わがみたま
よのいざなひ かれゆきつ

あけぼのせまりくとも
わがたま いとしづけく

みのはぢらひ あらじかし
みくにかげ ゆめにいる

三 二 一

わが心には のぞまされ
くらきは 常しなへに
主よ今宵も 宿どりませ
おあまリア ヨゼフ來せ

天國のかけ ゆめに入る
わがたま いと静けく
世の証ひ 離れゆきつ
みきずに 活されし身

守りたまへ わが聖靈
あけぼの 迫りくとも
身の取らひ あらじかし

こよひも 仇の手より
わが聖靈

214

『公教會聖歌集』(1930)

夜の守護を求むる 76 =調♯

1=D

1 2 | 3 4 5, 5 | 6 6. 5 4 | 3-, 0
わが かみよこ のよすがら

34 | 5 5 4 3 | 2, 5 1̇ 7 | 6-5,
つみをふせぎまもりてよ

5 | 6 7 1̇, 5 | 6 6 5 4 | 3-, 0
いまほにまにかたしめ

34 | 5 5 4 3 | 2, 5 4 3 | 2-1 ||
あまつくにへいれたまへ

二 一

聖^わ わ 聖^ま 聖^ま わ 臨^い 罪^ろ 我^わ
手^て れ ヨ マ あ ま 終^は を 天^か
の 等^ら ゼ マ つ 時^は ふ 主^か
内^に を フ ア 國^に に せ ぎ よ
に 今^こ も 天^ま 入^れ 魔^ま ま この
守^ま 夜^よ ろ つ 聖^ア 使^か 勝^か り 終^は
護^ご り も ど 聖^ア 使^か た 勝^か り 夜^よ
り ま ま も 使^か た し め て よ
せ た に

『フルダ 1891』(印刷:1906)

176. C:Es Neuere Zeit

1. In dieser Nacht sei du mein Schirm und
Wacht; o Gott, durch deine Macht wollst mich be-
ren vor Sünd' und Leid, vor Satans List und Neid; hilf
mir im lehten Streit, in Tods-ge-fah-ren.

2. O Jesu mein, * die heil'gen Wunden dein, * sei
meine Ruhstatt sein, * das Bett der Seelen; *
dieser Ruh' * schließ mir die Augen zu, * mein'n
und alles tu * ich dir befehlen.

3. O güt'ge Frau, * Maria auf mich schau! *
Herz dir anvertrau! * in meinem Schlafen; *
Joseph dich * bitt', hilf mir väterlich; * Schutzen
freit' für mich * mit deinen Waffen!